

聖霊の位格 (#3051)

The Person of the Holy Spirit

ヨハネの福音書14章です。イエスが十字架で処刑される直前のことです。イエスは、弟子たちと最後の話をされており、イエスが弟子たちから離れてゆくと話されたので、弟子たちはこのことにより、非常に心を騒がせていました。しかし16節で、イエスは言われました。「わたしは父にお願いします。そうすれば、父はもうひとりの助け主をあなたがたにお与えになります。その助け主がいつまでもあなたがたと、ともにおられるためにです。その方は、真理の御霊です。世はその方を受け入れることができません。世はその方を見もせず、知りもしないからです。しかし、あなたがたはその方を知っています。その方はあなたがたとともに住み、あなたがたのうちにおられるからです。(14:16-17)」

今晚から始めるシリーズの目的は、みなさんが聖霊の位格についての知識を持っていただくためです(訳者注:The Personという言葉は、「人格」や「人格を持った方」や「位格」などの訳し方があるので、文脈に沿ったものを使っています。)。それは、みなさんがこの方と満たされた豊かな関係を持つようになるためです。私たちの願いは、聖霊の栄光と麗しさを表し、みなさんが人生を聖霊に完全に明け渡すことを求め、生活の中で、この方の恵み、愛、力と、御霊の賜物を知ることになることです。偉大なアメリカの伝道者で神学者のフィニーが体験したように、みなさんも体験することを私たちは願っています。フィニーは、次の言葉を書いています。「昼食の後、私たちは、…」これは、スクワイヤー・ライトと彼自身のことです。「家具と書籍を別の事務所に移動する作業をした。我々はいそいそ忙しく、その午後はずっとほとんど話もしなかった。しかし、私の心はとても穏やかな状態が続いた。自分の思いと感情には大いなる柔和と優しさがあつた。すべてが上手くいっているようで、何も自分を邪魔するもの、いらだたせるものは全くないようにみえた。夕刻になる直前、新しい事務所で独りぼっちになるやいなや私の心を捕らえた考えは、再び自分が宗教というテーマを捨ててあきらめてしまわないように祈ることだった。このため、自分にはもはや自分の魂に対する心配はなかったのだが、私は祈り続けた。夕刻までに、私たちは家具と書籍を整え、一人で夜を過ごそうと思い、私は暖炉の火が大きくなるように火をつけた。暗くなると、スクワイヤー・ライトはすべてが整ったのを見計らって、私に『おやすみ』と言って、家路についた。戸口まで彼をおくり、戸を締め、向きを変えると、自分の心は不安で一杯になった。全感情が高まり、それが流れ出てしまうようで、私は心から魂のすべてを神に注ぎ出したい気分になった。魂の高まりがあまりに大きくなったので、私は祈るために、本部事務所の裏にある部屋に駆け込んだ。部屋には暖炉の火もあかりもなかったにもかかわらず、あたかもそこは完璧な明るさがあるように見えた。入って、後ろの戸を閉じると、あたかも主イエス・キリストと面と向かってお会いしたかのようであった。その時点でも、またしばらくたってからでなければ、精神状態において起こったことだったということが思いも浮かばなかった。逆に、他の誰とでも会うように主イエス・キリストにお会いしたかのよう思えた。イエスは何もお話にならなかったが、彼の足元に私が崩れ伏してしまうように私をご覧になった。それ以来、私はこれを最も驚くべき精神状態だったと考えている。私には、

それが現実のように思えた。私はイエスの足元にひれ伏して、彼に魂を注ぎ出した。幼子のように私は大泣きした。私はしゃくり上げながら言葉を出せるだけ、告白した。私の涙はイエスの足を洗うほどであったが、思い出すに、自分がイエスに触れたという明確な印象はない。このような状態がかなり続いたに違いないが、自分が何を言ったかを思い出すための問い掛けで、私の心は一杯だった。気持ちが平静に戻り、問い掛けをやめるやいなや、私は本部事務所に戻った。そうすると、巨大な薪につけた火がほとんど燃え尽きそうになっているのに気づいた。しかし、向きを変えて暖炉の側の椅子に座ろうとした時、私は力強い聖霊のバプテスマを受けた。そのようなことが自分に起こることは、全く予期せず、心にも考えたことはなかった。そのようなことについて、世の中の誰からもそれについて言及するのを一度も聞いた覚えもなかったが、私の中を、私の体と魂の中をとおるように、聖霊が私の上に降りてこられた。電気の波が次々と自分の中を通電するような印象を受けた。実に、液化した愛が波のように、波がおしよせてくるようであった。それ以外に表現することはできなかった。あたかも、それは神の息そのものかのようだった。はっきりと思い出すことはできないが、巨大な翼のようなものが私に向かってはばたいているようだった。私の心に注がれたすばらしい愛は、筆舌に尽くしがたい。喜びと愛で、私は大声で泣いた。私には理解できなかったが、言葉に出せなかった自分の心にあったものが、文字通り噴出したと言えるだろう。波が私に押し寄せ、次々と繰り返し波が私に押し寄せ、私の記憶では、それは、『この波がずっと自分に押し寄せるなら、私は死んでしまう。』と叫ぶまで続いた。『主よ、もう耐えられません。』と私は言った。しかし、私には死への恐怖は微塵もなかった。」これは、アメリカの偉大な伝道師フィニーが自らの体験を自分の言葉で語ったものです。みなさんも聖霊という方と、鮮明なすばらしい体験をなさることを、私はお祈りします。聖霊が人格を持った方であることを理解するのは大切です。もし、聖霊が単なる本質だとか、風だとか、力だとか考えても、本質と意味深い関係を持つことはとても大変です。もし、聖霊が人格のない力である、宇宙に充満している理解不能な力であると考えたら、この方を愛することはできませんし、必要な時に聖霊を呼び求めることはできません。聖霊は、あなたのそばであなたを助けられるために、イエスの願いによって、御父によって遣わされたのです。イエスは言われました。「わたしは父にお願いします。そうすれば、父はもうひとりの助け主をあなたがたにお与えになります。その方は、真理の御霊です。」この中にできえ、三位一体(trinity)、または神格の三位一致(triunity)があります。これについては、次回の学びで取り扱います。イエスはこう告げられました。「わたしは父にお願いします。そうすれば、父はもうひとりの助け主、パラクレトスをあなたがたにお与えになります。その方は、真理の御霊です。(訳者注: ヨハネ14:16については新改訳脚注参照。)」みなさんが御霊を受けるように、御子が御父に祈っておられます。

人格(personality)にはその特徴が幾つかあります。人格には三つのことが必要です。第一に意思、第二に知性、第三に感情です。人格には、意、知、情があります。もし聖書が、このような特徴が聖霊にあることを教えているなら、聖霊が人格を持った方であると想定してさしつかえないということです。また、聖霊を言及する際に、人称代名詞が使われています。今お読みしました約束の中で、「わたしは父にお願いします。そうすれば、彼は、」これは聖霊のことです。いや、ここの

「彼」は父ですね。「父はもうひとりの助け主をあなたがたにお与えになります。彼がいつまでもあなたがたと、ともにおられるためにです。その方は、真理の御霊です。世は彼を受け入れることができません。世は彼を見もせず、彼を知りもしないからです。しかし、あなたがたは彼を知っています。彼はあなたがたとともに住み、あなたがたのうちにおられるからです。(訳者注:日本語では「その方」と訳されている部分が、英語ではHeとかHimとか訳されている。)」そしてヨハネ16章7節です。「しかし、わたしは真実を言います。わたしが去って行くことは、あなたがたにとって益なのです。それは、もしわたしが去って行かなければ、助け主があなたがたのところに来ないからです。しかし、もし行けば、わたしは彼をあなたがたのところ遣わします。彼が来ると、彼が罪について、義について、さばきについて、世にその誤りを認めさせます。罪についてというのは、彼らがわたしを信じないからです。また、義についてとは、わたしが父のもとに行き、あなたがたはもはやわたしを見なくなるからです。さばきについてとは、この世を支配する者がさばかれたからです。わたしには、あなたがたに話すことがまだたくさんありますが、今あなたがたはそれに耐える力がありません。しかし、彼、すなわち真理の御霊が来ると、彼があなたがたをすべての真理に導き入れます。彼は自分から語るのではなく、彼が聞くままを話し、また、彼がやがて起ころうとしていることをあなたがたに示すからです。彼はわたしの栄光を現します。彼がわたしのものを受けて、あなたがたに知らせると言ったのです。」ですからこのように、聖霊に言及する際に、すべて人称代名詞が使われています。

聖霊には知性があります。コリント人への手紙第一2章9節にはこのように書かれています。「まさしく、聖書に書いてあるとおりです。『目が見たことのないもの、耳が聞いたことのないもの、そして、人の心に思い浮かんだことのないもの。神を愛する者のために、神の備えてくださったものは、みなそうである。』神はこれを、御霊によって私たちに啓示されたのです。御霊はすべてのことを探り、神の深みにまで及ばれるからです。いったい、人の心のことは、その人のうちにある霊のほかに、だれが知っているでしょう。同じように、神のみこころのことは、神の御霊のほかにだれも知りません。』御霊は神のことを知っておられます。そのことについて、パウロはこのようにのべています。「このことについて話すには、人の知恵に教えられたことばを用いず、御霊に教えられたことばを用います。その御霊のことばをもって御霊のことを解くのです。(2:13参照)」聖霊について、この聖書の箇所パウロが語っていることに注目してください。神が、御霊によって私たちに啓示されます。御霊はすべてのことを探り、神の深みにまで及べられます。御霊は、人の知らない神のみこころを知っておられます。値なしに神から私たちに賜ったものを私たちが知るために、私たちは神の御霊を受けました。そして聖霊は、私たちに教えられます。

聖霊は意思を持っておられることが語られています。これは、人格の二つ目の特徴です。聖霊の賜物が分け与えられることについて、コリント人への手紙第一12章11節で、パウロはこのように言っています。「しかし、同一の御霊がこれらすべてのことをなさるのであって、みこころのままに、おのおのにそれぞれの賜物を分け与えてくださるのです。(訳者注:「みこころのままに」は“as He wills”となっており、英語で“will”は意思を意味します。)」そして聖書は、ローマ人への手紙15章30節で、聖霊の感情について語っています。「兄弟たち。私たちの主イエス・キリストによって、

また、御霊の愛によって切にお願いします。私のために、私とともに力を尽くして神に祈ってください。」ここでもまた、三つが語られています。「兄弟たち。私たちの主イエス・キリストによって、また、御霊の愛によって切にお願いします。私のために、私とともに力を尽くして神に祈ってください。」御父、御子、御霊です。イザヤ書63章10節ではこう言われています。「しかし、彼らは逆らい、主の聖なる御霊を痛ませたので、主は彼らの敵となり、みずから彼らと戦われた。」みなさんは、御霊を痛ませることができます。エペソ人への手紙4章30節です。「神の聖霊を悲しませてはいけません。あなたがたは、贖いの日のために、聖霊によって証印を押されているのです。」ですから、聖霊を悲ませることができるのです。単なる本質や人格のないものについて、このようなことを言うのは不可能です。植物は人格のないものです。「あの植物を悲しませてはいけません。」と言うのは、ばかげたことです。あるいは、「あなたは、あの植物を痛ませた。だから、彼はあなたに腹を立てている。」とか、「あの植物は私のことを愛してくれている。」とは言えません。人格を持ったもの以外に対してそのようなことを言うことはできません。聖霊は人格を持った方で、あなたのことを愛し、あなたが悲ませることができる方です。

しかし聖霊には、人格の特徴があって人称代名詞が使われているだけではなく、人格としての行為もあることが書かれています。聖霊は話されます。またしても、人格を持ったもの以外が語るというのを考えるのは困難です。使徒行伝13章2節には、こう書かれています。「彼らが主を礼拝し、断食をしていると、聖霊が、『バルナバとサウロをわたしのために聖別して、わたしが召した任務につかせなさい。』と言われた。」テモテ第一の手紙4章1節です。「しかし、御霊が明らかに言われるように、後の時代になると、ある人たちは…信仰から離れるようになります。」黙示録2章7節です。「耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。」第二に、聖霊はとりなしをしてくださいます。「御霊も同じようにして、弱い私たちを助けてくださいます。」これは、ローマ人への手紙8章26節です。「私たちは、どのように祈ったらよいかわからないのですが、御霊そのもの(itself)が、言いようもない深いうめきによって、私たちのためにとりなしてくださいます。」それが、改訂版(Revised Version)では、御霊ご自身が(Spirit Himself)と変えられています。御霊はあかしをされます。ヨハネの福音書15節26節です。「わたしが父のもとから遣わす助け主、すなわち父から出る真理の御霊が来るとき、その御霊がわたしについてあかしします。」ここでも三つが語られていることに注目してください。「わたしが父のもとから遣わす助け主、すなわち父から出る真理の御霊が来るとき、…」「わたしが父のもとから遣わす…」ここに御父、御子、御霊があります。「すなわち父から出る真理の御霊が来るとき、その御霊がわたしについてあかしします。」その節には二度も入っています。神の御霊が教えてくださいます。「しかし、助け主、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、また、わたしがあなたがたに話したすべてのことを思い起こさせてくださいます。」これは、ヨハネの福音書14節26節です。ネヘミヤ書9章20節です。「あなたは、彼らに悟らせようと、あなたのいつくしみ深い霊を賜り、彼らの口からあなたのマナを絶やさず、彼らが渴いたときには、彼らに水を与えられました。」聖霊は、私たちを導いてくださいます。使徒行伝16章6節です。「それから彼らは、アジアでみことばを語ることを聖霊によって禁じられたので、フルギヤとガラテヤ地方を通った。こうしてムシヤに面

した所に来たとき、ビテニヤのほうに行こうとしたが、イエスの御霊がそれをお許しにならなかった。」そして、御霊は私たちと交わりを持ってくださいます。パウロは、主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、あなたがたすべてとともにありますように。アーメン。(訳者注:新改訳では2コリント13:13だが欽定訳では、13:14)またしても、ここで三つが語られていることに注目してください。「主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わり」これは、コリント人への手紙第二13章14節です。聖霊は、人と奮闘(strive)されます。創世記6章3節です。「そこで、主は、『わたしの霊は人のうちに奮闘しないであらう。(訳者注:下線部分は欽定訳の直訳)』」そして、聖霊は、奇蹟を行なわれます。ローマ人への手紙15章19節です。「また、神の御霊の力による力強いしるしと不思議によって、それを成し遂げてくださいました。その結果、私はエルサレムから始めて、ずっと回ってイルリコに至まで、キリストの福音をくまなく伝えました。(訳者注:下線部分は、欽定訳の直訳)」神の御霊の力による、力強いしるしと不思議です。聖霊は、人格としての取り扱いを受けています。つまり、聖霊は悲しみを受けることがあります。パウロは、「神の聖霊を悲しませてはいけません。あなたがたは、贖いの日のために、聖霊によって証印を押されているのです。」と言いました。聖霊は欺きを受けることがあります。アナニヤとサツピラの場合、ペテロは、こう言いました。「アナニヤ。どうしてあなたはサタンに心を奪われ、聖霊を欺いて、地所の代金の一部を自分のために残して置いたのか。」これは使徒行伝5章3節です。聖霊は、逆いを受けることがあります。使徒行伝7章51節でステパノは弁明の中で、「かたくなで、心を耳とに割礼を受けていない人たち。あなたがたは、先祖たちと同様に、いつも聖霊に逆らっているのです。」と言いました。聖霊を痛みを受けることがあります。それは、イザヤ書63章10節でもうすで見ました。「しかし、彼らは逆らい、主の聖なる御霊を痛ませた・・・。」聖霊はけがされることがあります。マルコの福音書3章28節で、イエスは言われました。「まことに、あなたがたに告げます。人はその犯すどんな罪も赦していただけます。しかし、聖霊をけがす者はだれでも、永遠に赦されず、とこしえの罪に定められます。」さてこれらの箇所から、聖霊が実に人格のある存在であり、人格としての特徴をすべて持っておられると、無難に結論づけることができます。人格ですから、聖霊を知ることができます。人格ですから、みなさんは聖霊と関係を持つことができます。人格ですから、みなさんは聖霊と親しい、親密な交わり(fellowship)を持つことができます。人格ですから、みなさんは聖霊と深い交わり(commune)をすることができます。

イエスが聖霊を約束された時、聖霊をパラクレトスと言われました(訳者注:チャックは、パラクリートと発音しているように聞こえます。)。そして、イエスは弟子たちに、「わたしは父にお願いします。そうすれば、父はもうひとりの助け主、パラクレトンをお与えになります。(訳者注:ギリシヤ語では、名詞の対格(直接目的語)の語尾が「オン」と変化します。)」ギリシヤ語のパラクレトスは、援助のためにそばに来られた者という意味です。イエスは、その時すでに数年間、弟子たちのそばにおられました。イエスは今、弟子たちに、ご自分は離れることを言われました。「わたしが行く所に、あなたは今はついて来ることができません。(ヨハネ13:36)」と。弟子たちがどのように感じたか想像がつくでしょう。それは、弟子たちが主をとて信頼するようになっていました。主がすべての状況を掌握されている方だと確信していました。イエスは、そばにいてくれたら

便利な方でした。イエスがそこにいてくださるなら、心配の必要はありませんでした。パリサイ人が理論的な質問をして、ひっかけようと、ぎゃふんと言わせようとしても、イエスが彼らを片付けてくださいました。しかも、かなり上手く封じ込めてくださいました。ですから、心配の必要はありませんでした。「彼に話してくれ。」と言えよかったです。払わなければならない税金があるけれども、手持ちのお金がなければ、イエスがいてくださればすばらしいです。すべきことを的確に教えてください。「行って、魚を釣って、硬貨を魚の口から出して、払いなさい。」荒れた海にいて、船が沈みそうになっているなら、イエスがそばにいてくださるのはいつもすばらしいことです。それは、イエスには嵐をしずめる力があり、好ましい避難地に無事に連れてきてくださるからです。いろいろあって、弟子たちはイエスを信頼するようになりました。イエスに頼るようになりました。イエスがおられるなら、何も心配することはありませんでした。恐れるものは何もありませんでした。イエスはそこにいて、弟子たちを助けてくださっていました。それが今、イエスは、「私は去ってゆく。」とおっしゃっているのです。そして、弟子たちの心は恐れと混乱で一杯でした。このためにイエスは弟子たちに、「あなたがたは心を騒がしてはなりません。恐れてはなりません。(ヨハネ14:1参照)」とおっしゃったのです。この言葉から、弟子たちが実際に心を騒がし、恐れていたことがわかります。イエスがいなかったら、私たちはどうすればいいのだと思い巡らせていました。そして、今イエスは、弟子たちがどうすればよいのかをお話しになっています。「わたしは、あなたがたを捨てて孤児にはしません。(訳者注:英語の直訳は、「私はあなたがたを慰めるものがないままにはしません(comfortless)。)」」その言葉は、オルファノスです。「わたしは、あなたがたを捨てて孤児にはしません。」です。「わたしは父にお願いします。そうすれば、父はもうひとりのパラクレトン、助け主(Comforter)をあなたがたにお与えになります。」援助のためにそばに来られた方です。まさに、聖霊のご目的はそのためでした。聖霊は、あなたが個人的な関係を持つことができる方で、あなたのそばに来られ、人生のいかなる状況においても助けてくださる方です。イエスがおっしゃっているのは、「わたしがあなた方とともにいて、あらゆる状況においてあなたの世話をしたように、聖霊があなたがたとともにいます。そして、あらゆる状況においてあなたの世話をします。」ということなのです。このため、私たち一人一人が聖霊の位格を知るようになること、聖霊のすべてを知ることは重要です。それは私たちが、慰め、援助、力を体験することができるようになるためです。そのようなものは、私たちがみな必要としているものなのです。特に、私たちが生きているこの時代には必要なのです。

神の恵みによって、このシリーズの学びにおいて、神がみなさんに聖霊についてそのような知識を与えてくださいますように。聖霊に対する飢え、御霊に対する渇きを与えてくださいますように。聖書に啓示されているようにみなさんが聖霊を知るようになり、聖霊と深い個人的な親密な関係を持つようになり、みなさんの中で働かれる聖霊の力によって、みなさんの人生が全く変えられますように。ですから、このシリーズの学びにおいての私の目的は、みなさんに聖霊を紹介することです。そして、みなさんが聖霊と末長く、有益な関係を持ってくださることが私の祈りです。導きのために、助けのために、元気を得るために、慰めのために、力を得るために、みなさんが聖霊に頼るようになられますように。また、あなたがご存じであるいかなる人よりも、聖霊があなたのそば

近くに来てくださいますように、そして、みなさんが聖霊の栄光に浴されますように。聖霊がみなさんをイエス・キリストの似姿に変えてくださるとき、その働きかけに従うようにお祈りしています。

さて、他の人の経験を見て、その人たちの経験を自分も体験しようと求めることは、常に危険です。フィニーは自分の経験を、液化した愛の波が繰り返し繰り返し繰り返し押し寄せてきて、それは、「この波がずっと自分に押し寄せるなら、私は死んでしまう。」と叫ぶまで続いたと描写しましたが、また、自分の経験は、電気の波が次々と自分の中を通電するようであったと描写しましたが、みなさんの経験はそのようではない可能性が高いのです。聖霊に対する反応が同じである必要はないのです。あるいは、フィニーがした感覚と同じである必要はないのです。聖霊は主権を持って賜物を信者に与えられ、どのような関係を私たちと持つかはその主権によるのです。他の人でフィニーのように、自分の経験を電気ショックのようであったと描写している人もいます。また、ぞくぞくする感覚であったと描写している人もいます。栄光の波であったと描写している人もいます。他には、無限の平安と愛が自分の魂を満たし、あふれたと描写している人もいます。みなさんがどのような経験をなさるか、みなさんがどのようにそれを受け止められるか、またどのようにお感じになるかを私は判断することはできません。大切な点はそれではありません。大切なのは感覚ではありません。電気や液化した愛の波といったセンセーショナルな感覚を私たちが持つために、主が私たちに聖霊をくださったのではありません。そのような経験はすばらしいことです。そのような体験を度外視するものではありません。ただ、聖霊に対して経験上の感覚や反応を前提にしないでくださいと言っているのです。みなさんの体験は全く異なるものかもしれません。ひょっとすると何も感じないかもしれません。しかし、そうだからといって、みなさんの聖霊との関係、みなさんが生活の中で体験する聖霊の力を否定するものではありません。その時みなさんは、神が願われている満たされた完全な関係の中に入ります。これが、聖霊がみなさんと持ちたい願われている関係です。目的はみなさんが聖霊をもっといただくことではなく、目的は、聖霊がもっとみなさんを捕らえてくださることです。それにより、みなさんの生活が御霊によって支配され、みなさんの品性が御霊によって支配され、みなさんが御霊に導かれ、御霊に歩み、御霊に満たされるようになることなのです。ですから、私たちにはワクワクする将来が待っています。さて、聖霊の恩恵をいただくのに、この(シリーズの)学びが終わるまで待たなくてもよいのです。今晚家に帰って、ただ自分を聖霊に明け渡し、自分自身を聖霊の支配にゆだね、聖霊の満たしに身をまかせ、自分の生活を聖霊に明け渡し、ゆだねれば、今晚から御霊にあるすばらしい歩みを始め、そして、神が私たち一人一人に望んでおられる充足感を体験することができるのです。

フィニーの人生を見、彼のリバイバル集会について読みますと、そのような集会で何千人もの人がイエス・キリストを受け入れ、うち85パーセントが主に従い続けたことがわかります。フィニーが集会を持った町について書いたものを読みますと、集会の後、町の居酒屋の客の入りが悪くなり、みな店じまいしてしまったことがわかります。聖霊が人の上に臨まれるとき、聖霊がどのようなことをなさるのかに気づかされます。聖霊に完全に自分をゆだねるまで、キリストにある自分の潜在能力のすべてはわかりません。ゴードンや、フィニー、ムーディー、トーレー、ジョナサン・エドワーズなど自分の人生の中ですばらしい神の働きをした神の人たちはそれぞれ、自分の人生で聖

霊の力を経験したことについての証しがあります。このシリーズの学びをしてゆくにあたり、これらの人たちがフィニーがしたように、聖霊のバプテスマの経験を伝えている個人的な体験の証しを毎回少しずつお話できればと願っています。今日の教会が全く新しい聖霊の働きをどうしても必要としていることがわかっていただければと願っています。残念ながら私たちは、聖霊の力をプログラムや心理学、その他の様々なからくりで代用しようとしてきました。しかし、教会はその結果を刈り取っています。神が私たち一人一人の心と生活に新たに聖霊を注ぎかけてくださり、教会の中で霊の生活が刷新されることを祈っています。確かに、私たちは必要としています。確かに、私たちの地域もどうしても必要としています。

三位一体の第三位格 (#3052)

The Third Person of Godhead

聖霊が神の第三位格であることをお見せしようと思います。ただ、その聖書の箇所に入る前に、みなさんにR. A. トーレーの証をお読みしたいと思います。彼は、ロスアンゼルス聖書研究所(Bible Institute of Los Angeles)の創設者です。今日では普通、バイオラと呼ばれています。彼はドワイト・ムーディーの朋友です。彼の著書である「聖霊のバプテスマ(Baptism with the Holy Spirit)」の中で、自分がかつて聖霊のバプテスマを受けるまでは、説教する権利は全くないと認識するに至るまでに、すでに何年間か宣教をしていたことについて詳しく記述しています。自分が聖霊のバプテスマを受けて、受けたことをわかるまでは、あるいは、神が何らかの方法で自分に行きなさいとおっしゃるまでは、二度と説教壇には立たないとトーレーはある友人に対して言いました。それで彼は、自分の勉強部屋に独りで閉じこもり、聖霊のバプテスマを授けてくださるよう、ひざまずいて神に願い続けました。トーレーは、自分の頭の中で何が起こるのかを精密に計画したが、自分が頭の中で綿密に計画したことは起こらなかった、と言いました。「自分の勉強部屋でひざまずいて祈っていた場所を正確におぼている。それは、静かな一時だった。これほど静寂な時は、この時以外になかったほどの静かな時だった。それほど長い時間待たねばならなかったのは、私が神の前に自分の魂を静めるのにそれだけの時間を要したのだと思った。すると、神は、耳に聞こえるような声ではなく、私の心にただこうお語りになった。『もう、いいよ。行って、説教しなさい。』と。それで、私は行って説教した。その日から今日に至るまで、私は新しい牧師となった。イエール大学で2つ学位を取得し、ドイツで2つの学校で勉強したことがあったにもかかわらず、その当時私は、無名の教会の牧師をしていた。しかし、その日から私の宣教の場はずばらしく拡大し始め、ついには福音を世界中に宣べ伝え、何百人、何千人もの人たちがキリストを受け入れるのを見ることができるようになった。」その体験をして少したった後、ある日、自分の部屋で、その全く同じ部屋で座っていたことをトーレーは思い起こしています。その時、彼は自分が何について考えていたのか思い出すことはできないのですが、突然彼は自分の座っていた椅子から床にたたきつけられて、自分が叫んでいるのがわかりました。トーレーは、自分のことを、叫ぶような育てられ方はしなかった、叫ぶような気性の持ち主ではない、と言っています。しかし、メソジストの信者がこれほど叫ぶのかというほど彼は大声で叫びました。彼は、「神に栄光あれ！神に栄光あれ！神に栄光あれ！」と叫びました。叫ぶのをやめることができなかった、と彼は述べています。何か自分以外の力が自分の顎を動かしているようだった、と。これが、著書「聖霊のバプテスマ」の中に記されているR. A. トーレーの体験です。

神の三位一体(trinity)、あるいは三位一致(triunity)のテーマを見てゆくとときに、まず聖書から私たちが気づくのは、実にこれは奥義だと言うことです。テモテの手紙第一3章16節で、パウロはこう言いました。「確かに」、議論無しに、「偉大なのはこの敬虔の奥義です。『神は肉において現われ、霊において義と宣言され、…』(新改訳脚注参照)」ですから、父である神が肉において現われたイエス・キリストが霊において義と宣言されたのです。みなさんに神格を説明しようという意図

は私にはありません。無限の神の御性質を理解することは、人間の頭の限界を越えたことです。神はひとりですが、三つの位格において現われています。つまり、御父、御子、聖霊です。G. キャンベル・モーガンは、一つの本質が三つの部分で存在している、また三位一体の関係という考えが、自然の現象の中で十分な象徴として関連づけることができるものは何もない、と言っています。私たちは常に、何か神にたとえることができる象徴をさがしています。しかし、G. キャンベル・モーガンは、とにかく自分が理解できるもので、この神の三位一体、三位一致に関連づけることができる象徴は何もないと述べています。これは奥義ですので、論理的な戒律に限定することができるかと期待してはいけません。私たちの有限の頭では、ひとりの神が三つの位格を持つことができるのは矛盾です。ひとりの神が三つの仮面を被っているのだという人がいます。三位一体の否定は、常にイエス・キリストの神性と聖霊の人格の否定を伴います。三位一体は、数学的非常識だと言う人もいます。彼らは、 $1+1+1=3$ を指摘します。しかし、 $1\times 1\times 1=1$ なのです。ですから、数学的に神について論駁することはできません。

使徒行伝20章28節からの聖書の箇所、パウロはエペソにある教会の長老に対し語って言いました。「あなたがたは自分自身と群れの全体とに気を配りなさい。聖霊は、神がご自身の血をもって買い取られた神の教会を牧させるために、あなたがたを群れの監督にお立てになったのです。」ここに、三つがあるのに注目してください。聖霊はあなたがたを、神がご自身の血をもって買い取られた、神の教会の監督にお立てになりました。というのも、パウロは、「私が出発したあと、狂暴な狼があなたがたの中には入り込んで来て、群れを荒らし回ることを、私は知っています。あなたがた自身の中からも、いろいろな曲がったことを語って、弟子たちを自分のほうに引き込もうとする者たちが起こるでしょう。ですから、目をさましていなさい。(使徒20:29-31)」と述べているからです。ですから、パウロは、目をさましていること、神の教会を養うという聖霊によって与えられた勤めに気を配ることが彼らの義務である、と彼らに語っているのです。

さて、神の三位一致、三位一体についてですが、これは、旧約聖書では新約聖書ほど明確に表わされてはいません。しかし神格の三面は、確かに旧約聖書において指摘され、暗示され、言明されています。創世記1章1節で、「初めに、神が・・・」とあります。「神」と訳されているヘブル語の言葉はエロヒムです。エロヒムは、ヘブル語では複数形です。ヘブル語での単数形はエルです。複数形はエロヒムです。「初めに、神が・・・」と、神が最初に言及された言葉が、単数形ではなく複数形なのは興味深いです。複数形のエロヒムを説明しようとして、威厳の複数形(Plural of Majesty)とか、強調の複数形(Plural of emphasis)と呼んでいる人がいます。しかしそれは、何とか説明するための詭弁でしかありません。事実、エロヒムは複数形であり、創世記1章における神の御名です。主という言葉のヘブル語はアドナイですが、これも複数形です。創世記1章2節に、最初の聖霊の言及があります。「初めに、神が天と地を創造した。地は形がなく、何もなかった。やみがたいなる水の上にあり、神の霊は水の上を動いていた。」ですから、初めて聖霊が言及されているのが創世記1章2節です。そして26節までゆくと、「そして神は、・・・仰せられた。」ここは「エロヒム」であり、また複数形になっていますが、「エロヒムは、仰せられた。われわれ(let Us)」、これは複数形代名詞です。「われわれに似るように、われわれのかたちに、人を造ろう。」ここで、

神については複数形代名詞が使われています。これで、威厳の複数形(Plural of Majesty)の概念は排除できます。

聖書は、神の三つの位格がすべて創造の御業において、活動されていたことを教えています。ヨハネ1章1節から見ますと、「初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。この方は、初めに神とともにおられた。すべてのものは、この方によって造られた。造られたもので、この方によらずにできたものは一つもない。(1:1-3)」ですからヨハネは、イエスが初めに神とともにおられた、と告げています。ことば、永遠のことばです。そしてこの方は、初めに神とともにおられた。すべてのものは、この方によって造られた。造られたもので、この方によらずにできたものは一つもない、と。パウロは、コロサイ人への手紙1章16節でこう言っています。「なぜなら、万物は御子(訳者注:英語では御子がHim となっている。)にあって造られたからです。」この御子(Him)とはイエスのことです。「御子は、万物よりも先に存在し、万物は御子にあって成り立っています。(コロサイ人への手紙1:17)」御子は、創造において(関与されていました)。しかしまた、詩篇33篇6節では、創造において聖霊の役割があったことが書かれています。「主のことばによって、天は造られた。天の万象もすべて、御口のいぶき、あるいは、ルアック「によって。」ヘブル語のルアックはいぶき(息)、風、あるいは霊という意味です。ですから、詩篇33篇6節はこのように翻訳することも十分できるのです。「主のことばによって、天は造られた。」もちろん、イエスが主のことばです。「…天は造られた。天の万象もすべて、御霊、いぶき、ルアックによって。」

申命記6章4節には、いわゆるヘブル語で言うシエマがあります。これは、宮での礼拝のときに、特に祭りの日に、繰り返し、繰り返し、繰り返し、詠唱されたものです。ダビデは、繰り返し、繰り返し、シエマ、イスラエル、ヤハウエ、エロヒム、エカド、ヤハウエと叫びました。繰り返し、繰り返し詠唱されました。これが、ヘブル人の一神教の宗教の根拠そのものでした。神は唯一であるということです。しかしシエマを見ますと、おもしろいのは、「ヤハウエあるいはエホバ、エロヒム」と、ここでも神の複数形になっていることです。「ヤハウエ、エロヒム、エカド、ひとりのヤハウエ、あるいはひとりのエホバ」です。「イスラエル、エホバ、神(Gods) —これは複数形です— ひとりのエホバ」。おもしろいのは、複数形のエロヒムが使われているだけではなく、エカドという言葉です。エカドというヘブル語の言葉は、複合単数であることです。神がアダムからエバを創造されたとき、「それゆえ、…ふたりはエカド、一体となるのである。(創世2:24参照)」と言われました。これは複合単数です。もう一つヘブル語で、壹(one)という言葉がありますが、これは絶対的な一つという言葉です。「ヤハド」という言葉です。シエマの中で、「イスラエル、ヤハウエ、エロヒム、ヤハド、ヤハウエ」と宣言されていたとしたら、三位一体の議論をする根拠がなくなるのです。しかし、エロヒムが複数形でありエカドが複合単数なので、ヘブル人の一神教の詠唱の中でさえ神の三位一致が示唆されています。

民数記6章24節で、モーセがアロンに対し神の祝福を民に授けるよう命じました。次のように言わなければなりません。「ヤハウエがあなたを祝福し、あなたを守られますように。ヤハウエが御顔をあなたに照らし、あなたを恵まれますように。ヤハウエが御顔をあなたに向け、あなたに平安を与えられますように。」ここでヤハウエが、三面的に描かれているのに注意してください。ひ

とりのヤハウェですが、それなのになぜ三度も繰り返されているのでしょうか。「ヤハウェがあなたを祝福し、あなたを守られますように。ヤハウェが御顔をあなたに照らし、あなたを恵まれますように。ヤハウェが御顔をあなたに向け、あなたに平安を与えられますように。」と。従って主は言われました。「あなたがわたしの名で」、つまりヤハウェの名で、「イスラエル人のために祈るなら、私は彼らを祝福しよう。」これは、一致した三位一体の祝福です。

また、イザヤが、高くあげられた王座に座しておられる主の幻を見たとき、セラフィムが「聖なる、聖なる、聖なる、…」と歌うのを聞きました。なぜ、三回なのでしょう。「…万軍の主。(6:3)」三面的な聖です。イザヤ書48章16節のメシヤ預言で、主は言われました。「わたしに近づいて、これを聞け。わたしは初めから、隠れた所で語らなかつた。それが起こった時から、わたしはそこにいた。』今、神である主は私を、その御霊とともに遣わされた。」注意してください。「今、神である主は私を、」つまりイエス・メシヤを「その御霊とともに遣わされた。」とあります。「わたしに近づいて、これを聞け。わたしは初めから、隠れた所で語らなかつた。それが起こった時から、わたしはそこにいた。」と16節で語られているのは、メシヤです。「初めに、ことばがあつた。』今、神である主は私を、その御霊とともに遣わされた。」改訂版(Revised Version)では、「神である主は私と御霊を遣わされた。(The Lord, God has sent Me, and His Spirit.)」となっています。これは、ヘブル語をより文字通りに訳したものです。というのも、まずこれはメシヤの来臨の預言であり、聖霊の時代の到来の預言だということがわかるからです。ですから、「神である主は私と御霊を遣わされた。」のです。

もちろん新約聖書では、全体を通して神の三位一致があります。マタイの福音書3章16節のイエスのバプテスマにおいてこのように書かれています。「こうして、イエスはバプテスマを受けて、すぐに水から上がられた。すると、天が開け、神の御霊が鳩のように下って、自分の上に来られるのをご覧になった。」イエスはバプテスマを受けられ、神の御霊が鳩のように下って来られ、「また、天からこう告げる声が聞こえた。『これは、わたしの愛する子、わたしはこれを喜ぶ。』(3:17)」とあるのに注目してください。イエスがバプテスマを受けられ、御霊が下り、御父が天から語り、ご自分の子を喜ぶと告げられています。さて、ジーザス・オンリー(ただイエスのみ)派という分派があります。この分派は、米国南部でかなりの力を持っており、西はアリゾナ州まで広がっています。カリフォルニアにもごく少数いますが、たいした数ではありません。このジーザス・オンリー派は、初代教会の異端であるサベリウス説(Sabellianism)をとっています。この説は、神の三位格が別個の存在であることを否定するものでした。ジーザス・オンリー派は、イエスが唯一の神であると言います。つまり、イエスが御父であり、御子であり、聖霊であり、イエスが三つともすべてであるということです。けれども、今の聖書の箇所マタイの福音書3章16節が、彼らには問題になると私は思うのです。というのも、イエスは魔術師か何かで、ご自分の上に鳩、聖霊を下らせ、腹話術師になってご自分の声を天に投げ掛けて「これは、わたしの愛する子、わたしはこれを喜ぶ。」と言って、それを自分で聞かなければならないからです。イエスは、ヨハネ14章16節でこう言われました。「わたしは父にお願いします。」これは、イエスが話されています。「わたしは父にお願いします。そうすれば、父はもうひとりの助け手をあなたがたにお与えになります。その助け手がいつまでもあな

たがたと、ともにおられるためにです。その方は、真理の御霊です。世はその方を受け入れることができません。世はその方を見もせず、知りもしないからです。しかし、あなたがたはその方を知っています。その方はあなたがたとともに住み、あなたがたのうちにおられるからです。(14:16-17)」ですから、真理の御霊、助け主は、イエスが御父にお願いして遣わされたのです。また、14章26節には、「しかし、助け主、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊は…」とあります。ですから、ここでも三つすべてがあります。イエスが弟子たちに行き、あらゆる国の人々を教えなさいとお命じになったとき、「父、子、聖霊の御名によってバプテスマを受けなさい。」と言われました(マタイ28章19節参照)。三つすべてがあります。パウロがエペソ人へ手紙を書いた時、こう言いました。「からだは一つ、御霊は一つです。あなたがたが召されたとき、召しのもたらした望みが一つであったのと同じです。主は一つ、…(4:4-5)」最初の節では、「御霊は一つ」でした。「主は一つ、信仰は一つ、バプテスマは一つです。すべてのものの上にあり、すべてのものを貫き、すべてのものの中におられる、すべてのものの父なる神は一つです。(4:5-6)」ですから、三位一体があります。「御霊は一つ」、「主は一つ」、「神は一つです。」1x1x1です。

おもしろいのは、ほぼ一般的に言って、聖霊は三番目に語られていることです。御父、御子、そして聖霊です。これは、聖霊が三位一体の第三位格であると通常言われている所以です。通常、聖霊が三番目に語られているからです。それは、下等であることを表わすものでは決してありません。しかし、確かに聖書は神格(Godhead)が同等であることを教えています。しかし、ここ(エペソ4:4-5)では逆転しています。聖霊が最初に語られ、イエスが二番目に、神が三番目になっています。ローマ人への手紙15章13節(訳者注:30節のことか)で、パウロは、「兄弟たち。私たちの主イエス・キリストによって、また、御霊の愛によって切にお願いします。私のために、私とともに力を尽くして神に祈ってください。」と言いました。ここにも、また三つがあるのに注目してください。しかし、ここではイエスが最初になっています。聖霊は二番目、父は三番目です。聖霊、神の第三位格が言及される時、先にも申し上げたように、聖霊が下等であるとの考えは全くありません。ウエストミンスター信仰告白では、このように書かれています。「ただひとりの、生ける、まことの神がおられるだけである。(訳者注:「ウエストミンスター信仰告白」新教出版社1964年発行p.11)」
「神の統一性の中に、ひとつの本質、力、永遠性をもつ三つの人格がある。すなわち、父なる神、子なる神、聖霊なる神である。(p.15)」これは、ウエストミンスター信仰告白です。

ヨハネ15章で、イエスが弟子たちに話されている時、こう言われました。「わたしが父のもとから遣わす助け主、すなわち父から出る真理の御霊が来る時、彼がわたしについてあかしします。(訳者注:ヨハネ15:26下線部は英語の直訳。)」人称代名詞が聖霊を言及するときに使われています。弟子たちに父から遣わされる助け主は、イエスの要請によるものです。コリント人への手紙第二13章14節(訳者注:新改訳では13節になっている。)におけるパウロの祝福は、「主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、あなたがたすべてとともにありますように。アーメン。(欽定訳の直訳)」です。「キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わり」の三つが一つになっています。使徒行伝10章において、コルネリオの家に集まった人々へのペテロの説教で、彼は、「神がどのようにナザレのイエスに聖霊を注がれたかを」と宣べました(使徒10:38参照)。三つすべてが

言及されています。「すなわち、神がどのようにナザレのイエスに聖霊と力を注がれたかを。このイエスは、神がともにおられたので、巡り歩いて良いわざをなし、また悪魔に制せられているすべての者をいやされました。」ヨハネの手紙第一には、新約聖書における最もはっきりとした三位一体の宣言が書かれています。「天にはあかしするものが三つあります。父とみことばと聖霊です。この三つは一つです。(訳者注:1ヨハネ5:7-8欽定訳の直訳。日本語訳は異本を定本にしているため、この部分が存在しません。)」さて、この聖書の箇所は原本にはなかったと、異議を申し立てる人がいます。もちろん興味深いことに、原本は全く存在しないのです。原本に何が含まれていたかははっきりわからないのです。はっきりと原本にはなかったと言う人は、確信してそれを言うことはできません。それは、調べて見ることができる原本がないからです。最古の写本は、私見では大目に見てもかなりお粗末な写本ですが、コデックス・シナイ写本(Codex Sinaiticus)とコデックス・アレクサンドリア写本(Codex Alexandrius)、そして無論バチカン写本(Vaticanus)です。これらの写本はすべて同じ学派の写本です。確かに、これらの写本にはその箇所が入っていません。それに、これらの写本にはマルコの福音書の16章の後半、7節以降はこれらの写本には入っていません(訳者注:写本についての詳しい講解については、マルコの福音書の16章(#8044)を参照のこと)。しかし、これらの写本はおよそ紀元412年のものだと年代がふられています。つまり、原本が書かれてから300年以上もたった写本だということです。ですから、その間の300年間の写本や、写本の一部が実に数多くあります。ヨハネの手紙第一にあるこの特定の箇所は、大多数の写本にはありません。しかし、この箇所は、2世紀に初代教会の父祖によって引用されています。マルコの福音書の16章の後半についても同じことが言えます。コデックス・シナイ写本ができる150年から200年前である2世紀に生きていた初代教会の父祖が引用したのですから、その父祖たちは、コデックス・シナイ写本よりも古い写本から引用したはずで、最古の写本、全部そろった写本には入っていないからと言う議論は、—それに、コデックス・シナイ写本は、全部そろった写本ではありません—たいした重要性を持っていません。ですから、ウェストコットとホートのテキストが95%以上というほぼ全部をコデックス・シナイ写本とアレクサンドリア写本とバチカン写本に依存していることは、大きな過ちの一つだと考えられます。しかし、写本を捜すのに興味がおありの方のためにお話したまでのことです。

(訳者注:テープの頭が切れています。)・・・名前が聖霊につけられています。使徒行伝5章3節です。「そこで、ペテロがこう言った。『アナニヤ。どうしてあなたはサタンに心を奪われ、聖霊を欺いて、地所の代金の一部を自分のために残しておいたのか。』アナニヤとサツピラが土地を売って、その代金の一部を持ってきて使徒たちの足元に置いたのをおぼえていますか。これは偽善でした。アナニヤはあたかも全てを捧げたかのように、全てを与えたかのように振る舞っていました。それで、ペテロは、「どうしてあなたはサタンに心を奪われ、聖霊を欺いて、地所の代金の一部を自分のために残しておいたのか。」と言いました。こう言いました。「ご覧、一銭も与える必要はなかったのです。残りもあなたのものだったのではないのですか。売ってからもあなたの権威のもとに、それを自分の思いのままにどうにでもできたはずで、それなのに、なぜことようなことをたくらんだのか。これは欺きだ。」そして、「そしてあなたは人を欺いたのではなく、神を欺いたのだ。」

と言いました。さて、その前の節で、ペテロは、「あなたは聖霊を欺いた」と言いました。今度は、「あなたは神を欺いた」と言っています。ですから、ここに幾何学の定理が適用されているのです。最後に幾何学を勉強したのはずいぶん前のことですから、定理が思い出せないのですが、辺が同じで角が同じであれば、何かと同じだとか何とかいう定理です。とにかく、もし聖霊を欺いて、神を欺いたのなら、それは、同等、同じなのです。コリント人への手紙第二三章18節で、パウロは、私たちが主の御霊(Spirit of the Lord)によって栄光から栄光へと変えられて行くことについて語っています。もっと現代の訳本では、主の御霊という句はギリシャ語からより正しく、より文字通りに「御霊なる主(by the Lord the Spirit)」と訳されています。ギリシャ語は、フポ・クリオス・ニューマトスです。これは、「御霊なる主」です。

聖霊は、神の属性をお持ちです。聖霊は永遠です。ヘブル人への手紙9章14節です。「まして、キリストが傷のないご自身を、とこしえの御霊によって神におささげになったその血は、どんなにかあなたの良心をきよめて死んだ行ないから離れさせ、生ける神に仕える者とするものでしょう。(新改訳脚注参照)」ここでも、三位一体がみられます。キリストの血がとこしえの御霊によって、あなたの良心をきよめて死んだ行ないから離れさせ、生ける神に仕える者とします。聖霊は、偏在されています。詩篇139篇7節です。「私はあなたの御霊から離れて、どこへ行けましょう。私はあなたの御前を離れて、どこへのがれましょう。たとい、わたしが天に上っても、そこにあなたはおられ、私がよみに床を設けても、そこにあなたはおられます。私が暁の翼をかって、海の果てに住んでも、そこでも、あなたの御手が私を導き、あなたの右の手が私を捕らえます。」聖霊は、偏在されています。天にもおられるし、地獄にもおられるし、海の果てにもおられます。御霊から逃げることはできません。聖霊は全知です。コリント人への手紙第一二章10節です。「神はこれを、御霊によって私たちに啓示されたのです。御霊はすべてのことを探り、神の深みにまで及ばれるからです。」御霊は全てをご存じです。神の深みをご存じです。「いったい、人の心のことは、その人のうちにある霊のほかには、だれが知っているでしょう。同じように、神のみこころのことは、神の御霊のほかにはだれも知りません。(2:11)」神と同じで、聖霊は全てを知っておられます。この方は全知です。聖霊は全能です。天使がマリヤに、神がメシヤを世に遣わすためにマリヤを器として選ばれたと約束をしたとき、マリヤは「どうしてそのようなことになりえましょう。私は処女で、まだ男の人と関係を持ったことがありませんのに。」と疑いました(ルカ1:34参照)。ルカの福音書1章35節で、「御使いは答えて言った。『聖霊があなたの上に臨み、いと高き方の力があなたをおおいます。』聖霊はいと高き方の力です。「それゆえ、生まれてくる聖なる者は、神の子と呼ばれます。(ルカ1:35新改訳脚注参照)」三つがみなあります。聖霊、いと高き方の力、そして、その結果が神の子です。

聖霊は、旧約聖書のエホバと同一と見なされています。旧約聖書でエホバの記述がなされている聖書の箇所は、新約聖書では聖霊となっています。例えばイザヤ書6章8節ですと、こうあります。「私は、『だれを遣わそう。だれが、われわれのために行くだろう。』と言っておられる主の声を聞いたので、行った。『ここに、私がおります。私を遣わしてください。』すると仰せられた。『行って、この民に言え。「聞き続けよ。だが悟るな。見続けよ。だが知るな。』この民の心を肥え鈍らせ、そ

の耳を遠くし、その目を堅く閉じさせ。自分の目で見、自分の耳で聞き、自分の心で悟り、立ち返って、いやされることのないために。』使徒行伝28章25節で、使徒パウロは言いました。「こうして、彼らは、お互いの意見が一致せずに帰りかけたので、パウロは一言、次のように行った。『聖霊が預言者イザヤを通してあなたがたの先祖に語られたことは、まさにそのとおりでした。「この民のところに行って、告げよ。あなたがたは確かに聞きはするが、決して悟らない。確かに見てはいるが、決してわからない。(28:25-26)」ですから、主がイザヤに語られたことを、パウロは使徒行伝で聖霊に帰しています。エレミヤ書31章31節です。「見よ。その日が来る。— 主の御告げ。— その日、わたしは、イスラエルの家とユダの家とに、新しい契約を結ぶ。その契約は、わたしが彼らの先祖の手を握って、エジプトの国から連れ出した日に、彼らと結んだ契約のようではない。わたしは彼らの主であったのに、彼らはわたしの契約を破ってしまった。— エホバの御告げ。— 彼らの時代の後に、わたしがイスラエルの家と結ぶ契約はこうだ。— エホバの御告げ。— わたしはわたしの律法を彼らの中に置き、彼らの心にこれを書きしるす。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。そのようにして、人々はもやは、『エホバを知れ。』と言って、おのおの互いに教えない。それは、彼らがみな、身分の低い者から高い者まで、わたしを知るからだ。— エホバの御告げ。— わたしは彼らの咎を赦し、彼らの罪を二度と思い出さないからだ。」ヘブル人への手紙10章15節です。「聖霊も私たちに次のように言って、あかしされます。『それらの日の後、わたしが、彼らと結ぼうとしている契約は、これであると、エホバは言われる。わたしは、わたしの律法を彼らの心に置き、彼らの思いに書きつける。わたしは、もはや決して彼らの罪と不法とを思い出すことはしない。』」ですから、エレミヤはそれを言われたのはエホバだった、と言っているのですが、聖霊が預言者エレミヤに靈感を与えた方と宣言されています。聖書を書くのに靈感を与えた方は聖霊でした。マルコの福音書12章36節です。「ダビデ自身、聖霊によって、こう言っています。『主はわたしの主に言われた。「わたしがあなたの敵をあなたの足の下に従わせるまでは、わたしの右の座に着いていなさい。』」ダビデは、聖霊によって言いました。使徒行伝1章16節でペテロは「兄弟たち。イエスを捕らえた者どもの手引きをしたユダについて、聖霊がダビデの口を通して預言された聖書のことばは、成就しなければならなかったのです。」と言って、聖霊の靈感によってダビデが語ったと認めています。ペテロの手紙第二1章21節で、ペテロは、「なぜなら、預言は決して人間の意思によってもたらされたのではなく、聖霊に動かされた人たちが、神からのことばを語ったのだからです。」と述べています。かつての聖なる人たちに靈感を与えて書かせたのは、聖霊でした。これを私たちは、聖書(Bible)、(the Scriptures)と呼んでいます。それだけではありません、イエスは、使徒たちに靈感を与えるのは聖霊であるとおっしゃいました。彼らがユダヤ人の会堂に連れて行かれ、総督や王の所へ連れて行かれることをご存じだったので、「何と言おうかなどと案じるには及びません。ただ、そのとき自分に示されることを、話さない。話すのはあなたがたではなく、聖霊です。(マルコ13:9-11参照)」と言われました。前もって考えてはいけません。心配してはいけません。そのとき聖霊はあなたが言うべきことを与えてくださいます、と。聖霊は旧約聖書の筆記者に靈感を与え、裁判官、総督、議会の前に連れ出された時、使徒とイエス・キリストのしもべに対し靈感とられました。

この成就是、使徒行伝7章で明らかにされています。ステパノが捕らえられ、議会の前に立たされ、自分の信仰について弁明したとき、6章の終わりの部分にはこう書かれています。「議会で席に着いていた人々はみな、ステパノに目を注いだ。すると彼の顔は御使いのように見えた。大祭司は『そのとおりか。』と尋ねた。(6:15-7:1)」そこでステパノは、これまでになかったような傑出した説教を彼らに始めました。まず、ステパノは共通の話題、彼らの一番好きなテーマである著名な父祖から話し始めました。それは、彼らがとても誇り高い国民だったからです。国の伝統を誇りに思っている人たちだったからです。彼らはいつも「我々の父祖たちは…」と言っていました。そして、ヘブル人の国民の著名なすばらしい父祖を誇りました。それで、ステパノは彼らの父祖がどのようにヨセフを銀20枚で売ったかを彼らに指摘しました。殺すのはやめ、銀20枚で奴隷に売ったので、ヨセフはエジプトに連れて行かれました。彼らの心はあまりにかたくなで、ヨセフの涙にも動かされることなく、ヨセフはエジプトに連れて行かれました。ヨセフが彼らを支配することを神が計画されていることに彼らは気がつきませんでした。一回目は、ヨセフについて、彼らはそのことに気づきませんでした。しかし、二回目、彼らがエジプトに来て、ヨセフが彼らを懲らしめたとき、みなヨセフにひれ伏すと、ヨセフがついていた地位は神がお定めになったものであることに気がつきました。彼らは、一回目はヨセフを拒絶しました。しかし、二回目は、彼らは見て、認め、わかりました。著名な父祖はモーセに背を向けました。それで、モーセは逃げなければなりません。ステパノは言いました。「モーセは、神が彼らをエジプトの奴隷状態から解放するのを指揮するために、自分を選んだことをみな理解してくれるものと思っていました。」モーセは、神の召しを知っていました。最初にそれを達成しようとしたとき、人々はモーセを拒絶しました。人々はモーセを追い出しました。それで、モーセは荒野に逃げなければなりません。しかし二回目には、人々は、そうだ、モーセは神が定めた指導者だと認めました。ステパノが何を言わんとしているかおわかりになるでしょうか。一回目、彼らはイエスを拒絶しました。ちょうど彼らの父祖がヨセフを拒絶したと、ちょうど彼らの父祖がモーセを拒絶したと同じでした。しかし、二回目は気がつきました。ですから、ステパノが基本的に言っていたのは、次はあなたがたはわかるようになる、あなたがたは自分たちの父祖よりも頭が悪い、ということでした。ステパノは続けて、「あなたがたの先祖が殺さなかった預言者がだれかあったのでしょうか。」と述べています。「彼らは無知でした。しかし、あなたがたはすべての預言者が宣言していた、来臨される方を殺したので、あなたがたは彼らよりさらに悪いのです。」このことは、彼らを本当に怒らせました。真理はグサツときますし、痛いのです。彼らは聞くのをやめ、耳をおおい、歯ぎしりをして、叫びながら、ステパノを引きずりだして、石打ちにして殺してしまいました。真理に我慢ができなかったのです。しかし、一回目は神に油注がれたものを逃して来たが、二回目は認めてきたというこの国民にあったパターンを彼らが追随していることを実に上手く示しました。聖霊によって靈感を受けたのです。

ペテロが議会の前に立ったとき、自分が石打ちにされるかもしれない誘導尋問をされたことが書かれています。「そのとき、ペテロは聖霊に満たされて、彼らに言った。『民の指導者たち、ならびに長老の方々。(使徒4:8参照)』」ペテロは、聖霊に満たされて語り、ペテロが話し終わると、ペテロの知恵に人々は驚きました。それは、人々がペテロのことを無学な、普通の人であると思ってい

たからでした。この人たちは大学の学位もないのに、知恵をもって語りました。なぜでしょうか。それは、聖霊によるものだったからです。

聖霊は人格を持っておられます。神の第三位格です。この方は、神があなたに、わたしに、神の教会にくださった賜物です。聖霊は助け主、パラクレトスになるために来てくださいます。あなたのそばに来て、あなたがクリスチャンとしての歩みをするのを助けてくださいます。聖霊はあなたのそばに来て、あなたを真理に導いてくださいます。聖霊はあなたのそばに来て、あなたを元気づけてくださいます。あなたが力を受け、イエス・キリストの姿に変えられるように、あなたの中に住んでくださいます。この最も重要なテーマである「聖霊とあなた」についての学びを続けて行きますが、聖霊の内住と聖霊があふれ流れ出ること、聖霊の賜物、信者の生活における聖霊の働き、教会における聖霊の働き、教会における聖霊の賜物、世における聖霊の働きについてもっと話してゆきます。

世における聖霊の働き(#3053)

Work of Holy Spirit in the world

今晚、聖霊のテーマについて続けて学びます。C. H. スポルジョンはこのように述べています。「兄弟たち、私はこう信じる。神の教会が衰退するときはいつでも、それを最も効果的に生き返らせる方法は、聖霊について多くの真理を説教することだ。結局のところ、ご聖霊が教会の息吹そのものだからである。神の御霊がおられるところに力がある。もし、御霊が退かれたら、敬虔さの活力が減り、墮落してしまう。神の御霊に対して、『あなたの道に私たちを急がせてください。』と叫ぼうではないか。もし、どの教会でもなまめろくなっているのを悲しくも見るのであれば、聖霊が恵みをもってリバイバルを起こしてくださることを、私たちの祈りとしようではないか。主に立ち返ろうではないか。聖霊のバプテスマを、火を受けることを再び求めようではないか。主のすばらしい御業を再び見るために。もし、聖霊が私たちの前に門戸を開いてくださっているのに、私たちが入らないのであれば、非難を受けるべきは私たち自身である。」C. H. スポルジョンです。最後の部分です。「主に立ち返ろうではないか。聖霊のバプテスマを、火を受けることを再び求めようではないか。主のすばらしい御業を再び見るために。もし、聖霊が私たちの前に門戸を開いてくださっているのに、私たちが入らないのであれば、非難を受けるべきは私たち自身である。」

今晚は、世における聖霊の働きのテーマを見たいと思います。イエスが弟子たちに聖霊、すなわち、ほむべきパラクレトスを約束されたとき、「世はその方を見もせず、知りもしないからです。しかし、あなたがたはその方を知っています。その方はあなたがたとともに住み、あなたがたのうちにおられるからです。(ヨハネ14:17)」と言われました。聖霊は、創造の初めからこの地にずっと住んでおられます。創世記の(1章)2節です。「地は形がなく、何もなかった。…神の霊は水の上を動いていた。」さて、ヨハネの福音書16章で、イエスが聖霊の降臨について話されているときに、7節からですが、こう告げられました。「しかし、わたしは真実を言います。わたしが去って行くことは、あなたがたにとって益であり、必要なのです。それは、もしわたしが去って行かなければ、助け主があなたがたのところに来ないからです。しかし、もし行けば、わたしは助け主をあなたがたのところ遣わします。その方が来ると、世にその誤りを認めさせます。」これは、世における聖霊の働きです。「その方が来ると、罪について、義について、さばきについて、世にその誤りを認めさせます。罪についてというのは、彼らがわたしを信じないからです。また義については、わたしが父のもとに行き、あなたがたがもはやわたしを見なくなるからです。さばきについては、この世を支配する者がさばかれたからです。」

創世記6章で、神が地上に人の悪が増大し、その心に計ることがみな、いつも悪いことだけに傾いていたので、人を地の面から消し去ろうとの御心を告げられたとき、神は、「わたしの霊は永久には人のうちにとどまらないであろう。(訳者注:創世6:3欽定訳の直訳は、「わたしの霊は人のうちに奮闘しないであろう。）」と告げられました。ノアの時代に、神の霊は人々のうちに奮闘されていました。御霊は、人々にその罪について誤りを認めさせておられました。御霊は世において働かれ、世にその罪を認めさせておられました。しかし、人々は聖霊を拒ばみました。聖霊は人々と奮

闘されていても、彼らは心では、自分のしていることが間違っているとわかっている、聖霊に思いも心も閉ざしてしまったので、神は、「わたしの霊は人のうちに奮闘しないであらう。」と警告されたのです。神の霊が人々のうちに奮闘するのを止め、神のさばきが来る時が来ます。それは、ちょうどノアの時代に来たのと同じです。今日は多くの場合、聖霊が人々のうちに奮闘されることを、私たちは良心の声と呼びます。ローマ人への手紙2章で、パウロは、人々、新生していない人の心に書かれた律法について語っています。そうした人の心にさえ、神は律法をお書きになりました。パウロは言いました。「彼らの良心もいっしょになってあかしし、また、彼らの思いは互いに責め合ったり、また、弁明し合ったりしています。(2:15)」ですから、人々の心に書かれた神の律法、そして彼らの良心が誤りを認めさせています。パウロは、新生していない人について語っています。それからパウロは、テモテの手紙第一4章2節で、良心に焼き印をおされている人について語りました(口語訳参照)。その人は、罪悪感もなく、良心の呵責を全く感じることもなく物事をするができるようになるまで、聖霊の御声を拒否しました。私はセミナーに行ったことがあります、そのセミナーでは、社会科学者の何人かで、社会の趨勢に従っている人たちが、教会はどのように紀元2000年に備えるべきか話をしてくれました。このテーマについてかなり研究をし、本も書いている人が、おおむね我々大人は世の中で起こっていることと接触を失ってしまっている、と言っていました。若者の間で起こっていることと接触を失ってしまっている、と。若者が悪に対する良心のかけらもなくなる時代に向かって急速に動いている時代に我々は住んでいる、とその人は言いました。彼らは何が悪かわからなくなる、と。このため、彼らは最もひどい犯罪を犯しても、何ら良心の呵責がなくてすむのです。その会議があつて以来、連続殺人犯が捕らえられ、座って裁判を受けているとき、判決が言い渡されるときの解説者の発言を何度も見てきましたが、その時に、「全く何の良心の呵責も見られなかった。」と言うのをよく聞きます。良心に焼き印がおされました。しかし、神の御霊は罪を悟らせます。世にその誤りを認めさせます。

しかし、人はご聖霊の働きに逆らいますし、逆らうことができます。ステパノが議会の前に立った時、彼は人々に対し、先祖たちと同様に聖霊に逆らっていることを非難しました(使徒7:51参照)。イエスがダマスコ途上でパウロを捕らえた時、イエスはパウロに、「とげのついた棒をけるのは、あなたにとって痛いことだ。(使徒26:14)」と言われました。おもしろいですね。というのは、パウロは、律法に関する義については非難されるところがなかったと証言しているからです(ピリピ3:6参照)。パウロはいつも、神の御前に良心の呵責がないように努力しました。しかし、パウロの中に何かとげとなっているものがありました。このために、主がパウロを捕らえられた時、「とげのついた棒をけるのは、あなたにとって痛いことだ。」と言われたのです。ゼカリヤ書7章12節です。「彼らは心を金剛石のようにして、万軍の主がその御霊により、先の預言者たちを通して送られたおしえとみことばを、聞き入れなかった。」彼らは心をかたくなにしました。彼らは心を金剛石のようにし、御霊が、律法が聞こえないようにしました。「万軍の主がその御霊により、先の預言者たちを通して送られたおしえとみことばを、聞き入れなかった。そこで、万軍の主から大きな怒りが下った。」人が心をかたくなにすると、御霊を聞き入れません。そうすると、神はさばきを下すしか選択肢がありません。今日の世は、聖霊が世にその誤りを認めさせようとするのに、耳を傾けません。

人が、正しい生活をあざけるのを聞きます。イエス・キリストをあざけるのを聞きます。聖霊の証しをあざけるのを聞きます。

さて、聖霊の世に対する証しは、イエス・キリストが神の御子であり、唯一の救い主であることです。イエスは、「罪についてというのは、彼らがわたしを信じないからです。(ヨハネ16:9)」と言われました。イエスという名は、彼の使命を物語っていました。御使いは、「その名をイエス」あるいはヤシュア」とつけなさい。この方こそ、ご自分の民をその罪から救ってくださる方です。(マタイ1:21)」と言いました。彼のイエスという名前はギリシヤ語で、ヘブル語ではヤシュアです。これは、エホバ・シュアの短縮形、あるいは「エホバは救い」でした。イエスは、「失われた人を捜して救うために来たのです。(ルカ19:10)」と言われました。それが、彼の使命でした。そして、聖霊が世にあかされます。世にその誤りを認めさせます。その罪とは、イエスを信じない罪です。人が心で御霊のあかしを拒み続けることが、聖霊を冒瀆する罪(マタイ12:31参照)になると私は信じます。この罪は、究極的に人を地獄に行かせるものです。そして、最後のさばきの日が来て、書物が開かれると、行ないに応じてさばかれますが、第二の書物であるいのちの書にあなたの名がないのであれば、聖書によると、あなたは火の池に投げ込まれます(黙示20:20:12-15参照)。イエス・キリストを受け入れることを拒むこと、つまりいのちの書にあなたの名がしるされるを拒むことは、赦されない罪です。イエスは、「御子が世に遣わされたのは、世をさばくためではなく、御子によって世が救われるためである。御子を信じる者はさばかれない。(ヨハネ3:17-18)」と言われました。ああ、どうか、心の中で、また思いの中で、そこに下線を引いてくださいますように。「御子を信じる者はさばかれない。」その言葉は、あなたの魂の琴線に触れ、あなたを喜ばせることでしょう。「御子を信じる者はさばかれない。信じない者は神のひとり子の御名を信じなかったので、すでにさばかれている。」

さて、聖霊は、世にその誤りを認めさせます。その罪とは、イエスを信じない罪です。「御子を信じる者はさばかれない。信じない者は神のひとり子の御名を信じなかったので、すでにさばかれている。」とイエスは言われました。これが問題です。あなたの罪のための神の供えを信じることです。神が、あなたの罪を負って、あなたの代わりに死んでくださったひとり子を遣わされたことを信じることです。これが聖霊のあかしです。これが世に対する御霊のあかしです。人々は良心の呵責にさいなまれています。正しいことをしていないのを知っています。しかし、きよめと赦しを得るためにイエス・キリストのところに来ません。「そのさばきというのは、こうである。光が世に来ているのに、人々は光よりもやみを愛した。その行ないが悪かったからである。(ヨハネ3:19)」イエスは、福音を宣べ伝えさせるために弟子たちを全世界に遣わされた時、「信じてバプテスマを受ける者は、救われます。しかし、信じない者は罪に定められます。(マルコ16:16)」と言われました。問題の核心は、イエス・キリストを信じることです。それは、赦されるか、罪に定められるかの違いです。それが問題の核心です。イエスは、「罪についてというのは、彼らがわたしを信じないからです。」と言われました。おもしろいのは、「罪についてというのは、彼らがポルノにはまっている、不品行をしているとか、ああだ、こうだ。」とはおっしゃらなかったことです。「罪についてというのは、彼らがわたしを信じないからです。」と言われたのです。ヨハネは、「御子を信じる者は永遠のい

のちを持つが、御子に聞き従わない者は、いのちを見ることなく、神の怒りがその上にとどまる。(ヨハネ3:36) 」と証言しました。さらにヨハネは、「もし信じないなら、神を偽り者とするのです。(1ヨハネ5:10参照) 」と言いました。聖霊を偽り者とするのです。イエス・キリストが神の御子として世の罪を負ってくださったことを信じることを拒み、拒否することによって、聖霊を冒瀆しているのです。もし、信じないと言うなら、神がご自分の御子についてお与えになった記録を信じないので、神を偽り者とするのです。イエス・キリストについての聖霊のあかしを信じないので。最後の審判の日については、黙示録20章11節からお読みします。「また私は、大きな白い御座と、そこに着座しておられる方を見た。地も天もその御前から逃げ去って、あとかたもなくなった。また私は、死んだ人々が、大きい者も、小さい者も御座の前に立っているのを見た。そして、数々の書物が開かれた。また、別の一つの書物も開かれたが、それは、いのちの書であった。死んだ人々は、これらの書物に書きしるされているところから従って、自分の行ないに応じてさばかれた。海はその中にいる死者を出し、死もハデスも、その中にいる死者を出した。そして人々はおのこの自分の行ないに応じてさばかれた。それから、死とハデスとは、火の池に投げ込まれた。これが第二の死である。いのちの書に名のしるされていない者はみな、この火の池に投げ込まれた。(20:11-15) 」イエス・キリストを信じることによって、いのちの書に名がしるされます。

さて、聖霊は世に罪を認めさせるだけではなく、世に義を認めさせます。罪は悪いことをすることです。義は正しいことをすることです。正しいことです。聖霊は世に、何が正しいことか、どの行為をすれば正しいか、どういう反応をすれば正しいかを示します。罪は、的をはずすことです。義は的に当たることです。そして聖霊が、イエス・キリストは義の第一の模範であると指し示すことによって、義についてあかしし、世にそれを認めさせます。イエス・キリストこそが、神がわたしたちにそうなって欲しいと望んでおられた方です。ペテロは、「その足跡に従うようにと、彼が私たちに模範をのこされた。(1ペテロ2:21参照) 」と言いました。神があなたに何を望んでおられるかを知りたいなら、イエス・キリストを見てください。神が人に何を意図されておられるかを知りたいなら、イエス・キリストを見てください。聖霊は、イエス・キリストが模範であると指し示すことによって、世に義を認めさせます。彼こそが、神がわたしたちにそうなって欲しいと望んでおられた方です。あなたがゆだねる時、これについては、先の学びでやりますが、あなたが聖霊にゆだねる時、そして、聖霊のバプテスマを受ける時、バプテスマを受ける前でも聖霊にゆだねる時、あなたの中で聖霊が働いてくださり、あなたをイエス・キリストの姿に変えてくださいます。しかし世に対しては、聖霊は義を認めさせます。イエス・キリストを指し示すことによって、それをなさいます。イエスは「義についてとは、わたしが父のもとに行くこと。」と言われました。

さて、必然的に出てくる疑問は、イエス・キリストの昇天が義について私たちに何をあかししているか、です。聖霊はどのようにしてその二つをつなげられるのでしょうか。「義についてとは、わたしが父のもとに行くこと。」使徒パウロは、「正しくない者は神の国を相続できない。(1コリント6:9参照) 」と私たちに教えています。「正しくない者は神の国を相続できない。」これは、コリント人への手紙第一6章9節です。ガラテヤ人への手紙5章で、パウロが肉の行ないを列挙していますが、そこにさらに、「こんなことをしている者たちが神の国を相続することはありません。(5:21) 」と付け

加えています。ですから、コリント人への手紙第一6章10節とその文脈を読んでください。ガラテヤ人への手紙5章の肉の行ないとその文脈を読んでください。こんなことをしている者たちは、このようなものは不正であり、正しくないのです。もし、あなたがこんなことをするなら、あなたは神の国を相続することがないのです。黙示録では、「すべて汚れた者は、はいれない。(21:27)」と教えられています。なぜなら、天国を汚すからです。エペソ人への手紙5章で、パウロは、「不品行な者や、汚れた者や、むさぼる者 — これが偶像礼拝者です。— こういう人はだれも、キリストと神との御国を相続することができません。(5:5)」と言っています。ですから、イエス・キリストの昇天を指し示すことによって、義を彼らにあかしすることによって、聖霊は不義を世に認めさせているのです。(訳者注:B面の頭が切れているように聞こえる。)これは、「すべての人との平和を追い求め、また、聖められることを追い求めなさい。聖くなければ、だれも主を見ることはできません。(ヘブル12:14)」と勧められていることを証明しています。ですから、聖霊が私たちに、聖く生き、正しく生きることと、肉に従って生きるのを捨てることについて語っておられます。

では、イエス・キリストの昇天はどうなのでしょう。それと、どういう関係があるのでしょうか。これまで、人を神の御国に入らせないものについて話してきました。肉の行ないは、人を神の御国に入らせないものです。イエスが昇天されたとき、神は世にこうあかしされたのです。「ここに正しく生きた人がおり、その義によってこの人が天の御国に入ることが認められた。」つまり神は、あなたが入ることができるのはこの義によってです、と言われているのです。天の御国に入るための義はこれですよ、と言われています。ある日イエスは弟子たちに、「もしあなたがたの義が、律法学者やパリサイ人の義にまさるものでないなら、あなたがたは決して天の御国には入れません。(マタイ5:20)」と言われました。弟子たちにとって、それは何という衝撃だったことでしょうか。というのも、律法学者やパリサイ人は、義であることで知られていたからでした。この人たちが、いつも「ぶよは、こして除くが、らくだはのみこんでい(訳者注:マタイ23:24参照。転じて、大事を見過ぎて小事にこだわるの意。)」た人たちだったからでした。この人たちはいつも、自分の義を人々に示すことに非常に注意していた人たちだったのです。彼らは、律法の一点一画のすべてを彼らの解釈にのっとり守り、また多くの場合、物理的に守ることに限っては、律法が意図していたこと以上のことをしていました。もちろん内側では、心の態度によっていつも律法を破っていましたが、彼らは正しいことで知られていたのです。そして、イエスは、「もしあなたがたの義が、律法学者やパリサイ人の義にまさるものでないなら、あなたがたは決して天の御国には入れません。(マタイ5:20)」と言われたのです。サタンは偽りを信じないでください。サタンは偽りを言って、「神は、基本的に誠意で善意がある人ならどんな人も天国に入れてくださるのだ。」と、どうにかしてあなたを説得しようとしています。「神は、悪を我慢してくださるのだ。天の御国の中で、悪を許されるのだ。ただ、余り悪すぎなければ大丈夫なのだ。神が何らかの特別な摂理をあなたに与えてくださり、肉に従って生きることを許されて、それでも御国に入ることを許してくださる。」もう一度リストを読み返し、警告を読み返してください。「こんなことをしている者たちが神の国を相続することはありません。」です。イエスは、神が受け入れてくださるような正しい生き方をし、その模範を示されました。イエスが昇天されることによって、神は、「これだ。これが、天国に入る基準だ。」とおっしゃっ

ています。律法学者やパリサイ人の義にまさるもの、それ以下の義はどのようなものでも、あなたが天の御国にはいるのを認めません。「チャック、それなら私たちみんなに対して、門戸を閉じることになるのではないか。」とおっしゃるかもしれません。そうです。みなさん自身の義や努力に関してはそうです。自分の善行、善意や、自分の努力を根拠にして天国に行くことができると考えているなら、あきらめてください。決して、入ることはできません。私たちが神の御国に入ることのできる唯一の道は、イエスを信じ、信頼することによって与えられる、イエス・キリストの義による道です。神が私たちを天の御国に受け入れてくださるような奉仕や義務を、神に対して果たすことは一切できません。イエス・キリストを信じる信仰によってしか、天の御国の入り口を見つけることができません。

三番目に聖霊が世に誤りを認めさせるのは、さばきについてです。イエスは言われました。「さばきについてとは、この世を支配する者がさばかれたからです。」先ほど、黙示録にあるいわゆる「大きな白いさばきの御座」について読みました。聖霊は、世にこのさばきを認めさせるのではありません。なぜなら、この世を支配する者がさばかれたからです。いつ、どこで、この世を支配する者がさばかれたのでしょうか。イエス・キリストの十字架で、サタンの力は打ち破られました。地上におけるサタンの支配力が休止しました。パウロは、コロサイ人への手紙2章13節で、このように私たちに教えています。「あなたがたは罪によって、また肉の割礼がなくて死んだものであったのに、神は、そのようなあなたがたを、キリストとともに生かしてくださいました。それは、私たちのすべての罪を赦し、いろいろな定めのために私たちに不利な、いや、私たちを責め立てている債務証書を無効にされたからです。神はこの証書を取りのけ、十字架に釘づけにされました。神は、それにおいて、あるいは、十字架において、すべての支配と権威の武装を解除してさらしものとし、彼らを捕虜として凱旋の行列に加えられました。(訳者注:2:15については、「それにおいて、あるいは、十字架において」の部分は英語の直訳。新改訳脚注参照。)」ですから、十字架でイエス・キリストは、闇の支配と権威に対して勝利をおさめられたのです。そして、ご自身の復活において、この勝利を公に示されました。イエス・キリストは、私たちに敵対する闇の支配と権威を打ち負かされ、その武装を解除されました。イエス・キリストは、それらに対し、十字架上で勝利をおさめられました。したがって、この世を支配するものはさばかれました。かつてこの世を支配する者が持っていた権力や権威は、イエス・キリストの御力によって征服されました。さて、あなたがイエス・キリストに属し、御霊のうちに歩んでいるなら、あなたは闇の支配と権威に対し、力を持っているのです。世は依然としてサタンの支配下にあります。しかし、聖霊が世にこうあかしされています。もはや罪につながれている必要はない。もはや闇の敵の捕虜となり、拘束されている必要はない。自由になることができます。イエスが鎖を壊してくださいました。そして、イエスは、サタンがあなたを捕らえている鎖を壊してくださいます。この世を支配する者はさばかれました。完全に打ち負かされました。サタンは、不法に行使している権力と権限によってしか人を拘束できません。イエスは、世の罪のために死んでくださいました。みなさんは、罪の力から解放されることができるのです。もはや罪の中に生きなくてもよいのです。これが聖霊が世にあかしされていることであり、この方は、人をイエス・キリストと神の御国に引き寄せられます。

ですから、聖霊のあかしが三つあります。罪についてというのは、人々がイエスを信じないからです。義についてというのは、イエスが義の基準で、もし天の御国に入る希望を少しでも持ちたいなら、その基準に達しなければならないからです。キリストの義を見ると、自分では達成できないことに気づきます。あなたは、信仰による神のそなえに結び付けられています。神は信じる罪人を義と認めてくださいます。それから聖霊は、みなさんがもはや罪に支配されなくてもよいことをあかしされます。それは、この世を支配する者がさばかれたからです。ですから罪は、もはやあなたの死ぬべきからだを支配しません。パウロはローマ人への手紙6章で、「このように、あなたがたも、自分は罪に対しては死んだ者であり、神に対しては私たちの主キリスト・イエスにあって生きた者だと思いなさい。ですから、あなたがたの死ぬべきからだを罪の支配にゆだねて、その情欲にしたがってははいけません。(6:11-12参照)」と言いました。これは命令です。「あなたがたの死ぬべきからだを罪の支配にゆだねて、その情欲にしたがってははいけません。また、あなたがたの手足を不義の器として罪にささげてはいけません。(6:12-13)」つまり、これはからだです。あなたがたのからだの部分、手足を不義の器として罪にささげてはいけません。むしろ、あなたがた自身を神にささげなさい。そして、その手足を義の器として神にささげなさい。「というのは、罪はあなたがたを支配することがないからです。なぜなら、あなたがたは律法の下にはなく、恵みの下にあるからです。(6:14)」罪はあなたがたを支配することがないからです。サタンがさばかれたからです。その力は打ち破られました。そして、あなたがたはイエス・キリストによって、闇の力に対し勝利することができます。これが、あなたの心と世に対する聖霊のあかしです。自由にされていることを私は神に感謝します。

聖霊: 悪を引き止める方 (#3054)

Holy Spirit: Restrainer of the evil

罪について、義について、さばきについて誤りを認めさせる、世における聖霊の働きは、人をイエス・キリストに引き寄せます。今晚は、世における聖霊の働きのテーマを続けたいと思いますが、悪を引き止める力としての聖霊を見てゆきます。

サタンが強いられて地の支配を主に渡す前に、戦わなければならない最終大戦争があることを聖書は教えています。現時点でサタンは、この最終的な争いのために力を結集しています。サタンは、自分が勝利すると考えて自分を欺いている、と私は思います。黙示録19章19節でヨハネは言いました。「私は、獣と」これは反キリストですが、「地上の王たちとその軍勢が集まり、馬に乗った方」これはイエス・キリストですが、「とその軍勢と戦いを交えるのを見た。」ですから、主が地上に神の御国を立てられる前に、一つの最後の戦いがあるのです。黙示録13章2節でヨハネは言いました。「私の見たその獣は、ひょうに似ており、足は熊の足のようで、口はししの口のようにであった。竜は」これはサタンですが、「この獣に、自分の力と位と大きな権威とを与えた。」これは、ほどなく現れて世界の政府を乗っ取る反キリスト、罪の人、滅びの子についての言及です。サタンは、これに自分の力を授け、自分の位と大きな権威とを与えます。もともと地とそれに満ちているものは、主のものでした(1コリント10:26参照)。主が創造されました。神が人間を創造し地上に置かれたとき、神は、「われわれは人を造ろう。そして彼らに地を支配させよう。(創世1:26参照)」と言われました。それで、神は人間に地上の支配、統治をお与えになりました。しかし、人間はその支配をサタンに引き渡しました。それは、神の命令への不従順と、またこれは本質的には、禁断の実を食べなさいというサタンの提案への従順でしたが、この二つの行為により引き渡したのです。パウロは、ローマ人への手紙6章16節で、「あなたがたはこのことを知らないのですか。あなたがたが自分の身をささげて奴隷として服従すれば、その服従する相手の奴隷であって、あるいは罪の奴隷となって死に至り、あるいは従順の奴隷となって義に至るのです。」と述べています。アダムが自分の身をささげてサタンに服従した時、アダムはサタンの奴隷となり、サタンは地の支配を得ました。アダムは、神の権威と神の命令に逆らいました。これは、神の命令に対する不従順と反逆であり、またサタンの提案に従順になるという二つの行為でした。人間は死に至る罪の奴隷となりました。そして、サタンは地の支配、統治を得ました。

さて、神は世を神のもとに贖うために御子をお遣わしになりました。サタンがイエスを高い山に連れてゆき、この世のすべての国々とその栄華を見せて、イエスに対し、もしひれ伏して自分を拝むならこれを全部差し上げます、と言いました。サタンは、これらは自分のものであり、自分が望む人にそれを与えることができるのだ、と誇ったのです。さて、これは黙示録13章2節に表されています。そこで、竜つまりサタンが反キリストである獣に自分の力と位と大きな権威とを与えているのがわかります。サタンは、これは自分のものだ。自分が望む人にそれを与えるのだ、と言いました。イエスは、それに議論を挟まれませんでした。イエスは、サタンがこの世の君であることを認められ、サタンのことをそうお呼びになりました。しかしイエスは、世を神のもとに贖うために来

られました。そして、十字架上の死によって、イエスは私たちの贖いの代価を支払われました。私たちが、「むなしい生き方から贖い出されたのは、銀や金のような朽ちる物にはよらず、傷もなく汚れない小羊のようなキリストの、尊い血によったのです。(1ペテロ1:18-19)」ですから、イエスは、十字架上のご自分の死によって、この世の贖いの代価を支払われました。しかし、ヘブル人への手紙2章8節で、この手紙の筆者はこう述べています。「『万物をその足、』これはイエスの足のことですが、「に従わせられました。』万物を彼に従わせたとき、神は、彼に従わないものを何一つ残されなかったのです。それなのに、今でもなお、私たちはすべてのものがこの方に従わせられているのを見てはなりません。(訳者注:「この方に」は、新共同訳からの引用。欽定訳ではunder himとなっている。新改訳では「人間に」となっている。)」私たちはまだ見てはなりません。ご自身が購入されたものに対し、まだ請求権を行使されていません(訳者注:「贖う」は「買い戻す」という意味であり、チャックはここで、「購入する」と言い換えています。)。それまでの間、これについては後でもっと取り扱うつもりですが、それまでの間、神は私たちに約束の聖霊をもって証印を押されました。聖霊は、いわゆる頭金です。神が買われたものを贖われるまでの、私たちが御国を受け継ぐことの保証(earnest)です(エペソ1:13、14参照)。主は私を贖ってくださいました。私は主のもので、主はまだ、請求権を行使して私を天国に連れていかれていません。しかしそれまでの間、主は私に聖霊を与えてくださっています。それは、神が私を十分にまったく贖われ、請求権を行使されるその意図が本気(earnest)であることを示すためです。ですから、神は万物をイエスに従わせられましたが、私たちはまだ全てが従っているのを見ません。イエスはまだ、ご自分が持つおられる統治の権限を行使されていません。

さて、黙示録5章では、イエスがそれを行使されているのを見ます。イエスが来られ、御座にすわっておられる方の右の手の巻き物を取られました。そして、イエスがそれにふさわしい方であることが宣言されています。しかし、これは将来の出来事であって、まだ私たちは世がイエスに従っているのを見ていません。実際、今現在でも世は悪い者(の手中)にあります。神は理由と目的があって、サタンが今の悪の世界の制度を支配するままにしておられます。サタンが支配しているこの間に、神に仕え、神とともに生きることを願う者は、イエス・キリストによって罪の力から贖われ、聖霊によって証印を押され、聖霊から力を受けて主イエス・キリストに従う生き方をすることができるのです。ですから、その日を待ち望んでいるのです。しかし私たちは、今でもなお、贖われていない世界の中に生きています。自分は贖われているけれども、今でもなおサタンの支配下にある贖われていない世界に生きていますので、私たちは霊的戦いの最中にいるのです。そして、それが日に日にはっきりして来ています。サタンは、最後の戦いのために力を結集しています。そして、サタンはこれまでになく自分の力を現わしています。サタンは、この地からイエス・キリストの影響をすべて滅ぼそうとしています。したがって、クリスチャンを滅ぼし、クリスチャンの正義の影響を滅ぼそうとしています。私たちはまさに戦いの中にいるのです。イエスは弟子たちに、「あなたがたは地の塩です。(マタイ5:13)」と言われました。あなたがたはきよくする影響力を与えなさい、あなたがたは腐敗を防ぎなさい、と言われたのです。「もし塩が塩けをなくしたら、何によって塩けをつけるのでしょうか。もう何の役にも立たず、外に捨てられて、人々に踏みつけられるだけです。」私

私たちは激しい霊的戦いの中にいます。近代技術は、テレビを通して、ラジオを通して、世のやみを私たちの家庭にもたらしめています。そして、イエス・キリストの教会が、世との妥協によって極度に弱められています。イエスがフィラデルフィヤの忠実な教会に手紙を書いた時に、…これは終わりの日の真の教会ですが、…イエスは、「あなたには少しばかりの力があって(黙示3:8)」と言われました。それだけでした。私たちは、正義のために大きな力や勢いがありません。神がそうしてくださったら良かったのですが…。ただ教会の中にさえ、パン種があまりにもたくさんありました。世に関して言うならば、教会の立場は、余りに多くの妥協のために極端に弱まりました。

地上の全ての政府を、一人の者の支配のもとに置くことがサタンの戦略です。聖書ではこの者が罪の人(訳者注:テサロニケ人への手紙第二章3節の新改訳の脚注参照。新改訳では「不法の人」となっている。)、滅びの子と言われています。サタンは、その力と地位と権威をこの一人の者に与えます。ですから、サタンの器としてこの者は世界を支配し、世は、この者によってサタンを拝みます。聖書で、この者は様々な名前と呼ばれています。ダニエルと黙示録では、一般的に「獣」という名前が使われています。ヨハネはこの人を「反キリスト」と言及しています。パウロは、「罪の人、滅びの子」と呼んでいます。

さて、この者はサタンから力を授けられているので、あらゆる超自然的なしるしと不思議をすることができ、それによって世は驚きます。奇跡的なことをすることができます。マタイの福音書24章24節で、イエスは、「にせキリスト、にせ預言者たちが現れて、できれば選民をも惑わそうとして、大きなしるしや不思議なことをして見せます。」と告げられました。テサロニケ人への手紙第二章9節で、パウロは、「不法の人(訳者注:英語では単にEven himとなっている。)」これは反キリストのことです。「…の到来は、サタンの働きによるのであって、あらゆる偽りの力、しるし、不思議がそれに伴い(訳者注:英語では、「あらゆる力、しるし、偽りの不思議がそれに伴い」となっている。)…」サタンがその力をこの者に与えます。ですから、この者はあらゆる力、しるし、偽りの不思議をもって到来します。黙示録13章11節で、反キリストとともに働くにせ預言者について語られているところで、このように書かれています。「また、私は見た。もう一匹の獣」これがにせ預言者です。「…が地から上って来た。それには小羊のような二本の角があり、竜のようにものを言った。この獣は、最初の獣がもっているすべての権威をその獣の前で働かせた。また、地と地に住む人々に、致命的な傷の直った最初の獣を拝ませた。また、人々の前で、火を天から地に降らせるような大きなしるしを行なった。(13:11-13)」ダニエルは、このように私たちに語っています。「彼の力は強くなるが、彼自身の力によるのではない。」それは、サタンの力、やみの力によるのです。「彼は、あきれ果てるような破壊を行ない、事をなして成功し、有力者たちと聖徒の民を滅ぼす。彼は悪巧みによって欺きをその手で成功させ、心は高ぶり、不意に多くの人を滅ぼし、君の君に向かって立ち上がる。しかし、人手によらずに、彼は砕かれる。(ダニエル8:24-25)」

この者は、神に対する甚だしい敵となります。神を冒瀆する言葉を語ります。ダニエル書7章25節です。「彼は、いと高き方に逆らうことばを吐き、いと高き方の聖徒たちを滅ぼし尽くそうとする。彼は時と法則を変えようとし、聖徒たちは、ひと時とふた時と半時の間、」つまり3年半の間「…彼の手にゆだねられる。」ダニエル書11章36節です。「この王は」反キリストのことです。「…思

いのままにふるまい、すべての神よりも自分を高め、大いなるものとし、神の神に向かってあきれ果てるようなことを語り、憤りあるいは大患難時代「…が終わるまで栄える。定められていることが、なされるからである。」テサロニケ人への手紙第二2章4節では、この罪の人、滅びの子についてこのように語られています。「彼は、すべて神と呼ばれるもの、また礼拝されるものに反抗し、その上に自分を高く上げ、神の宮の中に座を設け、自分こそ神であると宣言します。」黙示録13章5節です。「この獣は、傲慢なことを言い、けがしごとを言う口を与えられ、42か月間」3年半です。「…活動する権威を与えられた。そこで、彼はその口を開いて、神に対するけがしごとを言い始めた。すなわち、神の御名と、その幕屋、すなわち、天に住む者たちをののしった。」

そしてまた、この者はユダヤ人たちに戦いをいどむと書かれています。その時には、ユダヤ人たちは、聖徒、神に選ばれた者として知られています。教会はすでにその時には、携挙によって引き上げられています。それについては、もう少しで取り扱います。「彼はまた聖徒たちに戦いをいどんで打ち勝つことが許され、…」黙示録13章7節です。「…また、あらゆる部族、民族、国語、国民を支配する権威を与えられた。」ダニエル書7章21節です。「私が見ていると、その角は、聖徒たちに戦いをいどんで、彼らに打ち勝った。」さて、ペテロがイエスがメシヤであり、生ける神の御子であると告白したとき、イエスはマタイの福音書16章で教会について話され、こう言われました。「わたしはこの岩の上に教会を建てます。ハデスの門もそれには打ち勝てません。(16:18)」イエス・キリストの教会は、弱くても打ち勝ちます。聖霊の力によって、教会は打ち勝ちます。しかし、反キリストが現れ、聖徒たちに戦いをいどむとき、反キリストは聖徒たちを打ち負かし、聖徒たちに打ち勝ちます。ですから、これらの聖徒たちは教会ではないことを示しています。むしろ彼らは、多くの場合、患難時代の聖徒と呼ばれている人たちです。彼らの大部分は、大患難時代にイエス・キリストを受け入れるユダヤ人です。

反キリストが全土を支配します。黙示録13章7節です。「彼はまた聖徒たちに戦いをいどんで打ち勝つことが許され、また、あらゆる部族、民族、国語、国民を支配する権威を与えられた。地に住む者で、ほふられた小羊のいのちの書に、世の初めからその名の書きしるされていない者はみな、彼を拝むようになる。(13:7-8)」ダニエル書7章24節です。「十本の角は、この国」これは、最後の諸国連邦、世界を支配する帝国であり、10人の王が連合しています。「十本の角は、この国から立つ十人の王。彼らのあとに、もうひとりの王が立つ。」これは11人目です。「彼は先の者たちと異なり、三人の王を打ち倒す。彼は、いと高き方に逆らうことばを吐き、いと高き方の聖徒たちを滅ぼし尽くそうとする。彼は時と法則を変えようとし、聖徒たちは、ひと時とふた時と半時の間、彼の手にゆだねられる。」黙示録17章16節です。また十本の角、十人の王のことです。「あなたが見た十本の角と、あの獣とは、その淫婦」これは偽りの教会のことです。「…を憎み、彼女を荒廃させ、裸にし、その肉を食い、彼女を火で焼き尽くすようになります。それは、神が、みことばの成就するときまで、神のみこころを行なう思いを彼らの心に起こさせ、彼らが心を一つにして、その支配権を獣に与えるようにされたからです。(17:16-17)」ですから、神のみことばの成就するときまで、神は、この者、獣に国の支配権を渡すことを彼らの心に置かれたのです。

さて、この者は新しい交換制度を制定します。その制度のもとでは、通貨がなくなります。キャッ

シュレス(現金を使わない)社会を推し進めます。さて何年か前、キャッシュレス社会について話をしましたが、みな頭をかき、「えっ、キャッシュレス社会だって。そんなの聞いたことないね。」と書いていました。今、聞いたことのない人がいるでしょうか。新聞の経済面を読むと必ずや目にしますし、雑誌のフォーブスを読みますと、目にしているはずですし、キャッシュレス社会についてもっと、もっと耳にするようになっていきます。つい、先週もスーパーマーケットで「VISA、マスターチャージ、ディスカバリー・カード(訳者注:みなクレジット・カードです。)をお取り扱いします」と書かれた看板に気がつきました。すべて、そこに書かれていました。レジの列に並んでいる人も、クレジット・カードを渡す人がどんどん増えています。レジもクレジット・カードを受け付けることができ、小さいレシートが出て来て、そのレシートに署名をしています。このキャッシュレス社会に向かってどんどん動いています。聖書が教えていることに耳を傾けましょう。「また、小さい者にも、大きい者にも、富んでいる者にも、貧しい者にも、自由人にも、奴隷にも、すべての人々にその右の手かその額かに、刻印を受けさせた。また、その刻印、すなわち、あの獣の名、またはその名の数字を持っている者以外は、だれも、買うことも、売ることもできないようにした。(黙示13:16-17)」私の家の引き出しの中に小さいプラスチックがあって、水鉄砲のような形をしています。しかし、小さい針がついている小さい発信機を注入する小さい装置です。発信機は、長さ0.5インチ(約2.25センチ)幅0.1インチ(約0.3センチ)で、ものによってはそれより小さいのですが、とにかく、このように小さいチップ、マイクロ・チップ、あるいはトランスポンダーを皮膚下に挿入する装置なのです。このようなものの上にある衛星があれば、世界のどこでもこの小さい送信機を持っている人を誰でも追跡し、三角測量で測定することができます。私の家にそのような装置があります。それは、皮膚下に小さい送信機を注入するために設計された装置です。このようなマイクロ・チップには、もちろん、みなさんに関する様々な情報を搭載することができます。みなさんの銀行残高でも、何でも(笑)。私は全然ないので、心配していませんが……。当然ですが、もはや人々は現金を持ち歩かなくなっています。犯罪が手に負えなくなっているという事実のためです。理想的な解決は、コンピューター取引をすることです。私たちはもう既にやっています。私たちは今カードでそれを行っています。しかし、人の体に、右の手かその額かに、IDがついているやり方に移行するのは簡単です。物議をかもしている新しい医療保険制度ですと、彼らが話している医療保険制度を利用する権利を得るためには、みなが全国的なID(身分証明)を受け取る、IDカードか、何らかの身分を証明するものを受け取ります。今時は、子供たちにも出生時に社会保障番号が与えられており、このようなことがみな現実のものとなりつつあります。

私たちは今どの段階にいるのでしょうか。そうですね、一つの世界政府へ向けて急速に動きつつある世界を見ます。グローバル・コミュニティ(国際社会)とかグローバル経済、グローバル・バンク(金融の国際化)、グローバル・アクション(国際行動)といった言葉をしょっちゅう耳にします。私たちは、国際化世界へ向けて、一つの世界政府へ向けて進んでいます。こうした用語を常にマスコミが使っているので、このような用語がごく一般的な用語になりつつあります。世界協力の必要性という言葉を目にします。ボスニアでの戦争を終わらせるために、結束して努力する必要がありますと言います。国際軍、国際平和執行部隊を持つことが必要だと言います。アメリカ合衆国は、

必ずしも自国のためではなく、国連や国連の将軍をコントロールするために、さらに自国の軍をもっと使うようになっています。世界平和を実現するための世界的な努力を実施しているのです。近代技術によって開発された破壊兵器を考えると、人類が生存する唯一の希望は世界政府をとおしてであるとの認識があります。ここアメリカには、強い権力を持つ外交問題評議会(Councils for Foreign Relations)や三極主義者がいます。この人たちの目的は、世界政府ができることです。また、この人たちは、私たちの国を、世界的権威に協力し服従させる立場にあります。国連に対しさらに大きな力が付与されています。法律、世界的法規が、国あるいは独立国家の法規にとって代わりつつあります。現在のように犯罪率が増加しており、手に負えなくなっていますので、唯一効果的に強盗、麻薬取引をすべてストップする方法は、貨幣をなくしてしまうことです。政府は、税を徴収することができず、毎年何十億ドルもの損失を被っていると推定されています。ですから、売買のすべての取引がコンピューター化されたID番号でなされるのであれば、みなさんが買ったか売ったかすべてのものを追跡することができます。そうすれば、お金を盗むこともなくなります。それは、お金の価値がなくなるからです。私の事務所に5000億ドル紙幣があります。それは、これまでに発行された紙幣の中で一番単位の大きい紙幣です。5000億ドルです。むしろそれは、セルビアの紙幣ですが……。固有の価値はないのですが、稀少なため収集されているものの一つになっています。持っておこうと思っています。今は8ドルほどの価値があります。これまでに発行された紙幣の中で一番単位の大きい紙幣なので、収集貨幣となっています。ですから、こういったものの収集家の間で人気が出ているのです。ドイツでは収集貨幣となっていて、今は8ドルほどの価値があるといわれています。銀行はキャッシュレス社会を求めています。ビジネスは、キャッシュレスへ向けて動いています。実際、私は依然現金で払う稀な人の一人で、「クレジット・カードでのお支払いですか。」と尋ねられると、「いや、現金で払います。」と言って、人を驚かせてしまいます。「まだ現金を受け付けてもらえますか。」と尋ねますと、「ええ、でも……」という調子です。

世界制度、世界政府に屈する、ほとんどすべてのお膳立てができています。交換の手段としての貨幣をなくしてしまい、キャッシュレス社会に移行するお膳立てができているのははっきりしています。それは、どの週でも起こり得そうです。朝刊を拾い上げて、すべての現金を引き渡すのに二週間ですという記事を読むことが、いつ起こっても不思議ではありません。二週間後には価値がなくなってしまう、と。実際、現在そのような提案がなされています。5000ドル以上お金を引き渡せば、内国歳入庁(訳者注:IRS いわゆる日本の国税庁)の用紙に記入しなければいけないとかいうものです。それは、そんなに現金をもっているという理由からです。ですから、これはすでに提案されていることです。一夜のうちに起こりうるかもしれません。一夜のうちに起こるでしょう。その警告を受けることはないでしょう。ただ、ある日朝刊を拾い上げてみると、二週間で現金は撤廃されると書いてあることでしょう。すべてのお金を口座に、番号のふられた口座に引き渡すのに二週間ある、と。そのお膳立てはできています。

何が遅らせているのでしょうか。この地の完全支配を望んでいる闇の力や権勢を引き止めているのは何でしょうか。ここに、やみの力を引き止め、最後の権力者が就任するのを妨げている、世における聖霊の働きがあります。テサロニケ人への手紙第二章7節です。「不法の秘密はす

で働いています。しかし今は引き止める者があって、自分が取り除かれる時まで引き止めているのです。その時になると、不法の人が現れますが、主は御口の息をもって彼を殺し、来臨の輝きをもって滅ぼしてしまわれます。(2:7-8)「ご自分が取り除かれる時まで、聖霊は悪の力を妨げ、立ちはだかり、引き止めておられるのです。そして、すぐさま悪い者が現れます。さて実際は、信者の生活の中におられる聖霊が妨げの力なのです。人によっては聖霊だけだと言いますが、そうではなく信者の生活の中の聖霊と教会なのです。この世から教会が取り去られるやいなや、もはや悪に対し引き止める力はなくなります。悪に反対する声もなくなります。教会の引き止める力はなくなります。いったん教会が取り除かれるやいなや、この罪の人が、サタンによって与えられる力を受け継ぎます。そして、世はこれまでに見たこともないほどのやみに落ちてゆきます。(一回だけで)そのようなものを二度と見なくてすむことを神に感謝します。地に対する絶対的な支配権を得て、世が最も暗くなる時に落ちてゆく、サタンの最後の攻撃を引き止めているのは、教会における聖霊のご臨在だけなのです。

不法の秘密はすでに働いています(2テサロニケ2:7)。それが見えます。罪の腐敗の効果が見えます。いたる所にそれが見えます。反キリストの霊は、私たちを取り巻いています。イエス・キリストは、あざけられ、軽蔑され、ばかにされ、あざ笑われています。政府の人たちの間で、カルトをしている人の定義がなされています。聖書を無謬の神のことばと信じ、イエスが再臨すると信じている人です。もし、みなさんがこのことをすべて信じているのであれば、みなさんは、カルトをしている人の分類に入ります。そして、そのような信条のために、みなさんには、宗教狂信者というレッテルが貼られます。この用語には注意が必要です。というのは、世界の絶対支配の動きに対する最大の障害力は、宗教狂信者だと彼らが認めているからです。多くの宗教団体が宗教狂信者と呼ばれているのを聞きます。宗教狂信は、今の世界で最大の悪であるという烙印を押されています。平和の最大の脅威の一つは宗教狂信者から来る。新しい時代を阻んでいるのは宗教狂信者だ、と言います。そして、阻むものが無くなるように、宗教狂信者を根絶やしにする動きがあります。宗教狂信者のかなりの人を取り除くための総合基本計画(マスタープラン)があります。そうになると、悪の力が最盛期をむかえるのです。しかし、抑制無き悪は長続きすることができません。抑制無き悪のある社会は、どのような期間でも存在することができません。ですから、いったん教会の中の聖霊の力が取り除かれると、もはや引き止めるものがなくなり、悪の力がとってかわると、人類の歴史で最も暗い時代にすぐさま落ちてゆきます。それは、全く長くは続きません。世について言うならば、底知れぬ所へ垂直落下です。新生したクリスチャンに強力な戦いをしてきた、長年マスコミの脚光を浴びてきた権力者がいます。スティーブ・アレン、カール・セーガン、エド・アズナー、ノーマン・リアーは、多くの信者の信仰をくつがえそうとし、聖書を信じる信者が良識を奪われた者であるかのように扱ってきました。悪の力は世を完全に支配しようと強く願っていますが、まだそのようにできていません。それは、教会の中の聖霊が引き止めておられるからです。今日、聖霊が今の世界で引き止める力となり、増強され、地をうめ尽くさんとしている悪の潮流を押さえておられるのです。

教会が去ってしまった後の終わりの日に、神がユダヤ人に二人の証人をお遣わしになる、と聖

書は教えています(黙示11章参照)。その二人は、モーセとエリヤである可能性が強いです。この二人がどのように世に憎まれるかが、書かれています。また、この二人の証人のうちのいずれかでも人々が害を加えようとするのであれば、火が彼らの口から出て、滅ぼし尽くします。ですから、「これら神の証人に害を加えようとする者があれば、必ずこのように殺される。(黙示11:5)」と聖書に書かれています。おぼえていますか。以前エリヤが地上にいたときに、王が隊長と部下50人を遣わし、エリヤを捕虜として連れて来るようにしたとき、隊長は、「神の人よ。降りて来なさい。王があなたを捕らえるために、私たちを遣わされました。(以下2列王1章参照)」と言いました。エリヤは言いました。「もし、私が神の人であるなら、天から火が下って来て、あなたと、あなたの部下50人を焼き尽くすだろう。」すると、天から火が下って来て、彼と、その部下50人を焼き尽くしました。王はまた、もうひとりの隊長とその部下50人を遣わしました。また同じでした。「神の人よ。降りて来なさい。逮捕します。」「もし、私が神の人であるなら、天から火が下って来て、あなたと、あなたの部下50人を焼き尽くすだろう。」3人目の人は、ややおりこうさんだったのです。彼はこう言いました。「私は所帯持ちです。王の命令なのです。誠にすいませんが、どうか私をあわれんでもらえませんか。」ここに(黙示11章) おいても、害を加えようとするなら、火が二人の口から出て彼らを滅ぼし、彼らは殺されます。しかし、「彼らがあかしを終えると、底知れぬ所から上って来る獣が、彼らと戦って勝ち、彼らを殺す。(黙示11:7)」と聖書に書かれています。しかし、彼らがあかしを終えなければ、そのようなことはできません。教会があかしを終えると、…私たちは聖霊の力によって、悪を引き止める力として存在しています。政治的過程によってではありません。そのようなことは、決してうまくいかないでしょう。これは霊の戦いです。霊的な武具によってしか、成功の望みは全くありません。サタンは、クリスチャンを肉の土俵に引っ張り込もうとしたりします。それはサタンが、みなさんをグーの音も出ないようにすることができるからです。イエスは、「この世の子らは、自分たちの世のことは、光の子らよりも抜けめがない。(ルカ16:8参照)」と言われました。もし、みなさんが入って行って、政治過程の中で奮闘したりするなら、気をつけてください。簀巻きにされてしまいます。神は私たちに、霊的な武具を与えてくださっています。私たちはそれらを使う必要があります。この戦いで、私たちが持っている中で本当に力のあるのは、唯一それだけです。私たちがあかしを終えるまで、神が私たちを守ってくださいます。教会があかしを終えると、主はご自分の教会を取り除き、引き止める力はなくなり、サタンが取ってかわり、やみの力が完全に支配するようになります。

黙示録5章で、天の教会が、小羊の勝利を喜び、小羊が巻き物を取り、封印を解くのに、地の所有権の封印を解くのにふさわしい者であることを宣言しているのをヨハネは見ます。6章でイエスがこの巻き物を取り、封印を解き始められると、…。注意してください。5章で教会は天にあり、小羊を喜び、小羊がふさわしいと宣言しています。それは、小羊が私たちを自分の血によってあらゆる部族、国語、民族、国民の中から贖い、神の王とし、祭司とし、地上を治めるようにしたからです。しかし6章で、イエスが、地の所有権の封印を解き始められると、第一の封印が解かれると、反キリストが、勝利の上にさらに勝利を得ようとして出て来ます。世における聖霊の力は、反キリストが支配力を掌握するのを引き止めます。教会の中の聖霊の力が取り除かれるやいなや、

やみの力が入り込みます。ですから、今の私たちの生活の中で、聖霊はとても重要な要因となっております。聖霊は、進んでその支配をやみの力に引き渡されます。やみの力は、今、支配しているのです。計画全体がなぜ最高点に達することができないのか、彼らはきちんと理解できていないのだと私自身は思います。彼らはやろうとしていますが、彼ら自身は理解していないのではないか、と……。いや、彼らは宗教狂信者が世界平和を阻んでいると話すようになってきていますので、認識し始めているのです。何なのか、認識し始めているのです。しかし、彼らは動く準備ができています。私も、動く準備ができています(訳者注:いつ携挙になってもいいという意味だと思えます。)。準備はできています。主イエスよ、すぐ来てください(黙示22:20参照)。

聖霊のバプテスマ パート1 (#3055)

Baptism with the Holy Spirit Part1

今晚は、聖霊のバプテスマのテーマについて話したいと思います。聖霊のバプテスマのテーマについて3回にわたって話しますが、これは、そのパート1にあたります。

ルカの福音書3章16節は、バプテスマのヨハネについて書かれています。「ヨハネはみなに答えて言った。『私は水であなたがたにバプテスマを授けています。しかし、私よりもさらに力のある方がおいでになります。私などは、その方のくつのひもを解く値うちもありません。その方は、あなたがたに聖霊と火とのバプテスマをお授けになります。』」ヨハネの福音書1章33節では、ここでもまたバプテスマのヨハネが語っているのですが、イエスについての証言をこう述べました。「私もこの方を知りませんでした。しかし、水でバプテスマを授けさせるために私を遣わされた方が、私に言われました。『聖霊がある方の上を下って、その上にとどまられるのがあなたに見えたなら、その方こそ、聖霊によってバプテスマを授ける方である。』」ですからヨハネは、自分のあとに来る、自分よりもさらに力のある方で、聖霊と火とのバプテスマをお授けになる方について預言したのでした。そしてここで、ヨハネはイエスについて証言し、神の御霊がその方の上を下って、その上にとどまられるのを見るまで、自分もこの方を本当には知らなかった、と告げています。というのも、水でバプテスマを授けさせるために私を遣わされた方が、「聖霊がある方の上を下って、その上にとどまられるのがあなたに見えたなら、その方こそ、聖霊によってバプテスマを授ける方である。」と言われたからでした。使徒行伝1章4節からの箇所ですが、イエスは、弟子といっしょにいるとき、「彼らにこう命じられた。『エルサレムを離れないで、わたしから聞いた父の約束を待ちなさい。ヨハネは水でバプテスマを授けたが、もう間もなく、あなたがたは聖霊のバプテスマを受けるからです。』」

これらの箇所から、私たちは何を学ぶことができるのでしょうか。まず第一に、「聖霊のバプテスマ」と正確に呼ぶことができる体験があるということです。ヨハネは、「私よりもさらに力のある方がおいでになります。その方は、あなたがたに聖霊と火とのバプテスマをお授けになります。」と言いました。そして、イエスがその方であると証言しました。これは、聖霊のバプテスマは、新生とは異なり、別個のものであることを私たちに教えています。御霊によって生まれることと、聖霊のバプテスマは全く別のものであるのです。ヨハネの福音書20章にはこのように書かれています。「イエスが弟子たちに息を吹きかけて言われた。『聖霊を受けなさい。(ヨハネ20:22参照)』この時点において、弟子たちは聖霊の内住を自分たちのうちに受けました。イエスが彼らに息を吹きかけて「聖霊を受けなさい。」と言われた行為は単なる象徴であった、と言って異論を挟む人がいるのを知っています。単なる象徴的行為でしかなかったという彼らの言明は、この体験についての彼らの解釈にしかすぎないと、私は提案させてもらいたいのです。しかし、このような解釈は、全く聖書の裏付けを欠くものです。イエスが彼らに息を吹きかけて「聖霊を受けなさい。」とおっしゃったときに、彼らが聖霊を受けなかったと示している箇所は聖書の中にはありません。実際、イエスがあなたに息を吹きかけ、「聖霊を受けなさい。」とおっしゃったのに、聖霊を受けないなど、私には信じがたい

ことです。この人たちが、単なる象徴的行為でしかなかったと言う理由は、新生と聖霊のバプテスマは一つで、同じ体験であるという前提をもった立場を、この人たちがとっているためです。しかし、イエスが弟子たちに息を吹きかけられて、それ以降は、聖霊が彼らに内住しておられました。ですが、使徒行伝1章4節で、イエスは弟子たちに、「エルサレムを離れないで、父の約束を待ちなさい。ヨハネは水でバプテスマを受けたが、もう間もなく、あなたがたは聖霊のバプテスマを受けるからです。(使徒1:4-5参照)」言われました。ここでイエスは、二つの異なるバプテスマについてお話になり、また二つの異なるバプテスマがあることを認めておられるのです。バプテスマのヨハネによる水のバプテスマと、その後もう間もなく弟子たちが受けることになっていた聖霊のバプテスマです。

さて、コリント人への手紙第一12章13節で、使徒パウロは、「私たちはみな、一つのからだとなるように、一つの御霊によってバプテスマを受けました。(1コリント12:13参照)」と告げています。「一つのからだとなるための、一つの御霊によるバプテスマ」であることに注目して下さい。この場合は、あなたがキリストのからだになるようにバプテスマを受けているのは御霊です。しかし、あなたに聖霊のバプテスマを授けるのは、イエスです。聖霊は、あなたがキリストのからだになるようにバプテスマを受け、イエスは、あなたに聖霊のバプテスマを授けてくださいます。聖霊のバプテスマが新生と別個であることを否定する人は、たいていエペソ人への手紙4章から引用してきません。その箇所で、パウロは、教会に御霊の一致を保つように勧めています。そこで、パウロは、御霊は一つ、主は一つ、信仰は一つ、バプテスマは一つです、と宣言しています(エペソ4:4-5参照)。彼らは、たいていこの二つの聖書の箇所をまとめて、バプテスマは一つ。そして、一つの御霊によってみなキリストのからだとなるバプテスマを受ける、とします。パウロが、エペソの教会に御霊の一致を保つ努力をするようにと教え、主は一つ、信仰は一つ、バプテスマは一つだと語ったとき、パウロが言及していたのは、キリストのからだとなるバプテスマは一つだけであり、キリストのからだは一つしかないということでした。今日起こっていて見ることができる、私たちが教派の壁を築き、各教派が霊的なことに関して自己の排他性を主張していることに対し、パウロが警告していたのだと私は思います。ですからもし、あなたがミズーリ・シノッド・ルーテル教会に所属したいのであれば、ミズーリ・シノッド・ルーテル教会は、「あなたはバプテスマを受けましたか。」と尋ねます。すると、あなたは、「ええ、はい。コロナ・デルマー(訳者注:カルバリー・チャペル・コスタ・メサがバプテスマを授ける場所)でバプテスマを受けました。」と答えます。すると、彼らは、「いや、それは受け付けることができません。ルーテル教会の会員としてバプテスマを受けたのでないのであれば、この教会の会員にはなれません。」と言います。それで、あなたはクラスを受講して、ルーテル教会の人にバプテスマを授けてもらわなければなりません。バプテスト教会やその他の教会のバプテスマは受け付けません。自分のところの教会のものだけしか受け付けません。チャーチ・オブ・クライストの場合も同じことが言えます。ルーテル教会でバプテスマを受けていたとしても、チャーチ・オブ・クライストはそれを受け付けません。あるいは、長老教会やバプテスト教会でバプテスマを受けていたとしても、チャーチ・オブ・クライストは受け付けません。チャーチ・オブ・クライストはチャーチ・オブ・クライストでのバプテスマしか受け付けません。しかし、あな

たが教会を変わりたいと思ったとします。たとえば、ジーザス・オンリー・フェローシップの会員になりたいとします。彼らは、イエスの名によってのみバプテスマを受けたのでなければ、あなたの受けたバプテスマは有効ではないと言います。ですから、みな勝手に制限を設定し、私たちによってバプテスマを受け、私たちの教会の会員にならなくてはいけないと言うことは、まさにパウロが警告し、警戒しようとしていたことそのものでした。パウロは、「いや、いや。からだは一つ、キリストのからだです。バプテスマは一つです。」と言っているのです。自分たちのグループのバプテスマを義務付けるグループの代わりに受け入れてもらうために、そのようなグループをみな回って、バプテスマを受けたりしません。それは、キリストのからだを分裂してしまうことになります。そのようなことに対して、パウロは反対意見を述べているのです。

私たちは水のバプテスマがあることを知っています。水のバプテスマを授けてくれるのは、たいてい教会の牧師です。教会の牧師がバプテスマを授ける人で、水は、あなたがバプテスマを受ける媒体です。聖霊のバプテスマがあります。イエスが、バプテスマを授ける方です。ヨハネは、「その方こそ、聖霊によってバプテスマを授ける方である。(ヨハネ1:33)」と言いました。そして聖霊が、あなたの浸礼の媒体です。あなたが水で浸されたのと同じように、聖霊のバプテスマの考え、アイデアの背後には、聖霊の浸されることがあります。

さてギリシャ語では、聖霊との関係を表す前置詞が3つあります。渡される前の夜、イエスが弟子たちにお話になったとき、これはヨハネの福音書14章ですが、弟子たちが心を騒がしていたので、イエスは弟子たちを励まされました。それは、イエスが去ってゆく、イエスが行く所に弟子たちが来ることができないと言われたので、弟子たちは気が動転していました。イエスは、弟子たちを励まし、慰めようとされ、イエスは父にお願いし、父がもうひとりの助け主を与えるようになり、その方は真理の御霊で、永遠にその人とともに住みます、と言われました。イエスが聖霊についてお話になったとき、「世はその方を見せず、知りもしないからです。しかし、あなたがたはその方を知っています。その方はあなたがたとともに住み、あなたがたのうちにおられるからです。(ヨハネ14:17)」とイエスは言われました。そこで聖霊は、「あなたがたとともに住む」と言われています。聖霊はあなたの傍らにおられます。ギリシャ語の前置詞はパラです。しかし聖霊は、「あなたがたのうちにおられる」ようになります。聖霊は、あなたの内に入ってこられます。そして、聖霊は、あなたの内に住むようになられます。ヨハネの福音書20章で、イエスが弟子たちに息を吹きかけ、「聖霊を受けなさい。」と言われたときに起こったことは、そのことだと私は思います。その時に、聖霊が弟子たちの中に住むようになられたのだと私は思います。

さて、あなたが回心する前、あなたに罪を認めさせたのは、聖霊でした。イエス・キリストがあなたの罪を処理することができると啓示して下さったのは、聖霊でした。イエスを自分の主として受け入れることを確信させて下さったのは、聖霊でした。イエスを自分の主として受け入れた瞬間、聖霊があなたのうちに入って下さり、内住されるようになりました。しかし、これは聖霊のバプテスマではありません。聖霊があなたの中に内住されると、あなたをイエス・キリストの似姿に変えて下さるといふ、すばらしい働きを始められます。これについては、後に、イエス・キリストの似姿に変えて下さるといふ、信者の生活における聖霊の働きについての学びにおいて勉強します。しかし、神

の御霊が、私の中で働いて下さっているのです。そのような働きは、すべての神の子のうちにあります。聖霊によってでなければ、だれも「イエスは主です。」と言うことはできません(1コリント12:3)。パウロは、「あなたがたのからだは、あなたがたのうちに住まれる神から受けた聖霊の宮であることを知らないのですか。(1コリント6:19参照)」と言いました。すべての神の子のうちには、聖霊がおられます。「あなたがたは、もはや自分自身のものではありません。あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。(1コリント6:19-20参照)」「神の御霊を持たない人は、神のものではありません。(ローマ8:9参照)」すべての新生したクリスチャンの中には、聖霊が内住されます。あなたは聖霊によって新たに生まれ、イエス・キリストのからだになるのです。しかし、すべての信者が聖霊のバプテスマを受けるわけではありません。次の学びでは、イエス・キリストを信じた時点で聖霊のバプテスマを受けなかったが、信じた後の経験であったというクリスチャンが多くいることについて見ます。場合によっては、何日も後、場合によっては、何週間もたってから、場合によっては、何年もたってからの場合もあります。次の学びでは、こういった場合について見てゆきます。

しかし、二つの前置詞があります。「その方はあなたがたとともに住み、あなたがたのうちにいらっしゃるからです。」今晚、ここにおられる新生したクリスチャンの方はみな、この二つとも経験しています。聖霊はあなたとともにおり、罪を認めさせ、あなたをイエス・キリストに導かれます。あなたがイエス・キリストのもとに来た瞬間に、聖霊はあなたの内に住まれます。しかし、再び使徒行伝1章で、イエスが弟子たちにエルサレムで待つように、「エルサレムを離れないで、父の約束を待ちなさい。」と命じられた時、イエスは弟子たちに、「聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。」と言われました。ここでイエスは、3つ目のギリシャ語の前置詞を使っておられます。それはエピです。「聖霊があなたがたの上に(upon)降る」、あるいは、「聖霊があなたがたの上に(over)臨まれる」です。私は個人的には、「聖霊があなたがたからあふれ流れる」というのが好きです。このエピ、聖霊のバプテスマは、奉仕のために信者に力が与えられることです。聖霊が内住されることで、私がイエスに似た者になるように力が与えられます。これは内なる働きです。内側での主観的な聖霊の働きです。しかし、このバプテスマは、御霊の外面的な働きです。聖霊が私からあふれ流れることです。これはデユナミスであり、力強い神の御霊が私の生活を通して、私の回りにいる人にふれることです。

聖霊があなたとともにいて下さること、パラと、聖霊があなたの内に住んで下さることは、まったく別のものです。しかし、聖霊があなたの上に降る、または聖霊があなたの上に臨まれることは、さらに異なります。ここ説教壇の上に空のコップがあったとして、その隣に水のはいった大きな水差しがあったとします。そして水差しは、ここ、空のコップのとなりにあったとします。この水差しは、コップとパラに、つまり、ともにあります。もし、私が水差しからコップに水を注ぎ入れはじめれば、水はこの水差し(訳者注:コップのことか?)、この器の中にあるのです。さて、このコップに水が満たされ、水差しから水を注ぎ入れ続けると、あふれ流れ出ます。そうすると、もうコップの上に臨み、またはコップからあふれ流れ、その時点ではエピになります。ですから、最初は傍らに置くことでパラで始まり、それから中に入って、今はあふれ流れ出ているのです。聖霊も器と同じで、聖霊は

私たちとともにいてくださり、聖霊は私たちの内に住んでくださいます。しかし、聖霊が私たちからあふれ流れ出るようになるまで、あるいは、エピ、または聖霊があふれ流れ出る体験をするまで、主は私たちに聖霊を注ぎ続けて下さいます。多くのクリスチャンには、自分の内に聖霊がおられません。しかし、聖霊は彼らからあふれ流れ出てはいません。ヨハネの福音書7章37節ですが、これも後の学びで取り扱います。「さて、祭りの終りの大いなる日に、イエスは立って、大声で言われた。『だれでも渇いているなら、わたしのもとに来て飲みなさい。わたしを信じる者は、聖書が言っているとおり、その日との心の奥底から、生ける水の川が滝のようにほとぼしり流れ出るようになる。』(ヨハネ7:37参照)」そして、ヨハネは、イエスが御霊のことを言われたのである、と言っています。イエスは、この3つ目の関係について話されているのです。その人かたあふれ流れ出て、生ける水の川が滝のようにほとぼしり出て、御霊があふれ流れ出で、あなたの生活を通して、御霊の真の力強さを現われます。もちろん、神は私たちが御霊で満たされることを望んでおられます。実際、それは聖書が命じていることです。エペソ人への手紙で、パウロは、「また、酒に酔ってははいけません。そこには放蕩があるからです。(5:18)」と言っています。そして、現在完了形を使って、「御霊に満たされなさい。」と言っています。あるいは、「御霊に満たされ続けなさい。」と言っています。また、神は私たちから御霊があふれ流れ出ることを望んでおられます。多くの方は、御霊がまったく瓶の中に詰められている状態です。生活から全く御霊が流れ出ていません。この人たちはただ、名目上のクリスチャンで満足しています。ただ参加するだけで、あふれ流れ出ることがありません。しかし、神の願いと目的とみこころは、あなたの生活から御霊があふれ流れ出ることです。

ペンテコステの日に、超自然的な現象のために人々が集まりました(以下使徒行伝2章参照)。そして、ペテロが立ち上がり、人々にイエス・キリストのメッセージを宣べ伝えました。ペテロの説教を聞いていた人の心に、聖霊が罪を認めさせました。そして人々は、栄光の主を十字架につけたことを理解し、「兄弟たち。私たちはどうしたらよいでしょうか。」と叫びました。人々は、自分の罪に、自分のしたことに気づきました。「私たちはどうしたらよいでしょうか。」と。ペテロは、「まず悔い改めなさい。」と言いました。「それぞれ罪を赦していただくために、イエス・キリストの何よってバプテスマを受けなさい。」これは二番目です。わかるでしょうか。聖霊は彼らとともにおられました。彼らは罪を認めました。聖霊が罪を認めさせたので、「私たちはどうしたらよいでしょうか。」と叫びました。ペテロは、悔い改めて、バプテスマを受けなさい、と言いました。それは、聖霊があなたの内に入ってきてくださり、内住されはじめる時です。そして、ペテロは続けてこう言いました。「そうすれば、賜物として聖霊を受けるでしょう。」これは、エピ、あふれ流れ出る、奉仕のための神の御力のすばらしい賜物です。そして、ペテロは、「なぜなら、この約束は、あなたがたと、その子どもたち、ならびにすべての遠くにいる人々、すなわち、私たちの神である主がお召しになる人々に与えられているからです。」と言いました。ですから、使徒の時代が終わったら、つまり、最後の使徒が死んだ後に、この聖霊の賜物がすたれるという考えや示唆はまったくありません。そのような考えは、全くありません。実際はその逆です。この聖霊の賜物の約束は、あなたがたと、その子どもたち、ならびにすべての遠くにいる人々、すなわち、私たちの神である主がお召しにな

る人々に与えられているのです。ですから現実には、この約束は今日、この日に、私たちにも与えられているのです。今の教会の最大の必要は、聖霊のテーマについての教えが復活することだ、と私は確信しています。それは、教会が聖霊のバプテスマによって、聖霊に満ち満ちためであり、私たちの住むこの世に出て行って、イエス・キリストの証人になるための力を受けるためです。この国にとって、今日これが唯一の希望だと確信しています。求め、渇き、願っている教会の人の生活と心の上に、聖霊の新鮮な動きが臨み、教会の中で御霊の覚醒が始まることです。イエスは言われました。「あなたがたも、自分の子どもには良い物を与える子とを知っているのです。とすれば、なおのこと、天の父が、求める人たちに、どうして聖霊を下さらないことがありましよう。(ルカ11:13参照)」イエスは言われました。「義に飢え渇いている者は幸いです。その人は満ち足りるからです。(マタイ5:6)」

さて、聖霊のバプテスマは、神がみなさんに備えて下さった体験のすべてではありません。全く大きな新しい次元の力への扉を、開けたというだけにすぎません。聖霊のバプテスマの後には、御霊によって歩む、御霊に導かれる必要があります。たえず御霊に満たされ、御霊に支配される、御霊から力を受ける必要があります。使徒行伝の使徒の模範を見てゆくと、どのように使徒が聖霊から命令を受け、支配、導き、警告を受けて、御霊によって歩み、御霊に従って歩んだかを見ます。今日、私たちはそれがどれほど必要でしょう。生き残るために必要です。私たちは、聖書が教えている、来るべき困難な時代に住んでいます(2テモテ3:1参照)。私たちは、多くの人たちの愛が冷たくなっている時代に住んでいます(マタイ24:12参照)。私たちはロブが指摘したように、テレビに出てくる汚れとよごれのせいで、テレビを見ることすらできない時代に住んでいます。それが、あなたの頭に植え付けられるのです。ですから、神の御霊が私たちからあふれ流れ出るように、私たちはただ神を待ち望むことがどうしようもなく必要なのです。それによって、教会が力強い証人となり、私たちの社会と地域社会を飲み込もうとしている、悪の潮流を逆転させることができるようになるためです。私はこう祈ります。私たちが聖霊のテーマを学ぶとき、神がみなさんに大なる飢え渇きを与え、このシリーズが終わる時には、教会全体が、神を待ち望み、新鮮な新しい神の御霊の注ぎが神の教会と神の民に注がれることよって、神の御霊によって力を受けるようになりますように。もし、そうならないのであれば、悪化している回りの世界に私たちが押しつぶされてしまうのは時間の問題です。

聖霊のバプテスマ パート2 (#3056)

Baptism with the Holy Spirit Part2

今晚、聖霊のバプテスマの学びのシリーズを続けたいと思います。まず、聖霊のバプテスマの約束を見ます。マタイの福音書3章11節で、バプテスマのヨハネは言いました。「私は、あなたがたが悔い改めるために、水のバプテスマを授けていますが、私のあとから来られる方は、私よりもさらに力のある方です。私はその方のはきものを脱がせてあげる値うちもありません。その方は、あなたがたに聖霊と火とのバプテスマをお授けになります。」そして、イエスは、使徒行伝1章4節で、聖霊のバプテスマの約束をされました。「彼らといっしょにいるとき、イエスは彼らにこう命じられた。『エルサレムを離れないで、わたしから聞いた父の約束を待ちなさい。ヨハネは水でバプテスマを授けたが、もう間もなく、あなたがたは聖霊のバプテスマを受けるからです。』」そこで、そのバプテスマのヨハネの約束と、イエスの約束は成就されました。使徒行伝2章1節にはこう書かれています。「五旬節の日になって、みなが一つ所に集まっていた。すると突然、天から、激しい風が吹いて来るような響きが起こり、彼らのいた家全体に響き渡った。また、炎のようなわかれた舌が現れて、ひとりひとりの上にとどまった。すると、みなが聖霊に満たされ、御霊が話させてくださるとおりに、他国のことばで話した。 (2:1-4)」使徒行伝2章でのこの体験は、紛れもなく聖霊のバプテスマの約束の成就だと私は思います。ここで、「みなが聖霊に満たされ」と告げられています。「聖霊に満たされ」という言葉は、聖霊のバプテスマという用語と互換的に使われているようです。

さて、弟子たちが、使徒行伝2章の体験の前に回心していたかどうかの問題が出てきます。この体験の前に彼らは新生していたのでしょうか。バプテスマ、賜物、あるいは聖霊の満たしなど、これらはみな互換性のある用語ですが、これが回心の後に起こるものか、回心とは別に起こるものであるかは、教会の中で議論されている事柄です。私は、聖霊のバプテスマ、聖霊の満たしは、回心の後起こった体験だったと信じています。ヨハネの福音書20章22節で、イエスが弟子たちに息を吹きかけ、「聖霊を受けなさい。」と言われたとき、少しでも何かが起こらなかったのかという疑問がわいてきます。これは単に、イエスの象徴的な行為でしかなかったと言う人たちがいます。イエスが弟子たちに息を吹きかけ、「聖霊を受けなさい。」と言われたことは、単なる象徴的な行為でしかなく、弟子たちはその時点で聖霊を受けなかった、と言います。それは、聖書によって主張、証明するには困難な立場です。これは、イエスが弟子たちに息を吹きかけ、「聖霊を受けなさい。」と言われた時に何も起こらなかったと言うことは、純然たる憶測だと認めざるを得ません。イエスが私に息を吹きかけ、「聖霊を受けなさい。」と言われているのに、何も起こらないと考えるのは、私は困難をおぼえます。イエスによる聖霊のバプテスマの約束は、この出来事後のことでした。ひょっとすると、イエスが弟子たちに息を吹きかけ、「聖霊を受けなさい。」と言われた時、彼らは御霊によって新しく生まれたのかもしれませんが。イエスは、私たちが新しく生まれなければならないと言われました(ヨハネ3:3、7参照)。私たちは霊的に誕生しなければならない、と。私たちは肉の誕生をしましたが、「肉によって生まれた者は肉です。御霊によって生まれた者は霊です。

(ヨハネ3:6)「ひよっとすると、イエスが「聖霊を受けなさい。」と言われたとき、その時に弟子たちが実際に御霊によって新しく生まれて、回心したときだった可能性もあります。イエスは先にペテロに、「だから、悔い改めた時には、兄弟を力づけてやりなさい。(ルカ22:32参照。リビング・バイブルでは、「悔い改めて立ち直った時には」、新改訳では単に、「立ち直ったら」とあるが、欽定訳では「悔い改めた時には(when thou art converted) 」となっている。)」と言われました。この出来事の後、ペテロが、兄弟を力づける立場にいたことがわかります。使徒行伝1章を見ますと、イエスが昇天されると、ペテロは教会の中で指導的役割を果たすようになりました。ペテロは教会の中で兄弟を力づけ、スポークスマンのようになり始めました。

さて、聖書的な解釈によれば、聖書的な解釈の法則によれば、明らかな意味は、通常正しい意味だとされています。私は、それはもっともだと思います。神はご自分が言われたことは、そのとおりの意味のことを言われた、また、ご自分が意図されたことを神は言われたと思います。したがって、聖書を読むときに、読んだ聖書の箇所から何かを読み取ろうとしない、読んだ聖書の箇所から何か微妙な隠された意味を探そうとしないのが一番だと思います。明らかなものが、通常正しいものなのです。もし、イエスが弟子たちに息を吹きかけ、「聖霊を受けなさい。」と言われたのであれば、明白な理解のしかたは、弟子たちが聖霊を受けたというものです。その時点で、聖霊が弟子たちの内に住まわれ始めましたが、まだ聖霊のバプテスマは受けていませんでした。聖霊のバプテスマは、それから後に、五旬節の日に起こった経験でした。したがって、聖霊のバプテスマは、回心の後と、自分の内に臨在され、内なる力となつてくださる聖霊を受けた後のものです。では使徒行伝を見て、この解釈が、後に起こった出来事や、信者の聖霊の満ちし、バプテスマ、賜物によって発生してきたのではないことを見てみましょう。

使徒行伝2章で、聖霊の注ぎによって起こった超自然的な現象のために群衆は集まってきましたが、ペテロが彼らに対する説教を終えたとき、人々は自分たちの罪を認め、「兄弟たち。栄光の主を十字架につけた私たちはどうしたらよいのでしょうか。」と言いました。すると、ペテロはこう言いました。「悔い改めなさい。そして、それぞれ罪を赦していただくために、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けるでしょう。なぜなら、この約束は、あなたがたと、その子どもたち、あならびにすべての遠くにいる人々、すなわち、私たちの神である主がお召しになる人々に与えられているからです。(使徒2:38-39)」したがって3つの命令があります。「悔い改めなさい」、「罪を赦していただくために、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けなさい」、そして3つ目は、「そうすれば、賜物として聖霊を受けるでしょう」です。この体験も、悔い改め、罪を赦していただくために、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けた後の事のようにです。「そうすれば、」後に続くことですね。「賜物として聖霊を受けるでしょう。」さて、これももちろん、攻撃の隙もないほどの論点ではないことは、私も認めます。ただ、明らかにそう見える、ということです。

しかし、使徒行伝8章に進みますと、迫害の結果、ピリポがサマリヤへ行ったことがわかります。そして、ピリポは人々にキリストを宣べ伝えました。そして、多くの人が神の国について宣べるのを信じ、男も女もバプテスマを受けました(8:12参照)。ですから、人々はピリポによる福音説教を

信じ、バプテスマを受けました。しかしそれから、このように書かれています。「エルサレムにいる使徒たちが、サマリヤの人々が神のことばを受け入れたと聞いて、彼らが聖霊を受けるために、ペテロとヨハネを彼らのところへ遣わした。彼らは主イエスの御名によってバプテスマを受けていただけで、聖霊がまだだれにも下っておられなかったからである。(8:14-16参照)」ここで、彼らは信じて、イエスの御名によってバプテスマを受けていましたが、まだ、この聖霊の賜物は受けていませんでした。ですから、エルサレムの教会は、ペテロとヨハネを彼らのところへ遣わしました。それは、彼らが後で経験する聖霊のバプテスマを受けるためでした。信じて、イエスの御名によってバプテスマを受けるなら、その人の内に聖霊が住んでくださっているはずですが、それは、聖霊によるのでなければ、だれもイエスを主と呼ぶことができないからです(1コリント12:3)。しかし、聖霊との関係はありました。聖霊は、まだ上に臨んでおられませんでした。つまり、前回の学びで取り扱った前置詞のエピ、……パラ、エン、エピの3つのギリシャ語で示されていた聖霊との3つの関係を見ましたが、聖霊はあなたがたとともにおられ、あなたがたのなかにおられ、聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。彼らはまだエピの経験をしていませんでした。「ともに」はあったのです。彼らは罪を認めました。「なかに」はありました。聖霊が彼らのなかに入られました。それは、彼らが主イエスの御名によってバプテスマを受けていたからでした。しかし、彼らには、まだエピ、聖霊があふれ流れる、バプテスマはありませんでした。まだここでは、聖霊は、エピ、上に臨んでおられませんでした。それでペテロとヨハネは、「人々が聖霊を受けるように祈った。(8:15)」とあります。そして、「ふたりが彼らに手を置くと彼らは聖霊を受けた。(8:17)」彼らが聖霊を受けたという証拠が、目に見える形か、音で聞くことができる形であったに違いありません。そうでなければ、なぜ占い師のシモンが示された力を見て買いたいと求めるでしょうか。なぜなら、シモンは、いろいろな人のところに行って、彼らも聖霊を受けるように彼らに手を置きたいと願っていたからでした。シモンは、その力が欲しかったのです。買いたいと申し出ました。書かれてはいませんが、彼らが神から特別な賜物を受けたことを知ることができる、何らかの聞くことのできる、見ることのできる証拠があったに違いありません。彼らが異言を語ったのではないかと私は想像しますが、それは想像にしかすぎません。聖書は私たちに教えていません。

次の使徒行伝9章を見ますと(以下使徒行伝9章1-19節、22章2-16節、26章9-18節参照)、当時タルソ出身のサウロとして知られていたパウロが主の御名を呼び求める者を投獄するために、ダマスコの途上にいました。正午ごろ、突然天からまばゆい光がさし、それは太陽も明るく輝いて、パウロは地に倒れ、「サウロ、サウロ。なぜわたしを迫害するのか。」という声を聞きました。それで、パウロは、「主よ。あなたはどなたですか。私はあなたにお仕えしたいのです。」と答えました。そして答えは、「わたしは、ナザレのイエスである。」でした。そしてパウロは、「主よ。私はどうしたらよいのでしょうか。」と尋ねました。さて、この瞬間にダマスコの途上でパウロが回心したこと、疑念をはさむことはできないと思います。人がイエス・キリストを主として従うなら、それははっきりとした回心のしるしです。また、はっきりとした聖霊のしるしです。聖霊によるのでなければ、だれも、「キリストは主です。」と呼ぶことはできません。ここでパウロは、「主よ。私はどうしたらよいのでしょうか。」と言っています。それで、主はパウロに、「町にはいりなさい。そうすれば、あなた

のしなければならぬことが告げられるはずです。」と言われました。そして、パウロはダマスコに
来ました。この体験で目が見えなくなっていました。それで、パウロは導かれてダマスコに入りました。
そして、町の日抜き通りである『まっすぐ』という街路にある、ユダという名の人の家に連れて
行かれました。ダマスコにはある弟子がいて、その人の名前はアナニヤでした。アナニヤは幻を
見ました。主が幻の中で彼に現れ、「まっすぐ」という街路に行き、サウロというタルソ人をユダの
家に尋ねなさい、と言われました。「そこで、彼は祈っています。」と主は言われました。アナニヤ
は、ためらいました。主に口答えして、「この人が教会をだいなしにして、あなたの御名を呼ぶ者た
ちを投獄しようとダマスコまで来たと聞いています。」と言いました。しかし、主はアナニヤに、自分
が行っていることをは知っていると言われ、アナニヤが行ってパウロの目が見え、聖霊の賜物
を受けるように祈るようにと命じられました。そこで、アナニヤはパウロのところに来て、「兄弟サウ
ロ。あなたが来る途中でお現れになった主イエスが、私を遣わされました。あなたが再び見えるよ
うになり、聖霊に満たされるためです。(9:17)」と言いました。ここでもまたパウロが聖霊に満たさ
れたのは、ダマスコの途上での回心の後であり、ダマスコの途上での回心とは別でした。

使徒行伝10章で、ペテロは、カイザリヤにあるコルネリオという名の百人隊長の家に行くように、
主に呼ばれました。ペテロがコルネリオの家に来たとき、コルネリオはたくさんの友人を集めてい
ました。そして、ペテロがこの人たちにイエス・キリストの真理を伝えました。この人たちにイエス・
キリストの真理を伝えていると、「みことばに耳を傾けていたすべての人々に、聖霊がお下りになっ
た。(10:44)」とあります。エピソードです。そして、「ペテロといっしょに来た人たちは、異邦人にも聖霊の
賜物が注がれたので驚いた。(10:45)」この人たちは彼らに聖霊の賜物が注がれたの気づきまし
たが、それは、「彼らが異言を話し、神を賛美するのを聞いたからである。(10:45)」さてここでは、
聖霊の賜物が、彼らがイエス・キリストを信じたことと関連づけられ、彼らが水のバプテスマを受け
る前にそれが起こりました。実際、神が彼らに聖霊の賜物をお与えになったことから、異邦人にバ
プテスマを授けてもよいと決めました。コルネリオの家の場合は、御霊に満たされることと、回心
は同時に起こった経験だったようです。実に、彼らが回心して、御霊に満たされました。さて、ペテ
ロは、エルサレムにいるユダヤ人に、自分が異邦人の家に行った時に何が起こったかを説明しま
したが(使徒11章参照)、この体験のためにペテロは呼び出されました。ペテロが彼らに何が起
こったかを説明したときに、ペテロは自分の責任だと一切認めたくありませんでした。ペテロは言
いました。「そこで私が話し始めると、聖霊が、あの最初のとき私たちにお下りになったと同じ
ように、彼らの上にもお下りになったのです。私はそのとき、主が、『ヨハネは水でバプテスマを授
けたが、あなたがたは、聖霊によってバプテスマを授けられる。』と言われたみことばを思い起こし
ました。(11:15-16)」ですから、ペテロはこう言ったのです。「私はただ彼らに語っていたのです。私
が話していると、聖霊が下ったのです。私は何もませんでした。ただ、聖霊がなされたのです。
そのことが起こった時に、私はイエスのことばを思い出しました。『ヨハネは水でバプテスマを授け
たが、あなたがたは、聖霊によってバプテスマを授けられる。』その時、私はイエスのことばを思い
出しました。」ですから、彼らに起こったことは聖霊のバプテスマでした。ペテロはそれに関連させ
ています。彼らが御霊に満たされたことが書かれています。ですからここでも、「聖霊の賜物」、

「聖霊のバプテスマ」、「聖霊に満たされる」といった用語は同じ出来事を描写し、互換的に使われています。

さて、使徒行伝19章ですが、パウロはエペソに来ました。つい先日私たちはエペソに行きました。実に驚くべき都市です。エペソの町の廃墟は、おそらく古代世界におけるどの古代都市の廃墟の中でも最も広範囲に渡ると思われます。ものすごいです。大理石の街路が何ブロックも延々と続いていて、たくさんあります。宮や建物などの廃墟は驚異的です。エペソは、アジアの主要な商業都市でした。エペソは、アジアへの出入口でした。アジアからのヨーロッパへの産物はみなエペソを通りました。逆もしかりです。パウロがエペソに来た時は雑踏の町でした。福音をたずさえて来たのは、パウロが初めてではありませんでした。パウロが福音をコリントへ伝えたとき、パウロは天幕作りでしたので、プリスキラとアクラという名の夫婦から仕事をもらいました(以下使徒18章参照)。エルサレムに戻るためにパウロがコリントを発ったとき、彼らはパウロといっしょにエペソまで旅をして来ました。パウロはユダヤ人の祭りのためにエルサレムに戻りましたが、彼らはエペソにとどまりました。彼らがそこにいたとき、あるユダヤ人で、聡明で雄弁な人がいました。その人の名前はアポロでした。この人は、聖書によく精通していました。この人は、聖書からイエスがメシヤであると証明できる人でした。また、この人は、エペソでユダヤ人に宣べ伝えて、イエスがメシヤであることを、聖書によって示し、聖書によって証明していました。この人の神学の中で、完全ではない部分がありました。プリスキラとアクラはアポロのことを聞き、彼を招き入れて、彼らはパウロから学んだ真理を分かち合い、アポロがもっと正確にイエスの生涯と性質を把握できるようにしました。このアポロの宣教の結果、エペソで多くの人々がイエス・キリストを信じるようになりました。

しかし、何か欠けているものがありました(以下使徒19参照)。イエス・キリストの信者に会って、その人と話を少し始め、付き合いを少し始めますと、その人の経験で何か欠けているものがあることを見分けることができます。喜びが欠けているとか……。自分はクリスチャンだと言うのですが、顔を見たのでは決して分かりません。あまりに大まじめで、まるで世に対して怒りを持っているようにみえます。愛が欠けています。皮肉で、批判的です。熱心さに欠けています。熱くも冷たくもなく、ただなまぬるいのです。経験に熱心さがありません。ですから、パウロがエペソでこのような信者に会ったとき、彼らには主との経験や関係に何か欠けたものがありました。それで、パウロは、それが何か把握しようとしていました。何かおかしいのだろう、と。このため、パウロは質問をしました。「信じてから、聖霊を受けましたか。(訳者注:英語ではsince you believedとなっている。)」あなたは、この後の体験をしましたか、と。あなたは信じたけれども、聖霊を受けましたか、と。ギリシャ語の学者たちは、ここの部分は「信じてから(since)」ではなくむしろ「信じたとき(when)、聖霊を受けましたか。」と翻訳すべきだと言います。「から」か「とき」という言葉を使うのであれば、どう翻訳しようとあまり問題はありません。同じ意味合いになります。つまり、聖霊を受けること、聖霊の賜物、バプテスマ、満たしは、信じた後のことだからです。聖霊の満たし、聖霊のバプテスマを受けずに、信じることができます。もちろん、「信じてから、聖霊を受けましたか。」と言いますと、後であったことがとても明白です。「信じたとき、聖霊を受けましたか。」と言いますと、受けることができたが、いや、信じることができたけれども、まだ受けていないことを示しています。しかし英

語では、正確に英語に翻訳されるなら、同じ効果があります。この聖霊のバプテスマ、聖霊の満たしは、信じた後だということを示しています。

さて、彼らは「聖霊のことを聞きもしませんでした。」と答えました。彼らは、全く知りませんでした。「聖霊だって。それは、何だ。」パウロは、「では、どんなバプテスマを受けたのですか。」と言いました。つまり、イエスが弟子たちに、行ってあらゆる国の人々を教えなさいと命令されたとき、「父、子、聖霊の御名によってバプテスマを授けなさい。」と言われました(マタイ28:19-20参照)。それは、バプテスマの式文の中にありました。ですから質問は、「あなたがたは聞きもしなかったなら、どんなバプテスマを受けたのですか。」になります。あなたは、父、子、聖霊の御名によってという、イエスが命じられたバプテスマの式文でバプテスマを受けなかったのですか。「いいえ。ヨハネのバプテスマでバプテスマを受けました。」さて、ヨハネのバプテスマは、罪からの悔い改めのバプテスマでした。ですから、彼らはそれからイエス・キリストの御名によってバプテスマを受けました。そして、このように書かれています。「パウロが彼らの上に手を置いたとき、聖霊が彼らに『エヒ』臨まれ、彼らは異言を語ったり預言をしたりした。(使徒19:6参照)」ですから、これもまた信じた後、回心の後の体験でした。パウロが彼らの上に手を置いて、それから、彼らはこの聖霊の賜物を受け、異言を語ったり預言をしたりしました。バプテスマの式文に少し混乱が出ているのは、興味深いことです。確かに、使徒行伝には、「父、子、聖霊の御名によってバプテスマを授ける」という言及は見つかりませんが、「イエスの御名によってバプテスマを受けた」といった言葉はあります。しかし、パウロの質問は、父、子、聖霊の御名によってバプテスマを授けるのが一般的な慣習であったことを示します。

さて、使徒行伝のこれらの例を見て観察できることは、人が聖霊の賜物、聖霊の満たし、聖霊のバプテスマを受けるのには、様々な体験、やり方、方法があるということです。2章では、みなぎ座っていた時に、突然、天から、激しい風が吹いて来るような響きが起こり、彼らのいた家全体に響き渡り、また炎のような分かれた舌が現れて、ひとりひとりの上にとどまり、聖霊が能力を与えて下さったので、みなぎ他国のことばで話し出しました。使徒行伝8章では、聖霊の賜物は、パウロ(訳者注:ペテロのことか。)とヨハネが手を置くことによって、分け与えられました。おもしろいのは、伝道師ピリポはこのようにはしなかったことです。神に力強く用いられ、奇蹟をした人でしたが、聖霊を分け与えるのに、神はピリポをお用いになりませんでした。これについては、後の学びで話します。使徒行伝9章で、パウロに聖霊が与えられたのは、ただの人からでした。アナニヤとは誰ですか。アナニヤは使徒ではありませんでした。アナニヤはダマスコにいたある弟子でした。何か霊的な階級があると言っているのではありませんが、彼はダマスコにいた普通の信者でした。さて、サマリヤでペテロとヨハネが手を置き人々に聖霊が与えられたとき、聖霊に満たされたことに伴う超自然的な現象について何ら言及がありません。しかし、指摘しましたように、聖書には書かれていませんが、何かはっきりとしたものがありました。そうでなければ、シモンがそのような力を求めるようなことはなかったからです。パウロが聖霊を受けた時、同時に盲目が癒されました。しかし、聖霊を受けたことにともなう、その他の超自然的な現象について言及はありません。しかし、パウロが後で、コリント人に御霊の賜物について書いたときに、パウロが他の人よりも多くの異

言を語ったことを告げていることを言及すべきでしょう(1コリント14:18参照)。使徒行伝10章で、ペテロは手を置く機会も与えられませんでした。まだペテロが語っていた時に、彼のメッセージは突如として聖霊によって中断され、彼らに聖霊が下り、彼らは異言を語り始めました。ペテロが彼らに語っていた時に、主権的な神の御霊の動きがあったのです。ただペテロが彼らに話している時に、聖霊の力が臨まれ、満たしがありました。使徒行伝19章で、再びパウロがエペソにいた時、パウロは人々に手を置き、彼らは異言を語ったり、預言をしたりしました。

ですから、これらすべての使徒行伝の中の聖霊の満たしがあるときの描写のなかで、二つたりともまったく同じ体験はありません。どの場合も、繰り返し起こった体験はありませんでした。最も近いのは、おそらくコルネリオの家の体験と弟子たちの体験ですが、その場合は、激しい風が吹くようなことはありませんでしたし、炎のように分かれた舌もありませんでした。ただ、彼らは異言を語っただけでした。このことから、神は何か特定のやり方や方法に縛られる方ではないことが私にはわかります。神は、思いのままの方法ですることがおできになります。私たちが誰か他の人の体験を真似しようとすることや、だれか他の人が経験したのと同じことを求めようとするのは間違っています。教会において、これは本当に危険です。私たち特有の性格によって、私たち特有の気質によって、神は私たち一人一人を取り扱ってくださいます。「これをしてください。あなたの手をそこにおいて下さい。ここの部分を触って下さい。」というふうに、神は公式化されませんし、神を公式化することはできません。公式は何もありません。神は主権を持たれている方です。

自分の体験を証しする人がいます。その人の証を正当なものとして私は受け入れます。その人たちの言うことを否認するものではありません。しかし、フィニーが説明したように、フィニーが神に、「やめて下さい。もう耐えられません。」と叫ぶまで、液化した愛が波のように、繰り返し、繰り返し、繰り返し押し寄せ続けました。これは、すごいことで、すばらしいことです。これは、フィニーが体験した聖霊のパプテスマでした。しかし、だからといって、あなたがそのように体験するというものではありませんし、私がそのように体験するというものではありません。他の人の体験を聞いて、他の人の体験を読んで、「ああ、こういうことが起こるのか。このようにあなたは感じるのだ。」と考えることは危険です。中には、頭のとっぺんから足の爪先まで、体の中を電流が流れたようだったと話す人を聞いたことがあります。それは、すばらしいことです。私は、そのような経験をしたことは一度もありません。私は一度雷に打たれたことがあります。体の中を電流が流れたような気がしましたが、それを聖霊によるものとは考えたりしません。それは雷の稲妻です。それによって、私は地に倒されました。それは、すばらしいことです。体験を度外視しているわけではありません。しかし、みながその体験をするのではない、特定の体験を求めることは間違っている、と言っているのです。特定の体験を求める時に、傾向として、神のみことばの約束ではなく体験に信仰を置いてしまうからです。他の人がした特定の体験を求めると、とかく神はある特定の型に従う方ではありませんので、そのような類いの体験はしないかもしれません。他の人のした体験と類似した体験をあなたがしなかったからと言って、神があなたの生活のうちで働いておられないというわけではありません。だからと言って、あなたが聖霊で満たされていないというわけではありません。ですから、神は、使徒行伝において、神がそれぞれの人のうちで働かれるには、幅広い様々な方法があるこ

とを私たちに示しておられるのです。それは、最初から最後まで一貫した方法にそうというものはありません。そうではなく、最初から最後まで神がなさるやり方は全く不整合です。全く同じという事は決してありません。あなたが自分の個人的な形で、神を体験することができる余裕があります。神は公式に縛られる方ではありません。

ですから、私の提案は、全く何でもどのようにでも、神があなたの人生でお働きになりたいことに、ただ開かれていることです。特定の感覚を求めるのではなく、特定の賜物を求めるのではなく、特定の反応や応答を求めるのではなく、ただ自分を開いておき、神がこのすばらしい賜物をあなたにお与えになるときに、どのようにでも望まれるように働いていただき、事をなされるようにしましょう。ひょっとすると、誰かがあなたに手を置くことによるのかもしれませんが。それは、牧師の一人かもしれませんがし、あるいは、パウロの時のように、普通の信者の一人かもしれません。ひょっとすると、誰もあなたに手を置かないかもしれません。使徒行伝2章の場合のように、そこでは、ただ人々はみな座っていました。人々が座っていたことに注目して下さい。立っていたと言う人のことを聞いたことがありますし、床に横になっていたと言う人のことを聞いたこともあります。それは、関係ありません。ベッドに横たわっているかもしれません。神は、ある一つの特定のやり方に縛られる方ではありません。みなさんが心を開くと、ちょうど、ペテロがコルネリオの家の人々に語った時にのようですが、聖霊が人々に下った時に、そのとき御霊によって人々の心が開かれ、御霊が彼らの心に真理をあかしされたように、彼らの心が信仰によって開かれたとき、彼らは神のことばを受けました。美しいですね。ですから、ただ自分を開いていてください。神を型にはめてはいけません。特定の体験を求めてはいけません。ただ、神があなたに願われているあなたになることができるように、聖霊の賜物を、力を、力強い力を受けて下さい。この世で、イエス・キリストの本当の証人となる力を受けて下さい。

聖霊のバプテスマ パート3 (#3057)

Baptism with the Holy Spirit Part3

聖霊のテーマの学びを続けていますが、現在は聖霊のバプテスマを見えています。先週の木曜の晩は、聖霊の賜物、聖霊の満たし、聖霊のバプテスマの体験が、救いの体験、御霊による新生、御霊によってキリストのからだとなるバプテスマを受けることは別個であり、また後に体験することであることを見ました。弟子たちには、後に受けた体験がありました。使徒行伝を見ますと、これについて、弟子たち自身のことを見ました。また、福音を受け入れたサマリヤ人のことを見ました。イエスを十字架につけたことで、どうしたらよいか尋ねた人々に、ペテロが与えた約束を見ました。ペテロは、「悔い改めなさい。そして、それぞれ罪を赦していただくために、イエスの名よってバプテスマを受けなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けるでしょう。(2:38参照)」と言いました。また、これについて、パウロの生涯を見ました。彼は、ダマスコの途上で回心しましたが、アンテオケにいたアナニヤという名の弟子が来て、彼に手を置いたときに聖霊に満たされました。それから、19章で、エペソにある教会のことを見ました。

今晚は、ヨハネによる福音書7章を開いてください。37節から始めます。聖霊のバプテスマ、聖霊の満たし、聖霊の賜物がどのような経験かを見る時、ここでヨハネはこのように教えています。「さて、祭りの終わりの大いなる日に、…」文脈から、これは仮庵の祭りであることがわかります。イエスはエルサレムに来られており、祭りの終わりの大いなる日まで、特に目立ったことをなさいませんでした。事実人々は、イエスが祭りに現れるのかと話していたぐらいです。目立ったことをされていないとき、イエスは、「あなたがたはわたしを捜すが、見つからない。わたしのいる所にあなたがたは来ることができない。」と言われていました。人々はこれがどういう意味だろうかと考えている時、祭りの終わりの大いなる日に、イエスは群衆の真ん中で立って、大声で言われました。仮庵の祭りはサーコト(Succoth)とも、仮小屋の祭りとしても知られています。祭りは、荒野を40年間さまよった期間、神がイスラエルの民を守ってくださったことを記念するものでした。神がこの民を守ってくださいました。荒野で40年間民が生き延びることができたのは奇跡でした。それは、明らかに神の奇跡でした。祭りは、荒野でさまよった間、すばらしい守りがあったこの奇跡を記念するためのものでした。神の奇跡的な守りを思い起こすために、民はたくさんのことをしました。今日でさえ、正統派ユダヤ教徒は通常、家に対峙して、小さい差し掛け屋根の椰子の葉でふいた部屋を家の外に建てます。イスラエルでは、仮庵の祭りの時に、家の外に建てられた椰子の葉でふいた屋根の小さい部屋が見られます。そして、家族は一週間の間、外に引っ越して、椰子の葉でふいた屋根の小さい部屋に住みます。夜、横たわった時に星が見えるように、椰子の葉の間に十分なスペースをとっておきます。その考えの背後にあるのは、子供たちが、「ああ、上に星が見える。」と言うためでした。そうすると、両親は、「我々の父祖は、40年間、星の下に、荒野で住んでいるときに、我々の神はその40年間父祖を守ってくださった。」と言う機会がありました。ですから、人々が思い起こすことができるものがありました。宮での礼拝のとき、祭司は水差しを肩に担いで、宮の中庭から何段もの階段を降りて、下のキドロンの谷にあるシロアムの池に行きました。そこで、

水差しに水を満たし、荘厳な行進をして、階段を上って宮の中庭まで戻って行きました。そこには、何千人もの人が集まり神を礼拝していました。祭司が、水差しを持って中庭に入ってくると、人々は、一斉にハレル詩篇を歌い始めました。人々が歌い、神を礼拝をしている時に、水を舗装道路に注ぎ出し、水が舗装道路の上を飛び散るようにしました。それによって、荒野で父祖が喉の渇きによって死にそうになっていた時に、神の命令にしたがってモーセが杖を取って岩を打つと、水が岩から流れだし、喉の渇きによって死にそうになっていた時に父祖が水を飲んで守られたことを、民が思い起こしました。ですから、父祖が荒野をさまよっていた時に神が守ってくださったことについて、人々を思い起こさせるものがたくさんありました。

さて、祭りの終わりの大いなる日、これは実際は8日目でした。これは8日間の祭りでした。この日には、祭司によるシロアムの池への行進はありませんでした。そして、水を舗装道路に注ぎ出すことも行なわれませんでした。これもまた重要でした。それは、神の約束が成就したことを認めることだったからです。それは、水が豊かで、乳と蜜が流れる土地に神が民を導き入れてくださるという約束でした。民はもはや奇跡的な岩からの水を必要としていませんでした。民はもう水が豊かな約束の土地を享受していました。したがって、もう8日目の祭りの終わりの大いなる日には、行進がありませんでした。さてこの日に、人々が集まって神を礼拝していると、伝統によればその日のその時に、通常ならば水を舗装道路に注ぎ出す時に、イエスが立って、中庭に集まっていた何千人もの人に対して、「だれでも渇いているなら、わたしのもとに来て飲みなさい。」と大声で言われました。さて、イエスが立っておられたという事実は、重要でした。彼らの文化と慣習によると、ラビが教えている時はいつも着席していて、生徒はいつも立っていました。どういうわけか、私たちは物事を混乱させてしまいました。しかし、教師が座り、生徒が立つと言うのが慣習でした。居眠りしないようになっていました。しかし、布告したり、宣告する時、真理を布告する時は、立ってしました。イエスが立って大声で言われたという事実から、イエスは人々に真理を布告されているのです。渇いている人を招かれました。「だれでも渇いているなら、わたしのもとに来て飲みなさい。」とおっしゃいました。イスラエルの土地は、基本的にとっても乾燥した土地です。したがって、人々はみな渇くということがとてもよくわかっていました。渇いて乾燥している地では、生き残るために水が必要であることをとても意識します。しかし、イエスは、身体的な渇きについて言及されていたわけではありませんでした。

さて、人は3つの部分で成り立っています。人は霊であり、意識を持っており、肉体の中に生きています。ですから、みなさんも私も3つの部分から成り立っています。それは、体と精神と霊です。聖書によると、人が罪の中で生きていると、霊は死んでいます。霊は、御霊によって新たに生まれるまで、生かされません。しかし人は、体と、精神あるいは感情と霊の3つのレベルで存在しています。このために、人は身体的な渇きを体験することがあります。感情的な渇きを体験することがあります。また、霊的な渇きを体験することがあるのです。私たちはみな、身体的な渇きをよく知っています。私たちのからだは、生存するために、ある一定の水分を必要としています。このため、みなさんの持っている最も強い身体的な欲求の一つは、渇きに対する欲求となっているのです。空気に対する欲求の次に強い身体的な欲求です。からだの水分の割合が低くなってくると、水分

のレベルを絶えず監視するために、神はみなさんの体に小さい監視装置を内蔵されているので、水分のレベルを監視していて、水分のレベルが低くなり過ぎると、それがみなさんの脳と喉に信号を送ります。喉が乾燥して、口に綿が入っているかのように感じ、ただ、「水を飲まなくちゃ。」としか考えることができなくなります。どうしようもなくなってきます。「水を飲まなくちゃいけない。」と。「水飲み場はないのか。何かぜったい飲まなければ。」と。そして、からだが持っている水分の必要のために、興奮して、どうしようもなくなってきます。これは、生体恒常性(homeostasis)として知られているものの一環です。つまり体のバランスです。これは、ただ神が渇きに対する欲求を造ってくださり、体の水分のレベルが危険なほど低下すると、この渇きに対する欲求は極端に強くなるのです。

いわゆる社会的欲求があります。私たちは愛が必要であるということが発見されました。愛への欲求があります。自分は愛される必要がある、と。実験が行なわれました。乳児などに、様々な世話の仕方の実験がなされました。その中には、撫でることも、抱き上げることもなく、身体的な接触がなく、機械的に哺乳瓶のホルダーを使ってお乳を与えられ、身体的な接触を奪われた乳児がいました。施設的な面倒の仕方を受ける実験がなされたのです。しかし、抱いて可愛がったり、抱かれたり、触れられたりした経験がない子供は、6か月間、抱かれたり、愛されたり、触れられることがなかった子供は、不可逆性の、取り返しのつかない精神遅滞を起こすことが発見されました。愛の必要があります。通常、施設的な機械的なケアだけですと、子供は半年間で死にます。子供たち、小さい幼児すら、どうしても接触や愛が必要であることが発見されたとき、実験を取り止めました。

保証への欲求があります。これはもう一つの感情的欲求です。必要とされる必要があります。何年もいっしょに暮らした夫婦のうち、片方が亡くなると、もう片方も一年もたたずに亡くなってしまうことがよくあるのがわかります。それは、必要とされる必要がもはやなくなってしまふからです。夫が生きていて、健康がすぐれていない間は、夫は、料理をつくってもらい、面倒をみてもらうために妻にいてもらう必要がありましたが、とうとう夫が死んでしまうと、妻は一年もたたずに亡くなってしまいました。それは、もはや妻がもう必要とされていなかったからです。必要とされる必要が余りにも強いので、もう自分は必要とされていないと感じると、あきらめてしまうのです。必要とされる必要です。社会的あるいは感情的欲求です。

しかし、すべての人の霊の奥底には神への必要があります。ローマ人への手紙8章は、被造物が虚無に服したのは、自分を創造した方の設計によるのだ(8:20参照)、と教えています。奥底で霊が、神との意味ある関係を叫び求め、熱望しています。これは、生まれつきに備わっています。人は、神なしには不完全です。神なしには、奥深い所で、神を知りたい、神を体験したいという思慕、願いがあります。これは普遍的なものです。イエスが、「だれでも渇いているなら」と叫ばれたとき、この渇きのことをお話になっていたのです。すべての人の霊の奥底にある、神との意味ある関係を求める渇きのことです。

私たちは、体と魂、霊で成り立っていますが、多くの場合、何が魂的なものであるか、何が霊的なものであるか、区別できないほどそれらは融和しています。私たちの体と魂、霊はあまりに融和

しているのです、何でもあなたを身体的に影響を与えるものは、感情的に影響を与えます。何でもあなたに感情的に影響を与えるものは、身体的に影響を与えます。人の感情と身体的な健康につながりがあることが、どんどんわかってきています。何年も前に聖書の中にそれが示唆されていました。箴言にはこう書かれています。「心の楽しみはよい薬である。(箴言17:22口語訳)」幸せな態度、楽しい心は、薬のように高価であることが認められています。癒しの力があります。一方、苦みや悲しみ、悲嘆は、身体的に有害な影響を与えることができます。というのも、こうした感情は特定の化学物質をつくり、これがあなたの体に入るとあなたにとって毒になるからです。ですから、人にとって、感情が身体的な健康といかに密接につながっているか学ぶようになっています。しかし、何でもあなたに霊的に影響を与えるものは、あなたに感情的に、また身体的に影響を与えます。何でもあなたに感情的に影響を与えるものは、霊的に影響を与えます。これらは余りに融和され、つながりがあるので、自分が感情的な攻撃を受けているのか、それとも、これは霊的な攻撃なのかを知るのが困難なことが多いのです。時には、区別が難しいことがあります。時には、ただ感情的なことだと思えます。「(訳者注:情けなそうな声で)ああ、もう感情的にやられちゃった。」と言います。しかし、現実には敵の霊的攻撃だったりするのです。そして、あなたは強い霊的な攻撃を受けていたりするのです。聖書は、「神のことばは生きていて、力があり、両刃の剣よりも鋭く、たましいと霊、間接と骨髄の分かれ目さえも刺し通し(ヘブル4:12)」と教えています。神のことばは、そのような鋭い分断をすることができます。多くの場合、人は自分が深い霊的な経験をしていると思っているのに、実は単に感情的な経験をしていることがあります。感情を養っているのか、霊を養っているのか、その違いを教えるのは、神のことばです。礼拝の多くは、人の感情を養っています。神のことばは、人に霊的な養いを与えます。これは、霊的な食物です。さて、私の体と魂、霊はあまりに融和しており、その一部に影響が出ると自分全体に影響が出ますが、それぞれは区別があり、別のものなので、感情的な必要を霊的な体験で満たすことができません。また、身体的な必要を感情的な体験で満たすことができません。私の体は、生き延びるためには水分が必要です。もし、私が湿度が例えば3パーセントのデス・バレー(訳者注:カリフォルニアにある砂漠地帯)に行ったら、そのような湿度のもとでは、体の水分はすぐに抜けてしまい、水分なしにはあまり長くは生きられません。たとえば、デス・バレーを運転していて、車が故障してしまったとします。私の車は一般道路から外れた所にあつて、モーターがだめになってしまったとします。あまり、長くはここでは生き延びることができない、助けを呼ばなければいけないことに気づきますが、誰も近くを運転してきそうにもありません。それで、私は間違いをしてしまったとします。ちょっと一言いわせてもらおうと、そのような状況に遭遇したら、車といっしょにいてください。死体より、車の方が先に見つかることの方が多いのです。車といっしょにいたほうがいいのです。砂漠地帯では、あなたをつきとめるより、車をつきとめる方が簡単です。多くの人は、汗をかいて、直ぐに水分を失い、数時間で死んでしまうからと考えて、陰を見つけて、そこにいて、身体的に疲れないようにしようと、車を離れてしまうという間違いを犯してしまいます。とにかく、私が愚かで、車から離れてしまったとします。汗をかいて、からだの水分が抜けてしまったとします。とうとう水分の不足により、あまりに衰弱して、私が熱い砂の上に倒れてしまい、横たわっていたとします。そして、「(訳者

注：情けなそうな声で）水、水。」と言ったとします。本能的に私は熱い砂を掘ろうとしたとします。頭のどこかで、この下のどこかに水があるはずだと考えたからです。水を捜そうと、とうとう砂を掘り始めたとします。「水、水。」と言いながら、私が熱い砂を掘っていると、誰かが砂丘のほうからやってきて、「（訳者注：はつらつとした声で）こんにちは。あなたは、チャック・スミスじゃありませんか。」と言ったとします。私は、「（訳者注：情けなそうな声で）はあ。水を。」と言います。「あなたをテレビで見たことがありますよ。あなたがみことばを教えるのを聞きました。あなたは、これまでに最も偉大な教師だということをお伝えしておきたかったのです。」この人たちは、私が愛され、必要とされたいという感情的な必要を満たしてくれているかもしれませんが、しかし、私はこの人たちの腕の中で、「水、水、水。」と言いながら、死にかけています。私はもう死にかけています。身体的な必要を感情的な経験で満たすことができないからです。

逆に、今日多くの子供たちは、真の愛が欠けているために苦しんでいます。物質的には、すべてが与えられています。両親がよく、「子供にとって、何がいけないのかわからない。すべて与えたのに。」と言うのを聞きます。確かに、テレビやVCR、ビデオ・ゲーム、自転車など、考えつくものみな物理的にはあります。しかし、親密さや真の愛は全くありません。子供は独りぼっちなような気がします。両親との交わりがあるのではなく、子供は、いつもこのように言われます。「台所に入ってこないでよ。いらいらするから。あっちへ行ってなさい。テレビを買ってあげたでしょう。あっちへ行って、ゲームでもしてなさい。そうでなかったら、出て行きなさい。私は、オペラを聞こうとしているのに。」そして、子供を追いやってしまいます。子供たちは、あらゆる物質的な娯楽を与える装置を持ってはいるのですが、愛を死ぬほど求めているのです。

今の世の中で実質的な問題の一つは、すべての人の心の中にある霊的な渇きを、身体的あるいは感情的な体験で満たそう、うめようとしている人がいることです。今日これは、あまりによくあることなのです。人は宗教にはまり、様々な感情的な体験をしますが、実は霊的な渇きを満たそうとしているのです。あるいは、霊的な渇きを満たそうとして、流行を転々と追いかけている人、一つのものから別のものへと転々と追いかけている人を見ます。考案されたすべてのおもちゃを持っている人がいます。週末に、キャンピングカーに乗ってくださるのを見かけます。ボートを牽引し、車の上にはハングライダーが縛り付けてあり、オートバイがボートの上に縛り付けてあります。今週末出かければ、こういう光景を見るでしょう。しかし、その人たちの内側には神への深い渇きがあり、それを、身体的あるいは感情的な体験によって満たそうとしています。しかし、とにかくそれではうまくいかないのです。ちょうど、イエスがサマリヤの女に、生ける水、イエスが彼女に与えることのできる水について話されていた時に、こう言われました。ヤコブの井戸の水をさして、「この水を飲むものはだれでも、また渇きます。（ヨハネ4:13）」その言葉は、あなたの人生の全ての野望の上に刻まれるべきものです。水を飲みなさい。達成しなさい。しかし、あなたは満足せず、また渇きます。あなたが買いたいすべての物質的なもの、あの新しい車、あの新しいボート、あの新しい家、その水を飲みなさい。しかし、あなたはまた渇きます。それは、あなたを満足させません。それは、渇きが霊的な渇きで、神への渇きであり、どのような身体的あるいは感情的な体験によってもそれを満たすことができないからです。それは、今人々が犯している大きな間違いです。霊的

な渴きを満たそうとして、世界中を捜し、いろいろな宗教的な体験を捜しているのです。私はよく言うのですが、いったんイエス・キリストの真理を拒絶すると、人は実に愚かなことをし、愚かなことを信じるのに驚かされます(2テサロニケ2:10参照)。道をやってくるすべてのペテン師のえじき、カモになってしまいます。彼らは、私たちの基本にある性質、空しさを知っているのです。ですから、彼らは、「座って、おへそを瞑想して、アウンと言え、得られるのです。見出だすのです。」と約束します。大学教授とか、とても聡明な人たちなのですが、足を組んで、「アウン。アウン。」とやっているのです。それは、真理を拒絶してしまったからです。しかし、捜しているのです。空しさがあります。渴きがあります。「だれでも渴いているなら」と言われた時に、イエスが取り扱っておられたのは、この渴きでした。

渴きに対する、霊的な渴きに対する答えは何でしょうか。イエスは、「わたしのもとに来て飲みなさい。」と言われました。ここでもまた間接的にイエスは、ご自分が神であることを主張されています。人の霊の奥深くの渴きは神に対するものであることをご存じで、イエスは、「だれでも渴いているなら、」つまり、霊の奥深くの神への渴きがあるなら、「・・・わたしのもとに来て飲みなさい。」と告げられました。あなたの神への渴きの答えはわたしだよ、と。イエスは、何度もご自分が神であると宣言されましたが、イエスは、そのことを間接的にも宣言されました。ここは、間接的な箇所の一つです。もう一つの箇所では(以下マルコ10:17-18参照。新改訳脚注参照。)、金持ちの若い支配者がイエスの所に来てひざまずき、「よい先生。永遠のいのちを自分のものとして受けるためには、私は何をしたらよいのでしょうか。」と言ったのを覚えていませんか。すると、イエスは彼に言われました。「なぜ、わたしを『よい』と言うのですか。よい方は神おひとりのほかには、だれもありません。」イエスは、「私はまったくよくない。」と言われたのではないのです。イエスは、「私は神だ。」と肯定されていたのです。「なぜ、わたしを『よい』と言うのですか。わたしは神なのだから。」と言われていたのです。私たちには意識や認識があるのですが、この人が、「よい先生。」と言った時、この意識がどうにかして彼を捕らえたのですが、イエスは、この意識を呼びさまそうとされたのです。ですから、イエスは、「わたしのもとに来て飲みなさい。」と言われていました。ここに、至極単純で、美しい形になった真の福音があります。あなたは渴いていますか。あなたの心は神との体験を切望していますか。わたしのもとに来て飲みなさい。

さて、その結果は、「わたしを信じる者は、聖書が言っているとおり、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになる。(ヨハネ7:38)」とイエスは言われました。イエスはおそらく、「聖書が言っているとおり」というのは、おそらくイザヤ書44章3節を言われていたのでしょう。と言うのも、イザヤ書44章3節で、神が、「渴いたのどと干上がった地をうるおす水を、ふんだんに与えよう。おまえの子供たちには、わたしの霊を注ごう。(訳者注:リビング・バイブル44:3参照。欽定訳は "For I Will pour water upon him that is thirsty, and floods upon the dry ground: I will pour my spirit upon they seed,")」と約束されているからです。ですから、神の約束は、「渴いたのどと干上がった地をうるおす水を、ふんだんに与えよう。おまえの子供たち、子孫たちには、わたしの霊を注ごう。」なのです。ここの欽定訳のギリシャ語の原文は、ギリシャ語の原文の強さを本当には表していません。欽定訳では、「その人の腹から、生ける水の川が流れ出るようにな

る。」となっていますが、ギリシャ語の原文は、もっと強く、「その人の腹から、あるいは、心の奥底から、生ける水の川が滝のようにほとばしり出るようになる。」と訳した方がよいのです。欽定訳の本文では、森の中を小川がさらさら流れるのを描いてしまうかもしれません。しかし、ギリシャ語の原文は、力強い洪水が山にある峡谷を滝のように流れているのを描いています。生ける水の川が滝のようにほとばしり出るようになるのです。この時点で、ペテロがヨハネの方を向いて、「ヨハネ。彼はいま何の話をしているんだ。判じものさ。何だと思うんだ。」と言っているのが想像できません。ヨハネは、「さあ。さっぱりだ。俺にはわからんよ。」と言っています。しかし、イザヤの預言に注目してください。「渴いたのどと干上がった地をうるおす水を、ふんだんに与えよう。おまえの子供たちには、わたしの霊を注ごう。」

さて、ヨハネは何年もたってから、エペソにおいて、晩年に、ヨハネの福音書を書きました。おそらく筆をとったのは、ほぼ60年もたった後のことでした。その時には、イエスが言われたことについて、もっと理解がありました。このときヨハネは、後知恵という実に有利な観点から、イエスのみことばを見えています。イエスが、立って大声で群衆に、「だれでも渴いているなら、わたしのもとに来て飲みなさい。」と言われた日のことを振り返っています。ヨハネは振り返って、ここでイエスが話されていたことを説明しています。ですから、通常聖書には、括弧の中に、「だれでも渴いているなら、わたしのもとに来て飲みなさい。」と言われたと時、イエスが何を言われていたのかについて、ヨハネが自分の注釈をしていることが示されているのに気づきます(訳者注: 欽定訳には、ヨハネ7:39は括弧の中にはいっているが、新改訳など日本語の聖書には括弧がない。)。ヨハネの注釈は、こうでした。「これは、イエスを信じる者が後になってから受ける御霊のことを言われたのである。…御霊はまだ…いなかった。」斜体で書かれている「注がれて(given)」という言葉は、考えを理解するのを助けるために翻訳者が付け加えた言葉を示します(訳者注: 欽定訳ではそのようになっています)。しかしイエスは、これは、イエスを信じる者が後になってから受ける御霊のことを言われました。イエスは、聖霊についてどのようなことを言われていますか。聖霊は、あなたの人生から滝のようにほとばしり出る生ける水のようだ。さて、私たちは、聖霊が内住してくださっているとはどういうことか知っています。私たちのからだは聖霊の宮であり、聖霊が私たちの内にいてくださるとはどういうことか知っています(1コリント7:19参照)。聖霊が私たちをイエス・キリストの似姿に変えてくださるといふ、私たちの人生におけるすばらしい聖霊のお働きを私たちは知っています(ローマ8:29参照)。しかし、これは何か異なったものです。これは、あなたの人生から流れ出るものです。あなたの心の奥底から、生ける水の川が滝のようにほとばしり出るようになるのです。「御霊のことを言われたのである」とヨハネは述べています。

さて、用語に関する議論はすべて脇に置いておいて、あなたがそれをどう呼ぼうと私は気にしません。聖霊のパプテスマであろうと、聖霊の賜物であろうと、聖霊の満たしであろうと、あなたがその体験をどの用語で呼ぼうとあまり問題ではありません。しかし、イエスが話されている、聖霊があなたの生活から、生ける水の川が滝のように流れほとばしり出るという、この体験についてですが、私のみなさんへの質問は、こうです。これが、今あなたの人生で起こっていることを描写しているでしょうか。これが、あなたの聖霊との関係を描写しているでしょうか。あなたは、「そうです。

ハレルヤ。聖霊があふれ流れ出ている結果、私の生活から愛、力、原動力が、滝のように流れほとばしり出ています。」とすることができるでしょうか。質問は、あなたはバプテスマを受けましたか、とか、満たされていますかとか、御霊の賜物を持っていますか、ではなく、質問は、あなたの生活から、生ける水の川があふれだし、滝のように流れほとばしり出ていますかです。もし、それがあなたと聖霊との関係を描写するものでないなら、これまでにあなたが体験されたより、もっと神があなたのために備えてくださっているということを言わせて下さい。神があなたのために用意して下さっているものを持つべきではありませんか。神が約束して下さっているものを私たちは求めるべきではありませんか。それは、聖霊の原動力、力、愛にあふれた生活です。私は、自分が得ることができる、神が私のために用意して下さっているすべての助けを必要とし、望んでいます。パウロがコリント人に対し、彼らがどの御霊の賜物についても欠けることがないようにと祈ったように(1コリント1:7参照)、私のみなさんに対する祈りもそうです。神があなたの生活においてなさろうと望んでおられるものについて、あなたが欠けることがありませんように。この御霊の原動力をとおして、それが解放され、あなたの生活から生ける水の川が滝のように流れ出ますように。

信者のうちにおられる聖霊 パート1 (#3058)

Holy Spirit in the life of a believer Part1

イエスは弟子たちにお話になりこう言われました。「わたしは父にお願いします。そうすれば、父はもうひとりの助け主をあなたがたにお与えになります。その助け主がいつまでもあなたがたと、ともにおられるためにです。その方は、真理の御霊です。世はその方を受け入れることができません。世はその方を見もせず、知りもしないからです。しかし、あなたがたはその方を知っています。その方はあなたがたとともに住み、あなたがたのうちにおられるからです。(ヨハネ14:16-17) 」

今晚から、シリーズの中の小シリーズを始めたいと思いますが、信者の生活のうちにおられる聖霊の働きを見ていきます。私たちは、聖霊のバプテスマ、満たし、あるいは何でも好きな題目をつけて下さってよいのですが、信者が持つことのできる聖霊との関係について話してきました。自分の生活から御霊が放出される、御霊があふれ流れ出ることについて話してきました。満たされることとあふれ流れ出ことは別です。御霊が内住して下さっている、自分の命に入ってきて下さることと、聖霊が自分の生活からあふれ流れ出ことは別です。しかし、自分の生活のうちにおられる聖霊の働きについて見ていきたいのです。そして、御霊の賜物を見て、聖霊が、様々な御霊の賜物が、自分の生活からどのように流れ出られるかを見てゆきます。しかし、(今回の小シリーズは)聖霊の内なる働きについてです。この「もうひとりの助け主」という言葉ですが、この「もうひとり(another)」という言葉のギリシャ語は、アロスです。これは、全く同じ種類のもの、あるいは、同等の質という意味です。同じ等級の、同じ種類の、同じ質の「もうひとり(another)」です。もう一つ「もうひとり(another)」と訳されるギリシャ語の言葉があります。その言葉は、異なる質の「もうひとり(another)」という意味です。レンタカーのハーツに行き、「小型車のジオを予約なさいましたが、いまそれはすべて出払っています。しかし、別のリンカーン・タウン・カーを同じお値段で御用意できます。」と言われたとします。それはヘテロスです。それは、同じ質、同じではありません。もし、タウン・カーを予約しておいて、「それは、ありませんがキャデラックか何かなら御用意できます。」と言われたのであれば、それはほぼ同じ質です。イエスが聖霊について、同じ質のものとして話されたとき、聖霊に神性を帰しておられます。イエスは、聖霊が神であると宣言されているのです。わたしはこれまであなたがたとともにいたが、わたしは去って行きます。「わたしは父にお願いします。そうすれば、父はもうひとりの…」アロス、同じ質の、同じ種類の「…助け主をあなたがたにお与えになります。」「助け主」という言葉のギリシャ語はパラクレトスです(訳者注:チャックの発音ですとパラクリートに聞こえます。)。これは、あなたのそばに来て、あなたに関する事柄をとりなしてくれる、あるいは嘆願してくれる、という意味です。あるいは、ここで使われているように、あなたのためにいかなる方法でも援助してくれるという意味です。「わたしは父にお願いします。そうすれば、父はもうひとりの助け主をあなたがたにお与えになります。」「いかなる方法でもあなたを援助する、同じ質の方をお与えになります。

さて、イエスは弟子たちに、自分が裏切られる、殺されることを話してこられました。イエスは弟子たちに、自分が去って行く、そして、そこに今弟子たちが来ることができないことを話してこられ

ました。そして、こうした話をみな弟子たちは理解することができていません。弟子たちは、御国の建設が遅れることが理解できないのです。弟子たちの頭の中では、イエスは依然として、すぐに御国をお立てになると考えていました。イエスが弟子たちに、自分が去って行く、そして、そこに今弟子たちが来ることができないことを話されると、そのことが弟子たちを不安にします。自分が死ぬとイエスが話されると、そのことが弟子たちを不安にします。ですから、この章(訳者注:ヨハネ14章)の冒頭で、イエスは、「あなたがたは心を騒がしてはなりません。(14:1)」と言われているのです。弟子たちは、本当に不安になっていました。イエスは、去って、弟子たちのために場所を備える、そしてまた来て、弟子たちを自分のもとに迎える、と言われました。しかし、これらは不可解な言葉でした。心を騒がす言葉でした。イエスは、弟子たちにとって、真の擁護者でした。律法学者やパリサイ人たちは、弟子たちをいじめるのが好きでした。マルコの福音書9章(訳者注:7章のことか。)にはこのように書かれています。イエスは弟子たちの回りに大ぜいの人の群れがおり、律法学者たちがそこにいて、弟子たちに質問を浴びせているのをご覧になりました。このため、人だかりができていました。人が議論しているところに、人が集まりますね。イエスは近寄ってきて、「何をあの人たちに話しているのですか。」と言われました。わたしの小さい子羊をいじめるな、と。彼らは、イエスに、「なぜ、あなたの弟子たちは、手を洗わないでパンを食べるのですか。」と言いました。イエスは、いつも上手に擁護されました。イエスは、話をして、彼らを黙らせることができになりました。「あなたの弟子たちが、安息日にしてはならないことをしています。(マタイ12:2)」するとイエスは、ダビデが食べてはならない供えのパンを食べたことをお話になりました。イエスは、強力な擁護をされました。弟子たちは、宗教学校で、聖書について、同じような教育を受けるという特典を享受していないのに、これらの学者たちに対しどのように自分を守ればよいのでしょうか。イエスは去って行くと言われました。パリサイ人たちがやってきて、難題をふっかけてきたらどうすればよいのでしょうか。律法学者たちが、難題をふっかけてきたらどうすればよいのでしょうか。これについて、弟子たちは不安になっていました。それも、もったもなことでした。しかし、イエスは、「わたしは父にお願いします。そうすれば、父はもうひとりの助け主をあなたがたにお与えになります。」と言われているのです。あなたのそばにいて、あなたに関する事柄について嘆願してくださる方を、あなたといっしょにいて、助け、援助をする方を。

14章26節で、イエスは続けて言われました。「しかし、助け主、…」そばにきてあなたを援助し、あなたに関する事柄について嘆願してくださる方」ですが、ここで、イエスは、それが聖霊であると明らかにしておられます。「…すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊は、あなたがたに話したすべてのことを思い起こさせてくださいます。」ですから、信者の生活のうちにおられる聖霊の働きですが、「助け主」という名前それ自体がそのことを示唆しています。そばにきて、あなたの事例について嘆願してくださる方、あなたのためにいかなる方法でも援助してくれる方です。今度は、その方が、「あなたがたにすべてのことを教えてもくださいます。」イエスは、この最後の時になっているにもかかわらず、「あなたがたにもっと話すことがあるが、いまはあなたがたはそれをいま理解することができない。」と言われています。あなたがたは、それを受け取ることができない。しかし、ここで聖霊が来られる。彼らを教え、聖書を理解できるように助けてくださるのです。

理解が欠けていることを余り心配しなくてもよいのです。わたしが教えたように聖霊も教える、と。聖書を学ぶことは、大いなる特権です。聖書は偉大な本です。学べば学ぶほど、聖書にびっくりさせられます。実に祝福です。聖書の学びに役立てたり、学びにプラスになることとして、聖書の原語を学ぶことは便利なことです。原語から、英語にはあまりうまく訳すことができないニュアンスなどをできるだけ把握することができるかもしれないからです。時折、ちょっとした大切なものを発見します。ギリシャ語を勉強したので、祝福されたちょっとした大切な真理を発見することができるので、私も時々よい気分になることがあります。私はギリシャ語を勉強しましたが、ギリシャ語を習得したとは言いませんでした。私は勉強をしたのです。生まれつき外国語が得意というわけではありません。外国語はとても難しいです。私の脳は、外国語を学ぶのに適切にはできていません。他の分野で、私が生まれつき適性がある分野がありますが、外国語ではありません。しかし、それでも掘り下げて見ていくことができるほど十分なギリシャ語を知っていますが、やはり難しいです。しかし、掘り下げて見ていくと、大切なものを発見します。時には、このような大切なものを発見するために、掘り下げて見ていく価値があります。

私が何年も、何年も前にハンティントン・ビーチで牧会をしていた時、教会に祝福された神の聖徒がいて、その人はようやく小学校を終えたという程度の人でした。彼女はオクラホマ出身で、小学校を終えた後は学校に行くのをやめました。彼女は主を愛していました。彼女は、本当に神の聖徒でした。私は、ガラテヤ人への手紙を学び、掘り下げてギリシャ語を見て、ギリシャ語に表れている大切な真理を見つけようとしていました。そして、一つ見つかり、「わあ、これはすごい。少しギリシャ語を知っていることは、すばらしいことだ。」とっていました。この女性は、「スミス兄弟。先日ガラテヤ人への手紙を読んでみますと、ここを読んでみますと、ここは、こういう意味にちがいませんね。」と言うのです。彼女は同じ真理を話すのです。それで私は、不公平だと思いました。私はギリシャ語で赤点をとらないように幾晩も夜なべしたのに、この女性はギリシャ語なしにわかってしまうのです。しかし、そのことをイエスは言われているのです。「聖霊があなたがたに教えます。」ですから、イエスは弟子たちに、「あなたがたは聖書の理解が欠けていることを心配しなくてもよいのです。わたしがあなたがたに教えたように、これからは聖霊があなたがたに教えて下さるのです。」とされています。

ヨハネの手紙第一2章27節で、「あなたがたのばあいは、キリストから受けた注ぎの油が」、これは聖霊のことですが、「…あなたがたのうちにとどまっています。それで、だれからも教えを受ける必要がありません。彼の油がすべてのことについてあなたがたを教えるように、— その教えは真理であって偽りではありません。— また、その油があなたがたに教えたとおりに、あなたがたはキリストのうちにとどまるのです。」ですから、あなたがたは本当はだれからも教えを受ける必要はありません。これは、おもしろいのです。ほぼすべてのカルトは、人があなたを教える必要があると言います。この人たちは、自分たちの本を売ることを強調します。あなたに自分たちの本を読ませようとします。なぜ、そんなに彼らの本を読む必要があるのでしょうか。それは、彼らの本によって導かれない限り、彼らのようなおかしな解釈と同じ解釈に、あなたがたどり着くことがないからです。もし、あなたがただ聖書を読んで下さるなら、みなさんが信じるようになることについて

私は全く恐れを抱いていません。ただ聖書を読みなさい、と言うのに何等不安は感じません。聖書を読み、聖霊にあなたの心に教え、知らせるようお願いするなら、聖霊があなたをすべての真理に導き入れて下さると信じます。さて、「だれからも教えを受ける必要がありません。」という考えですが、現実的に、神は教会に、聖徒たちを整えて奉仕の働きをさせるために、教師、牧師教師(pastor-teacher)をお立てになっています(エペソ4:11-12参照)。しかし、おもしろいことに、私たちは神のみことばを教え、神のみことばの真理を教えているかもしれませんが、聖霊が自分の心にあかしして下さるのでないなら、本当にはそれを習得することがないのです。実際に私たちに聖書を教えて下さるのは聖霊です。聖書の著者が、ご自分がお書きになったことを私たちが理解するのを助けて下さるとは、何とすばらしいことでしょう。時々、本を読んで、その本の著者に、「一体全体、あなたの言いたいポイントは何なのですか。何を言わんとしているのですか。」と話がしてみたくなることがあります。著者である聖霊が、私たちに教えてくださるとは、何とすばらしいことでしょう。

マルコの福音書12章36節で、イエスはこう告げられました。「ダビデ自身、聖霊によって、こう言っています。」使徒行伝1章16節で、ペテロは、聖霊がダビデの口を通して語られた、と告げました。そして、サムエル記第二23章1節と2節では、ダビデが最後に語ったことばが取り扱われています。ダビデは、「ヤハウェの霊は、私を通して語った。」と告げました。ですから、ダビデは、聖霊によって語っていたと告げたのです。ペテロがそれを確認し、イエスは、彼が聖霊によって語ったと告げられたことによって、それに決着をつけておられます。一方で聖霊は靈感を与えて下さり、もう一方私たちの側で、聖霊はその照明(illumination)を与えてくださっています。聖霊は靈感を与えられましたが、またこの方は、私たちの心にそれを照らして下さいます。そのことをイエスは言われています。「助け主、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え」られます。「また、わたしがあなたがたに話したすべてのことを思い起こさせて下さいます。(ヨハネ14:26)」みなさんは、だれかに話していて突然、自分では知っていると思っていなかった聖書の箇所を引用しているという体験をされたことがないでしょうか。私には、そのようなことがとても頻繁に起こります。聖書の箇所を引用し始めて、それがするすると出てくるのです。自分がその聖書の箇所を覚えていたことも知りませんでした。それなのに、その時に聖霊が思い起こさせて下さり、その聖書の箇所を思い出させて下さいます。

さて、パウロは、聖霊が私たちに神のみことばが理解できるようにして下さることについて書いています。コリント人への手紙第一2章9節からの聖書の箇所です。「まさしく、聖書に書いてあるとおりです。『目が見たことのないもの、耳が聞いたことのないもの、そして、人の心に思い浮かんだことのないもの。神を愛する者のために、神の備えてくださったものは、みなそうである。』神はこれを、御霊によって私たちに啓示されたのです。御霊はすべてのことを探り、神の深みにまで及ばれるからです。いったい、人の心のことは、その人のうちにある霊のほかには、だれが知っているでしょう。同じように、神のみこころのことは、神の御霊のほかにはだれも知りません。ところで、私たちは、この世の霊を受けたのではなく、神の御霊を受けました。それは、恵みによって神から私たちに賜ったものを、私たちが知るためです。(2:9-12)」ですから、私たちが受けた聖霊は、私た

ちが神から賜ったものを私たちが知るようになるのを助けて下さいます。パウロは、それについてこう述べています。「この賜物について話すには、人の知恵に教えられたことばを用いず、御霊に教えられたことばを用います。その御霊のことばをもって御霊のことを解くのです。生まれながらの人間は、神の御霊に属することを受け入れません。それらは彼には愚かなことだからです。また、それを悟ることができません。なぜなら、御霊のことは御霊によってわきまえるものだからです。(2:13-14)」

さて、今日私たちの問題の一つは、何年も神学校で聖書を学び、神学校で教え、学者として知られている人がいることです。彼らは原語で聖書を勉強しました。聖書についてたくさんの著書があり、聖書の特定の本文について著書があるのですが、大きな問題が一つあります。それは、彼らが新しく生まれていないことです。ですから、聖書を純粹に人間至上主義の観点から見ていません。このために、この人たちは非常にずうずうしくなり、どれがイエスが実際に話されたことばか、使徒たちが書いてそれをイエスが言ったようにしているのか主張するまでになっています。また、イザヤ書にどれほど多くの著者がいるかをあなたに言うことができます。こういったことみな聖書についてのことを、あたかも自分たちが最終的権威であるかのごとく、あなたに言います。聖書のどの部分が本物で、どの部分がそうではないと言うことには、一つの問題、大きな問題があります。その大きな問題は、自分が学者の権威になった途端に、「ヘブル語の書き方などを学んだが、ここは書き方が変わっている。私は明らかにヘブル語の書き方の変化を示すことができる。一人のイザヤはこれだけしか書いておらず、もう一人のイザヤは云々・・・」ということで、これを本当には信頼できない。あれは本当には信頼できないが、これは受け入れることができる。あるいは例えば、このイエスのことばは、ただこの人たちがやっただけのことだ。」というようになってしまうことです。誰でも、どの聖書の部分が本物か、何がみせかけかを見分ける権威になると、そのような権威になってしまったその瞬間から、聖書はもはや権威にはなりません。その人たちが権威になってしまいます。しかし、その問題は、こうした権威者たちが互いに議論していることです。ですから、どの権威を自分は信じるかになってしまいます。この究極は、全くの混乱になってしまいます。もし、全体を信じることができないなら、何も信じることができないと私は思うのです。しかし、もし全体を信じるができるなら、聖書全体が神の靈感によるものだと、無謬の神のみことばだと信じるのに、全くなんなら問題を感じません。それには、何の問題も感じません。問題を感じなくて嬉しく思っています。

さて、私が言及したハンティントン・ビーチにいる女性のような、御霊に満たされた神の子どもは、御霊に満たされ、神を愛し、神のみことばを愛している人は、博士号をもっているが新生していない、原語を知っている人よりも、現実には真実の導き手なのです。というのも、「生まれながらの人間は、神の御霊に属することを受け入れません。また、それを悟ることができません。なぜなら、御霊のことは御霊によってわきまえるものだからです。」もし、聖霊の助けなしに聖書を理解しようとするなら、様々な奇妙なことにはまってしまうのです。奇妙な曲解が出てくるのは、このせいです。聖霊を持っていない人、生まれながらの知性、生まれながらの考えを持っている人が、霊的な事柄を理解しようとしているからです。ですからイエスは、聖霊が私たちに教えて下さると言わ

れたのです。「だれからも教えを受ける必要がありません。(1ヨハネ2:27)」と。神はこれを、御霊によって私たちに啓示されたのです。御霊はすべてのことを探り、神の深みにまで及ばれるからです。

確かにこれが、使徒行伝に現わされているのを読みます。どのように聖霊が彼らに思い起こさせて下さったかを見ます。縁遠い、不明瞭な聖書の箇所なのに、彼らは本当に分かるようになったのです。ペテロが語ったとき、ペテロが語ったときはいつも、聖書の箇所を引用しました。ペテロは、聖書を使いこなせるかなりの知識を持っていました。聖霊によって、縁遠い、不明瞭な聖書の箇所が分かるようになっただけでなく、聖書の長い箇所を引用することができるようになり、適用することができるようになったのです。ペテロが弟子たちと集まり、聖霊が教会に注がれたとき、群衆は嘲って、新しいぶどう酒を飲んだのだろうと言いました(以下使徒行伝2章参照)。ペテロは、ヨエルの預言からかなり長い聖書の箇所を引用して人々に説明をし始め、今何が起きているのか正確に示しました。人々は、「いったいこれはどうしたのか。」と話していました。ペテロは、「これは預言者ヨエルによって語られた事です。」と言いました。そして、ペテロは預言を引用していません。しかし、ペテロが続けてイエスについて宣べ伝えると、今度は詩篇から引用し始めました。ダビテが聖霊によって「あなたは私のたましいをハデスに捨てて置かず、あなたの聖者が朽ち果てるのをお許しにならないからである。」と語りました。ペテロは、つねに聖書の箇所を引用しました。聖霊が彼に思い起こさせて下さると、聖霊が聖書の理解と適用を与えて下さいます。

ステパノが議会の前に立たされたとき、会堂に属する人々に詰問をされたとき、「彼が知恵と御霊によって語っていたので、それに対抗することができなかった。(使徒6:10参照)」とあります。ここに、リベルテンなど様々な宗派の指導者がいました。そこにいたステパノは、ただ教会の執事をしていただけの人でした。しかし、聖霊の油注ぎがあり、知恵が与えられていたので、人々はそれに対抗することができませんでした。この人に人々は対抗できなかったのです。人々がステパノを全議会の前に連れて来たとき、ステパノは、創世記から始めて、預言者を通し、聖書の説明をしていきました。それは、まさに傑作でした。彼は、彼らの傑出した父祖たちがいかに彼らと同じように盲目であったかを示しました。あなたがたは、我々の父祖はこうだ、我々の父祖はああだと言い続けているが、あなたがたの父祖は、ヨセフを銀20枚でエジプトの奴隷として売った。神がその家族を守るために、彼を任命されていたことであると気づいていなかった。二回目の時、彼らはようやくヨセフの地位を認め、ヨセフが、自分の家族を導く目的のために神が任命された人であることを認めた。彼らはそれを拒否したのである。ヨセフが自分の夢を彼らに話した時に、彼らはヨセフが支配者であることを拒否した。しかし二度目は、神がヨセフに油注がれたことを見た。一度目は、盲目になっていました。モーセは、民を導くために自分が神に選ばれているということをも人々が理解するだろう、と思っていた。しかし、そうではなかった。モーセはいのちからがら逃げ、40年間行ったままである。二度目になって初めて、人々はモーセは神が選ばれた指導者であると認めた。二度目には、人々は認めている。彼らは、父祖の型にはまっていました。それで、ステパノは、「あなたがたの先祖が石を投げなかった、あるいは、投獄しなかった預言者はいましたか。しかし、あなたがたは彼らよりも悪いのです。彼らが預言してきた方をあなたがたは殺したからで

す。」と言いました。それは、人々の気に入りませんでした。しかし、それには風格がありました。絶対に風格がありました。使徒行伝7章55節を読むと、彼、ステパノは聖霊に満たされており、…これはメッセージの最後のどころですが、…「天を見つめ、神の栄光と神の右に立っておられるイエスとを見て、こう言った。『見なさい。天が開けて、人の子が神の右に立っておられるのが見えます。』」聖霊にいっぱい満たされていました。聖霊が靈感を与え、あのメッセージ全体、聖書の箇所をあのよう風格をもってまとめて下さったのです。

聖霊は弟子たちに、彼らに対する告発への対応に靈感を与えて下さいます。イエスは、「また、人々があなたがたを、会堂や役人や権力者などのところに連れて行ったとき、何をどう弁明しようか、何を言おうかと心配するには及びません。言うべきことは、そのときに聖霊が教えてくださるからです。(ルカ12:11-12)」と言われました。聖霊は、そこにあなたといっしょにいて、あなたを抗弁して下さい。あなたにことばを与えて下さいます。何か思いつきの短いスピーチをしなくてもよいのです。神の聖霊の油注ぎがあなたに臨んでくださり、答え、応答が与えられます。私たちはすでに、ステパノの場合についてどうであったかを見ました。また、ペテロについても読みます。足なえの男を癒したことでペテロが議会に連れ出されたとき、このように書かれています。「そのとき、ペテロは聖霊に満たされて彼らに言った。『イスラエルの指導者たち。私たちがきょう取り調べられているのが、病人に行なった良いわざについてであり、…』(使徒4:8-9参照)」そして、続けてペテロは彼らに説得力のある、風格のある抗弁の説教をしました。それで、彼らはペテロの答えに驚きました。それは、人々がペテロは普通の人で、無学であると見ていたからでした。

ヨハネの福音書16章13節で、イエスは言われました。「しかし、その方、すなわち真理の御霊が来ると、あなたがたをすべての真理に導き入れます。御霊は自分から語るのではなく、聞くまを話し、また、やがて起ころうとしていることをあなたがたに示すからです。父が持つておられるものはみな、わたしのものです。ですからわたしは、御霊がわたしのものを受けて、あなたがたに知らせると言ったのです。(16:13-15)」ですから、聖霊が彼らをすべての真理に導き入れておられました。そして、聖霊が彼らに思い起こさせて下さっていました。ヨハネの福音書2章22節にはこうあります。「それで、イエスが死人の中からよみがえられたとき、弟子たちは、イエスがこのように言われたことを思い起こして、聖書とイエスが言われたことばとを信じた。」イエスは、聖霊があなたがたに思い起こさせて下さる、と言われました。そして、イエスがよみがえられたとき、弟子たちは、「ああ、あの方がそうおっしゃっていたことを覚えています。」と思い起こしました。しかし、それは、聖霊が弟子たちの記憶を刺激されたのでした。ヨハネの福音書12章16節にはこう書かれています。「初め、弟子たちにはこれらのことがわからなかった。しかし、イエスが栄光を受けられてから、これらのことがイエスについて書かれたことであって、人々がそのとおりにイエスに対して行なったことを、彼らは思い出した。」初め、弟子たちには、イエスがこれらのことを話されていたとき、理解できませんでした。しかし、後になって、イエスが栄光を受けられてから、聖霊が弟子たちを思い起こさせ、全体像が描かれました。

ですから、信者の生活のうちにおられる聖霊の働きは、第一に、神のみことばを信者の心に照らし、聖書の理解を援助し、聖書を擁護するのを助け、聖書を、神のみことばを信者に思い起こ

させて下さる事です。したがって、私たちの聖書の学びと理解について、私たちの生活うちにおられる聖霊の働きはすばらしいのです。

信者のうちにおられる聖霊 パート2 (#3059)

Holy Spirit in the life of a believer Part2

では、聖書の使徒行伝1章を開きましょう。信者のうちにおける聖霊の働きのテーマの学びを続けています。信者のうちにおける聖霊の働きについて、先週は、神のこと、神のみことばを私たちに教えて、説明をされることを見ました。信者のうちにおける聖霊の働きについて、今晚は、聖霊が証人になる力を私たちに与えられることを見てゆきたいと思います。

4節で、イエスが弟子たちといっしょにおられるとき、聖霊のバプテスマを受けるまでエルサレムを離れないでいなさい、と命じられました。弟子たちは、イエスが話されていることと無関係の質問をしました。それは、重要な質問ではありませんでした。イエスがとても関心を持っておられた質問でしたが、弟子たちが聖霊のバプテスマを受けるといふ、イエスが話されている事とは無関係でした。弟子たちは、「主よ。今こそ、イスラエルのために国を再興してくださるのですか。(使徒1:6)」と言いました。弟子たちが、主に対し期待していたのは、この事でした。弟子たちは、主が十字架につけられることを期待していませんでした。主がイスラエルのために国を再興してくださることを期待していました。それは、メシヤに関する約束にしたがって、イスラエルが義なる王とともに全世界を支配するようになるためでした。そしてイエスは、40日間、御国について彼らに話されていました。しかし、イエスは今、弟子たちに、また別のテーマを話しておられるのですが、それは聖霊のバプテスマです。面白いことに、私たちは、自分がとても気に入っているテーマについて、興味のある質問をすることによって、本題からずれてしまうことがよくあります。そして、もともとの話題からあまりにかけ離れてしまい、実際の問題が何だったか忘れてしまうことがよくあります。イエスはあまり説明もせず、弟子たちの質問を却下されて、今のテーマである弟子たちが聖霊のバプテスマを受けることに話を戻しておられます。そして、8節で告げられました。「しかし、聖霊があなたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。」ですから、聖霊のバプテスマは、全世界中でイエスの証人となるための力を、彼らに与えるためのものでした。面白いことに、使徒行伝の話にそって見てゆきますと、まず彼らは、イエスの証しをエルサレムにもたらしました。あまりにその事をしたので、この人の教えが町中に広まったと非難されたほどでした(5:28参照)。エルサレムで迫害が起こると、教会はユダヤ全土に散らされ、みなは至る所に行ってみことばを宣べ伝えました。ですから、彼らはユダヤにみことばを広めるようになりました。使徒行伝の記録から、パウロ(訳者注:ペテロのことか。)がルダに行って、そこで何人かの弟子たちと会いました。彼がそこにいたとき、何人かの弟子たちがヨッパで亡くなった人に奉仕するために彼を呼びました。ですから、ユダヤ全土に、信者の集まりがあちこちにありました。それから、ピリポがサマリヤに行って、人々にキリストを宣べ伝えたことが書かれています。そして、13章に入りますと、聖霊が、「バルナバとサウロをわたしのために聖別して、わたしが召した任務につかせなさい。(2節)」と言われ、そこで彼らは、断食と祈りをして、手を彼らの上に置き、御霊によって送り出され、ふたりは地の果てまで福音を宣べ伝える任務を始めたことがわかります。その後の使徒行伝の箇所は、だ

いたい、パウロが世界に福音を宣べ伝えた伝道旅行についてです。

さて、これらはすべて、聖霊の力によってなされたのでした。彼らが全世界に福音を伝えることができるようになったのは、聖霊の力によって可能になったのでした。余りに多くの人が、証しをただ、他人に対して自分の信仰や証しを言葉にすることだと思っています。聖書について、イエス・キリストについて、救いについて、永遠のいのちの神の賜物について話をするのだと、思っているのです。証人となることを、イエス・キリストを必要としていることを他人に言葉に出して話すことだけだと、私たちは考えてしまいます。しかし、証人となることは、単に人に招きをしたり、誰かにイエス・キリストを伝えることを、はるかに越えたものです。誰かにイエス・キリストを伝えるよりも、もっと力強い証しは、その人の前でイエス・キリストのように生きることです。昨日私は高校のキャンプに行って、すばらしい若者たちと一日を楽しみました。昨日、若者たちのために奉仕をさせてもらい、神の御霊の働きを彼らの内に見ることができてとてもワクワクしました。昨晩去ろうとしていると、女の子が私のところにやってきて、「チャックさん。私は自分の兄弟に証がしたいのです。どのように自分の兄弟に証をすればよいのか分かりません。」と言いました。私はこの子に、「ただ、彼の前で、クリスチャンの生活をしなさい。」と言いました。「あなたの人生においてイエスが何をしてくださったかを、見てもらいなさい。彼に対する証として、それが一番力強い証となるでしょう。」と。

私たちがイエス・キリストの証人になると言うとき、イエス・キリストを証する生活について話をしているのです。私たちが言うことは往々にして、自分の有様や、自分のすることによって、全く信用されなくなってしまいます。誰かに言葉で証しすることはできます。「私の人生におけるイエスの働きは、実にすばらしい。イエスは本当にすばらしい平安を下さる。あなたも、このイエスの平安を必要としています。」と言うことはできます。しかし、その人の隣で仕事をしていて、何か苛々することがある度に、あなたは爆発し、怒ってしまい、すべてのものに対し、全ての人に対し怒鳴るけれども、あなたは、「イエスは、とてもすばらしい平安を下さる。」と言ったとします。あるいは、主にある喜びについて語ったとします。いつもあなたは不機嫌で気むずかしく、みんなにガミガミ言っていたとします。あなたがどういう人であるかのゆえに、あなたが言うことは、相手の人には意味をなしません。ですから、私たちの生活がイエスの平安、イエスの愛の証となることが非常に重要です。それが私たちの生活の内に機能しているのを、人々は見ます。滑稽なことに、人々が聖書について奇妙な考えを持って、神から啓示を受けたと考えることが多いです。多くの場合、この啓示を教会に話す必要があると感じるのです。聖書の真理についての啓示を、ここのキリストのからだに来て話してみたいという要請を、私たちはよく聞きます。聖霊というよりはむしろ、オニオン入りのイン・アンド・アウト・バーガー（訳者注：イン・アンド・アウト・バーガーは、主にカリフォルニア州に店舗を展開しているハンバーガー・チェーン店のハンバーガーのこと。）によって靈感を受けたのではないかと思うような、夢か何かから得た曲解された解釈なのです。そのような人たちに私はよくこう言います。「この真理が、あなたの歩み、あなたの生活にどのように影響を与えているのかを観察する機会を下さい。それが、あなたをイエスに近づけたのを見せて下さい。あなたの生活にもたらされた平安と喜びを見せて下さい。これらの真理の実をあなたの生活に見るとき、私た

ちの方からあなたの所に来て、何があなたを変えたのかを私たちに分かち合ってくださいと願います。」私たちの生活が、私たちの証と一致していることが大切です。それが真の証です。あなたの生活があなたの証と一致していて、あなたの生活の中でそれが機能しているのを見ることができる、あなたの生活の中で模範を見ることができることです。ですから、パウロはテモテに、「信者の模範になりなさい。(1テモテ4:12)」と言ったのです。パウロがエペソの長老に話したとき、「私がどんなふうにあなたがたと過ごし、教え、示してきたか・・・」と言いました。私の生活は、私があなたに分かち合ってきた真理を立証するものでした、と。

黙示録は、イエスが「忠実で、真実な証人」だと語っています(3:14参照)。イエスは、忠実で真実な御父の証人でした。ですから、もし、神について全てを知りたいのであれば、もし、神がどのような方か知りたいのであれば、イエスを見れば、まさに神がどのように考えられるか、どのようにお感じになるか、神がどのような方かが発見できます。イエスは、忠実で真実な神の証人でした。イエスがそのような方であったので、ピリポがイエスに、「主よ。私たちに父を見せてください。そうすれば満足します。(ヨハネ14:8)」と言ったときに、イエスは、「こんなに長い間あなたがたといっしょにいるのに、あなたはわたしを知らなかったのですか。わたしを見た者は、父を見たのです。どうしてあなたは、『私たちに父を見せてください。』と言うのですか。(ヨハネ14:9)」と言われたほごです。ですから、イエスは、もしあなたがわたしを見たのであれば、父を見たのです、と告げておられるのです。そのように告げることができました。それは、イエスが忠実で真実な証人であられたからです。イエスを見ることによって、神がどのような方かを知ることができます。クリスチャンと言う名前が新しく造語されたのは、アンテオケにおいてでした。世が、イエス・キリストの信者の生活を観察することにより、彼らをクリスチャンと呼びました。これは、「キリストに似た者」という意味でした。世が、そのような肩書きをくれることは、すばらしいことです。出て行って、宣言する必要はなかったのです。「えー。私はクリスチャンです。」「はあ。あなたが、そうですか？あなたはキリストに似た者ですか。」あなたの生活を他の人が観察した後で、そのような肩書きをくれ、「ああ、彼は本物のクリスチャンだ。彼は本当にキリストに似た者です。」と言ってくれるのはすばらしいことです。もし、人があなたに、「ああ。イエス・キリストに会うことができたならなあ。」と言ったとき、「もし、あなたが私を見たのなら・・・」と言えなければいけないのです。そうなら、忠実で真実な証人になります。イエスは、御父について、そう言うことがおできになりました。「わたしを見た者は、父を見たのです。」と。イエスは、忠実で真実な御父の証人でした。イエスは、あなたがご自分の証人となることを望んでおられます。イエスは、あなたの生活がご自身のものに似ていて、イエスを証するものなので、人々があなたを観察すれば、イエスがどのような方であるかわかるほどになることを望んでおられます。もし、自己診断テストを受けたいのであれば、ただコリント人への手紙第一13章において、「愛」という言葉を取って、そこに自分の名前を挿入して下さい。そうすれば、あなたがどれほど真実な証人がわかります。「愛」という言葉を取って、そこに「イエス」の名を挿入すれば、文脈を乱すことは全くありません。文章は流れます。合致しています。しかし、残念ながら、そこに私たちの名前を挿入すると、ずいぶん文脈を乱してしまいます。しかし、それは私たちに対する告発です。私たちを助けるために、そして、証人となる力を下さるために神が

遣わして下さった聖霊の働きに、私たちが自分を完全にゆだねていないことを意味します。

何年前かに、イエスに倣うことについて誰かか本を書きました。この本は、逆境や様々な状況に
応答するしたり反応する前に、まず、イエスならどうなさるかと自問し、その状況でイエスなさるこ
とを行なうことを求めなさい、とすすめています。私がみなさんに絶対言えることは、もし、みなさ
んが完全に挫折したいのであれば試してください、ということです。自分の能力だけで、イエス・キ
リストをまねしてみてください。この著者が私たちに命じたように、イエスならなさるであろう応答、
あるいは、反応をしてみてください。イエスは、「ののしられても、ののしり返さず、(1ペテロ
2:23)。「あなたを呪う者を祝福しなさい。(訳者注:マタイ5:44参照。欽定訳ではbless them that
curse you が挿入されている。))」、「あなたを軽蔑して利用する者のために祈りなさい。それでこ
そ、父の子どもになれるのです。(訳者注:マタイ5:44-45参照。欽定訳ではpray for them which
despitefully use youとなっている。))」と言われました。イエスのように生きてみてください。イエ
スのように行動してみてください。そうすれば、自分の能力あるいは自己節制によっては、それは
不可能な試みであることがわかります。使徒パウロは、それを試してみました。ローマ人への手
紙7章に自分の体験を書いています。15節で、パウロは、「私には、自分のしていることがわかり
ません。(訳者注:欽定訳ではFor that which I do I allow not となっている。))」と言っています。
つまり、本当はやりたくないことをしている、と述べているのです。「私は自分がしたいと思うことを
しているのではなく、・・・」本当はやりたくないことをして、本当はやりたいことをしていない。
「自分が憎むことを行なっているからです。もし自分のしたくないことをしているとすれば、律法は
良いものであることを認めているわけです。ですから、それを行なっているのは、もはや私ではな
く、私のうちに住みついている罪なのです。私は、私のうち、すなわち、私の肉のうちに善が住ん
でいないのを知っています。私には善をしたいという願いがいつもあるのに、それを実行するこ
とがないからです。(7:15-18)」パウロは苦闘しています。意思はあるのです。自分のやりたいことは
やっていないが、自分のやりたくないことをやっている。それは、自分のうちに住む罪のためです。
この罪の性質のためです。「ですから、それを行なっているのは、もはや私ではなく、私のうちに
住みついている罪なのです。」「そういうわけで、私は善をしたいと願っているのですが、その私に
悪が宿っているという原理を見いだすのです。(ローマ7:21)」「すなわち、私は、内なる人として
は、神の律法を喜んでいるのに、・・・」私は、神の律法に耳を傾けます。私は、イエスの言われる
ことを聞き、そして、「はい。そのとおりです。はい。私はそれがしたいのです。はい。そういうふう
に私は応答したいのです。そういうふうに対応したいのです。そういうふうな人に私はなりたいた
いのです。」と言うのです。「・・・私は、内なる人としては、神の律法を喜んでいるのに、私のからだ
の中には異なった律法があって、それが私の心の律法に対して戦いをいどみ、私を、からだの中
にある罪の律法のとりこにしているのを見いだすのです。私は、ほんとうにみじめな人間です。だ
れがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。(7:22-24)」依然として神に反抗し
ている、贖われていないからだの中に私は住んでいます。このからだは、霊に仕えたくない、ある
いは、霊に服従したくないのです。このからだは、私たちの思いと生活に、権威と統制力をふるい

たいのです。からだの欲は、満足を要求します。私の霊は、イエスのようになりたいと、神を慕い求めます。しかし、やろうとすると、私のもう一つの性質である肉の性質が私の霊の願いに対して戦いを挑むことがわかります。イエスはペテロに、「霊は燃えていても、肉体は弱いのです。(訳者注: マタイ26:41参照。欽定訳は、「霊」となっている。)」と言われました。私たちはみな、それを経験したことがあります。自分の思いは、神に反抗などしていないのです。心では、神を喜ばせたいのです。神にお仕えしたいのです。しかし、肉と霊の間で戦いが繰り広げられます。この二つは対立しているのです。パウロはガラテヤ人への手紙で、「自分のしたいと思うことをすることが必ずしもできないのです。(ガラテヤ5:17参照)」と書いているのです。実際、パウロはさらに激しい言い方をしています。「御霊の願うことと肉の願うこととの戦いのために、自分のしたいと思うことをすることができないのです。」と述べています。

したがって、自分の肉に対して、自分の肉の願うことに対して勝利を体験することは、聖霊の力によってのみ可能なのです。賛美歌、「主よ、あなたのやり方でなして下さい(Have Thine Own way, Lord)」の作詞者は、実に適切な理解をしています。確か、三番の歌詞だったと思いますが、「主よ、あなたのやり方でなして下さい。あなたのやり方で。私が揺らぐとき、私の全てを捕らえて下さい。私の内に生きているのが常にキリストしかいないことをみんなが見ることができるまで、私をあなたの霊で満たして下さい。(Have Thine own way, Lord, Have Thine own way, Hold over my being absolute sway. Fill with Thy Spirit till all shall see Christ only always living in me.)」私が御霊によって満たされ、聖霊に自分を従わせるときのみ、御霊の力によって、真の証人となることができます。イエスは言われました。「聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、わたしの証人となります。」しかし、聖霊の力から離れては、そのようになることはできません。ギリシャ語で「力」は、デュナミスです。英語のダイナミック(dynamic力強い)という言葉は、この言葉に由来します。ですから、あなたがたは力強さ(dynamics)を受けます。ああ、私たちがイエスの真実で忠実な証人となるためには、どれほど私たちは自分たちの生活に聖霊の力強さが必要でしょう。

さて、正しい願いを持っているが、聖霊の力を欠いているので、どうしてもやりたいと思い願っているのに、そのことができない人の典型的な例が、ペテロの人生です。イエスは、渡された夜、弟子たちと食事をしている時に、「あなたがたはみな、つまずきます。(マルコ14:27)」と弟子たちに言われました。ペテロは、「主よ、たとい全部の者がつまずいても、私はつまずきません。」と言いました。すると、イエスは、「ペテロ、鶏が鳴く前に、わたしを知らないと言います。」と言われました。ペテロは、「私は、あなたを知らないなどとは決して申しません。たとえ、ごいっしょに死ななければならないとしても、あなたを知らないなどとは決して申しません。拷問にかけられても、あなたを知らないなどとは決して申しません。」と言いました。ペテロは、イエス・キリストの忠実な証人になりたいという自分の心を、心にある願いを表明していたのです。イエスを知らないと言うのではなく、忠実な証人になりたいというのが、ペテロの心でした。それなのに、ペテロは、大祭司の家の外にいました。その家の中では、イエスが宗教議会の前に立たされていました。威厳ある宗教指導者たちが、イエスを模擬裁判にかけていました。ペテロが、外で兵士たちと立って火にあた

っていると、若い女中のひとりが来て、「あなたも彼の弟子の一人ではありませんか。」と言いました。ペテロは、「いいえ。彼のことは知らない。」と言いました。少したつと、この女は戻ってきて、「あなたは彼と一緒にいるのを私は確かに見ました。」と言いました。「ちがう。ちがう。何を言っているのかわかっていないだろう。私は彼のことなど知らない。」とペテロは言いました。とうとう兵士がペテロに、「あなたはガリラヤなまりだから、彼の弟子の一人にちがいない。」と言いました。ペテロは、イエスを絶対知らない、と誓いはじめました。すると、鶏が鳴きはじめました。ペテロに偽りはありませんでした。「主よ、たとえ、ごいっしょに死ななければならないとしても、あなたを知らないなどとは決して申しません。」と言ったとき、ペテロは心から語っていました。イエスに忠実でありたいという、自分の心にある霊の願いを表明していたのです。彼の霊は燃えていても、肉体は弱かったのです。そして数週間後、状況は同じでした。エルサレムの宗教会議が招集されました。しかし、今回はペテロは外にいたのではありませんでした。ペテロは、宗教会議の前に被告人として立っていました。そして、検察側弁護士がペテロに対し、かなりの誘導尋問をしてきました。「あなたがたは何の権威によって、また、だれの名によって、足のきかない男を歩かせたのですか。(使徒4:7参照)」そして読みますと、「そのとき、ペテロは・・・」ここに注意して下さい。「そのとき、ペテロは聖霊に満たされて、彼らに言った。『民の指導者たち、ならびに長老の方々。私たちがきょう取り調べられているのが、病人に行なった良いわざについてであり、その人が何によっていやされたか、ということのためであるなら、皆さんも、またイスラエルのすべての人々も、よく知ってください。この人が直って、あなたがたの前に立っているのは、あなたがたが十字架につけ、神が死者の中からよみがえらせたナザレ人イエス・キリストの御名によるのです。『あなたがた家を建てる者たちに捨てられた石が、礎の石となった。』というのはこの方のことです。この方以外には、だれによっても救いはありません。世界中でこの御名のほかに、私たちが救われるべき名としては、そのような名も、人間に与えられていないからです。』彼らはペテロの大胆さを見、・・・(使徒4:8-13参照)」何とペテロは、変えられたのでしょうか。何がペテロを変えたのでしょうか。ペテロは、イエスが約束されたものを受け取ったのです。「聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、わたしの証人となります。」ここで、ペテロはイエス・キリストについてとても力強い、力にあふれた証言をこれらの人々しています。わずかに数週間前は、威厳ある会議の外で立っただけで、脅されるとイエスを知らないと言ってしまった人物でした。イエス・キリストの証人として生活し、他の人たちに口で証しを伝えるために、神の賜物としてみなさんに聖霊の力が与えられます。しかし、先にも言いましたように、あなたの言うことは、実際にあなたがどのような人物であるかを超えることは決してできません。あなたがどのような人物であるかのほうが、あなたが言うことよりも音量が高いことが多いのです。

使徒行伝4章をもう少し読みすすめると、大胆に証することを考えさせられます。ペテロは、もうこの人のことを、イエスの名によってこれ以上語ってはならないと脅されます。そして、語ったり教えたりしてはならないと命じられます。しかし、「ペテロとヨハネは彼らに答えて言った。『神に聞き従うより、あなたがたに聞き従うほうが、神の前に正しいかどうか、判断してください。私たちは、自分の見たこと、また聞いたことを、話さないわけにはいきません。』そこで、彼らはふたりをさらにお

どしたうえで、釈放した。ふたりを罰するすべがなかったからである。釈放されたふたりは、仲間のところへ行き、祭司長たちや長老たちが彼らに言ったことを残らず報告した。何が起こったか、迫害が起こり始めたことを聞いた人々はみな、心を一つにして、神に向かい、声を上げて言った。(使徒4:19-21、4:23-24参照) 」そして、彼らは祈りました。「主よ。いま彼らの脅かしをご覧になり、あなたのしもべたちにみことばを大胆に語らせてください。御手を伸ばしていやしを行なわせ、あなたの聖なるしもべイエスの御名によって、しるしと不思議なわざを行なわせてください。(使徒4:29-30) 」と祈りました。「彼らがこう祈ると、その集まっていた場所が震い動き、神のことばを大胆に語りだした。(使徒4:31参照) 」彼らは聖霊に満たされていました。それによって、大胆にみことばを語る、証しする力が与えられました。「聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、わたしの証人となります。」とイエスは言われました。私たちは、自分の肉の弱さを克服するために、聖霊の力を必要としています。

信者のうちにおられる聖霊 パート3 (#3060)

Holy Spirit in the life of a believer Part3

今晚は、御霊が私たちがイエス・キリストのかたちと同じ姿にしてくださる働きを見てゆきたいと思います。神は教会の中に、ある特定の奉仕を置かれました。パウロは、「まず第一に、ある人を使徒、ある人を預言者、ある人を伝道者、ある人を牧師・教師として、お立てになったのです。(訳者注:エペソ4:11参照。牧師と教師を切り離すのではなく、チャックはpastor-teacherとして一つの奉仕と見ている。)」と告げています。このような人々は、教会の中で賜物の与えられた人たちであり、聖徒たちを整えて奉仕の働きをさせるために、神が(キリストの)からだの中に立てて下さったのです(エペソ4:12参照)。パウロは、自分が人間の意思によるのではなく、神のみこころによる使徒である(ガラテヤ1:1参照)と告げました。また、パウロは、「みなが使徒でしょうか。みなが預言者でしょうか。みながいやしをするのですか。みなが牧師・教師でしょうか。(1コリント12:29-30参照)」と反語的な質問をしています。答えは明らかに「いいえ」です。これらはみな、教会の中の様々な異なる奉仕です。しかし、それらの目的は聖徒を整え、奉仕の働きをさせるためです。キリストのからだを建て上げるためです。今晚、私たちがここにいるのも、実はその目的のためです。聖徒が整えられ、みなさんの徳が高められ、イエス・キリストのうちに建て上げられるために、みことばを学んでいます。主は、私たちみな、クリスチャンの歩みにおいて、十分成熟することを願われています。霊的には全然成長のなかったクリスチャンが、あまりにも大勢います。彼らは、霊的発達休止状態と分類できるようなものを持っています。それが、主を受け入れて2ヶ月ほどたったときから始まりました。パウロは、そのような人たちに対し、その人たちが「キリストにある幼子(1コリント3:1)」として語っています。パウロは、「そのような人たちにはみことばの乳を与えて、堅い食物を与えませんでした。それは彼らには、まだ無理だったからです。いまでもまだ無理なのです(1コリント3:2参照)」と言いました。ヘブル人への手紙の筆者は、「あなたがたは年数からすれば教師になっていなければならないにもかかわらず、神のことばの初歩をもう一度だれかに教えてもらう必要があるのです。あなたがたは堅い食物ではなく、乳を必要とするようになっています。(ヘブル5:12)」と言いました。さて、乳は、乳児にとっては良い適切な食事です。しかし、クリスチャンの経験の中で、発達、成長が必要です。パウロは、いやペテロは、「生まれたばかりの乳飲み子のように、純粋な、みことばの乳を慕い求めなさい。(1ペテロ2:2)」と書き、言いました。乳児なら、何ら差し障りはありません。しかし、乳離れして、堅い食物を食べなくてはいけない時が来ます。これは、霊的発達の意味でもそのとおりで、発達が必要なのです。御霊にある私たちの歩みには、成長が必要です。パウロは、ここエペソ人への手紙4章で、「ついに、私たちがみな、信仰の一致と神の御子に関する知識の一致とに達し、完全に大人になって、…(エペソ4:13)」と教えています。ここの「完全に」という言葉は、十分に成熟しているということです。ついに、十分に成熟した状態になるということです。十分に成熟した状態の特徴は何でしょうか。それは、「キリストの満ち満ちた身たけにまで達する」ことです。誕生後、幼児であることは自然の状態です。少しの間キリストにある幼子であっても、何ら差し障りはありません。しかし、25年たっても、

今だおむつがとれず、哺乳瓶をかかえているなら、見分ける賜物を要さずとも、何か根本的におかしいことがわかります。その間に、発達すべきだったのです。成長すべきだったのです。

さて、パウロは、「神は私たちを御子のかたちと同じ姿にあらかじめ定められた(ローマ8:29)」と教えています。初めに、神が人を創造されたと書いてあります。そして、「神は人をご自身に似せて、ご自身のかたちに創造された(創世記1:26-27参照)」と告げられました。神が、「われわれに似るように、われわれのかたちに、人を造ろう。」と言われたときに、神は霊ですから、神は人の存在の霊的側面について言及されていたのです。神のかたちに創造されたということは、神の主な道徳的性質は義ですので、私たちは義を求めように創造されたということです。神の主な統治上の性質は、自己決定です。ですから、神はあなたを自己決定できる存在として創造されたのです。神はあなたに選択の能力を与えられました。神の主な感情的性質は愛です。ですから、神は、愛を与え受け取ることができる能力を備えて、私たちを創造されました。ですから、私たちは神のかたちに創造されたのです。義を願い、選択の能力をもって、愛し、愛を受け取る能力をもって創造されました。

さて、人は神のかたちから墮落しました。自分勝手になり、冷淡になり、無関心になり、執念深くなりました。ですから、神が人を創造された本当の目的を理解するために、今日の人類を見回しても、神が人を創造された意図を理解することができないのです。人がよく陥る間違いはこれです。墮落した人とその墮落した状態を見て、人を創造された神のすばらしさや愛を疑問視します。「いかに人がひどいかを見てみる。こんなにも悪を行なう能力がある。それに、愛の神がどうして、人間というこんなひどい生き物を造ることができようか。」と。今日の人間を見回しても、神の意図を見ることはできません。墮落した状態の人間を見ているからです。神が意図されたものを見ていないからです。聖書は、人の墮落した状態を描写しています。ローマ人への手紙1章29節で、パウロは言いました。「彼らは、あらゆる不義と悪とむさぼりと悪意とに満ちた者、ねたみと殺意と争いと欺きと悪だくみとでいっぱいになった者、陰口を言う者、そしる者、神を憎む者、人を人と思わぬ者、高ぶる者、大言壮語する者、悪事をたくらむ者、親に逆らう者、わかまえない者、約束を破る者、情け知らずの者、慈愛のない者です。彼らは、そのようなことを行なえば、死罪に当たるという神の定めを知っていながら、それを行なっているだけでなく、それを行なう者に心から同意しているのです。」かなり悲惨な状態です。こうして見てみると、神に背を向けている人間の状態はかなり悲惨です。神に、神の愛に、神のことに背を向けると、どれほど道徳的にひどく墮落してしまうかには驚かされます。パウロは、テモテへの手紙第二に、列挙してこう書いています。「終りの日には困難な時代がやって来ることをよく承知しておきなさい。そのときに人々は、自分を愛する者、金を愛する者、大言壮語する者、不遜な者、神をけがす者、両親に従わない者、感謝することを知らない者、汚れた者になり、情け知らずの者、和解しない者、そしる者、節制のない者、粗暴な者、善を好まない者になり、裏切る者、向こう見ずな者、慢心する者、神よりも快樂を愛する者になり、見えるところは敬虔であっても、その実を否定する者になるからです。(2テモテ3:1-5)」さて、このリストを読むと、このようなことは神が人に対して意図されていたことではなかったことが確かにわかります。神が私たちに意図された生き方ではありませんでした。

人に対する神の意図を知り、理解するためには、イエス・キリストを見る必要があります。イエス・キリストの中に、人に対する神の意図を見ることができます。イエス・キリストは、神が私たちにこうあってほしいと願われた生き方をされました。聖書は、イエスについて、「神の栄光の輝き、また神の本質の完全な現われ(ヘブル1:3)」であったと教えています。ですから、イエスは、神のかたちとして、神に似た方として来られ、生活されました。ご自身の生涯の中で、神の姿を私たちに示して下さいました。それによって、神がご自分のかたちに人を創造された有様と、神の意図され願われた人の生き方を示して下さいました。「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた。(ヨハネ1:14)」とあります。また、コリント人への手紙第2章4節で、パウロは言いました。「そのばあい、この世の神が不信者の思いをくらませて、神のかたちであるキリストの栄光にかかわる福音の光を輝かせないようにしているのです。」ですから、イエス・キリストを見れば、神がどのように人を創造されたのかがわかります。イエス・キリストは、神のかたちです。神はご自身のかたちに人を創造されました。また、それによって、神の本来の創造の目的から、人がどれほど墮落してしまったかがわかります。神は、今日私たちが生きているような生き方を意図されたのではありませんでした。神は、人が肉に従って生きて、熱情的で官能的な生き方をするように意図されませんでした。それは、神の意図ではありませんでした。イエスは、ピリポに「わたしを見た者は、父を見たのです。(ヨハネ14:9)」と言われました。イエスは神のかたちの現われであり、神のかたちの現われとして生活されました。コロサイ人への手紙で、パウロは、「御子は、見えない神のかたちであり、造られたすべてのものより先に生まれた方です。(コロサイ1:15)」と述べました。

さて、私たち墮落した被造物を取り、神のかたちに回復させることは、神の願いと目的です。神は、罪と人間の墮落の結果を無効にし、私たちが神のかたちにもう一度回復させたいと願われています。ですから、パウロは、ローマ人への手紙8章12節で、こう述べています。「ですから、兄弟たち。私たちは、肉に従って歩む責任を肉に対して負ってはいけません。もし肉に従って生きるなら、あなたがたは死ぬのです。しかし、もし御霊によって、からだの行ないを殺すなら、あなたがたは生きるのです。(ローマ8:12-13)」あなたがたは、神が意図されたように生きるのです。ローマ人への手紙13章14節です。「主イエス・キリストを着なさい。肉の欲のために心を用いてはいけません。」神は、私たちが官能的な肉的生活をすることを望んではおられません。神は、私たちが御霊の中で、御霊に従って生きることを望んでおられます。ガラテヤ人への手紙5章16節で、パウロはこう述べています。「私は言います。御霊によって歩みなさい。そうすれば、決して肉の欲望を満足させるようなことはありません。なぜなら、肉の願うことは御霊に逆らい、御霊は肉に逆らうからです。この二つは互いに対立していて、そのためあなたがたは、自分のしたいと思うことをすることができないのです。(5:16-17)」24節です。「キリスト・イエスにつく者は、自分の肉を、さまざまの情欲や欲望とともに、十字架につけてしまったのです。」コロサイ人への手紙3章5節から10節です。「ですから、地上のからだの諸部分、すなわち、不品行、汚れ、情欲、悪い欲、そしてむさぼりを殺してしまいなさい。このむさぼりが、そのまま偶像礼拝なのです。このようなこと

のために神の怒りが不従順の子らの上を下るのです。(訳者注:6節については新改訳脚注を参照のこと。) あなたがたも、以前、そのようなものの中に生きていたときは、そのような歩み方をしていました。しかし今は、あなたがたも、すべてこれらのこと、すなわち、怒り、憤り、悪意、そしり、あなたがたの口から出る恥ずべきことばを、捨ててしまいなさい。(3:5-8) 「あなたがたは、新しい人を着たのです。新しい人は、造り主のかたちに似せられてますます新しくされ、真の知識に至るのです。(5:10)」ですから、神は、みなさんに古い人、古い性質、腐敗した性質、罪によって腐敗した性質を脱ぎ、新しい人を着て欲しいと望まれています。「だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。(2コリント 5:17) 」イエスはニコデモに、「人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。(ヨハネ3:3)」と言われました。新しい誕生がなければならぬのです。新しい人でなければなりません。古い人を脱ぎます。御霊の力によってからだの行ないを殺すのです。もはや、肉に従って生きるのではなく、今や御霊と御霊に属することに従って生きます。

さて、キリストにある新しい人と肉に従う古い人の対比を見ます。理想を見る時、イエスを見ます。そして、イエスのご性質を読み、イエスの性質を観察しますと、イエスは親切で、よく気配りし、同情心がある、あわれみの心がある、赦す心がある方でした。このような性質を見ると、「ああ、そうだ。そういう風に私も生きたい。」と思うのです。自分が肉的になって、醜いことをしてしまうと嫌になってしまいます。肉は非常に醜く、不快です。私は理想を願います。対照的なリストを読みますと、こう思います。「ああ、神様。どうか、私を肉から救い出して下さい。すべての怒り、悪意、対立、ねたみ、苦みなど、このようなひどいものはみな私を破壊しているだけです。神様、そのようなものから私を救い出して下さい。とても同情心があり、愛があり、与える、親切な人になりたいと願います。イエスのようになりたいとあこがれます。」しかし、パウロが言っているように、「私は、私のうち、すなわち、私の肉のうちに善が住んでいないのを知っています。私には善をしたいという願いがいつもあるのに、それを実行することがないからです。(ローマ7:18) 」善を実行すること、それが問題なのです。理想を見て、理想を願うのですが、理想を達成することができないので、挫折感があります。世界の宗教の問題の一つはこれです。仏陀は、ある理想を指し示しました。仏陀は、ある意味で、多くの点で的を得ていました。人の問題は物質欲にあると、仏陀は主張しました。物欲に支配されている限り、常にいらいらし、怒り、心配し、対立心に満ちあふれてしまいます。それは、物質を持ちたいという欲望があるためです。その考えは、聖書のことばでは、「金銭を愛することが、あらゆる悪の根だからです。(1テモテ6:10)」となります。金銭を切望し、欲することにより、対立、ねたみ、嫉妬といったものが起こります。仏教徒は、解決法は物欲をすべて失うことであると云います。もし、その状態を達成し、その状態であることができるのであれば、つまり、物欲が全くない、食欲さえもなくなるのであれば、涅槃に入ると言うのです。平安の至福にいたる、と。「私は幸せです。満足です。私は何も欲しくありません。」その人にとって、それが涅槃なのです。

さて、ある意味で、イエスは、私たちの怒りといった問題は、物質的な生き方、肉の生活に起因するとおっしゃっています。ですから、私たちは御霊に従って生きる必要があります。御霊の生活のほうが肉の生活より優れています。イエスは、肉の生活よりも御霊の生活のほうが優れている

と教えられました。それは、仏陀が教えたのと同じです。一つ大きな違いは、仏陀は、涅槃に入る道を指し示しましたが、あなたがその道を歩むのを助ける能力は仏陀には全くなかったことです。ですから、ただ挫折感を味わうだけです。何年か前に、ラオスの王がここカルバリー・チャペルを訪問したことがありました。ラオスの王は自国の閣僚を伴って来ました。それで、オレンジ郡（訳者注：カルバリー・チャペル・コスタメサは、米国カリフォルニア州オレンジ郡サンタアナ市にある。）のラオス人に話しに来たラオスの王に会おうとして、たくさんのラオス人が来たことがありました。私は、ラオスの王と閣僚とここに来たラオス人に、キリスト教は、いったいどのようなものかを説明するように言われました。福音を伝えるすばらしい機会でした。ラオス人は基本的に仏教徒でしたから、使徒パウロのように、私は彼らの土俵から始めました。パウロがアテネにいた時、こう言いました。「私はあなたがたを宗教心にあつい方々だと見ております。街の中を歩いていて、すべての物に対して偶像を見つけました。また、『知られない神に。』と刻まれた祭壇にさえ通り掛かりました。この神についてみなさんに話したいのです。この神が天と地を創造された方です。（使徒17:22-24参照）」ですから、パウロはアテネの人たちの土俵で始めましたが、そこから人々を導いたのです。それで、私も仏陀のこと、仏陀の教え、基本的な考え方と教えから始めて、仏陀が良い生き方を教え、もし実際に人々が仏陀の教えに従うことができるのであればすばらしいという話をしました。親切で、配慮があり、与える人であり、自分に対する欲が全くなければすばらしい、と。しかし問題は、「私は満足しています。」と言うことができる仏教徒に私は一人も会ったことがないのです。それは、誰も涅槃を達成した人がいないからです。それは、私たちの中に肉的な性質があるからです。「そうだ。それはすばらしい。そのように生活することができるのであればすばらしい。」と自分で願い、理解し、認めるのです。決して怒らず、気分を害さず、いつも幸せで、すぐれた考え方をすることができるのであれば、すばらしいことです。しかし、努力してもやっぱり、私はこの肉のからだの内に住んでおり、戦いが続いており、必ずしもやりたいと思っていることを行なうことができず、気分を害し、いらいらしてしまいます。

さて、イエスは、あなたがたはこのように生きなさいと言われました。御霊に従って生きなさい、と。自分を捨て、自己中心の生活を捨て、自分の十字架を負い、ついて来なさい（マタイ16:24参照）、と。しかし、またイエスは、「わたしは行きますが、あなたを助けるものなしにしておくのではありません。わたしは父にお願いします。そうすれば、父はもうひとりの助け主をあなたがたにお与えになります。その方は、真理の御霊です。その方はあなたがたのうちに永遠におられるからです。（ヨハネ14章参照）」と言われました。そして、私たちが聖霊を受けるとき、聖霊とともに、聖霊の力を受けると約束されました。聖霊が私たちのうちに住んで下さり、私たち自身ではできないことを私たちのためにして下さると約束されました。ですから、聖霊の目的は、あなたの内に住み、神があなたに望んでおられるように生きる力を与えることです。聖霊があなたの内に住み、あなたの内で働いてくださると、神のかたちと同じ姿にする働きをしてくださいます。罪の結果、人が失ったものを回復して下さいます。人を神のかたちに回復して下さいます。

さて、このようなことは、決意によってできるものではありませんし、自分の努力によってできるものもありません。ヨブは、「だれが、きよい物を汚れた物から出せましょう。だれひとり、できません。

(ヨブ14:4)」と言いました。ダビデは、「どうか、私の道を堅くしてください。あなたのおきてを守るように。(詩篇119:5)」と言いました。ああ、神よ。そうであつたらな、と思います。あなたのおきてを守るように私の道が堅くされていたらな、と。そして、ダビデは、「このとおり、私は、あなたの戒めを慕っています。(詩篇119:40)」と言いました。私は、あなたの戒めがわかります、それを慕っています、と。それが正しいと認め、そう告白します。私はあなたの戒めを求めます。それで、私には、このような葛藤があります。私はイエスを愛します。イエスのようにになりたいと願います。神のかたちと同じ姿になりたいと願います。そう強く願っているのですが、私の肉は弱いのです。ですから、クリスチャンは往々にして、挫折感を味わいます。理想を慕い、理解し、理想を願いますが、それなのに、肉のために敗北してしまうことが実によくあるのです。このような霊的敗北状態の中に常に生きなければならないのでしょうか。答えは、「いいえ」であることを神に感謝します。すべての神の子どもに真の勝利があります。

イスラエルの民がモーセに率いられエジプトを出て、荒野を通過して約束の地に旅しましたが、彼らのすべての体験は比喩でした。クリスチャンの生活にも、それに匹敵するものがあります。彼らは、家の門のかもいにつけられた小羊の血によって救われました。エジプトの地から脱出しました。それは、罪の生活の奴隷の型でした。彼らは紅海にきました。これはバプテスマの象徴です。そして、荒野を通過して約束の地への旅を始めました。残念ながら、境の近くまで来て、約束の地に入ろうとする時に、モーセは、スパイを遣わし、地を偵察させるという間違いを犯しました。10人は悪い報告を携えて、2人は励ましを報告を携えて帰って来ました。しかし、民は、がっかりする報告の方に耳を傾け、指導者を立てて、エジプトに連れて帰るようにしようとしました。彼らは、「私たちの子どもたちは、殺され、滅ぼされる。できません。」と言いました。すると、神は、「入ることを怠ったので、この荒野であなたがたすべてが死に絶えるまで40年間さまよう。そして、あなたがたが犠牲になると言った、あなたがたの子どもたちが、その地に入る。」と言われました。それで、長い葬儀の行進が始まりました。古い世代がみな死に絶えるまで40年間続きました。とうとう、40年後に、約束の地の境にまた来た時、この時にはヨルダン川にきました。ヨルダン川を渡って、・・・実は神が川をせきとめられ、彼らはヨルダン川を渡ったのですが、これは型です。みなさんのクリスチャンとしての体験において、荒野でさまよい疲れてしまう場面です。苦情や不平を言ったりして、絶えず神にはむかうという特徴があります。彼らはヨルダン川にきました。それは、古い性質、古い人の死の型です。つまり、これは、自分の古い性質を死んだものとみなすことでした。御霊の力によって、肉の行ないを殺すことでした。そして、彼らは神が約束されたものを所有するようになりました。新しい地、乳と蜜が流れる地を所有するようになったのです。荒野では、多くの戦いがありましたが、それからは何も獲得するものはありませんでした。領土を得ることは全くありませんでした。さて、依然として戦いがありましたが、戦いの度ごとに彼らは領土を獲得してゆきました。キリストにあるいのちに入っても、御霊の生活に入っても、依然として戦いがあります。苦闘があります。しかし、生活が神の御霊によって導かれるようになります。私たちが、神の約束をしっかりと握り締めているなら、神が約束して下さった物を所有するようになり、つねに領土を獲得していくのです。

ですから、私たちをイエス・キリストのかたちと同じ姿にしてくださり、私たちが自分の力だけではできないことをしていただくために、聖霊が与えられています。自分の人生の中で、非常に興味深いのですが、型にはまっているところを見ることができます。自分では分かっているのですが、なぜか止められないのです。神は、私がまだ御霊にゆだねていない部分を引き続き示してくださいませ。次の戦いはどこかを示してくださいませ。エリコや、アイ、ベテルを奪い、進んでいます。依然としてまだ征服していない領土がたくさんあります。悲劇は、神がお与えになった地すべてをイスラエルの民が征服することがなかったことです。自分の生活にもそれが見えますが、神が最初の週にすべてを見せられなかったことを感謝します。がっかりしていたことでしょう。しかし、もう到達したと思った時、大勝利をおさめた直後に、主が次の場所、つまり、肉がまだ支配している部分を示してくださいませ。そして、主が働きたいと願われる部分を私に示されると、必ずといってよいほど、私は、「ああ。主よ。それはひどい。どいてください。今すぐ、私がなんとかしますから。もう二度としません。」と言います。主は、私に、自分の意思の力や自分の決意や自分の力を働かせて、苦闘させてくださいませ。しかし、私はつまづき続けます。少し時間が経って、肉の部分を克服する能力が自分にないために、実に霊的に敗北しそうになります。とうとう自暴自棄になり、絶望して、「神よ。私はどうしてしまったのでしょうか。何がいけないのかわかりません。私にはできません。神よ。あなたが助けてくださらなければ駄目です。」と言うと、御霊が何とかしてくださいませ。すると、私は大きな勝利をおさめます。そして主は、次の部分を示して下さいませ。するとまた私は、「ああ。主よ。どいてください。今すぐ、私がなんとかしますから。これはひどい。気がつきませんでした。」と言うのです。いつになったら、私は学ぶのでしょうか。しかし、どうも型にはまってしまっているようなのです。絶望するに至って、「主よ。私にはできません。」と告白するまではだめなのです。ここから実際に出てくる結果は、神がしてくださるため、私自身にうちに自分を誇る余地がなくなることです。自分がいかに克服したか、「かつては、こうだったけれども、間違っているので、このように決意した。」とか、自慢話をいいふらすことはできないのです。自分を誇ることはできません。ただ、私にできるのは、「自分が弱い部分に、神はすばらしい御業をすることができませす。神はすばらしい業をしてくださいませました。」と言うことだけです。

また、神がわざをなしてくださるとき、あまりにすばらしいことが多いので、ほとんど無意識で気づきませす。少し立って後になって、「ああ。もうずっとやってないなあ。もうやりたいとも思わない。すごいなあ。」とわかるのです。そうすると、気付いて、「主よ。あなたは私に勝利を与えてくださいませました。ああ。あなたの御名があがめられますように。すばらしい。」と言います。かつて、この教会に退役海軍将校がいました。長年海軍にいましたので、海軍の言葉が身につけてしまいました。それで、とても話し方が下品でした。しかし、ここカルバリー・チャペルに来て、イエス・キリストを受け入れました。イエス・キリストを受け入れて6ヶ月後ぐらいに、この人は自分の家の裏庭で芝刈りをしていました。「愛、愛、愛、愛、クリスチャンよ、これがあなたの召しです(訳者注:賛美歌の一つ。"Love, love, love, love, Christian, this is your call.")」と口笛をふいていました。彼は、余り注意を払っていませんでしたので、木の下に来たのですが、かがまなかったので、木がちょうど額にぶつかってしまい、あお向きに倒れてしまい、彼の自動芝刈り機はフェンスにぶつかるまでどん

どん進んでしまいました。彼が地面にあお向きに倒れている時、額は痛みでズキズキしていました。彼は、飛び起きて、芝刈り機へ走って行って、芝刈り機のスイッチを切り、家の中に走って行き、「お前、お前、何が起こったと思う？」と言いました。奥さんは、彼の額のたんこぶが膨れているのを見て、「あなた。何が起きたの？」と聞きました。彼は、「いや。そのことじゃなくて・・・。」と言いました。「木にぶつかったんだが、ののしりの言葉を吐かなかったんだ。」と彼は言いました。奥さんは、「あのね。あなた。あなたがののしるのを聞かなくなって、もう6ヶ月になりますよ。」と言いました。彼は、「ののしらなくなったって？」と言いました。これは、御霊がしてくださることの一例です。それなのに、気づきもしていないのです。しかし、神がしてくださったことに、喜びがあります。私たちが試そうとすることを神がよく許されるのは、この理由からだと思うのです。私たちが苦悶するのを許してください。私たちが自分の弱さを見ることを許してください。それは、神がしてくださるときに、私たちが誇ったり、自慢げに話したりしないためです。神は、私たちが、絶望的な状態にまでたどり着き、全く自分ではできないと認識するのを許されます。神がしてくださる時に、私たちが神に賛美と栄光をお帰しするように注意するためです。イエスによる勝利です。

さて、パウロは、コリント人への手紙の中で、「私たちはみな、顔のおおいを取りのけられて（訳者注:2コリント3:18。欽定訳では、open face となっている。）」、あるいは、「顔におおいがなく」と述べています。パウロは、モーセが律法を携えて下りてきた時に、人々がモーセの顔にあった栄光の輝き、また、それがあせるのを見ないように、顔におおいをかけなければならなかったことに言及しています。「しかし、今日までユダヤ人が律法を読む時、依然として彼らの顔にはおおいがかけられていますが、私たちは、顔のおおいを取りのけられて、主の栄光を見えています。(2コリント3:14-18参照)」とパウロは述べています。そのために、モーセの顔が輝いたのを覚えていますか。モーセが神をかいま見たためでした。そのために、モーセの顔が輝きました。「私たちはみな、顔のおおいを取りのけられて、主の栄光を見ながら、栄光から栄光へと主と同じかたちに姿を変えられて行きます。(2コリント3:18欽定訳では、as in a glass the glory of the Lord となっているが、チャックは、beholding the glory of the Lord としか言っていない。)」「これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。」とパウロは言いました。従って、ここに鍵があります。私たちが、顔のおおいを取りのけられて、主の栄光を見始める時に、主を礼拝し始める時に、主の御霊が永遠の神の栄光を私たちに現わしてください。その栄光を私たちが見る時に、私たちは変えられます。私たちの中で働いてくださる神の御霊によって、私たちが神のかたちにかたち造られ、変えられると、私たちは栄光から栄光へ、栄光へと変えられます。

ですから、みなさんの生活における聖霊の働きは、みなさんを栄光から栄光へとイエス・キリストと同じかたちに変えることです。さて、神は基本的に、「あなたがたはこの律法にのっとって生活をすべきです。これがそのルールです。」とされています。「あなたがたは、こういう人になるべきです。こういったことをすべきです。こういったことはすべきではありません。もし、これをすれば、あなたがたは、わたしとの豊かな完全な交わりをすることができる。」そして、私は、「いいです。気に入りました。そうしたいです。それは、良い生き方だということに同意します。そのように私は生きます。」と言います。しかし、すぐに自分の霊の律法に逆らって働いているもう一つの律法がある

のを発見します。さて、私は神の律法は良いものです。神の律法は良いものだということに私は同意しました。しかし、律法を実行する方法、正しいことをするやり方、理想を守る方法について、私は知りません。それが問題なのです。聖霊の力が必要です。それは、私ひとりではできないからです。ですから、パウロが、ローマ人への手紙8章3節で結論づけているのは、「…律法にはできなくなっていることを、…」律法に何か欠点があったのではありません。律法は良いものです。正しいのです。聖いのです。正しい道なのです。しかし、律法ができなかったのは、律法がすることができなかったのは、何だったのでしょうか。それは、私に律法を守る力を与えることができなかったことです。私は、依然として弱く、いくじなしなのです。ですから、律法が良いもので、律法は良いものだと同意するのですが、律法は、律法を守る力を与えることができないのです。ただ律法は、私が律法を守っていない時に、私に対して、非難を指摘することができるだけです。ですから、律法は私を義なる者にすることはできませんでした。ただ、律法は私を非難することができるだけでした。「肉によって無力になったため、律法にはできなくなっていることを、…(ローマ8:3)」それが、環の弱い分でした。私の肉のところ、そこで、全体がだめになってしまいました。律法は良いものです。私の肉は腐っています。私の肉は無力なのです。ですから、「肉によって無力になったため、律法にはできなくなっていることを、神はしてくださいました。神はご自分の御子を、罪のために、罪深い肉と同じような形でお遣わしになり、肉において罪を処罰されたのです。」そして、神の御子が私に聖霊を遣わしてくださいましたのです。そして、御霊を通して、自分の肉の卑しい欲望に勝利して生きる力が与えられました。聖霊によって、神が望まれている姿になるための、神が望まれていることを行なうための力を私は受けました。聖霊の力によって、私はイエス・キリストと同じ姿に変えられているのです。

さて、もし私が聖霊の仕事は終わりました、と言うのであれば、私は正直ではなくなってしまうです。まだまだです。しかし、ある人が言ったように、「私はまだ、これからなるであろう自分にはなっていない。しかし、かつての自分ではないことを私は神に感謝します。」私は、現在進行中です。私は、次々と自分の人生の中で聖霊の力を体験しています。聖霊が私に力を与えて下さり、私がイエス・キリストと同じ姿に変えられているのを体験しています。私は成長しています。全く成長を見ることができない停滞状態に入らないように注意しなければなりません。また、振り返って見て、今よりも理想に近い時があったのなら、二倍注意し、心配する必要があります。それは良くないことです。まだ、到達はしていませんが、今私はこれまでよりもずっと近づいています。私たちのうちにより働きを始められた方は、それを完成させて下さることを私は強く信じているのです(ピリピ1:6参照)。神は、完成されないことを始めたりはなさいません。ですから、聖霊に自分をゆだね続け、聖霊の力を受けることは重要です。御霊の力によって、肉の行ないを殺します。聖霊の力によって、私はイエス・キリストと同じ姿に変えられるのです。

信者のうちにおられる聖霊パート4 (#3061)

Holy Spirit in the life of believers Part4

ローマ人への手紙8章26節と27節です。「御霊も同じようにして、弱い私たちを助けてくださいます。私たちは、どのように祈ったらよいかわからないのですが、御霊ご自身が、言いようもない深いうめきによって、私たちのためにとりなしてくださいます。人間の心を探り窮める方は、御霊の思いが何かをよく知っておられます。なぜなら、御霊は、神のみこころに従って、聖徒のためにとりなしをしてくださるからです。」神のみこころに従って、聖徒のためにとりなしをしてくださいます。

祈りの目的が、神の思いを変えることではないことに気づくことは重要です。祈りは、あなたの見方で物事を見るように神を説得することではありません。多くの人は、祈りによって神の思いを変えることができると考えて、大きな間違いを犯しています。それは、全く祈りの目的ではありません。神の思いを変えるようなことはしたくないはずです。神は言われました。「わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。(訳者注: エレミヤ29:11、「計画」と新改訳で訳されているところは英語では"thoughts"「思い」となっています。)」わたしは、祝福された、すばらしい、希望ある結末をあなたがたにもたらしたいのだ。神のあなたへの計画は、自分で思いつくことができるものより、ずっと良いものです。神の計画を自分で改善できると考えるのは、全く愚かなことです。祈りは、神の思いを変えるためのものではありません。「では、もし、神の思いを変えるためのものではないなら、なぜ祈るべきなのですか。」と言われるでしょう。祈りの目的は何でしょうか。祈りの目的は、神がしたいと願われている、あなたにとって最善のものを行なっていただくために、自分の心や人生を開くことです。神は人に、この自由意志の賜物を与えてくださいました。それは、選択の力あるいは能力です。神が、自由意志を侵害なさることはありません。侵害するということは、それを無効にするということです。神は、私たちの選択に影響を及ぼすようなことはなさいません。例えば、南部にある古い歌のように、「彼は、あなたの意思に反して行くようにはしないが、彼は確かにあなたが行きたくなるようにします。」と言っているのと同じです。神は、あなたの選択に影響を及ぼすために、ある状況や、精神的圧迫や、困難があなたの人生・生活におとずれるようになさいます。しかし、あなたに与えた選択を侵害するようなことはなさいません。神は、あなたがみこころに抵抗するがままにされます。神は、恐るべき、主権を持つ創造主です。それなのに、ここにいる人間は、取るに足らないちっぽけな人間は、神のみこころに抵抗することがあまりに多いのです。神は、人間がそうするのを許されます。神は、あなたの自由な選択を侵害するようなことはなさいません。ですから、神の目的、というか、祈りの目的は、神の思いを変えるためのものではありません。あなたがこれまでに祈ったことのある良いもの、正しいものはみな、あなたが祈る前から、神があなたに与えようとされていたと私は確信しています。イエスは言われました。「あなたがたの父なる神は、あなたがたがお願いする先に、あなたがたに必要なものを知っておられるからです。(マタイ6:8)」

しかし、祈りは、私たちの思いの扉を開きます。それによって、私たちの益と善のために神がしたいと願われていることを、神にさせていただくことができます。ヨハネ15章16節で、イエスは弟子

たちに言われました。「あなたがわたしを選んだのではありません。わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命したのです。それは、あなたがたが行って、実を結び、そのあなたがたの実が残るためであり、また、あなたがたがわたしの名によって父に求めるものは何でも、父があなたがたにお与えになるためです。(訳者注:「あなたがたにお与えになるためです」に相当する英語は、He may give it to you です。)」He shall give it to you(あなたがたにお与えになる)でもないし、He might give it to you(あなたがたにお与えになるかもしれない)でもなく、He may(あなたがたにお与えになるためです)なのです。つまり、祈りによって、神はあなたに与えたいと願われているのです。その祈りによって、神の願われているその事に門戸を開いているのです。神の目的であるものを、あなたの生活や人生に神が行なわれるように、あなたは許可を与えているのです。(訳者注:英語の助動詞shall,might,mayはそれぞれ、主語になっている者の意思が異なることを教えています。shallは、「どんなことがあっても、それを行ないます。」というような強い意思があります。mightは、「ひょっとしたら、それを行なうかもしれない。」というような控え目な意思です。そしてmayは、「それを行なうように許される。」というような、相手側の意思が尊重されている意思です。)

真の祈りは、一循して進みます。真の祈りは、神の御心、神の目的、神の願いから始まります。そして、神はそのような願いを私たちの心に置かれます。神は、あなたがたのうちに働いて、志を立てさせることと、事を行なわせてくださることのどちらもなさいます(訳者注:ピリピ2:13参照。英語では、both to will and to doとなっており、直訳すると、「意思と行ないの両方において働いてくださる。」となります。)ですから、神は律法を、私たちの肉の心の板に書きしるされます(エレミヤ31:33、エゼキエル36:26参照)。詩篇の筆者が述べているように、「主をおのれの喜びとせよ。主はあなたの心の願いをかなえてくださる。(37:4)」のです。神は、私たちにご自分の願いを置いてくださいます。そして、神がご自分の願いを私たちの心に置いてくださると、それから私は、それを祈りの中で神に言い表します。そして、祈りの中で神に言い表しますと、…このように神から始まって、それが下りて来て私の心を動かし、それが神に戻ります。ですから、これで一循(サイクル)が完了し、門戸が開かれ、神は、あなたのためにしたいと願われていることを行なう機会が与えられたのです。それは、神があなたを熱烈に愛されているからです。歴代誌第二16章9節で、預言者はアサ王に、「主はその御目をもって、あまねく全地を見渡し、その心のご自分と全く一つになっている人々に御力をあらわしてくださるのです。」と言いました。つまり、神は、心のご自分の心と調和している人をお探しになっています。神が望んでおられるのはそれだけです。つまり、あなたの心が神の心と一つになっていることです。そして、神は世界中を探しておられるのです。主はその御目をもって、あまねく全地を見渡し、…御力をあらわしてくださるのです。その心のご自分と全く一つになっている人々に、ご自身を、ご自身の力や愛を現わしてくださるのです。神は、みわざが達成されるための器を、ご自分の資源をこの乏しい世界に注ぐための器を探しておられるのです。ですから、神は私たちの心と意思をご自分のものと一致し、調和させるようになります。そして、それから神は、私たちを通して、ご自分の愛と祝福を注いでくださるのです。

ですから、最も重要なのは神のみこころを発見することです。あなたの心を神と調和させてくだ

さい。神の心の鼓動と一致させてください。ヨハネはこう言いました。「何事でも神のみこころにかなう願いをするなら、…これこそ神に対する私たちの確信です。(1ヨハネ5:14)」聖霊は、神のみこころに従って、私たちのためにとりなしをしてくださることを思い出してください。「何事でも神のみこころにかなう願いをするなら、神はその願いを聞いてくださるといこと、これこそ神に対する私たちの確信です。私たちの願う事を神が聞いてくださると知れば、神に願ったその事は、すでにかなえられたと知るので。(1ヨハネ5:14-15)」もし、私たちが神のみこころにしたがって祈るなら、その願った事がかなえられるという確信が私たちにはあります。それは、神がしたいと願われている事を神にさせていただくために門戸を開いたからです。鍵はもちろん、神のみこころにしたがって願う事です。

さて、そこで、冒頭の基本的な問題に戻りますが、それは、神のみこころを知ることが困難だということです。パウロは、「御霊も同じようにして、弱い私たちを…」私たちの弱点を、「…助けてくださいます。」と言いました。私たちの弱さの一つは、どのように祈ったらよいかわからないことです。それは、ある事柄について神のみこころが何であるか必ずしもわからないからです。ここに、金銭のやりくり不注意な人たちがいたとします。金銭のやりくり不注意のために、大変苦境に立たされています。愚かにお金を使ってしまいました。お金もないのに長距離電話をかけ、127ドル(記者注:1ドル120円換算で2万円ほど)の電話の請求書がきて、支払うお金がないので、電話が切られてしまいます。私はどのように祈ればよいのでしょうか。「神よ。彼らが電話代を払うことができるようにお金を送ってください。」でしょうか？ひよつとすると、神は、支出に関して賢明で慎重になる方法を教えたいと考えてらっしゃるかもしれません。もし、私が割り込んで、彼らの電話代を払ってしまったら、神が彼らに教えようとされていることを台無しにしてしまうかもしれません。私たちは、どのように祈ったらよいかわからないのです。神がだれかの生活や人生で何をなさろうとしているのか、神が私たちの人生で何をなさろうとしているのか、必ずしも私たちにはわからないのです。それが、私たちの弱さの一つです。神は、「わたしの道はあなたがたの道と異なる。わたしの道を探すことはできない。(イザヤ55:8参照)」と言われました。長年の経験を通して、時間の経過を経て、私はもっと全体像が見えるようになってきました。多くの祈りが、神のみこころとは全く外れたものであることが私はわかりました。神にしてくださいとお願いしたこと、神にお願いしたものは、神のみこころとは全く外れたものでした。神にぜひやっていただかなくてはいけないと私が主張していたことですが、神は、その愛といつくしみのゆえに、そのようなことはなさらなかったのです。ですから、年月が経ち、経験を経て、神が聞いてくださった祈りに感謝していると同じように、神が聞いてくださらなかった祈りにも感謝しています。しかし、私は神のみこころが何であるか必ずしもわかりませんでした。神のみこころがわからないので、私たちは不適切に祈ることが余りに多いのです。誤ったことのために祈ってしまいます。神に強要し、要求し始めるのが危険になるのは、この理由からです。「もし、神よ。あなたがこの祈りに答えてくださらないなら、もうあなたに信頼しません。もうあなたにお仕えしません。もうあなたを信じません。」と言うような、非常に愚かな人がいます。「もし、この件について、私の意思と願いに屈してくださらないなら、もうこれつきりです。あなたから離れさせていただきます。」と。何と馬鹿げたことでしょう。全く愚かなことです。

ですから、私たちの弱さの一つは、神のみこころがわからないことなのです。

さて、聖霊は、この問題についてどのように私たちを助けてくださるのでしょうか。「御霊ご自身が、言いようもない深いうめきによって、私たちのためにとりなしてくださいませ。」私はサムエルの母で、エルカナの妻のハンナのことを考えるのです(訳者注:以下1サムエル1章を参照。)。エルカナには、ペニンナという名のもう一人の妻がいました。イエスは、「だれもふたりの主人に仕えることはできません。(マタイ6:24)」と言われましたが、結婚において、どの男性も二人の女性を同じく愛することはできません。対立が起きてしまいます。実際、対立が起きました。ペニンナは子供をもうけることができました。ペニンナは、あっち向いてこっち向くだけで妊娠したのです。しかし、ハンナには子供ができませんでした。この文化(イスラエルの文化)の中では、子供ができないのは呪いであると考えられていました。夫に息子を与えることができないことは、呪いであると考えられていました。エルカナは、ハンナのことをより愛していたので、ペニンナは、絶えずハンナをいじめました。「ほら、おまえには、子供ができない。ごらん私の子供を。あなたは夫に子供を与えていない。」と言って、ひどくハンナを悩ませました。ハンナは、子供がいないことの利点に気づきませんでした。夫が祭りのために幕屋へ上って行った時、ペニンナは家にいて子供たちの面倒を見なければなりません。しかし、ハンナには、夫といっしょに旅をする自由がありました。ですから、二人がいっしょに旅をしているとき、またペニンナがハンナに子供がいないことをいじめたところだったので、ハンナは非常に苦しんでいました。エルカナは言いました。「どうしたのか。なぜそんなに悲しむのか。休暇じゃないか。楽しみなさい。」ハンナは、「私に子供をください。そうでなければ私は死んでしまいます。」と言いました。エルカナは、「私がそのようなことのできる神だとも言うのか。お前のことを愛しているではないか。私はたくさんの子供以上のものではないのか。」と言いました。とかく夫は何も分かっていないことが多いのです。ですから、礼拝の場所、幕屋に彼らがついた時のことがこのように書かれています。それについて聖書がどのように語っているか、その箇所をお読みしましょう。「ハンナの心は痛んでいた。彼女は主に祈って、激しく泣いた。そして請願を立てて言った。『万軍の主よ。もし、あなたが、はしための悩みを顧みて、私を心に留め、このはしためを忘れず、このはしために男の子を授けてくださいますなら、私はその子の一生を主におささげします。そして、その子の頭に、かみそりを当てません。』ハンナが主の前で長く祈っている間、祭司エリはその口もとを見守っていた(訳者注:「祭司」はチャックの挿入。)。ハンナは心のうちで祈っていたので、くちびるが動くだけで、その声は聞こえなかった。それでエリは彼女が酔っているのではないかと思った。エリは彼女に言った。『いつまで酔っているのか。酔いをさましなさい。』ハンナは答えて言った。『いいえ、わが主(訳者注:新改訳脚注参照。)。私は心に悩みのある女でございます。ぶどう酒もお酒も飲んではおりません。私は主の前に、私の心を注ぎ出していたのです。このはしためを、よこしまな女と思わないでください。私はつのる憂いといらだちのため、今まで祈っていたのです。』エリは答えて言った。『安心して行きなさい。イスラエルの神が、あなたの願ったその願いをかなえてくださるように。』(1サムエル1:10-17)」

さて、まず神が状況をとおして、ハンナを神の願いと調和するようになさったことがわかります。イスラエル国家の歴史の中で、この時状況はよくありませんでした。全然よくありませんでした。

た。エリが大祭司で、かなり良い人でしたが、彼の息子らは全く悪くよこしまな人たちでした。彼らは、自分たちの悪とよこしまなやり方で人々を神に逆らわせていました。全くよこしまでした。彼らは、父エリが死んだ時には国家の宗教的指導者の地位を引き継ぐことになっていました。国家は、どうしようもない状態にありました。靈的に最低の状態でした。神は、靈的指導者で、この靈的な泥沼から導き出し、再び神と真実な関係に導く人を必要とされていました。神は、男を得る前に女を得る必要がありました。ですから、神はハンナの胎を閉じ、子供ができないようにされました。そして、ついにこのことがハンナにとって苦痛の種となり、あまりにどうしようもなくなり、ハンナは、「主よ。どうか私に子供を、男の子を授けてくださいますように。そうすれば、私はその子をあなたにおさげします。その子を聖別し、おさげします。主よ。私はその子の一生をあなたにおさげします。」と言いました。これでハンナは、神の計画と調和するようになりました。神はハンナをご自分のみこころと調和するようになされました。ですから、神はご自分が望んでいることをハンナのためにすることができるようになりました。神は人を、靈的な人を、若いころから神に自分をささげている人を必要としておられたからです。国民を靈的に導くために、神はそのような人を必要としておられました。

さて、この話の第二点目に注目してください。ハンナの心の悩みがあまりに大きくなったので、まったく言葉にならないほどでした。それは、ただうめきでした。靈のうめきでした。唇は動いているのですが、音が出ません。声が出ません。それは、あまりに悲しみと痛みが深かったからでした。靈におけるうめきでした。このため、ハンナは、ただ深い苦しみの中にあり、靈においてうめいていました。それは、ハンナが酔っているのだと祭司が考えるほどでした。それで、祭司は酔っていることを非難しました。ここに、神がハンナをご自分のみこころと調和させてくださった、靈におけるうめきの例があります。

旧約聖書の中にあるもう一つの靈のうめきの例に、ヒゼキヤ王の場合があります。預言者が王のところに来て、「あなたの家を整理せよ。あなたは死ぬ。直らない。」と言いました。そこで王は顔を壁に向けて神に祈り始めました。そして、預言者は、王が夜通し祈ったことについて語っていません。そして、預言者はイザヤ書38章14節で説明しています。「つばめや、つるのように、私は泣き、鳩のように、うめき(訳者注: 英語のmourn は鳩のように悲しげな声で泣くという意味がありますが、ここの部分の新改訳の訳は、うめきとなっています。)ました。私の目は上を仰いで衰えました。主よ。私はしいたげられています。私の保証人となってください。」うめき(groan)です。鳩のようにうめき(mourn)ました。つばめや、つるのように、泣きました。何を言っているのかわからない音が神に対して語られました。靈が絶望し、靈がうめいたためでした。私たちが深く悼み悲しみ、痛む時も同じです。神に自分の願い事を明瞭に話すことさえできない時があります。あまりに痛みが深いので、ただうめくだけになることがあります。しかし、神は、そのようなうめきを神のみこころにそった執り成しの祈りとして解き明かされるとは、すばらしいことではありませんか。明瞭に語られていなくとも神はあなたの心の悲しみや悼みを理解し、応答して下さいます。

御靈によって祈るように聖書は私たちに教えています。ユダの手紙21節で、ユダはこのような勧めをし、「聖靈によって祈り、神の愛のうちに自分自身を保ちなさい。(訳者注: ユダ20-21節参

照)」と述べています。パウロは、エペソ人への手紙6章で、私たちが戦っている霊的戦いの話をし、私たちにとって悪魔の策略に対して立ち向かうことができるために、神のすべての武具を身に着けることがいかに大切かを語った(6:11参照)後で、私たちに武具を着けさせ、信仰の大盾を取らせ、御霊の剣を取らせ、救いのかぶとをかぶらせ、平和の福音の備えをはかせ、すべての武具を着けさせた後で、「すべての祈りと願いを用いて、どんなときにも御霊によって祈りなさい。(6:18)」と言いました。御霊による祈りです。私たちはどのようにして御霊によって祈るのでしょうか。御霊による祈り方の一つは、すでに言及しました。それは、霊でうめくことです。二つ目の方法は、コリント人への手紙第一14章に見られます。パウロは14節でこのように述べています。「もし私が異言で祈るなら、私の霊は祈るが、私の知性は実を結ばないのです。ではどうすればよいのでしょうか。私は霊において祈り、また知性においても祈りましょう。霊において賛美し、また知性においても賛美しましょう。そうでないと、あなたが霊において祝福しても、異言を知らない人々の座席に着いている人は、あなたの言っていることがわからないのですから、あなたの感謝について、どうしてアーメンと言えるでしょう。あなたの感謝は結構ですが、他の人の徳を高めることはできません。私はあなたがたのだれよりも多くの異言を話すことを神に感謝しています。」ですから、パウロは、「もし私が異言で祈るなら、私の霊は祈るが、私の知性は実を結ばないのです。自分が何を言っているかわからない。ではどう言えばよいのでしょうか。私は異言で祈り、知性で祈ります。異言で賛美し、知性で賛美します。しかし、教会ではやりません。教会全体が益を得ることができるように、異言で一万語話すよりは、五つの知性のことばを話したいのです。もし、教会にいて、解き明かす人がいないなら、黙っていなさい。異言の賜物を用いてはいけません。もし、用いるなら、異言を知らない人々の座席に着いている人は、つまり、異言を理解しない人たちは、あなたの言っていることがわからないのですから、あなたの感謝について、どうして、そうだ、アーメンだと言えるでしょう。確かに、あなたの感謝は結構です。主を賛美するよい方法です。しかし、それをするのは教会ではありません。主との個人的な交わりの時においてはよい方法です。もし、異言の賜物が与えられているなら、異言で祈ることができます。従って、霊において祈っているのです。霊でうめくことと、異言で祈ることの基本的な違いは、ただうめきが明瞭に話されていることだと思ふのです。しかし、両方とも聖霊によって助けを受け、援助を受け、導かれ、支配されています。聖霊が祈りを導いて下さるなら、それは神のみこころにそったものであることがわかります。

では、自分で何を祈っているのか分からないのに、霊において祈ることの利点は何でしょうか。まず、第一の利点は、あなたの祈りが神のみこころにそったものである確信を持つことができることです。御父のみこころを知って、御霊が執り成しをして下さるのなら、それは神のみこころにそったものであることがわかります。第二に、祈ることの主な動機になっている自己中心性を排除します。私たちの祈りが、どれほど自己中心的な動機から祈られているか気づきませんか。ヤコブは、「あなたがたのものにならないのは、あなたがたが願わないからです。願っても受けられないのは、自分の快樂のために使おうとして、悪い動機で願うからです。(ヤコブ4:2-3)」と述べています。つまり、祈りが自己中心である、何かあなたのためのものである、何かあなたが自分のために願っているものである、自己中心的な動機だ、ということです。「神よ。私はこれが、欲しいです。主よ、

私はこれが、欲しいです。」と。それは、あなたにとってのものであり、自分勝手な動機です。願っても受けられないのは、自分の快樂のために使おうとして、悪い動機で願うからです。しかし、もし霊において祈るなら、異言で祈るなら、あなたは理解できませんから、自分の祈りの動機から自己中心を排除することができます。第三に、祈るのを忘れていたことについて祈ることができるようになります。「ああ、どうしようもありません。どうすればいいのでしょうか。」と言う人がいて、その人に対し、「祈りの時に、覚えて祈ります。」と言ったことがこれまでに何度あるでしょうか。そして、祈りの時に、覚えて祈るのを忘れたことがこれまでに何度あるでしょうか。あなたは祈ると約束しました。実際、どうしようもなく祈る必要があったのです。そして、その人のためにあなたは祈るつもりでした。でも、どうしたことが忘れてしまったのです。あるいは、あなたはそのようなことはなさらないのかもしれませんが。私だけかもしれません。車の後部座席に服を置いていて、クリーニング屋に持っていくつもりで二日たってしまっています。ずっと持って行き忘れていました。車の後部座席にあります。明日は、前の座席にほうり込もうと思います。そうしたら忘れないでしょうから。とにかく、忘れてしまうことがあるのです。しかし、聖霊に祈りを導いていただくことのすばらしいことは、私をおして執り成して下さることにより、私が忘れてしまった事柄を、私が祈り忘れた必要を聖霊が祈って下さることができることです。このため、すべてを網羅して、祈って欲しいと頼まれた人のために祈ることができる機会を与えてくれます。それは、聖霊がその人たちの必要をご存じだからです。そして、私とその人たちのために祈るという約束もご存じだからです。第四に、霊において祈ることにより、あなたの霊では感じているが、人間の言語の限界のために、神に対して表現するのが難しい賛美と感謝がありますが、それを余すことなく表現できることです。自分が表現できるよりも、自分の霊ではもっと深く感じているのです。実際、それを表現しようと努力すると、自分の感じているものが減じられてしまうように感じるがよくあります。ただ言葉で表現しようとすることで、自分の感じているものが減ってしまうような気がします。感謝の念や、愛、評価、自分への神の恵みやあわれみやすばらしさに全く圧倒されることなどを、心、霊の中で感じるのです。その力を感じるのです。ああ…。しかし、言葉が、言葉が、言葉が出てこないのです。「ああ、神よ。ありがとうございます。ああ、そうじゃない。それ以上だ。」ですから、自分の霊が感じている喜び、賛美、感謝、愛などに比べると、自分が使う感謝や評価の言葉がありふれてみえます。さて、パウロが述べているように、「あなたが霊において祝福しても、…(1コリント14:16)」と言って、感謝について述べ、「あなたの感謝は結構です…」と言っています。私が霊において祈るとき、私が理解できないのであれば、神に対しいっそう幅広い表現をできます。それは、私の狭い漏斗の知性の経路を通らずとも済むからです。私の霊から直接神に届くことができます。脳と呼ばれているひどく狭い経路を押して通らなくても済むのです。開かれたところを霊が流れ表現することができます。

さて、もし、あなたに異言の賜物がないなら、少なくともうめいてください。どうか、あなたの祈りの時に御霊が執り成しをしてくださる機会を与えてください。ただ、全部の時間、うめくのに費やさないでください。パウロは、「霊において祈り、また知性においても祈りましょう。」と言いました。知性において祈る価値があります。私たちの必要と願いを明瞭にしようとする価値があります。それに

は、実際的な価値があります。しかし、英語で(訳者注:チャックは英語で話していますから英語ですが、日本人ならさしずめここは日本語でということになります。)それを表現しようとする前に、あなたが祈っている対象について、自分の考えを聖霊が導き支配してくださるようお願いしましょう。私たちが神のみこころにかなった祈りができるように。私たちが祈る時に、そのような確信を持つことができるように。何事でも神のみこころにかなう願いをするなら、神はその願いを聞いてくださるということ、私たちの願う事を神が聞いてくださると知れば、神に願ったその事は、すでになえられたと知るのです。さて、神のみこころだと分かっていることがたくさんあります。それは、神がご自分のみこころであると表明されているからです。ですから、そのようなことを祈る時には、すでに神がみこころを表明されているのですから、神のみこころであるという確信を持つことができます。主があなたを主の近くに引き寄せてくださるという確信を持って祈ることができます。主があなたを聖霊で満たしてくださるという確信を持って祈ることができます。イエス・キリストのために大胆に証しするのを主が助けてくださるという確信を持って祈ることができます。こういったことはすべて、神が私たちに表明されているみこころです。ですから、こういったことについては、確信を持って祈ることができます。他には、神のみこころが何か分からないものがあります。そのような場合に聖霊が関わってくださり、私たちの持っている弱さについて私たちを助けてくださるのです。うめき、あるいは、もし、異言の賜物をいただいているのであれば、異言を通して、聖霊は執り成してください。そうすれば、あなたの祈りに応答して、これまでに知らなかったほどすばらしく神が働いてくださり、動いてくださっているのがわかり、ワクワクします。

信者のうちにおられる聖霊 パート5 (#3062)

Holy Spirit in the life of believers Part5

(訳者注:テープの頭が切れている。)ですから、パウロはエペソ人に対し、彼らが受けた多くのすばらしい祝福について語っているのです。パウロは、「神に感謝します。神はキリスト・イエスにおいて、天にあるすべての霊的祝福をもって私たちを祝福してくださいました。(エペソ1:3参照)」と述べて、この章を始めています。パウロは、ここですばらしい祝福について語っています。神は私たちを召して下さり、子として下さり、私たちの罪を赦して下さり、「またあなたがたも、キリストにあって、真理のことば、すなわちあなたがたの救いの福音を聞き、またそれを信じたことによって、約束の聖霊をもって証印を押されました。聖霊は私たちが御国を受け継ぐことの保証であられません。これは神の民の贖いのためであり、神の栄光がほめたたえられるためです。(エペソ1:13-14)」パウロはエペソ人へ手紙を書いている中で、彼らが約束の聖霊をもって証印を押されたことについて語っています。パウロがエペソにある教会へ手紙を書いた時代では、ちょうどその歴史の中で、エペソの町がアジアで主要な港の一つになっていました。東方から運ばれてローマ帝国の西部で販売される財のほとんどが、エペソ港を経由しました。そこは、世界の商品流通の中心でした。東方から大規模の隊商が商品を携えて来て、運んでこられた商品を買うために、ローマからの商人がエペソに集まっていました。そうした商品をローマへ送り、ローマ帝国全国に販売するためでした。ローマの大きな港町はポテオリでした。商人は、エペソで財を購入し、ポテオリへ出荷するために梱包しました。梱包をすると、証印を押しました。商品にろうの証印を押し、証印付き指輪の押印をつけました。それは所有権のしるしでした。そして、財は船に積み込まれローマへ送られました。ポテオリ港へ到着すると、商人の使用人が出て行き、船から荷が下ろされると、主人の財を確かめました。証印が荷についていたからでした。それは、所有権を表すはんこ、あるいはしるしでした。パウロはエペソ人に、「神は、あなたがたにご自分の所有権をあらわすはんこを押されたのです。」と述べているのです。そして、その神の所有権のはんこが神の聖霊なのです。聖霊を受けて、この方が自分におられることは、何とすばらしいことでしょう。それは、自分が神に属しているという確信が持てるからです。聖霊は、私が神のものであることを証明するもので、自分の生活における神の証印だからです。イエスは、あなたを奴隷市場から買い取ってくださいました。あなたはかつて罪の奴隷でした。滅びのなかに束縛されていました。しかし、今はあなたはイエスのものです。

パウロはコリント人に、「あなたがたのからだは、あなたがたのうちに住まれる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたは、もはや自分自身のものではないことを、知らないのですか。(1コリント6:19)」と書きました。あなたがたのからだは、聖霊の宮であることを、知らないのですか。もはや自分自身のものではないのです。「あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから自分のからだに霊をもって、神の栄光を現わしなさい。(訳者注:1コリント6:20 欽定訳ではからだに霊と両方書かれている。)」とパウロは言いました。これは、自分自身のものではなく、自分の好き勝手に支配したり生活したりするためのものではありません。自分が選ぶとおりに生活するため

のものではありません。私はイエスのものです。イエスが私を買い取ってくださいました。イエスは、所有権の印を私につけて下さいました。ですから、今、私はイエスのみこころに従って生きます。それは、イエスが私を買い取られたからであり、私はイエスのものだからです。ペテロはこのように書いています。「ご承知のように、あなたがたが先祖から伝えられたむなしき生き方から贖い出されたのは、銀や金のような朽ちる物にはよらず、傷もなく汚れもない小羊のようなイエス・キリストの、尊い血によったのです。(1ペテロ1:18-19参照)」あなたは贖われたのです。買い取られたのです。それは、銀や金のような朽ちる物にはよらず、イエスの尊い血によったのです。神はあなたを買い取り、今、神はあなたをご自分のものであると主張されます。あなたは神が買い取られた所有物です。神はあなたの生活に、ご自分の所有権の証印を押されました。実に、私たちは、母港へ向かう船に載せられた商品のようなものです。船が到着すると、神は、「そう。それはわたしのものだ。それにはわたしのはんこがついている。そこにわたしの証印がある。これはわたしのものだ。」と言って下さるのです。イエスは、あなたのことをご自分のものであると認めて下さいます。

さて、神の子どもとして、…そのことについて、少し考えてみて下さい。神の子どもとして、神はあなたに豊かな資産を受け継ぐ約束をされました。パウロはローマ人への手紙8章で、「私たちが神の子どもであることは、御霊ご自身が、私たちの霊とともに、あかししてくださいます。もし子どもであるなら、相続人でもあります。私たちがキリストと、栄光をともに受けるために苦難をともにしているなら、私たちは神の相続人であり、キリストとの共同相続人であります。(ローマ8:16-17)」と言いました。ペテロは、「私たちの主イエス・キリストの父なる神がほめたたえられますように。神は、ご自分の大きなあわれみのゆえに、イエス・キリストが死者の中からよみがえられたことによって、私たちを新しく生まれさせて、生ける望みを持つようにしてくださいました。また、朽ちることも汚れることも、消えて行くこともない資産を受け継ぐようにして下さいました。これはあなたがたのために、天にたくわえられているのです。あなたがたは、神の御力によって守られています。(1ペテロ1:3-5参照)」と言いました。すばらしい資産を受け継ぐことができます。神に感謝します。私たちは、資産を受け継ぎます。それは、朽ちることがありません。汚れることがありません。消えて行くこともありません。これはあなたがたのために、天にたくわえられているのです。あなたがたは、神の御力によって守られています。詩篇の筆者は、「あなたのいつくしみは、なんと大きいことでしょう。あなたはそれを、あなたを恐れる者のためにたくわえ、あなたに身を避ける者のために人の子の前で、それを備えられました。(31:19)」と言いました。あなたと私のために神がたくわえられているいつくしみは、なんと大きいことでしょう。そのいつくしみは、なんと奇しく大きいことでしょう。パウロは、神のいつくしみの豊かさについて、神の栄光の豊かさ、神の恵みの豊かさについて語っています。いつくしみ、栄光、恵みの豊かさについてです。

さて、ここでパウロは、聖霊が私たちがそれを受け継ぐことの保証(earnest)だと述べています。保証とは、手付金(downpayment)、あるいは、保証金(deposit)でした。内金(earnest money)という言い回しがあります。それは、あなたがその商品の本気(earnest)で購入する意図のあることを示す手付金のことです。「あなたに対し、私の本気だということを証明したいのです。今、全額はありませんが、あなたに保証金をお渡しします。」内金です。このお金は、私がこの取引を完了す

る意図があることをあなたに示すものです。もし、あなたが車を売る広告を出したとしましょう。そして、誰かが車を見に来たとします。それを試乗して、その人が、こう言ったとします。「気に入りました。欲しいです。買いたいです。私のために取っておいて下さい。お金はありませんが、銀行に行って、ローンを交渉してきます。しかし、この車を他の人に売らないでほしいのです。ほんとうにこの車が欲しいので、私のために取っておいてください。」もし、あなたが賢明なら、その人にこう言うでしょう。「保証金を下さい。本当かどうかを示してください。あなたが、本気かどうかを。」なぜかと言いますと、もし、あなたが、「はい。じゃあ、あなたのですよ。」と言ってしまっても、その人が再び現われないかもしれないからです。ひょっとすると、たくさんの人が来て、「ああ。探していたものとぴったりだ。買いたいです。」と言うかもしれません。「いいえ。だめです。もう売ってしまいました。」しかし、あの人は二度と戻って来ないかもしれません。二度と戻って来ない人のためにその車をとっているのです、たくさんの買い手を見送らなければなりません。それは、あなたが保証金を取らなかったからです。ひょっとすると、その人は銀行に行く途中で中古車店に立ち寄り、あなたの車より少し良くて、もっと安い車を見つけて、それを買ってしまったかもしれません。口約束以外は、あなたに対し何の義務もありません。あなたに、何ら内金を払わなかったからです。ですから、あなたを贖うことについて、本気だということを神はあなたに知ってもらいたいのです。神は、この取引を完了させる意図を持っておられます。途中で止める気はありません。ですから、神はご自分の意図を示すために、神はあなたに与えると約束された将来の栄光の保証金をあなたにお与えになったのです。そして、その保証金が、聖霊なのです。聖霊に満たされているときに、その実は、愛、喜び、平安、寛容です(ガラテヤ5:22参照)。御霊の実で満たされているときには、とても祝福されて大いに喜んでいて、「ああ、何と豊かな素晴らしい生活なんだ。聖霊で満たされているとは。」と言います。しかし、それは、単なる保証金にしかすぎないのです。それは、初めにしかすぎないのです。ですから、神は、ご自分がみなさんを完全に贖うという意図が、本気で真実であることを示そうとされているのです。ですから、パウロは、買い取った所有物が贖われるまでは、「聖霊は私たちが御国を受け継ぐことの保証でられます。」と述べているのです。

パウロは、エペソ人への手紙4章で、「神の聖霊を悲しませてはいけません。あなたがたは、贖いの日のために、聖霊によって証印を押されているのです。(4:30)」と言いました。ですから、神はご自分の所有物であるというしるしである聖霊をあなたの生活に押されているのです。その証印は、神が所有しておられるというしるしです。それは、神ご自身がみなさんを完全に贖うという意図が本気だと示す保証金、あるいは、手付金としてみなさんにお与えになった保証金です。しかし、今、パウロは、「神の聖霊を悲しませてはいけません。あなたがたは、贖いの日のために、聖霊によって証印を押されているのです。」と述べています。いつの日か、神は来られます。神はあなたをご自分のものであると言われます。神は、あなたを贖うことを承諾されました。神は、保証金をお払いになりました。そして、ご自分の意図が本気であることを証明するために、あなたに聖霊をお与えになったのです。コリント人への手紙第二1章22節で、パウロは、「神はまた、確認の印を私たちに押し、保証として、御霊を私たちの心に与えてくださいました。」と言っています。これは、エペソ人への手紙とほぼ同じ考え方です。「印を私たちに押し、保証として、御霊を私たちの心に

与えてくださいました。」また、パウロは続けて、コリント人への手紙第2章5節で、「私たちをこのことにかなう者としてくださった方は神です。神は、その保証として御霊を下さいました。(訳者注:新改訳脚注参照)」と言いました。ですから、聖霊の賜物は私に大いなる励まし、慰めを与えてくれるのです。神は、お始めになったことを、私の贖いを完成させて下さることを私は知っています(ピリピ1:6参照)。神は、私のことをご自分のものとして主張してくださいます。

さて、4章でパウロが、「神の聖霊を悲しませてはいけません。あなたがたは、贖いの日のために、聖霊によって証印を押されているのです。」と勧めをしていますが、この箇所の文脈のなかで、聖霊を悲しませるものをパウロは示してくれています。25節から始まって、パウロは、このように述べています。「ですから、あなたがたは偽りを捨て、おのおの隣人に対して真実を語りなさい。私たちはからだの一部分として互いにそれぞれのものだからです。」聖霊を悲しませるものの筆頭として、パウロが挙げているものの一つは偽りです。律法の下で、神は、偽りの証言をしてはならないと言われました(出エジプト20:16参照)。嘘をついてはいけません。神は、内なる部分に真実をお求めになります。そして、嘘は、聖霊を悲しませます。パウロは、「日が暮れるまで憤ったままでいてはいけません。(4:26)」と言いました。憤ることは、聖霊を悲しませるもう一つの性質です。実際、場合によっては私たちが悲しませることもあります。腹を立て、癩癩をおこすと、何か愚かなことを行ったり、何か愚かなことを言ったりして、憤りや怒りを表したことについて、自分自身が悲しむことがよくあります。そのような経験の後で、とてもバツが悪くなってしまうことがよくあります。しかし、そのようなことは、聖霊を悲しませます。そして、28節でパウロは、「盗みをしている者は、もう盗んではいけません。」と言っています。自分に属さないものを取ることは、聖霊を悲しませます。そして、パウロは、「悪いことばを、いっさい口から出してはいけません。(4:29)」と述べています。悪いことば、シモネタ、いやらしいあてこすりなどは、聖霊を悲しませます。悪いことば…ちょうどそこで、このようなものを列挙しているところで、「神の聖霊を悲しませてはいけません。」と言っています。それは、これらのものが神の聖霊を悲しませるものだからです。

そしてパウロは、列挙を続けています。「苦み(bitterness)…」「苦み…をいっさい…」苦み(訳者注:新改訳では「無慈悲」となっていますが、欽定訳に合わせた「苦み」という訳をここでは採用します。)とは、何と恐ろしいことでしょう。苦みが実際、私たちの祈りの生活に支障をきたすことが警告されています。苦みは生活を支配し、あなたを汚すことができます。聖書は、「苦みをみな捨て去りなさい。」と教えています。旧約聖書の中に、苦みをもった人の典型的な例を見ることができます。その人の苦みが、究極的にその人を自殺に追いやりました。彼は苦みを持っていました。その人はアヒトフェルです。この名前が、ダビデ王と関連のある名前であることを覚えておられるかもしれません。アヒトフェルは、ダビデの主要な議官の一人だったからです。親友の一人であり、秘密も打ち明けられる親友だったのです。ダビデはこの関係に背信があった時について、「…私をそしめる者が敵ではありません。それなら私は忍べたでしょう。…そうではなくて、おまえが。私の同輩、私の友、私の親友のおまえが。私たちは、いっしょに仲良く語り合い、神の家に群れといっしょに歩いて行ったのに。(詩篇55:12-14)」と言いました。しかし、アヒトフェルはダビデに対して苦みを持ちました。そして、ダビデから離れ、王の宮廷を離れ、ダビデの息子のアブシャロ

ムが自分の父に対して謀反を起こすことにし、武力で父から王座を奪いとうとした時まで、苦々しい思いになって生きました。そして、アヒトフェルはアブシャロムのところに来て、自らアブシャロムに仕えました。王国からダビデを追放し、王国がアブシャロムのものになるのを、自らすすんで助けました。アブシャロムのところに集まってきた軍隊をアブシャロムが率いてエルサレムに上ってきた時、ダビデはエルサレムから逃げてしまっていました。この人、アヒトフェルは、ダビデに対しあまりにも苦々しくなっていたので、「宮廷の屋上の上に天幕を張り、全イスラエルの目の前で、あなたの父のそばめたちのところに入りなさい。(2サムエル16:21-22参照)」と言いました。ダビデを徹底的に辱めたかったのです。かつての偉大な王を完全に見下したかったのです。そして、アヒトフェルはアブシャロムに、「あなたの軍隊の一部を取り、あなたの父のあとを追って、殺させて下さい。そうすれば、あなたの手の内に王国が立てられるようになるでしょう。(2サムエル17:1-2参照)」と言いました。アヒトフェルは自分の手でダビデを殺したいと思っていました。苦みがこのように人を支配するようになるのは、どうしたことでしょうか。かつての親友に、かつていっしょに神の家に行った人に対して謀反を起こしてしまうとは…。しかし、アヒトフェルの場合はそうでした。そして、苦みが彼を食い尽くしていました。ダビデは、アブシャロムの陣営に間者を送りこんでいました。もう一人の賢い議官を残していました。その人は老人で、ダビデに、「あなたといっしょに行きます。」と言いましたが、ダビデは、「いや、あなたはここに残って、アヒトフェルの助言を打ちこわしてくれた方が私の助けになる。」と言いました(2サムエル15:32-34参照)。それで、彼は残りました。アヒトフェルが「手下を連れてダビデを追わせて下さい。ダビデは疲れているので、捕まえて殺します。そうすれば、王国はあなたのものになります。」と言った時に、このダビデの友は、「そのはかりごとは良くありません。追い詰められた時こそ、熊の気が荒くなる時です。ダビデは追い詰められており、勇士がダビデとともにいます。彼らを追い詰めれば、気の荒い動物を追い詰めているようなものです。それは、危険な状態です。全軍が集まるまで待ち、ダビデを攻めるときには、必ずや勝利をおさめられるようにしなければなりません。」と言いました。アブシャロムは、このもう一人の助言に耳を傾けました。それで、アヒトフェルは、それが良くない助言だと気づき、自分の助言が拒絶され、もう一つの助言でひどいことが起こると気づいたので、非常に怒り、苦みを持ち、彼は出て行きました。アブシャロムは、ダビデに対し背水の陣をしき、自殺しました。苦みです。何が彼をそれほど苦々しくできたのでしょうか。聖書の記録を詳しく調べると、バテシエバが彼の孫娘であったことがわかります。ダビデが自分の孫娘のところに入り、結婚によって孫息子を殺したとき、アブシャロムは苦みを持ちました。そして、その苦みは残り、それがまとわりつき、ついに破滅をもたらしました。苦みを心にまとわりつくままにしておくなら、それは、究極的にあなたを破滅させます。

しかし、その一方、苦みは聖霊を悲しませるのです。もし、今日あなたの心に誰かに対する苦みがあるなら、…権利という観点からは、あなたが苦々しくなる権利はあります。ひょっとすると、真に故意にあなたを傷つけたのかもしれませんが。そして、あなたは、「これについては、私は苦々しくなる権利がある。」と言われるかもしれません。苦みを持つ権利を保ち続けることもできますが、あなたに言いたいことがあります。あなたのその苦みは、相手よりあなた自身を傷つけているので

す。そして、苦みはついにはあなたを破滅させます。それは、聖霊を悲しませるからです。誰も、苦みにしがみついている余裕などないはずです。「苦み、憤り、怒り、叫び、そしりなどを、いっさいの悪意とともに、みな捨て去りなさい。(エペソ4:31)」ここに列挙されているようなものが、聖霊を悲しませるものなのです。そのようなものから離れなさい。持っていてはいけません。「神の聖霊を悲しませてはいけません。あなたがたは、贖いの日のために、聖霊によって証印を押されているのです。(エペソ4:30)」

しかし、パウロは、列挙を続け、5章3節で、「あなたがたの間では、聖徒にふさわしく、不品行も、どんな汚れも、またむさぼりも、口にすることさえいけません。」と述べています。こういった態度、苦み、憤り、怒り、叫び、悪意といった態度が聖霊を悲しませます。しかし、こういった行為も聖霊を悲しませます。つまり、不品行、性的な汚れ、むさぼり、…そして、パウロは続けています。「また、みだらなことや、愚かな話しや、下品な冗談を避けなさい。そのようなことは良くないことです。」つまり、適切ではないのです。悪を示唆する秘められた感情があります。「あなたがたがよく見て知っているとおりの、不品行な者や、汚れた者や、むさぼる者 — これが偶像礼拝者です。 — こういう人はだれも、…相続することはできません。(エペソ5:5)」神が私たちの贖いの日まで証印を押して下さるすばらしい相続について、私たちは話しました。しかし、聖霊を悲しませてしまうのです。もし、このようなことに関わってしまうと、聖霊を悲しませてしまい、fornicatorやwhoremonger(訳者注:fornicatorもwhoremongerも「不品行な者」と聖書で訳されています。)むさぼる者、偶像礼拝者になってしまいます。「あなたがたがよく見て知っているとおりの、…こういう人はだれも、キリストと神との御国を相続することができません。」パウロは言いました。「むなしことばに、だまされてはいけません。こういう行ないのゆえに、神の怒りは不従順な子らに下るのです。」このようなことをしても神の御国を相続することができると、誰からもだまされてはいけません。神の子どもとして、このような態度をしても、このようなたぐいの活動に参加しても、神との関係を維持することができるなどと言われて、誰からもだまされてはいけません。この方は聖い御霊であり、このようなものによって悲しまれる方です。贖いの日のために私たちに証印を押して下さっている聖霊を悲しませてはならないと、私たちは勧めを受けています。「ですから、彼らの仲間になってはいけません。」とパウロは言っています。

けれども、パウロは続けて、聖霊と私たち、また、私たちと聖霊との関係を良くするものについて示しています。「お互いに親切にし、心の優しい人となり、神がキリストにおいてあなたがたを赦してくださったように、互いに赦し合いなさい。(エペソ4:32)」苦みを持ち続けてはいけません。怒りを、悪意を、むさぼりを持ち続けてはいけません。そうではなくて、互いに親切に、心の優しい人となり、神がキリストにおいてあなたがたを赦してくださったように、赦す人になりなさい。みなさんは、こう言われるかもしれません。「チャック、それはみな結構で良い事ですが、あいつらが私にした悪事をご存知じゃない。私を傷つけ、人生を破壊しそうになったのだ。自分に対してなされたことについて、頭の中で私は悩まされている。そのことについて、私は彼らを赦すことができません。」人がすることで、とても悪意に満ち、とても悪いことがあるのを私は知っています。ですから、自然のままでは赦すことができないことを私は理解しています。しかし、私たちは自然のままのことを

話しているわけではありません。私たちは、超自然的なことを話しているのです。あなたの心や思いに対し、神がなさりたいことについて話しているのです。もし、神がなされるままにあなたがすればの話ですが。私たちが話しているのは、聖霊であり、聖霊があなたがたのうちに住んでおられることについてです。聖霊は、神が、ご自分のものである、ご自分が買い取ったものであると主張されるその日まで、神の所有をあらわすしるしです。あなたに封印をしてくださっているのです。私たちは、信者の生活のうちにおられる聖霊のテーマを取り扱ってきていますが、聖霊は、私たちがイエス・キリストの似姿に変えられるための力を与えてくださいます。ペテロはこう言いました。「あなたがたは、罪人たちのこのような反抗を忍ばれた方のことを考えなさい。ののしられても、ののしり返しませんでした。(訳者注:ヘブル12:3と1ペテロ2:23が合わさっています。)」イエスは、ご自分をこんなにもいたぶる者たちのために祈られました。「父よ。彼らをお赦してください。(ルカ23:34)」聖霊が、この能力を、赦す力を与えることがおできになります。実際にあなたが赦すまで、あなたの心は癒されはじめません。まだ、その結果、まだ悩んでいる、まだ多くの問題を抱えている理由は、あなたが赦していないからです。それにしがみついているからです。それが悪影響を与えているのです。苦みが悪影響を与えているのです。そして、破壊するのです。これは、選択ではありません。必要です。非常に重要なのです。なぜなら、苦みは汚すからです。みなさんが、それを主のもとへ持って来て、このように言うことは、非常に重要です。「主よ。助けてください。そういった悪人によって、私に対してなされた間違ったこと、悪いことを赦すことができるように、聖霊の力を与えてください。その人たちを赦すことができるように、私が自由にされ、きよくされるように助けてください。私がそれにしがみついている限り、ただ私を汚し、また汚し続けるだけで、神が望んでおられるような者になれないだけです。そのようにものにしがみついていると、聖霊を悲しませてしまいます。」どうか、神の助けを求めてください。神はしてくださいます。することがおできになります。神は苦みをあなたの頭から洗い流すことがおできになります。人生から洗い流すことができます。「だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って…(2コリント5:17)」とあります。過ぎ去らせて下さい。去らせて下さい。「…すべてが新しくなりました。」そこから、進んで下さい。しかし、あなたを贖いの日まで封印して下さっている聖霊を悲しませないで下さい。

御霊の賜物概論／コリント人への手紙第一12章(#3063)

Introduction to gifts of Holy Spirit/1Cor.12

今晚、聖霊の賜物のシリーズを始めたいと思います。では、コリント人への手紙第一12章を開きましょう。そこでパウロは、聖霊の賜物について語っています。今晚は、聖霊の賜物のテーマの概論のようなものになります。パウロは、12章を次のように始めています。「さて、兄弟たち。霊的な事(spirituals)についてですが、あなたがたに、ぜひ次のことを知っていただきたいのです。」もし、欽定訳の聖書をお持ちなら、賜物(gifts)という言葉が斜体で書かれていることにお気づきになるでしょう。以前にも言及したことがあります、斜体で書かれている言葉が出てきたら、その言葉は、原本のギリシャ語にはなかったが、流れが理解できるように翻訳者が挿入したという意味です。4節でパウロは、「賜物」の多様性について言及してはいますが、1章(訳者注:1節のことか?)とところで挿入があるのは、流れを理解できるようにするためです。「霊的な事についてですが」では、十分な意味を持ちません。一つの言語から別の言語に翻訳するのは、難しいです。言語によっては異なる時制があります。英語なら、二つ三つの言葉で説明しなければならないような記述的な言葉もあります。ぴったりそれに相当する英語の言葉がないのです。それで、それを翻訳しようとするときは、解釈するような形になります。しかし、原語で示されている十分な意味をとりつつ、一つの言語から別の言語に翻訳するのは難しいです。翻訳者が、「さて、…御霊の事から(things)についてですが(訳者注:新改訳脚注参照)」と挿入することもできたはずですが、なぜなら、パウロは、御霊の事からについて話そうとしているからです。あるいは、「さて、…霊的な事からについてですが」とすることもできたはずですが。けれども、「賜物」という言葉も適切でしょう。いま言いましたように、4節にその言葉が出ているからです。これが、12章においてパウロが紹介しているテーマ、「御霊の賜物」というテーマであることは明らかです。ここ12章で、彼は、聖霊の賜物とその現われをかなり列挙しています。

パウロはこのように述べています。「さて、兄弟たち。御霊の賜物についてですが、あなたがたに、ぜひ次のことを知っていただきたいのです。(訳者注:英語の直訳は、「無知であってほしくないのです。」となる。)」パウロは、教会が、ある重要な霊的な真理について知っていてほしい、無知であってほしくないを願っていました。ローマ人への手紙11章25節では、イスラエル人の一部がかたくなになったのは異邦人の完成のなるときまでであることを、ぜひ知っていただきたいと考えていました。コリント人への手紙第一10章1節では、イスラエルの国民の歴史とエジプトからの救いが型の歴史であることを、ぜひ知っていただきたいと考えていました。つまり、それが教会の型であり、また、私たちが罪の力から救い出されて、御霊に満たされた豊かな生活に導き入れられることの型でした。ここでは、「御霊の賜物についてですが、あなたがたに、ぜひ次のことを知っていただきたいのです。」と言っており、テサロニケ人への手紙(1テサロニケ4:13)では、キリストにあって「眠った人々のことについては、」つまり、死んでしまった人々の将来の立場とその復活については、「あなたがたに知らないでいてもらいたくありません。」とあります。ですからパウロは、「あなたがたに知らないでいてもらいたくありません。」と告げて、多くのテーマを紹介しています。面白い

のは、パウロが「あなたがたに知らないでいてもらいたくありません。」と言っている後には、事実上かならずと言っていいほど、そのテーマについて、ひどい無知が教会で横行している事実が続いています。このテーマについて無知であり、そして多くのばあい理解するのが難しかったので、かなり無知なままであったことは疑いの余地はありません。聖霊の賜物のテーマほど、今の教会において無知があるテーマはないのではないのでしょうか。対立している意見のどちら側においても、無知があると思います。私たちが用いることのできる聖霊の賜物が今日に存在している事実さえ、知らない人がたくさんいると思います。聖霊の賜物を用いている人たちの間で、適切な聖書的な用い方について、無知が横行しています。さて、実際パウロは、どの賜物においても他にひけをとらないコリント人たちに対して書いていたのです。たくさんのお霊の賜物がありました。事実コリントでは、すべてのお霊の賜物が現われ、示されていたと思います。それなのに、お霊の賜物の現われに伴い、お霊の賜物の乱用が多くみられました。そして、基本的にパウロは、これら多くの乱用を正すために手紙を書いていました。これについて、私たちはとても感謝することができます。パウロがお霊の賜物の乱用を正すために手紙を書いてくれたことで、聖霊の賜物の適切な用い方の指針を得ることができるからです。ですから、聖霊の賜物のテーマについて、今日かなりの無知がみられるのです。このテーマについてのシリーズの学びをすることによって、このテーマについて存在する多くの無知について、明確にし、解決してゆくことができると考えています。

パウロはそれから、彼らに確認しはじめます。「…あなたがたに、ぜひ次のことを知っていただきたいのです。」と言って、「ご承知のように、…」と、まず、彼らが知っていた基本的な基礎の真理を確認しはじめます。「…あなたがたが異邦人(gentiles)であったときには、どう導かれたとしても、引かれて行った所は、ものを言わない偶像の所でした。(12:2参照)」異邦人として、彼らは神の契約の埒外にいました。新約聖書において異邦人(gentiles)という言葉は、異教徒(heathen)や偶像礼拝者(pagans)と同意語です。あなたがたはかつて、偶像礼拝者だった。あなたがたはかつて、異教徒だった。エペソ人への手紙2章11節で、パウロは、このように述べています。「ですから、思い出してください。あなたがたは、以前は肉において、異邦人」あるいは異教徒「でした。すなわち、肉において人の手による、いわゆる割礼を持つ人々からは、無割礼の人々と呼ばれる者であって、そのころの…。」つまり、ここでパウロは、異邦人が何であるかを説明しています。「そのころのあなたがたは、キリストから離れ、イスラエルの国から除外され、約束の契約については他国人であり、この世にあって望みもなく、神もない人たちでした。」ですから、これが異邦人という言葉の定義でした。聖書で異邦人という言葉が使われている時には、キリストから離れ、イスラエルの国から除外され、約束の契約については他国人であり、この世にあって望みもなく、神もない人たちのこととして言及されていました。ですから、パウロは、「思い出してください」、あるいは、あなたがたが知っているように、「あなたがたは、以前は肉において、異邦人でした。」と言っています。エペソ人への手紙4章17節では、パウロは、次のように述べています。「そこで私は、主にあって言明し、おごそかに勧めます。異邦人がむなしい心で歩んでいるように歩んではなりません。」これらの異教徒が歩んでいるように歩んではなりません。「彼らは、その知性において暗くなり、彼らのうちにある無知と、かたくなな心とのゆえに、神のいのちから遠く離れています。(エペソ

4:18) 」ですから、聖書に使われている異邦人という言葉の、さらに詳しい定義がなされています。むなしい心で歩いており、その知性において暗くなり、無知のために神のいのちから遠く離れ、神について、聖霊について心がかたくなになっている者です。

そして、あなたがたはかつて異邦人でしたが、その結果、「引かれて行った所は、ものを言わない(dumb)偶像の所でした。(12:2)」さて、そのdumbという言葉は、語ることのできない偶像という意味です。おばかさん(dumb bell)という意味ではなくて、ものが言えない偶像のことです。コリントでは、偶像を礼拝していました。ものも言えず、聞くこともできず、感じることもできず、考えることもできず、歩くこともできず、見ることもできない偶像でした。ダビデは、異教徒の偶像の説明をしたときに、彼らが「おまえの神はどこにいるのか。」と言った(詩篇115:2参照)、と言いました。物事がうまくいかないと、人々はあなたによくそう言います。八方塞がりになったときに、「おまえの神はどこにいるのか。」と言います。人々が、「おまえの神はどこにいるのか。」と言った時に、ダビデは、「私たちの神は天におられる。その望むところをことごとく行なわれる。(詩篇115:3参照)」と答えました。つまり、神が物事を掌握し、神が支配しておられます。悲劇的に見え、厳しく、困難に見えるかもしれませんが、神が支配しておられるのです。「私たちの神は天におられる。」神が統治されています。「その望むところをことごとく行なわれる。」しかし、あなたがたの神々はどうだ。ダビデは、彼らの神々が、異教徒の神々が、木や石でできていると告げました。そして、目があっても見えない、耳があっても聞こえない、鼻があってもかげない、手があってもさわれず、足があっても歩けない、のどがあっても声をたてることもできない、口があっても語れず、目があっても見えない、と言いました。ですから、パウロは、見えない、語れない、聞くことができない、と異教徒の神々を説明しているのです。そして、ここでは、ものを言わない(dumb)、あるいは、啞(mute)の偶像と呼んでいます。語れない偶像のことです。詩篇の記者が異教徒の偶像について告げていることで面白いのは、それを説明しているときに、人が神を造ると、人が偶像を彫ると、木をとって、偶像を彫り、形をつくりますが、それを自分に似せてつくることです。偶像に、鼻を彫り、目を彫り、耳を彫り、口を彫り、自分に似せてつくっています。それを自分に似せてつくっています。しかしながら、自分の神を自分に似せてつくと、その神が実に自分より劣るように造っています。目を彫っても、その神は見ることはできませんし、耳を彫っても聞くことができず、口を彫っても語ることはできません。ですから、自分の神を自分より劣るものに造っています。ですから、人が神を造っても、自分に似せてつくるのですが、自分より劣るものに造っています。そして、同じ箇所、詩篇の記者は、それを造ったものは、自分が造った神々と同じようになった、と観察しています。したがって、人は自分の神々のようになってしまう。もし、あなたが自分の神を造ったが、自分より劣るものに造ったので、今やあなたはその神のようになった、というのは悪化ですね。あなたが悪くなっていることです。ですから、偽の神々を造るものは、実に悪くなっていきます。格下げです。その神が自分より劣っているのに、自分の造った神を礼拝すると、自分を格下げすることになります。ですから、偶像、ものを言わない偶像を礼拝すると、自分が造った神と同じようになります。あなたの神は見ることはできないので、あなたは、神の真理や事柄についてかたくなりなります。あなたの神は聞くことができませんので、あなたは御霊の事がらと神の御声が

聞こえなくなります。あなたの神は感じるできません。それで、あなたは無感覚になります。冷淡で、きつくなります。人が自分の神のようになってゆくのです。人々がいろいろなことをしでかして、それがニュースとして報道され、酷い残虐なことをしたと報道されることが多いのですが、私たちは人がなぜそのような事ができるのか、と誤ってしまいます。感覚が無いに違いない。そのような事をするのだから、感覚が無いんだ。普通の感覚が無いんだ、と誤ってしまいます。それは、実にもっともなことです。その人たちは、感じる事ができない神々を礼拝してきたのです。彼らは、自分たちの神々のようになり、もはや感じる事ができなくなりました。感覚が無いので、最もひどいことをして、冷淡になり、冷笑していられるのです。今日それが余りに多く表されています。ひどい犯罪を犯して逮捕された人が、法廷であざ笑いながら座っています。挑戦的です。反省の念が全く見受けられません。良心の呵責のしるしが全くみうけられません。それで、よく新聞に、「良心の呵責のしるしが全くない」とよく書かれています。それは、感覚のない神々を礼拝し続けてきたので、無感覚になってしまったからです。

イザヤは、その書44章で、人が木を取って、その木から偶像を彫り、それを礼拝することがいかに愚かなことを示しています。13節から彼はこのように述べています。「木で細工する者は、測りなわで測り、鉄筆で輪郭をとり、かんなで削り、コンパスで線を引き、人の形に造り、人間の美しい姿に仕上げ、家(訳者注:新改訳では、「神殿」となっていますが、英語ではhouse となっています。)に安置する。」ですから、木で細工する者は、木を取り出し、測りなわを取り出し、コンパスを取り出し、線を描き、家の中の台の上に置けるように、人に見えるように彫ります。「彼は杉の木を切り、あるいはうばめがしや榿の木を選んで、林の木の中で自分のために強くする(訳者注:新改訳脚注参照。)。また、月桂樹を植えると、大雨が育てる。それは人間のたきぎになり、…。」つまり、木を取って切って一部を燃やすのです。暖炉にくべるのです。「…人はそのいくらかを取って暖まり、…。」木から切り取った枝の一部を取って、火をおこし、暖まります。「…また、これを燃やしてパンを焼く。」ですから、自分のパンを焼くために、オープンにそれを入れます。「また、これで神を造って…。」同じ木から、その一部は暖炉にくべて自分が暖まり、また一部をオープンに入れて自分のパンを焼き、また一部を取って、彫り始めて神を造って拝みます。「…それを偶像に仕立てて、これにひれ伏す。」そして、「その半分は火に燃やし、その半分で肉を食べ、あぶり肉をあぶって満腹する。また、暖まって、『ああ、暖まった。熱くなった。』と言う。その残りで神を造り、自分の偶像とし、それにひれ伏して拝み、それに祈って『私を救ってください。あなたは私の神だから。』と言う。彼らは知りもせず、悟りもしない。彼らの目は固くふさがって見ることもできず、彼らの心もふさがって悟ることもできない。(44:15-18)」とイザヤは言いました。意味をなしませんね。全く非合理です。木から枝を取って、それで火をおこし、肉をあぶり、パンを焼き、残りで神を彫り、それにひれ伏し、礼拝し、祈り、「これは私の神だ。」と言う。「彼らは考えてもみず、知識も英知もないので、『私は、その半分を火に燃やし、その炭火でパンを焼き、肉をあぶって食べた。その残りで忌みきらうべき物を造り、木の切れ端の前にひれ伏すのだろうか。』とさえ言わない。灰にあこがれる者の心は欺かれ、惑わされて、自分を救い出すことができず、『私の右の手には偽りがないのだろうか。』とさえ言わない。(44:19-20)」ハバククは、「彫刻師の刻んだ彫像

や鑄像、偽りを教える者が、何の役に立とう。物言わぬ、あるいは、唾の「偽りの神々を造って、これを造った物が、それにたよったところで、何の役に立とう。ああ。木に向かって目をさませと言ひ、黙っている石に向かって起きろと言う者よ。それは教えようか。それは金や銀をかぶせたもの。その中には何の息もない。(ハバクク2:18-19、脚注も参照)」と言いました。人が金属、溶解した鉄、金、銀などで偶像を造る、木や石を彫って偶像を造ることの愚かさです。ですから、あなたがたコリント人よ、あなたはこういう者だったのです。神から離れ、神のいのちから離され、偶像礼拝にはまっていたのです。無感覚なもの、感じたり、見たり、考えたりすることができないものに。

それで、パウロは次のことを理解してほしいと言っています。3節です。これが、あなたがたが知っていること。あなたがたがかつてそうであったものです。しかし、これをあなたがたに理解してほしいのです。3節です。「ですから、私は、あなたがたに次のことを教えておきます。神の御霊によって語る者はだれも、『イエスはのろわれよ。』とは言わず、・・・。」たまた、世界で最も古いに違いない噂を聞きます。誰か友人の友人でたまたま教会の礼拝に出席していた人がいて、誰かが異言で話して、教会の中にいる会衆や聴衆の誰かが、語られた言語を理解することができて、その人がイエス・キリストについてひどい冒涇の言葉を語っていた、というものです。おそらく、みなさんこの噂を何らかの形でお聞きになったことがあるでしょう。繰り返し、繰り返し話されるからです。そのうわさを追跡してみると、現像された時に雲の中にイエスが見えた写真を撮影した人を捜すのと同じくらい難しいのです。あるいは、ヒッチハイクの人を車に乗せてやったら、そのヒッチハイクの人が主の再臨のことを話して、消えてしまったとか。いつも、友人のいとこ、あるいは、おぼさんの友人とか、又またの誰かなのです。そういう話が、巡り巡り巡って・・・。誰か異言で語って、イエスについて冒涇の言葉を話していた、という話しは、あまりに昔からあるうわさで、コリントの時代、パウロがコリント人への手紙を書いた時代にさかのぼります。その当時うわさが起っていたのは、不思議ではありません。「誰かが、その言葉を理解して、その人はイエスについて冒涇の言葉を話していた。」と。それで、パウロは、「そのようなことは起らないことをしてほしいのです。」と言ったのです。「神の御霊によって語る者はだれも、『イエスはのろわれよ。』とは言わず、・・・。」特に、牧師や聖書教師が、自分では出来事の実事関係を実際じかに知っていないのに、うわさや話を他の人に伝えるのはとても無責任だと思うのです。特に、御霊の賜物の妥当性、また今日それを教会で用いることに反対する自分の立場を証明するためだけの理由で、好ましからぬ観点から神を見るような話をするのは、とても無責任だと思うのです。私なら、その人の名前、どこで起きたのか、いつ起きたのか、そして、さらに何人か証人の名前があげられるようであれば、そのような話を他の人に伝えるようなことはしません。情熱的に、信憑性があるように話がされたとしても、自分では、実際にそのような体験をした人を追跡することができたためしがありませんから。そのような話はうわさにしか過ぎず、2千年も巡り巡っているものだからです。事實は、「ですから、私は、あなたがたに次のことを教えておきます。神の御霊によって語る者はだれも、『イエスはのろわれよ。』とは言わず、また、聖霊によるのでなければ、だれも、『イエスは主です。』と言うことはできません。(12:3)」とパウロは言いました。つまり、純粋な意味での主ということ。聖霊によるのでなければ、イエス・キリストを主と告白することはできません。ガラテヤ人への手紙4章6

節の中で、パウロは、「そして、あなたがたは子であるゆえに、神は『アバ、父。』と呼ぶ、御子の御霊を、私たちの心に遣わしてくださいました。」と言いました。私たちの心の中にある神の御霊が私にその関係を気づかせてくださいます。ですから、「ああ、父よ。」と言うのはとても自然なのです。「アバ」とは、ヘブル語で父という言葉ですから、「アバ」とか、「父」とは、あなたの中に神の御霊が住んでおられるのですから、とても自然なことなのです。ローマ人に対してパウロは、「あなたがたは、人を再び恐怖に陥れるような、奴隷の霊を受けたのではなく、子としてくださる御霊を受けたのです。私たちは御霊によって、『アバ、父。』と呼びます。私たちが神の子どもであることは、御霊ご自身が、私たちの霊とともに、あかししてくださいます。(8:15-16) 」と言いました。それはただ、神の聖い御霊のすばらしい働きなのです。「ですから、私は、あなたがたに次のことを教えておきます。神の御霊によって語る者はだれも、『イエスはのろわれよ。』とは言わず、また、聖霊によるのでなければ、だれも、『イエスは主です。』と言うことはできません。(12:3)」

そして、あなたがたに知ってもらいたい、理解してもらいたいのは、「御霊の賜物にはいろいろの種類がありますが、同じ主です。(12:4参照)」ということです。ここ12章で、パウロは、聖霊のいろいろな賜物のいくつかについて話そうとしています。パウロは最初に、聖霊の賜物のうちの9つを列挙しています。章の終わりのほうで、さらに幾つかの聖霊の賜物を付け加えています。そして、これらの賜物には違いがあります。また、すべての人が同じ賜物を持っているわけではないのです。これらの賜物にはいろいろの種類がありますが、これらの賜物は互いに異なっているのですが、御霊は同じ御霊です。したがって、御霊は同じ御霊なのですから、賜物は互いに競争したり、相反するべきではないのです。私たちが見ることができるのはキリストのからだが一つであることであり、ただ単に、ある特定の教義の見方が違うからというだけで、キリストのからだの中にいる人に対して、競争したり、敵対的な立場であってはならないのです。教会の大きな悲劇の一つは、真の敵が誰であるのかを適切に見極めることを怠っていることです。教会が内部分裂することがよくあります。教会の内部でさえ分裂が起ります。戦線が敷かれ、分裂が起ります。それは悲劇です。サタンが、兄弟の間で不和や分裂が起るのをいかに喜んでいることか。そして、それが教会を越えて、別の教会と敵対的な立場に立っていることがあり、別の教会が異なっているからという理由で、その教会に反対することを言います。賜物にはいろいろの種類がありますが、御霊は同じ御霊です。ですから、互いに対抗しあうべきではないのです。暗やみの国から人々を引き出し、神の御国に人々を引き入れるために、私たちは一致すべきなのです。そして、本当の敵はサタンなのです。人々をサタンの国から引き出し、すばらしい神の御国に引き入れるのが私たちの仕事です。さて、それをやったのなら、その人たちが私たちと提携したとしても、私たちに加わったとしても、私たちのグループの一員になったとしても、なんら関係ないのです。私たちの教会に来るようにするのが私たちの目的で決してあってはならないのです。人々がイエス・キリストを知るようにし、イエス・キリストに人生を明け渡すようにすることが目的です。ひょっとすると私たちの教会は、その人の必要にきちんと奉仕することができないかもしれません。「あの老いぼれのはげおやじめ(訳者注:チャックは1997年6月25日時点で70歳。はげています。)。あいつに何がわかるんだ。もっとナウイ奴の方がいい。自分の結婚について話してくれて、もっとユーモアがあって、賢い

人がいいのに。」と言う人がいるかもしれません。ですから、私たちはその人には仕えることができないかもしれません。わたしはそれで構いません。大事なことは、人々を罪の暗やみから引き出し、素晴らしいイエス・キリストの光に連れてくることです。その後は、どこでもいから、その人が奉仕を受けることができるところに行って、助けを受ければよいのです。先週、ある方から手紙を受け取りました。そして、その人は、「カルバリー・チャペルと提携したいと考え、牧師会議に来ましたが、ここが間違っており、あそこが間違っていて、これが間違っていて、それが間違っていて、・・・」云々と言ひ、その人は、「ほんとうに自分にあっているのだろうか、どうなんだろう。」と言いました。私は、「あっていないんじゃないかと思いますが。」と言いました。「これ以上カルバリー・チャペルと提携しようと追及しないことをお勧めします。」と言いました。それは明らかでした。この人は、持ち上がったある特定の問題のことで、ショックを受けたと言いました。私は、「もう少し長くいたら、ショックなことがもっと出てくるでしょう。だから、いない方がよろしいかと思いますが。」と言いました。私たちは大きな教団を作り上げようとしていない点で、一風変わった奴等なのです。数はなんでもない。私たちにとっては無意味です。出て行って多くの教会に、うちの教会へ来て加盟して下さいと勧誘したりしません。その人は、「どうもあなたたちは、閉鎖的なグループのようですなあ。」と言いました。私は、「おそらくそうですね。」と言いました。それが必ずしも悪いとは思いません。ほとんどの牧師は、カルバリーで救われた牧師たちです。ですから、彼らは霊的にカルバリーで育ちました。ですから、大いなる一致があります。それは素晴らしい事です。しかし、こうした多くの人たちが、かつて教団との提携やその背景からの塵芥を持ち込み、自分たちが快適にいることができるように、私たちを作り直したり造り変えようとしているのです。けっこうです。自分が快適な所へ行ってください。私たちのことを放っておいて下さい。私たちは幸せです。私たちは世界一大きくはないかもしれませんが、そんなことは気にしていません。私たちは、ただ世界一最高でいたいだけです。何が自分たちにとって最高か。それが大事です。だから、神が私たちを召されたところで、間隙を埋めようとしているだけなのです。それだけです。

ですから、賜物には違いがあり、いろいろの種類がありますが、同じ御霊です。同じ御霊なので、御霊はご自身を妨害するようなことはなさいません。同じ御霊だからです。ですから、私がみことばを教え、教えの賜物を用いているときに、誰かが立って異言を語ることによって、御霊がご自身を妨害するようなことをして起きる混乱はないはずで、そのようなことになれば、御霊はご自身を妨害することになってしまいます。それでは、わけがわかりません。同じ御霊です。奉仕には、いろいろの種類があります。さて、パウロは、教会の中の様々な奉仕の幾つかを語っています。使徒の賜物のある人もいるし、預言の賜物のある人、牧師・教師の賜物のある人、治める賜物のある人、あるいは助ける賜物のある人もいます。これらは様々な奉仕の種類、教会の中の役職です。しかし、主は同じです。ですから、ここでもまた、こうした様々な賜物は互いに競争しあうのではなく、互いに補完しあうのです。励ましの賜物のある人もいますが、それは、重要で貴重な賜物なのです。金曜日の朝の交わりに出席している女性のみなさんは、ケイに励ましの賜物があることを認めるでしょう。ケイがここに立って、女性のみなさんを励ますと、みなさんは出て行って、世に対抗する準備ができます。やる気まんまんにさせてくれます。ケイには励ましの賜物があります。

それは良い事です。重要です。ですから、教会の中で、奉仕にはいろいろの種類があります。奉仕の賜物です。しかし、主は同じです。主は一つです。そして、私たちはみな、同じ主に仕えています。いろいろな形で主に仕えているかもしれませんが、やはり同じ主に仕えているのです。

かつて、私は、ある教会にある儀式主義に、彼らの形式張った儀式やしきたりに反対を唱えていました。また、過度な表現をするペンテコステ派のクリスチャンに反対を唱えたことがありました。実際、自分以外の全ての人に難癖をつけることができます。あの典礼式文的な礼拝は何だ。香や、礼服やらがある。それから、騒々しく叫んで、礼拝堂の中を行ったり来たり走り回って、あれは何だ、と。しかし、長い年月が経ち、・・・年をとることのよいことは、人を丸くすることです。長い年月の間に、私はかなり丸くなりました。つまり、典礼式文的な環境で礼拝したい人を、尊敬し受け入れることができるようになりました。人にはそれぞれ気質があり、そのような人たちは典礼式文的な環境において、最もよく神を礼拝することができることを理解することができるようになりました。また、非常に感情的な環境において、神を最もよく礼拝することができることが認識できるようになりました。そのような人たちは感動したいのです。立ち上がって、大声を出し、叫びたいのです。神を礼拝するときに、興奮や豊かさを多く求めています。そういった環境において、神を最もよく礼拝することができる人々がいることを受け入れることができます。やり方は異なるかもしれませんが、同じ主に仕えていることに気づきます。しかし、主は同じです。そして、主は私たちみなを愛して下さっています。正式な儀式主義や香のかおりが好きな人々を、神は愛されています。神は彼らを愛しておられます。ですから、その人々が、そのような形式張った環境の中において、快適で、神の臨在を感じる事ができる環境を神は備えてくださっているのです。神は、たくさん叫んだり走り回り、エネルギーを発散しなければならない、騒々しく極端な人々を愛しておられます。神はそのような人々をも愛しておられます。そして、神はそのような人々のための環境を備えてくださいました。そして、神が私たちを愛し、私たちに環境を備えてくださっていることに感謝します。あるやり方が間違っていて、別のやり方が正しいと言っているのではなく、違いがあるけれども、主は同じであると言っているのです。そのことを私たちはどうも忘れがちです。違いがあるために、異なる主に仕えていると考えてしまうようです。そして、ただ違いがあることを認めるのではなくて、互いに敵対しそうになってしまいます。神は私たちに異なる礼拝の形式を許すことによって、私たちの違いのために便宜をはかってくださっています。礼拝のやり方によって、その人たちをさばくのではなく、ただその人たちは異なっているという事実を受け入れた方が良いのです。パウロは、「あなたはいったいだれなので、他人のしもべをさばくのですか。しもべが立つのも倒れるのも、その主人の心次第です。このしもべは立つのです。なぜなら、主には、彼を立たせることができるからです。(ローマ14:4)」と言いました。ですから、主を礼拝する時にとっても騒々しいと誰かをさばいている時に、その人はあなたに仕えてはいません。主に仕えているのです。そして、神がその人を立たせることがおできになります。その人は自分のからだを倒してしまいたいかもしれませんが(訳者注:教会の中には、「倒し」を強調したり、あるいは自分から倒れて転げ回って大きな声を出すことを強調する教会もある。)、神は立たせることがおできになります。「主には、彼を立たせることができるからです。」とパウロは言いました。

ですから、御霊の賜物の真の働きは、互いに対立しあうのではなく、補完しあうのです。なぜなら、主は同じだからです。それから、「働きにはいろいろの種類がありますが、神はすべての人の中ですべての働きをなさる同じ神です。(1コリント12:6)」さて御霊の賜物は、私たちのうちで、異なる働きをすることができます。働きにはいろいろの種類があります。だから、ある人のうちが、ある賜物の働き方を説明するを聞くと混乱することが良くあるのです。「そうか。彼らのうちではそのように働くのか。ということは、その賜物はそのように働くのだ。」とあなたは思われるかもしれませんが、そうではありません。あなたにも同じ賜物があるかもしれませんが、あなたのうちでは、その人のうちでの働きとは異なる働きをするかもしれません。賜物が同じでも、働きにはいろいろあります。あなたに預言の賜物があつて、別の人も預言の賜物があるかもしれません。あなたが預言の賜物を用いる前には、過呼吸をし、ゾクゾクする感覚があり、それから立ち上がって預言の賜物を用いるかもしれません。別の人はゾクゾクする感覚は全くなく、過呼吸もせず、とても静かに賜物を用いるかもしれません。働きにはいろいろの種類があります。私たちの主はとても多様性のある方で、私たち一人一人を決していっぴひとからげはなく、個人個人として取り扱われます。神はあなたを個人個人、愛しておられます。あなた固有の気質、性質にしたがつて、神はあなたを個人個人として取り扱われます。そのように神はあなたを取り扱われます。それは、私にとってすばらしいことです。神は私たちそれぞれに個人的に個々に取り扱うことができになり、またそのように取り扱われます。したがって、御霊の賜物の働きにおいても、異なる人において、聖霊や御霊の賜物の働き方は異なります。しかし、神は同じです。大事なものは、他の人のミニストリーをそっくり真似しようとしなないことです。賜物の働き方はそれしかないと考えて、他の人がやっていると同じ方法をやってみようとしなないことです。賜物の働きにはいろいろの種類があるのです。聖霊、聖霊の賜物がどのように自分に現われたかの証しを聞くと、とかく、「そうか。そういうふうになるのだ。」と考えてしまい、それを型にして真似しようとしなます。それは間違っています。「君が僕のようにしなないなら、君のが本物かどうか疑わしいね。」という考え方です。違います。違いがあるのです。違いを受け入れましよう。そして、神を型にはめようとしなないようにましよう。神を箱に入れようとしなないようにましよう。神をそのままにしておましよう。神に主権をとっていただきましよう。

さて、ここに三位一体を見る人がいます。つまり、賜物には違い、あるいは、いろいろの種類がありますが、御霊は同じ御霊です。聖霊です。奉仕にはいろいろの種類がありますが、主は同じ主です。それは、イエス・キリストです。働きにはいろいろの種類がありますが、神は同じ神です。つまり、父なる神です。

「しかし、みなさんの益となるために、おのにおに御霊の現われが与えられています。(12:7)」つまり、聖霊の賜物はもてあそぶものとして与えられているのではないのです。みなさんが、自分の家で独りぼっちで座っていて、神の与えてくださったものをじっとして楽しみ、満足と楽しみを与えてもらうものとして与えられているのではないのです。賜物が与えられているのは、教会全体の益となるためです。御霊の賜物を適切に用いることによって、教会に益がもたらされるためです。みなさんの益のために与えられているのです。みなさんの益となるために、与えられています。ですから、神は私たち一人一人に賜物を与えられています。それは教会全体に益がもたらされるためです。個人

の益、個人の徳を高めるための賜物は、ここに一つだけ言及されています。異言の賜物の例外の他は、すべて教会の徳を高めるためのものです。「異言を話す者は自分の徳を高めます。(1コリント14:4参照)」解き明かしの賜物が与えられているのは、その異言の賜物が教会の徳を高めるためです(1コリント14:5参照)。しかし、基本的に、個人的なデボーションの時(訳者注:定期的に静かに神と個人的に交わる時)に、異言の賜物を用いるのは、その人がデボーションをする時に、その人の徳を高める賜物です。しかし、賜物を用いている個人の徳を高めるために与えられている賜物は、その賜物だけです。その他の賜物は、用いられることによって教会の徳を高め、みなに益を得るためです。御霊の賜物の学びを進めていく際に、4つか、5つ先の学びにおいて、異言の賜物については、もっと詳しく、すみずみまでお話しすることにします。この賜物については、誤解や無知がかなりあるので、それを明らかにし、解消することができればと考えています。

「ある人には御霊によって知恵のことばが与えられ……。 (12:8)」とありますので、御霊の賜物に入り始めます。御霊の賜物の学びを進めていきますが、次回の学びでは、知恵のことばの賜物を取り上げることにします。

知恵のことば (#3064)

Word of Wisdom

「しかし、みな^の益となるために、おのおのに御霊の現われが与えられているのです。(1コリント 12:7)」もし神の御霊があなたのうちに住まわれているなら、それは様々な異なる方法で現われます。聖霊があなたのうちにおられることと、聖霊があなたのうちからあふれ出るのは、異なる別個のものであることを以前お話ししました。聖霊が内住される働きはあります。内住は、聖霊のすばらしい働きです。純粋に追加的(subjunctive)です(訳者注:意味不明)。それは、自分の中における祝福された働きで、みことばの理解を与え、主の道を教え指導し、イエス・キリストの似姿に変えて下さり、その働きがなければできないような力を与えます。それは、信者の生活におけるすばらしい聖霊の働きです。しかし、それは、聖霊があなたから流れ出ているのとは全く別のものです。さて、もし聖霊があなたのうちに住んでおられるなら、その現われがあるはずで、私たちは、神が与えて下さった愛によって、心の中における働きによって、神の御霊が私たちの内にとどまっておられることがわかります。しかし、聖霊があふれ出るのは、御霊の内住の現われとは異なる現われを持っています。パウロは、聖霊があなたからあふれ出た結果としての現われについて話します。それは、御霊を解放することです。中に押し込めておくのではありません。そうではなく、あなたを通してこの方に働いていただくことです。

さて、パウロは、あなたをとおしての聖霊の働きの現われ方について話し始めていますが、あなたを通して聖霊が働かれる目的が、みな^の益となることであることを指摘しています。キリストのからだ全体の益となるためです。聖霊が私たちのうちでなさること、私たちの益となることがたくさんあります。聖霊が私たちのうちで働かれることは、すばらしい益です。しかし、御霊が力を与えられることによる現われ、あなたからあふれ出るように力が与えられるのは、キリストのからだ全体の益となるためです。偉大な賜物を持っている人はたくさんいます。人にインスピレーションを与える音楽を作曲することができる、偉大な賜物を持っている作曲家のことを思います。それは、その人のうちにあります。それは、その人が聞くことができるものです。しかし、それがすべて楽譜にされ、交響楽団の指揮がとられてはじめて益となります。そうして初めてその人のうちで起っていることが、その人のうちにある賜物が、その人が聞くことができたものがみな^の益になるのです。また、芸術家も同じです。美を見る能力があり、それをキャンバスに描くことができ、他の人がそれを見て、その人が美しいものを見ることのできる賜物を楽しむことができます。私たちの内におられる聖霊も同じで、私たちを通して現われてくださることにより、自分に与えられている御霊の賜物が、みな^の祝福、益となります。みな^の益となるためです。

今日、自分の持っている御霊の賜物を、自分のために利用するという大いなる悪が横行しています。その人たちのうちの聖霊の働きによって、人々は神に触れられますが、その後、彼らがとても祝福されたことを好き勝手に利用するのです。彼らは、癒されたのかもしれませんが。彼らの友人や子どもたちが癒されたのかもしれませんが。それで、その人にある賜物を神が用いて、彼らを助けられたことにより、彼らは本当に感動してしまっ、興奮してしまっ、感謝を表すための贈物を

そのような人たちにどんどん惜しみ無く与えたくになります。そして、多くの人があるような贈物を利用して、自分を金持ちにしてきました。そのようなミニストリーの中には、お金を無心するものさもあります。かつて自分に神の賜物があって、人々がそれによって神に触れられたということから、彼らは住所リストを作成し、その人々が毎月手紙を受け取るようになります。手紙は、とどのつまり、いつも、「私たちのミニストリーのこの緊急事態を助けるために、同封の封筒を使って、寛大なる献金をお送りいただきますようお願いいたします」という趣旨のものです。そして、御霊の賜物が自分のうちで働いていたということで、彼らは、神の羊の群れから金をだましとろうとします(訳者注: 英語はfleece the flock of God です。fleeceには、毛を刈り取るという意味も金をだましとるという意味もあり、かけ言葉になっています。)。そのような人たちは、とにかく何かをほのめかします。もし、自分の祈りがかなえられたいなら、もし、愛する者が救われていないなら、もし、病気の子供がいるなら、この寛大なる献金を神は祝福されるでしょう。そして、愛する者の救いを見ることができるよう。彼らが一生懸命資金集めをする時に、そのようなことが微妙にほのめかされているのです。もし自分たちのミニストリーを支援してくれるほど寛大なら、神の祝福をお金を出して買うことができる、と暗に示唆しているのです。

聖霊の本当の賜物は、聖書的に正しく現われるときにはいつも、人々の心をイエス・キリストに当てさせます。御霊の本物の現われを見るとき、イエスが、「御霊はご自身についてあかしされているのではなく、わたしについてあかしします。(ヨハネ15:26参照)」と言われたように、あなたは新しいイエスの御姿を見て、新鮮な栄光ある姿を見ます。イエスを深く愛するようになり、イエスに引き寄せられます。イエスのあり方と、その御力について、あなたの心が愛と感謝ではちきれそうになります。これが、聖霊の賜物が現われが本物かどうかを判断する方法の一つです。賜物を用いている人に、たくさんの関心が集められていますか。その人たちが送ってくる雑誌には、1ページおきに彼らの写真が載っているでしょうか。誰に関心を集めていますか。誰を売り込んでいるのでしょうか。人々の目に誰を立てあげようとしていますか。本当の聖霊の現われなら、常にイエス・キリストという方を引き上げます。それをするために聖霊が来られたのです。

ですから、パウロは、教会の益となるために、信者の生活から聖霊があふれ流れ出ることによる様々な現われを紹介していますが、次のような導入部で始めています。こう伝えています。「ある人には御霊によって知恵のことばが与えられ」ています(1コリント13:8)。明確なはっきりとした違いが、知恵のことばと知識のことばの間にあることを注目するのが肝要です。類似した種類の賜物ではありません。この二つには明確な違いがあります。それはちょうど、知識と知恵の違いがあるのと同じです。知識は、事実を蓄積することです。知恵は事実を適切に用いることです。知識は、小さくて背に白のしまのある黒い動物は、スカンクだと教えてくれます。知識は、そのスカンクが刺激臭を分泌することを教えてくれます。知恵は、スカンクがそれをあなたに向かって放出する前に、立ち退きなさいと教えてくれます。知恵は、その小さい動物の所に行って、なでたりしないようにと教えてくれます。知識は、グルグル巻になって、ガラガラ言っているへびは、毒へびだと教えてくれます。知恵は、そこに近づいてはいけなさと教えてくれます。ですから、知識と知恵の間には大きな違いがあります。知識に関して最も賢い人が、世界で最も愚かな人である場合があります。

ます。最も愚かなことをします。ティモシー・ラリーのことを思います（訳者注：チャックがこの説教をした時点では、生きていましたが、その数年後に死にました。大学で教鞭をとったこともあり、生徒に麻薬をすすめたこともあり、晩年はインターネットで麻薬のすすめをしていた人です。）。非常に才気縦横な人です。多くの知識を持った人です。しかし、自分でLSDを服用して破滅に追いやり、たくさんの人をそのような道に導いたことの愚かさを私は見ます。それは、知恵のない知識です。知恵のない知識は非常に危険になりえます。知識を通じて、人類を破滅させてしまうことができるようなスーパー兵器をつくることができました。もし、知恵がないなら、スーパー兵器で人類を破滅させてしまうでしょう。ですから、知恵のない知識は非常に危険になりえます。すぐれた才能のある人々が、いったんイエス・キリストの真理を拒絶すると、愚かなことを信じたり行ったりするのに驚かされる、と私はよく言ってきました。というのも、主を恐れることは、知恵の初めだからです（詩篇111:10参照）。主を拒むと、神という考えを拒むと、彼らは非常に馬鹿げたことをするようになり、非常に馬鹿げたことを信じるようになります。インドでは、全世界で最も良い教育を受けた人々が、不浄で不健全な状態で動物同然の生活をしています。それは、サイババのいるところで、時間を過ごすためです。ただ、この人の近くにいる、話をするのを聞くためにです。そのような人たち、すぐれた才能の持ち主が、サイババの排泄物を食べるのが大なる栄誉の一つだと信じているのです。才気縦横な人たちが、愚かなことをします。

私は、・・・驚いています。ご存じのように、私は単刀直入です。人々が神によって良くない思いに引き渡され、神の真理に反抗しているのを、私は、悪魔が彼らを最悪の汚れにいつもおとしめているようなので驚いています。それに気づかれませんか。面白いのは、同性愛者の間ではそれをスキヤディングと呼んでます。サイババを礼拝している人たちがしているのと同じことです。悪魔は、そのような人たちを最悪の汚れに、最低のレベルにおとしめているのです。とても衝撃的なことで、そのようなことを頭に思い描くこともできません。しかし、これが、神の真理を拒むすぐれた才能のある人々を、悪魔がおとしめている状態なのです。パウロは、テサロニケ人への第二の手紙で、「彼らは神の真理を受け入れたくなかったのも、それゆえ神は惑わす力を送り込まれます。それは、彼らが真理への愛を受け入れなかったからです。ですから、神は彼らが真理よりも偽りを信じることをお許しになったのです。（2:10-11参照）」と言いました。むろん、パウロは、彼らが下降線をただつとことを、ローマ人への手紙1章でみな書いています。「また、彼らが神を考えようとしたがらないので、神は彼らを良くない思いに引き渡され、そのため彼らは、言葉で言えないような、想像もできないようなことをするようになりました。（1:28参照）」イエス・キリストの真理を拒絶する人はそのようになるのです。そして、自分の思いを暗やみとサタンのもやみに引き渡しています。悪魔は、そのような人たちを導くと、まさに底にまで導きます。もし、あなたに主への恐れがないなら、あなたに真の知恵はありません。知恵の道を歩み始めてもいないのです。ソロモンが自分の息子たちに語った時に、「知恵の初めに、知恵を得よ。（箴言4:7）」と言いました。多くの人は知識を求めています。知恵も求めた方がよいのです。知恵のない知識は危険だからです。

さて、この知恵の賜物は、自分には知恵の貯蔵所があって、グルのような知恵の貯蔵所があっ

て、「何か知りたいことがあるなら私の所に来なさい、そうすれば、自分の持っている知恵の宝庫を開いてあげましょう。」といった類いのものではありません。そのようにはいきません。自由に利用できる知恵の貯蔵所ではないのです。しかし、問題が起き、重要な決断をしなければならないときに、聖霊の油注ぎがあります。まさに正しいと言える知恵の言葉が与えられるので、分裂したグループの関係を回復します。人々は、「そうだ。それがいい。」と言います。それは知恵の言葉です。

さて、私たちが知恵の言葉が用いられていると気づかないままに、この賜物が用いられることがよくあると思うのです。問題が起ると、私たちは、感じている自分の意見をそのまま言い表すのですが、実はそれが、その問題についての御霊からの知恵の言葉であることが多いのです。それなのに、私たちは気づきもしていないのです。ブザーが鳴ったり、鐘が鳴ったり、ベルが鳴ったりして、「さあ、聞きなさい。これから私の唇から知恵の言葉が流れ出ます。」というのではないのです。そのようには働きません。とても自然に行われます。自然の中に超自然的な事を見ることがない、見極めることがない、という間違いを私たちはよく犯します。超自然的な事は、超自然的な方法でしか起らないと期待していることが余りに多いのです。しかし、超自然的な事が自然に起こることがとても多いので、その中にある超自然的な事に気づかないことが余りに多いのです。自分の人生を振り返り、神がどのように導かれたを見るときに、ごく自然に超自然的な事を導かれたことがわかります。この道に導かれたのは神の導きだということが、私には全くわからないような方法で導かれました。しかし、今となって振り返って見ると、神の御手がわかり、「ああ主よ。あなたはなんとすばらしい方なのでしょう。あなたは、私にその時に導かれているなんてわからなかったのに、導いてくださいましたから。」と言います。

私がミニストリーを始めたとき、希望に満ちた伝道者としてスタートを切りました。教会の牧会をしていたのにもかかわらず、私の説教はみな伝道的な説教でした。私の説教はみな伝道的な主題説教でした。いつも、説教の終わりには、主を受け入れるように訴えました。しかし、むろん、罪人は誰もいないことが多く、そうすると、人生を主にささげなさいとか、罪人を教会に連れて来なかったことを悔い改めなさいと言いました。項目を一つ一つ列挙してゆけば、どこかで思い当たるふしのあるものがあるので、人々は前に出て悔い改めなくてはならないのでした。説教の成否は、何人前に出てきたか、どれだけ激しく泣いたかで量られました。ですから私は、いつも、人々に何でもよいから悔い改めるように促していました。ただ前に出て、悔い改めなさい、と。私には2年分の主題説教がありました。そして、2年が終わると、教会を変えてもらうようお願いしました。そして、新しい教会に行って、新しい教会で2年分の説教をするのでした。私たちがハンティントンビーチに至りつくまでそれが続きました。その当時、ハンティントンビーチは、人口6千人のちっちゃな、のどかな海辺の町でした。そこに油田があったので、それが税金の財源となり、オレンジ郡の中では最も税金ベースが低い所でした。ですから、その市には一番良い図書館や学校があり、まさに穴場でした。ハンティントンビーチがいかに住むのに良い所か人々は気づいていませんでした。しかし、そこに住むことで、私はそれに気づきました。2年がたち、すべての説教をし尽くしたとき、教会を変えてほしいと頼むときが来たのです。しかし、問題は、変えてほしくなかったのです。ハ

ンティントンビーチに住むのが気に入っていました。娘も学校に通っていました。素晴らしい学校だったので、ハンティントンビーチ学区の学校に通う特典を、娘に享受してほしかったのです。そして、その当時は、そこでサーフィンをする人の数も少なかったのです。新聞社のジョージ・ファークアーと町で薬局を営んでいたサム・テリーと私は、海辺で待ち合わせして、朝サーフィンをしました。それは素晴らしいものでした。なぜなら、朝にサーフィンをしているのは私たち3人だけでしたから。私たちは出かけて行って、波の調子を見て、一番いいのは、北側の方がいいか南側の方がいいかを判断して、自分たちだけの貸し切り状態を楽しみました。10時には終わって、それぞれの仕事に戻りましたが、まさにパラダイスでした。それで、私はハンティントンビーチを離れたくありませんでした。すてきだったのです。しかし、説教のネタがつきていました。私は、グリフィス・トーマス著の「使徒ヨハネ」という本を読んでいました。その本の7章あたりで、第一ヨハネのアウトラインの学びが書かれていました。第一ヨハネの、その概略の学びを読み始めましたが、驚くべき素晴らしいものでした。そこで私は、これはとんでもないすごい説教の題材になると思いました。素晴らしい説教のアウトラインだ。アウトラインの項目一つ一つから説教できるじゃないか。数えてみると、43項目ありました。「すごい。もう一年ハンティントンビーチにいたことができるぞ。」と思いました。それで、その次の日曜に人々に、「ちょっと趣向を変えます。聖書の巻を勉強していきます。第一ヨハネを学びます。」と発表しました。それで、第一ヨハネの学びをしました。一年の終わりに、・・・むろん、私は、グリフィス・トーマスの本をかなり使い、また他の注解書も得て、43回分を52回にまで引き伸ばすことができ、まる一年、第一ヨハネに費やしました。でも、驚くべきことに、その一年で教会員数が倍増しました。その年、それまでに自分がミニストリーをしてきた中で、最も多くの人に洗礼をしました。しかし、私は伝道的な説教はしていませんでした。ただ、聖徒に神のみことばを教えていただけでした。しかし、伝道はなされていたのでした。私は依然としてハンティントンビーチを楽しんでおり、動きたくなかったのです。そこで、「ローマ書は、どのような教会にも革新を引き起こす。」と言ったある大学の教授の言葉を思い出しました。それに、ローマ書がいかによろしいかというのを、たくさんの人から聞いていました。ローマ書を読んでいましたが、私には何も起こりませんでした。けれども、もし革新を引き起こすなら教えてみるか、と決意しました。引き起こされる革新への準備が、私にはできていませんでした。なぜかと言うと、私に革新をもたらしたからでした。私は、神の恵みを発見しました。神との新しい関係を発見しました。ローマ人への手紙に2年間費やしました。それでも、やはり動きたくありませんでした。そして、ハーレーの改訂新版聖書ハンドブックに出くわしました。その小さい表紙には、この本の最も重要なページは748ページだと書かれていました。そこで私は、この素晴らしい聖書の小参考書の、最も重要なページだとハーレーに言わせたのは何かを知るために、748ページを開いてみました。彼は、どの教会も、教会全体として、聖書全部を体系的に読むことを提案していました。牧師の説教は、前週に人々が読んだ部分からの説教であることが理想的であるとされていました。そこで私は、聖書全部があるじゃないか、一生ここで過ごせるぞ、と気づいたのです。このようにして神は、私自身の人生において、私自身のミニストリーにおいて、自然に超自然な働きを行われました。そして、私を聖書的な講解による学びへと導かれました。伝道的な主題説教から、ただ聖書を通読す

る学び、聖書の巻を通読する学びへと導かれたのです。説教者ではなく、教師になるようにしてくださいました。これは、とても自然でした。神は、私がビーチが好きで、サーフィンが好きだという自然の思いを用いて、聖書講解者へと神の道の中で導かれました。神は、私たちの人生において、とても自然な方法で超自然的なことを行われます。知恵のことばといった御霊の賜物もあまりに自然に起ることが多いので、その時には、その賜物が用いられていると気づかないのです。もっと情報が与えられた後ではじめて、突如として、自分を越えた知恵のことばを語っていたのだと発見します。自分にすべての事実がわかっていたのではなく、的確な知恵が与えられていたということがあるのです。

さて、知恵のことば、あるいは知恵自体にある御霊の賜物は、新約聖書に新しい賜物だったのではないのです。この賜物は旧約聖書全体を通じて見られるものです。ダニエルは、神がお与えになった知恵で知られた人物です。ダニエルについて、「王国には、聖なる神の知恵の宿るひとりの方がいます。(ダニエル5:11参照)」という証言があります。聖書で一番最初に知恵が言及されているところでは、神の御霊との関連で言及されています。出エジプト記28章3節が、聖書で一番最初に知恵という言葉が言及されている箇所です。ある主題について調べるときに、いわゆる「最初に言及されている箇所」を調べるのは興味深いことがよくあります。聖書に一番最初に言及されているのはどこか。それは、その言葉が言及されているまわりの出来事、それが言及されている文脈は何かを調べることです。出エジプト記28章3節です。「あなたは、わたしが知恵の霊を満たした、心に知恵のある者たちに告げ」なければならない。神はモーセに、幕屋を建てる準備をせよ、と語られています。神は、知恵の御霊で人々を満たしたことを話されています。出エジプト記31章3節です。「彼に知恵と英知と知識とあらゆる仕事において、神の霊を満たした。」賜物が与えられていました。知恵、知識、英知です。開発し、取りまとめて物を造る能力です。出エジプト記35章3節です。「彼に、知恵と英知と知識とあらゆる仕事において、神の霊を満たされた。」ここでも、出エジプト記31章3節と同じです。申命記34章9節でモーセの後継者であるヨシュアについて、「ヌンの子ヨシュアは、知恵の霊に満たされていた。モーセが彼の上に、かつて、その手を置いたからである。イスラエル人は彼に聞き従い、主がモーセに命じられたとおりに行った。」とあります。ここでは、モーセがヨシュアの上に手を置くことによって、知恵に満たされました。新約聖書においても、御霊の賜物は手を置いて祈ることによって分け与えられることがよくありました。多くの場合、預言によってでした。パウロがテモテに手紙を書いて、「長老たちの按手をもってあなたのうちに与えられた神の賜物を、再び燃え立たせてください。(2テモテ1:6参照)」と述べたことを覚えていらっしゃるでしょう。また、パウロはテモテに、「私による按手を受けたとき、預言によって与えられた、あなたのうちにある聖霊の賜物を軽んじてはいけません。(1テモテ4:14参照)」と伝えました。御霊の賜物は、旧約聖書において、手を置いて祈ることによって分け与えられました。モーセがヨシュアに手を置いたとき、神が知恵の御霊を、知恵の御霊の満たしを与えられました。箴言2章6節は、「主が知恵を与え、御口を通して知識と英知を与えられるからだ。」と告げています。伝道者の書2章26節には、「なぜなら、神は、みこころにかなう人には、知恵と知識と喜びを与え、罪人には、神のみこころにかなう者に渡すために、集め、たくわえる仕事を与えられる。こ

れもまた、むなしく、風を追うようなものだ。」とあります。イザヤ書11章2節において、エッセイの根株から義なる枝が出るというイエス・キリストについての預言があり、「その上に、主の霊がとどまる。それは知恵と悟りの霊、はかりごとと能力の霊、主を知る知識と主を恐れる霊である。(11:3)」とあります。ですから、その知恵の霊はイエスの上にとどまるのです。では、キリストの生涯において、この知恵のことばはどのように現されたのでしょうか。おそらくこの知恵のことばの最も典型的な現われは、パリサイ人らがイエスを罷にはめようとして、人々をイエスに齒向かわせようとしたときでしょう。パリサイ人らは座って、イエスの発言の言質をとる方法を考えていました。パリサイ人らはいつも、イエスに誘導尋問するような質問をしました。それによって、イエスを罷にはめ、人々がイエスに敵対するようにと考えていたのです。そして、いつもイエスは、パリサイ人らが訴えることができないような賢い答えをされました。それで、ようやくパリサイ人らは、自分たちの考える「ひっかけ質問」を考えつきました(訳者注: 以下マタイ22:15-22参照)。彼らは、カイザルに税金を納めることは律法にかなっているかどうかと、イエスに聞こうとしました。ユダヤ人がみな、カイザルに税金を納めるのが大嫌いなのを知っていたからです。それは、しゃくにさわらせる、むかつかせる種でした。もし、イエスが、「はい。律法にかなっています。」と答えれば、人々の人気を失い、みんなイエスを避けるようになったでしょう。もし、イエスが、「いいえ。」と言ったなら、彼らは、イエスが税金の反乱を先導しているとローマ政府に報告できるのです。そうすれば、イエスはローマに犯罪者として訴えられます。完璧な質問です。それで、彼らはイエスのみもとに来て、「あなたがだれをもはばからない方だと存じています。あなたはいつも真理をお語りになることを存じ上げています。あなたは人の顔色を見られない方です。真理は真理だとおっしゃる方です。私たちは、カイザルに税金をおさめることは律法にかなっているかどうか知りたいのです。」と言いました。イエスは、「硬貨がありますか。」と言われました。それで、彼らはイエスに硬貨を渡しました。すると、イエスはその硬貨を手にとって、「この硬貨にあるのはだれの肖像ですか。」と言われました。すると、彼らは、「カイザルのです。」と言いました。イエスは、それを返して、「そうですか。それなら、カイザルのものはカイザルに返しなさい。そして神のものは神に返しなさい。」と言われました。知恵のことばです。知恵のことばです。状況にぴったりの答えです。これが、知恵のことばの賜物です。

互いに赤ちゃんが自分の赤ちゃんだと主張する二人の女が来た時に、ソロモンに知恵のことばが現われました(訳者注: 以下1列王3:16-28参照)。彼女たちは互いに議論し、一方は、「あなたは嘘をついている。」と言い、もう一方は、「あなたは嘘をついている。」と言いました。「わたしの赤ちゃんだ。」と一方が言うと、もう一方は、「いや。わたしのだ。」と言いました。それでソロモンは、そこにいた近衛兵に、「赤ちゃんを二つに断ち切り、それぞれ半分づつ与えなさい。」と言いました。すると、本当の母親でない方が「それで結構です。」と言い、もう一人は、「いえ。赤ちゃんを彼女にやって下さい。」と言いました。ソロモンは、「いや。その女に赤ちゃんを与えなさい。その女が本当の母親だ。議論に決着をつけるために、赤ちゃんをあきらめる犠牲を払おうとしたのだから。」と言いました。知恵のことばです。ソロモンの知恵のうわさが広まりました。

新約聖書において、使徒行伝15章では、あるユダヤ主義者たちがアンテオケにある異邦人の

教会に行って、騒ぎを起こし、異邦人の信者に、「ユダヤ教に改宗しないのであれば、モーセの律法を受け入れ、従い、割礼を受けるのでないなら、救われない。」と言おうとしました。それで、パウロとバルナバがアンテオケで対立を起こしている人たちの所に行ってから、エルサレムに戻りましたが、異邦人の信者がモーセの律法とどのような関わりを持つべきかについて決めるための、第一回教会会議が招集されました。ペテロは、神がどのように自分を異邦人にお導きになり、どのように彼らが聖霊を受けたかを証しました。パウロとバルナバは、異邦人の間での自分たちの宣教について証しし、神がすばらしい奇跡を異邦人たちの間にもたらしてくださった証しをしました。そして、最後にヤコブが語りました。「『そこで、私の判断では、神に立ち返る異邦人を悩ませてはいけません。ただ、偶像に供えて汚れた物と不品行と絞め殺した物と血とを避けるように書き送るべきだと思います。昔から、町ごとにモーセの律法を述べる者がいて、それが安息日ごとに諸会堂で読まれているからです。』そこで使徒たちと長老たち、また、全教会もともに、彼らの中から人を選んで、パウロやバルナバといっしょにアンテオケへ送ることを決議した。選ばれたのは兄弟たちの中の指導者たちで、バルサバと呼ばれるユダおよびシラスであった。(15:19-22)」ヤコブが与えた解決は、知恵のことばであり、その結果は、分裂がおさまったことです。分裂を起しそうな問題に対して、ヤコブの提案した解決にみなが満足しました。

その前の使徒行伝6章で、教会の福祉プログラムをめぐる議論となったとき、ギリシャ、あるいはヘレニズム文化の中で生活していたユダヤ人のやもめたちは、ユダヤ文化の中で生活していたユダヤ人のやもめと同じ待遇を受けていないと感じました。それで、使徒たちの所へ来て、苦情を言いました。「教会の福祉プログラムの毎日の配給が、公平さに欠けている。えこひいきがある。」それで、12使徒は弟子たちの群れ、教会員全員を呼び集めて言いました。「『私たちが神のことばをあと回しにして、食卓のことに仕えるのはよくありません。そこで、兄弟たち。あなたがたの中から、御霊と知恵とに満ちた、評判の良い人たち7人を選びなさい。私たちはその人たちをこの仕事に当たらせることにします。そして、私たちは、もっぱら祈りとみことばの奉仕に励むことにします。』この提案はすべての群れの承認することとなった。(使徒6:2-5参照。新改訳脚注参照。)」知恵のことばの賜物が用いられたのを見ます。それが、何をするかと言うと、分裂を取り去るのです。人々の間の怒りを取り去るのです。解決を与えます。それは平和的な解決です。みな満足します。これが知恵のことばです。しばしば、教会の中では分裂が起きます。このような分裂が起きたときに、知恵のことばのある人が現われることはとても必要です。この御霊の賜物は、双方を受け入れることができ、従うことができる解決を提供し、双方が満足し、分裂が起きないようにします。知恵のことばの賜物が欠けていたために、神の民の集まりの多くがひどく分裂しました。

さらに使徒行伝6章を読み進めると、ステパノにおいて、知恵のことばが現われたのを読むことができます。ステパノは、教会の毎日の配給を監督するために選ばれた人の一人でした。「さて、ステパノは恵みと力とに満ち、人々の間で、すばらしい不思議なわざとするしを行っていた。ところが、いわゆるリベルテンの会堂に属する人々で、クレネ人、アレキサンドリヤ人、キリキヤやアジアから来た人々などが立ち上がって、ステパノと議論した。しかし、彼が知恵と御霊によって語っ

ていたので、それに対抗することができなかった。(6:8-10)」知恵のことばの賜物です。彼らは対処できませんでした。彼らは、ステパノが彼らに語った御霊による知恵のことばに対処できませんでした。

パウロが教会のために祈ったとき、よく、神が彼らに知恵を与えてくださるよう祈りました。エペソ人への手紙1章17節で、パウロがエペソ人のために祈った時、「どうか、私の主イエス・キリストの神、すなわち栄光の父が、神を知るための知恵と揭示の御霊を、あなたがたに与えてくださいますように。」と祈りました。コロサイ人への手紙1章9節で、パウロはコロサイにある教会のために、「こういうわけで、私たちはそのことを聞いた日から、絶えずあなたがたのために祈り求めています。どうか、あなたがたがあらゆる霊的な知恵と理解力によって、神のみこころに関する真の知識に満たされますように。」と祈りました。ヤコブは、「あなたがたの中に知恵の欠けた人がいるなら、その人は、だれにでも惜しげなく、とがめることなくお与えになる神に願いなさい。そうすればきっと与えられます。(ヤコブ1:1)」と書きました。また、ヤコブは私たちに、「あなたがたのものにならないのは、あなたがたが願わないからです。(4:2)」と教えています。

神が私たちにご自身の知恵を用意してくださっているのに、私たちが自分自身の知恵に頼ることは、私にとって理解しがたいことです。神の導きと知恵を求めずに、決断しようとします。「あなたの行く所どころにおいても、主を認めよ。そうすれば、主はあなたの道をまっすぐにされる。(箴言3:6)」それが、あなたができる最も賢いことだと言えます。後で後悔するような決断をしたことがありますか。「しまった。なんで、そんな決断をしてしまったんだ。こんな結果になってしまった。」と。しかし、たいいてい、「神さま。なぜ私をこんなひどいところに置かれたのですか。」と言うのです。それは、あなたが知恵を求めなかったからです。「求めなさい。そうすれば与えられます。捜しなさい。そうすれば見つかります。たたきなさい。そうすれば開かれます。(マタイ7:7)」ダニエルのような人は、ネブカデネザルの夢について、知恵と悟りを与えてくださるよう神に求めました。知恵を求めてください。そうすれば、聖霊はあなたを通して語り、あなたが神の助言によって導かれるように、知恵のことばを与えることができます。それは、あなたのものです。神はしてくださいます。知恵のことばは、神があなたに与えてくださるすばらしい賜物です。あなたが、不信者に挑みかけられるとき、あなたが神に求めさえするなら、神はあなたに知恵のことばを与えられます。どうか、神の知恵を求めてください。誰かがあなたに質問をして、その時に、全く困ってしまい、答えがわからなくなることがあります。「ええっと。お答えしましょう。その問題はたかさんの人が気になっている問題で、私の思うに・・・」と言って詰まってしまうのですが、突如として答えが頭に浮かんできて、説明をしているうちに、「そうだ、その通りだ。わあ、すごいや。そうだ、そのとおりだ。」と思った経験がありませんか。私には、しょっちゅうあります。神が知恵のことばをあなたに与えられて、それが正しい答えになります。神は、あなたにご自分の知恵を与えたいと願っておられます。聖書は、「このキリストのうちに、知恵と知識との宝がすべて隠されているのです。(コロサイ2:3)」と教えています。それは、あなたが求めるように、あなたに備えられています。

知識のことば (#3065)

Word of Knowledge

私たちは今、聖霊の現われを取り扱っていますが、それは、コリント人への手紙第一12章の前半に記されています。ここでパウロは、その現われを部分的に列挙していますが、ローマ人への手紙やエペソ人への手紙も見て、さらに列挙されているものを見てゆきます。8節です。「ある人には御霊によって知恵のことばが与えられ、ほかの人には同じ御霊にかなう知識のことばが与えられ、・・・」さて、知恵のことばについては、前回みなさんに、木曜日の夜の学びで話しました。そして、知恵が知識を適切に用いることであることを示しました。知恵は、知識より好ましいものでしょう。まさに、「もし教育がないなら、脳味噌を使うしかない。」と言った人がいるようにです。知恵は知識の適切に用いることです。知恵なしの知識は、それ自体では非常に危険です。現在私たちが多くの知識を見るにつけ、なお一層示されていることです。スーパー兵器をつくる知識やいろいろなことをする知識はあるのですが、知恵があまりないのです。また、残念なことに、そのようにして作られた兵器を使わない知恵もあまりないのです。ですから、知恵のことばがあり、それに追隨して知識のことばがあります。

知識のことばは、超自然的に与えられる知識のことだと私は思います。それは、普通に習得したり学習することによっては知り得ない知識のことです。旧約聖書で、この賜物がエリシャを通して現われていると私は信じています(訳者注:以下2列王5章参照)。神はエリシャに、いろいろな事について超自然的な知識を与えられました。みなさん覚えていますか。シリア(訳者注:あるいはアラム)の王の将軍ナアマンが、イスラエルに預言者がいることを聞きました。彼を通してらい病を癒してもらえるとのことでした。そこで、この将軍を大層気に入っていたシリアの王は、伝言を託してこの将軍をサマリヤの王のところに遣わしました。要するに、「私の愛するしもべの将軍を直してやってくれ。」と頼んでいたのです。サマリヤの王がその伝言を受け取ったとき、自分の服を引き裂き、「彼は、私に言いがかりをつけようとしているのだ。私は、神ではない。なぜ、このらい病人を私が直すことができようか。」と言いました。それで、エリシャは人を送って、「彼を私のところによこしてください。イスラエルに預言者がいることがわかるでしょう。」と言いました。それで、ナアマンはエリシャのところに来ました。みなさんこの話しはご存じですね。エリシャは、ナアマンのところに使者を送り、「ヨルダン川へ行って、7たびつかりなさい。そうすれば、あなたのからだはらい病からきよめられます。」と告げました。すると、ナアマンはカンカンに怒りました。「自分は重要人物なのに、預言者はあいさつにも出て来ないのか。預言者は、重要人物たるものを知らんのか!」と。帰り道、ナアマンはカンカンでした。とにかくカンカンでした。「あの泥だらけのヨルダン川につかれと言うのか。冗談だろう。ダマスコには、良好で透き通ったきれいな川がある。それなのに、ヨルダン川につかれとでも言うのか。」とうとう、彼のしもべの一人が、「御覧下さい。損するわけではありません。わざわざここまで来たのです。ヨルダン川に来ているのです。損するわけはありません。ひょっとしたら、何か起こるかもしれないではありませんか。」と言いました。それで、ナアマンは説得されて、ヨルダン川に7たびつかりました。7度目に彼が上がって来たとき、らい病

はなくなっていました。彼の皮膚は正常になっていました。直っていました。ナアマンは預言者のところに戻り、神の預言者エリシャにすばらしい贈物で褒美を与えようとしてきました。すると、預言者は、「あなたからは何も受け取りません。ただ、喜んで帰りなさい。」と言いました。ナアマンは誓約して、「私はこの神に仕えます。この神に私は仕えます。私が主君といっしょにリモンの神殿に入って身をかがめるとき、真の神に身をかがめます。私は自分の義務は果たします。」と言いました。このように、神への真実な献身をしました。しかし、みなさん覚えていますか。ナアマンがシリヤへ帰る途中、エリシャのしもべのゲハジが、預言者が断った褒美をすべて見て、自分がそれをもらおうと決めました。それで、ゲハジはナアマンを追いかけてゆきました。そして、ゲハジは作り話をしました。「あなたが行った後で、預言者のともがらのふたりの若い者がやってきて、助けが必要です。それで、銀少しと、着物を何着かいただけないでしょうか。」と言いました。そこで、ナアマンは、喜んでそれをゲハジに与えました。このように書かれています。「そのとき、神の人エリシャに仕える若い物ゲハジはこう考えた。『なんとしたことか。私の主人は、あのアラム人ナアマンが持って来た物を受け取ろうとはしなかった。主は生きておられる。私は彼のあとを追いかけて行き、必ず何かをもらってこよう。』(2列王5:20) 』ちよっとだけさ、と彼は思ったのです。しかし、ここで霊的な言葉が使われているのを注目してください。ここで、ゲハジはよこしまなことをするために出かけているのに、「主は生きておられる。私は彼のあとを追いかけて行こう。」と言っています。「ハレルヤ」といつも言っている人に気をつけましょう。真実な献身を意味しているとは限らないからです。

「ゲハジはナアマンのあとを追って行った。ナアマンは、うしろから駆けて来る者を見つけると、戦車から降りて、彼を迎え、『何か変わったことでも。』と尋ねた。そこで、ゲハジは言った。『変わったことはありませんが、私の主人は私にこう言ってよこしました。「たった今、エフライムの山地から、預言者のともがらのふたりの若い者が私のところにやって来ましたから、どうぞ、彼らに銀一タラントと、晴れ着二着をやってください。』するとナアマンは、『どうぞ。思い切って二タラントを取ってください。』と言って、しきりに勧め、二つの袋に入れた銀二タラントと、晴れ着二着を、自分の二人の若い者に渡した。それで彼らはそれを背負ってゲハジの先に立って進んだ。ゲハジは丘に着くと、それを彼らから受け取って家の中にしまい込み、ふたりの者を帰らせたので、彼らは去って行った。彼が家には行って主人の前に立つと、エリシャは彼に言った。『ゲハジ。あなたはどこへ行って来たのか。』彼は答えた。『(震えた声で) しもべはどこへも行きませんでした。』エリシャは彼に言った。『あの人があなただけを迎えに戦車から降りて来たとき、私の心もあなたといっしょに行っていたではないか。今は銀を受け、着物を受け、オリーブ畑やぶどう畑、羊や牛、男女の奴隷を受ける時だろうか。ナアマンのらい病は、いつまでもあなたとあなたの子孫とにまといつく。』彼は、エリシャの前から、らい病にかかってゆきのように白くなって出て来た。(2列王5:21-27)』さて、ゲハジは、オリーブ畑は受け取りませんでした。羊や牛やぶどう畑、男女の奴隷は受け取りませんでした。しかし、それらはゲハジの考えにあったことなのです。「もし、銀二タラントがあれば、オリーブ畑を買えるし、ぶどう畑を買える・・・。」と考えたのです。知識のことは、ゲハジの思いにあったことを正確に預言者に教えました。彼が考えていた金の使い道を教えました。これが知識のことはです。ところで、列王記第二6章にエリシャが再び登場します。「アラムの王がサマリヤ、

イスラエルと戦っていたとき、王は家来たちと相談して言った。『これこれのところに陣を敷こう。』そのとき、神の人エリシャは、イスラエルの王のもとに人をやって言った。『あの場所を通らないように注意なさい。あそこにはアラムが下って来ますから。』(2列王6:8-9参照)待ち伏せをしていたのです。「そこで、イスラエルの王は神の人が告げたその場所に人をやった。彼が王に警告すると、王はそこを警戒した。このようなことは一度や二度ではなかった。このことで、アラムの王の心は怒りに燃え、家来たちを呼んで言った。『われわれのうち、だれが、イスラエルの王と通じているのか、あなたがたは私に告げないのか。』すると家来のひとりが言った。『いいえ、王さま。イスラエルにいる預言者エリシャが、あなたが寝室の中で語られることばまでもイスラエルの王に告げているのです。』(2列王6:10-12)」ですから、ここも知識のことばでした。聖霊によるのでなければ、エリシャが知っているはずはなかったのです。これは、神によって与えられた知識です。

しかし、知識のことば、またその賜物は、自分が望むときいつでも使うことのできる知識の貯蔵庫ではありません。それは神の賜物であり、多くの場合、予期せぬ時に与えられ、自分の言うことが、実は、神からの知識のことばであると気づかないことが多いのです。ペテロは思いもつきませんでした。イエスがご自分の弟子たちに、「人々は私がだれだと言っていますか。」とお尋ねになった時、弟子たちは、「バプテスマのヨハネがよみがえったのだと言う人もあり、エレミヤだと言う人もいます。」と答えました(訳者注:以下マタイ16:13-17参照)。「あなたがたは、わたしをだれだと言いますか。」と言われると、ペテロは、「あなたは、生ける神の御子メシヤです。」と答えました。するとイエスは、彼に答えて言われた。「バルヨナ・シモン。あなたは幸いです。このことをあなたに明らかに示したのは人間ではなく、天にいますわたしの父です。」ペテロが、ブザーの音を聞いたり、感覚が走ったり、「ジーン(訳者注:特別な感覚の走る擬声音)。あなたは、生ける神の御子メシヤです。(訳者注:チャックは、あたかも神のお告げのように語調を変えて話しています。)」声が大きくなったり、声が震えたりしたのではないと思うのです。その時点で、超自然的な事が起こっているという兆候は何もなかったと思うのです。「あなたは、生ける神の御子メシヤです。」と言ったとき、ペテロさえも気づいていなかったでしょう。イエスは、「このことをあなたに明らかに示したのは人間ではなく、父です。」と言って、そのことを認められました。さて、知識のことばが、いつでも使うことのできる知識の貯蔵庫ではないと、先にお話しましたが、エリシャの場合、神は実に頻繁に、知識のことばを、物事の知識、出来事の知識を、超自然的な知識を与え、示されました。しかし、シュネム人の息子は別でした。その息子が畑で気を失い、息子は母のところに来て来られ、息子は死に、母はその息子を床に寝かせ、神の預言者のところへ向かい、しもべに、「もたもたせず、預言者のところにてできるだけ急いで行きなさい。もたもたしてはいけません。私のことはかまわなくていいです。私のことは心配しなくていいです。」と言いました(以下2列王4:18-37参照)。彼女が預言者のところにやってくると、エリシャは彼女が向かって来るのを見つけたので、使いの者を彼女のところへやり、「すべて無事ですか。」と尋ねさせました。すると、彼女は使いの者に、「無事です。邪魔しないで下さい。」と言い、エリシャのところへ向かって、進み続けました。そして、彼女がエリシャのところに来ると、…。次のように書かれています。「こうして、彼女は出かけ、カルメル山の神の人のところへ行った。神の人は、遠くから彼女を見つけると、若い

者ゲハジに言った。『ご覧。あのシュネムの女があそこに来ている。さあ、走って行き、彼女を迎え、「あなたは無事ですか。あなたのご主人は無事ですか。お子さんは無事ですか。」と言いなさい。』それで彼女は答えた。『無事です。』それから、彼女は山の上の神の人のところに来て、彼の足にすがりついた。ゲハジが彼女を追い払おうと近寄ると、神の人は言った。『そのままにしておきなさい。彼女の心に悩みがあるのだから。主はそれを私に隠され、まだ、私に知らせておられないのだ。』(2列王4:25-27) エリシャは、ここで驚いています。何かが絶対おかしくて、彼女は心に悩みを持っているのだが、神はそれが何であるか私に示しておられない、語っておられない、と。ですから、知識のことばは、いつでも意のままに使うことのできるものではなく、神によって与えられるものであり、神の啓示または知識です。ここにすべての知識があるから、何でも教えてあげますよ、という類いのものではないのです。

面白いことに、エリシャは、神が彼に教えられないのを意外に思っています。私の人生において、さまざまな時や場合に、神が私の心に語りかけ、いろいろな事を示してくださいました。そして、そんな事が起こるのは、とても興奮する体験です。そして、主が示してくださったのだと気づき、有頂天になります。ただ、多くの場合、実際にその事が起こって初めて、主が何かを示して下さっているのに気づくのです。「何か起こりそうだ、何か起こりそうだ、と強く感じてたんだ。わあ、主が示して下さった。わあ、すごい。きっとそうなる。きっとそうなるとわかってたんだ。わあ、すごい。わかってたんだ。わかってたんだ。」と、主が実際に何か示されるとわくわくするのです。ここエリシャの場合では、主が何か示されていない事に驚いています。私はいつも、主が示されていることに驚くのですが……。けれども、エリシャは、何か起こっているのに、それが何であるかを主が教えられないことに驚いています。

イエスの生涯を見ると、この知識が現われているのがわかります。むしろイエスは、神の御子です。しかし、この地上に来られたときは、人のからだという制約のため、神性の一部に制限を受けられました。イエスは、ご自身の再臨の時がいつかは、その制約のある状況の時点では御使いもご自分も知らず、父のみがご存じであるという事実を語られています。しかし、ピリポがナタナエルをイエスのところに連れて来た時、イエスは、「これこそ、ほんとうのイスラエル人だ。彼のうちには偽りが無い。」と言われ、ナタナエルは、「どうして私をご存じなのですか。」と言いました(以下ヨハネ1:47-51参照)。イエスは、「わたしは、ピリポがあなたを呼ぶ前に、あなたがいちじくの木の下にいるのを見たのです。」と言われました。すると彼は、「あなたはほんとうに神の子です。」と言いました。イエスは言われた。「あなたがいちじくの木の下にいるのを見た、とわたしが言ったので、あなたは信じるのですか。もっと、いっしょにいれば、もっと大きなことを見るようになります。」イエスは、「ご自身を人にお任せにならなかった。なぜなら、イエスはすべての人を知っておられたからであり、また、イエスはご自身で、人のうちにあるものを知っておられたので、人についてだれの証言も必要とされなかった。」とあります(ヨハネ2:24-25参照)。ヨハネの福音書16章で、弟子たちはこう言いました。「いま私たちはあなたがいつさいのことをご存じで、だれもあなたにお尋ねする必要がないことがわかりました。これで、私たちはあなたが神から来られたことを信じます。(ヨハネ16:30)」しかし、この知識のことばの賜物は、おそらく…それが使徒たちの生活に現わ

れているのを見ます。むろん、すでにお話した、ピリポ・カイザリヤでのペテロの場合はその一つです。それにまた、使徒行伝で、アナニヤとその妻サツピラが地所を売って、金を持ってきて弟子たちの足元に置きました(以下、使徒行伝5:1-11参照)。実は、二人が共謀して地所の代金の一部を自分たちのために取っておいたのですが、全額を持ってきたように装いました。聖書にはつきりと指摘されている罪は、全てを与えなかった、全てを持ってこなかったという事実にあるのではありません。というのは、ペテロは、特に注意を払ってこのことを述べているからです。「その地所があなたの所有物であった時、あなたにそれを売る義務は全くなかったし、売った時も、あなたにその代金を持ってくる義務はなかったのです。しかし、事実は神に対して一部を自分のものとしているのに、すべて神にささげたという偽善、みせかけである。」これは今日、人がよくする見せかけと同じです。つまり、神に対しすべてをささげているように見せかけるのですが、実は神に対し、かなりを自分のためにとっておいているのです。このため、ペテロは、「どうしてあなたは、聖霊を欺いたのですか。あなたは人を欺いたのではなく、神を欺いたのだ。」と述べているのです。ですから、ペテロが、代金の一部を自分たちのためにとっておくという二人の共謀を知るようになったのは、知識のことばでした。

御霊の賜物の現われについて、賜物を分類しようとしていますが、見分ける賜物と知識のことばの賜物、そしてまた預言の賜物と知識のことばの賜物の間に重複する部分がよくあると思うのです。ピリポがサマリヤに行ってキリストを宣べ伝え、多くの人が信じ、洗礼を受け、もたらされた奇蹟を見て、彼らが聖霊を受けるようにとペテロとヨハネが来た時、洗礼を受けた、以前魔術を行なう力で有名であったシモンが、ピリポと神の力を見て、信じて、洗礼を受けていました(以下、使徒行伝8:9-24参照)。ペテロとヨハネが人々の上に手を置いて、人々が聖霊の賜物を受けるのを見て、シモンはやって来て、「私が手を置いた者がだれでも聖霊を受けられるように、この権威を買いたいのです。」と言いました。ペテロの答えをみなさん覚えていらっしやるでしょう。「あなたの金は、あなたとともに滅びるがよい。あなたは金で神の力を手にいれようと思っているからです。ですから、神に赦しを乞いなさい。あなたの心には苦い胆汁があります。」かつて持っていた、人々に対する権威を失ったことに対する恨みがありました。霊の権威によって、それを回復しようと望んでいたのかも知れません。そして、この権威を買うことができると思っていたのでしょうか。ペテロは、この男の心の中を読み取りました。これは知識のことばであり、この男の心の中で起きていることの知識を理解していました。外見的な、目に見えるような、外見的な発言はありましたが、心の中では、そのことが沸々としていたのです。知識のことばによって、ペテロはこの男の心の中で起きていることをあらわにしました。

パウロによるエペソ人への手紙で、パウロはエペソにいる人々のために、2つの祈りを記しています。1章で、「どうか、私たちの主イエス・キリストの神、すなわち栄光の父が、神を知るための知恵と啓示の御霊を、あなたがたに与えてくださいますように。(1:17)」と祈っています。さて、聖霊がみなさんに神を知るための知恵と理解を与えられることなくして、神を真に知ることはできません。ヨブの友人の一人が、「全能者の極限を見つけることができようか。(ヨブ11:7)」と尋ねました。その答えは、知的な探求によっては神を見つけることができない、です。神を知ることは、聖

霊の啓示による結果です。ですから、そのことを、神を知るための知恵と啓示の御霊が与えられるようにパウロは祈りました。「また、あなたがたの心の目がはっきり見えるようになって、神の召しによって与えられる望みがどのようなものか、聖徒の受け継ぐものがどのように栄光に富んだものか、また、神の全能の力の働きによって私たち信じるものに働く神のすぐれた力がどのように偉大なものであるかを、あなたがたが知ることができますように。(エペソ1:18-19)」パウロはガラテヤ人への手紙で、自分が彼らに宣べ伝えている福音は人間から出たものではなく、また人間から学んだものでもなく、直接に聖霊から受けた啓示だと告げています(ガラテヤ1:1参照)。このパウロが得た福音の知識は、直接に聖霊から受けた啓示でした。

さて、この知識のことばの賜物は、神のみことばを語る奉仕のときによく与えられます。私が教えている時、教えていると、以前に一度も見たとのこないような、聖書の箇所についての理解を、聖霊が突然私に与えて下さることがよくあります。私が話をしている最中に、理解が与えられます。神が告げられたり語られたりする知識であり、洞察や知識であります。私はよく、その知識を、神からの洞察を分かち合います。私の場合、その真理について、おそらくはみなさんよりも、もっと喜んでいます。なぜなら、それが、神からの靈感が、その時に与えられて得たものだとはわかってはいるのですが、みなさんは、どこかの本から取ってきたんだろうと思っているかもしれないからです。でも、聖霊が私の理解を開かれたということが私にはわかっています。それで、私はとてもわくわくしてしまうのです。聖霊が私の心に示される真理を喜んでいます。私はよく、ある特定のことを説明しようとするとき、仮説を作り出します。それは、ある要点を説明するためです。私は仮説を作り上げるわけですが、だれかグサツときていることが実に多くあります。「それは私のことだ。誰が私のことを告げたのか。どうやって、彼はそれを知るようになったのか。」と言うのです。実際に、友人を教会に連れてきた人がいて、後で電話をしてきて、「あの。もう友達が私と口をきいてくれなくなりました。日曜日に教会に友達を連れて来ましたが、礼拝の前に私があなたに電話して、彼らが何をしているか逐一話したに違いないと思っています。日曜に、あなたは、まさに彼らがやっていることをビシッと指摘したからです。私たちは、そのようなことはしていないと説得しようとしたのですが、彼らは信じないのです。私たちがあなたに電話したに違いないと思っています。」と言ったことがあります。

ある夜、ペテロの手紙第二から偽預言者について取り扱っている箇所を学んでいました。それで、私はペーパー・ミニストリーについての話をしていました。住所リストとコンピューターを持っていて、リストにある全米の住所に手紙を送っている人たちがいました。住所リストは買うことができます。コンピューターで打ち出した手紙をリストにある全米の住所に送り、自分たちのミニストリーについての話をします。お金を寄せ集め、どのようにスラム化した都市部に出て行って、あれをやっていると、これをやっているとか伝えていきます。しかし、ミニストリーは、紙の上でしか存在しないものです。この人たちはリード島の豪邸に住んでいて、豪華なヨットを持っていて、キャデラックのコンバーチブルを乗り回して、白い靴を履いている、と私は言いました。住所リストを使って、贅沢な暮らしをしているけれども、実際のミニストリーは何もなくて、金を無心しているだけだ、本当のミニストリーは何もない、と。その話をしたのは、ペテロの手紙第二を学んでいた日曜の夜のことで

した。月曜日の朝、電話がかかってきて、秘書は私に、「この人はずいぶん怒っています。あなたと話がしたいそうです。」と言いました。それで、私は、「その電話を回して下さい。」と言いました。すると彼は、こう言いました。「私には正当なミニストリーがあることをあなたに知っていただきたい。」私は、「何をおっしゃっているのですか。」と言いました。「私の言っていることはわかっているでしょう。昨晚、あなたは、私のミニストリーを正当なミニストリーではないと人々に言ったじゃないですか。」と彼は言いました。「私は、リードー島に住んでいて、キャデラックのコンバーチブルに乗っています。しかし、私にはミニストリーがあります。正当なミニストリーです。それを、あなたに知っていただきたいのです。」と彼は言いました。私は、「ちょっと、待って下さいよ。あなたのことを聞いたこともありません。あなたのことは知りません。」と言いました。「私は、ただ仮説を作って話ただけです。しかし、もし私があなただったなら、主に自分のミニストリーが実際どれほど正当なのか尋ねてみますけれど。」と言いました。これは、知識のことばです。誰かのことをすっぱ抜いていたなどと私は知りませんでした。その人はラジオで聞いていたのです。彼のことをすっぱ抜いていたなどと私は気づいていませんでした。その時点で、その賜物が働いている本人がそのことに気がついていないことがよくあるのです。しかし、実は知識のことばの賜物が用いられているのです。

繰り返しますが、知識のことばは預言と関連があります。誰かに警告して、「あなたのしていることは危険だと思います。もし続けるなら、これこれ、しかじかのことが起こってしまいますよ。」と言います。それは、知識のことばのようなものです。なぜなら、それが実際に起こるからです。つまり、どのようなことが起こりうるかを言って警告して、それが実際に起こります。何が起こるかを予測する預言と関連があるのですが、その時点では、「このことがあなたに起こるのだ。」とは言っていなかったのです。ただ、「このようなことが起こりうる。」と言っただけでした。しかし、時がたってそれが起こったことがわかったのです。しかし、それは、ちょっと判断がむずかしいですね。超自然的なことがあまりに自然に起こるからです。このために、私たちはとかく間違いを犯してしまうのです。超自然的なことを考えるときに、それが何か超自然的な方法で起こると考えてしまうのです。しかし、あまりに自然に起こってしまうことが多いので、その中にある超自然的なことに気づかないでいてしまうのです。

主が、ある人について起こっていることを示してくださる場合があります。アナニヤとシモンについてペテロに起こったようにです。なぜ、主があなたにそれらの人に起こっていることの洞察を知らされるのか、という疑問が残ります。知識のことばは、その知識をどうすれば良いのかわからないので、時に難しいことがあります。主が、知識のことばや状況についての知識を与えられるとき、ただその人たちのために祈るべき場合が多いのです。私たちがロス・ラノスの地域教会で牧会をしていたとき、ある日曜日にケイが私に、「ねえ、あなた。私、見たのよ。」と言って、教会でとても尊敬されている、ポモナ・バレーでとても高い地位にある人の名前を挙げました。その人は、とてもすぐれた家庭的な人で、ひとかどの人格者でした。ケイは言いました。「私が今朝あの人を見た時、・・・感じたのだけれど・・・御霊によってわかったのだけれど、・・・あの方が秘書と不倫しているのを見たの。あまりに強く感じたので、そのようなことを考えるのはひどいことだと思って、考える

のはよそうと思ったの。でも、あの人が秘書と不倫している光景がよみがえってきて・・・。」とケイは言いました。そして、数か月後、私は電話を受け取りました。彼と彼の妻両方が電話口にいました。家に親子電話があったのです。「チャック牧師。」とだけ言ったまま、二人とも泣き崩れてしまいました。二人は、それ以上話を続けることができませんでした。それで、私は、「構いませんよ。何についての電話かわかっていますから。ここ6か月間あなたは秘書と不倫関係にありましたね。いらっしゃい。話をして祈りましょう。」と言いました。彼らは、私が何が起こっていたのかを知っていたので、ひどく驚きました。主がケイに示されたのです。気をつけましょう。主はケイにいろいろ見せて下さいますから。女預言者といっしょに暮らすのは楽ではありません。

いわゆる知識のことばとしてよく通用しているものについて、私は個人的にやや困難を覚えます。たくさんの人グループがいて、その中の誰かが、「今晚ここに、とても意気消沈して、とても投げやりになり、自殺さえ考えている人がいます。」と言います。これほどたくさんの方がいるのですから、私も敢えて、ここに今晚おそらくとても意気消沈してとても投げやりになっている方がいるでしょう、と言えます。しかし、それは知識のことばではありません。しかし、とても幅のある一般論だけしか言っていないことがよくあるのです。例えば、ここに、膝の調子の悪い人がいます。それは私です。これを知識のことばとして見なすには、やや困難を覚えます。でも、できるだけ広い心でいたいのです。偏見を持っていたくないのです。しかし、何でも鵜呑みにするほどにはなりたくありません。聖霊がなさっていること全てについて、聖霊がなさりたいこと全てについて、心を開いていたいのです。必ずしも聖霊からではないのに御霊の賜物だと見なしていることが時々あり、本物を損なってしまうことがあります。本物の御霊の働きに対して、人々が心を閉ざしてしまうことがあります。不適当なやり方、方法でなされるのを見てしまうため、人々の心が閉ざされてしまうのです。正直言って、これまでに、御霊の現われ、御霊の賜物の現われと見なされているけれども、聖霊によるものではないとはっきり言えるものをたくさん見てきました。なぜなら、聖霊は混乱の神ではないのに、起こっている事は、かなり混乱しているし混乱させるからです。これらの分野において賜物の誤用や乱用があるからと言って、賜物による祝福や神からの力の分野において、聖霊に対し心の戸を閉ざすことなく、常に心を開いているように心掛けています。私が常に神に心を開き続け、神が私に対し、何でもやりたいことを、いつでも、どのようにでもやりたいようにやって下さるように祈ります。私は心を開いていたいのです。聖霊に対し常に心を開いていることができるように祈ります。

聖霊との体験、聖霊との関係を、私は神に感謝しています。聖霊が私のうちでして下さったこと、また今して下さっていることのすべてに感謝しています。しかし正直言って、私について聖霊がなさりたいこと、したいと望まれていることは、まだまだたくさんあると思います。私も、聖霊にそうしていただきたいのです。御霊に導かれ、御霊に用いられるように、完全に心を開いていたいのです。それによって、神が望まれているどのような形でも、神の御霊が私をとおして現われてくださいますように。ですから、私は最もすぐれた賜物を熱心に求めます。しかしながら、さらにすぐれた道を求めています(1コリント12:31参照)。それは、神の愛のうちにいつも歩むことです。それは、たとい私が御使いの異言で話しても、もし愛がないなら意味がないからです。また、あらゆる知識が

あり、奥義に通じていても、愛がないなら、値打ちがありません。ですから、私たちは続けて、さらに探求しますが、さらにすぐれた道を探求してゆきます。だからと言って、他のものを軽んじるのではないのです。他のものを否定することではないのです。他のものも私は望んでいます。神が備えられているものを私はすべて望んでいます。神が備えられているものすべてを私は必要としています。

信仰の賜物(#3066)

Gift of Faith

パウロが御霊の賜物にはいろいろの種類があること、御霊にはいろいろの現われがあることについて語っていますが、コリント人への手紙第一12章9節で、パウロは、「ある人には同じ御霊による信仰が与えられ」と告げています。信仰の賜物、または、その現われです。

さて、信仰にはいろいろの種類があります。救いの信仰について私たちは話します。エペソ人への手紙2章で、パウロは、「あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。行ないによるものではありません。だれも誇ることにないためです。(2:8-9)」と述べています。これを私たちは救いの信仰と呼んでいます。神の約束を信じる信仰であり、もし私たちがイエス・キリストを信じるなら、自分の犯した罪はどのようなものでも赦され、きよめられます。救いをもたらす信仰です。ヨハネが福音書の冒頭で語っているように、「その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった。この人々は、血によってではなく、肉の欲求や人の意欲によってでもなく、ただ、神によって生まれたのである。(ヨハネ1:12-13)」3章でヨハネは、モーセについて語りました。「モーセが荒野で蛇を上げたように、人の子もまた上げられなければなりません。それは、信じる者がひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。(3:14-16参照)」そして、日曜学校で私たちみんなが暗唱した聖書の箇所があります。「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。(3:16)」それを私たちは、救いの信仰と呼んでいます。イエス・キリストを自分の救い主として信じる信仰です。イエスが私たちの罪の代価を支払われたことを信じ、イエス・キリストの血が、神に受け入れられる犠牲として流されたことを信じ、私たちの罪のための犠牲として、私たちの身代わりとなり、私たちの罪を自分の身に負い、私たちの代わりに死なれたことを信じます。この方を信じることにより、私たちは滅びることなく、永遠のいのちを持ちます。ローマ人への手紙3章23節です。「すべての人は、罪を犯したので、神の栄光に達せず、ただ、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いのゆえに、働なしに義と認められるのです。神は、キリスト・イエスをその血による、また信仰による、なだめの供え物として、公にお示しになりました。それは、ご自身の義を現わすためであり、こうして神ご自身が義であり、また、イエスを信じる者を義とお認めになるためなのです。(3:23-26参照)」そして、私たちがみなよく知っている聖書の箇所です。「なぜなら、もしあなたの口でイエス・キリストを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせてくださったと信じるなら、あなたは救われるからです。人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われるのです。(ローマ10:9-10参照)」救いの信仰です。

パウロは、ローマにある教会に手紙を書き、12章で、「私は、自分に与えられた恵みによって、あなた方一人一人に言います。だれでも、思うべき限度を越えて思い上がってはいけません。いや、むしろ、神がおのおのに分け与えてくださった信仰の量りに応じて、慎み深い考え方をしなさい。(12:3)」と述べています。ですから、神がおのおのに分け与えてくださった信仰の量りに応じた、

信仰の賜物があるのです。パウロが言及している信仰の量りは、すべての人に分け与えて下さった救いの信仰だと私たちは信じています。もし、神の与えられた信仰の賜物を人が用いるなら、その人は自分の罪から救われます。そして、神の賜物である、永遠のいのちを得ます。ヘブル書では、イエスが私たちの信仰の創始者であり完成者であると告げています(ヘブル12:2参照)。これも、救いの信仰と関連があるように見受けられます。信仰の創始者であり完成者です。この救いの信仰について言及すると、それは聞くことによりもたらされることがわかります(以下ローマ10:17参照)。信仰は聞くことから始まり、聞くことは神のみことばによります。これは、救いの信仰です。「聞いたことのない方を、どうして信じることができるでしょう。(ローマ10:14)」ですから、神は、私たちに、私たち一人一人に、信仰の量りに応じた救いの信仰を与えられ、それを用いると、私たちは自分の罪の罰から救われます。

もう一つ信仰の種類があり、それは、神のみことばと神の約束を信頼する信仰です。神の民が神に、神のみことばに持っている信仰です。それによって、私たちは自分自身を神の約束にゆだねます。神の約束を信じて、神の約束によって確信を持ち、神の約束を喜びます。神のみことばと神の約束に対する信者のこのような信仰は、ヘブル書11章で証明されています。神を信じ、神の約束を信じた人たちがした様々なこと、信仰の男、信仰の女がした功績が列挙されています。この種の信仰が、イエスに従う人たちに欠けていることがよくあります。覚えていますか、マルコの福音書16章14節にこう書かれています。「しかしそれから後になって、…」つまり、イエスの復活の後ということです。「…イエスは、その11人が食卓に着いているところに現われて、彼らの不信仰とかたくなな心をお責めになった。それは、彼らが、よみがえられたイエスを見た人たちの言うところを信じなかったからである。」彼らは、「私たちは主を見ました。主にさわり、足にすがりつきました。」と言う、女の証言を信じませんでした。それでも、彼らは信じませんでした。このためイエスは彼らを非難し、責められました。イエスがご自分のすることを約束し、女たちがご自分のなされたことを告げたことを、かたくなな心のために信じなかったことをです。エマオへの途上で、イエスが二人の弟子たちと歩いておられた時に、イエスは彼らに、「ああ、愚かな人たち。預言者たちの言ったすべてを信じない、心の鈍い人たち。(ルカ24:25)」と言われました。ここに神のみことばがあったのに、あなたは信じなかったし、信頼しなかった。ですから、約束を単純に信用するこの信仰、神の子どもたちにある子どものような信仰は、増すことができるし、成長する類いの信仰だと思うのです。ユダは人々に、「自分の持っている最も聖い信仰の上に自分自身を築き上げなさい(ユダ20節参照)。」と言いました。テサロニケ人への手紙で、パウロは、人々の信仰の成長について話しています(1テサロニケ3:10のことか?)。

この類いの信仰は、経験によって成長すると思うのです。長い年月をかけて、自分の生活の中で神の真実を経験します。聖書の登場人物に神がなされたことを読むとよいのですが、私たちは、彼らが特別な人たちだと思ってしまい、自分はそのような部類には入らないと思ってしまいます。エリヤが、私たちとちょうど同じような気質を持っていたことを忘れてしまいます。エリヤは祈って、3年間雨が降りませんでした。そして、再びエリヤが祈ると雨が降りました。しかし、エリヤはみなさんと全く同じだと言っています(ヤコブ5:17参照)。ですが、私が思うに、長い年月の中で神の

真実を経験してゆくと、神の約束に対するこのような信仰、神のみことばに対するこのような信仰は、私たちが神の真実を経験してゆくと成長すると思うのです。長い年月の中で、私たちは、心に留め、備え、導いてくださる神の真実を経験します。ですから、そのような信仰を持つようになるのです。もう出来事に翻弄されることがないほど信仰が成長するようになります。すべては神の御手にあることがわかるからです。神が処理してくださいます。

そして、癒しの信仰とでも言うことができる信仰があると思います。マタイの福音書9章22節のところで、イエスがヤイロの家に行かれる途中の話思い出します。ヤイロの娘は死にました。群衆がイエスを押し、追いかけて、へしあい、イエスに近づいているときに、突如としてイエスは立ち止まり、「わたしにさわったのは誰ですか。」と言われました。ペテロの反応を覚えていらっしゃるでしょう。「主よ。ご冗談でしょう。みんなが、あなたを押し合いへし合いしているのに、『わたしにさわったのは誰ですか。』とおっしゃるのですか。10メートル(訳者注:英語は10ヤード。1ヤードは約1メートル。)四方は人ばかりです。」イエスは、「いや。わたしの力が出て行ったのを感じた。」とおっしゃいました。それで、覚えていますか。女が出てきて、イエスの前にひれ伏し、震えながら、12年の間長血をわずらっていたことを告白しました。彼女は、お着物のふさにでもさわることでもできれば、直ると信じたのです。すでにこの女は医者により金を使い果たしたのに、良くなりませんでした。もし、お着物のふさにでもさわることでもできればきっと直る、と感じたのです。それで、この女は群衆の間をぬって、イエスの着物のふさにさわることができるほど近づきました。すると、たちまち出血が止まりました。彼女は癒されたのでした。覚えていますか。イエスは、「娘よ。しっかりしなさい。あなたの信仰があなたを直したのです。」と言われました。これは、癒しの信仰と分類できるでしょう。癒される信仰です。

マタイの福音書15章28節で、イエスのところに来て、「娘が、ひどく悪霊に取りつかれているのです。」と自分の娘について語った女がいました。この女はツロの出身でしたから、弟子たちが来て、「主よ。あの女は邪魔なので、なんとかして下さい。」と言った時に、イエスは、「わたしは、イスラエルの家の滅びた羊以外のところには遣わされていません。」とおっしゃいました。それで、女は直接イエスのところに来て、「主よ。わたしをお助けください。」と言いました。イエスは、「子どもたちのパンを取り上げて、子犬に投げてやるのはよくないことです。」と言われました。「主よ。そのとおりです。ただ、子犬でも主人の食卓から落ちるパンくずはいただきます。」と女は言いました。そのとき、イエスは彼女に答えて言われた。「ああ、あなたの信仰はりっぱです。その願いどおりになるように。」すると、彼女の娘はその時から直りました。「ああ、あなたの信仰はりっぱです。その願いどおりになるように。」これは、癒しの信仰です。その信仰は、彼女の幼い娘に癒しをもたらしました。マルコの福音書10章にはこう書かれています。「彼らはエリコに来た。イエスが、弟子たちや多くの群衆といっしょにエリコを出られると、テマイの子のバルテマイという盲人のこじきが、道ばたにすわっていた。ところが、ナザレのイエスだと聞くと、『ダビデの子のイエスさま。私をあわれんでください。』と叫び始めた。そこで、彼を黙らせようと、大ぜいでたしなめたが、彼はますます、『ダビデの子よ。私をあわれんでください。』と叫び立てた。すると、イエスは立ち止まって、『あの人を呼んで来なさい。』と言われた。そこで、彼らはその盲人を呼び、『心配しないでよい。さ

あ、立ちなさい。あなたをお呼びになっている。』と言った。すると、盲人は上着を脱ぎ捨て、すぐ立ち上がって、イエスのところに来た。そこでイエスは、さらにこう言われた。『わたしに何をしたいのか。』すると、盲人は言った。『先生。目が見えるようになることです。』するとイエスは、彼に言われた。『さあ、行きなさい。あなたの信仰があなたを救ったのです。』すると、すぐさま彼は見えるようになり、イエスの行かれる所について行った。(10:46-52)癒しの信仰です。すぐさまこの人は目が見えるようになりました。

癒しの信仰は、ここコリント人への手紙で書かれている信仰の賜物に、より深い関係、関連があるように思われます。と言うのも、信仰の賜物は癒し、あるいは、奇蹟と関連していることが多いからです。実際、御霊の現われの列挙の中で、信仰の賜物が癒しの賜物と隣り合わせに書かれているのは偶然ではないと思うのです。と言うのも、信仰の賜物は癒しの賜物の間に密接な関係があることが多いからです。

さて、面白いと思うことがあるのですが、いつも面白いことがあるのですが、今でも学べて嬉しいのですが、この学びのために私が学びをしていてわかったことは、信仰(faith)という言葉が旧約聖書では2回しか使われていないことです。新約聖書では247回ですが、旧約聖書ではわずか2回しか使われていません。そして、そのうち一回はとても否定的に使われています。申命記32章20節で、神はご自分の民の間で信仰が欠けていることに文句を言われています(訳者注:新改訳、口語訳、新共同訳では、「真実のない」あるいは「不真実」と訳されていますが、リビング・バイブルだと「不信仰」となっています)。もう一つは、ハバクク書に書かれていますが、もちろんこの書は、信仰についての偉大な書です。ハバククは、混乱していたので、見張り所に入って行って神が何をされるのかを見ていました。その時に起っていた腐敗のために、ハバククは主に叫び求めました。すると、主は基本的にハバククに、「まだまだ序の口だよ。もっと悪くなる。」と言われました。けれども、「わたしは働いている。」と言われました。しかし、ハバククの苦情は、「物事が悪くなる一方なのに、神よ、あなたは、それを手をこまねいて見ておられます。」というものでした。ハバククは、ちょうど今日私たちが感じているように感じていたのです。今日、わが国を見て、下降線をたどっているのを見ると、私たちは、「主よ。あなたは何もして下さらない。」と言うのです。しかし神は、「わたしはやっている。もし、自分のやっていることをあなたに話すなら、あなたの耳は耳なりがする。」と言われました。ですから、主は彼に、ご自分がバビロン人を連れてきて、彼らが、神に背を向けた人たちにさばきを下さす神の器になることをお話になりました。すると、ハバククは、不満を述べて、「主よ。それは合点がいきません。私たちに罰を与えるのに、なぜ、私たちよりもひどい国民をお用いになるのですか。」と言いました。「確かに私たちに罰は必要です。それは認めます。しかし、なぜ、私たちよりもひどい国民をお用いになるのですか。」それから、ハバククは、「見張り所に行って、神が何をなさるのか待って見よう。」と言いました。彼が見張り所にいるときに、神は国民にふりかかろうとしていた闇の時にハバククが支えられるのに必要なことばをお与えになりました。そして、次が主がハバククに与えられた言葉でした。「正しい人はその信仰によって生きる。(ハバクク2:4)」「ハバククよ、ただわたしに信頼するしかないのだよ、と。ですから、旧約聖書ではこの二つの言及しかないのです。一つは否定的で、もう一つはある意味で肯定的なもので

す。

ですが、覚えているでしょうか。使徒行伝3章で(以下3:1-26参照)、ペテロは午後の3時ごろの祈りの時間にヨハネといっしょに宮に入って行きました。そこには、40歳くらいの生まれてこのかた一度も歩いたことのない男がいました。その男は、神を礼拝しに宮に入る人たちから施しを求めていました。ペテロは、その男に、「こっちを向きなさい。」と言うと、男は何かお金をもらえんと思って振り向きました。すると、覚えていますか。ペテロは、「金銀は私にはない。しかし、私にあるものを上げよう。ナザレのイエス・キリストの名によって、歩きなさい。」と言いました。彼の右手を取って立たせると、たちまち彼は力を受け、歩き始め、跳びはね始め、神をほめたたえ始め、ただ神を賛美して宮の中をめぐるしました。宮の中にいた人は、「あれは、長年、宮の門のところにいて施しを求めていた足なえの男ではないか。」「そのように見受けられるが。何が起こったのか。なぜ、歩いているのか。」「さあね。調べてみよう。」と言いました。それで、彼らはこの男について行って、ソロモンの廊に出て行きました。そこで、この男がペテロを捕らえて、抱き、踊り跳ね回るのを見ました。そして、すぐに、自分たちで理解できない何か神秘的な方法でこの男が歩いている事実を、ペテロに関連づけました。ペテロは、これらの人たちがみな、急に、恐れと崇敬、畏怖の念を持って自分のことをじっと見ているのに気づき、こう言いました。「イスラエル人たち。なぜこのことに驚いているのですか。」あるいは、「なぜ、私たちが自分の力で、この人によいこをともたらしたかのように、私たちを見つめるのですか。この人をあなた方の前で完全なからだにしたのは、ナザレのイエス・キリストの名によるのです。」ペテロは、続けてイエスについて宣べ伝えました。そして、奇蹟の説明をして、16節の所で、ペテロは、「その御名を・・・」、これは、イエスの御名のことですが・・・「この御名を信じる信仰のゆえに、あなたがたがいま見ており知っているこの人を強くしたのです。」と言いました。イエスの御名とイエスの御名に対する信仰のゆえに、この人が40年以上もかかえていた疾患から癒されて、そこに立っていたのでした。しかし、ペテロは続けて、「イエスによって与えられる信仰が、・・・。」と言いました。つまり、ペテロは、「私の偉大な信仰が」と言っていたのではなく、「イエスによって与えられる信仰が」、つまり、信仰の賜物が働いたことを言っていたのです。それは、「私にあるものを上げよう。ナザレのイエス・キリストの名によって、歩きなさい。」と言わしめた、ペテロに与えられた信仰の賜物でした。その時にペテロに与えられた信仰のことを、ペテロは、「イエスによって与えられる信仰が」と言い、この足なえの男に癒しと奇蹟をもたらしたのは信仰の賜物が働いていたことを知っていました。ですから、3つの賜物が働いていたと言えます。信仰の賜物と、癒しの賜物、奇蹟の賜物の3つすべてが、この足なえの男を癒すのに働いていました。

使徒行伝6章8節では、ステパノについて書かれています。「さて、ステパノは恵みと力とに満ち、人々の間で、すばらしい不思議なわざとるしを行なっていた。」不思議なわざとるしは、信仰に、信仰の賜物に彼が満たされていたことによるとされています。パウロの第一回伝道旅行に同行したバルナバは、「りっぱな人物で、聖霊と信仰に満ちている人であった。こうして、大ぜいの人々が主に加えられた。(使徒11:24参照)」と説明されています。ですから、この人も信仰の人でした。ここでは、信仰は聖霊に満たされることに関連しています。使徒行伝14章に記されていますが、パ

ウロがルステラにいて、説教をしていると、またしても40歳くらいの生まれつき足のきかない人がいました。パウロが説教をしていると、この男には、いやされる信仰があるとパウロは認めました。おそらくこの男は、パウロが言っていることに熱心に耳を傾けていたのでしょう。その理解は、おそらく見分ける賜物だったのでしょう。この男には、癒される信仰があるとパウロは理解しました。それで、パウロは言いました。「兄弟。ナザレのイエスがあなたをすこやかにします。立って、歩きなさい。」その男は、立ち上がり、人々は驚き、「神々が私たちの所に下ってきた。」と言いました。それで、人々はゼウスの神殿に走ってゆき、「あの通りにあるゼウスが、あなたの神が地上に来た。」と言いました。「ヘルメスも連れてきた。」と。パウロの方が背が低かったのでパウロがヘルメスで、バルナバがゼウスだと人々は思い込んだからでした。そして、ゼウスの神殿の祭司は、パウロとバルナバに犠牲をささげるために、雄牛数頭を携えてきました。それで、二人は、自分たちに犠牲をささげさせないようにするのに苦労しました。しかし、ここでも信仰の賜物が、「ナザレのイエスがあなたをすこやかにします。」という信仰の言葉が、この男に告げられています。パウロは、ガラテヤ人への手紙の中で、「あなたがたに御霊を与え、あなたがたの間で奇蹟を行われた方は、あなたがたが律法を行ったから、そうなされたのですか。それともあなたがたが信仰をもって聞いたからですか。(3:5)」と書きました。ですから、人々の間で奇蹟を行っていた人たちは、信仰のことばによってそれを行っていたはずだと認めざるをえません。

ある日、イエスは、弟子たちに赦しとその重要性についてお話になりました。弟子たちが、神のご計画全体において赦しがいかに重要か少し理解しはじめたとき、つまり、私たちは他の人を赦すべきであることについて理解しました。自分たちにひどいことをする人に対してどれほど赦すべきかをわかり始めたとき、「私たちの信仰を増してください。(ルカ17:5)」と言いました。つまり、イエスが命じられたように赦すことができないことを弟子たちは認めたのでした。自然ではありませんでした。自然には、仕返しをすることでした。復讐をすることでした。しかし、そこで主は、赦すように言われました。そのような能力が自分にはないことを弟子たちは認めました。それで、弟子たちの祈りは、「私たちの信仰を増してください。」でした。「あなたが私たちに命じておられることに従順になり、赦すことができるように信仰を増してください。」「私たちの信仰を増してください。」と弟子たちが言ったことで、イエスが弟子たちにこの特別な信仰の賜物について話す機会を開いたようです。というのも、イエスはこのようにお答えになっています。「もしあなたがたに、からし種ほどの信仰があったなら、この桑の木に、『根こそぎ海の中に植われ。』と言えば、言いつけどおりになるのです。(ルカ17:6)」それは、かなりすごいことです。「からし種ほどの信仰」とは。アボカドの種ほどの信仰あなたにあったら、何ができるでしょうか(訳者注:アボカドの種はかなり大きい。)。ですから、イエスは、この信仰の賜物について弟子たちにお話になっているようです。頑張ることができることではないのです。信仰を持つと頑張っている人を何度も見たことがあります。信じる状態、あるいは熱狂状態などは、頑張る能える類いのものではないのです。それは、ただ賜物として与えられるものです。ただ、そこにあるもので、突然、何かを行なう信仰が与えられるのです。いったい自分は何をしているんだ、と思うことがよくあります。しかし、主は、あなたにそれをやってみる信仰を与えて下さるようです。

何年も前に、私たちがまだ隣の角の小さいチャペルにいた時、そこには小さいチャペルがありました。日曜日の朝の礼拝の後、若い人たちが車椅子のおじいさんを押しながら、前で私が立っている通路を通して連れてきました。その人たちは私におじいさんのために祈ってほしいと頼みました。おじいさんは車椅子に座っていましたから、当然私は、癒されて歩くことができるようになることを願っているのだと思いました。それで、私は、「主よ。あなたはすばらしい神です。何でもおできになる方です。私たちが強くとも弱くとも助けることができる方です。どうか、私たちを助けて下さい。この人に触れて下さい。助けて下さい。すべての名にまさる主イエス・キリストの御名によって・・・」というたぐいの祈りをしました。私が祈っている時に、この人を車椅子から立ち上がらせ、歩くように命じるようにとの強い促しと感触を受けました。それで私は、「アーメン。」と言うと、自分でも何をしているのかわかりませんでした。わかっていたら、やらなかったでしょう。私はこの人を立たせました。そして、「イエスの御名によって、歩きなさい。」と言いました。すると、その人は歩き始めました。私はとてもほっとしました。その人は通路を説教壇の方へ歩き、戻って来ました。孫たちは、とても興奮して逆立ちしそうになっていました。孫たちは、この人が歩けなくなって、5年以上もたっていたと言いました。「でも、風邪をひいたので、風邪がなおされるように祈ってもらおうと思っていました。」と言いました。私は、「なぜ、もっと具体的に言ってくれないんだ。」と思ってしまいました。なぜ私がそんなことをしたのか、みなさんに説明できません。ただ、そうするように、そうすれば主がそれを尊んで下さるという強い促し、衝動を受けました。その次の水曜日の夜は、感謝祭の前の水曜日で、家族と感謝祭を過ごすためにアリゾナ州チューソンにいました。チューソンにいるときに、その教会で語るように頼まれていました。礼拝の後、ある男性が車椅子に乗った妻といっしょに来ました。「妻は、脳溢血になりました。癒されて歩けるようになるように、牧師さん祈って下さい。」とこの人は言いました。無論、すぐさま前の日曜日の朝のことを思い出しました。私は彼女の上に手を置き、神が癒して下さるようにと祈りました。以前にした同じ祈りをしようと思いました。「何て、言ったっけ。」と思いながら・・・そして、私は、彼女の方を軽く叩き、「姉妹。神の祝福がありますように。続けて祈ります。あなたのために、続けて、祈ります。神は何でもできる方ですから。」と言いました。そして、その人の夫は車椅子を押し出ていきました。チャック・ジュニア(記者注:チャックの長男)が私といっしょにいました。彼は私の方を振り返って、「お父さん。なぜ、先の日曜の朝に男の人を車椅子から立たせたように、あの女の人を立たせなかったの。」と尋ねました。私は、「主が、そのようにする信仰を下さらなかったからだよ。」と言いました。

聖書の時代に、使徒の時代に、このような信仰が、全ての状況下で常にあったとは思わないのです。病院に行って、病院をからっぽにすることができたとは思わないのです。神の主権的な恵みと神の主権的な働きによって、特別な時に与えられたと思うのです。使徒たちが、遭遇したすべての病人を癒したとは思いません。実際、使徒パウロは、特別な信仰を持っていたようです。信仰の賜物と奇蹟の賜物を持っていたようです。パウロによって多くの奇蹟が行われました。エルサレムにある教会に対して証言した時に、パウロは、異邦人の間に神が行って下さった奇蹟について証言しました(使徒15:12参照)。また、エペソにおいては、パウロの汗拭きをとって、病人の上におくと、その人たちが癒されたことを思い出します(使徒19:12参照)。しかしながら、パウロ

に信仰の賜物があり、奇蹟を行う賜物があったにもかかわらず、パウロがテモテに胃病の薬の目的で、少量のぶどう酒を飲むようにと勧めているのを読みます(1テモテ5:23)。また、パウロがエパフロデトが死にそうな病にかかったと書かれています(ピリピ2:27参照)。トロピモを病気のためにミレトに残してきたとも書かれています(2テモテ4:20参照)。また、パウロが主に三度とって下さるように願ったパウロ自身の肉体のとげについても書かれています(2コリント12:7-10参照)。しかし、とげはとられず、その代わりに神の豊かで十分な恵みを受けました。ですから、いつでも出て行って、・・・というような信仰ではありませんでした。こうした賜物は、聖霊がみこころのままにそれぞれの人に与えてくださっているものであって、突如として癒しの賜物を与えられた賜物の人になって、あっちこっちへ行って、みんなを癒すことができる、あるいは、奇蹟の賜物を与えられ、あっちこっちへ行って、すべての状況について、奇蹟を行うのではないのです。特別な時、状況において、すべてが神の支配のもとにあつて、神が私たちをとおして聖霊の力を現わされます。それは、知恵のことばかもしれませんし、知識のことばかもしれませんし、特別な信仰かもしれませんし、人が癒されることをとおしてかもしれませんし、奇蹟を行うことをとおしてかもしれませんし、特定の時にあなたが直面している状況に従って、さまざまな現れがあります。

ヘロデが教会に対してその手を伸ばし、ヤコブを殺させたことが書かれています(以下使徒行伝12章参照)。それがユダヤ人の気に入ったのを見て、次の日に引き出して、無論処刑するためにペテロを牢に入れました。教会は、信仰のない祈り会をしていました。ですから、ペテロを牢から出したのは彼らの信仰ではなかったようです。しかし、主の御使いが現われ、ペテロに靴をはき、ついて来るように命じました。すると、門がひとりでに開きました。ペテロが通りに出ると、御使いがいなくなり、ペテロは突如として、これは夢ではないと気が付きました。「実際、牢から出ているんだ。」ペテロは夢だと思っていました。それで、ペテロは弟子たちが祈っていた家へ行き、門を叩きました。若い娘が出てきて、「どなたですか。」と尋ねると、「ペテロです。中にいれて下さい。」と言いました。この娘は、あまりに興奮して、祈り会をしている人たちのところに戻って、「ペテロが外にいます。」と伝えると、人々は、「あなたは気が狂っている。おばけにちがいない。ペテロであるはずがない。ペテロは牢の中にいるのだから。」と言いました。しかし、ペテロが戸を叩き続けると、人々がやってきて門を開きました。ですから、ヤコブは斬首され、ペテロは、御使いが来て、奇蹟によって救い出されました。だからと言って、ヤコブの方が信仰が少なかったからではありません。ペテロは、究極的にはさかさはりつけになりました。ですから、聖霊の賜物は、どんな困難やどんな病気やどんな問題からも、永遠にあなたを離すものではないのです。パウロは、ガラテヤ人に対して、自分が頻繁に病気になっていたことを話しています。目の病気があることをほのめかしています。彼らのパウロへの愛を証言して、「もしできれば自分の目をえぐり出して私に与えたいとさえ思ったではありませんか。(ガラテヤ4:15参照)」と言いました。しかし、神は、ご自身の主権による目的と主権によるみこころにしたがって、さまざまな時に、ご自身の力、栄光、能力を現わされます。そのような現われがあるときは、いつもワクワクし、興奮する時です。大事なことは、神がどのような形でもお望みになるような形で、神がご自身を現わされるように常に心を開いていることです。心を閉ざさないようにしましょう。神の働きの能力を、過去の歴史のある時点で

の出来事として済ませてしまわないようにしましょう。イエス・キリストは、きのうもきょうも、いつまでも、同じであることを認めましょう(ヘブル13:8参照)。イエス・キリストは、今でも主権的に御力を現わすことができます。奇蹟でも、癒しでも、信仰でも、何に対しても、ただ心を開いていきましょう。現わされる時には、喜びましょう。現わされない時は、疑うことはしないでおきましょう。ただ、すべてを主にゆだねてください。主権を持つ主がすべてをご存じだからです。私たちの道を主にゆだねましょう。ペテロは、「神のみこころに従ってなお苦しみに会っている人々は、善を行うにあたって、真実であられる創造者に自分のたましいをお任せしなさい。(1ペテロ4:19)」と言いました。神よ、あなたは真実な方です。これについては、計画をお持ちです。計画を実行されているのです。ですから、私は、主よ、自分をあなたにおゆだねします。このような経験をとおして、あなたが実行なさろうとしている計画におゆだねします。

癒しの賜物(#3067)

Gifts of Healings

コリント人への手紙第一12章9節をお開き下さい。パウロは、そこに、聖霊の賜物、あるいは現われを列挙していますが、前回私たちは信仰の賜物を見ました。その時、信仰の賜物が癒しの賜物と関連があることを指摘しました。「ある人には同じ御霊による信仰が与えられ、ある人には同一の御霊によって、いやしの賜物が与えられ」ます。

さて、聖書の歴史全体を通じて、神は癒す力を現されました。創世記17章(訳者注:20:17のことか?)において、神はアブラハムの祈りをお聞きになり、アビメレクと、その妻、はしためを癒されたことが記されています。また、神が、すばらしい癒しの約束をイスラエルの民に与えられたことを見ることができます。出エジプト15章26節で、神は仰せられました。「もし、あなたがあなたの神、主の声に確かに聞き従い、主が正しいと見られることを行ない、またその命令に耳を傾け、そのおきてをことごとく守るなら、わたしはエジプトに下したような病気を何一つあなたの上に下さない。わたしはエホバ・ラファ、あるいは主、あなたをいやす者である。」わたしは、あなたをいやす者である。エホバ・ラファ、つまり、私たちの癒し主です。申命記32章29節で(訳者注:39節のことか?)、神は仰せられました。「今、見よ。わたしこそ、それなのだ。わたしのほかに神はいない。わたしは殺し、また生かす。わたしは傷つけ、またいやす。わたしの手から救い出せる者はいない。」詩篇103篇3節で、ダビデが、神の良くして下さったことを話しているときに、彼はこう言いました。「主は、あなたのすべての咎を赦し、あなたのすべての病をいやし、」。そして、新約聖書では、ヤコブの手紙5章で、ヤコブはこう言いました。「あなたがたのうちに病気の人がいますか。その人は教会の長老たちを招き、主の御名によって、オリーブ油を塗って祈ってもらいなさい。信仰による祈りは、病む人を回復させます。主はその人を立たせてくださいます。(14、15節)」ですから、旧約聖書、新約聖書両方において、癒しの約束があります。再び旧約聖書ですが、モーセの祈りが聞かれて、アロンの姉ミリアムのらい病が癒されました(民数12:13-16参照)。ヒゼキヤは、死の床にいたところ、祈りの結果癒されました。興味深いことに、神はレビ記14章において、らい病がきよめられたときの教えを定められました。らい病は不治の病でしたが、神は、らい病患者をいやす機会を残し、社会に復帰する回復の方法を残して下さいました。「らい病人がきよめられるときのおしえは次のとおりでなければならない。その者を祭司のところに連れて来る。祭司は宿営の外に出て行き、調べて、もしらい病人のらい病の患部がいやされているなら、(レビ14:2-3)」。このように神は、らい病が癒される、あるいはきよめられる備えをして下さったのです。

そして、イエスの宣教を見ますと、病人のいやしがイエス・キリストの宣教の重要な要素を占めていたことは否めません。例えば、マタイの福音書4章23節といった箇所を読みますと、「イエスはガリラヤ全土を巡って、会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、民の中のあらゆる病気、あらゆるわずらいを直された。」とあります。そして、マタイの福音書9章35節には、「それから、イエスは、すべての町や村を巡って、会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、あらゆる病気、あらゆるわずらいを直された。」とあります。イエスが弟子たちを、御国を宣べ伝え、病人を直すために遣わされ

ました。それは、ルカ9章1節です。「イエスは、12人を呼び集めて、彼らに、すべての悪霊を追い出し、病気を直すための、力と権威とをお授けになった。それから、神の国を宣べ伝え、病気を直すために、彼らを遣わされた。(ルカ9:1-2)」どうも、イエスの宣教には、神の国を宣べ伝え、病気を直すことが入っているようで、ここではそれを弟子たちに命じておられます。「『旅のために何も持って行かないようにしなさい。杖も、袋も、パンも、金も。また下着も、2枚は、いりません。どんな家にはいっても、そこにとどまり、そこから次の旅に出かけなさい。人々があなたがたを受け入れないばあいは、その町を出て行くときに、彼らに対する証言として、足のちりを払い落としなさい。』12人は出かけて行って、村から村へと回りながら、至る所で福音を宣べ伝え、病気を直した。(ルカ9:3-6)」ですから、病気を直すことが、キリストの宣教の重要な部分を占め、また弟子たちの宣教においてもそうでした。使徒行伝に入りますと、使徒たちがイエスのことを語っていましたが、ステパノ(訳者注:ペテロのことか?)が証しの中でこう言いました。「すなわち、神がどのようにナザレのイエスに聖霊と力を注がれたかを(あなたがたはよくご存じです)。このイエスは、神がともにおられたので、巡り歩いて良いわざをなし、また悪魔に制せられているすべての者をいやされました。(訳者注:新改訳使徒10:38脚注参照)」と言いました。使徒行伝5章12節です。「また、使徒たちの手によって、多くのしるしと不思議なわざが人々の間で行なわれた。みなは一つ心になってソロモンの廊にいた。ほかの人々は、ひとりもこの交わりに加わろうとしなかったが、その人々は彼らを尊敬していた。そればかりか、主を信じるものは男も女もますますふえていった。ついに、人々は病人を大通りへ運び出し、寝台や寝床の上に寝かせ、ペテロが通りかかるときには、せめてその影でも、だれかにかかるとするほどになった。また、エルサレムの付近の町々から、大ぜいの人が、病人や、汚れた霊に苦しめられている人などを連れて集まって来たが、その全部がいやされた。」これは、イエスが昇天された後の事です。弟子たちを通して働いて下さっていた聖霊の力を通して、病人をなおす奉仕が継続されました。使徒行伝28章8節です。「たまたまポプリオの父が、熱病と下痢とで床に着いていた。そこでパウロは、その人のもとに行き、祈ってから、彼の上に手を置いて、直してやった。このことがあってから、島のほかの病人たちも来て、直してもらった。」ですから、旧約聖書においては、神のいやしが現されて、神が人々をいやす主であるとの宣言と約束がありました。新約聖書においては、イエス・キリストが宣教をされていたとき、この方の宣教の大きな特徴の一つは、病人をいやすことでした。それから、弟子たちに力が与えられ、彼らの宣教の重要な部分は、福音を宣べ伝えるときに病人を直すことでした。後にイエスが昇天されてから、弟子たちは出て行って神の国を告げ知らせましたが、この時も、いやしが人々への奉仕の重要な部分を占めていました。聖霊の賜物と神の不思議な現れが、使徒時代に終わったと言う人たちがいます。神が彼らに超自然的な力と驚くべき現れを与えられ、イエス・キリストに反発し、ほとんどがイエス・キリストを知らない世界に対して彼らが始めるのに、それが役立ったのだと言います。初めは、神学校や大聖堂がなかったので、最初は、彼らは少し後押しが必要だったと。しかし、今は、教育施設や組織がしっかりしているので、世にわかってもらうのに、もはや神の力の現れを必要としない。知性で説得できるし、弁証学があるので、イエス・キリストが必要であることを世にわからせることができる、と言います。これは、理論上は聞こえが良さそうな

のですが、実行しようとすると、実際にはそう上手くいきません。「癒しの奉仕 (Ministry of Healing)」という本を、アライアンス教団、その交わり、教派の創始者のA. G. ゴードンが書きました。この著書、「癒しの奉仕」の中で、初期教父時代からの教会史全体を取り扱い、教会史全体に癒しの賜物の現れがあったことを教え、多くの人が病気から癒され、多くの人が祈りを通して癒されたことについて、たくさんの方が書いていると述べています。ジョン・ウエスレーでさえ、多くの人が祈りを通して病気が癒されたことを見た経験があります。従って、教会史全体を通じて、ある人々の間では、癒しの現われがあったのです。ですから、使徒時代にそれが完全に終わったと言うことは、初代教会の教父が書き記したことを一部否定することになるのです。どうも、筋が通っていないように思えることは、創世記からの聖書の歴史全体を通じて、旧約時代と新約時代のどちらにおいても神がいやしを行なわれたのなら、病人を癒し、信仰の祈りに答えられたのなら、神が、突然、病人を癒されるのをお止めになったと言うのは、筋が通っていないように思えるのです。確かに、聖書的にも、歴史的にも、神が止められたとの証拠を確立することはできません。今日でも、神が人々に触れて下さることによって、その人たちが、どのような種類の病気からも癒され得ることを私は信じています。神は制限をお受けになる方ではありませんし、また、神がご自身を制限されているとは思いません。信仰の祈りの答えとして、癒されることができると私は信じています。

さて、私は、神が癒すことがおできになり、実際癒して下さることを信じていますが、誰もが癒されるのではないことも知っています。このことに関して、私は何の答えも、説明も持ち合わせていません。私はたくさんの方のために祈り、神はその中のたくさんの方たちを癒されました。私はたくさんの方のために祈り、その中のたくさんの方たちは、おなくなりになりました。ですから、もし、私がみなさんのために祈れば、みなさんの確率は、五分五分です！癒されるかもしれませんし、死ぬかもしれません。興味深いことに、癒しの賜物(訳者注:複数形 gifts of healings)について書かれています。あなたが祈ってもらい、癒されたのであれば、その時は、あなたは癒しの賜物(訳者注:単数形 a gift of healing)を受けたのだと私は信じています。実は、癒しを行なう者のことを話しているのではないのです。ただ、複数の癒しの複数の賜物なのです。ですから、多くの場合、神が触れて下さり、自分の体が癒された時に、私は自分自身一つの癒しの賜物を受けたのです。いつでも祈りが答えられて、神が触れて下さり、癒して下さるなら、ある意味で、一つの癒しの賜物を受けたのです。ただ、こうは言っても、神が癒して下さるという信仰を持つのを手助けする人々を、神がお用いになっていることも知っています。確かに、ペテロにはこうした信仰があり、神は大ぜいの人を癒すのに、ペテロをお用いになって、ついに、人々が、病人を運び出し、病人が直るようにペテロが通りかかる時の影にでもかかるようにしたほどでした。使徒パウロにも、信仰か何かがあって、パウロの奉仕の結果多くの人が癒されました。しかし、パウロはテモテに手紙を書いて、胃のために、また胃の病気のためにも、少量のぶどう酒を用いるように勧めました。パウロは、テモテのために神が彼の胃の病気を直して下さるように祈ったに違いないと思います。神が超自然的に彼を癒されなかった時に、パウロは、胃のために少量のぶどう酒を用いるように勧めたと思います。パウロは、エパフロデトが死ぬほどの病気にかかったことを話しています(ピ

リピ2:27参照)。トロピモが病気のために、旅行できないほどなので彼を残してきたことを話しています(2テモテ4:20参照)。パウロは、自分自身の病気のことも話しています。パウロは、肉体のとげと呼んでいました。サタンの使いが彼を打ったのです。彼は主に3度も願いました(2コリント12:7、8参照)。ガラテヤにいた時は、パウロは福音宣教のためベテニヤの方に行こうとしましたが、御霊がそれをお許しにならなかったと書いてありますが、パウロは病気が重かったので旅行できなかったのです(使徒16:7参照)。パウロの祈りと信仰に応じて、多くの驚くべき癒しがありました。パウロがエペソにいた時、身に着けている手ぬぐいや前掛けをはずして病人に当てると、その病気が去っていきました(使徒19:12参照)。多くの癒しはありましたが、すべての人が癒されたわけではありませんでした。

なぜ、ある人は癒され、またある人は癒されないのでしょうか。私にはわかりません。神癒について、私にはわからないことがたくさんあります。病人に触れる方法、触れる場所、身体言語(ボディランゲージ)の読み方等、多くの公式を作り上げている人がいるのを知っています。人によっては、癒しに関するセミナーまで開いて、多くの公式を作り上げている人たちがいます。面白いのは、そのような癒しセミナーを主催した人で、現在、重病にかかっている人がいることです。すべての答えがわかったと思っている時に、神はあなたに、すべての答えがわかったのではないことを教えて下さいます。そのようなものを公式化することはできないのです。聖霊の賜物について、再び読みますと、聖霊がみこころのままに、おのおのにそれぞれの賜物を分け与えて下さるのです(1コリント12:11参照)。聖霊が賜物を授ける主権を持っておられるのです。従って、癒しの賜物は、つまり、私が癒されるかどうかは、神の御霊の主権的な働きによるのであり、私たちは、どうすることもできないのです。神が、実際に癒しの働きをされないのなら、私たちは、どうすることもできないのです。誰にでも癒しをもたらすような魔法の法則をつくることはできませんし、またそのような法則は存在しません。実際、イエスがナザレにいらっしやったとき、人々の不信仰のために、特に驚くような奇跡を多くは行なわれなかったと書かれています(マルコ6:5、6参照)。おそらくその人たちは、不信仰のために、助けを求めてイエスのところに来ることができなかったのでしょう。しかし、すべての人が癒されたわけではないのです。パウロのように、「わたしの恵みは、あなたに十分である。(2コリント12:9)」ということ、私たちも認めなければいけません。

多くの場合、癒されない方が、癒されるよりも信仰を必要とすると私は思います。自分がまだ癒されていないのに、主を愛して信頼することは、単に癒されたよりも、さらに信仰を必要としたいと思います。それがさらに大いなる証しになっていることが多いのです。「私は祈って主にお願いました。主は癒すことができになることを知っています。神はまだ私を癒すことが適切であると考えておられないようだ。神は、私の病気について、ご計画と目的を持っておられるのだ。」と、私は言います。従って、私は、ただ神のご計画と御心に委ねます。神は、最善をご存知ですから、私はそこに安息を得ているのです。癒されないからといって、慌てたりしません。ただ、私は任せているのです。「神のみこころに従ってなお苦しみに会っている人々は、善を行なうにあたって、真実であられる創造者に自分のたましいをお任せしなさい。(1ペテロ4:19)」とペテロが言ったように、神にお任せするのです。しかし、「全てが御手の内にあり、神が最善であるをご存知であることをなさっ

ているのだ。」と言って、慌てることなく、つまり、苦闘するのでもなく、格闘するのでもなく、ただ、「私は神の御手の中にあり、神は最善をなさっている。」と言って、安息を得ることは、これには、ものすごい信仰が要求されるのです。

12章の終わりでパウロは、「みなが使徒でしょうか。みなが預言者でしょうか。みなが教師でしょうか。みなが奇蹟を行なう者でしょうか。みながいやしの賜物を持っているでしょうか。みなが異言を語るでしょうか。みなが説き明かしをするでしょうか。(1コリント12:29-30)」と尋ねています。明らかに、これは反語的な質問ですから、答えが、いいえ、であることは明らかです。みなが使徒ではないし、みなが預言者ではないし、みなが教師ではないし、みなが奇蹟を行なう者ではないし、みながいやしの賜物を持っているのではないし、みなが異言を語るのではないし、みなが説き明かしをするのではありません。

しかし、12章の最後の節で、「あなたがたは、よりすぐれた賜物を熱心に求めなさい。(1コリント12:31)」と私たちは教えられています。私は長年、奇蹟を行なう賜物と、信仰の賜物と癒しの賜物を熱心に求めていました。長いこと砂漠に行き、断食をし、祈り、神に、癒しと信仰の賜物を待ち望んでいました。若い頃、私は医者になるのを志していました。人類、人間の病気に興味がありました。病人を助けたいと望んでいました。病人に対し同情の念を持っていました。従って、神が私をみことばの奉仕に召して下さった時、依然として私は、祈りを通して人々を身体的な病気から助けることができると思っていました。御霊が、みこころのままに、おのおのにそれぞれの賜物を分け与えて下さることを知っていましたが、私が、それらの賜物を持つことが神のみこころであることを望んでいました。しかし、そのようなことは起こりませんでした。それで、私はこのことを神にただお委ねしました。しかし、それから26年後、いや、光陰矢の如しですね、28年後、私はラグナ・ビーチにある家で聖書の学びを導いていました。その家の人たちはチャーチ・オブ・クライストの人たちで、聖霊のテーマに関して、大変関心を持つようになりました。私はコロナに住んでいて、この学びのためにラグナ・ビーチまで通って行きました。月曜日のこの家庭集会の聖書の学びに、かなりたくさんの方が来ていました。ある晩、ニュー・エイジに深くかかわっていたラグナ・ビーチの婦人が何人かこの聖書の学びに来て、たいそう興奮していました。キャサリン・クルーマンがシュライン講堂で集会を開いていたのですが、彼女たちは、その前日にそこに行くためにロサンゼルスに行きました。彼女の奉仕を通して、何人かの方が奇蹟的に癒されるのを彼女たちは見ました。そこで見たことによって、彼女たちは深くかかわっていたニュー・エイジ運動から離れて、心からの回心を経験し、彼女たちは興奮していました。心からの回心を経験していました。主のことと、イエス・キリストの御力の現れを見たことに興奮し、そのことをしきりに話していました。彼女たちは余りにも変えられていました。劇的に変化していました。このことについて、主と長く主にお話ししていなかったのですが、その夜、車に乗ってコロナへ帰る途中、「主よ。私にも癒しの賜物、信仰の賜物さえあればいいのになと思うのです。あなたが本当に癒す力がおありであることを見て、人々が劇的に変わるのを見ました。」と言いました。主に対し、自分にもこれらの賜物を授けて下さるべきだと説得しようとしていました。私は主にこう言いました。「宣教の初めの頃、あなたが私にこれらの賜物を与えて下さらなかったのは、その頃また、私がそういった賜物を使いこなすことが

できなかったからだということがわかりました。しかし、もう私も成熟したと思います。たぶん今なら、よろしいのではないでしょうか。」すると、主が私の心にこう語られるのを感じました。「わたしは、あなたがわたしのことばを教えるためにあなたを召した。みなが教師ではない。みながいやしの賜物を持っているのではない。」と。それで、私は満足しました。神が可能にして下さり、賜物を与え、召して下さいたこと、つまりみことばを教えることを受け入れました。それで、10年間、主にそのことについて再び話すことはありませんでした。ただ、みことばを教えていました。しかし、15年ちょっと前、夕拝の後、この説教壇に立っていました。その礼拝では、神の御霊の美しい働きがありました。救いのために、大勢の人が祈禱室に行きました。残った人は、主への賛美(礼拝)を続けました。ここにいた人々の間に、美しい主の御霊の働きがあり、賛美(礼拝)が続きました。私はこの説教壇に立ち、その両端に手をかけて、主が祈禱室に行った人たちにして下さいたことに対する思いにふけていました。神の御霊の心地好い働きがあつて、神を賛美(礼拝)し、感謝を捧げていました。私は言いました。「主よ。あなたはここカルバリー・チャペルで、こんなにも多くのことをして下さいました。完璧な程の、興奮するミニストリーです。使徒時代の教会と、新約聖書の教会と照らし合わせると、おそらく、欠けているのはたった一つだと思います。それは、奇蹟の賜物と、癒しの賜物です。癒された人はたくさんいますし、たくさんの奇蹟を見ましたが、それでも使徒行伝で読むのとは違います。主よ、おそらく今なら、これらの賜物を使いこなすことができるかもしれません。」と。ここに立っていると、主が再び私の心に語りかけて下さり、今度は、こう言われました。「わたしは、さらにまさる道にあなたを召した。」パウロはここで、「あなたがたは、よりすぐれた賜物を熱心に求めなさい。」と言っていますが、私は、自分がそれを行なっていると思っていました。けれどもパウロは、「私は、さらにまさる道を示してあげましょう。(1コリント12:31後半)」と言いました。癒しの賜物や、奇蹟の賜物などよりもさらにまさる道です。つまり、それは愛の賜物です。なぜなら、「たとい、私が人の異言や、御使いの異言で話しても、愛がないなら、やかましいどらや、うるさいシンバルと同じです。また、たとい私が預言の賜物を持っており、またあらゆる奥義とあらゆる知識とに通じ、また、山を動かすほどの完全な信仰を持っていても、愛がないなら、何の値うちもない。(1コリント13:1-2参照)」からです。ですから、主は、「あなたをさらにまさる道に導いたのだ。」とおっしゃったのです。私が、どう言ったと思われるか。私は、ただ、主よ、ありがとうございます、と言いました。あなたの愛を示すために歩みます、と言いました。それ以来、そのことについて私は主に話していません。そのつもりもありません。さらにまさる道に導かれているのに、それに劣るところに行く必要はありませんね。

さて、私は今でも病人のために祈っていますし、病人のために祈ることを信じています。イエスの御名によって病人に手を置くことも信じています。油を塗ることも信じています。それは、聖書的なことだからです。ですから、私はそのようなことを行なっています。先程も言いましたが、癒される人もいますし、そうでない人もいます。そのことは、主におまかせしています。自分が、その人たちを癒すことができないことはわかっています。私は自分の限界を知っています。私が、そのような人たちに、深い同情の念を抱いたり、感情移入したりするかもしれませんが、癒すことはできません。神が、お癒しになることができるのです。しかし、自分の限界を私は認めます。私にでき

ることは、油を塗り、手を置き、神に癒して下さるよう祈ることです。しかし、そのあとは、神の領域です。私は、癒すことができません。また、私には信仰といったものを生み出すことはできません。神がなさるのであれば、生まれます。そうすれば、ハレルヤです。しかし、この癒しの賜物の多くの部分について、自分が理解していないことを告白します。

さて、パウロは、御霊の賜物について話しているとき、御霊の賜物にはいろいろの種類があり、働きにはいろいろな種類があることを話しています(1コリント12:4、6)。私は、こうした癒しの賜物のなかで、神は現代医学をお用いになることができるし、お用いになっていると信じています。神が多くの研究者に、人体についての多くの洞察力や知識をお与えになっているし、人体の化学組織を教え、病人を癒す薬をつくり、手術の方法をあみ出すのを助けて下さっていると信じています。それは、神が必ずや、病人に同情心をお持ちだと思ふからです。それは、確かに、イエスを通して現されています。もし、祈りだけを通して癒されないのであれば、手術をしたり、病人を助ける処方箋の薬を出す診断ができる技能を用意して下さい。これもまた、いやしの賜物が働いているのだと思います。病人を助けるために、神は人間の手段を用いることができになります。超自然的な手段も、そうでない手段も、用いられるのです。ですから、私は、一部の人たちのように、医者に対抗することはしません。神は医者を用いられると思います。しかし、また、例えば、医者は、腕の深い傷を縫合しますが、医者ができるのはここまでであり、肉をくっつかせ、癒されるのは、神です。依然として、癒しの過程で神のお働きがあります。医者は、自分の知り得ることをしているのですが、実際の癒しは、神から来るのです。従って、いやしの賜物は、神の癒しなのです。さて、イエスに関するイザヤの預言で、次のことを私は信じています。「まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みをになつた。だが、私たちは思った。彼は罰せられ、神に打たれ、苦しめられたのだと。しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。(イザヤ53:4-5)」神は預言の中で、イエスが私たちの罪のためだけでなく、私たちの病のためにも苦しまれたことを言われたと思います。イエスは、私たちの罪を負われただけでなく、私たちの病も負われたのです。「私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。」マタイは、イザヤ書のこの箇所を引用し、多くの人々がイエスによって癒される中で、その箇所を引用しています。マタイ8章16節です。「夕方になると、人々は悪霊につかれた者を大ぜい、みもとに連れて来た。そこで、イエスはみことばをもって霊どもを追い出し、また病気の人々をみなお直しになった。これは、預言者イザヤを通して言われた事が成就するためであった。『彼が私たちのわずらいを身に引き受け、私たちの病を背負った。』(マタイ8:16-17)」ですから、マタイは、この預言に言及して、イエスによる病人の癒しは、この預言の成就であると言いました。つまり、「彼が私たちのわずらいを身に引き受け、私たちの病を背負った。」のです。ペテロが第一の書簡を書いたとき、彼もこのイザヤ書の預言を引用し、「そして自分から(これはイエスのことです。)十字架の上で(訳者注:英語では、「木の上で」)、私たちの罪をその身に負われました。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるためです。キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされた(you were healed)のです。(1ペテロ2:24)」と書きました。

イザヤは、彼の傷によって、私たちはいやされた(you are healed)と言っていますが、ペテロは、イエスの打ち傷、むち打たれたことを振り返って、「キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされた。」と言っているのです。

イエスが十字架に連れていかれる前に、ピラトは、むち打つためイエスを兵士に引き渡しました。ローマがむち打った目的は、十字架刑の前に囚人から不当な自白を強いることでした。それは、拷問のような過程で、強制的に自白させるというものです。つまり、囚人を柱に縛り付けるのですが、その時、囚人の背中(腰から)曲げられ、(背中)伸ばされ、それから、九尾の猫むち(訳者注:9本のひもをつけたむちcat-o'-nine-tails)という、革製のむちで鉛やガラスのかけらが中にはめ込まれているむちで背中を打ち、それを引っ張ると、背中の肉が少しちぎれてしまいました。その目的は、囚人が犯した悪事を自白させるためでした。パウロは一度、このむちうちを受けそうになったことがありました(使徒22:24-29参照)。千人隊長は、パウロが何を言ったがゆえに暴動を引き起こしたのかを知ろうとして、「彼をむち打って取り調べて、何を言って暴動を引き起こしたかを調べなさい。」と言いました。彼らがむちを打とうとしたとき、パウロは、「ローマ市民である者を、裁判にもかけずに、むち打つてよいのですか。」と言いました。すると、彼らは、「あなたはローマ市民なのか。」と言いますと、パウロは、「そうです。」と言いました。これを聞いた百人隊長は千人隊長のところに行き、「あの人がローマ人であることをご存知ですか。」と言いました。それで、千人隊長は、パウロのところに戻ってきて、「あなたはローマ市民なのか。」と尋ねますと、「そうです。」とパウロは答えました。ローマ市民をむち打つことは不法だったので、彼らはパウロをむち打ちにしませんでした。けれども、イエスのことはむち打ちました。

さて、むち打ちは計画によるものでした。それは容易に証明することができます。その事実は預言されているので、計画によるものであることが示されています。そのように預言されている事実から、それが神の計画であったことが示されています。さて、問題は、神は御子が不必要な苦しみに遭うようにされたのかどうかです。この痛みをともなうむち打ちを受けると、あまりにも痛く、衰弱してしまうので、多くの囚人は、十字架にいく前に、むち打ちによって死んでしまいました。背中がハンバーガーのミンチ肉のようになってしまいます。それ自体に特別な意味がなく、またそのための特別な意味もないのに、神が、御子にそのような拷問を受けさせ、それを耐え忍ばせることをおゆるしになるようなことがあったでしょうか。もう一歩進みますと、イエスがパンを取って裂かれたとき、「これは、あなた方のために与える、わたしのからだです。」と言われました。それから、杯を取られて、言われました。「この杯は、あなた方の罪のために流されるわたしの血による新しい契約です。」(ルカ22:19-20参照)私たちはみな、杯のことを理解しています。私たちはみな、イエス・キリストの血によって、私たちの罪のために贖いがなされ、私たちの罪の代価が支払われたことを理解しています。ですから、私たちが杯を取るとき、私たちのためにイエス・キリストの血が流され、そのことを通して、私たちの罪が赦されたことを自覚しています。しかし、パンはどうでしょうか。私たちのために裂かれたイエスのからだは、どうなのでしょう。第一に、これが、折られた骨のことへの言及ではないことに気づき、それを認めています。というのは、聖書は、イエスといっしょに十字架につけられた者の骨は折られたが、イエスの骨は折られなかったと、明記してい

るからです(ヨハネ19:32-36参照)。それは、兵士がイエスのすねを折るために来たとき、イエスが既に死んでおられたので、すねを折らないで、わき腹を槍でつき刺し、血と水が出ました。しかし、もちろんそれは、「彼の骨は一つも砕かれない。」というみことばが成就するためでした。完全な犠牲の捧げ物であるためには、骨の折れた犠牲を神に捧げることはできませんでした。それで、イエスは、「これは、あなたがたのために裂かれた(訳者注:英語では、brokenとなっており、折られたという意味にもとれる可能性がある。) からだです。」とおっしゃられたとき、折られた骨に言及されたのではないはずです。イエスは、むち打たれることに言及されておられたようです。イザヤ書の預言に戻りますと、彼の打ち傷によって、みなさんはいやされたのです。パンを取って、「取って食べなさい。これはわたしのからだです。」と言われたときに、むち打ちのことを言及されているように見受けられます。繰り返しますが、神が御子に不必要な苦しみをお許しにならなかったことは、はっきりしています。イエスがむち打たれたことに、価値が、霊的な価値があったはずで、さもなくば、神は、そのようなことを決してお許しにはならなかったでしょう。イエスがむち打たれたことの価値は、実に彼の民のいやしのためであったのではないのでしょうか。パウロがコリントにいる人々に、彼らが多くの面で乱用をしていたことについて手紙を書いた際の乱用の一つは、主の晩餐にあづかることでした。パウロは、聖餐式の乱用を正すために手紙を書きました。彼らが恥ずべきやり方で食べていたことを話しました。そして、パウロは、続けてこう言いました。主のみからだをわきまえなかったので、「そのために、あなたがたの中に、弱い者や病人が多くなり、死んだ者が大ぜいいます。(1コリント11:30)」パンを裂き、「これはあなたがたのために裂かれたわたしのからだです。」と言ったとき、彼らは、みからだをわきまえなかったので、その結果多くの病人が出たのです。彼の打ち傷によって、あなたがたはいやされたのですということを知ってさえいけば、いやされていたらうとの推測ができます。聖書講解者の多くが、これは霊的ないやしについて言及されているのであり、すべてを網羅しているとは考えていないと言います。その可能性はあるかもしれませんが、それは十分な回答ではないと思います。イエスがむち打たれたことによって、私たちはいやしをいただくことができるようになった、と私は信じています。そして、打ち傷によって裂かれた主のみからだによって、私たちはいやされた、そのみからだを私たちはわきまえなければいけないと思うのです。

ですから、私は病人のために祈り続けています。そして、祈りに主が答えて下さり、主が多くの人に癒しの賜物(gifts of healing)を与えて下さることを、喜び続けています。癒しはあります。もし、私たちが主のみからだを理解するのなら、主が、私たちのためにむち打たれたとき、主がみからだに私たちの病気や疾病を負って下さったことを理解するのなら、さらに多くの人が癒されるであろうと信じています。

奇蹟の賜物(#3068)

Gift of Miracles

「初めに、神が天と地とを創造した。(創世記1:1)」もし、それを受け入れることができるなら、残りの聖書についても全く問題はないでしょう。と言うのも、それによって、正しい神の概念が与えられるからです。神は、知恵があり、全能で、力強く、宇宙全体を創造されたのです。それほどのことのできるくらい大きい神なら、何でもすることができるくらい大きいのです。奇蹟を受け入れるのに困難を覚える人がたくさんいます。それは、神を受け入れていないからです。彼らは、自然や自然現象の領域でしか考えないのです。思考過程から超自然的なことを除外してしまっているのです。このため、奇蹟の話をする、当然のことながら懐疑的になります。それは、神を信じておらず、奇蹟的な現われ、超自然的な現われを全て、合理化するか、否定せざるをえないからです。このために、聖書は実はヘブル人の神話である、と言う人がいるのです。ヘブル人たちの国民的英雄を作り出したのだ、と言います。ヘブル人の神話の中で、人々が、尊敬し、あがめることができる人物を確立しようとしたのだ。それで、モーセは、そういった寓話として作りあげられたヘブル人の一人で、モーセをめぐる多くの奇蹟的現われの話が生まれたけれども、現実的には、こうした現れのすべては、簡単に自然現象の結果として説明がつくものである、と言います。「衝突する世界(Worlds in Collision)」という著書の中で、アンドレイフ・ビロスコフスキーは、エジプト人に下った災いを、金星が地球に接近通過したことと関連づけようとしています。大気中の塵と芥によってナイル川が血のように赤くなった、と言います。神がエジプト人へ下された裁きの奇蹟を自然現象で説明しようとしています。

モーセの生涯には多くの奇蹟がありました。奇蹟を行なう賜物は、確かにモーセが持っていた賜物でした。エジプト人については、先ほど話したように、川が血に変わりました。川が血に変わり、はえがあり、エジプト人に腫物ができ、かえるがありました。かえるの災いについては、神がユーモアのある方だなあとと思います。かえるが寝床に入ったとありますから、寝床に入ったら、そこにヌルヌルしたかえるがいるのを想像できるでしょう。また、かえるがこね鉢に飛び込んだり、婦人がこねているパン生地に入っていったり…。また、もちろん、アロンの杖に花が咲いた奇蹟があります。それには、神がアロンとその家族を大祭司に承認されたことが示されています。また、モーセが打つと岩から水が出た奇蹟があります。そしてもちろん、イスラエルの国民がいつも振り返り、神がその民とともにおられることを認めるしるしでもあった偉大な奇蹟があります。イスラエルの子らが乾いた地を渡ることができるように、紅海が二つに分かれた奇蹟です。渡ろうとしたエジプト人は溺れました。紅海が二つに分かれたことを自然現象で説明しようとする人がいます。実際、それは紅海ではなく、葦の海で、実際は浅かったのだと言うのです。葦の海の場合は、風が一定期間吹くと、水が吹き寄せられて、深さがくるぶしくらいの高さにまでなる。実際、それは、とても浅く、風によって、くるぶしくらいの高さになった水位のところを渡ることができたのだ、と言います。しかし、それでは、海が両側に壁となったという聖書に書かれていることの説明にはなっていません。それに、奇蹟的なことを排除するものでもありません。もし、くるぶしくらいの水位の水

で、神がエジプト全軍をくるぶしくらいの水位の水で溺れさせることができたのであれば、相当な奇蹟です。

預言者エリヤは、この奇蹟を行なう賜物を持っていたようです。覚えていますか、エリヤが祈ると、3年間雨が降らず、その地方は大きな旱魃にみまわれました(1列王17:1参照)。エリヤが再び祈ると雨が降りました(18:1参照)。この旱魃の期間、エリヤは、あるやもめのところに行き、何か食べるものをくれるように頼みました(17:8以降参照)。この女は、自分と自分の息子に少しのパンをつくるだけの油と粉しかないので、それをつくって食べて死ぬつもりだ、飢え死にする、と言いました。エリヤは、まず自分のためにつくってくれと頼みました。それで女はつくりました。旱魃の期間中ずっと、かめの粉も壺の油もなくならず、旱魃の期間中ずっと奇蹟的になくなりませんでした。エリヤの祈りをとおして、子どもが生き返りました(17:22参照)。もちろん、カルメル山における、ベルあるいはバアルの預言者の挑戦の話思い出します(18:20以降参照)。そこに祭壇を築くが、火をつけないことになっていました。バアルの預言者は、自分たちの神に祈り、祭壇に火を付け、ささげ物を焼き尽くすことになっていました。エリヤが彼らをたしなめたり、ちょっかいをだして、「ひょっとするとおまえらの神は寝ているのかもしれない。休憩しているのかもしれない。もうちょっと大きな声で祈ったらいいのかもしれない。」と言い、彼らは一日中祈りましたが、何のこいもありませんでした。とうとう、彼らは自分たちに鞭を当てて、気がいじみてくるのをエリヤは見っていました。それでも答えがないので、さらにエリヤは、傷に塩を塗るかのように、祭壇の回りに溝を掘り、水を注ぐように、ささげ物にも全体に水を注ぐように命じました。エリヤは、さらに水をかけ、ささげ物は水浸しになり、水が溝を満たすまでになりました。そして、エリヤが、神に祈ると、神は火によってお答えになり、ささげ物、祭壇を焼き尽くし、その回りにあった溝の水も焼き尽くしました。それで、人々はひれ伏して、エホバが神であると認めました。かなりの奇蹟ですね。また、エリヤを捕らえて、監禁するために50人の部下とともに王から派遣された隊長に関する奇蹟がありました(以下2列王1:9-14参照)。彼らはやって来て、「神の人よ。王があなたを捕らえてくるようにと命じました。」と言いました。すると、エリヤは、「もし私が神の人なら、天から火が下ってきて、あなたと、あなたの部下50人を焼き尽くすだろう。」と言いました。そして、天から火が下ってきて、彼らを焼き尽くしました。3人の隊長にそのようなことが起きました。4人目は、もう少し頭を使って、「私には妻子がいます。私をあわれんで下さい。私は自分の仕事をしているだけです。申し訳ありませんが、どうか私といっしょに来ていただけませんかでしょうか。」と言いましたが、奇蹟がエリヤについてまわりました。

そしてもちろん、エリヤの死の直前には、エリシャがエリヤを追跡し、追いかけてきました(2列王2参照)。エリシャは、エリヤの霊の2つの分け前を求めていました。エリヤは言いました。「あなたはむずかしい注文をする。しかし、もし、私があなたのところから取り去られるときあなたが私といっしょにいるなら、あなたはそれを受けよう。」エリヤがヨルダン川まで来てモアブの地に入ろうとした時、エリヤは自分の外套を取り、それで川を打ち、水が分かれ、エリシャはエリヤの後について行きましたが、それからエリヤは天に移されました。外套はエリシャの上に落ちました。面白いですね、エリシャは、2つの分け前を求めましたが、聖書には、エリシャの人生でエリヤより2倍の奇蹟

が記されています。どうやら、エリシャは、2つの分け前を受けたようです。ヨルダン川に戻ってきたエリシャは、外套を取り、「エリヤの神は、どこにおられるのですか。」と言いますと、川が分かれ、エリシャは渡りました。また、貧しい女の油を増やしました(以下2列王4:1-7参照)。エリシャは、「どんなものがあるのか。」と尋ねると、女は、「油が少しだけしかありません。」と言いました。すると、エリシャは、「外に出て言って、隣の人みなから、借りれるだけ多くの器を借りて来なさい。そして、すべての器に油をつぎなさい。」と言いました。女は僅かばかりもっていた油を器につぎ、それを売り、生き延びることができました。エリコの水の源は癒されました(2:19-22参照)。水が実際に苦く、人々はエリシャに苦情を言いました。エリシャは、人々に塩を求め、それを水に入れると、水は癒されました。また、子供が生き返りました(4:18-37参照)。ナアマンはらい病からきよめられました(5:1-14参照)。そしてもちろん、預言者のともがらがヨルダン川のそばで家を立てていたことがあります(6:1-72参照)。みなさん、この話をおぼえていらっしゃるでしょう。そのうちの一人が、斧で木を切っていると、斧が外れて、ヨルダン川に落ちました。この人は、エリシャの所へ来て、「ああ。何と言うことだ。あれは借り物だったのです。」と言いました。エリシャは、「どこに落としたのか。」と言って、そこに一本の枝を投げ入れると、鉄製の斧の頭が泳ぎました。このように、エリシャの生涯にはすばらしい奇蹟がともないました。

そして、旧約聖書を読み進めると、イザヤをとおしてへゼキヤが癒されるというすばらしい奇蹟がありました(イザヤ38:1-8参照)。それは、神がヒゼキヤを癒される証しとして、日時計が戻った時のことです。そしてもちろん、新約聖書に移り、イエスの生涯において実に多くの奇蹟があります。ガリラヤのカナでの婚礼で、水がぶどう酒に変わったのを皮きりに(ヨハネ2:1-11参照)、それから、遠いところから王室の役人の息子を癒され(ヨハネ4:46-53参照)、ナインで、死んでいたやもめの息子をよみがえらせ(ルカ7:11-17参照)、死んだヤイロの娘をよみがえらせ(マルコ5:21-43参照)、そして、最後に、死んで4日間も葬られていたラザロをよみがえらせました(ヨハネ11:1-44参照)。また、イエスは、5つのパンと2匹の魚で群衆に食事を与え(マタイ14:15-21参照)、水の上を歩かれました(マタイ14:24-33参照)。すばらしい奇蹟が行われました。

さて、私たちは、ある一定の基本的な自然法則を知っており理解しています。そういった法則を観察し、体系化し、分類し、説明し、定義し、自然の法則のいくつかを理解しようとしてきました。磁気の法則、電気の法則、重力の法則です。こうした法則を利用し、活用し、私たちの便益のために使おうとしてきました。重力の法則の理解については、長いこと、物が地面に落ちることはわかっていました。なぜかはわかりませんでした。そうなることはわかっていました。むろん、ニュートンが、木からりんごが落ちるのを観察して、重力を理解しようしました。そして、物体が様々な高さから地面に落下するときの速度を測り、また、速度の増加率を測り、それらが落下する加速度を測りました。そして、さらに重力の法則についての理解が深まると、アインシュタインによる質量の引力の説明が出てきました。さて、私たちは一定の法則を知っています。それが宇宙においてどのように働くかを観察してきました。しかし、私たちはすべての法則を知っているわけはありません。神は、私たちが知りもしない自然の法則をご存じです。おわかりになるでしょうか、巨大な飛行機で、いろいろな積荷や乗客が搭載されているボーイング747型機が地上から離陸

することは、例えば、使徒パウロについて言えば、それは奇蹟でした。そんなことは起こり得ないことでした。そのような重いものを空中に浮かせることはできませんでした。しかし、私たちは空気力学の法則を学びました。エーロfoilの上を空気が流れると、浮力が働くことを学びました。このため、他の法則を利用することによって、私たちは見かけ上、重力の法則に対抗することができているのです。しかし、現実には、さらに高度な法則とでも呼びましようか、他の法則があって、それは重力の法則を否定するのではないのですが、それが働くと、見かけ上、重力の法則に対抗することができるのです。ですから、神について言えば、神は他の自然の法則や宇宙の法則をご存じで、そういった法則を働かせることができになります。そして、私たちがそういった出来事を見ると、「ああ、何たる奇蹟だ。」と言うのです。「それは、不可能だ。そんなことはないはずだ。」と言うのです。しかし、私たちはまだ知らないけれども、神がご存じで理解されている法則を用いられているだけなのです。ひょっとすると、いつの日か、私たちも、そういった自然の法則をよく知るようになり、現時点では、見て、「奇蹟だ。不可能だ。」と言っていることができるようになるかもしれません。さて、奇蹟を信じない人、純然たる自然主義者で私たちが理解する自然の法則しか信じない人は、イエスの奇蹟から、奇蹟的な、超自然的なものを排除しようとします。例えば、イエスが小さい男の子が持っていた5つのパンと2匹の魚で、どのようにして5千人の男とさらに女と子どもに食事を与えたかを説明しようとする、パークレーは、次のように述べています。「その当時、人々は裾までたれる長いゆったりした外衣を着ていて、それには、長い流れるような袖がついていて、袖口のまわりに紐、引き紐があって、袖の中に少しパンやチーズなど食べ物を持ち歩くことがよくあった。」それは、全く奇蹟でも何でもなく、イエスは、そうした袖をまくりあげさせる何かを持っていただけだという考えです。「だから、夜になって、人々が空腹になると、明らかに、何も食べるものがなく、そのような時間には荒野の地域において、何か買える可能性もないので、イエスが、『何かありますか。』と尋ねられたとき、みなはとても身勝手に、自分たちの袖はしっかりと閉じ、自分の食べ物をあげる気はさらさらなかった。しかし、かわいらしい男の子が自分の持っていた5つのパンと2匹の魚をイエスのところに持ってくるのを見ると、人々はこの小さい子の模範にとっても感動し、みな自分の袖をほどいて、自分たちの持っていたパンと魚を取り出したので、みんなが食べ、満腹した後に、かご12はいもの食べ残しが出たのだ。だから、ほんとうは奇蹟ではありません。ただ、小さい子の気前のよい模範に心が感動しただけです。何と、うるわしいことでしょうか！」弟子たちが船にいた時のことについて、パークレーはこのように説明しています。「風で、船は弟子たちが思っているよりずっと岸に近づいていた。だから、イエスが弟子たちの方に歩いて来られるのを見た時、弟子たちは水の上を歩いておられたと思った。波のために、イエスは水の上を歩いておられたように見えたのだが、実際は、イエスは岸を歩いておられて、弟子たちは舟を浜に乗り上げさせそうになっていた。だから、全く奇蹟でも何でもなく、ただ、イエスが水の上を歩いておられたように見えたただけだけです。」ですから、このように彼らは、聖書の奇蹟的な要素を排除して説明しようとします。そのようなことをする必要があり、そのようなことをしようとする唯一の理由は、その人の神概念にあります。どういうわけか、神概念がとても偏狭で限られているために、いま自分が知っていて理解している自然の法則の中でしか神は働くことができないと考

えて、神が自然の法則を創造し、形づくられたことを認識しないからです。もし、時が遅れて(主の再臨がもっと後になって)、科学がもっと発達すれば、もっと自然について、また、自然の法則について知るようになるでしょう。現在の私たちの知識の状態では、「不可能だ。奇蹟だ。」と言っていたことを将来はするようになるでしょう。しかし、もっと私たちが学ぶようになると、より高度な法則を学ぶようになると、やることができることに對し、びっくりし、驚嘆することでしょう。

さて、この奇蹟を行なう賜物は、使徒職の要件の一つであったように思われます。パウロがコリント人に手紙を書き、使徒の立場を擁護しましたが、コリント人への手紙12章12節で、「使徒としてのしるしは、忍耐を尽くしてあなたがたの間でなされた、あの奇蹟と不思議と力あるわざです。」と言いました。ですから、パウロは、自分がコリントにいるときに行った宣教における奇蹟を指し示し、実際、自分が使徒である事実に対する吟味のしるしとして使っています。したがって、初代教会における使徒職の要件の一つは、この奇蹟を行なう賜物を持っていることであったように思われます。

しかし、奇蹟を行なう賜物は、初代教会において使徒に限られていたのではないようです。イエスの御名を呼び求める者たちを投獄するために、使徒パウロがダマスコ途上にある時、パウロは主とお会いしました(使徒行伝9:1-19参照)。主がパウロに語りかけ、パウロにイエス・キリストに従い、パウロを宣教に召された時、イエスとお会いした結果、パウロは目がみえなくなり、他の人にダマスコまで導いてもらわなければなりません。さて、ダマスコには、アナニヤというあるイエスの弟子がいました。アナニヤは、使徒ではありませんでした。ただの、ひとりの弟子でした。しかし、主は彼に語りかけ、「『まっすぐ』という街路に行き、サウルという人を尋ねてシモンの家に入るように。彼は祈っているから。」と命じられました。すると、アナニヤは、「主よ。このサウルという人のことは聞いています。エルサレムにある教会でひどいことをしたことを聞き及んでいます。実に、彼はあなたの御名を呼ぶ者たちを投獄するためにダマスコに遣わされたのです。」と言いました。つまり、「主よ。ほんとうですか！」と言ったのです。しかし、主は言われました。「あの人は、わたしの選びの器です。彼がわたしの名のために、どんなに苦しまなければならないかを、わたしは彼に示すつもりです。」それで、アナニヤはパウロのところに行きました。そして、「兄弟サウル。あなたが再び見えるようになり、聖霊に満たされるように、主が私をあなたのところにお遣わしになりました。」と言いました。そして、アナニヤはパウロの上に手を置き、パウロは見えるようになり、聖霊に満たされました。ですから、ここでは単なる弟子が奇蹟を行なう賜物を用いています。

食卓に仕えるために選ばれた一人であるピリポは、キリストを宣べ伝えるためにサマリヤに行き、ピリポが行った奇蹟を見て、多くの人が信じ、バプテスマを受けました(使徒8:13参照)。また、初代教会で、食卓に仕えるために選ばれた7人の一人であるステパノですが、使徒行伝6章8節で、ステパノについて、彼は「恵みと力とに満ち」と書かれています。先に言いましたように、信仰の賜物が奇蹟を行なう賜物と関係しているようです。どうも、三つの賜物は一つになっているようです。つまり、信仰の賜物、癒しの賜物、奇蹟を行う賜物です。この3つ全ては関連があると思います。「ステパノは恵みと力とに満ち、人々の間で、すばらしい不思議なわざとしるしを行っていた。」ですから、使徒の立場となるには、この賜物を持つことが必要でしたが、初代教会で明らかに使徒

と考えられていなかった他の人たちで、この賜物を持っている人たちがいたようです。

さて、奇蹟を行なう賜物を持っている人にのしかかる危険があると思うのです。第一の危険は、この賜物を個人の便益のために用いることだと思うのです。これは、誘惑の時にサタンがイエスに大体示唆したことでした。おぼえていますか、イエスは、御霊に導かれて、荒野に行かれ、そこで40日間断食され、その後イエスは空腹をおぼえられました(マタイ4:1-4参照)。そこで、サタンがイエスのところに来て、「あなたは神の子なのだから(訳者注:チャックは、SINCE you are the Son of Godと言い換えています。)」と言いました。欽定訳では、「if(もし)」となっていて、直接法ではなく仮定法になっていますが、しかし、「あなたは神の子なのだから、この石がパンになるように、命じなさい。」ということなのです。つまり、あなたの奇蹟的な力を用いて、自分の身体的必要を満たしなさい、と言っているのです。ただ単に肉を満足するのに、それを使いなさい。おぼえていますか、イエスは、そのようなことをするのを拒否されました。「『人はパンだけで生きるのではなく、父の口から出る一つ一つのことばによる。』と書いてある。」と言われました。

旧約聖書では、らい病人ナアマンがきよくされましたが、彼は、自分がきよくされたことを知って奇蹟を見たとき、預言者エリシャのところに戻り、いやしの奇蹟に対する褒美と贈り物を与えようと思いました(2列王5:15参照)。ナアマンが経験した奇蹟に対して、エリシャは少しでも、報酬、褒美、便益を受け取ることを拒否しました。奇蹟を行なう賜物を持つことには、神の行われた事を個人の栄光として自分が取ってしまう危険があると思います。なぜなら、もし人が奇蹟を見て、その奇蹟があなたをとおして行われたようであるなら、人々はとかく、あなたをものすごく奉る傾向があるからです。力ある神の人かのごとく、あなたを畏敬の念をもって見ます。そして、人からのそのようなおべっかや驚嘆、畏敬の念を受けてしまう危険があります。神があなたをご自身の器として用いられる時、人々があなたを褒めちぎったり、賞賛しようとするのは、とてもばつが悪いものです。私は、実に神からかなり祝福を受けています。そのことを認めます。しかし、人々が私のところに来て、私のことを触って、「あなたのことを触ってもいいですか。」と言われたことが実際あります。私の犬をなでてやってください。なでてもらうと喜びますから。

ペテロが宮に入ろうとした時、生まれつき足のきかない男が施しを求めていました(以下使徒行伝3:1-16参照)。ペテロは、「金銀は私にはない。しかし、私にあるものを上げよう。ナザレのイエス・キリストの名によって、歩きなさい。」と言いました。そして、彼の右手を取って立たせました。するとたちまち、彼は力を得て、歩き始め、走り始めました。宮の中を走りました。すると、人々は、「見ろ。あれは、長年ずっとあそこにいた足のきかない男じゃないか。」「確かにそうだ。」「なぜ、あの男は歩いているのか。」「さあ、わからない。調べて見よう。」それで、人々はソロモンの廊までその男について行きました。ペテロはまだそこに立っていました。すると、男はペテロをつかまえて、抱き始め、もしかしたら口づけもしたかもしれません。ペテロに対するこの男の反応によって、彼らの回りに集まってきた人々はみな、この男がペテロのところへ向かって歩いている奇蹟を、ペテロによるものとしました。ペテロが見上げると、突如として、人々がみなペテロを見つめています。(訳者注:チャックはここで、驚嘆の溜め息としぐさをしています。)」わあ。こりや何だ。」すると、ペテロは言いました。「イスラエル人たち。なぜこのことに驚いているのですか。」叱責のようなもの

です。「あなた方はイスラエル人でしょう。イスラエルの神を礼拝する人たちでしょう。イスラエルの神は、奇蹟の神です。それなのになぜあなたがたは、このことに驚いているのですか。神は、奇蹟をなさる方です。そもそも神は、この宇宙を創造された方です。なぜあなたがたは、このことに驚いているのですか。」あるいは、「なぜ、私たちが自分の義によってこの足のきかない男に良い行ないをしたかのように、私たちを見つめるのですか。なぜ、あなたがたは、私がとても聖い者かのように見るのですか。」と言って、すぐさま人々にイエス・キリストを指し示しました。つまり、「あなたがたの支配者が十字架につけたイエス・キリストの御名によって行われたことです。そして、その方を信じる信仰のゆえに、この人を皆さんの目の前で完全なからだにしたのです。」と。ですから、人々は奇蹟のためにペテロをあがめようとしていました。人々からの栄光を受けないだけの知恵がペテロにはありました。今時の伝道師なら、献金袋を回したことでしょう。

パウロがルステラにいる時、また、40歳ぐらいの生まれつきの足なえで歩いたことがない男が（以下使徒行伝14:8-18参照）おり、パウロが説教をしていると・・・この見分ける賜物については、またお話ししますが・・・パウロは、この男が癒されるのに十分な信仰を持っていると見分けました。それで、パウロは、「兄弟。イエス・キリストがあなたを完全なからだにして下さいます。立って、歩きなさい。」と言いました。それで、男は立って歩きました。ルステラにいた人たちはみな、「神々が下ってきたのだ。」と言いました。それで、人々は、通りをかけてゼウス神殿まで行き、祭司をつかまえて、「あなたは、なぜこんなところにいるのですか。ゼウスは通りにいますよ。彼はヘルメスも連れてきました。」と言いました。それで、祭司は通りに雄牛を引っ張って来て、そこでパウロとバルナバに犠牲をささげようとしていました。人間の道理では、「ようし。彼らを手中におさめたぞ。我々が神だと思わせとけばいい。手玉にとってやれ。究極的には主に導くけれども、とりあえずは贅沢な生活ができそうだ。」と考えます。そこには危険があります。なぜなら、神の愛、恵みの働きを他の人の心の中で行うために神があなたをご自身の器として用いて下さる度に、とかく人々は、神ではなく器に対して応えたいと思ってしまうからです。神がしてくださったことにとても感謝しているので、神が用いられた器に報酬を与えたいと思います。したがって、個人的な野心がない、あるいは、個人的に栄光を受けることに関心がない状態に到達していないなら、神がそのような人に奇蹟を行なう賜物をお与えになるのは、最悪です。なぜなら、その人をだめにしてしまうからです。持っているのが容易な賜物ではありません。

さて、神は今日奇蹟をなさるでしょうか。あるいは、最後の使徒で、すべての奇蹟はなくなってしまうのでしょうか。これは、長年にわたり神学者の間でなされてきた議論のようです。でも、「神は今日奇蹟をなさるでしょうか。」という質問に対する私の回答は、無条件に「はい。」になると堅い信念を持っています。救いは、奇蹟の一つです。ある若い役人がイエスのところに救いを求めてきて、最後に彼が悲しそうに去って行ったとき、イエスは弟子たちの方を向いて、「金持ちが天の御国にはいるのはむずかしいことです。金持ちが神の国にはいるよりは、らくだが針の穴を通るほうがもっとやさしい。」と言われました（以下マタイ19:16-30参照）。ペテロは驚いて、「主よ。それでは、だれが救われることができるのでしょうか。」と言いました。そして、イエスの答えは、「それは人にはできないことです。」でした。ですから、奇蹟は人間的には不可能なことです。そうなら、

救いは奇蹟の一つです。なぜなら、自分で自分を救うことは人間的には不可能だからです。ですから、奇蹟の時代は終わったと言うなら、今日人が救われることを否定することになります。奇蹟の時代は終わってはいないことを、神に感謝します。神は、依然として今日も奇蹟を行って下さっています。

今日、奇蹟を行なう賜物を持っている人がいるのでしょうか。その可能性はあるかもしれません。私個人は、だれも正当にその賜物を持った人を知りません。だからと言って、今日、正当にその賜物が用いられていないというわけではありません。私がニューギニアに行ったとき、それに近い人、おそらく奇蹟を行なう賜物を持っている人に会ったことがあります。その女性は、とても質素な現地の若い女性でした。この女性の祈りについて、彼女の祈りを通して神がなさっていることの話の人々が私にしてくれましたが、この女性は奇蹟を行なう賜物を持っていた可能性が十分あります。彼女が目の見えない人のために祈ることで目が見えるようになったり、次々と奇蹟が起こり、どのように神が彼女を用いて下さったのかについて、かなり驚かされる証を聞きました。しかし、彼女は、ただとても質素な単純なニューギニアにいる現地の若い女性でした。

奇蹟を行なう賜物を持っている人がいる可能性はあると私は信じています。しかし、奇蹟を行なう賜物を持っていると人々に思わせる、いかさまたくさんあると思います。私にとって、ペテン師がまやかしの方法を使って、本当は持っていない力を持っているかのように人を信じさせるのは、また、自分に、また奇蹟を行なう中に、偉大な神の力があると信じさせようとするのは、常に悲劇的です。さて、このようなことをする人には、根拠があることが多いようです。人々の信仰を増し加えるのを助けることができる、と言うのです。結果が手段を正当化するという、昔からある論法です。しかし、そのような論法を裏付けるような聖書箇所はありません。作家でコラムニストでもある副牧の一人が、フィラデルフィアで開かれた、ある癒しの集会に行きました。癒しの列の最初にいた人は、年配の男性で、人々がその人を連れてきたときに、その人は酸素ボンベをつけ、チューブが顔につけられていました。そこで、伝道師が、酸素ボンベやチューブについて大袈裟に注目して、彼のために祈って、チューブを取り、酸素ボンベを取り外し、「さあ。通路を走りなさい。」と言いました。男は、通路を走り、また走って戻りました。伝道師は、「気分はどうですか。」と言うと、男は「壮快です。」と言いました。みんな興奮していました。その場は騒然としました。それで、レポーターであるこの私の友人は、礼拝の後、この夫婦が車へ向かっているとき、「ちょっと待って下さい。今晚起こったことについて、お話があります。」と言いました。すると、女性は、「ああxxx師は、・・・」と言って、その伝道師の名前を言って、「明日もレンタルしたいのですか。酸素ボンベとかを一式。」と言いました。友人は、「いいえ。私は、あなたに旦那さんのことについて、インタビューをしたかったのです。」と言いました。それが、ただ単にレンタルだったと判明しました。しかし、それは芝居でした。その人は以前に癒されたことがあったのですが、それを人々が信仰を建て上げるために演じたと言うのです。しかし、それはいんちきです。残念ながら、いんちきが多いのです。大抵その人たちの弁解は、人々の信仰を建て上げ、神が働かれるのを見ることができるようになっていると言うのです。しかし、それはいただけません。神がからくりを必要とされているとは思わないのです。神の御名のもとに、からくりを使うのはいただけません。神はおできになります。

私たちが何かすごいことなどをする必要はないのです。

ここカルバリー・チャペルで奇蹟を行なう賜物が用いられるのをとても見たいと思います。ここで長年奉仕してきたなかで、たくさんの奇蹟がありました。癒しの奇蹟がありました。すばらしい奇蹟がありました。否定できない奇蹟ですし、否定する気もありません。しかし、使徒行伝の教会に比べれば、全くおよびもつかないと思います。もう少し、近づきたいと思いますが、果たしてそうなるかどうかわかりません。主は、フィラデルフィアの教会に対し、「あなたがたには少しばかりの力がある。」とおっしゃいました(黙示録3:7-8参照)。私たちは、おそらくフィラデルフィアの教会としての資格はあるでしょう。少しばかりの力はあるのですが、大したものではありません。奇蹟の時代は終わったとは思いません。イエス・キリストは、きのうもきょうも、いつまでも、同じであると信じます(ヘブル13:8参照)。神がご自分の教会からこの奇蹟を行なう賜物を取り除かれると信じるのにつながる聖書的証拠は何もないと思います。また、私たちがこの奇蹟を行なう賜物を持っていないことが神のせいだとするつもりもありません。私自身がその非、非難に甘んじましょう。奇蹟を行なう賜物にまつわる悪評は、私には対処できないでしょう。個人的には、この会衆の中でさえ、この賜物を用いる結果の悪評を対処できる人はいないと思います。ひょっとしたら誰かいるかもしれませんが。そういう人がいることを祈ります。自分はその人でないことはわかっています。したがって、それは私たちの弱さであって、神が不承不承だからではありません。もし、誰かが私のところに来て、「本当に、奇蹟を行う賜物を祈り求めています。」と言うのなら、正直言って、心の中でその人の動機を、「なぜその賜物が欲しいのか。」と疑ってしまうでしょう。「人の心は何よりも陰険で、それは直らない。だれが、それを知ることができよう。(エレミヤ17:9参照)」そして、自分自身の心を知ろうとすると、…なぜかという、長年私は奇蹟を行なう賜物を欲しいと思っていましたが、自分の心の奥底で、この賜物がありさえすれば、どれほど人々が私に引きつけられて、教会はいっぱいになるだろう、アルファ・ベータ・マーケットで働いて生活費をかせぐ必要がなくなるだろうに、といつも思っていました。動機です。

主が来られる前に、この賜物が用いられるのを見ることあるでしょうか。その可能性はあります。私自身は、それに対して心を開いていたいのです。もし、神が適切だとお考えになり、聖霊が主権を持ってそれをお望みになるなら、教会でこの賜物が用いられるでしょう。私自身は、それを喜び、うれしく思うでしょう。そうなるかどうかは、神の御手にあるのであって、私たちの手の内にあるではありません。しかし、それは正当な賜物だと信じます。神が奇蹟をなさるのをおやめになったとは思いません。先にも言いましたように、余りにたくさんの奇蹟を見てきました。救いは神の奇蹟で、何百もの救いを、変えられた人生を見てきました。それがおできになるのは神のみです。神の御霊によって人生が変えられるとき、それは、私にとってはワクワクすることです。

今週、また青年のキャンプにまた行ってきました。とても、とても大きな祝福を受けました。今週、そこで、神が高校生のうちで奇蹟を行われるのを見ました。若者のために私たちが提供できる施設のことを、毎日神に感謝しています。この施設を神がどのように用いて下さっているのか、みなさん一人一人がそこに行って少し時間を過ごせたらいいのにと思っています。すでに何百人もの若者に触れて下さっています。昨晚、子たちたちに話をして、完全に自分を聖め別ち、キリストに

献身したい人がいるなら、私がそこにいるので、キャンプファイヤーのまわりまで降りて来てください、と言いました。300人以上の子供たちが泣きながら、神に自分をゆだねて降りてくるのを見ました。何とワクワクすることでしょう。何たる祝福でしょう。そして、その子供たちに賛美かの折り返しの部分を教えました。相当長くクリスチャンをしていないと、この折り返しはわからないでしょう。「毎日、一瞬一瞬を、神の望まれる人なりたいたいだけです、このクリスチャンとしての歩みの一歩一歩をイエスだけに完全にゆだね、ただ、陶器師の手の中の粘土ようになり、神のみこころを行いたいと思うのです、毎日、一瞬一瞬を、神の望まれる人なりたいたいだけです。(Only to be what He wants me to be, every moment of everyday, yielded completely to Jesus alone every step of this pilgrim way, just to be clay in the potter's hand, and willing to do what His will commands, only to be what He wants me to be, every moment of every-day.)」キャンプファイヤーのまわりで手を上げた子どもたちといっしょに主に向かって「毎日、一瞬一瞬を、神の望まれる人なりたいたいだけです、このクリスチャンとしての歩みの一歩一歩をイエスだけに完全にゆだね」と歌いました。ああ、そのキャンプで神はすばらしい不思議な方法で働いて下さっています。それを私たちは喜びます。私たちは喜びます。来週は、私たちの教会の高校生がそこに行きます。ですからみなさんに祈ってもらいたいのです。今週は、いろいろな所のカルバリー・チャペルの高校生が来ました。はるばるインディアナ州のクロフォーツビルから20人来ました。ラスベガス、パームスプリングス、レッドランド、北カリフォルニア、オレゴンから、子供たちがやってきました。すばらしい集まりでした。何たる祝福でしょう。何たる祝福でしょう。来週は、ここの教会の私たちの子供たちの番です。今週キャンプに来た子供たちは、ほんとうに主への熱心でいっぱいの子供たちでした。昨晚のキャンプファイヤーのまわりでの彼らの証を聞いて欲しいほどでした。互いに鼓舞していました。美しいです。子供たちの中には、ただ聖書を渡して、「やりなさい。」と言いたいほどでした。互いを鼓舞していました。とてもワクワクする、とてもワクワクする時間でした。神がなさっているこのことは奇蹟です。みなさんもその奇蹟に大いに参加しているのです。神が備えて下さったのは、みなさんの会議センターだからです。若者が完全にイエスに献身することを知る場所です。その場所から、実が、結果が生まれます。神が何をして下さったのか、合計するには永遠が必要です。私の心はいっぱいです。私の杯はあふれています。神は、すばらしい方です。

預言の賜物／1コリント12章10節 (#3069)

Gift of Prophecy/1Cor.12:10

コリント人への第一の手紙12章に列挙されている、聖霊の賜物を現われを見ると、パウロは預言の賜物について話しています。さて、すぐに気づくのは、預言の賜物が新約聖書で新しいものではないことです。つまり、預言の賜物は、聖書の歴史全体を通じて用いられてきました。預言とは、聖霊の油注ぎを通して、人が神のみことばを語ることです。ペテロは、「預言は決して人間の意思によってもたらされたのではなく、聖霊に動かされた人たちが、神からのことばを語ったのだからです。(2ペテロ1:21)」と伝えています。ですから、預言は、神がその民を養うための一環となってきたものです。聖霊の油注ぎを受けた男と聖霊の油注ぎを受けた女が、神の民に神のことばをただ語ったのです。

さて、私たちは、預言と言うと、何か将来を予言するようなものとして普通考えます。そういうこともあり得ます。神は将来を知っておられるからです。もし、神が語られるなら、将来を語ることもできます。けれども、いつも将来を予言するだけではありません。ただ、神の真理、神のみことばを語り告げることもあります。新約聖書では、旧約聖書の中で聖霊の油注ぎを受けて神のみことばを語った人々がいたことが認められています。詩篇の記者ダビデは、サムエル記下23章1節において、最後のことばの中でこのように述べています。「これはダビデの最後のことばである。エッサイの子ダビデの告げたことば。高くあげられた者、ヤコブの神に油そそがれた者の告げたことば。イスラエルの新しい歌。」ダビデの言ったことの引用です。「主の霊は、私を通して語り、そのことばは、私の舌の上にある。(23:2)」これは、ダビデの最後のことばの一つでした。「主の霊は、私を通して語り、そのことばは、私の舌の上にある。」これは、新約聖書で確認されています。使徒行伝1章16節で、ペテロがダビデを引用してこう述べています。「兄弟たち。イエスを捕らえた者どもの手引きをしたユダについて、聖霊がダビデの口を通して預言された聖書のことばは、成就しなければならなかったのです。」ペテロは、ダビデが聖霊によって語ったことを認めているのです。使徒行伝4章25節です。「あなたは、聖霊によって、あなたのしもべであるダビデの口を通して、こう言われました。『なぜ異邦人たちは騒ぎ立ち、もろもろの民はむなしことを計るのか。』」神は、ダビデの口を通して、「なぜ異邦人たちは騒ぎ立ち、・・」と語られました。ですから、ダビデのことばは聖霊によって油注がれていたことが認められ、認識されています。ダビデの詩篇を読んで、それが油注がれたことばであることを認めないで読むことは誰もできないと思います。さて、ダビデの詩篇の中には、予言的なものもあります。ダビデの詩篇の中には、来るべきメシヤの預言がたくさんあります。しかし、多くの詩篇は教訓的です。多くは祈りです。多くは、主への純粋な礼拝です。ですから、預言は、予言的であることもありますが、必ずしもそうではありません。

コリント人への手紙第一14章3節で、パウロはこう告げています。「ところが預言する者は、徳を高め、勧めをなし、慰めを与えるために、人に向かって話します。」さてパウロは、この預言の賜物について言及しています。異言の賜物とは異なり、— これについては再来週ぐらいの学びで勉強しますが、— 異言の賜物は神に語られているものです。預言の賜物は人に語られている

ものです。この預言の賜物を通じて、神が、人々や教会に対し、徳を高めるために語られています。「徳を高める」ということばは、建て上げられる、聖書的には、キリストとの歩みにおいて、キリストとの関係において建て上げられることです。ですから、預言の目的は、イエスにあって、御霊に属する事からにおいて、あなたを建て上げることです。また、預言は勧めのためです。私は、むしろ預言的な賜物ののっとして、勧めの賜物が存在すると思っています。それによって、行動を起こすよう勧められます。私たちに、知っていること、信じていることはたくさんありますが、それらに対し消極的な反応をします。祈るべきだとわかってはいるが、必ずしも祈らないのです。主を礼拝すべきだとわかってはいるが、必ずしも主を礼拝しません。忠実でなければいけないと知っているが、必ずしも忠実ではありません。ですから、祈るように、賛美するように、主を信頼するように、聖書が命じているように愛するように、教会に勧めるのです。金曜日の朝の礼拝に来られている女性の方々は私に同意して下さると思いますが、勧めはケイ(訳者注:チャックの奥さん)の賜物の一つです。ケイは、女性のみなさんをやる気にさせます。主が私たちに命じておられることを行うようにみなさんに勧めます。すばらしい勧めの賜物です。ロメインには、勧めの賜物があります(訳者注:カルバリー・チャペル・コスタメサの副牧。ここで、聴衆から爆笑が起こっていますが、ケイが優しく勧めをするのと対照的に、かなり厳しい勧めの仕方をするためです。それを、チャックは後で、「さあ、やれ。」のところで、説明しています。)。私には教えの賜物があります。私は原則を打ち出すことができます。しかし、実行するには、誰か「さあ、やれ。彼が言ったことを聞いだろう。さあ、やれ。」と言って、一押ししてくれる人が必要です。ヤコブは勧めの人でした。「みことばを実行する人になりなさい。自分を欺いて、ただ聞くだけの者であってははいけません。(ヤコブ1:22)」知っていることを実行するように、聖書を実行するように、私たちを行動へと駆り立てる人が私たちには必要です。ですから、預言の賜物が働いて、私たちに良い行ないに、賛美に、祈りに、礼拝に駆り立てます。

それから、預言の賜物は慰めのために用いることもできます。誰かが、試練、艱難、試み、困難に遭っているときの慰め、つまり、神が御座についておられるということです。主は、あなたの置かれている状況を理解しておられます、知っておられます。主は、あなたを見捨てたのではなく、あなたのことを見守っておられ、勝利へと導いてくださいます。慰めです。使徒パウロは、自分が与えることのできる慰めについて、このように書いています。「神は、どのような苦しみのときにも、私たちに慰めてくださいます。こうして、私たちも、自分自身が神から受ける慰めによって、どのような苦しみの中にいる人をも慰めることができるのです。(2コリント1:4)」かつて、ハンティントン・ビーチにマザー・バーという名の小柄な女性がいました。この人は、この慰めの賜物を持っていました。彼女はラジオ番組をやっていて、いつも番組を始める時に、「神は御座におられます。心配はいりません。」ということばで始めました。時に、私たちは神が御座におられることを忘れてしまいます。時に私たちは、手が付けられない状態にいると誤ってしまいますが、神が理解しておられる、神が知っておられる、神が支配しておられる、神は御座におられる、神が治めておられるという事実を思い起こし、慰めを受ける必要があります。神が支配しておられることを知って、慰めを受ける必要があります。

さて、預言の賜物は、新約聖書ではアガボという名の人によって用いられました。アガボが用いた賜物は、どちらかと言えば、予言的に用いられました。使徒行伝11章には、28節ですがこう書かれています。「その中のひとりでアガボという人が立って、世界中に大ききんが起ると御霊によって預言したが、はたしてそれがクラウデオの治世に起こった。」世界中に大ききんが起ることが、アガボによって予言されました。使徒行伝21章で、パウロがエルサレムに行く途中カイザリヤに来て、カイザリヤにある伝道者ピリポの家でピリポに会っていましたが、8節にこう告げられています。「翌日(私たちパウロの一行は、)そこを立って、カイザリヤに着き、あの7人の一人である伝道者ピリポの家にはいつて、そこに滞在した。」7人の一人とは、使徒行伝の最初のほうで、教会の福祉の管理について議論になった時に、食卓に仕えるために選ばれた7人の一人という意味です。そして、「私たちはそこに滞在した」つまり、いっしょに過ごした。「この人には、預言する4人の未婚の娘がいた。」彼女たちには、預言の賜物がありました。「幾日かそこに滞在していると、アガボという預言者がユダヤから下って来た。」使徒行伝11章で、大ききんを予言したのと同じ人です。「彼は私たちのところに来て、パウロの帯」つまり、ベルト「を取り、自分の両手と両足を縛って、『この帯の持ち主は、エルサレムでユダヤ人に、こんなふう縛られ、異邦人の手に渡される。』と聖霊がお告げになっています。』と言った。」ですから、どちらの場合も、アガボの預言の賜物が予言的な性質をもって用いられています。

使徒行伝13章です。1節からです。「さて、アンテオケには、そこにある教会に、…預言者…がいた。」さて、エペソ人への手紙4章で、いろいろな賜物を見ると、使徒がおり、伝道者がおり、預言者がおり、牧師・教師がいました(エペソ4:11参照)。預言は、教会の奉仕の一つであったようです。それは、預言者の奉仕、預言的な賜物をもった人でした。ですから、「アンテオケには、…預言者(prophets)…がいた。」複数です。「バルナバ、シメオン、ルキオ、マナエン、サウロなどという預言者や教師がいた。」ですから、これらの人たちはみな預言の賜物を持っていたようです。そして、こう書かれています。「彼らが主を礼拝し、断食をしていると、聖霊が、『バルナバとサウロをわたしのために聖別して、わたしが召した任務につかせなさい。』と言われた。」さて、聖霊はどのように、「バルナバとサウロをわたしのために聖別しなさい。」と言われたのでしょうか。その前の節で、これらの人たちに預言の賜物があったことが言及されているので、それは預言による発言によるものであり、その発言によって、神はパウロとバルナバを特別な奉仕のために聖別するよう導かれたことは間違いありません。「そこで彼らは、断食と祈りをして、ふたりの上に手を置いてから、送り出した。」それで彼らは、第一回伝道旅行に出て、福音をキプロスや小アジアに伝えたのでした。ですから、聖霊が語られたのは預言の賜物が用いられることによってであり、それが初代教会の活動を導いたに違いありません。パウロがテモテに手紙を書いた時、パウロはテモテに、聖霊の賜物を軽んじてはいけぬ、と言いました。こう言いました。「長老たちによる按手を受けたとき、預言によって与えられた、あなたのうちにある聖霊の賜物を軽んじてはいけません。(1テモテ4:14)」ですから、テモテが長老たちの前に来て、彼らがテモテの上に手を置き、彼が自分の奉仕を全うするために主が与えられる賜物を示す預言のことばがあったのです。ですから、預言は、神がどのような賜物を与えられているかを定義することで初代教会を導いて、重要な役

割を果たしたのです。

さて、新約聖書では、預言の賜物を用いることについて、ある一定の規則がありました。女にのみ当てはまる規則が一つありました。それは、「女が祈りや預言をするとき、」ピリピの娘たち、4人の娘たちが預言をしたことを思い出して下さい。終わりの時の約束ですが、こうあります。「その後、わたしは、わたしの霊をすべての人に注ぐ。あなたがたの息子や娘は預言し、・・・(ヨエル2:28)」神のことばを語るのです。女が預言の賜物を用い、女が神のことばを語ることについて、なんの禁止もありません。コリントの教会で唯一禁じられていたのは、パウロが、「女が、祈りや預言をするとき、頭にかぶり物を着けていなかったら、夫をはずかしめることになります。(1コリント11:5参照)」と言ったものです。パウロは、女はかぶり物を着けるように提案しています。けれども、彼は、すべての教会においてそのような規則があるのではない、と述べています(11:16参照)。それは、コリント地域にある状況を対処しているようです。パウロは、妻は夫に従い、夫は主に従う、主が父に従うという命令系統について語り、「女が、祈りや預言をするとき、頭にかぶり物を着けていなかったら、夫をはずかしめることになります。(1コリント11:5参照)」と言っています。パウロは何のことを話しているのでしょうか。コリントの町は非常に邪悪な町でした。実際、放蕩の極致のようにされていた場所でした。「コリント人のような生活をしている」と言うと、その人は、放蕩、遊興、酩酊、底抜け騒ぎをしていました。それは、非常に邪悪な町として知られていました。そこは、基本的に東と西が交わる港町でした。東から商品をのせたローマ行きの船がコリントに来て、船から荷が下ろされ、商品はそこにあった2マイル(約3.2 km)の地峡を運ばれ、そこで再度ローマ行きの船に載せられました。ですから、そこには港がありました。ここを通過して行く水夫がいました。その場所は、風紀がとて悪かったのです。そして、コリントの丘の上は城砦になっていて、その上には愛の女神のアフロディテの神殿がありました。夜になると、千人のアフロディテの女祭司が町の中まで降りて来ました。彼女たちは売春婦でした。町じゅうにいたので、そこコリントでは売春が横行していました。それとわかるように、彼女たちはかぶり物をしませんでした。ですから、かぶり物をしていない女は、売春婦と考えられていました。このため、男が近づくことができました。一方、女は一般的に、習慣ではかぶり物をしていました。ですから、パウロは、「女が、祈りや預言をするとき、頭にかぶり物を着けていなかったら、夫をはずかしめることになります。」と言っているのです。しかし、繰り返しますが、すべての教会にそのような習慣はありませんでしたが、パウロは、公に教会で預言の賜物を用いるときには、コリントの女性にはそれを適用しました。11章16節で、「たとい、このことに異議を唱えたがる人がいても、私たちにはそのような習慣はないし、神の諸教会にもありません。」とパウロは述べています。

さて、預言の2つ目の規則は、この礼拝を適切に秩序をもって行うことです(1コリント14:40参照)。神は、混乱の神ではありません(14:33参照)。不信者の応答や反応を念頭に入れて、礼拝を行わなければなりません。もし、教会全体が一か所に集まって、信者でない者がいる時に、もしみんなが立ち上がって異言で話すなら、信者でない者は去って行き、「彼らは気違いだ。」と言わないでしょうか(以下1コリント14:23-25参照)。しかし、もしみんなが預言をするなら、人々の心の秘密があらわにされます。そうして、彼らは立ち去り、神が確かに彼らの中におられると言うでしょ

う。それは、預言の賜物が用いられることによって、人々の心の秘密があらわにされたからです。しかし、それは秩序をもって行われなければなりません。「預言する者も、ふたりか三人が話し、ほかの者はそれを吟味しなさい。(1コリント14:29)」預言やその発声は、見かけは主の御名によって行なわれます。ペンテコステ派の人たちの間では、「主は仰せられる」と言って、預言を始める傾向がよくあります。また、預言の本文自体の中に、「主は仰せられる」をちりばめることがよくあります。また、「主は仰せられる」と言って預言を終わることもあるかもしれません。さあ、主は、本当にそう告げられたのでしょうか。神がすでに告げられたことと一貫しているのでしょうか。私たちは預言を吟味する必要があります。ただ受け入れればいいのではありません。もし、私があなただの所に行って、「兄弟。主が私にあなたのことをお示しになっています。主は、あなたに宣教師としてアフリカに行ってもらいたいのです。」と言うなら、「ああ、主が私をアフリカに召しておられる。」と言って出発するのではなくて、自分でそれについて主に聞いた方がいいです。自分で主を求める方がよいです。あなたの心にあかしが与えられているか、判断してください。

面白いのは、よく人が私のところに来て、「チャック。どうも主は、私に語られたようです。あなたは、こうすべきです。ああすべきです。」と言うことがあります。面白いのは、それが、私が自分の心の中で、本当に主が私にしてほしいことがどうかじっくり考えていたものだったりするのです。ですから、確認のようなかたちで与えられることがあります。他にも、私のところに人が来て、「主は、こう言われた。ああ言われた。」と言ったりするのですが、そういうのは、「とんでもない。それは受け入れられない。」と言います。いろいろと人を罪に定めるようなことを言うのです。「主は仰せられる」と言って、「あなたは人々を迷わせている…云々。」と。私は、「ちょっと待って下さい。」と言います。聖書は、「罪に定めようとするのはだれですか。(ローマ8:34)」という質問をしています。「死んでくださった方、いや、よみがえられた方であるキリスト・イエスが神の右の座に着き、私たちのためにとりなしてくださるのです。(ローマ8:34)」もし、あなたが主の御名のもとに私をさばくなら、イエスはこう言われました。「わたしは、さばくために来たのではなく、救うために来たのです。(ヨハネ3:17参照)」ですから、誰かが私をひどくさばくようなことをするために来るなら、相手にしません。イエスは私をさばくために来られたのではなく、私を救うために来られたのです。ですから、教会で預言するとき、吟味が必要です。

そして、「もしも座席に着いている別の人に黙示が与えられたら、先の方は黙りなさい。(1コリント14:30)」つまり、秩序をもって行いなさいということです。他の人にも余地があります。面白いのは、人が話しているとき、御霊が私の思いの中で語られていることを、詳細に説明しはじめることがよくあります。事例を与えてくれたり、語られたことを詳細に説明してくれます。場合によっては、招いた説教者の場合、主が私に語りかけ、ある部分を詳細に説明されたら、私は後で立ち上がって、その点を取り上げて、御霊が私の心に詳細に説明されたように詳しく説明します。ですから、「先の方は黙りなさい。」なのです。「あなたがたは、みなかわるがわる預言できるのであって、…。」つまり、秩序をもってするのです。みなが一斉に立ち上がって、預言しはじめるのではないのです。それでは、大混乱になってしまいます。そうではなく、「あなたがたは、みなかわるがわる預言できるのであって、すべての人が学ぶことができ、すべての人が勧めを受けることができるのです。(1

コリント14:31)」ですから、預言は教える方法として用いられました。さて、まだ、異言までいっていませんが、ちょっと言うておきましょう。異言が、教会において、教える手段として用いられたことはありませんでした。なぜなら、異言は人にではなく、神に語られるものだからです。霊が神の奥義を語っているのです(1コリント14:2参照)。しかし、預言は、教会において訓練のために用いることができます。預言の賜物は学びのためにあり、そしてみなが慰められます。そして、「預言者たちの霊は預言者たちに服従するものです。(1コリント14:32)」これに留意してください。「言わざるをえなかった。」と言う人がいますが、いや、そんなことはありません。預言者たちの霊は預言者たちに服従するものです。神の御霊は、あなたを支配して、ロボットのようにして、強引にあなたに何かをさせるようなことはなさいません。預言者たちの霊は預言者たちに服従するものです。これについては、異言のテーマを学ぶときにもっと詳しく学びます。「ですから、もし教会全体が一か所に集まって、みな異言を話すとしたら、初心の者とか信者でない者とかがはいって来たとき、彼らは、あなたがたを気遣いだと言わないでしょうか。しかし、もしみな預言をするなら、信者でない者や初心の者がはいって来たとき、その人はみなの方によって罪を示されます。みなにさばかれ、心の秘密があらわにされます。そうして、神が確かにあなたがたの中におられると言って、ひれ伏して神を拝むでしょう。(1コリント14:23-25)」

さて、預言の賜物を用いるとき、その信仰に応じて用いるように教えられています。ローマ書12章6節では、「私たちは、与えられた恵みに従って、異なった賜物を持っているので、もしそれが預言であれば、その信仰に応じて預言しなさい。」とあります。さて、神からの賜物はみな、信仰によって受け取って用いられるものだと思っています。考えや着想が心に浮かんだとします。そして、あなたはそれが、聖霊の感応による考えだと信じて、その考えを他の人に話したいと思ったとします。それは、自分の持っている信仰に応じてします。もしそれを、神からの預言の賜物だと示唆するようなやり方でやっているなら、他の人たちは、実際それが本当に神からのものであるかどうか吟味しなければなりません。吟味の根拠は、もちろん、それが、聖書の内容と一貫性があるかどうかです。聖書全体の内容と一貫性があるかどうかです。神は、預言でも靈感でも何でも、書き記されたみことばに反するようなものをお与えになることはありません。多くの人が、「主は仰せられる」と言って、神がすでに告げられたことに反することを言う間違いを犯します。神のみことばは永遠に確立されています。既に書き記されたみことばと矛盾するような、それに反するような啓示を神が与えられることは一切ありません。ですから、預言が神からのものかどうかを吟味するのに、この神のみことばがフィルターになります。すでに語られたみことばのフィルターを通過するのでしょうか、どうなのでしょう。

さて、聖書は繰り返し繰り返し、自分の考えなのに主の御名によって語る者に対して警告しています。それが横行しているのではないかと危惧します。毎週、「主は仰せられる」という類いの手紙を3、4通くらい受け取ります。その中で、自分自身の考えを表明しているのです。エレミヤ書14章14節は、こう告げています。「主は私に仰せられた。『あの預言者たちは、わたしの名によって偽りを預言している。わたしは彼らを遣わしたこともなく、彼らに命じたこともなく、語ったこともない。彼らは、偽りの幻と、むなしい占いと、自分の心の偽りごとを、あなたがたに預言しているの

だ。」かなり厳しいです。神は、自分の考えや自分の着想を、不遜にも神の御名によって語っている人たちを非難しておられます。イエスは、繰り返し繰り返し、偽預言者についての警告をされました。山上の説教の中で、マタイの福音書7章15節では、「にせ預言者たちに気をつけなさい。彼らは羊のなりをしてやって来るが、うちは貪欲な狼です。」と言われました。マタイの福音書24章11節では、終わりの時に起こる出来事の予言をされている中で、「にせ預言者が多く起こって、多くの人々を惑わします。」と言われました。イエスは、「『主よ。主よ。』と言う者がみな天の御国に入るのではない。(マタイ7:21参照)」と言われました。イエスは、マタイの福音書24章24節で、「にせメシヤ、にせ預言者たちが現れて、できれば選民をも惑わそうとして、大きなしるしや不思議なことをして見せます。」と言われました。ヨハネは、「愛する者たち。霊だからといって、みな信じてはいけません。それらの霊が神からのものかどうかを、ためしなさい。(1ヨハネ4:1)」と私たちに警告しています。そして、「なぜなら、にせ預言者がたくさん世に出て来たからです。(1ヨハネ2:18参照)」と述べています。ですから、霊をためしなさい。吟味し、調べなさい。それがあなたの義務です。

エゼキエルを通して、神は私たちにこう警告されています。「神である主はこう仰せられる。自分で何も見ないのに、自分の霊に従う愚かな預言者どもにわざわいが来る。(エゼキエル13:3)」律法の中で、神は申命記13章でこう告げられています。「あなたがたのうちに預言者または夢見る者が現われ、あなたに何かのしるしや不思議を示し、『さあ、あなたが知らなかったほかの神々に従い、これに仕えよう。』と言っても、その預言者、夢見る者のことばに従ってはならない。あなたがたの神、主は、あなたがたが心を尽くし、精神を尽くして、ほんとうに、あなたがたの神、主を愛するかどうかを知るために、あなたがたを試みておられるからである。(13:1-3)」彼らは、みことばに矛盾することをしようと言っていますね。しるしを示したり、あなたの思いを読み取るかもしれません。あなたの名前を言い当てるかもしれません。あなたの住所を言い当てるかもしれません。先週あなたに起こったことを言い当てるかもしれません。もし、その後、彼らが、「イエス・キリストは神への唯一の道ではない。私たちが神へ到達する道はたくさんある。」と言うのであれば、あなたがみことばに真実であるかどうか、神はあなたを試みておられるのです。私たちの信仰や行動について、みことばを最終的権限にするかどうか、神はあなたを試みておられるのです。

申命記18章22節には、「預言者が主の名によって語っても、そのことが起こらず、実現しないなら、それは主が語られたことばではない。その預言者が不遜にもそれを語ったのである。彼を恐れてはならない。」とあります。場合によっては、彼らはみなさんを脅して恐れさせます。「兄弟。気をつけた方がいいですよ。先週わたしはある男に預言をしましたが、彼は私を笑いましたが、立ち去ったとき倒れて死にました。」こういうやからを恐れることはありません。ミニストリーを始めて間もない頃、私は次のような経験をしました。偽りの教えを信じていた人たちがいて、その人たちは、その偽りの教えを私が会衆に信奉させるようにすべきだという確信を抱き、土曜日の夜に私のところにやって来て、私について預言を始めました。黒い棺があって、私の中に入ったと言うのです。神が私を打って殺される。もし、私が彼らの教えを信奉しなければそうなる、と。私は恐れませんでした。家に戻って、「私は死ぬのだろうか。ああ、どうしよう。」などと言ったりしませんで

した。私には神のみことばがありました。面白いことに、その預言をした男は、2週間のうちに死にました。彼は、棺の中の顔を見まわがただけした。彼の預言は正しかったのですが…。神のみことばは、何物よりも、与えられるかもしれない預言よりも、優れていることを決して忘れてはなりません。パウロは、このように言いました。「私たちであろうと、天の御使いであろうと、もし私たちが宣べ伝えた福音に反することをあなたがたがたに宣べ伝えるなら、その者はのろわれるべきです。(ガラテヤ1:8)」神のみことば、これが全てを測る基準となるべきです。最後に、エレミヤはこう言いました。「夢を見る預言者は夢を述べるがよい。しかし、わたしのことばを聞く者は、わたしのことばを忠実に語るなければならない。麦はわらと何のかかわりがあるだろうか。—主の御告げ。—(エレミヤ23:28)」あなたがやって来て、自分の幻と夢を語ってもかまいません。私は割引して考えたりはしません。神は確かに、幻と夢によって語られるし、語ることができると思います。しかし、神は私たちに、みことばによって語られます。幻と夢は、神のみことばに比べると、麦に比べるわらのようなものです。私たちを養い、強めるのは、神のみことばです。わらは窒息させるかもしれません。けれども、神のみことばは、あなたを支え、あなたを養います。

聖書は、「預言をないがしろにははいけません。(1テサロニケ5:29)」と教えています。面白いことに、預言の賜物は、ここ、私たちの教会で何度も用いられてきました。私の説教の多くは、預言の賜物を用いることです。何年も前に、私たちの祈りの仲間が私の上に手を置き、預言が与えられました。しかし、その当時は、ただ夢かもしれないもの、全く現実ではないものでした。主は、私に与えようとされていた将来のミニストリーについて語られました。その背景にあったのは、17年間ミニストリーをしてきていたのですが、挫折感をおぼえていました。何も起こらなかったからです。私がやり続けていたのは、神が私を召しておられることを知っていたからでした。ミニストリーに挫折感を覚えていました。その預言とは、神が私のミニストリーを祝福されることであり、私をたくさんの群れの羊飼いにしてくださるというものでしたが、その当時は途方もないことでした。しかしながら、神はそれを成就されました。主は、私に新しい名前を下さると言われました。その名は、羊飼いという意味でした。それは、神が私をたくさんの群れを飼う羊飼いにしてくださるからでした。

ここ、コスタメサに集まっていた仲間が、…カルバリー・チャペルの仲間ですが、私がここに来て牧会をするように招聘することに決めました。私はその招きを受け入れました。その後、彼らは、私に電話をしてきて、「来なくていいです。解散しますから。」と言いました。私は、「もう、ここをすでに辞任しました。どっちにしろ、来ますから。」と言いました。彼らが祈っているときに、神がカルバリー・チャペルを祝福されるという預言を与えられました。集会をしていたチャーチ・ストリートにある小さな教会は、来る人みなを収容するには十分でなくなるので、湾(ベイ)を見下ろす崖の上にある新しい教会に移転しなければならなくなる。そして、その教会は全米のラジオミニストリーをするようになり、世界中に知られるようになる、というものでした。余りにがっかりしていて、もう解散しようとしていた12人のグループにとっては、旧約聖書で、王がもたれかかった男のようなものでした。その男は、「たとい、主が天に窓を作られるにしても、そんなことがあるだろうか。(2列王7:2)」と言いました。それは、全く途方もないことのようにでした。私たちがそこへ来て、牧師となり、即座に教会を改造するようになる、と彼らは言いました。面白いのは、最初の日曜の礼拝の後、

みんなでいっしょにお昼を食べに行きました。そんなに小さい群れだったのです。シズラーというレストランに座って、教会の改造計画を打ち出しました。みんな興奮していました。私にはなぜかわかりませんでした。それから一年ほどたち、小さい教会では手狭になり新しい建物を捜しました。すると、コスタメサのベイ・ストリートに物件が見つかりました。そこは不十分でしたが、なんとかできると思いました。そのとき彼らは私に預言のことを伝えてくれました。「いや。教会は、崖の上の湾(ベイ)を見下ろすところはずだ。」と。私は、「預言は、…考えやアイデアが思い浮かびそれを表現するのですから…私たちは、ベイ・ストリートを見下ろすことになります。」と私は言いました。彼らは、「いや。湾を見下ろすところだ。」と言いました。コスタメサ市がベイ・ストリートの物件の条件付き使用許可を拒絶すると、私たちは市の企画部に行き、提出したすべての私たちの企画書を受取に行くと、女性従業員は、…ベイ・ストリートのは良い物件だったので私たちは教会をすでに売っており、引っ越さなければなりません。ですから、私たちは行き場がなくなりました。私たちは、新しい教会を建ててそこに移れると思っていたのですが、教会を売ってしまったので出なければならなくなりました。成長しつつある教会があつて、牧師が会衆を頭越しに教会を売却してしまつて、いったい何たる牧師を招聘したのかと思うだろう、と私は考えていました。それで、私たちは企画書を取りに入ると、その女性は、「ひょっとすると私たちの教会に移れるかもしれませんよ。」と言いました。彼女は、「州が高速道路のためにそれを購入し、私たちは新しい教会を建てますから、おそらく私たちの教会を入手できますよ。」と言いました。彼女は言いました。「それは、ニューポート・ハーバー・ルーテル教会で、崖の上にあつて湾を見下ろすところにあります。」と言いました。それで、私たちは、崖の上にあつて、湾を見下ろすところにあるルーテル教会に2年いました。私たちは、1ブロック離れたところにチャペルを建てていました。それから、私たちはラジオ放送をしました。一つ一つ預言が成就していきました。預言は、とてもがっかりして、解散しようとしている人たちに慰めとして与えられました。預言は、慰め、勧め、徳を高めるためだからです。預言の賜物は、今日においても正当な、有効な賜物であると信じています。預言する者は、神がその人にお与えになる信仰に応じて預言します。

霊を見分ける力(#3070)

Gift of Discernment

パウロが御霊の賜物の様々な現われを列挙していますが、コリント人への手紙第一12章10節で、「ある人には霊を見分ける力」を述べています。私たちの住む物質の世界と、全く同じく現実的な霊の世界が存在します。科学者は、原子には固体の物質以上に空間があると言います。水素の原子は、1個の陽子と1個の電子で構成されており、電子が陽子の回りを回っています。そこには大きな空間があり、もし、陽子を野球のボールに拡大したとしたら、電子はおよそビービー球(訳者注:おもちゃの鉄砲の銀球よりふた回りくらい小振り)の大きさになりますが、陽子のまわりを秒速1万マイルで回転しています。けれども、その間隔は10マイル相当になります。それほどの空間が水素原子にはあります。それは、質量の直径の3万倍です。さて、もし、地球が陽子で、月が電子だったとして、地球と月の間隔が、水素原子の陽子と電子の間隔と同じだったとしたら、月は今の地球との距離より30倍遠くにあることになります。失礼。現在よりも千倍遠くにあることになります。もし、あなたの体の原子が突然みな崩れるとしたら、すなわち、固体物質の間の空間がなくなると、相当すごい顕微鏡を捜さなければ、あなたを見つけることができなくなるでしょう。あなたは、超微小な塵になってしまいます。問題は、今と同じ体重であることです。科学者は、原子の密度について話をします。地上の原子より密度が高い矮星が存在することがわかっています。シリウスと呼ばれる一等星があります。1888年に、それが実際は二重星であることが発見されました。それは、狼星(Dog Star)とも呼ばれます。二つのうちの小さい方はパップ(訳者注:pupは子犬の意味。)と呼ばれ、矮星で、大きい方の星のまわりを回転し、宇宙で軌道を描いて回っています。しかし、このシリウスB星やパップの密度が非常に大きいので、シリウスの一立方インチは、1,750ポンド(794.5 kg)の重さになると言われています。さて、別の星で、メイネンと呼ばれる星があります。その星は、シリウスB星よりさらに密度が高いのです。一立方インチは、12.5トンの重さです。もし、この星からの隕石が地球に衝突したとします。それが、歩道の小石の一つだと思って、それを歩道のわきに寄せるため蹴ったとします。その星と同じだけ密度が高く、依然としてガス状で、固体の部分の間にはかなりの空間があります。固体の部分は、無論、陽子と中性子、というか、そうではなくて電子です。原子にはそれだけたくさんの空間があるので、理論上は、二つの世界が同時に同じ場所に存在することが可能です。両方が相互に通過し、両方が互いの存在を意識せずにいることが可能なのです。二つの世界が空間の同じところで同時に、相互に通過し、互いに相手の存在を意識しないで共存するためには、その二つが、異なる分子構造になってさえいけばよいのです。

さて、ある意味において、聖書が教えているのはそのことです。二つの世界が共存し、互いに通過しあい、ほとんどの場合、私たちはもう一つの世界の方を意識していないのです。しかし、聖書は、そのもう一つの世界の方は、私たちのことをとても意識していると教えています。霊の世界、霊の次元は、異なる分子構造で成り立っています。おそらくイエスのからだ、復活されたイエスのからだは、異なる分子構造だったのでしょう。なぜかと言うと、弟子たちが部屋の中に集まってい

て、戸が閉じられていて、錠がかけられていましたが、突如としてイエスが部屋に現われ、弟子たちといっしょにおられました。ですから、この霊の世界は、とても現実的な世界なのです。そして、私たちの生活全般に大きな影響力を及ぼします。良い影響力もありますし、悪い影響力もあります。聖書は天使について、「主は、あなたのために、御使いたちに命じて、すべての道で、あなたを守るようにされる。彼らは、その手で、あなたをささえ、あなたの足が石にうち当たることのないようにする。(詩篇91:11-12)」と教えています。天使について、このように告げられています。「御使いはみな、仕える霊であって、救いの相続者となる人々に仕えるため遣わされたのではありませんか。(ヘブル1:14)」そして、私たちは、聖霊とその私たちへの影響が良いものであることに気づいています。罪を気づかせ、私たちをイエス・キリストのもとに引き寄せて下さいます。私たちをイエスの似姿につくり、形作って下さるのは、聖霊の素晴らしいわざと影響です。しかし、もう一つ、霊の存在の世界があります。それは、あなたがキリストの内に歩むのに反対するものです。こういった霊の存在は、とてもあなたに悪い影響を及ぼします。使徒パウロが書いているように、「私たちの格闘は血肉に対するものではなく、主権、力、この暗闇の世界の支配者たち、また、天にいるもろもろの霊の力に対するものです。(エペソ6:12参照)」ですから、戦いがあります。それは霊的な戦いで、私たちはみな、この霊的な戦いを体験します。こうした力や暗闇の霊は、私たちが神の御霊にしたがって歩もうとすると、実に問題を引き起こしうるのです。

さて、悪霊については、光の御使いとして来ることができるのです。ですから、人は、悪霊にだまされることがありうるのです。聖書は、悪霊が、「光の御使いに変装するのです。その手下どももそのように変装するのです。(2コリント11:14参照)」と教えています。だから、霊を見分ける賜物が必要なのです。さて、大丈夫そうに見える人で、言うことも大丈夫だし、見ていると正しいことをしているようだが、どうもしっくりいかない、という人に会ったことはありませんか。自分でははっきりとできない、説明することができないけれど、その人の近くにいるとどうも落ち着かない、という人に会ったことはありませんか。それが見せかけだったと、後でわかったということはありませんか。主との歩み、主との関係が現実にはなかった。それで、その人の近くにいたときに、なぜどうも落ち着かなかったのか理解できた。それが、霊を見分ける賜物が働く方法です。何かどうも変だ。実体はないのだが、必ずしも指摘することができない。霊を見分ける力を持っていることについて難しいことの一つは、霊を見分ける力のない人が、なぜそんな騙されやすいのか理解できないことです。余りに簡単に、余りに明らかなので、「わからないのか。」と言いたくなります。

エペソの教会においては、この霊を見分ける力の賜物が働いていたようです。黙示録2章で、イエスがエペソの教会に対して語られているからです。イエスは、エペソの教会が、使徒として自称しているが実はそうでない者たちをためして、その偽りを見抜いたので、彼らを褒められています。でも、霊を見分ける賜物の最も典型的な用い方は、おそらく使徒行伝8章に見られるものと考えられます。そこでは、ピリポがサマリヤに行って、キリストを宣べ伝えると、真のリバイバルが起こりました。多くの人たちは奇蹟を見て、信じて、バプテスマを受けました。その奇蹟は、ステパノが行なった、いや、ピリポが行ないました。信じてバプテスマを受けた人の中に、シモンという名の人がありました。この人は、ピリポが来るまでは魔術師であり、人々からひとかたならぬ畏敬の念を受け

ていた人でした。人々は、シモンに神の力があると考えていました。しかし、シモンは奇蹟を見て、ピリポが行うことのできた奇蹟に驚き、信じてバプテスマを受けました。そして、このように書かれています(以下使徒8:14以降参照)。「エルサレムの教会は、サマリヤの人々が福音を受け入れたと聞くと、ペテロとヨハネを彼らのところへ遣わした。聖霊がまだだれにも下っておられなかったからである。」この人たちはまだ、解放されて、あふれ出て、流れ出る、多くの人が聖霊のバプテスマと呼んでいるものを受けていなかったのです。それで、ペテロとヨハネが来て、サマリヤの信者の上に手を置くと、彼らは聖霊を受けました。さて、このシモンは、ペテロとヨハネが手を置き、聖霊がサマリヤの信者に与えられるのを見ると、シモンはこの力が欲しいと願いました。文脈から、シモンがペテロとヨハネにお金を払うと言い出したことは明らかです。この力を買おうとしたのです。手品師の世界では、どうやって、そのようなことをしたのかのトリック(タネ)の売買が行われています。多くの手品のトリック、どういうふうに行ったのかの秘密は売買されています。手品師は、別の手品師からトリックを買います。この慣行は、互いに手品をするようになって以来ずっと続いています。どういうふうに行ったのかの内部情報の売買です。明らかに、シモンにとって、これはそういうふうなものでした。シモンはかつて魔術をしていて、人をだまし、欺いていました。見掛けは魔法というトリックをしていました。さて、ここにシモンがはっきりわからないものがありました。ペテロとヨハネがしていたのは、人々に手を置いているだけでしたが、人々は聖霊の賜物を受けていました。それで、シモンは、「自分もやってみたい。どうやればできるのですか。そのタネには、いくら払ったらいいのかね。」と言いました。

そこで、ペテロは彼に言いました。8章20節です。「あなたの金は、あなたとともに滅びるがよい。あなたは金で神の賜物を手に入れようと思っているからです。あなたは、このことについては何の関係もないし、それにあずかることもできません。あなたの心が神の前に正しくないからです。(8:20-21)」ペテロは、その人の霊を読み取っていました。シモンは、救われた人々と仲間になって、従ってバプテスマを受けましたが、そこでピリポとともにいましたが、彼の心は神の前に正しくありませんでした。それで、ペテロは言いました。「だから、この悪事を悔い改めて、主に祈りなさい。あるいは、心に抱いた思いが赦されるかもしれません。(8:22)」ですから、ここでペテロは、彼の持っていた霊が正しくないと判断したときに、彼の心が正しくないと判断したときに、霊を見分ける賜物を用いていたのでした。そして、彼に悔い改めを勧めています。というのも、「あなたはまだ苦い胆汁と不義のきずなの中にいることが、私にはよくわかっています。」と述べているからです。シモンが、心の奥底で妬みを持っていた可能性が大です。かつて彼に注がれていた注意が、かつて彼がこの人々に対して持っていた力が、ピリポの方、またピリポが説いていたイエス・キリストに向けられてしまっていたからです。ですから、もし、この力を買取ることができるなら、再び人々を自分の思いどおりにできる思ったのです。しかし、彼の心には苦みがありました。苦い胆汁と不義のきずながありました。

さて、聖書全体で、霊が神からのものかどうかを、ためしなさいと教えられています。世界に預言者が出ましたが、神からの預言者ではない人がたくさんいます。ですから、私たちが霊を見分ける賜物を持つことは重要です。エベソの教会のように、霊をためすことができるようになるため

です。もし、誰かが来て、使徒だと主張したなら、私たちに霊を見分ける力があり、偽り者かどうか判断できます。偽預言者について、聖書全体を通じて、警告されています。神の御名によって来て、神のみことばを語っているとされている人がいるけれども、神は、わたしは遣わしておられない、わたしはこの者たちによって語っていないと言われて、自分たちは神から来ているという彼らの言葉を否定しておられることが多いのです。これは、ある意味で葛藤です。なぜなら、今日、かなり悪名高くなっている偽預言者がたくさんいるからです。神の群れの羊飼いとして、私は、こうした偽預言者について、神の群れに警告をすることに責任を感じています。ただ、問題はこうです。実名や、出来事、その人が偽預言者だという証拠を話した途端に、必ず、弱い人たちが気分を害して、「xxx兄弟に対して、何でそんなことが言えるのですか。私は、彼の奉仕によって祝福を受けました。手を延ばしてテレビに触れた時に、私は癒されました。(訳者注:癒しを行うテレビ伝道師のこと。)

私は、ずっと彼の支援をしてきています。」と言うのです。ですから、時には霊によって、時には観察によって、時には手に入った情報によって、貴方がわかっていることや理解していることを人々に警告するのは難しいことです。

何年も前にチューソンで牧会をしていた時に、私たちの教会に来た伝道師がいました。この人は、神の群れから金をだまし取っていました。神が私に世話するように与えられた群れから金をだまし取っていました。私はその当時まだミニストリーに入りたてで、実は、牧会を始めて2つ目の教会でした。しかし、ケイ(訳者注:チャックの奥さん)も私もこの人が、ただ群れから金をだまし取っているだけだ、とわかっていました。若干の霊の見分けの力もかかっていますが、他にも大きな手掛かりがありました。この人がどうしても必要な新しい靴のために祈っていた時、9サイズで黒の翼型のつまさきの靴だと言いました。次の日の夜、親切な教会員の一人がその靴を持ってきた時、その人は、「ハレルヤ！」と言いました。私は、『『ハレルヤ！』と言わないで下さい。その人に感謝しなさい。みんなあなたの祈りを聞きましたよ。』と言いました。この人の説教は、とてもユーモアに富んだものでした。それで、多くの人がこの人を信用していました。しかし、明らかに、この人は人々からだまし取っていました。ただ、人々はそれに気づいていませんでした。教会にある長老がいて、— どれほど昔の話かこれでおわかりになると思いますが — その当時テープの録音が始まったころでした。それ以前は、ワイヤー録音機でした。小さいワイヤー上に録音がされていました。しかし、ワイヤー録音業界はあまり長く続きませんでした。短命に終わりました。なぜなら、ほどなくテープ録音機が出たからです。しかし、この人はワイヤー録音機を持っていました。それは機能していませんでした。それに、急速に陳腐化してしまいました。この人は、最先端のテープ録音機を買いたいと思っていました。この長老はこの人を自宅に夕食に招きました。とても素晴らしい親切なことです。ところが、この伝道師は、自分の持っていたワイヤー録音機についていろいろ話をし、良い値段で譲ると言いました。実際は、良い値段なんかでは全然なかったのですが、あたかも良い取引であるかのように言いました。それで、その夜、礼拝の前に、その長老は、「あの伝道師が話してくれて・・・彼のワイヤー録音機を買うことにしたんだ。」と言いました。私は、「気をつけられた方がいいですよ。機能しませんから。もう、陳腐化していますから、おそらく修理部品を手に入れることができないでしょう。」と言いました。すると、この長老は、教会の人たちに、私が

伝道師に嫉妬していると言いふりました。私は若く、伝道師は、年配で技能があるし優れた説教者だから、私は嫉妬している、と。およそ一か月後に、この長老は私のところに来て、こう言いました。「あの録音機を修理に出しているのだが、部品が手に入らないと言うんだ。どこか部品を入手できる場所を知らないかい。」私は、「だから言ったでしょう。」と言いました。先ほども言いましたように、霊を見分ける賜物の難しいところは、自分には全く明らかなことなのに、他の人にはそれがわからないことです。

さて、イエスは、マタイの福音書でこのように警告されています。「にせキリスト、にせ預言者たちが現われて、できれば選民をも惑わそうとして、大きなしるしや不思議なことをして見せます。(24:24)」だからこそ、霊を見分ける賜物を持っていることが、非常に重要なのです。にせ預言者かどうかを、その人の言うことで判断することが必ずしもできないからです。多くの場合、彼らの言うことは99パーセント正しいのです。だからこそ、彼らは非常に危険なのです。必ずしも彼らの行動で判断することはできません。ここで、イエスは、彼らが大きなしるしや不思議なことをして見せる、と言われていました。ペテロは、第二の手紙でこう警告しています。「しかし、イスラエルの中には、にせ預言者も出ました。同じように、あなたがたの中にも、にせ教師が現われるようになります。彼らは、滅びをもたらす異端をひそかに持ち込み、自分たちを買い取ってくださった主を否定するようなことさえして、自分たちの身にすみやかな滅びを招いています。そして、多くの者が彼らの好色にならい、そのために真理の道がそしりを受けるのです。また彼らは、貪欲なので、作り事のことばをもってあなたがたを食い物にします。彼らに対するさばきは、昔から怠りなく行われており、彼らが滅ぼされないままではあることはありません。(2:1-3)」ここに鍵があります。「作り事のことばをもってあなたがたを食い物にします。」あるいは、あなたのことを金銭的に利用します、ということです。作り事のことば、あるいは、偽りのことばをもって、おべっかなどをもってです。彼らの、真の目的はあなたを食い物にすることです。パウロは、テモテに手紙を書き、「違ったことを教え、私たちの主イエス・キリストの健全なことばと敬虔にかなう教えとに同意しない人がいるなら、その人は高慢になっており、何一つ悟らず、疑いをかけたり、ことばの争いをしたりする病気にかかっているのです。そこから、ねたみ、争い、そしり、悪意の疑りが生じ、また、知性が腐ってしまって真理を失った人々、すなわち敬虔を利得の手段と考えている人たちの間には、絶え間のない紛争が生じるのです。(1テモテ6:3-5)」と言いました。敬虔が利益の道だと教える人はにせ預言者であると、パウロはそういった人たちを警戒するように私たちに教えています。

さて、旧約聖書に、霊を見分けることをしないことの危険性を、おそらく最も良く私たちに警告している典型的な話があります。それは、列王記第一13章にあります。ヤロブアムが北王国のイスラエルの王であったときのことです。ヤロブアムは悪い王でした。人々を偶像礼拝に導いていました。王自身が異教の神々の祭壇に香をたき、犠牲をささげていました。南王国ユダからきた一人の若い預言者がいました。ヤロブアムはそこで祭壇の前で香をささげていました。この若い預言者が主の命令によって祭壇に向かい、大声をあげ、「祭壇よ。祭壇よ。主はこう仰せられる。『見よ。ひとりの男の子がダビデの家に生まれる。その名はヨシヤ。彼は、おまえの上で香をたく高きところの祭司たちをいけにえとしておまえの上でささげ、人の骨がおまえの上で焼かれる。(13:2)』

と言ったと書かれています。イスラエルの国における異教の神々の祭壇に関する面白い預言です。「祭壇よ。祭壇よ。おまえの祭司たちを人の骨がおまえの上で焼かれる。」そして、その預言は後に成就しました。「その日、彼は次のように言って一つのしるしを与えた。『これが、主の告げられたしるしである。見よ。祭壇は裂け、その上の灰はこぼれ出る。』ヤロブアム王は、ベテルの祭壇に向かって叫んでいる神の人のことばを聞いたとき、祭壇から手を伸ばして、『彼を捕らえよ。』と言った。すると、彼に向けて伸ばした手はしなび、戻すことができなくなった。(13:3-4)」動かなくなってしまうしました。「神の人が主のことばによって与えたしるしのおり、祭壇は裂け、灰は祭壇からこぼれ出た。そこで、王はこの神の人に向かって言った。『どうか、あなたの神、主(ヤハウェ)にお願いをして、私のために祈ってください。そうすれば、私の手はもとに戻るでしょう。』神の人が主に願ったので、王の手はもとに戻り、前と同じようになった。王は神の人に言った。『私といっしょに家に来て、食事をして元気をつけてください。あなたに贈物をしたい。(13:5-6)』そこで、この人は神の人であることを示しています。「すると、神の人は王に言った。『たとい、あなたの家の半分を私に下さっても、あなたといっしょにまいりません。また、このところではパンを食べず、水も飲みません。主の命令によって、「パンを食べてはならない。水も飲んではいけません。また、もと来た道を通って帰ってはならない。」と命じられているからです。』こうして、彼はベテルに来たときの道は通らず、他の道を通って帰った。ひとりの年寄りの預言者がベテルに住んでいた。(13:8-11)」さて、ここで筋がいつそう込み入ってきます。「ひとりの年寄りの預言者がベテルに住んでいた。その息子たちが来て、その日、ベテルで神の人がしたことを残らず彼に話した。また、この人が王に告げたことばも父に話した。(13:11)」すべてを話したのです。「すると父は、『その人はどの道を行ったか。』と彼らに尋ねた。息子たちはユダから来た神の人の帰って行った道を知っていた。父は息子たちに、『ろばに鞍を置いてくれ。』と言った。彼らがろばに鞍を置くと、父はろばに乗り、神の人のあとを追って行った。その人が樅の木の下にすわっているのを見つけると、『あなたがユダからおいでになった神の人ですか。』と尋ねた。その人は、『私です。』と答えた。彼はその人に、『私といっしょに家に来て、パンを食べてください。』と言った。するとその人は、『私はあなたといっしょに引き返し、あなたといっしょに行くことはできません。この所では、あなたといっしょにパンも食べず、水も飲みません。というのは、主の命令によって、「そこではパンを食べてはならない。水も飲んではいけません。もと来た道を通って帰ってはならない。」と命じられているからです。』彼はその人に言った。『私もあなたと同じく預言者です。御使いが主の命令を受けて、私に「その人をあなたの家に連れて帰り、パンを食べさせ、水を飲ませよ。』と言って命じました。』こうしてその人をだました。(13:12-18)」ですから、この年寄りの預言者は、「私も預言者です。主の御使いが来て、エホバのことばをもたらし、あなたの所へ行って、自分の家に連れて帰るように言いました。」と言いました。「そこで、その人は彼といっしょに帰り…。(13:19)」さて、面白いのは、この人にはこの力強い預言があったことです。この人は神のことばを語りました。そして、それは確認されました。王、ヤロブアムは自分の手を伸ばし、この人を捕らえるよう命じると、その手は動かなくなりました。ヤロブアムは、自分が癒されるためこの人に祈ってくれるように懇願しました。この人は祈り、そのとおりになりました。この人が言ったように、祭壇が裂け、灰が祭壇からこぼれ出ました。しかし、

この人はここでは霊を見分ける力がありません。年寄りが来て嘘を言って、神が語られたことと反対のことをこの人に語りました。さて、この事について、はっきりさせておきましょう。神はご自分が言われたことに矛盾することはなさいません。さらに、神が他の人を通してあなたにお語りになることは可能です。しかし、神はあなたに直接語るができます。いつも、私は若干・・・いや、正直に言いましょう。誰かが私の所に来て、「主が私にあなたにこう言うように言われました。」と言うときは、いつもずいぶん疑い深くなってしまいます。というのも、「神が私の住所をなくしてしまわれることがあるのかな。」とってしまうからです。ですから、ここでこの年寄りは、主がこの人に語られたことばと矛盾することばを伝えています。「主はあなたを連れ戻すように言われました。」と。「そこで、その人は彼といっしょに帰り、彼の家でパンを食べ、水を飲んだ。彼らが食卓についていたとき、その人を連れ戻した預言者に主のことばがあったので、・・・」さて、本物の預言です。「・・・彼はユダから来た神の人に叫んで言った。『主はこう仰せられる。「あなたは主のことばにそむき、あなたの神、主が命じられた命令を守らず、主があなたに、パンを食べてはならない、水も飲んではない、と命じられた場所に引き返して、そこであなたはパンを食べ、水を飲んだので、あなたのなきがらは、あなたの先祖の墓には、はいらない。』』彼はパンを食べ、水を飲んで後、彼が連れ帰った預言者のために、ろばに鞍を置いた。その人が出て行くと、獅子が道でその人に会い、その人を殺した。死体は道に投げ出され、ろばはそのそばに立っていた。獅子も死体のそばに立っていた。そこを、人々が通りかかり、道に投げ出されている死体と、その死体のそばに立っている獅子を見た。彼らはあの年寄りの預言者の住んでいる町に行き、このことを話した。その人を途中から連れ帰ったあの預言者は、それを聞いて言った。『それは、主のことばにそむいた神の人だ。主が彼に告げたことばどおりに、主が彼を獅子に渡し、獅子が彼を裂いて殺したのだ。』そして、息子たちに、『ろばに鞍を置いてくれ。』と言ったので、彼らは鞍を置いた。彼は出かけて行って、道に投げ出されている死体と、その死体のそばに立っているろばと獅子とを見つけた。獅子はその死体を食べず、ろばを裂き殺してもいなかった。そこで、預言者は、神の人の死体を取り上げ、それをろばに乗せてこの年寄りの預言者の町に持ち帰り、いたみ悲しんで、葬った。彼がなきがらを自分の墓に納めると、みなはその人のために、『ああ、わが兄弟。』と言って、いたみ悲しんだ。(13:21-30)」興味深い話です。力のある人、預言の賜物のある人でしたが、霊を見分ける力がなかったために、命を失いました。それは、その人が年寄りの預言者のことばを尊重し、彼のことばを受け入れ、この預言者がうそをついているかどうか、霊を見分ける力がありませんでした。実に悲劇的な話です。とても悲しい話です。

けれども、なぜそんなに悲しいかというと、頻りに繰り返されている話だからです。つまり、人々は必ずしも主のみことばを聞かず、自分の考えを思いつき、自分のところへ人を導くのです。悲劇にも、にせ預言者のために、人々は命を失ってきました。ジミー・ジョーンズ(訳者注:後に出てくるにデービッド・コレシュもそうですが、二人ともカルト集団の指導者で、信者を集団自殺に至らせた。)従った人たちのことを思います。デービッド・コレシュに従った人たちのことを思います。悲劇なのは、神の預言者だと自称している人たちに霊を見分ける力が欠けていたことです。そして、人々に、自分たちはだまされていると気がついて見分ける力がありませんでした。目をくらまされ

ていました。ですから、この霊を見分ける賜物は重要な賜物です。先にも言いましたが、みなさんの生活において完全には気づかずにこの賜物が働いていることが多いはずです。ただ、先ほども言ったように、よくある落ち着かない、不快な感覚です。誰かが来て、正しいことを言い、正しいことをするのですが、何かどうもおかしいが、これとは指摘できなくて、実体はないけれど、しっくりこない感覚です。もし、霊の中でそのような牽制がかかると、私はいつも注意して歩きます。

さて、私は必ずしも、いつも人を正しく評価してきませんでした。これも私がまだとても若く、経験も浅い時に、チューソンで牧会をしていた時のことですが、当時はある教団にまだ属していました。その時に、その教団の本部から、ある夫婦があちこちの教会を行巡り、教会からお金を巻き上げているという警告の手紙を受け取りました。その手紙は、この夫婦のことを説明していました。この夫婦は、有名人の名をよく知っているかのように口に出す人たちでした。教団の指導者の名前などを出したりします。とても巧みで、教会から金を借り、返すからと言って献金を募って、多くの教会からかなりの金額のお金を巻き上げてきた人たちでした。そこで、ノックする音が聞こえたので、私が出ると、そこには、その説明にぴったり当てはまるような男性と女性がいました。濃いサングラスをかけており、彼らはすぐに教団の指導者の名前を次々とあたかもよく知っているかのように話しはじめました。それで、私は、「こいつらだ。」と思いました。それで、私はとても落ち着いて、冷淡にしていました。彼らは、「ここチューソンで教会を始めました。」と言いました。私は、「へえー。お話しいただけますか。」と言いました。彼らは、「あなたのところの新しい礼拝堂を見せていただけますか。」と言うので、私は、「ええ、お入りなさい。」と言いました。それから、彼らは大袈裟になってきました。男は女の方を向いて、「おいお前。御覧。すごいね。」と言いました。「私は、いい加減にしろよ。」と、もう少しで言いそうになりました。「俺はお前には、だまされないぞ。」と。そして、男は古い手口で、「ここを通り掛かった時に、車が故障してしまいました。」と言いました。そんな話しは、何度も聞いたことがありました。「修理費の手持ちがありません。修理には、これこれのお金がかかります。」と言うのです。「ああ。その手口はみんな見きっているよ。」と。私は、この夫婦に違いないと思っていました。そして、彼らは、「いつ集会がありますか。」と言いました。私は、「水曜日、今晚集会があります。」と言いました。彼らは、「出席させていただきます。」と言いました。「その話しは以前に聞いたことがあるぞ。」と思いました。それで、彼らは来ました。しかし、私がびっくりしたのは、ずっと教会員をしている人が入って来て彼らを見ると、彼女は大声を挙げて、彼らのことを抱きました。「ああ。お元気ですか？」と言いました。彼らは、まともな人たちだったのです。それなのに、私はずっと、冷淡にして彼らを冷たく取り扱っていました。とても、申し訳なく思いました。私には、見分ける力がありませんでした。間違っていました。もっとあわれみや愛を示すべきだったのに。彼らは実際に町に少し滞在し、何軒かの家のペンキ塗りをして、車を修理するのに十分なお金を得て、車を修理し、去って行きました。彼らはなんらその一件をほのめかすこともなく、お金が必要だとも言いませんでした。私は、その人たちに謝らざるをえませんでした。私はその人たちに手紙を見せました。「見てください。あなた方は、この描写にどれほどぴったりあてはまるか。」と言って、私を彼らに赦しを請いました。

主は私たちが賢くいることを望んでおられます。私たちの知恵には限界があります。ここに、御

霊が関わってくるのです。主はおできになります。また、真実でられます。私は一回以上だまされたことがあります。しかし、だまされる度に、牽制、警告がかかりました。しかし、私は大丈夫だ、見分けられるからと思いました。目を見れば分かる、と。御霊の導きに従うのを学ぶことは、何と重要なことでしょうか。そうすれば、ずいぶん問題を抱えなくて済むようになります。

異言の賜物パート1 (#3071)

Gift of Tongues Part1

今晚は、異言の賜物のところに来ました。この賜物は、すべての聖霊の賜物とその現われの中で、最も物議をかもしてきました。異言の話題になると、神学論争がとても白熱します。すべての聖霊の賜物の中で、これが唯一、旧約聖書に現われていない賜物のようです。他の御霊の賜物については、旧約聖書で現われていますが、この賜物は、新約聖書に限られているように思えます。一つ可能性があるとするれば、それは、ヒゼキヤ王に関するものです(以下2列王記20:1-11参照)。預言者イザヤから、「あなたの家を整理せよ。あなたは死ぬ。直らない。」と聞いた時、彼は死ぬ準備ができていませんでした。壁の方を向いて、癒しのために必死に祈りました。そして、イザヤ書38章には、その体験をこのように説明しています。「つばめや、つるのように、私は、泣き、鳩のようにうめきました。私の目は、上を仰いで衰えました。主よ。私はしいたげられています。私の保証人となってください。(イザヤ38:14)」つばめや、つるのように、私は、泣き、鳩のようにうめきましたと、その夜のことを説明しています。ですから、明瞭に音節になるように話された音には聞こえず、彼は自分が死ぬと聞いたとき、心の奥深くから執り成し、祈りをしたのです。

さて、異言は、聖書に約束されているものです。イザヤ書28章11節で、預言されています。主は、彼らに『まことに主は、もつれた舌で、外国のことばで、この民に語られる。ここにいこいがある。疲れた者をいこわせよ。ここに休みがある。』と仰せられたのに、彼らは聞こうとはしなかった。(28:11-12)」異言に関するこの預言は、おそらく神学者の間では、異言の賜物の論拠としては通用しないでしょう。ただし、コリント人への手紙第一14章で、人々が異言で語るようになる時代の預言として、パウロはまさにこの聖句を用いています。ですから、聖霊によって動かされて、パウロは、これが異言の預言だと述べています。さて、これは、「二重の成就(dual fulfilment)」のある預言と呼ばれているものです。これをよく、「直近(near)」と「遠い将来(far)」と呼びます。つまり、この預言の直近の預言は、神に背を向けたエフライムの酔いどれたちが、イザヤとその教え方を嘲って、「戻って、子供を教えろ。」と言ったことでした。イザヤの教えはとても単純でした。「戒めに戒め、戒めに戒め、規則に規則、規則に規則、ここに少し、あそこに少し。(イザヤ28:10)」神の預言者を嘲って、本当に神を無視して、酒を飲み、遊興を行ないました。神は、彼らに対しアッシリヤを差し向け、彼らがアッシリヤの手に渡される、と仰せになりました。ですから、彼らは預言者の教えである、戒めに戒め、規則に規則を聞かなかったので、他の言語を実際に聞くというものでした。「まことに主は、もつれた舌で、外国のことばで、この民に語られる。(28:11)」しかし、それでも彼らは聞こうとしなかった、と言いました。ここで預言者が預言していたのは、来るべきアッシリヤの侵略についてでした。アッシリヤが土地を占領すると、人々はこのアッシリヤの外国のことば、見知らぬことばを街角で聞くようになるのでした。ですから、アッシリヤ語を聞くことは、彼らに対する神のさばきのしるしでした。これは、人々が遊興にひたり、神を見捨てていたことに対する神のさばきでした。遠い将来の成就是、むろん新約聖書に見られますが、それは異言の賜物です。ですから、イザヤ書28章12節には、「ここにいこいがある。疲れた者をいこわせよ。ここに休みが

ある。」と書かれているのです。

さて、マルコの福音書16章17節で、イエスが異言の賜物の約束されました。イエスは命令の中で、…このことをジャック(訳者注:意味不明。マルコのことか。)は少し前に話していますが、「全世界に出て行き、すべての造られた者に、福音を宣べ伝えなさい。」と言われました。イエスは、こう言われました。「信じてバプテスマを受ける者は、救われます。しかし、信じない者は罪に定められます。信じる人々には次のようなしるしが伴います。すなわち、わたしの名によって悪霊を追い出し、新しいことばを語り、…」ですから、信じる人々に伴うしるしについて、イエスの預言されたこと、約束されたことの一つに、新しいことばを語るがありました。さて、マルコの福音書の最後の12の節は、最古の写本には見られないと論じる人たちがいます。確かに、マルコの福音書の最後の12節は、コデックス・シナイ写本やコデックス・バチカン写本には見られません。この2つの写本は、いずれもアレキサンドリア写本群の一部です。しかし、興味深いことに、紀元140年から202年に生きていた初代教会の教父のイレニウスと、紀元170年から235年生きていたヒポレイタスは二人とも、マルコの福音書の最後の12節から引用しています。さて、学者の何人かの主張では、マルコの福音書のこの部分が全部そろっている最も古い写本の一つだと言うのですが、実際には、全部そろっているわけではありません。これがその写本にないので、後に写した人によって挿入されたと言うのです。しかし、実際は、はっきりしないのですが、コデックス・シナイ写本は紀元400年頃のもので、通常、コデックス・シナイ写本の年代は、420年から460年頃とされています。初代教会の教父の一人イレニウスが、コデックス・シナイ写本が写本される200年も前に、それよりも前の写本から引用しているのは疑いの余地がありません。ですから、圧倒的な証拠から、マルコの福音書の最後の12節は実際に原文にはあったものが、何らかの事情で、コデックス・シナイ写本とコデックス・バチカン写本から削除されてしまったのです。先にも言いましたように、これら二つは、アレキサンドリア写本群の一部です。

さて、この約束と預言が成就されたことに疑いの余地はありません。まず、使徒行伝2章において成就されています(以下使徒行伝2章1節-4節参照)。「五旬節の日が満ちて、みなが心を一つにして一か所に集まっていると、すると突然、天から、激しい風が吹いて来るような響きが起こり、彼らのいた家全体に響き渡った。また、炎のような分かれた舌が現われて、ひとりひとりの上にとどまった。すると、みなが聖霊に満たされ、御霊が話させてくださるとおりに、他国のことばで話した。あるいは、御霊が彼らに能力を与えられた。あるいは、カトリックのドゥーエー版(Douay Version)によると、御霊が彼らに言葉を促されました。ですから、五旬節の日に、聖霊が教会に与えられ、驚くべきしるしの一つは、みなが他国のことばで話していたことでした。「ことば」という単語は、ギリシャ語でグローサ(glossa)、この特定の箇所ではグローサイス(glossais)となっていますが、五旬節の祭りに、世界中からユダヤ人たちが集まって来ていたことがわかっています。ご存じのように、律法では毎年3つの主な祭りがあって、ユダヤ人の成人男子は、エルサレムで行なわれるこれらの祭り、あるいは、祭りの日に出席することが義務付けられていました。聖なる日でした。もし、近くに住んでいるなら、そこに行かなければなりません。もし、外国に住んでいたなら、可能な限り頻りにこれらの祭りに出席するために、エルサレムに巡礼しなければ

ばなりません。ですから、過越の祭り、五旬節、新年祭、というか仮庵の祭りですが、これら3つの主な祭りの一つがあるときは、いつも世界中からユダヤ人たちが集まります。ですから、この祭りも例外ではなかったのです。それで、五旬節の日が満ちて、聖霊が教会に降り、激しい風が吹いて来るような響きが起こり、彼らのいた家全体に響き渡りました。また、炎のような分かれた舌が現われて、そこに座っていたひとりひとりの上にとどまりました。そして、みな聖霊に満たされ、御霊が話させてくださるとおりに、あるいは、御霊が彼らに能力を与えてくださるとおりに、あるいは、御霊が彼らに言葉を促してくださったとおりに、他国のことばで話しました。「この物音が起こると、・・・」どの物音でしょうか。ハリケーンのような音がして、激しい風が吹いて来るような響きが起こったとき、人々はその音の出所が何かを見に来ました。そして、音の出所を見つけに、大ぜいの人々が集まって来ました。彼らは、めいめいの国の国語(dialect)で話すのを聞いて、驚きました。さて、ここでは、また別のギリシャ語のディアレクトス(dialektos)があります。彼らは、それぞれの国の言語や国語で、すばらしい神の働きを話すのを聞きました。

使徒行伝10章で、御霊の命令によってペテロがコルネリオの家にのぼって行って、その家に入り、集まったコルネリオの友人たちに宣べ伝えていると、44節ですが、「ペテロがなおもこれらのことばを話し続けているとき、みことばに耳を傾けていたすべての人々に、聖霊が御下りになった。割礼を受けている信者で、」つまり、ヨッパからペテロと一緒に来たユダヤ人たちのことですが、「ペテロといっしょに来た人たちは、異邦人にも聖霊の賜物が注がれたので驚いた。彼らが異言を話し、神を賛美するのを聞いたからである。」ですから、10章で、聖霊が異邦人の信者にも臨まれたときに、異言の現われが見られます。

さて、使徒行伝19章で、パウロがエペソの教会に来た時、教会に欠けているものがあるのを見ました。おそらく、それは愛が欠けていたのでしょう。御霊の実は愛だからです。それは、喜びや平安によって現われ、それらは、愛という言葉のいろいろな側面です。パウロは、いのちや喜びがあまりないのを見てとったのでしょう。パウロは彼らに、「信じたとき、聖霊を受けましたか。」と尋ねました。すると、彼らは、「いいえ、聖霊のことは、聞きもしませんでした。」と言いました。そこで、パウロは、「では、どんなバプテスマを受けたのですか。」と尋ねました。すると、彼らは、「ヨハネのバプテスマです。」と言いました。そこで、パウロは、「ヨハネは、自分のあとに来られるイエスを信じるように人々に告げて、悔い改めのバプテスマを授けたのです。」と言い、彼らにイエス・キリストについて説き、彼らにバプテスマを授けました。そして、パウロは彼らの上に手を置きました。6節にこう書かれています。「パウロが彼らの上に手を置いたとき、聖霊が彼らに臨まれ、彼らは異言を語ったり、預言をしたりした。」ですから、御霊の賜物の2つが現われました。異言と預言の賜物です。

では、異言の賜物の目的は何でしょうか。まず、祈りの生活で信者を助けることがあります。コリント人への手紙第一14章2節で、パウロは言いました。「異言を話す者は、人に話すのではなく、神に話すのです。というのは、だれも理解していないのに、(訳者注:新改訳では、「だれも聞いていないのに」とありますが、英語はno man understands himとなっています。)自分の霊で奥義」あるいは、神の秘密」を話すからです。」ですからパウロは、「あなたが異言で話すときは、人に話

しているのではなく、神に話しているのです。」と言いました。さて、パウロは、「だれも理解していない」と言いました。では、これと使徒行伝2章とどのように整合させればよいのでしょうか。使徒行伝2章では、彼らが神のすばらしいわざを告げ、みながめいめいの国語で理解しました。彼らが神のすばらしいわざを告げていると、人々は驚き怪しんで言いました。「どうでしょう。いま話していること人たちは、みなガリラヤの人ではありませんか。それなのに、私たちめいめいの国の国語で話すのを聞くとは、いったいどうしたことでしょう。」一方、パウロは、「だれも理解していない」と言いました。さて、このため、2種類の異言があると結論づける人がいます。一つは、しるしの異言の賜物です。聖霊の賜物を受けたしるしです。これは通常、言語や国語です。そして、祈りの言語と呼ばれる用語ができました。この人たちは、コリント人への手紙第一14章でパウロは、神が祈りの生活で信者を助けるために与えられた、祈りの言語について話している、と言います。パウロが愛の至上性について、コリント人への手紙第一13章で語っている際に、「たとい、私が人の異言や御使いの異言で話しても、・・・」と言いました。ですから、人の異言は、国語あるいはしるしの異言で、人が理解することができるものである、と言います。そして、御使いの異言は、祈りの言語で、天の言語であり、地上のことばがないものだと言います。さて、正直言って、それは教理として確立できるものではなく、表面上の矛盾を説明しようと努力せんがための憶測です。でも、それを教理としての真理として発表するだけの十分な証拠はありません。可能性はあるかもしれませんが。しかし、「これがそうだ。」と言えるようなものではありません。絶対的な教理として提示するには、十分な聖書箇所もありませんし、十分な聖書的背景もありません。このため、そのような区別をするには、聖書的根拠が十分ではありません。そのような議論は、聖書箇所を読むことで起こったのではなく、聖書箇所を読み込むことによって起こりました。コリント人への手紙第一14章14節で、パウロはこのように言いました。「もし私が異言で祈るなら、その霊は祈るが、私の知性は実を結ばないのです。ではどうすればよいのでしょうか。私は霊において祈り、また知性においても祈りましょう。霊において賛美し、また知性においても賛美しましょう。」ですから、パウロは、異言で祈り、異言で歌ったことを自分で認めています。しかし、公の礼拝のときにそのようなことはしなかったことに留意すべきです。こう言いました。「教会で集まったときは、教会が建て上げられるために、異言で一万語話すよりは、理解できる五つのことばで話します。」しかし、パウロは、「私は、あなたがたのだれよりも多くの異言を話すことを神に感謝しています。(1コリント14:18参照)」とも告げています。ですから、パウロは、自分が異言で祈ることを話しています。そこから、祈りの言語という考えが出たのだと私は想像します。

異言は、祈りの生活を助けるだけでなく、神への礼拝を助けるものでもあります。16節で、パウロは、異言に言及して、霊において神をほめたたえることを述べています(訳者注:英語のblessは、祝福することの他に、ほめたたえるとか、喜ばせる、感謝するという意味がある。)。17節で、再び異言に言及して、「感謝は結構ですが」と述べています。ですから、異言は神をほめたたるのに用いられ、神に感謝するのに用いられました。難しいなと思うことが私にはあるのですが、それは、神が私にしてくださったことのゆえに、神を愛していること、敬意を持っていること、感謝していることを、神に表現することが十分にできていないと感じていることです。よく神への感謝を表現し

ようとします。けれども、言葉では不十分なことがよくあります。その気持ちの深さを表現していません。

面白いことに、近代の実存主義の哲学者は、いわゆる「究極の体験(ultimate experience)」について語ります。彼らは、彼らの言う究極の体験を人が持つ可能性を仮定しています。究極の体験について語りますが、それを語ることの難しさについて語ります。なぜなら、それは、これまでに体験したことを全く超越した体験だからです。新しい領域に踏み込んだわけですから、自分の感じていることを描写する用語がつくられていないのです。このため、他人に自分の究極の体験を説明することが全くできないのです。究極の体験を実際に伝える用語ができていないし、つくられていないのです。ですから、哲学好きの友人の集まりの中に入って行って、「昨晚、いつちやったんだよ。」と言ったとします。それで彼らが、「話してくれよ。」と言ったら、彼らが無知であることがわかります。つまり、それは究極の体験であり、それを説明する用語がないので、究極の体験を話すことができないのです。そうすると、あなたはとて孤立して、独りぼっちになります。自分は究極の体験をしたんだけど、それについて話せないのです。さて、面白いことに、彼らがこの究極の体験について語りますが、ハックスレー、この人はジュリアン・ハックスレーという、究極の体験について語った哲学者の一人ですが、彼は、おそらく究極の体験は、LSDでハイになって死ぬことだろうと思いました。それで、彼は、LSDで幻覚を見て死にました。彼は私たちにそれを語ることはできませんでした。彼にとっては、究極の(訳者注:ultimateという言葉には、最後のという意味もあります。)体験であつたに違いありません。この究極の体験について語ったドイツの教授らの学生の間で、自殺者が続出しました。このため、クラスの学生に、自殺が究極の体験かどうかはつきりしないと、きつく言わなければなりません。学生に自殺を思いとどまらせなければなりません。自殺が究極の体験である可能性はあるかもしれませんが、実際そうかどうかはわからないからです。私たちにはわからないからです。

クリスチャンの体験、新たに生まれという体験は、ある意味で、究極の体験です。御霊のことが理解できない人に、それを説明するのは大変です。聖書はこう教えています。「生まれながらの人間は、神の御霊に属することを理解しません。また、それを悟ることができません。なぜなら、御霊のことは御霊によってわきまえるものだからです。(1コリント2:14参照)」ですから、耳の聞こえない人に交響曲の美しさを説明しようとするようなものなのです。その人には、交響曲を楽しむ能力が欠けています。目の見えない人に、曇りの日の日没のすばらしい色を描写しようとするようなものなのです。その人には能力が欠けています。御霊のことを理解する能力が、生まれながらの人間には欠けています。このため、自分の持っている喜び、平安をそのような人たちに表すのが難しいのです。この人たち自身に、関連づけることができるものが何もないからです。御霊のことを関連づける基盤がないのです。これらの人にとっては、そのようなものは愚かなのです。しかし、御霊に属する人は、このことを理解しますが、他人には分かってもらえません(1コリント2:15参照)。彼らは、あなたのことを見て、分からないというしぐさをして(訳者注:英語はscratch their head)、「なんだこれ。あいつ、変だ。」と言うのです。自動車ローンが返済できなくて、車を回収に来た人が車を牽引してゆくのを見ながら、にっこりしているなら、にっこりしない人は、「ごらん。

あいつは自分の車が牽引されているのに、にこにこしている。あいつ、いかれてるぜ。」と言うのです。あなたは理解されません。

さて、聖書が靈的体験について教えていますが、「人の考えにまさる神の平安」について語っています(訳者注:ピリピ4:7参照。「まさる」は直訳すると「超越した」)。では、人の考えを超越したものをどう説明できますか。ここに難しさがあります。聖書は、「ことばに尽くすことのできない、栄えに満ちた喜び」について語っています(ペテロ1:8)。ことばに尽くすことのできない、とは、説明することができないということです。説明することができないものを、どうやって説明できますか。それは、自分で体験しなければならないものです。詩篇の記者は、「主のすばらしさを味わい、これを見つめよ。(34:8)」と言っています。自分で味をみて、体験しなければ、私には説明できません。ジャングルの中のインディアンのセレノイ族のところに、小型のアイスクリーム・メーカーを持って行き、なんとかして氷を入手して、バニラ・アイスクリームをつくり、ホットファッジ(訳者注:アイスクリームの上にかけるチョコレート溶かしたもの)をかけ、ホイップクリームをつくってかけ、ローストしたアーモンドを振りかけたとします。この人たちは、アイスクリームを一度も見たことがなく、チョコレートを食べたことが一度もないとして、あなたがそれを食べ始めて、「わあ。ああ、何て美味しいんだろう。うーん。」と言ったとします。この人たちは、わからないのです。この人たちの味蕾は、チョコレートの感覚を一度も体験したことがないのです。バニラ・アイスクリームの冷たい感覚を一度も体験したことがないのです。一度もないのです。だから、この人たちはわかりません。苦いかもしれません。「食べてみろ。」と言うしかないのです。「うまいよ。おいしいよ。」と言うことはできますが、チョコレートの風味を説明するのはたやすいことではありません。チョコレートの風味を誰かに説明してみてください。「チョコレートみたいな味だ。」「へえー。」というようになってしまいます。ですから、体験や感触、喜びで、ことばに尽くすことのできないものがあるのです。パウロは、エペソの人々のための祈りで、「人知をはるかに越えた神の愛を知ることができる知恵と理解の霊を持つことができるように(エペソ3:19参照)」と祈りました。ですから、ここで取り扱われているのは、私たちが越えた世界です。人知を越えた、人の理解を越えたものです。これは、ことばに尽くすことのできない、栄えに満ちたものです。それは、神との歩みにおいて、私たちの抱く気持ちやとその感覚のことを言っています。同様に、私たちがこの関係に入ると、神の愛を生活の中で体験し、主の喜び、キリストの平安を体験し始め、それを感じたことのない人、知らない人に説明しようとすると、非常に、・・・いや不可能です。できないのです。ダビデのように、「主のすばらしさを味わい、これを見つめよ。」と言うしかないのです。自分で試してみるしかないのです。

けれども同じように、神がしてくださったすばらしいことに感謝していること、謝意を持っていることを神に表現しようとするときに、言葉の限界を感じるのです。神が、恵みによって祝福を注がれて、神の愛やすばらしさに心が圧倒されるとき、自分の言ったことは、自分の感じていることを表すのには、かなり不十分だと思っています。自分が感じていることの深さを、神に十分に表わしていないといつも感じます。したがって、パウロは、この分野において、すなわち、神をほめたたえ、神に感謝をするとき、御霊が私たちが助けることができると述べているのです。その結果、イザヤが預言したように、「ここにいこいがある。」のです。これはとてもさわやかなものです。とてもさわ

やかな、いこいの体験です。とても動揺する人がいるのを見ると、その人たちにとって、異言がさわやかで憩いを与える経験なのかどうかと疑ってしまいます。しかし、個人のデボーションの際に異言を用いるなら、憩いが与えられ、さわやかな、すばらしい体験をすることができるかと太鼓判を押すことができます。

さて、第三に、異言を話すことの目的は、信者の徳を高めることでもあります。「徳を高める」という言葉は、建て上げる、あるいは、建て上げられるという意味があります。霊的な意味では、キリスト・イエスにおいて建て上げられる、あるいは、イエス・キリストがあなたのうちで建て上げられることです。聖書の中で、頻繁に、私たちは愛のうちに徳を高め合いなさいと勧められています。ここで、パウロは、「異言を話す者は自分の徳を高めます。(1コリント14:4)」と告げています。異言を話すことは、実に徳が高められる体験です。

22節で、パウロは、異言で話すことの4つ目の目的を語っています。これは、難しい箇所です。というのも、文脈では矛盾するように見えるからです。それで、コリント人への手紙第一14章22節を見ると、パウロはこのように述べています。「それで、異言は信者のためのしるしではなく、不信者のためのしるしです。」とても難しい箇所です。なぜかと言うと、23節では、「ですから、もし教会全体が一か所に集まって、みな異言を話すとしたら、初心の者とか信者でない者とかがはいって来たとき、彼らは、あなたがたを気遣いだと言わないでしょうか。」とあるからです。これは、全く矛盾するように見えます。まず、異言は不信者のためのしるしと言っておきながら、それなのに教会が集まったときに、不信者が入ってきて、みな異言で語っていたら、彼らはあなたが気遣いだと言うでしょう、と言っているからです。異言は不信者のためのしるしであって、あなたが気遣いだというしるしだ、という風に、ここを見なければならなくなるからです。新約聖書を現代英語に翻訳したJ. B. フィリップスがいます。これは、会話的な翻訳で、とても読みやすい、おそらく、新約聖書の訳の中では最も読みやすい訳でしょう。というのは、会話調に文章が流れるからです。フィリップスは、自由裁量で22節をこのように変えています。「つまり、異言は不信者のためではなく、すでに信じている人のための神の力のしるしです。」となっています。ですから、フィリップスは、全く変えてしまいました。そして、脚注で短くこう説明しています。「ここは、公認本文から訳者が乖離した唯一の箇所である。」次の3節の文脈の意味から、ここは、パウロの筆がすべったか、あるいは、もっとありえそうなのは、写本をした人の誤りではないか、と結論づけざるをえなかった、としています。翻訳を変えることによって、見かけの矛盾はなくなります。しかし、彼が正しいかどうかは分かりませんし、それがパウロがここで言っていることの唯一の解釈であるかも分かりません。

ここでも、この箇所の文脈はイザヤの預言です。「主は、もつれた舌で、外国のことばで、この民に語られるのに、彼らは聞こうとはしなかった。」「それで、異言は信者のためのしるしではなく、不信者のためのしるしです。」「それでも、彼らは聞こうとはしなかった。」と主は仰せられる。ですから、これはしるしですが、不信者を信者にするしるしではないのです、というのが一つの見方です。申命記28章で、これをさばきのしるしとして見ると、イザヤの預言はシリアによる侵略の預言をしていたと言いましたが、ここ申命記28章49節からはじまる箇所もこの預言がされています。

「主は、遠くの地の果てから、わしが飛びかかるように、一つの国民にあなたを襲わせる。その話すことばがあなたにはわからない国民である。その国民は横柄で、老人を顧みず、幼い者をあわれみず、あなたの家畜の生むものや、地の産物を食い尽くし、ついには、あなたを根絶やしにする。彼らは、穀物も、新しいぶどう酒も、油も、群れのうちの子牛も、群れのうちの雌羊も、あなたには少しも残さず、ついに、あなたを滅ぼしてしまう。」そして、門の包囲について続けて語られています。ですから、この解釈では、「不信者のしるし」とは、信じるようにするしるしではなく、彼らへの神のさばきのしるしでした。

もう一つの可能性ですが、先にも言いましたように、しるしとしての異言の賜物に対する祈りの言語について話す人がいます。異言をしるしの賜物を見ます。異言は不信者へのしるしだ、と。使徒行伝2章に戻ると、聖霊が教会の上に臨まれたとき、信じないユダヤ人たちは、— 彼らは神を信じていましたが、イエス・キリストは信じませんでした。— 弟子たちが様々な言語ですばらしい神のみわざを話すのを見て、みなガリラヤ人たちであり、このような言語を学ぶことはできなかつたはずだと彼らは気づき、ペテロが実際に何が起きているのかを彼らに伝えると、覚えていますか、人々は御霊によって罪を指摘され、その日、3千人ほどが教会に加えられました。ですから、信じないユダヤ人たちに対し、異言がしるしとなり、ペンテコステの日に彼らを救いに導きました。

では、もう一つの可能性をお話しましょう。異言を語ることは、聖霊のバプテスマを受けたことの第一の証拠だと教える人たちがいます。余りにも多くの人がこの教えにさらされて、異言を話さない限り、自分が聖霊に満たされた、聖霊のバプテスマを受けたと信じないのです。この人たちは、聖霊のバプテスマを受けた、聖霊に満たされたことの第一の証拠だとして、異言を見ています。ですから、異言で話さない限り、聖霊のバプテスマを受けたと信じないのです。したがって、異言が不信者のしるしとなります。イエス・キリストを信じない人にとってではなく、異言を話さない限り、聖霊のバプテスマを受けたと信じない人にとってのしるしです。ですから、その人にとっては、異言が、聖霊のバプテスマを受けた、聖霊に満たされたことのしるしになるのです。ですから、これは、さらにもう一つの可能性です。聖霊のバプテスマを受けることよりも、むしろ異言の賜物を求める人がたくさんいます。その人たちは、異言が話せない限り神は自分に聖霊のバプテスマを授けて下ったと信じないのです。「それで、異言は信者のためのしるしではなく、・・・」あなたがただ神の賜物を信じるなら、聖霊を受けなさい。すばらしいことです。しかし、信じない人は、喜んで、神が私を満たして下さったと言うには、異言で話さなければならないと考えるのです。

ですから、6つの可能性があります。自分で選んで下さい。どれをとっても、これが絶対だと決着をつけることはできないでしょう。これらはすべて、可能性であり、幅広い選択肢があります。来週も、このシリーズを続けます。対処しなければいけないとても重要な問題を取り上げます。みな異言で話すのか。聖霊に満たされ、聖霊のバプテスマを受けるためには、異言を話さなくてはならないのか。興味をそそる異言のテーマについて、いろいろな面白い問題をたくさん見ていきます。

異言の賜物パート2(#3072)

Gift of Tongues Part2

では、再びコリント人への手紙第一12章を開きましょう。今晚は、12章と13章と14章を見ますが、おそらく主に14章を見ることになるでしょう。異言という物議を醸しているテーマを続けて学んでいます。

異言を語るのは、みなのものかという疑問が出て来ます。12章11節で、パウロは、いろいろな御霊の賜物について語っています。いろいろな賜物の名称があり、彼は、9つ列挙した後で、聖霊が、「みこころのままに、おのおのにそれぞれの賜物を分け与えてくださるのです。」と告げています。さて、この御霊の賜物のリストを見ると、パウロが、「ある人には御霊によって知恵のことばが与えられ、ほかの人には知識のことばが与えられ、またある人には信仰が与えられ、・・・」と言ったように、ある人には、ある人には、と述べているのに注目してください。異言の賜物のところを見ると、パウロは、「またほかの人には種々の異言(訳者注:英語はkinds of tonguesです。口語訳参照。)」、あるいは、「さまざまな種類の異言」と述べています。さて、これを読んだだけでも、すべての人に知恵のことばがあるとか、すべての人にいやしの賜物があるとか、信仰のことばがあるとか推論できません。それと同様に、すべての人に異言を語る賜物があるとは推論できないのです。実際、12章28節では、パウロは、このテーマについて、さらにいっそう明確に話しているようです。こう述べています。「そして、神は教会の中で人々を次のように任命されました。すなわち第一に使徒、次に預言者、次に教師、それから奇蹟を行なう者、それからいやしの賜物を持つ者、助ける者、治める者、種々の異言を語る者などです。みなが使徒でしょうか。みなが預言者でしょうか。みなが教師でしょうか。みなが奇蹟を行なう者でしょうか。みながいやしの賜物を持つ者でしょうか。みなが異言を語るでしょうか。みなが解き明かしをするでしょうか。(1コリント12:28-30参照。異言については口語訳参照。)」これらは全て反語的質問で、したがって、それらの答えは明らかに「いいえ」です。みながいやしの賜物を持つ者ではなく、教会の中でみな預言者、あるいは預言の賜物があるわけではなく、みなが奇蹟を行なう者ではなく、したがって、みなに異言を語る賜物があるわけではないのです。

さて、この特定の賜物には、はっきりと、それをを用いるのに規制や制約がありました。まず最初に、個人的なデポジションにおいては、この賜物を用いるのに、なんら制約はありません。自分の個人的なデポジションにおいて、好きなだけいくらでも、いくらでも頻繁に異言で語ってもかまいません。全く何の制約もありません。実際、パウロは、どのコリント人よりも多くの異言を話すことを神に感謝しています(1コリント14:18参照)。コリントの教会において、異言は幅広い人たちに与えられていた賜物でした。多くの人が、過度にこの賜物を用いたがりました。パウロは言いました。「私はあなたがたのだれよりも多くの異言を話すことを神に感謝していますが、教会では、教会全体の徳が高められるように、異言で一万語話すよりは、分かっている五つのことばを話したいのです。(1コリント14:19参照)」ですから、教会の礼拝では、異言の使用は、はっきりと制限され、規制されていました。まず、異言を解き明かす賜物を持つ人がいなければならないという制約があり

ました。コリント人への手紙第一14章28節で、パウロは、「もし解き明かす者がだれもいなければ、教会では黙っていなさい。自分と神とに語りなさい。(訳者注:新改訳の脚注参照)」と言いました。つまり、教会では、解き明かす者が誰もいないなら、異言で語ってはいけませんでした。そして、パウロは、他の制約もつけています。「ふたりか、多くても三人」とパウロは述べています。コリント人への手紙第一14章27節には、こうあります。「もし異言を話すのならば、ふたりか、多くても三人で順番に話すべきで、ひとりでは解き明かしをしなさい。」

また、もう一つの規則は、適切に、秩序をもって行なうことでした。コリント人への手紙第一14章40節には、「ただ、すべてのことを適切に、秩序をもって行ないなさい。」とあります。教会において異言を語ることは、決して中断させるようなものであってはならないと信じています。牧者や伝道者が神のみことばを取り次いでいる時に、それを異言を語ることによって中断させるのは適切ではないし、正しいことでもないと信じます。ペンテコステ派の人たちの間では、頻繁にそのようなことをします。異言を語ることによって頻繁に説教が中断します。あまりに頻繁に起こるので、「中断の異言」と呼んでいたほどでした。礼拝を中断しすぎるし、邪魔になるものだったからです。パウロは、「神は混乱の神ではない。(1コリント14:33参照)」と言いました。そのようなことが起こると、よく混乱しました。

異言を語ることに對する、私たちの態度はどうあるべきでしょうか。異言を禁止し、悪魔のものだとまで言って、異言の賜物を用いることを禁止する人もいます。教会の中で、噂が巡り巡って繰り返されています。すべての宗教的放送を禁止することをとりつけようとしている、マダレン・マリオ・ヘアーについての手紙が来つづけます。同封の用紙に記入して、FCC(連邦通信委員会)に送って下さい、というものです。FCC(連邦通信委員会)は時々手紙を出し、もう手紙は送らないで下さい、あるいは、もうこういった用紙を送らないで下さいと言います。噂は何でもないものなのですが、誰かがそれを聞いて、たくさん印刷して、また郵便が来ます。また噂が流れているというので、たくさんの方が気分を害します。過去25年間で、おそらく別々の時期に、25回はそのようなものを見たと思います。ほぼ一年に一回巡ってきます。誰かが飛行機の窓から雲の写真を撮影したら、あるいは、私の聞いたまた別の脚色だと、葬儀の時に、花の写真をとっていると、感動して空の美しい雲の写真をとって現像してみると、イエスが手を広げて立っていた、サルモンが描いたイエスの絵のようなものが写っていた、というような噂は常に流れています。また、溶解した雪にイエスの顔が見えたというもあります。その特定の写真がどのようにとられたかは、色々な説があります。しかし、決して情報源に行き着くことがないのです。いつも、おばさんの友人とか、従兄弟の知り合いの誰かだとか、噂の出所の第一人者には到達できないのです。このため、噂は常に循環します。ヒッチハイクしていた天使が消えたとか、めぐりめぐる噂があります。ずいぶん前になりますが、こんな手紙を受け取ったことがありました。「ケイがヒッチハイクしていた人を拾ってやると…」ケイは、そんなことは決してしませんが、「ケイがヒッチハイクしていた人を拾ってやると、その人は天使だったそうですね。」云々。いいえ(訳者注:チャックはかなり否定を強調しています。)そんなことは起こりませんでした。しかし、古い噂がまた巡っているだけです。しかし、噂の出所に到達することが決してできないのです。いつも、友人の友人で、いったい誰だったのか分からない

のです。

おそらく一番古い噂で継続して流れているものは、誰かが異言で話していて、そこにその言語を理解する人がいて、たまたまその人は宣教師だったり、その国で育ったことがあって、その言語を理解する人だったりして、この人が異言で話しているのを聞くと、イエスについてひどく冒瀆することを語っていたというものでしょう。この噂は、コリントの教会の時代から続いています。パウロは、12章1節で、その特定の噂を是正しようとしました。パウロは、こう述べています。「さて、兄弟たち。御霊の賜物についてですが、私はあなたがたに、ぜひ次のことを知っていただきたいのです。ご承知のように、あなたがたが異教徒であったときには、どう導かれたとしても、引かれて行った所は、ものを言わない偶像の所でした。ですから、私は、あなたがたに次のことを教えておきます。神の御霊によって語る者はだれも、『イエスはのろわれよ。』と言わず、(1コリント12:1-3)」ですから、この噂は巡っていたのでした。パウロは、「ちがう。ちがう。そのようなことは起こらなかった。」と言っているのです。御霊によって語る者はだれも、「イエスはのろわれよ。とは言わないのです。

聖書のパラメーターの範囲内で行なわれている限り、異言で語ることを禁じてはならないのです。パウロは言いました。「それゆえ、私の兄弟たち、預言することを熱心に求めなさい。異言を話すことも禁じてはいけません。(1コリント14:39)」しかし、教会においては、その使用には制約があります。ふたりか、多くても三人で、もし解き明かす者がだれもいなければ全く用いてはならない、ということについては、既にお話しました。しかし、異言の賜物よりも、預言の賜物が用いられるほうが望ましいとされていました。パウロは、教会の徳が高められるために、わかっている言語で語ることを願っていることをはっきりと話しました。教会の中で用いることについては、預言の賜物のほうが異言の賜物よりも望ましいのは確かです。パウロは14章1節でこのように言いました。「愛を追い求めなさい。また、御霊の賜物、特に預言することを熱心に求めなさい。」4節です。「異言を話す者は自分の徳を高めますが、預言する者は教会の徳を高めます。私はあなたがたがみな異言を話すことを望んでいますが、それよりも、あなたがたが預言することを望みます。もし異言を話す者がその解き明かしをして教会の徳を高めるのではないなら、異言を語る者よりも、預言する者のほうがまさっています。」6節です。「ですから、兄弟たち。私あなたがたのところへ行って異言を話すとしても、黙示や知識や預言や教えなどによって話さないなら、あなたがたに何の益となるでしょう。笛や琴などいのちのない楽器でも、はっきりした音を出さなければ、何を吹いているのか、何をひいているのか、どうしてわかりましょう。また、ラッパがもし、はっきりしない音を出したら、だれが戦闘の準備をするでしょう。それと同じように、あなたがたも、舌で明瞭なことばを語るのしなければ、言っている事をどうして知ってもらえるでしょう。それは空気に向かって話しているのです。(14:6-9)」ですから、パウロは、公の礼拝においては、預言とその賜物を用いることを、はっきりと異言よりも上に置いています。そして、このように告げています。「ですから、もし教会全体が一か所に集まって、みな異言を話すとしたら、初心の者とか信者でない者とかがはいって来たとき、彼らは、あなたがたを気遣いだと言わないでしょうか。(14:23)」

では、「異言ならやみます。(13:8)」という聖書の箇所はどうでしょうか。異言は今日のものではないと言う人たちは、通常この箇所を証拠として使います。「異言ならやみます。」という箇所はコ

リント人への手紙第一13章にあり、そこでパウロは、まず、永遠のものと一時的なものを比較しています。続くもの、対、わきにおかれるものの比較です。「いつまでも残るものは信仰と希望と愛です。(13:13)」残らないものがあります。「愛は決して絶えることはありません。これは続きます。預言の賜物ならばすたれます。異言ならばやみます。知識ならばすたれます。」ですから、「異言ならばやみます。」しかし、残るものと絶えてしまう一時的なものが、対照されているのに注目して下さい。さて、「完全なものが現われたら、不完全なものはすたれます。(13:19)」の解釈をめぐって議論が起こります。では、これを文脈の中で読んでみましょう。「愛は決して絶えることはありません。預言の賜物ならばすたれます。異言ならばやみます。知識ならばすたれます。というのは、私たちの知っているところは一部分であり、預言することも一部分だからです。完全なものが現われたら、不完全なものはすたれます。(13:8-10)」さて、完全なものとは何でしょうか。異言の賜物を使徒の時代、初代教会の時代のものだけだとする人たちは、完全なものを全ての正典だと解釈します。聖書の本文や正典全部が書かれるまで、という考えや推論です。最終的にヨハネが、黙示録の最後にアーメンと書くまでがそれです。それまでの間は、主のことについて教えたり、指導したりするのに、知識のことばや、預言の賜物、異言の賜物が用いられたと言うのです。さて、聖書のどこにも異言がこれまでに黙示的、あるいは、神のみことばやみこころを表すものであるとは、一度たりとも示されていません。それは、知識のことばについては起こりうるかもしれませんが。しかし、異言は、聖書の中では一度も教えの道具として用いられたことはありません。それと対照的に、パウロはこう述べています。「異言を話す者は、人に話すのではなく、神に話すのです。というのは、だれも理解していないのに、霊で神の奥義を話すからです。(訳者注:1コリント14:2英語をそのまま訳しています。)」ですから、聖書の中で、異言は教えの道具、もしくは、神のみこころ、ご計画、みことばが啓示される方法として用いられたことは、一度もありませんでした。

さて、完全なものの意味として可能なものは2つあります。完全なものは、黙示録で終わる聖書の正典全部であるというものです。しかし、黙示録は完結したのかという疑問が出てきます。聖書は、神についてのすべての知識と理解を神が与えて下さっており、それは聖書で、そこには私たちが必要なものはすべて入っていると教えています。しかし、神の啓示の中で、与えられていないものも一部あります。黙示録の中でさえ、10章で七つの雷が声を出したとき、ヨハネは七つの雷が語ったとき、書き留めようとしたのですが、天使は、「それは書くな。封じなさい。」と言いました。ですから、七つの雷が声を出したとき、それは書き留められませんでした。ですから、実際は私たちに完全な黙示がないのです。と言うのは、一部が封じられてしまったからです。ヨハネの福音書16章3節で(訳者注:16章4節のことか。)、イエスが弟子たちにお話になったとき、「わたしには、あなたがたに話すことがまだたくさんありますが、今あなたがたはそれに耐える力がありません。(ヨハネ16:12)」と言われました。パウロは、コリント人への手紙で、彼らに話すことができないことがあった、と言いました。コリント人への手紙第一3章1節と2節です。「さて、兄弟たちよ。私は、あなたがたに向かって、御霊に属する人に対するようには話すことができないで、肉に属する人、キリストにある幼子に対するように話しました。私はあなたがたには乳を与えて、堅い食物を与えませんでした。あなたがたには、まだ無理だったからです。実は、いまでもまだ無理なのです。」パ

ウロが彼らに話したいことがあったのですが、彼らには無理だったのです。ですから、黙示の中で完全になっていないものもあります。したがって、完全なものを神の聖書が完全に啓示されたと言うのは、議論の余地があるかもしれません。

初期の神学者のほとんどは、完全なものが現われることをイエス・キリストの再臨への言及だと解釈していました。イエス・キリストの再臨であると解釈する方が、文脈の中では、よりしっくり当てはまるように思えます。知識のことばと預言の賜物が啓示的な賜物だが、異言はそのように使われたことを示すものはないと話しましたが、そこで、私たちに、今は完全な知識があるのか、という疑問が出てきます。パウロは言いました。「今、私たちは鏡にぼんやり映るものを見ていますが、その解きには顔と顔を合わせて見ることになります。今、私は一部分しか知りませんが、その時には、私が完全に知られているのと同じように、私も完全に知ることになります。(1コリント13:12)」あなたは全てを知っていますか。自分でそう思っているという人に、お目にかかったことがあります。シェークスピアが「人間。かわいそうな人間。自分が一番知っていると思っていることについても無知だ。」と言ったように、私は、一部分しか知らないとみなさんに告白せざるをえません。他の分野と比べれば聖書を一番良く知っていますが、正直言って、聖書についてかなり無知です。知るべきことは余りにたくさんあるのです。知るべきことは余りにたくさんあるのです。ある特定の分野を知れば知るほど、自分が知らないことがいかに多いかに気づくとわかりました。全て分かっていると知っている人ほど、たいていはその人が一番分かっていない人なのです。そして、私たちの知っているところは一部分であり、預言することも一部分だからです。完全なものが現われたら、不完全なものはすたれます。この議論は進められ、完全なものの「完全な」という言葉のギリシャ語は、中性なので、これはイエスの再臨ではなくみことばへの言及であるとされます。しかし、これはあまり正当性のある議論ではありません。聖霊、御霊という言葉も常に中性です。しかし、聖霊は神の第三位格であることは周知のとおりです。

さて、五旬節の日が満ちて、弟子たちが聖霊の賜物を受け、初めて異言の賜物を用いたとき、このように書かれています。「人々は・・・心を刺され」、つまり、集まった人たちはペテロの説教を聞いて心を刺され、「栄光の主を十字架につけた私たちはどうしたらよいのでしょうか。」と言いました。すると、ペテロは、「悔い改めなさい。そして、それぞれ罪を赦していただくために、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けられるでしょう。なせなら、この約束は、」つまり聖霊のことですが、「あなたがたと、その子どもたち、ならびにすべての遠くにいる人々、すなわち、私たちの神である主がお召しになる人々に与えられているからです。(使徒2:37-39)」さて、五旬節の日に、この現象のために群衆が最初に集まった時、みなはこれはいったいどうしたことかと驚き感いました。驚きました。それは、これらの人々が神のくすしいみわざについて17の異なる言語で話していたからでした。群衆は世界中から集まってきており、自分の聞き慣れていた他国の言葉を聞きました。メジヤ人、パルテヤ人などみなは、様々な言語で話されるのを聞き、これはいったいどうしたことかと驚き感いました。それで、ペテロは立ち上がり言いました。「ユダヤの人々。・・・どうか、私のことばに耳を貸してください。・・・これは、預言者ヨエルによって語られた事です。『神は言われる。終わりの日に、わたしの霊をすべての人に注ぐ。

すると、あなたがたの息子や娘は預言し、青年は幻を見、老人は夢を見る。その日、わたしのしもべにも、はしためにも、わたしの霊を注ぐ。…それは、血と火と立ち上ぼる煙である。主の大きな輝かしい日がある前に、太陽はやみとなり、月は血に変わる。しかし、主の名を呼ぶ者は、みな救われる。』(使徒2:14-21参照) ヨエルの預言に注目してください。まず、いつでしょうか。「神は言われる。終わりの日に」です。今は、終わりの日でしょうか。私はそうだと信じます。しかし、預言は終わりの日のことについてであり、預言は大患難時代を網羅しています。なぜなら、大患難時代の側面の一つは太陽が暗くなり、月が血に変わる、血の色に変わることだからです。それは、大患難時代に起こる事の一つです。そのことをイエスが話されています。それは大患難時代のしるしの一つで、無論それは、黙示録に、大患難時代の出来事の一つとして書かれています。さて、ヨエルの預言に注目してください。「その日、わたしのしもべにも、はしためにも、わたしの霊を注ぐ。すると、彼らは預言する。」ですから、終わりの日に霊が注がれる人が、預言の賜物を用いるというのが、ヨエルの預言です。実際、大患難時代に突入して行く人たちは、したがって、「異言ならばやみます。預言の賜物ならばすたれます。知識ならばすたれます。」をみな関連させると、預言者ヨエルによる、終わりの日の預言についての神の約束によると、預言はすたれておらず継続されており、大患難時代にも継続されることがわかります。預言の賜物は、異言がやむのと、知識のことばと時を同じくしてすたれます。

ですから、異言の賜物は、今日の信者にとって実際に正当な賜物であるという前提をとらざるをえません。また、これは優れた賜物であり、自分の個人的なデボーションの生活で、祈りの生活で、あなたが建て上げられるものです。さて、コリント人への手紙第一12章の最後のところに、こう書かれています。「あなたがたは、よりすぐれた賜物を熱心に求めなさい。」また、パウロはこう言っています。「また私は、さらにまさる道を示してあげましょう。」よりすぐれた賜物とは、何でしょうか。あなたが何を必要としているかによります。もし今晚、目が見えない人がいるなら、よりすぐれた賜物の一つは、信仰の賜物でしょうし、おそらく奇蹟を行なう賜物だと言えます。目が見えない人は、他のどの賜物よりも、それらの賜物をありがたく思うでしょう。もし、ある問題について、とても混乱しているなら、知恵のことばの賜物がおそらく用いて、方向性を得るのに、よりすぐれた賜物と言えるでしょう。もし、ここに何か霊的に優れた者であると主張しているが、何か変なので疑わしいというのであれば、おそらく霊を見分ける賜物が、その状況では、よりすぐれた賜物と言えるでしょう。ですから、何がよりすぐれた賜物かは、どういう状況かによります。もし、状況が、あなたの個人的なデボーションの生活に豊かにされ、徳が高められることに関わるなら、異言の賜物が、あなたの祈りの生活を助け、個人的な祈りの生活、礼拝、神との親密な礼拝をよくするための、よりすぐれた賜物だと言えるでしょう。

それで、もう一週間、異言の賜物のテーマをやりたいと思います。来週は、異言の賜物の機構的側面について話します。実際的な観点から、この異言の賜物について見てゆきたいと思っています。来週の木曜の学びは、かなり興味深いと思っていただけるでしょう。どうやって異言の賜物を受けるかについて、幾つかのペンテコステ教会の中で行なわれていることを見てゆき、過去に用いられた方法について話します。できるだけ早く、「栄光、栄光、栄光、栄光、栄光。」と言うよう

に勧められることや、「イエス、イエス、イエス、イエス。」と言うように勧められることなどを見てゆきます。聖霊の助け手、異言を受けるのを助けようとする人たちについて、私の話すことが、みなさんを驚かせ、おそらく衝撃を与えることでしょう。次回の学びでは、異言の賜物を受けることについてお話します。そして、次回の学びで、この異言の分野は終わりにして、信者の生活における、聖霊に満たされた豊かさについて、さらにより良く見てゆくことにしましょう。

異言の賜物パート3(#3073)

Gift of Tongues Part3

異言は、人間の知性では非常に難解なものです。実際、自分が理解できない音を発すると、知性は反発します。異言は、知性を公然と侮辱します。このため、多くの人がとても正直に、異言の賜物がある理由や目的を全く見出だせないと言います。「なぜ、自分自身が理解できない言語や国語で、神に話さなければならないのか。」先に言いましたように、異言は知性を公然と侮辱するものですから、そのように感じるのもっともなことです。けれども、もし神が賜物を与えてくださったのなら、その賜物を持つことに何か価値があるはずです。さもなくば、なぜ神がそのようなものをお与えになるでしょうか。神との歩みがさらに良くなるために、神が私のためにしたいと思われることになら何でも、私個人は、心を開いていたいと思っています。私は、神が願われているなら、どのような人になってもいいと思っています。神が願われているなら、どのようなものをも持っていいと思います。神に対して、どのような扉であろうとも閉じたくないのです。「神さま。何でもほしいですけども、でも・・・」とは言いたくないのです。神が、これは必要である、良いものであると思っておられるものなら、何でも欲しいのです。神が私の人生でしたいと思われていることに、どのような扉であっても閉じたくないのです。

異言は、知性を公然と侮辱するものなので、この理由から、多くの人がこの異言の賜物を受けていないと私は思います。知的には理解しがたいものなので、信じられなくなっています。外国の街角に立って、人々が互いに現地の国語で話すのを見たことがあるでしょうか。非常に興味をそそられます。なぜかと言うと、互いに出している音は、全く私には理解できないからです。自分たちの意思を、そのような奇妙な音によって実際に伝達できているのですから、驚かされます。困惑します。互いに知的に、理解できるように意思疎通をしているのはわかりますが、私の耳にも知性にも、余りに異質なのです。彼らが互いに話しているのは、ちんぷんかんぷんのおしゃべりにしか聞こえないことがよくあります。私たちのbarbarian(野蛮人)という言葉は、ギリシャ語に由来し、ギリシャ人たちは、自分たちが理解できない言語を話す人たちのことをバーバースと呼びました。ギリシャ人たちは、ギリシャ語が文化的な言語だと思っていました。ギリシャ語を話さず、その他の国語で意思疎通をしている人たちは、バーバースでした。ギリシャ人たちにとっては、ちょうど彼らの言語はバーバーと聞こえたのです。このために、バーバー・アリアンから私たちのbarbarian(野蛮人)という言葉が由来しています。誰でもギリシャ語以外で意思疎通をする人たちのことをバーバースと考えた、ギリシャ人に由来しています。

言語は、実際には、特定の音が特定の考えを表すという、人と人の間の合意です。互いに契約、合意があるのです。特定の音を出すことができ、そして、こうした音が、こうした特定の考えを伝えているとの合意がなされました。あなたと私の間でこの契約がある限り、そして、こうした音がこういう意味を持っているという合意がある限り、ある外国人にとってはバーバースに聞こえる音によって、私たちは互いに意思疎通をはかることができるのです。そのような音は、彼らには全く理解できないものなのですが、そうした契約や合意があるために、私たちは自分たちの考えを互いに

伝達することができます。あなたも私も、この音はこれを伝達している、これが考えた、これが思いたという合意があるからです。ですから、実際に、言語を考案することも可能なのです。私たちが、特定の音が特定の考えを表していると合意することが条件ですが。それで、「アグ」は、「礼拝の後で、ホットファッジ・サンデー（訳者注：チョコレート・パフェのこと）を食べに行こうや。」という意味です。「ナグ」とは、「誰が金を出すか。」という意味です。「タグ」は、「俺のおごりだ。」という意味です。「ラグ」とは、「一口乗った」という意味です。あなたは、今晚の礼拝の後で、「アグ」と言えます。私は、「ナグ」と言います。あなたは、「タグ」と言い、私は、「ラグ」と言います。そして、私たちはアイスクリーム屋へ出かけます。私たちの間で、こうした音は、こういう意味だという合意が成立したからです。それは、私たちが互いに結ぶ契約です。それによって、私たちが合意した音を使って自分の考えや思いを表現します。

私は異言を、あなたと神の間の契約だと見ています。自分は理解しない音を発しますが、信仰によって、聖霊がそのような音を出すように促してくださっていると信じ、それが神に対する、私の霊からの礼拝と賛美の言葉になると信じます。神とそのような契約を結ぶわけです。聖霊がそのような音を出すように促してくださると信じるのです。私には理解できないのですが、「主よ、その音が、あなたへの私の霊の賛美、感謝、礼拝の表現であると理解しておられることを、信頼します。」これは、自分の知性がそれに反発する、全くの信仰による行為です。しかし、それはまた、自分の知性の限界を告白することでもあります。神に対して、大いなる喜び、私に現わされた神の豊かな愛への感謝を表現するのに、私には十分な言葉がありません。言葉が不十分であると思うことがよくあります。サバナローラは、「祈りが究極に到達すると、言葉は不可能である。」と言いました。

ダビデがそこに到達しました。その生涯のある時に、宮殿に座っていると、人々が幕屋へ行って神を礼拝するのが見えました。ダビデは、「これは正しくない。ここで私は美しい宮殿に住む贅沢な生活をしているのに、神の家は幕屋だ。私は、これまでに建設されたいかなるものをも卓越した神の家を立てよう。」と考えました（以下2サムエル記7:1-29参照）。それで、ダビデは、友人の預言者ナタンを呼びました。ダビデは言いました。「ナタン。私は神のための家を建てたいと考えている。主のためのすばらしい家だ。人々が来て、神にお会いすることができる場所を。それは、いかなるものをも超越したものとなる。」ナタンは、「ダビデ。すばらしい考えた。自分の心にあることをしなさい。」と言いました。その夜、主がナタンのところに来られ、こう言われました。「ナタン。おまえは早く話し過ぎた。先走って話した。ダビデがわたしのために家を建てたいのは構わないが、彼の手は余りに血を流した。彼は戦いの人だ。戦いの人だから、彼がわたしのために家を建てるのは相応しくない。だから、おまえは明日ダビデのところに戻り、ダビデにわたしのために家を建てることはできない、と言いなさい。これは大変ダビデをがっかりさせることなのだが、ダビデに対し、わたしが彼に家を建てると言いなさい。彼から出る子孫が、王座に着き、それは絶えることがない。」預言者ナタンはダビデのところに戻り、言いました。「悪い知らせと良い知らせがあるよ。まず悪い知らせだが、あなたは神のために家を建てることはできない。あなたの手は多くの血を流した。あなたが神のために家を建てることは相応しくない。けれども、神はあなたのために家を建て

ると言われた。そして、あなたの子孫が王座に着き、それは絶えることがない。」それで、ダビデは、主の御前に行き、圧倒されました。神が自分の子孫からメシヤを起こされることを考えて、圧倒されました。それは、ただただダビデを圧倒しました。そして、ダビデは、主の御前に行き、膝まづいて、「ああ主よ。あなたは私を羊の群れを追う牧場から取り、私をあなたの民の君主としてくださいました。」と祈りました。彼は、自分の最初の卑しい身分を思い出しました。単なる羊飼いでした。「あなたは私を羊の群れを追うベツレヘムへの丘陵の斜面から取り、私をあなたの民の君主としてくださいました。もし、それで十分でないなら、将来について、何が起こるのか私にお話ください。」私見ですが、ダビデは、これまで存在した中で、おそらく最も物事を言葉で表現できる人でした。彼には賛美を表わす賜物があり、彼に秀でる人はありませんでした。私が、もっと神を賛美したり礼拝をささげたいと思うときは、いつも、ダビデの詩篇を見ます。元気を得たいと思うとき、神が何をしてくださったかを考えるとき、神のあわれみ、恵み、すばらしさ、親切、といったものを賛美するにはどうしたらいいか考えるとき、いつも、ダビデの賛美を見ます。なぜなら、彼は実に言葉で表現できる人だからです。ダビデはこんなに言葉で物事を表現できるのに、神の真の恵みを見たときに、余りに圧倒され、「ダビデは、何を付け加えて申し上げることができましょう。(2サムエル8:20参照)」と言いました。「主よ。言葉が出ません。何を言えばよいのでしょうか。主よ。自分の内側で感じていること、つまり、あなたのこと、あなたのなされたことを、どうやって感謝し、愛し、ほめたたえればいいのか、それを十分に言い表す言葉がありません。」ですから、ダビデが感じた以上に、私は限界を感じます。神のこと、神がしてくださったことを、どうやって感謝すればいいのか、ほめたらよいか、賛美したらよいか表現しようと努力すると、自分の言葉には限界があることがわかります。ですから、ダビデが言ったように、「主よ。何と申し上げたらよろしいのでしょうか。」と言うことがよくあります。「あなたは私の心をご存じです。あなたは私がどう感じているか知っておられます。でも、私はそれを表すことができません。あなたが私のためにこんなにしてくださって、どれ程あなたを愛しているか、どれ程あなたに感謝しているか、主よ、私にはそれらを表す言葉がありません。これは、自分の限界を認めることなのです。自分の霊の奥にある感情を神に表したいのに、十分に表すことができないのです。

また、誰かのために祈るときにも、知性に限界があります。どのように祈ったらよいか、いつも分かるわけではありません。祈るときには、神のみこころに沿った祈りをするのが大切だとわかっています。ヨハネは、「何事でも神のみこころにかなう願いをするなら、神はその願いを聞いてくださいます。私たちの願う事を神が聞いてくださると知れば、神に願ったその事は、すでになえられたと知るので。(1ヨハネ5:14-15参照)」と言いました。私は、祈りは私たちが神の思いを変えるために存在するのでは、決してあるべきでないと思います。私たちのほうで、変えようとしているかもしれませんが、私は、祈りによって、神のみこころを探ります。もし、神の思いを変えることが可能だとしても、私は変えたくありません。可能だとは思いますが、それは、神は私たちを愛しておられるので、御思いを変えるようなことはなさらないからです。神のみこころや願いは、最善です。けれども、どのように祈ったらよいか、いつも分かるわけではありません。神が何をなさっているのかわかりません。神のご計画が何だかわかりません。将来何が起こるかわかりません。私の

ためや、私の祈っている人のために、神が実現されようとしている目的が、わかりません。その人たちが通っている試練に、どんな神の目的があるのかわかりません。彼らのために祈りたいのですが、神のすばらしい目的や、すばらしいみこころに反して、祈りたくはありません。ですから、私は祈って、自分ならこう望むということを神に話します。もし、神が提案を受け入れてくださるなら、幾つか提案がありますと伝えます。しかし、最終的な分析は、あなたのみこころがなされますように、なのです。

けれども、パウロは、「もし私が異言で祈るなら、私の霊は祈るが、私の知性は実を結ばないのです。(1コリント14:14参照)」と話しています。霊で祈ると、神のみこころが何かであるかは理解できないのに、神のみこころに従って祈っている確信はあります。しかし、御霊の助けを受けて、神のみこころに従って、礼拝と賛美をささげ、祈るなら、それはとても安らかにさせる体験です。自分は適切に神を賛美している、という事実にならぐことができます。神は賛美と礼拝を受け取り、それを理解しておられるのだ、という事実にならぐことができます。それは、自分の最も奥深い部分の表現です。自分の知性より深い部分、自分の意識より深い部分、その霊の深い部分から、私が神にささげる愛と感謝を、神は受け取り、理解することがおできになります。また、祈っている状況の中で、神のみこころにそって祈っている中で、神の御業とみこころが成されるのを私が望んでいることを、神は知り、理解することがおできになります。このため、とても安らぎます。満たされず。とても充足感があります。礼拝したり、賛美したり、執り成したり、どの場合でも、神が理解し、解釈なさるという事実にならぎを得ることができます。

さて、ペンテコステ派の間では、長い年月の間に、人が異言を話すように助け、援助しようとする、人の言い伝えによる様々な方法が開発されてきました。長年、私はこういった方法を見てきました。そのうちの一つは、ある言葉を繰り返し、繰り返し唱えることを勧めるというものです。例えば、「栄光、栄光、栄光、栄光、栄光、栄光、栄光、栄光、栄光」という言葉だったり、あるいは、「イエス、イエス、イエス、イエス、イエス」だったりするのです。さて、こういった言葉を、繰り返し、繰り返し、繰り返し唱えると、そのうち舌がもつれて、栄光というように聞こえない音が出て来ます。その人は、その時点で、異言で話し始めるようになることがよくある、というものです。人の顎をつかむのを見たことがよくあります。誰かが主を賛美していると、別の人がその人の顎をつかむのです。主を賛美しようとしていると、別の人がその人の顎を揺り動かすなら、理解できない音が出て来て、すると、異言で話し始めることがよくあります。「私の言う音を復唱しなさい。」と言う人もいます。その人のために祈っていると、異言で話し、その異言を復唱するように勧めるのです。さて、かつて私は、このようなやり方をみな、全く不埒なやり方だ、全く聖書的でない、とみなしていました。今もまだ、このようなやり方は聖書的でないとみなしています。けれども、あなたを丸くするという点では、年をとるのはすごいことです。私は、昔に比べると、ずいぶん丸くなりました。もし、主が再臨を遅らされ、私が天に召されるのも遅れるなら、年とともに、もっと丸くなるでしょう。かつては非常に重要だと考えていたものが、そんなに重要ではなくなってきたものがあります。かつては、これが無いとやってゆけない、こうでなければ絶対にだめだと思っていたものが、そうではないと認めるようになりました。それがなくても、やっていけることがわかりました。けれども、こうした

慣習を見て、さっきも言ったように、今でも聖書的でないと見ていますが、ひょっとすると、ある原理が働いているのかもしれないと見るようになりました。

私たちが克服しなければならない最大の障壁は、私たちの知性です。神が、私のために賜物を用意しておられるなら、神の賜物を私が受け取る方法は、ただ一つ信仰によってです。神の賜物は、信仰によって受け取らなければなりません。救いは神の賜物です。救いの賜物が自分のものになるために、信仰によってその賜物を受け取ります。聖霊は、私への神の賜物です。私は、信仰によって、聖霊の賜物を受け取らなければなりません。神の賜物が目の前にあっても、私が信仰によって受け取らなければ、自分のものにはなりません。信仰によって、神の賜物を自分のものとしなければなりません。行ないによってそれを得ることはできませんし、自分がそれを受けるに値するのでもありません。それが私のものになるのは、信仰によって、神の賜物を自分のものとするからです。多くの場合、人の信仰は受動的になっていると思います。そんなことが可能なかわかりませんが、もし可能であれば、です。受動的信仰と言うことは、撞着語法(訳者注:賢明な愚か者というように、矛盾する言葉をつなげる。)なのかもしれません。よくわかりません。けれども、神はおできになるのだが、いつの日か、それを行なわれるだろう、と信じることが多くあります。私には、それは、受動的信仰に思えるのです。「そう。神はおできになると信じます。たぶん、神はいずれそうなさるでしょう。」これは、受動的信仰に思えてしまいます。あるいは、そのような信仰を、受動的信仰として分類してしまいます。能動的な信仰は、「神は、今この時に働かれると信じます。」、あるいは、「ある条件がそろえば、神は必ず行なわれます。」と言い表すことです。12年間長血をわずらっていた女は、心の中で、「もし、イエスの着物のふさにでもさわることができるなら、自分の病気は直る。」と感じました(以下ルカ8:43-48参照)。それで、彼女は群衆の間をぬって、イエスの着物のすそをつかみました。すると、イエスはご自分から力が出て行ったことを感じ、この女はすぐに癒されました。イエスは、この女が行なったことを問われて、「あなたの信仰があなたを直したのです。」と言われました。彼女の信仰は、ある行動が引き金となるように設定されていました。「私がさわるその瞬間に、私は直る。」ですから、彼女の信仰が活動的になる点がありました。彼女は心の中で、信仰が活動的になる時間と場所を設定していました。「私がイエスの着物のふさをさわる瞬間」です。彼女は、「イエスが私にほほ笑みかける瞬間に、私は直る。」と言うこともできた、と思うのです。この点を、接点にすることもできたのです。彼女は、イエスの前に走って行って、大きくほほ笑みかけ、イエスがほほ笑み返してくださるのを期待することもできたのです。彼女のほほ笑みにイエスが応答された瞬間に、彼女は癒されたかもしれないのです。そうなら、イエスは、「誰が私にほほ笑みかけたのか。」とおっしゃったでしょう。ともかく、私は、信仰を放出する場所を設定することができる信じています。私たちが病人の上に手を置くように教えられているのは、そういった価値や、理由があるからだと思います。それによって、信仰を放出し、活動的にする点が与えられます。「長老たちが来て、私の上に手を置いてくれるなら、私の上に手が置かれるその瞬間に、神が私に触れてくださり、私は直る。」あるいは、油を塗るのも同じ考え方です。「油を塗ってもらい、長老たちに祈ってもらったその瞬間に、神が私を癒される。」それは、信仰を放出したり、活動的にする点なのです。しもべが病気であった百人隊長は、

イエスに、「おことばをいただきさえすれば、私のしもべは癒されます。」と言いました(ルカ7:6-10参照)。イエスのことばさえあれば、それでよいことを知っていました。それで、イエスは、「このようなりっぱな信仰は見たことがありません。」と言われました。イエスのみことばの力に対して、この人が持っていた信仰のことでした。その人の信じていた、イエスがことばを語られたその瞬間、彼のしもべは直りました。

さて、ペンテコステ派の間で行なわれている、あごを揺さぶることや、「栄光、栄光」と言わせることに戻ります。「栄光、栄光、栄光」と繰り返して、舌がもつれ、理解できない音が出ます。この音を聞くと、多くの場合、彼らの信仰が活動的になるのだと思います。「やった。ハレルヤ！」と思うのです。信仰によって、彼らは賜物を受けるのです。信仰によって受け取ったのです。それが、信仰の引き金になることがよくあるのです。ですから、かつて私が彼らを非難していたようにではなく、ある原則が働いている機能しているを見ることができるかもしれません。彼らは、たまたま、それにぶつかったのですが。それによって、神の賜物を受け取ったと信じる、信仰の引き金を引くのを助けることができました。その信仰の引き金が引かれた時、彼らは信仰によって賜物を受けるのです。「もらったぞ。」と。信仰の引き金が引かれることは、素晴らしいことです。「やった。、もらったぞ！」と言う瞬間があることは、素晴らしいことです。

何年も前に、ニューポート・ビーチにおける家で、毎週月曜の夜に聖書の学び会をしていたとき、かなり定期的にこのクラスに出席していた女性がいました。この学びで聖霊のテーマを教えていました。監督派教会の人の家庭で学びをしていました。その時、たくさんの監督派教会の人たちが聖霊の賜物を受けていました。それで、この婦人は、彼女が聖霊の賜物を受けることができるように祈ってほしいと、学びの終わりに私たちに頼みました。それで、私たちは祈りました。彼女は家に帰り、そして家に帰ると、アメフトのコーチである夫は、月曜の夜アメフトの試合を見ていました。このため、彼女は彼に話しても仕方がないと思い、居間に行って、膝まづき、主を礼拝し始めました。ただ、主を求め続けました。彼女がそこに膝まづいていると、突然、激しく吹く風の音を聞きました。彼女は、「わっ、これはすごいわ！」と思いました。私たちは使徒行伝2章を学んでいました。そこでは、激しい風が吹いて来るような響きが起こると、人々は満たされました。ですから、彼女が激しく吹く風の音を聞くと、喜び始めました。信仰により、彼女は賜物を受け取りました。後になって、暖房が入った音だと気づきました。でも、それが彼女の信仰の引き金になりました。ご覧のように、神の賜物を受けるのには、信仰が鍵なのです。神が約束されたことを信じ、約束されたことを神は実行されると信じるのです。曖昧な将来のいつか、ではなく、今、神がしてくださると信じるのです。

何年も前のことですが、私たちがアリゾナ州チューソンで牧会をしていた時、聖霊の賜物を求めた少年がいました。礼拝の後、私たち何人かが主を待ち望み、祈っていました。それで、この若い少年が聖霊の賜物を受けるように、彼の上に手を置き、彼は、「ダジャー、ダジャー、ダジャー。」と言い始めました。私は、「ダジャー？それは何だ。どうしたんだ。」と思いました。けれども、そこに私たちといっしょに祈っていた婦人が、輪になっていた私たちのまわりを回って私のところに来て、「スミス兄、スミス兄。彼は私の言語を話しています。それは、チェコスロバキア語で、『ありがとう。』

ありがとう。』です。」と言いました。私は、「主よ。お赦してください。」と思いました。そして、その男の子は、チェコスロバキア語で話し始めました。この女性は、この子が神を礼拝し、賛美していることを話してくれました。それは、素晴らしい体験です。

そういう信仰があるのです。そういう信仰の引き金を引く必要がよくあるのです。というのも、神の賜物は信仰によって受け取るからです。パウロがガラテヤの教会に手紙をかいた時、3章ではなくて、1章で(訳者注:実は3章2節)、「ただこれだけをあなたがたから聞いておきたい。あなたがたが御霊を受けたのは、律法を行なったからですか。それとも信仰をもって聞いたからですか。」明らかに答えは、信仰をもって聞いたから受けたのでした。多くの場合、私たちは、おきてを行なうことと関連づけます。というのも、聖霊を受けたときの証しで、「聖霊を受けるのを阻んでいたのは、ポケットに持っていたタバコのせいだったとわかっている。」と言うのをよく聞くからです。「それを取り出して、主の前に置いた瞬間に、主が私を聖霊で満たされた。」と。ここでも、信仰なのです。タバコを吸っているという罪の自覚によって、信仰が阻まれていたのです。「ただこれを主におゆだねしさえすれば、神が私を満たされる。」ですから、それを主に差し出したとき、その瞬間に信仰の引き金が引かれて、受けたのでした。しかし、それはうわべはおきてを行なったかのように見えます。完全に犠牲を払ったその瞬間に、神が報いを与えられた、と。違います。神が賜物をくださると信じ、信頼することを精神的に阻んでいたものを、ささげてしまうと、そう約束した瞬間に、信仰が活動的になり賜物を受けたのです。

私たちを聖くするために、聖霊が与えられるのではありません。興奮するような、活力を与えてくれるような体験をするために、与えられるのではありません。御霊に満たされるためには、ある聖さの段階に到達しなければいけないのではありません。多くの人が、ある聖さの段階を達成するか、到達しなければいけないことを示唆します。ちょっと前に、間違ったことを言いました。聖霊は、私たちのことを聖くして下さいます。聖霊は、私たちを聖くするために与えられます。けれども、聖霊が与えられるのは、主に私たちに力を与えるためです。イエス・キリストの証人となるための力を与えるためです。

さて、いろいろありますが、これは非常に議論されている領域です。ですから、いろいろありますが、覚えておかなければいけないのは、愛の至上性です。「たとい、私が人の異言や、御使いの異言で話しても、愛がないなら、やかましいどらや、うるさいシンバルと同じです。」賜物を受けていない他の人より、私の方が霊的だという証拠ではありません。残念ながら、とても意地悪な霊を持った、つむじまがりの人で異言で話す人がいて、何か霊的に優れたところに到達したと考えますが、それは、全く真理とかけ離れています。もし、神の賜物が愛をもたらさないなら、それは全く無意味です。私が伝統的な根本主義の立場をとり、異言で話す人はみな悪魔からのものだと非難するとして、異言を話す人たちに全く愛を持っていないとすると、私の根本主義的な正当派の考えは無意味なこきおろしにしかすぎません。答えは、愛のうちに歩むことです。3つのものがいつまでも残ります。それは信仰と希望と愛です。その中で一番すぐれているのは愛です。

ですから、もしあなたが異言で話すなら、楽しんでください。この賜物を理解しない人を見下してはいけません。また、彼らよりも霊的に優れているかのように考えてはいけません。あなたは優れ

ていません。もしあなたが異言で話さないなら、異言で話す人を見下してはいけませんし、その神の賜物を悪魔のものだとしてはなりません。その人たちは私たちの主を、感情的に熱烈に愛しています。その人たちも、あなたと同様に、大切なキリストのからだです。ですから、愛のうちに歩みましょう。もし、誰かが異言を話すなら、聖書の文脈の範囲で行なうかぎり、それは結構です。もし、異言を話さないなら、それも結構です。その人は、それでも、親しく、近しく、すばらしい、御霊に満たされた神との関係を持つことができます。異言は問題ではありません。問題は、聖霊がおられることによって、私からどれだけ愛が現われているかです。それが、聖霊についての、真の試金石です。私の持っている愛です。自分とは違う人を受け入れることができる愛です。または、自分とは違うと信じる人かもしれません。しかしながら、イエスは両方とも愛しておられることを認め、気づくことです。そして、イエスは両方とも神の家族に引き入れられたのです。それは、主が私たちを愛されたように、私たちが互いを愛することを学ぶようになるためです。

異言を解き明かす力 (#3074)

Gift of Interpretation

信者の生活における聖霊のテーマを学んでいる時に指摘したように、聖霊は私たちの内に生まれ、私たちをイエスの似姿に変えて下さいます。イエス・キリストを自分の救い主として受け入れた人は、その人の内に聖霊が住まわれています。パウロが言ったように、「あなたがたは神の神殿であり、神の御霊があなたがたに宿っておられることを知らないのですか。(1コリント3:16参照) あなたがたは、もはや自分自身のものではないことを、知らないのですか。あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから神のものである自分のからだに精神をもって、神の栄光を現わしなさい。(1コリント6:19-20参照)」なのです。エペソ人に対して、パウロは、「酒に酔ってはいいけません。そこには放蕩があるからです。御霊に満たされ続けなさい。(エペソ5:18参照)」と勧めました。そして、聖霊が肉の生活に対して勝利を与えて下さり、私たちをイエス・キリストの似姿に変えて下さる、すばらしい働きを私たちの生活にしてくださいませ。パウロがコリントの教会に書いたように、「私たちはみな、顔のおおいを取りのけられて、鏡のように主の栄光を反映させながら、神の御霊の力によって、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられて行きます。(2コリント3:18参照)」ですから、信者の生活のうちで、すばらしい聖霊の働きがあるのです。

けれども、それから、信者の生活からあふれ流れ出る聖霊の働きがあります。何年も前に、フォーレストホームでの牧師会議に出席しました。南カリフォルニア全域から、牧師がたくさん集まっていました。その時、私は、集まった牧師の中で一番若い部類でしたから、どれ程前のことかおわかりになるでしょう。とにかく、著名なスピーカーが招かれていました。彼は、人の最高の能力は、神を入れることのできる力だと言いました。それは、とても考えさせられる話で、実際、彼はそのテーマで本を書いたことがあります。そして、彼は続けて、私たちはこの宝を土の器に入れておくことができる、と告げました。私たちの体は、聖霊の宮となることができる。私たちには、神を入れておく能力がある。それが人の最高の能力だ、と彼は言いました。長年にわたり、私はそのメッセージについて考えました。けれども、本当にそれが人の最高の能力なのかと思いました。最高の能力は、神を入れておく力なのでしょうか。それとも、神が自分の生活からあふれ流れ出て下さることなのでしょうか。ここでは、私は、神がご自分の愛と力を私の回りの乏しい世界に注ぎ出すときの管になっています。祭りの終わりの大いなる日に、イエスは立って、大声で言われました(以下ヨハネ7:37-39参照)。「だれでも渇いているなら、わたしのもとに来て飲みなさい。わたしを信じる者は、聖書が言っているとおり、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになる。」そして、ヨハネは、イエスが御霊のことを言われていた、と注釈を付け加えています。どうやら、イエスが弟子たちに指し示しておられたのは、このことのようにでした。私たちの生活に内住される聖霊のことだけでなく、— それ自体非常にすばらしいことなのですが、— 自分の生活から聖霊が放出され、聖霊が私の生活から生ける水の川のようにほとばしり流れ出て、神が私のうちでなされたことにより、私の回りの世界が影響を受けるのです。一方は主観的です。すばらしく、必要なことです。それは、私の生活のうちの、主観的な聖霊の働きです。けれども、これは、つねに

客観的な方へ向かっています。私の生活は、神が、私の回りの、渴いた乏しい世界に触れてくださる器になります。

ですから、パウロがコリント人への手紙12章から14章で書いたさいに、御霊の賜物のいくつかについて説明しています。私たちの生活において、また、私たちの生活を通して、神の御霊が現われる方法のいくつかです。パウロは、まず、12章の初めの方で、9つのさまざまな現われを列挙しています。それについて、パウロは、聖霊が、みこころのままに、おのおのにそれぞれの賜物を分け与えてくださる、と告げています(1コリント12:11参照)。みな、これらすべての現われを持っているわけではありません。12章をしめくくるにあたり、パウロは反語的な質問をしています。「みなが使徒でしょうか。みなが預言者でしょうか。みなが教師でしょうか。みなが奇蹟を行なう者でしょうか。みながいやしの賜物を持っているでしょうか。みなが異言を語るでしょうか。みなが解き明かしをするでしょうか。(1コリント12:29-30)」そして、答えは明らかですが、「いいえ。」です。しかし、聖霊は、みこころのままに、おのおのにそれぞれの賜物を分け与えてくださるのです。ですから、すべて合わせるとキリストのからだ全体となって、神が意図されたようからだが機能するのです。けれども、パウロが指摘しているように、私たちのからだは多くの器官から成っており、全ての器官が同じ機能を果たしているのではないのですが、からだ全体が機能するために必要なのです。ですから、私は、からだには必要ではないと言うことはできないのです。あなただけでは、完全ではありません。耳は目に対して、「私はあなたを必要としない。」とは言えないのです。もしそうなら、どうやって見るのですか。ですから、御霊は私たちにさまざまな賜物を分け与えて下さり、全てを合わせると、機能するからだになります。そうすると、私たちの回りの世界に対し、力強い証人となるのです。

さて、最初の9つの現われを見てゆくと、9つ目が、異言を解き明かす力です。12章10節です。「ある人には異言を解き明かす力が与えられています。」さて、これは異言の賜物と対となっている賜物です。面白いのは、これが、唯一、この賜物のために祈るように、具体的に教えられている賜物であることです。つまり、パウロが言っているように、「もし異言を話すのならば、・・・」それは、教会の中で、教会に向かって異言で話すことへの言及ですが、いや、実際は、教会の前において、教会に向かってではなく、神に対して異言で話すことです。教会の前において異言で話すのであれば、その人は、自分の賛美と感謝によって教会全体の徳が高められるように、それを解き明かすことができるように祈りなさい、と述べています(1コリント14:12-13参照)。さて、この節は、異言を個人的に用いることには、当てはまらないと思います。過去3回詳しく異言のテーマの学びをしたときに指摘したように、聖書ははっきりと、個人のデボーションで異言を用いることを勧めており、教会でそれを用いることは限定され、制限されていることを指摘しました。教会で用いることはできますが、不信者が誰もいず、教会の人だけが集まった時が望ましいのです。ですが、教会で用いられる時は、はっきりとした限定と、規制があります。パウロ個人は、自分の異言の賜物を、教会ではできれば用いたくないとしています。パウロは、それを、自分の個人的なデボーションのときだけにとっておき、キリストのからだが集まっている時は、異言で一万語話すよりは、5つのわかることばを話したいとしています(1コリント14:18、19参照)。ですから、個人的なデボーションの

ときには、それを解き明かす必要はありません。唯一、解き明かす必要が出てくるのは、教会の中で異言が用いられる時だけです。

「解き明かし」と訳されているギリシャ語の言葉は、ヘルメネイア(hermeneia)です。説教学(homiletics)という言葉はこれに由来しています。これは、聖書を解き明かす学問のことです。ホームレティックス、あるいはヘルメネイアは、解き明かし(interpretation)です。この同じヘルメネイアというギリシャ語の言葉は、他の箇所でも、翻訳(translation)と訳されています(訳者注:ヘルメネウオ、であれば、ヨハネ1:38などに、「訳して」という言葉で訳されています。)。しかし、この賜物を適切に言及するとすれば、解き明かしのようです。さて、翻訳と解き明かしに違いがあることに気づきます(訳者注:interpretationは、日本語で、「解き明かし」の他に、「解釈」とも、「通訳」とも訳されます。)。翻訳は、望ましくは、できるだけ一言一言を、一つの言語から別の言語のそれに近い言葉に変えてゆく、逐語訳のことです。かつて、通訳者というか、翻訳者として、私と一緒に協力してくれた人たちが、解釈しようとした人たちがいました。私は短くしか語らなかつたのに、その人は私の発言を解釈しようとして、数分くらい時間をかけました。ですから、その人たちは私のことを翻訳しただけではなく、私の言ったことを解き明かそうとしたのです。いつも、いったい何を言っているのかしらと思いました。私の言ったことをどのように解釈しているのかな、と。私の言ったことを誤って解釈していることがかなりよくあることがわかりました。彼らは私の言っていることを理解していませんでした。韓国で、何年か前のことですが、そこに行ったことがあって、私のために訳をしてくれていた人がいて、韓国のソウルにある大きな長老派の教会で私は話をしていました。冒頭、自分では最高だと思った冗談を話しました。人々の心が打ち解けるようにと思ったのです。私も人間で、ユーモアの感覚も備えていることを伝えたかったのです。それで、私がおちの部分に来ると、みんなはぼーっと座っているだけでした。私は、こりゃ大変だ、と思いました。反応がない人たちだ、と。それで、礼拝の後、何人かの人をつかまえて、私が何と言ったと思われるか、と言いました。問題は、訳者が、冗談をまったく解していなかつたのです。訳者はおちがわからなかつたのです。彼は、冗談をまったく台無しにしてしまっていたのでした。それ以降、もし何か冗談めいたことを言うときは、まず訳者にそれを話して、訳者が笑うなら、その冗談を使うことにしています。もし、笑ってくれないなら、その冗談は、お蔵入りにしておきます。「だめだ。説明できない。」と思うのです。

時に、解き明かしは、それよりも突っ込んだものです。意味を与える、理解を与えるものです。場合によっては、説明です。何らかの説明が必要だと思った説教を聞いたことがあります。だから、必ずしも長さについては、解き明かしが異言での発言に対応していなければならないとは思わないのです。異言での発言が短くて、説明があるので長い解き明かしもあるし、その逆もあるのです。場合によっては、通訳を介して話した時に、うっかり話し込んで、45秒くらい話してしまい、「そうだ。訳してもらわなくちゃ。」と思って、話を止めると、通訳は、二言ほど話して、私に対して、続けるように会釈したことがあります。私は、「あれえ。かなり凝縮させたな。」と思うのです。

さて、パウロは、異言の賜物を用いる時に、その人は人に対して話しているのではないことをはっきりと述べています。「神に話すのです。というのは、自分の霊で奥義(mysteries)を話すからで

す。(1コリント14:2参照) 」ウェイモスは、それを「神の秘密(Divine secret)」と述べています。さて、異言を話す者は、人に話すのではなく、神に話すのですから、自然と、その解き明かしは、人に対して語られているのではなく、解き明かしは、神に告げられたことの解き明かしになります。祈りでも、賛美でも、感謝でも、それは神に告げられたことの解き明かしになります。ペンテコステ派の間で、異言が語られ、それから解き明かしをしているということになっている人が、「主の御告げ。わたしの子らよ。もし、あなたがわたしに聞き、声をあげ、わたしをほめたたえるなら、あなたのことを祝福し、わたしの霊をあなたに注ぐ。」と始めることがよくあります。それは、おおむね、教会に対する勧めです。これは、異言の解き明かしではありません。彼らは通常、それを異言によるメッセージと言います。しかし、それは全く聖書的ではない用語です。神は、教会に対して異言ではお語りになりません。神は教会に対し、預言を通してお語りになりますが、異言の賜物を通してではありません。解き明かしがあったとしても、そうではありません。

ペンテコステ派の教会で私は大きくなりました。日曜の朝、2回、3回、4回と、メッセージが異言を語ることによって中断されることがよくありました。彼らはそれを、異言によるメッセージと言っています。子供ながらに、私は、それは神が私たちに異言で話しておられた、解き明かしがついて、異言で神からメッセージがあったと思っていました。友達に、いっしょに教会に来るようにさそったことを覚えています。彼の名前はエド・ヘンキーと言いました。後に彼は、サンフランシスコ・フォーティナーナイナズのエンド・ディフェンスをやったことのある人物です。大柄なドイツ系の子でした。彼と私は親友でした。放課後に、いろいろな所に一緒に行きました。彼の話し方は下品でしたが、私は彼に証をしました。それで、彼はある日曜日の朝、私といっしょに教会に来てくれました。私たちの前に座っていた女性が、荒々しい息づかいになりました。それは、異言を語る兆候だとわかっていました。私は頭を垂れ、「ああ。神様。どうか今日は異言では語らないで下さい。」と祈り始めました。エドは絶対理解できないとわかっていましたから。それに後で、ばつの悪い質問が出て、私には答えられないのが目に見えていました。けれども、神は、私の祈りを聞いて下さらなかったようでした。ペンテコステ派の間では、異言によるメッセージがあるという考えがよく見受けられます。ですから、その解き明かしは、教会に対する神のメッセージというわけです。

さて、私はこれを分析しようと思いました。これらの人々に欺きなどなく、主を愛しています。彼らは、神との真の体験をしていると思うのです。それを、軽視するものではありません。けれども、私が見たのは、みなさんがペンテコステ派やカリスマ派の間でよく見るのは、異言が語られると、その純粋な解き明かしが続くのではなく、預言の賜物が続くのだと思うのです。と言うのは、「預言をする者は、徳を高め、勧めをなし、慰めを与えるために、教会に向かって話す(1コリント14:3参照)」からです。解き明かしとされているものの内容についてですが、私はそれは預言だと考えますが、これに注意すると、内容は一般的に、徳を高めること、勧め、あるいは、慰めです。したがって、人々は、異言の賜物とその解き明かしの体験をしていると信じているのですが、実際は、異言と預言なのです。何が起きているかについて、私が思うには、異言が与えられると、預言の賜物を持っている人が異言によって勇気づけられるので、立ち上がり、会衆に預言を語るのです。パウロがローマ人への手紙で語っているように、「もしそれが預言であれば、その信仰に応じて預言

しなさい。(12:6参照)」ですから、信仰は、だいたい、異言を通して建てあげられ、預言をする人は、教会に対して預言をするのです。

さて、パウロは、「もし、異言を語る油注ぎを受けていると感じるなら、教会に解き明かしをする者がだれもいなければ、公に語るのではなく、自分と神とに語りなさい。(1コリント14:28参照)」と告げています。これは、非常に重要な点を指し示しています。そのうちの一つ、これをペンテコステ派の人たちは取り違えているようなのです。とかく、ペンテコステ派の間では、異言で語るのは、制御できないという思いや考えがあります。どういうわけか御霊が支配し、制御を失い、英語で話そうとしたけれども、異言で話しているのだ、と。ある女性のことを思い出しますが、すばらしい神の聖徒ですが、この人たちのことを軽蔑しているのではありません。ただ、欺きはないのだけれど、誤りだということを指摘しようとしているだけです。彼らが主を愛していないというのではありません。悪だというのではありません。彼女の証を覚えています。異言が与えられ、次の日、ガス会社の人メーターの検針に来て、彼女がその人に何かを尋ねに行こうとしたとき、異言で話だし、その人は怖くなって、逃げて行ったということでした。考え方としては、彼女はそれを制御できなかったというものでした。しかし、パウロは、はっきりと、「預言者たちの霊は預言者たちに服従するものなのです。(1コリント14:32参照)」と述べています。ですから、あなたは制御することができます。声を出して語らなくてもよいのです。もし解き明かす者がだれもいなければ、自分と神とに語りなさい。声を出して語らなくてもよいのです。また、パウロは、自分自身の生活の中で、この賜物を用いることについて言及して、こう述べています。「私は、あなたがたのそれよりも多くの異言を話すことを神に感謝していますが、教会では、異言で1万語話すよりは、わかっている言葉で5つ話したいのです。では、どうすればよいのでしょうか。(1コリント14:18-19参照)」また、こう述べています。「もし私が異言で祈るなら、私の霊は祈るが、私の知性は実を結ばないのです。ではどうすればよいのでしょうか。私は霊において祈り、・・・」つまり、意思が用いられています。「また知性においても祈りましょう。」それを制御することができます。私が制御できないものではありません。神の御霊は預言者たちに服従するものなのです。私たちは、たくさんをサタンのせいにしたくなるがよくあります。しかし、必ずしもサタンの責任ではないものがあると思います。私たちの愚かさである場合もあります。本当は、聖霊に責任がないことなのに、聖霊のせいにしたたり、主のせいにしたたりすることがあります。私たちがした愚かなことで自分で責任を取りたくないのに、聖霊が促したから、とか、どうしようもなかった、とか言うのです。けれども、それはいただけません。

解き明かしの力の賜物は、どのように働くのでしょうか。さて、聖書は、賜物にはいろいろな種類があり、働きにはいろいろの種類があると教えています(1コリント12:4、6参照)。ですから、解き明かしの力の賜物は、私の生活ではある方法で働き、あなたに解き明かしの力の賜物があるなら、あなたの生活において、それとは別の方法で働くかもしれません。なぜなら、働きにはいろいろの種類があるからです。神はいろいろなことをなさる方であり、「神のやり方はこうだ。」と、私たちが神を狭い部屋に押し込めてしまうような、型にはまったことをなさらないことが、私は大好きです。神は、さまざまな方法で事をなさるので、ある状況の中で、神が他のやり方を選ばれることに対し、私たちは心を開いていることができるからです。イエスがいやされた目の見えない人たちに注目し

てください。ある人には、その人の目につばきをかけられ、「何か見えますか。」と言われました。目につばきをかければ、目がぼやけるでしょう。その人は、「人が歩いているのが見えますが、木のようです。」と言いました。それから、イエスが、その人の上に再び手を置かれると、その人ははっきりと見えるようになりました。けれども、エルサレムにおいては、イエスは地面につばをはき、泥をつくれ、その泥を目の見えない人の目に入れられました。そして、「シロアムの池へ下って行って、目を洗いなさい。」と言われました。そのようにすると、見えるようになりました。今週、マルコの福音書10章では、先週の日曜日に注解することができませんでしたので、再度マルコの福音書10章を学びますが、バルテマイがエリコにいました。イエスは、ただバルテマイにお話しになるだけで、目がみえないのが直りました。ですから、3人の盲人がいて、みな目が見えないのが直りましたが、同じ方法で直ったのではありませんでした。それぞれ、少しずつ異なる方法で直りました。働きにはいろいろの種類があります。

ですから、賜物が私の生活においてどのように働くのかを話すことはできますが、だからと言って、あなたの生活においてそのように働くとは言えないのです。私たちは、よくこのような間違いをしてしまいます。他の人の証を聞いて、その人たちはある体験について証をして、その神の御業を、身体に起こったこととして、どのような感情だったのか話しますが、私たちは、「ああ。そうか。そうなるはずなんだ。」と考えてしまいます。誰かがこう言いました。それは、フィニーでしたが、彼が聖霊のバプテスマを受けたときのことを、液体の愛の波が、繰り返し繰り返し自分に押し寄せて来た、と言いました。すると、人は、「へえ。そう感じるのか。」と思い、「主よ。液体の愛の波が私の上を流れますように。主よ。波が・・・」と思ってしまう。しかし、それはフィニーのことなのです。ですが、人によって、それぞれ違うのです。人によっては、「誰かが、暖かい油を頭から私全体にかけてくれたようだった。そして、体中にゆきわたった。あー。」と言います。また、他の人は、「ゾクゾクする感覚が走った。」と言います。それで、「主よ。ゾクゾクさせて下さい。」と言うのです。だが、私たちは、他の人の体験を真似しようとしているのです。しかし、必ずしもそのようにはいかなのです。働きにはいろいろの種類があります。ですから、神は、型にはまる方ではないのです。この賜物がどのように働くかについて話すさいに、前置きをしておきたいのです。私の生活において、賜物がどのように働くかをお伝えすることはできますが、あなたに解き明かしをする力の賜物があっても、必ずしもあなたの生活においてそのように働くのではないのです。誰かが異言で話していると、その人があたかも英語で話しているかのように、私は理解します。考え、賛美、感謝・・・そういったものが私の頭に入ってきます。よくあることですが、もちろん数分間続くので、いつもすぐ思い出すことができるわけではありませんが、まず、最初に来た考えを話して、そして話していると、また考えが戻ってきて、話されたことの解き明かしが流れるようになります。

さて、異言が語られても、必ずしもいつも解き明かしが与えられるのではありません。その事実を私は感謝しています。これは神からの賜物だということを思い起こさせてくれるからです。ただあるというのではなく、それは聖霊の賜物なのです。人は、聖霊の油注ぎを体験することができます。特に、神のみことばの奉仕をしているとき、神のみことばを教えている時に体験することができます。それが与えられれば、わかりますし、与えられていなければ、それがわかります。場合に

よっては、みことばを教える、説教することは、最もたやすい、ワクワクする体験になりうるのです。なぜかと言うと、ただ流れるようだからです。あー、すばらしく流れるのです。場合によっては、まさに格闘です。考えの調整がつかず、まとまらず、ひっ掛かって、思考回路が流れるようにいかないのです。もし、与えられていないなら、強引に続けるより、「みんな。来週また来てね。」と言った方がよいと言いたいくらいです。もし、誰かが異言を発して、異言で語っていて、その解き明かしが与えられなくても、異言を話している人の賜物の正当性がそがれるのではありません。ただ、神が自分に、語られたことへの理解や解き明かしを与えられなかっただけです。

さて、旧約聖書の中で、この賜物の現われが一つでもあるのでしょうか。全く同じ賜物ではないのですが、類似した賜物はあると思います。それは、夢の解き明かしの賜物です。ヨセフやダニエルなど、神が夢の解き明かしの賜物をお与えになった人たちがいました。ヨセフについては、ヨセフ自身の夢のことを思い出します。そして、牢に入っている時、料理人と献酌官の両方が夢を見たとき、ヨセフは、彼らのために夢を解き明かしました。ヨセフが夢を解き明かすことができたので、究極的には、その能力によってパロの前に出ることになり、そこでヨセフはパロの夢の解き明かしをして、エジプトで高官の地位につくようになったのです。同じことがダニエルにも言えます。夢の解き明かしの賜物です。さて、ヨセフについては、それを神に帰しました。パロの夢を解き明かすことができた能力をヨセフは、神に帰しました。ダニエルの場合は、聖なる神の霊がダニエルに宿っているので、夢を解き明かすことができ、謎を解決することなどができる、という評判がありました(以下ダニエル書5:1-29参照)。解き明かしの賜物です。宮殿では、それによってダニエルは知られていました。王の母は、ダニエルには聖なる神の霊が、あるいは、聖霊がおられる人だと言いました。さて、ある時、ベルシャツアルが千人の貴人のために大宴会を催すと、突如として、祖父のネブカデネザルがエルサレムの宮から持ち出してきた金銀の器を取り出し、聖別された器でぶどう酒を飲み、金銀の神々をたたえ始めると、突如として、塗り壁から、手の形をしたものが現われ、見知らぬ言葉が書かれました。「メネ、メネ、テケル、ウ・パルシン。」と。王は、知者と議官たちを呼び入れ、壁に書かれたものを解き明かし、意味を伝えるようにと言いました。しかし、彼らはできませんでした。その時、王の母が、王の祖父の時代に、大いに祖父を助け、夢を解き明かし、謎などを解くことのできる者がいたことを話し、その者を呼び入れるのがよいだろうと言いました。それで、ダニエルは連れてこられ、壁に書かれた言葉の解き明かしをしました。しかし、それは、新約聖書での賜物に匹敵するものではありません。なぜなら、これは、王に対する、神からのメッセージだったからです。明らかにこの場合は、王に対する神からのメッセージでした。

さて、新約聖書に來ると、面白いのは、新約聖書の中で、解き明かしの賜物が用いられている記録は、私の知る限りは、ありません。ただ、あるのは、コリント人への手紙第一にある、そのテーマについてのパウロにある教えです。しかし、それはかなり限られています。しかし、この特定の解き明かしの力の賜物については、それだけしかありません。実際に、賜物が組合わさって用いられたとか、解き明かしがされたという出来事は記録されていません。ですから、あまりそれ以上、話を進めることができません。G. キャンベル・モーガンは、使徒行伝の注解書の中で、次のように示唆しています。ペンテコステの日に、みな異言で話すようになり、さまざまな言語のグループ

の人たちが、自分の言葉や国語で、すばらしい神のみわざについて話すのを聞きました。そのことについて、G. キャンベル・モーガンは、奇蹟は、彼らが自分たちの言語で聞いたという事実にあったと信じています。彼は、彼らはみなギリシャ語で話していたのですが、すばらしい神のみわざを告げたとき、奇蹟は人々が自分の母国語で聞いたことだと推論しています。どこで、G. キャンベルがその考えを得たのかわかりませんが、面白い概念です。私は彼に同意しませんが、これについて、他の考えがあることをお伝えしたかったので、お話をしました。

1968年、69年、そのあたりにさかのぼりますが、最初にコスタメサで始めた小さな教会から移転して、ニューポート・ビーチのクリフ・ドライブにあるルーテル教会と会堂を共用していた時、ルーテル教会は朝の礼拝をして、私たちは午後には礼拝をしていました。ルーテル教会の人たちが教会を出て行き、私たちが教会の施設を全部使えるようになるのを待っていました。結局、その教会を全部使うようになる前に、私たちの人数はその教会の収容員数を上回ってしまい、私たちは、隣の角に教会を建てました。ただ、日曜の夕拝の時、私たちはイースブラのクラブ・ハウスで集会をしていました。68年のときだったか69年のときだったか覚えていませんが、私たちはペンテコステの日曜日に集まっていました。その当時、私たちは、日曜の夜は45人から50人ほどでした。私たちは、もっと堅苦しくない聖書の学びができました。私はみんなといっしょに座り、聖書を分かち合っていました。その時も、聖書通読の学びをしていましたが、とてもくれた学びでした。学びの最後に、とても小さいグループでしたので、50人か60人くらいしかいないと言いましたが、私は、「今日はペンテコステの日曜日です。聖霊が臨まれたことと、教会の誕生を祝う日です。」と言いました。私たちの仲間に、リンという名の女性がいました。その人は、すばらしい異言の賜物を持っている人でした。彼女が異言で話すとき、フランス語で話しました。それで、私は、「さあ。主を礼拝しましょう。リン。神があなたに下さった賜物、異言を用いてくださいませんか。私たちだけだし、ペンテコステの日曜日ですから。記念して。今日はペンテコステの日曜日ですから。」と言いました。それで、リンが異言で、フランス語で話し始めました。私は、彼女が、神が美しい歌をくださったことに神に感謝をささげているのだ、ということがわかるだけのフランス語ができました。さて、私は、知性で、フランス語の言葉が少しはわかったので、解き明かす力の賜物を用いる努力はしませんでした。なぜなら、自然にいくつかの言葉をすでに知っており、彼女が言っていることがだいたい自然に分かりましたので、解き明かしをしようとしたら、自然と超自然の間で身動きが取れなくなるのではないかと思ったからです。自然と超自然のどっちでもない狭間の世界に行ってしまった、戻れなくなったらこまると思いました。私は解き明かしをする努力はしませんでした。しかし、ケイが解き明かしをし始めました。とてもすばらしいものでした。リンは、神が美しい新しい歌を自分の心に下さったことを感謝していました。彼女の神への愛の歌、神への愛を歌うことの喜びと祝福についてでした。それは、かなり大切なことでした。というのも、リンは、ナイト・クラブで歌を歌っていたことがありました。美しい歌声をしていました。ですから、神が与えて下さった新しい歌を、つまり、神への賛美と愛の歌について彼女が喜んでしたのは、重要でした。

集会を終えると、パームスプリングスにいるガールフレンドを持つ男性が来ました。このガールフレンドには、問題がありました。それで、その男性は、礼拝の後で私からカウンセリングを受ける

ようにと、彼女をその夜、集会に連れてきました。カウンセリングをしようと私たちが座りましたが、ちなみに、その女性はユダヤ人でした。彼女は、こう言いました。「私が話したいことを話す前に、今晚、最後に起こったことを不思議に思っているのですが。ある女性がフランス語で話しました。もう一人の女性が、話されたことをみなのために通訳しました。」私は彼女に、「両方とも、どちらもフランス語を知らないと言ったら、信じますか。」と言いました。彼女は、「いいえ。私は信じません。」と言いました。私は、「そうなんです。」と言いました。「どっちもフランス語は知らないのです。」と言って、彼女に、異言の賜物と異言の解き明かしの賜物についての、聖書箇所を示しました。「あなたが見たのは、ここコリント人への手紙でパウロが話していることです。一人が、異言で話し、もう一人がそれを解き明かすのです。」と私は言いました。彼女は、「私は5年間パリに住んだことがあります。彼女は、最も美しいフランス語で話しました。貴族の話すフランス語の発音で話しました。普通のフランス語ではありません。彼女のは貴族の発音でした。」と言いました。私は、「主がなさることですから、当然でしょう。」と言いました。そして、彼女は言いました。「もう一人の女性は、完璧な翻訳をしました。」私は、「彼女が、フランス語を知らないのはわかっています。私の妻ですから。」と言いました。彼女は、「これ以上話す前に、私は主を受け入れます。」と言いました。それで、私たちは、彼女を主に導く喜びにあづかることができました。それは、賜物が真に用いられるのを見た結果でした。この場合は、彼女が異言と解き明かしの賜物を見たので、異言が不信者のしるしとなりました。

かつて、アリゾナ州ウィリアムズで、青年のキャンプをして休暇を過ごしていました。それが、私たちにとって、休暇をとることができる唯一の方法でした。キャンプでは、寝泊まりする所と食事が与えられるので、私たちはそのキャンプに行き、アリゾナで私はキャンプの監督をし、家族はウィリアムズの周辺のアリゾナの美しい山々やグランドキャニオンを訪ねることができました。それで、毎夏そこで青年のキャンプをして監督をし、休暇をとりました。私たちがそこに行こうとしていた時です。夏になっていて、そこで、2週間の休暇をとろうとしていました。その年は、娘のジャンが5年間フランス語をとっていました。UCI(カリフォルニア州立大学アーバイン校)でフランス語をとり、かなりフランス語が流暢でした。ジャンが、そのキャンプで、女の子たちのカウンセラーになることになっていました。それで、家族は、日曜の夜の後で、そのときは、もちろん小さい教会から移転する前でしたから、その夜は、もっと人が少なかったのです。30人か40人くらいだったでしょう。その6ヶ月後に、カルバリーチャペルを始めました。家族で行って、教会が私たちの回りに集まり、私たちの上に手を置き、神が私たちと共にいてくださり、アリゾナで私たちを若い人たちのミニストリーに用いてくださるよう祈ってくれました。たまたま、リンがジャンの上に手を置き、彼女のために霊で祈り始めました。もちろん、面白いのは、リンがフランス語で祈っていたので、ジャンはそれを理解することができたことです。リンは、神が、ジャンを、少女たちのすばらしい証人となるように助けてください、神の愛がジャンからあふれ流れ出ますように、彼女が大いなる祝福となりますように、ジャンの奉仕の結果、少女たちが受ける感銘が、生涯続くものとなりますように、と祈りました。リンがジャンのために続けて祈っていると、ジャンは私に、「おとうさん。からだ全体が震えたわ。これは、聖霊が私のために祈ってくださっているのだ、とわかったから。」と言いました。パウロ

が言ったように、御霊は、みこころにしたがって執り成しをしてくださいます。ジャンは言いました。「こう気づいたの。リンは、自分にはわからない言葉で祈っているの、彼女は何を祈っているか知らないんだ。」しかし、ジャンは理解できました。それで、ジャンは言いました。「聖霊が私のために祈って下さっていたのはこのことだった、私のために執り成して下さっていたのだ、と気づいて、ワクワクしたわ。ああ、これが私のために主の願われていることであり、祈りであると知ることは何てすばらしいのでしょう。」

こうした賜物を用いるときに、かなり乱用が頻繁にありました。そのために、パウロがコリント人に手紙を書いたのです。パウロによるコリント人への手紙は、おおむね矯正のための書簡です。コリントの教会では、さまざまな問題がありました。党派の問題が起こり、教会の中で不道徳が起こり、教会がそれを許容してしまい、教会の中の悪を許容することによって霊的に優れているかのように感じていました。彼らは、主の晩餐でも問題を抱えていました。主の晩餐にあづかる態度の問題がありましたし、御霊の賜物を用いることの問題もありました。そして、最後に、よみがえりについての理解の問題もありました。実に問題のある教会でした。しかし、彼らに問題がなかったとしたら、こうしたテーマについての教えがまったくなされなかったでしょうから。おそらく、彼らにそのような問題があったことは良いことだったのでしょう。なぜなら、そのために、こうした非常に重要なテーマについて、パウロがコリント人への手紙で取り扱っているの、それについてかなり明らかになり、教えも与えられているからです。しかし、現時点まで、問題が続いているのは悲しいことです。あまりにたくさんの賜物の乱用があるので、御霊の働きについて良くない評判があることがよくあります。それは、賜物が乱用されているからです。その結果、多くの誠実なクリスチャンが、御霊の賜物をおざなりにしてきました。御霊の賜物を否定してきました。なぜなら、彼らは乱用しか見ず、真に賜物が用いられるのを見なかったからです。

戸を完全に閉じてしまうのは間違いだと思うのです。私たちがしなければならないのは、御霊の賜物を用いることに心を開いていることです。聖書の中に敷かれている指針によって調整されるように、聖書に書かれている規則を用いて、賜物を用いなければなりません。それは、ふさわしく秩序をもって用いるためです。御霊の賜物を用いることが混乱を起こさないためです。神は混乱の神ではないからです。しかし、産湯が汚いからといって、産湯といっしょに赤ちゃんまで捨ててしまうのはやめましょう。汚い産湯を捨てて、赤ちゃんはとっておきましょう。

助ける賜物(#3075)

Gift of Help

コリント人への手紙第一12章を開きましょう。パウロは、教会の中で働いている御霊の賜物を説明し、それをからだにたとえています。「(12節から) からだが一つでも、それに多くの部分があり、からだに部分はたとい多くあっても、その全部が一つのからだであるように、キリストもそれと同様です。なぜなら、私たちはみな、ユダヤ人もギリシャ人も、奴隷も自由人も、一つのからだとなるように、一つの御霊によってバプテスマを受け、そしてすべての者が一つの」からだ、いや、「御霊を飲む者とされたからです。確かに、からだはただ一つの器官ではなく、多くの器官から成っています。たとい、足が、『私は手ではないから、からだに属さない。』と言ったところで、そんなことでからだに属さなくなるわけではありません。たとい、耳が、『私は目ではないから、からだに属さない。』と言ったところで、そんなことでからだに属さなくなるわけではありません。もし、からだ全体が目であったら、どこで聞くのでしょうか。もし、からだ全体が聞くところであったら、どこでかぐのでしょうか。しかしこのとおり、神はみこころに従って、からだの中にそれぞれの器官を備えてくださったのです。もし、全部がただ一つの器官であったら、からだはいったいどこにあるのでしょうか。しかしこういうわけで、器官は多くありますが、からだは一つなのです。そこで、目が手に向かって、『私はあなたを必要としない。』と言うことはできないし、頭が足に向かって、『私はあなたを必要としない。』と言うこともできません。それどころか、からだの中で比較的弱いと見られる器官が、かえってなくてはならないものなのです。また、私たちは、からだの中で比較的尊くないとみなす器官を、ことさらに尊びます。こうして、私たちの見ばえのしない器官は、ことさらに良いかっこうになります。かっこうの良い器官には美しい器官には、「その必要がありません。しかし、神は、劣ったところをことさらに尊んで、からだをこのように調和させてくださったのです。それは、からだの中に分裂がなく、各部分が互いにいたわり合うためです。もし一つの部分が苦しめば、すべての部分がともに苦しみ、もし一つの部分が尊ばれば、すべての部分がともに喜ぶのです。あなたがたはキリストのからだであって、ひとりひとり各器官なのです。そして、神は教会の中で人々を次のように任命されました。すなわち、第一に使徒、次に預言者、次に教師、それから奇蹟を行なう者、それからいやしの賜物を持つ者、助ける者、治める者、異言を語る者などです。みなが使徒でしょうか。みなが預言者でしょうか。みなが教師でしょうか。みなが奇蹟を行なう者でしょうか。みながいやしの賜物を持っているでしょうか。みなが異言を語るでしょうか。みなが解き明かしをするでしょうか。あなたがたは、よりすぐれた賜物を熱心に求めなさい。また私は、さらにまさる道を示してあげましょう。(12:12-31)」

ですから、パウロは、奉仕の賜物をからだのさまざまな器官にたとえています。そこで、神は、からだの各器官すべてに、持ち場と目的を持たせておられることに注意して下さい。あなたは、キリストのからだの器官です。ですから、神は、からだの中において、あなたを特定の任務や奉仕につかせておられます。あなたは、からだ全体が機能するのに必要です。そんなに重要ではないと私たちがよく思う器官があるのですが、神はそのような器官をより重要なものとして選ばれました。

あまり目につかないからだの器官があります。あまりかっこうの良くない器官、そんなに美しい器官ですが、神はそのような器官に、いっそう美しさを備えて下さいました。足の親指はそんなに美しいものではありません。じっと見てみると、奇妙な格好です。しかしながら、均衡をとるためにはとても重要です。体の均衡をとるためには非常に重要です。したがって、私たちはみな、キリストのからだにおいて器官であり、持ち場があり、私たちは、神が選び、みこころによって置いてくださった場で、機能するために互いに依存し合っています。

さて、パウロは、私たちを人のからだ、キリストのからだにたとえてから、からだの中における奉仕(ministry)の賜物について語っています(訳者注:ministryは、日本語の聖書では、「奉仕」とか「務め」とか訳されますが、一般に「教職」とも訳されています)。これについては、エペソ人への手紙の中でも言及されています(エペソ4:11参照)。まず、パウロは、「使徒」と述べています。使徒は、初代教会において、認められていた指導者たちでした。教会の創始者とも言える人たちでした。覚えていますか、イエスに従っていた人たちはたくさんいました。弟子たちはたくさんいました。けれども、その弟子たちの中で、使徒と呼ばれる12人が選ばれました。使徒の必要条件は、まず最初に、神の召しでした。自分で使徒になったり、自分が使徒だと自称することではありませんでした。偽の使徒がいましたが(2コリント11:13参照)、真の使徒になるためには、神の召しが必要でした。ですから、パウロは自分が使徒であることを言う時に、繰り返し繰り返し、「神のみこころによって使徒として召されたパウロ」と述べています(1コリント1:1など参照)。第二の必要条件は、その人がよみがえられた主を見たことでした。ペテロが、ユダの代わりとなる者を選ぶときに必要なこととして、「いつも私たちと行動をともにした者の中から、だれかひとりが、私たちとともにイエスの復活の証人とならなければなりません。(使徒1:22)」と言いました。そして、使徒は、奇蹟の賜物のある人でなければなりません。パウロが自分が使徒であることを弁明して、「神のみこころによって使徒として召された」と言いました。パウロは、「私は異邦人の使徒ですから(ローマ11:13参照)」と言いました。パウロは、コリント人に手紙を書いた時に、自分は主を見たと言いました(1コリント9:1参照)、使徒としてのしるしを自分がもたらしたと告げました(2コリント12:12参照)。それは、パウロの生涯を通して用いられた、奇蹟と信仰の賜物でした。今日に使徒がいるのかどうか私にはわかりません。使徒だと自称する人は見たことがあります。そんな人たちが自分は使徒だと主張する理由は、普通、人に対して権威を得たいからです。彼らは、使徒の権威を話したりします。つまり、私がそう言えば、正しく、そうならば、正しいというものです。

さて、モルモン教会は、自分たちが、今日唯一正当な教会だと宣言しています。その理由は、彼らが唯一、12使徒によって治められている教会だからということです。12使徒がいるので、彼らが唯一正当に、奉仕のために人を按手任命させることができるということです。したがって、彼らが出してくる大きな質問は、いつも、説教する権威をだれが与えたのか、バプテスマを受ける権威をだれが与えたのか、になります。パリサイ人たちがバプテスマのヨハネに聞いた質問と同じです(ヨハネ1:19参照)、また、後にイエスが宮をきよめられたときに、彼らは、「だれが、あなたにこれらのことをする権威を授けたのですか。(マルコ11:28)」と言いました。数週間前に、ソルトレーク・シティでモルモン教会の指導者の一人に会いましたが、面白いことに、その人の質問は、「教会

の牧会をしている、これらの者たちのことだが、だれが任命したのか。」でした。つまり、この考えは、だれが権威を授けたのか、というものです。私は、彼にこう言いました。「私たちは、だれも人を奉仕のために任命することはできないと信じています。奉仕のために任命できるのは、神だけだと信じています。」また、こう言いました。「私たちは、神が任命されたと認められることを、承認だけしようとしています。」私たちは、だれをも奉仕のために任命したりしません。神が任命されたと認められる人だけを承認します。ですから、使徒職ですが、・・・遠回しに言ってもしかたないですが、モルモン教会の12使徒は正当ではないと、私は思います。けれども、他の人でも使徒を自称した人を知っています。そのような主張をした、私の知っている人たちについても、正当だとは思いません。

パウロがコリント人への手紙第二12章を書いた時、「使徒としてのしるしは、忍耐を尽くしてあなたがたの間でなされた、あの奇蹟と不思議と力あるわざです。(12:12)」と言いました。パウロは、自分が宣教(説教)者だと告げました。自分が使徒だと告げました。また、教師だと告げました(2テモテ1:11参照)。ですから、ここで列挙するときに、「第一に使徒」としています。パウロは自分が使徒だと告げましたが、私は彼の主張を受け入れますし、それが真実だと信じます。彼は、使徒となるように神に召されました。ただ、彼は、説教者、あるいは伝道者でもありました。なぜなら、伝道者は説教者だからです。けれども、彼はまた、自分が教師だとも告げていますから、パウロは、この3つの奉仕の賜物すべてを持っていたのです。キリストのからだにおいて、伝道者、使徒、教師でした。その3つすべてを上手にすることができました。「聖霊が、・・・みこころのままに、おのおのにそれぞれの賜物を分け与えてくださいます。(1コリント12:11参照)」ですから、一つの教会の中で、一つ以上の職や奉仕を持つことも可能なのです。カルバリー・チャペルの牧師の何人かは、牧師・教師のほかに、伝道者の賜物を持っている人がいます。すぐ思いつくのはグレッグ・ローリですし、マイク・マッキントッシュ、ラウル・リース、ブライアン・ブローダーソンなど、多くの若い人たちが牧師・教師であり、しかも伝道者の賜物も持っています。ですから、パウロについてもそうであったように、一つ以上の奉仕の賜物が与えられていることは可能です。

パウロは、ここで「預言者」に言及しています。預言者は、教会において、勧める者であり、励ます者でした(1コリント14:3参照)。新約聖書において、アンテオケの教会において、預言者がいたと教えられています(使徒13:1参照)。エルサレムにある教会で、アガボが預言者の職を持っていたことがわかります(使徒11:27、28参照)。ビリー・グラハムは、現代の預言者だと私は信じています。ユダの国のために、神に召されたイザヤやエレミヤと同じで、ビリー・グラハムは、米国のために神に召された預言者だと思います。初代教会には、「教師」がいました。やや、尻のほうに来ますが、キリストのからだの中で、神は私をこの、教師として召されたと思います。聖書は、「あなたがたの召されたことと選ばれたこととを確かなものとしなさい。(2ペテロ1:10)」と教えています。神は私を教師として召して、賜物を与えられたと信じます。この能力は神からのものだと信じます。教える能力は神の賜物です。私はそのように認めています。教えることは、聖霊の油注ぎによるものだと信じます。もし、そう信じていなかったなら、私はここにいなかったでしょう。私がここにいることは想像もできません。聖霊の油注ぎによるものだという証拠の一つは、私が自分の

テープを聞いて、それを楽しむことができる事実だと思うのです。実際、それによって養われます。時に、「本当に私はそんなことを言ったかね。なかなかいいじゃないか。」と思うことがあります。「そんなことを言ったのは覚えていないが。とてもすばらしい。」と。ですから、キリストのからだの中で、賜物が与えられている教師がいるのです。デービッド・ホッキング牧師は、キリストのからだの中で、賜物のある教師の一人だと思います。カルバリー・チャペルには、賜物のある教師がたくさんいると思います。スキップ・ヘイゼック、デミアン・カイルなど、賜物のある教師のリストは延々と続きます。ラリー・テイラーは、賜物のある教師です。このからだの中に、神が、賜物のある教師を多く与えられたことを、主に感謝しています。ここにある使徒、預言者、教師のリストにさらに付け加えて、パウロのエペソ人への手紙におけるリストでは、「伝道者」があり、そして「牧師」を「教師」と組み合わせています。牧師・教師です。牧師になるためには、教える賜物は必須だと思うのです。パウロが伝道者を付け加えています。ここでも私は、もちろんビリー・グラハムをその分類に入れます。ビリー・グラハムは、私たちの国民のための神の預言者であるだけでなく、賜物のある伝道者です。教会において、これまでに最もすぐれた伝道者の一人です。パウロがいくつもの奉仕をしたと言いましたが、今日もそうで、キリストのからだの中で複数の奉仕を持っている人が多くいます。

さて、それぞれの賜物、賜物のある人、あるいは、賜物のある奉仕(ministry)について、そうした奉仕を促して、手助けする聖霊の賜物があります。繰り返しはつきりと言いたいのですが、教職者(minister)という言葉が通常、前にいて、神から教会に奉仕するように召されている人に特定して使われていることは残念です。私たちは、そういう人を教職者と呼んでいます。現実には、みなさんすべてが奉仕(ministry)に召されているのです。必ずしも説教壇での奉仕ではないかもしれませんが、必ずしも教える奉仕ではないかもしれませんが、必ずしも牧会的な奉仕ではないかもしれません。けれども、みなさん全員が奉仕に召されています。みなさんは全員、神に仕えるために召されています。奉仕(ministry)の実際の意味はそうなのです。仕える者です。みなさんはみな、主に仕えるために召されています。みなさん一人一人に、神は、ここキリストのからだにおいて、奉仕する場を備えておられます。キリストのからだに召されていて、神が任命して賜物を与えられる奉仕に、召されていない人はだれもいません。ですから、28節までいくと、使徒、預言者、など、パウロがさまざまな奉仕の分野を列挙していますが、それから、先の御霊の賜物の9つのリストに加えています。パウロは、「助ける者」と「治める者」の賜物を加えています。ですから、いやしの賜物を持つ者、助ける者、治める者、異言を語る者、解き明かしは、ここ28節に書かれています。

ただ、今晚は、助けの賜物を見てゆきたいと思います。主の働きを助ける人のことです。教会が、キリストのからだの中にいる人たちのすべての必要に応じて、完全な奉仕をするためには、余りにもたくさんのごことをする必要があります。したがって、助けの賜物は、キリストのからだの中において、最も重要な賜物の一つだと思います。この賜物は、私たちがとかくあまり尊ばない賜物かもしれませんが、神はことさらに尊ばれているものの一つだと思うのです。というのは、助けの賜物は気づかれないことが多く、認められていないのです。このため、私たちはとかく、前で教える人

などに気をとめます。教師や伝道者などの賜物をあがめる傾向があります。神は、ことさらに助けの賜物に栄光をおかれ、尊ばれていると思うのです。

真に助けの賜物のある人なら、これこれをやって欲しいと頼まれるまで待つてはいません。必要を見て、進んでそれをして、必要を満たします。ここカルバリー・チャペルでは、そういう人たちがいます。私は、そのような助けの賜物を用いている人たちに、とても感謝しています。その人たちは、黙ってします。誇示するでもなく、人の関心を集めるでもなく、ただ美しい静かな奉仕です。教会の女性で、月曜の朝の、執り成しの祈りのグループに関わっている人がいました。彼女の夫も彼女と来て、彼女が女性と執り成しの祈りをしている間、彼女の夫は、駐車場をまわって、みなさんが日曜においていった紙や、紙コップやくずを拾いました。私は、彼が駐車場をまわっているのを見て、神にその人のことを感謝しました。そのようなことをするように、頼んだ人は誰もいませんでした。彼は、ただ月曜に、日曜からのものが駐車場に残されているのを見て、彼は妻を祈り会のために車に乗せてこなければいけなかったので、自分ができるところを見つけただけです。それは助けの奉仕です。もし、彼の助けの奉仕がなかったとしたら、私たちの駐車場はずっと見栄えが悪くなってしまっていたでしょう。教会に、退職した男性が二人いました。彼らは、エアコンにはフィルターがあり、定期的に取り替える必要があるのに気づきました。この二人の男性は、定期的に計画を立てて教会に来て、すべてのエアコン、100枚以上のフィルターがありますが、フィルターを取り替えます。きちんとスケジュールを組んで、フィルターを注文し、定期的なまわって、エアコンのフィルターを取り替えてくれ、みなさんの中でアレルギーのある人を助けたり、空気を清浄に保つのを助けています。何と美しい賜物でしょう。残念ながら、そのうちの一人は、その賜物を用いることで報酬を受けており、もう一人はこの地域から転出して行きました。しかし、二人が来てくれて、全部取り替えてくれ、毎週どのエアコンの手入れが必要かのチャートを作り、この建物全体をまわって、エアコンのフィルターを取り替えてくれることは、いつも祝福でした。助けの賜物です。美しい、すばらしい奉仕です。ここカルバリー・チャペルで、助けの奉仕に携わっておられる女性の方々みなさんのことを思います。そのような方に会えるのはすばらしいです。もちろん明日は、ジョイフルライフ・スタディーが再開します(訳者注:この学びは9月中頃の木曜日の夜のもの。女性のためのジョイフルライフ・バイブル・スタディーは夏の間はお休みです。)。女性の方々がこのようにプログラムを成功させるには、レッスンをまとめてグループわけをして、みんなのための場所を確保したりする、助けの奉仕に携わっておられる方のみなさんがいなければ、不可能です。神がこうした女性に賜物を与えてくださったのを見るのは、すばらしいことです。多くの方はまとめ上げる技能があつて、やって来て、助ける奉仕において自分自身をささげることが、すばらしいことです。もし誰かが入院したとか、誰かの奥さんが入院したと聞いたなら、家族のために食事を用意して届けたり、行って、家を掃除するとかできます。もし、奥さんが長く入院しているなら、きっと家が散らかり放題になっているでしょう。行って、助けることは、キリストの愛を示す実際的な方法です。

旧約聖書では、ヨシュアが、助ける賜物を用いてモーセに奉仕しました(訳者注:出エジプト記25:13参照。「従者」は、英語でministerとなっている。)。ヨシュアは、モーセのそばにいました。モ

ーセはヨシュアに命令することができました。ヨシュアはそばに立ち、モーセの願うところを遂行しました。「ヨシュアはモーセが言ったとおりにし」た書かれています(出エジプト17:10)。ヨシュアは、ただ、モーセを助けるために右腕としてそこにいたのです。ただ、私が面白いと思うことがあります。ヨシュアがモーセにとって、とても忠実な従者でした。ヨシュアは助ける賜物を用い、奉仕と助ける賜物において、とても忠実でした。それで、モーセが死んだとき、神はヨシュアが後継者として、人々の指導者になるように任命されました(民数27:18、19参照)。イエスは言われました。さばかれるために、国々がイエスの御前に集められる日が来たとき、…違いました。5ポンドと4ポンドと2ポンドと、1ポンドのたとえでした(以下マタイ25:14-30参照)。5つ持っていた者は、さらに5つ増し加えられて与えられ、その人は、「ご主人さま。出て行って、10になりました。」すると、主人は、「よくやった。良い忠実なしもべだ。あなたは、わずかな物に忠実だったから、私はあなたにたくさんの物を」より大きな事を「任せよう。」と言いました。そして、すばらしいのは、神が私たちを召してくださった場所で私たちが忠実であるなら、だからと言って、永遠に炉に薪をくべ続けるということではありません(訳者注: 炉に薪をくべる仕事は、ここでは、たいしたことのないつまらない仕事とみえるような仕事の一例として使われています。)。しかし、もし神が私にそれをするように召されたのなら、それを忠実にしなければなりません。神が私を何に召されているのであっても、最大限の能力を発揮して、それにあたらなければなりません。進んで、きっぱりと、しかも心から喜んでしなければなりません。なぜなら、人にするようにではなく、主にするようにすべきだからです(コロサイ3:23参照)。

さて、これに関して、主は、私に興味深い教訓を教えてくださいました。私は、この教会の敷地内は手入れが行き届いて、きれいにしておきたいと思っています。誰か、心をかけている人がいる場所のようにしておきたいのです。あまり人が気にもかけていないような場所にはしたくないのです。気にとめられないで、ゴミだらけにはしたくないのです。そういうのは嫌いです。それで、私が敷地内を歩いていて、紙屑などを見かけると、通常はそれを拾います。もちろん、ここは学校があり、2千人ほども生徒がいますから、サンドイッチを入れてくるビニール袋が、あちこちに飛び散ってしまします。子供たちが、とかく散らかすのは、私よりもみなさんの方がよくご存じでしょう。私の子供はもう巣立ってしまっていますから。子供たちは紙屑をほったらかしにしたり、飲み物の缶を、空き缶をその辺にほったらかしにします。それで、もう一方の事務所に戻るために歩いてくるときに、紙屑や缶を拾って、ごみ箱に捨てることがよくあります。その時、自分が少し腹立たしくなっているのに気づきました。「ゴミばかり出す子供たちだ。(trashy kids)」と言い始めました。自分が腹立たしくなっているのに気づきました。汚れ物の洗濯の仕事と同じで、終りがありません。家の前の庭に、ユーカリノキが生えているのですが、年中汚くなります。私が植木を植えるときは、落葉樹を植えるようにしています。そうすれば、一年に一回、ある時期は、落ち葉掃除をしますがそれっきりです。でも、ユーカリノキは、毎週汚い葉の山ができます。市の当局に、車寄せのところに生えている木をどかしてくれるように。車寄せのところは市の所有で、私の管轄ではないから、と手紙を書いた事もあります。市の当局は、見栄えが気にいっているそうです。でも、市の当局は、いつも歩道を掃かなくてもいいのです。きりがありません。毎度の事です。そういう作業は、やったと

しても、明日の昼時になれば、もとのもくあみです。と言うことで、自分が腹立たしくなっているのに気づきました。飲み物の空き缶を拾っていると、力が入ってしまいました。ぐっと握りしめています(訳者注:チャックは、腹立ち紛れに、空き缶をぎゅっと握るしぐさをしながら話しています。)。すると、主が私の心に語られました。主は、「だれのためにやっているのか。」とおっしゃいました。「主よ。あなたのためですよ！(訳者注:腹立たしそうな声で)」主は、「おやめなさい。そんな態度でやるなら、やらない方がいい。」と言われました。ですから、主のためにするなら、喜んでしなければなりません。主のためにしていると知ることによる喜び、あなたがたのすることは、ことばによると行ないよるとを問わず、すべて神の栄光のためにしなさい(コロサイ3:17参照)。ですから、助けの賜物の場合は、神の栄光のためにそれを用いる必要があります。主にするようにすべきです。これを主のためにしていると認識します。何でも主のためにするなら、主は私に喜んでほしいと思われています。神に対する、喜んでする奉仕です。旧約聖書で、ゲハジはエリシャのしもべでした。ゲハジはエリシャの命令に従い、助けていました。エリシャの宣教は、ゲハジがそこにいて助けてくれることによって、大いに用いられていました。ゲハジの問題は、ナアマンが主人のエリシャに出そうとした報酬を求めて欲を出し、富が欲しくなり、それを追いかけたことでした。このために、かつてナアマンにあったらい病が、ゲハジにもたらされました。新約聖書で、テモテはパウロのしもべでした。テモテは、何度もパウロと出かけ、パウロを助けました。パウロが移動しなければならなくなると、パウロは、「テモテよ。あなたは少しここに残りなさい。」と言い、また、「テモテよ。こっちへ私に会いに来て下さい。その時、羊皮紙その他を持ってきて下さい。」と書きました。テモテは、パウロを大いに助けました。パウロは、プリスカとアクラについて、彼らがキリスト・イエスにあって私を助けてくれた人だと言っています(ローマ16:2、3参照)。初代教会が、福祉プログラムについて問題を抱えた時、7人の人が選ばれました。その人たちは、聖霊に満たされ、よい評判の人たちでした。その人たちは、教会の福祉プログラムの管理者となりました。この人たちには、助けの奉仕の立場が与えられました。教会の福祉を分配するのを助けました。けれども、その人たちが助けの奉仕に忠実であったので、ピリポは、伝道者の賜物や、奇蹟を行なう賜物、いやしの賜物を与えられました。そして、ピリポは、サマリヤへ行き、キリストをサマリヤ人に宣べ伝え、ピリポによって大いなるリバイバルが起こりました。このピリポは、助けの賜物が与えられ、教会の福祉プログラムの管理者の一人でした。もう一人は、ステパノでした。彼も、食卓に仕えるために選ばれた7人のうちの一人でした。しかし、その奉仕のわざに忠実であったので、神は、ユダヤ人の最高議会に異議を申し立てるのに、彼をお用いになりました。彼が証しをして、殉教した直接的結果として、使徒パウロは、心動かされ、御霊に罪を指摘され、主がダマスコへの途上でパウロを捕らえるまで、彼は葛藤し続けました。その時、主は、「パウロ。とげのついた棒をけるのは、あなたにとって痛いことだ。(使徒26:14参照)」と言われました。あなたは、ステパノから聞いたことによって、真理を聞いたので、ピンと来たけれど、それに抵抗してきたので罪意識にさいなまされている、と。

パウロは、ローマ人への手紙12章6節で、こう述べています。「私たちは、与えられた恵みに従って、異なった賜物を持っているので、もしそれが預言であれば、その信仰に応じて預言しなさい。

奉仕・・・」ここでパウロは、助けの賜物に言及しているのだと思います。「奉仕」ということは、仕える者ということです。そして、きっとこれは助けの賜物に言及しているのだと思います。「奉仕であれば、奉仕し、教える人であれば教えなさい。(12:7)」神があなたのそばに助けの賜物のある人を連れて来てくださるのは、何と栄光ある、すばらしいことでしょう。助けの賜物です。何かをお願いしなくてもいいのです。しなければならぬことが分かる人たちで、静かにそれをしてくれます。人に認めてもらうために、その賜物を用いることがありません。その人がしたことを誰かが賞賛すると、その人は当惑します。そうではない人がたくさんいます。彼らの賜物は、助けの賜物ではないのです。しかし、人に認めてもらうために何かをする人はたくさんいます。イエスは、「人に見せるために人前で善行をしないように気をつけなさい。そうでないと、すでに自分の報いを受け取っているのです。(マタイ6:1参照)」と言われたのに、そういう場合が多いのです。何年も前に、ロスラノス・コミュニティー教会を牧会したことがあります。そこでの最初の日曜日に、演壇の前のテーブルの上にとても美しい生け花がありました。私は、とても美しい生け花だと思いました。礼拝後、役員会の長が私のところに来て、「スミス牧師。これは、あなたにとって最初の日曜日で、新しく来られたのは分かりますが、もし、その前の花を毎回見たいなら、そのことを言及されたほうがよいですよ。」と言いました。私は、「あなたが私を牧師にするのに賛成票を投じたときに、どのような牧師を招聘しようとしているのか、お気づきにならなかったようですね。私は、人を公に認める人間ではありません。なぜなら、私がそのようなことをしたら、その人の天での報いを奪い取ることになってしまうからです。」彼は言いました。「もし、花が見たいなら、そうした方がよいですよ。」それで、次の日曜に花がありました。また美しい生け花でした。しかし、私はそれに言及しませんでした。まさに、彼の言ったとおりで、生け花はそれっきりでした。

あなたのすることは、主のためにするのであり、主に対して行なうのであり、自分がしたことを認めてもらうこと、自分がしたことへの報酬は主に求めるのです。それが真の賜物のわざです。パウロは、人に対してではなく、主に対してするように、心からしなさいと教えました(コロサイ3:23参照)。さっき言いましたように、これは、喜んで行なう奉仕の賜物です。なぜなら、あなたがしているのは、主に仕えるためにしているからです。そして、主は、喜んで与える人を愛して下さいます(2コリント9:7参照)。決して義理や義務として行なってはなりません。そうになってしまうと、自分がしていることに対して憤りを感じるようになります。もし、自分がしていることに憤りを感じるなら、やらないことが一番です。それがあなたにとって、前向きな体験ではなく、否定的な体験になっているからです。それは、全く報いを産みません。ですから、やらない方がよいのです。苦みや憤りを持った心でするなら、自分についての記録のプラスになるのではなく、マイナスになるからです。気分を害しているのに、頼まれたからやるしかない、というのなら(訳者注:チャックは、嫌嫌そうな声で話しています。)、神は、齒を食いしばってやるような奉仕は望まれません。ですから、この賜物を用いるときは、愛の心、喜びの心でしなければなりません。助けの賜物のある人を観察したことがあります。そのような人たちは、主のために何かすることができることについて、いつも興奮してワクワクしています。神にささげることができる奉仕がある、主がこのようにお仕えすることを許してくださっていることを考えて、興奮していることをどんどん語ります。それが、真の助けの

賜物です。これは重要な賜物です。キリストのからだにおいて必要な賜物です。余りにもしなければならぬことがたくさんあるからです。誰も一人の人ではできません。どのような教会のスタッフでもできるものではありません。全ての人に何かすることがあります。「私には何の賜物もありません。」とおっしゃる方がいるかもしれません。誰でも助けの賜物を持つことができます。その賜物を信仰によって用いてください。そして、キリストの全てのからだにとって、祝福となり益となってください。みなさんは一人一人みな、キリストのからだにおいて、持ち場があります。今晚、それをパウロは教えてくれました。あなたは、キリストのからだにおける持ち場をおわかりですか。あなたは、キリストのからだにおける持ち場を全うしていますか。あなたは自分の賜物を用いていますか。

治める賜物(#3076)

Gift of Government

再び、コリント人への手紙第一12章を開きましょう。今晚もまた28節を見てゆきますが、そこでパウロは、御霊の賜物の第二番目の列挙をしています。その章の始めには列挙しなかった、賜物のいくつかをそこで付け加えています。パウロはこう教えています。「そして、神は教会の中で人々を次のように任命されました。すなわち、第一に使徒、次に預言者、次に教師、それから奇蹟を行なう者、それからいやしの賜物を持つ者、治める者、・・・。」今晚は、治める賜物について話したいと思います。私が面白いと思うのは、聖書の中で治めること(government)が最初に言及されているのが、イザヤの預言の中だということです。9章6節にあります。「ひとりのみどりごが、私たちのために生まれる。ひとりの男の子が、私たちに与えられる。主権(government)はその肩にあり、その名は『不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君』と呼ばれる。」でも、もちろん、私たちはこの方のことを「主」と呼びます。「その主権は増し加わり、その平和は限りなく、ダビデの王座に着いて、その王国を治め、さばき(訳者注: 英語ではorder になっており、これは秩序の意味がある。)と正義によってこれを堅く立て、これをささえる。今より、とこしえまで。万軍の主の熱心がこれを成し遂げる。(9:7)」ですから、神の秩序では、最高で、最も優れた政府(government)の形態は、君主制であることに気づきます。良い君主がいるとするならば、最も効率的な政府なのです。イエスが地上で神の政府を樹立される時、イエスは、ここに王の王として、主の主としておられるのです。

さて、政府の目的は、公共の福利を促進し、国内の安寧を保証し、公共の社会福利を保証する法律を制定し、実施することです。政府は、悪を排除し、善が維持されるよう努めるべきです。神によって、治める賜物(gift)を与えられた人たちが、存在します。私たちはよく、「あの人は才能ある(gifted)指導者だ。」と言います。生まれながらの指導者なのです。人々が、その人や指導力に魅了されるような、性格や振る舞いを備えています。けれども、今の世界を見回すと、神がいろいろな種類の賜物や才能を与えておられる人たちがいるのがわかります。才能ある音楽家の分類に入るような人たちがいます。数学の才能がある人たちがいます。その人たちは、数学を学ぶのに、みなさんや私が勉強しなければならないほどに勉強する必要がありません。その人たちは、自然にわかります。その分野で、賜物があるのです。ですから、神が私たちにどの賜物をくださっているのか発見し、学ぶことは重要です。なぜなら、みなさんは全員、特別なのです。みなさんは全員、独特なのです。神がみなさんを創造された時、神は紋切り型は捨ててしまわれました。神は、あなたがあなたらしくしていることを望まれます。あなたが特別で独特であるように願われます。神は、あなたに、特別な適性や才能をお与えになりました。

さて、神が人々にお与えになったこれらの賜物や才能が、最も優れて用いられ表現されるのは、それらが、主に栄光を帰するように用いられる時です。自分自身に栄光を帰するようにそれらの賜物を用いると、あるいは、それらの賜物を私利私欲のために用いるなら、ある意味で、神があなたに与えてくださった賜物を、卑劣な目的のために供していることになるのです。賜物は、からだ

全体の益となるためのものであり、主に栄光を帰するためのものです。

人類の歴史を通じて人が試みた政府には、様々な形態があります。初期の政府形態は、封建農奴制のようなものであり、地方の王が村や町にいて、それが次第に君主制へと発展し、地域を支配するようになり、究極的に国を支配するようになりました。それで、君主制と知られている政府の形態があるのです。米国は、共和国として知られる立憲制として成立しました。共和国として、代議員制として知られている形態の政府があります。つまり、民衆が男女を選出し、国が治められる法律の制定において、自分を代表してもらうことです。私たちは、クリスチャンとして、とても重要な争点について候補者の立場を知りたいと思っていますが、候補者の中では物議をかもしている人たちがいます。それは、情けないことだし、悲劇だと思います。もし、彼らが私を代表してくれるなら、そして、代議員制の政府形態を取っているなら、考え方としては、自分たちを代表してくれる人を選出します。彼らは、私たちの思想や理想を代表し、その促進を追及します。私を代表するために彼らがいるのですから、その人たちが、私の感情と価値観を適切に代表しているかどうか知りたいのです。学校がコンドームを提供するのを、私は望みません。もし、教育委員会委員が、その候補者が、教育に指定されている税金を使って、コンドームを購入して生徒に配布するのに賛成票を入れるなら、その人は私の感じていることを代表してはいません。もし、それが、その人の感じ方であって、賛成票を投じるならば、私を代表していません。私がとても重要な道義上の争点であると考えていることについて、その人たちがどのように感じているのかを知る権利が私にはあると思うのです。

泣きごとばかり言っているリベラル派が、同性愛者の人たちが同性愛の立法化について、その候補者たちの立場を知りたいと思っていることは、とてもすばらしくとても賞賛に値すると信じています。しかし、私たちが真に道義的な争点について知りたいと言った途端に、リベラル派の人たちはひどいことを言い始めます。政教分離を叫び始めるのです。ほこりがたつだけなのです。その結果、争点がぼけてしまいます。国教会に真っ先に反対する人がいるなら、それは私です。イエス・キリストの教会をだめにしてしまう最も早い方法は、教会が国に翼賛してしまうか、国が教会に翼賛してしまうかです。すぐに、だめになってしまうことに、太鼓判をおすことができます。どの国教会をとっても、悲しい情けない霊的な死を経験してきました。私は、政教分離を望みます。政教分離を私は大切に思います。しかし、道義的なことから、品位から、常識から、国を強くさせるか国を滅亡させるかの道義的な争点から、政府を切り離すことではありません。ですから、これは、教会が自分たちのやりたいことを、社会に強制するという問題ではないのです。どうも、もう一方の側の人たちが、社会に対して自分たちのやりたいことを社会に強制したいように思えるのですが……。それは、彼らにとっては、構わないことのようにです。彼らの低い基準を、社会に強制することは構わないようです。ポルノを、中絶の権利を社会に強制することは、構わないようです。しかし、私たちが、「品位があり、純粋であり、正しいものについて立ち上がってくれる、立ち上がる勇氣の持っている候補が欲しい。」と言うと、大きく叫び声をあげます。このような争点については、私だって気分を害することがあります。

全体主義的な政府の形態があります。そのもとで、人々は独裁によって支配されます。自分た

ちを代表してくれている人たちに対する真の発言権がありません。候補者に対して、「賛成」か「反対」の投票しかありません。すでに候補が選ばれていて、真の意味での選択肢がありません。どれほど私たちが選挙する候補者について、選択肢があるのかと時々思わされてしまいます。しかし、理想的な政府の形態は、…さて、人が考え出したこうした政府の形態は不成功に終わっています。人間は、汚職や腐敗無しに、仲間の人間を統治する能力が全くないことを、断然と証明してしまいました。究極的に、人間が試みた政府の形態は、滅亡してゆきました。人間は欲のために、義によって仲間の人間を統治する能力が失われています。

唯一、神が支持し、建てられた政府の形態は、神政政治です。神が、イスラエルの国を統治されることです。イスラエルという名は、神に支配されるという意味です。神が、国を統治されるのです。神政政治です。さて、モーセは民の指導者でしたが、神の代表者として行動しました。したがって、治める賜物については、モーセは、受け入れられた地上の指導者でしたが、モーセが神に導かれ支配されていたと認められました。イスラエルの子らがシナイ山において火や雷や、火が地上を流れるのを見たとき、民は、モーセに、「あなたが上って行って、神と話して下さい。神の仰せを聞いて、戻ってきて、私たちに伝えてください。神がお話しになることには、聞き従います。しかし、私たち自身は、山に近づきたくありません。あなたが上って行って、あなたが神に話して下さい。」と言いました(以下出エジプト20章参照)。ですから、モーセが神のところに行って、神がモーセを導いて、モーセが言ったことは、神が民を導き、支配していることだと認められてました。ただ、神が民を統治し、支配されるという意識がありました。彼らが陣営を張ると、幕屋、神との会見の天幕は、陣営の真ん中にありました。すべての部族は幕屋の回りに陣営を張りました。天幕の戸は、幕屋に面していました。天幕から出てきて前を見ると、神の幕屋が見えるようになっていました。夜なら、幕屋の上に火の柱が見えたので、神に支配されている、自分たちは神の民であると意識しました。昼間ですと、雲が見えました。これもまた、自分たちが神の民である、神に統治されていることを思い起こしました。神が民と結ばれた契約を見ると、「もし、あなたがたが、わたしの支配を受け入れるなら、もし、わたしの命令に従うなら、もし、わたしに付き従うなら、…」と、彼らに数々の約束をお与えになりました。力、偉大さ、強さ、祝福を与え、エジプト人に襲いかかった災いは、全く彼らには襲いかからないし、敵を支配し、負債者ではなく債権者になるし、神はすべてのことをして下さるという約束でした。それは、わたしに従い、わたしの支配を受け入れれば、というものでした。しかし、彼らが神の支配を拒否するようになるなら、悲惨な結果をもたらすことを予告されました。「もし、あなたがたがわたしの命令を守らないならば、…」と言って、どの国でも神の支配を拒否するなら、悲惨な結果を招くことを説明されました。

ただ、聖霊によって賜物を受けている才能ある人たちを通して、神が支配されることを認める必要があります。モーセが民を支配しているとき、モーセが耐えられないほど負担になってきました(以下民数11章参照)。とうとうモーセは、私はこれらすべての人々を産んだわけではないと、苦情を訴え始めました。モーセはまさに辞表を提出していました。神はモーセにイスラエルの70人の長老をとり、会衆の天幕の中に連れて行くように命じられました。そうすると、モーセが民を支配するのを彼らが助け、神は、モーセに与えられた霊を70人の長老にも与える言われました。御

霊に満たされたので、彼らは民を支配することにおいて、モーセを助けることができました。モーセが全ての苦情を聞くのではなく、70人の長老が苦情を聞き、もし彼らで解決できない問題があれば、モーセのところへ持って行きました。すると、モーセは、それを神のところへ持って行き、神がモーセに命令されました。ですから、民は、神が自分たちを支配しておられ、神はこれら人間の器を用いて、民にご自身を表しておられることに気づき、意識していました。実際に支配しているのは神であると気づき、意識するように支配することは、なんとすばらしいことでしょう。

さて、聖書は、指導や統治をする人たちに、いくつかのきまりを示しています。サムエル記第二23章3節です。「イスラエルの神は仰せられた。イスラエルの岩は私に語られた。『人を治める者は正しく、神を恐れて治めなければいけない。』(訳者注: 欽定訳の直訳)」言わせていただきますが、神を恐れない者は、自分と同じ人間を支配する権利がありません。資格がありません。だれでも神を恐れない者は、絶対に腐敗した支配者になります。不正になり、不正直になります。ローマ人への手紙12章8節で、パウロが治める賜物について話していますが、指導の賜物について語っているところで、「指導する人は熱心に指導し」と述べています。人々の前で神の代表することは、ものすごい責任です。なぜなら、あなたが誤って表されたくないように、神は、誤って表されたいと思われたいからです。今日、だれかが私にホノルル・アドバータイザー(訳者注: ハワイ州ホノルルの新聞)の記事を送ってくれました。その記事には、終末の期日が予言されていました。その記事には、ある伝道者、カルバリー・チャペルのチャック・スミス牧師は、イエスが1981年に再臨されると予言したと書かれていました。決して、そんなことを言っていない。けれども、なぜ、私がそのようなことをこれまでに一度でも予言したかどうか、電話して聞いてみなかったのでしょうか。そのとおりかどうかを調べずに、なぜ書くのでしょうか。これが無責任です。その人々は、チャックが予言したと言うでしょう。幸いなことに、過去30年間、私の言ったことは録音されています。もし、私がイエスが1981年に再臨されると言ったテープを持ってくることができるなら、前言を取り消します。前言を取り消さなければならなかった人のことを聞いたことがあります。私は、前言を取り消します。神も誤って表されたいと思われません。神は、実際は言っていないのに、誰かに、「神は言われた」と言ってほしくないと思われています。神は、実際は言っていないのに、「神は言われた」と言いまわる預言者に、どのようなことを行なうかを話されています。そのような預言者はわざわいだ。神が実際は言われていないのに、「神は言われた」と言いまわる預言者は、神に対して申し開きをしなければいけない。神は誤って代表されたいと思われません。

したがって、私たちが指導するとき、指導者の役割を担うときは、神を恐れて熱心に指導し、人々に神を誤って代表しないようにしなければなりません。それは、約束の地にモーセが入ることができなかった罪でした。メリバの水において、民がモーセのところに来て、「モーセ。私たちは、喉が乾いて死にそうです。エジプトを出なければよかった。私たちはこの荒野に40年間もいる。あなたは私たちを約束の地に導き入れていない。あなたの言うことに聞き従った私たちは、とんでもないことをしてしまった。」と言って、モーセを石打ちにしようしました(以下民数記20章参照)。モーセは、このあしらい方に腹が立って、怒って、主の御前に出て行きました。すると、神はモーセに言われました。「出て行って、彼らのために水が出てくるように、岩に命じなさい。」モーセは、

民のところに出て行って、「逆らう者たちよ。どれだけあなたたちに我慢しなければならないのか。この岩を打って、またあなたがたのために水を与えなければならないのか。」と言って、杖を取り出し、岩を打ちました。神は実に恵み深く、いつくしみ深く、親切です。それで、水がほとばしり出ました。このため、人々は飲み、うるおいました。けれども、神はモーセに、「子よ、こっちへ来なさい。」と言われました。「モーセ。わたしはあなたに何をするように命じたか。」「『岩に命じなさい。』でした。」「なぜ、モーセ、あなたは岩を打ったのか。モーセ。あなたは民の前でわたしを代表してくれなかった。あなたはわたしを誤って表した。民はわたしが彼らに怒っていると思っている。腹を立てていると思っている。わたしが気分を害していると思っている。モーセ。あなたはわたしを誤って表したので、あなたは彼らを約束の地に導き入れることはできない。」「お待ち下さい。主よ。お待ち下さい。40年間私は、ただ導きいれる希望をもって、これらの人たちにずっと我慢して・・・」「もうそのことをわたしに話すな。もうその件は終わったことだ。メリバの水において、民に対し、あなたがわたしを代表しなかったからだ。」

ですから、私たちが、真実をもって人々に神を表すことは大切です。宣教においてできえ、いく度となく挫折感を味わうことでしょう。自分たちが思っているほど急速に教会が成長していない、とか、教会内にごたごたがあるとかで、腹を立て、怒り、歯を食いしばりながら説教したりします。それで、人々は、神は今晚とても私たちに腹を立てておられると誤ってしまいます。私たちは、真に人々に神を表していません。神は、私たちのことで気分を害されるのではないのでしょうか。「待て。わたしは実は彼らに腹を立ててはいない。彼らを愛している。あなたは、わたしを代表する者だ。あなたが言ったこと、あなたの言い方のために、彼らは、わたしがほんとうに彼らに怒って、腹を立て、放り出してしまおうと思っている。」と。治めるときに、私たちはとても注意しなければいけません。治める者として、私たちは、人々に対し神を代表しているからです。神を誤って表さないように注意しなければなりません。箴言12章24節には、「勤勉な者の手は支配する。」とあります。おそらく、パウロが、指導する人は熱心に指導し、と言ったときに、その箴言の箇所12章24節の「勤勉な者の手は支配する。」を考えていたのでしょう。

さて、神の代表者として治めることは、人々にいばりちらすことではありません。そこでイエスは彼ら(弟子たち)を呼び寄せて、・・・マルコ10章42節です。「言われた。『あなたがたも知っているとおり、異邦人の支配者を認められた者たちは彼らを支配し、また、偉い人たちは彼らの上に権力をふるいます。しかし、あなたがたの間では、そうでありません。あなたがたの間で偉くなりたいたいと思う者は、みなに仕える者になりなさい。あなたがたの間で人の先に立ちたいと思う者は、みなのもべになりなさい。人の子が来たのも、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、また、多くの人のための、贖いの代価として自分のいのちを与えるためなのです。』」ですから、イエスは弟子たちに、渡される夜、手拭いを取り、弟子たちの足を洗った時、「わたしがあなたがたに何をしたか、わかりますか。」と言われました(以下ヨハネ13章参照)。すると、弟子たちは、「はい。主よ。」と言いました。イエスは言われました。「あなたがたは、わたしを先生とも主とも呼んでいます。わたしはそのような者だからです。それで、主であり師であるこのわたしが、あなたがたの足を洗ったのですから、あなたがたもまた互いに足を洗い合うべきです。」つまり、わたしは、あな

たがたにどのように人々を治めたらよいか、どう指導したらよいか模範を示したのです、ということでした。もし、あなたがわたしを代表するならしもべの立場をとりなさい、と。人々の求めに応じられるようにしておかなければなりません。

パウロは、テモテへの手紙(第一)の中で、…確認させて下さい。3章1節です。「『人がもし監督(bishop)の職につきたいと思うなら、それはすばらしい仕事を求めることである。』ということばは真実です。」監督は、キリストのからだの中で、管理者、支配者、管理者であります。監督という言葉は、ギリシャ語では、エписコポスです。監督によって治められているということで、監督(Episcopalian)教会は、この政治形態をとっている教会です。監督、エписコポスです。パウロは、また、長老について語っています。ギリシャ語では、プレスブテロスです。その言葉から、長老派(presbyterian)という言葉があります。ですから、長老教会は、自分たちのことを長老派と呼んでいます。それは政治形態の所以です。プレスブテロスという、長老たちの役員会によって支配されています。教会は監督によって支配されるべきか、長老、役員会によって支配されるべきかをめぐり、長老派と監督派の間に意見の不一致があるのです。ただ、パウロがここで話しているのは、監督、管理者です。パウロは、言いました。「ですから、監督はこういう人でなければなりません。すなわち、非難されるところがなく、ひとりの妻の夫であり、自分を制し、慎み深く、品位があり、よくもてなし、教える能力があり、酒飲みでなく、暴力をふるわず、温和で、争わず、金銭に無欲で、自分の家庭をよく治め、十分な威厳をもって子どもを従わせている人です。 — 自分自身の家庭を治めることを知らない人が、どうして神の教会の世話をすることができるでしょう。 — また、信者になったばかりの人であってははいけません。高慢になって、悪魔と同じさばきを受けることにならないためです。また、教会外の人々にも評判の良い人でなければいけません。そしりを受け、悪魔のわなに陥らないためです。(1テモテ3:2-7) 」パウロが監督、管理者の資格を列挙していますが、ほぼ全員が除外されてしまいます。非難されるところがなく、という一番最初の条件だけでもそうです。この中の一つだけに飛び付いて、それを他よりも強調する人がいるのは、面白いことです。ここに列挙されている中には、私たちがはっきりと資格がないといえるものもありますが、中には、まあ少しぐらい妥協してもいいかな、と思えるようなものもあります。「金銭に無欲で」なければなりません。近所の人のかっこいいスポーツカーを見て、自分のだったらいいのになあと思ったことはありませんか。欲しがったことはありませんか。自分自身が支配されていることを意識していなければ、だれも他の人を支配することはできません。自分が支配されていない人は、他の人を支配することはできないという事実を意識していなければだめです。このため、主を恐れることは、指導者となる人にとって、重要で必要な性質の一つです。

百人隊長が、イエスに来て自分のしもべをいやして下さるようお願いしたとき、いや、来て下さいと言ったのではなく、「来ていただくにはおよびません。と申しますのは、私も権威の下にある者です。」と言いました(以下マタイ8章5節から13節参照)。誰かの補聴器の設定が高すぎるようです(訳者注:キーンという音がしているため)。「私も権威の下にある者です。私自身の下にも兵士たちがいまして、…」つまり、権威の指揮系統があったということです。私も権威の下にある者です。自分の上に人がいますが、自分の下にも人がいます。自分は権威の指揮系統の中にいます。

自分は権威の下にいるし、自分が権威を行使する人もいます。権威が何かわかっています。そのひとりに「行け。」と言えば行きますし、「来い。」と言えば来ます。イエスは、いえ、聖書は、多くの指揮系統や権威を立てています。しかし、常にその頂点は神です。神によって支配されており、神に対して責任をとり、神に対して申し開きをすると気づいていないなら、その人は、権威を持つ資格がないのです。なぜなら、もし、そのような人に権威を持たせたら、それを利用し、すぐに権威を自分の益のために乱用し、暴君になってしまうからです。自分は支配されているのだ、自分より上の者に対して責任があり、その方に申し開きをするのだという認識がない人は、支配することができません。現在の米国の状況は、悲しい状況です。多くの人に権限が与えられていますが、その人たちは自分の人生の中で神の権威を認めていません。このため、自分に与えられた権限を著しく乱用するという罪を犯しています。多くの判事は、自分が究極である、自分は神であると感じています。そして、自分たちがあたかも神であるかのように他の人を取り扱います。自分たちが神に責任があり、いつの日か、自分たちのさばきについて神に申し開きをしなければならないことに気づいていません。というのは、彼らがさばきをするとき、裁判において神を表していなければならないからです。もし、判事が賢明な判事なら、判決を下す前に、自分が下す決断について、神の知恵や、導き、指示を求めます。なぜなら、自分が下す決断について、神に申し開きをしなければならないからです。

サムエル記第二23章3節にこうあります。「イスラエルの神は仰せられた。イスラエルの岩は私に語られた。『人を治める者は正しく、神を恐れて治めなければいけない。』」ネブカデネザルは、バビロン王国の偉大な王でした。おそらく人類の歴史の中で、最も偉大な王の一人として神に認められていた人物でした(以下ダニエル4章参照)。人間の政府の像では、彼は金の頭でした。他のどの王国よりも優れていました。バビロン王国の後の王国はどれも、バビロン王国より劣っていました。銀でさえ、金より劣っていましたから、その王国もバビロン王国より劣っていました。そして、だんだんと劣化して、最後には、鉄と粘土の足になっていました。貴重な金から銀へ、青銅へ、鉄へ、そして、最後に鉄と粘土になっていました。歴史をとおして、政府形態が劣化していきました。ネブカデネザルの地上での統治、支配が偉大であったので、彼は神を排除するようになりました。自分が一番上であると思うようになりました。自分が最終的な権威であると思うようになりました。自分が罪に定める者が罪に定められ、自分が引き揚げる者が引き揚げられる、と。ネブカデネザルよりも権威の高い者に控訴できませんでした。彼が言ったことが、そのとおりになりました。控訴できるような裁判所はありませんでした。しかし、高ぶったので、神はネブカデネザルを卑しめられました。神は、ネブカデネザルに狂気の期間を許されました。それは、いと高き方が人間の国を支配し、その国をみこころにかなう者にお与えになることを、生きている者が知るようになるためでした。ただし、木の根株は残しておけ。今日の典型的な例です。いと高き方が人間の国を支配されていることを知るため、と言いました。

さて、良い指導者がとても必要です。モーセがそろそろ去る時が来たとき、この偉大な指導者、国の誕生、初期段階を指導した人、国に神の律法をもたらした人、国を形成するため神の指揮のもとにエジプトでの奴隷状態から民を導き出した人、この人が死ぬ直前になった時、

モーセは言いました。民数記27章15節です。「それでモーセは主に申し上げた。『すべての肉なるもののいのちの神、主よ。ひとりの人を会衆の上に定め、彼が、彼らに先だつて出て行き、彼らに先立ってはいり、また彼らを連れ出し、彼らをはいらせるようにしてください。主の会衆を、飼う者のいない羊のようにならないでください。』主はモーセに仰せられた。『あなたは神の霊の宿っている人、ヌンの子ヨシュアを取り、・・・』」ここでも、指導者の資格になっています。神の霊の宿っている人、御霊に支配されている人、御霊に導かれている人です。「あなたは神の霊の宿っている人、ヌンの子ヨシュアを取り、あなたの手を彼の上に置け。彼を祭司エルアザルと全会衆の前に立たせ、彼らの見ているところで彼を任命せよ。あなたは、自分の権威を彼に分け与え、イスラエル人の全会衆を彼に聞き従わせよ。彼は祭司エルアザルの前に立ち、エルアザルは彼のために主の前でウリムによるさばきを求めなければならない。ヨシュアと彼とともにいるイスラエルのすべての者、すなわち全会衆は、エルアザルの命令によって出、また、彼の命令によって、はいらなければならない。」ですから、モーセの代わりに指導者を立てるのですが、その人は、祭司エルアザルの前で神に相談し、いつ行き、いつ止まるかについて、神からの導きを受けることになっていました。それは、神の支配が続いていることを民が知るためでした。モーセが死んでも、神の支配は続き、国が弱まることはないということ。なぜなら、次の後継者は、御霊に満たされ、神の導きと指示のもとで統治するからでした。イザヤは9章16節でこのように教えています。「この民の指導者は迷わす者となり、彼らに導かれる者は滅ぼされる(訳者注:英語ではdestroyed となっている。)」。「良くない指導者の悲しき結末がこれです。国が滅ぼされてしまいます。イエスは、言われました。「もし、盲人が盲人を手引きするなら、ふたりとも穴に落ち込むのです。(マタイ15:14)」箴言29章2節です。「正しい人がふえると、民は喜び、悪者が治めると、民は嘆く。」

支配される者の責任があります。支配する者、キリストのからだにおいて、治める賜物を持ち、それをを用いる者には大きな責任が課されています。しかし、支配される者について、ヘブル人への手紙13章7節はこう告げています。「神のみことばをあなたがたに話した指導者たちのことを、思い出しなさい。彼らの生活の結末をよく見て、その信仰にならなさい。」敬虔な、正しい生活の結末をよく見なさい。ですから、敬虔に生き、神のみことばによって訓練する人に従いなさい、ということ。使徒パウロは、「私がキリストを見ならっているように、あなたがたも私を見ならってください。(1コリント11:1)」と言いました。ヘブル人への手紙13章17節にはこうあります。「あなたがたの指導者たちの言うことを聞き、また服従しなさい。この人々は神に弁明する者であつて、あなたがたのたましいのために見張りをしているのです。ですから、この人たちが喜んでそのことをし、嘆いてすることにならないようにしなさい。そうでないと、あなたがたの益にならないからです。」シェパーディング(羊飼い)運動の人たちの中に、この箇所を鍵となる聖句としてとる人がいて、彼らは人々をひどく束縛し、「あなたを支配している人の言うことを聞き、服従すべきです。この人々は、あなたがたのたましいのために見張りをしているのだから。」と言う人たちがいます。去年の夏、セーガンでの牧師会議のために、ドイツに行ったとき、若い女の子がボーイフレンドといっしょに私のところにやって来て、私に話をしたいということでした。この女の子は、とても動揺していました。彼女はセーガンにある教会に通っていて、それは、いわゆるシェパーディングとよばれ

ている教義にはまっている教会でした。そのような教会では、教会の人は、自分では何も決断することはできず、すべての決断について、教会の羊飼いに話をしなければなりません。その人の許可がなければ、車を買ってはならず、服を買ってはならず、靴一足も買ってはならないのです。その人のところに行って、話をし、主の道について、主のことについて、導いてもらうというのです。彼女は、そこで束縛されていました。というのは、彼女は、「もし、私たちの言うことを聞かないなら、神に不従順だから、あなたは地獄に行く。」と言われていたからでした。また、「もし、他の教会に行くなら、あなたは地獄に行くのだ。あなたは、教会の権威に逆らっているから。」と言われていました。このかわいそうな女の子は、みじめでした。その子は、内緒で時々カルバリー・チャペルに来ていました。彼女は、牧師が見つくて、自分をすぐ地獄に定めるのではないかと不安に思っていました。悲劇的でした。なぜなら、彼らは彼女をこんなにも束縛し、彼らが彼女に与えたのは、この聖書箇所だったからです。指揮系統があるとき、最終権威者は神です。私は彼女に、イエスが私たちにどのように支配者になるべきかを示しておられる箇所を見せました。私たちは、みなのもべにならなければならぬのです。人々を束縛したり、地獄の脅しをしたりしてはならないのです。それは、私たちの主に似ても似つかぬものです。それは、私たちの主を表していません。

最後に、ヘブル人への手紙13章24節です。「すべてのあなたがたの指導者たち、また、すべての聖徒たちによろしく言ってください。」ですから、彼らのことを思い出し、従い、彼らが主に従い、あなたがたを主の道に導くときに、彼らに従いなさい。そして、彼らによろしく言いなさい。そのように、親しくしなさい。神に召された人が、神の民を導くことはすばらしいことです。そこには、イエス・キリストの愛にあって、互いに仕え、服従し合うような、愛のきづながあります。この教会では、神政政治の政府の形態のようなものをとっています。イエス・キリストが教会の、からだの頭であると認めています。イエス・キリストが最終権威者です。すべての決断は、キリストにゆだねられています。私たちの教会には、私たちに協力して働いてくれる役員会があります。毎月会合を持ち、教会の様々な問題について話をします。いろいろな必要や方向性について話をします。しかし、毎回役員会の会合があるとき、役員会が始まる前に、私たちはいつも祈りで始めます。イエスがその教会の主であることを認めます。私たちは、イエスの願っておられること、望んでおられることを実行するためにいるだけなのです。私たちは、支配するためにいるわけではありません。決断をするためにいるのでさえありません。私たちは、イエスの決断を求め、イエスの望んでおられることを実行するためにいるのです。この教会のことについて、熱心に主のみこころを求め、イエス・キリストの望まれていることを実行しようとしている役員会の人たちを、神が与えてくださっていることを感謝します。御霊に満たされた人々で、治める賜物がある人々です。ほんとうに教会は祝福されています。そのような治める賜物がある人々が、祈りとおして、神を、神の導き、神のみこころ、神の教会についてのご計画を求めているので、私たちは祝福されているのです。もう一つ、聖書の箇所にはこう告げられています。「幸いなことよ。主をおのれの神とするその民は。(詩篇144:15)」私たちが喜びと幸いを受けるのは、主に、真の意味で主となっただき、教会を主の道に導いていただくからなのです。

教える賜物(#3077)

コリント人への手紙第一12章28節です。「そして、神は教会の中で人々を次のように任命されました。すなわち、第一に使徒、次に預言者、次に教師、…」教える賜物です。パウロが教会における奉仕の賜物についてエペソ人に手紙を書いた時、再びこのように書いています。「ある人を使徒、ある人を預言者、…」そしてここでパウロは、牧師・教師の前に、伝道者をリストに加えています。エペソ人への手紙4章1節です(11節のことか)。ローマ人への手紙12章で、再びパウロは、御霊の賜物について語っていますが、「奉仕であれば奉仕し、教える人であれば教えなさい。(ローマ12:7)」と述べています。

教える賜物が、最初に言及されているのは、出エジプト記4章12節です。そこで、神はモーセに語って、「さあ行け。わたしがあなたの口とともにあって、あなたの言うべきことを教えよう。」と言われました。主はモーセに、「おまえが行きなさい。わたしはあなたとともにいよう。わたしがあなたにことばを与えよう。わたしがあなたを教える。」とおっしゃっているのです。モーセは、民に対し神を代表していました。モーセは彼らに神のことばを話しました。使徒パウロは、コリントの教会に手紙を書いた時に、「私は主から受けたことを、あなたがたに伝えたのです。(1コリント11:23)」と述べました。私がみなさんの前に立って奉仕し、神のことばをみなさんに教える時は、パウロが言った「私は主から受けたことを、あなたがたに伝えたのです。」という同じ言葉が、私が語る前に言えるよう、いつも祈っています。学びの時に、私は主を待ち望みます。主を求めます。主の御思いを求めます。聖霊の靈感を求めます。聖霊が、神のみことばに光を当ててくださることを求めます。私が学んでいる時、神の御霊が自分の心に、神の愛や神の真理を伝えてくださっていると思います。それから、私はみなさんの所に来て、主から受けたことをみなさんにお話して、神の真理をお伝えしていると思います。先ほどの出エジプト記4章12節に近い15節には、このように書かれています。「あなたが彼に語り、…」つまり、モーセがアロンに語り、ということです。「その口にことばを置くなら、わたしはあなたの口とともにあり、彼の口とともにあって、あなたがたのなすべきことを教えよう。」最初は、「何を言うべきかを教えよう」でしたが、今は、「何をなすべきかを教えよう」です。

ネヘミヤ書9章20節には、「あなたは、彼らに悟らせようと、あなたのいつくしみ深い霊を賜り…」と書かれています。聖霊が、神のことばを教えるのを助けてくださっています。これは、実に必要不可欠なことです。聖霊から力を受け、聖霊が神のみことばを照らしてくださることなくしては、神のみことばを教える資格はないと思います。世界一の学者であっても、その人に聖霊がおられないなら、神の御霊を持っているみなさんの誰よりも、その人のみことばの理解は乏しいと思うのです。それは、神の御霊によらなければ、神のことがわからないからです。生まれながらの人は、悟ることができないし、知ることができません。それは、御霊によってわきまえるものだからです(1コリント2:12参照)。ですから、みことばを知り、みことばを教えるには、聖霊が必要です。イエスは約束されました。「しかし、助け主、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、また、わたしがあなたがたに話したすべてのことを思い起

こさせていただきます。(ヨハネ14:26)」ですから、旧約聖書でも、ネヘミヤが、彼らを悟らせる神の
いつくしみ深い御霊について話しています。

イエスは、ルカの福音書12章12節で、「言うべきことは、そのときに聖霊が教えてくださるから
です。」と言われました。こうも言われました。「人々があなたがたを、役人や議会に連れて行きま
すが、何をどう弁明しようか、何を言おうかと案じるには及びません。聖霊が、そのときにあなた
に話すことを示されます。(ルカ12:11参照)」これがどのように現われているのかは、使徒行伝
に書かれています。ペテロとヨハネが宮に入ったとき、足なえの男がいやされました(以下、使徒
行伝3、4章参照)。その機会を用いて、二人は、神の御力によって死者の中からよみがえられた
イエス・キリストについて証しをしました。けれども、彼らは捕らえられ、牢屋に入れられました。翌
日、彼らは宗教議会に連れて行かれ、主任検察官が、非常に誘導尋問のような、答えれば自ら
嫌疑を招くような尋問をしました。「あなたがたは、だれの名によって、何の権威によって、この奇
蹟をこの足なえの男に行なったのか。」ペテロは、「憲法修正第五条に基づき(訳者注:いわゆる黙秘権
のこと)、私は、返答を拒否します。」と言うこともできたのです。なぜなら、返答すれば、自ら嫌疑を
招くことになったからでした。律法の書には、「誰かが現われ、しるしや不思議を示し、エホバ神以
外のものを拝むように導くなら、その人は、石打ちで殺されなければならない。(申命13:1-5参
照)」と告げられています。彼らはペテロをわなにはめようとしていました。なぜなら、回廊で、ペテロは、
「イエス・キリストの御名によって、この方を信じる信仰によって、この信仰のゆえに、この人は皆
さんの目の前で直って立っています。」と言っていたからです。彼らは、これを繰り返してほし
かったのです。しかし、ペテロは、「あなたがたの父祖の神が、イエス・キリストに栄光をお与えに
なりました。」と言いました。ペテロは聖霊に満たされて、聖霊の力によって答えました。彼が立っ
ていた宗教議会の前で、かなり強く答えました。後に、ステパノが全く同じ議会の前に立ち、聖書
に記録されている中でも、最も驚くべき説教をしました(使徒行伝6、7章参照)。これは、聖霊の
力によるものです。彼らがステパノの顔を見ると、御使いの顔のように見えました。御霊の力によ
って、輝いていたのです。主がステパノに、すぐれた弁明を与えられました。これは、聞いた人々
の心を実に深く刺し通しました。

使徒パウロは、テモテへの手紙第二1章11節で、「私は、この福音のために、異邦人の宣教者
(訳者注:preacher「説教者」とも訳せます)、使徒、また教師として任命されたのです。(訳者注:欽定訳には、
「異邦人の」が含まれています。)」と言いました。彼は、異邦人への使徒であり、異邦人への宣教者であ
り、また教師でした。さて、パウロがコリント人に、「聖霊が、みこころのままに、おのおのにそれぞ
れの賜物を分け与えてくださるのです。(1コリント12:11参照)」と伝えたのをおぼえていますか。
宣教者と伝道者のどちらの賜物も与えられた人が多くいます。教師と伝道者のどちらの賜物も与
えられた人も多いです。例えば、グレッグ・ローリーです。マイク・マッキントッシュもそうでしょう。ラ
ウル・リースもそうです。彼らは教えの奉仕を行なっているだけでなく、伝道者でもあります。説教
の賜物も持っています。神は、彼らの群れへの教えの奉仕だけでなく、伝道の努力も祝福されて
います。これらの賜物が組み合わされることで、強め合い、補い合っていると思います。なぜなら、
牧師・教師として、彼らは牧者の心を持っています。そのため、教会のために、地域教会のために

伝道はどう行なわれるべきかを心得ています。

使徒パウロは、自分が教師だと言いました。使徒行伝11章26節で、彼がその賜物を用いているのを見ることができます。パウロは、回心した後に、アラビアの砂漠に旅したあと(ガラテヤ1:17参照)、少しの間エルサレムの教会に来ました。エルサレムの教会は、パウロがあまりに熱心なのに戸惑っていました。彼は、宗教指導者、とくにパリサイ人に対して熱を入れすぎていました。それで、エルサレムの教会は、彼をタルソに退かせるようにしたのです。エルサレムにある教会には、パウロは快く受け入れられませんでした。けれども、タルソでくすぶっているだけではあまりにもったいない人物だったので、バルナバはタルソに行き、サウロを見つけました。アンテオケで、異邦人の大きな教会が出来ていたからです。パウロが、ヘブル文化の背景だけでなく、ギリシヤ文化の背景もあることを知り、バルナバは、アンテオケの異邦人の教会にとって、パウロがすばらしい助け手、奉仕者になると判断しました。それで、バルナバはタルソに行き、パウロを見つけました。使徒行伝11章26節ですが、「彼に会って、アンテオケに連れて来た。そして、まる一年の間、彼らは教会に集まり、大ぜいの人たちを教えた。弟子たちは、アンテオケで初めて、キリスト者と呼ばれるようになった。」そして、それから、使徒行伝13章1節において、アンテオケにある教会の教師たちが列挙されている中にサウロの名が、アンテオケの教師たちの名に連らねられています。使徒行伝15章35節には、「パウロとバルナバはアンテオケにとどまって、ほかの多くの人々とともに、主のみことばを教え、宣べ伝えた。」とあります。ですから、パウロは、他の人たちにも見られたように、教えるだけでなく説教の賜物も合わせ持っていました。使徒行伝18章11節で、パウロはコリントにいました。「そこでパウロは、一年半ここに腰を据えて、彼らの間で神のみことばを教え続けた。」ですから、一年間アンテオケにいて教え、18か月間コリントにいて教えました。

それから、使徒行伝20章20節でパウロは、エペソにいる長老たちに、「益になることは、少しもためらわず、あなたがたに知らせました。人々の前でも、家々でも、あなたがたを教え」ました、と告げました。そして20章26節ですが、「ですから、私はきょうここで、あなたがたに宣言します。私は、すべての人の血について責任がありません(新改訳脚注参照)。私は、神のご計画の全体を、余すところなくあなたがたに知らせたからです。」とあります。パウロは、エペソ人たちに、彼らの中にいた2年から3年の間で、神のご計画の全体を知らせたと言うことができました。教役者が、教会の人々に、「私は、神のご計画の全体を、余すところなくあなたがたに知らせました。」と宣言できるのは、すばらしい誇りだと思います。そのようなことを言えるには、たった一つの方法しかありません。すなわち、教会の人々に、創世記から黙示録まで、聖書全体を教えることです。創世記から黙示録までの聖書全体を終えたなら、「私は、神のご計画の全体を、余すところなくあなたがたに知らせました。」と言っても大丈夫です。私たちの通読の学びは、これで7回目になります。ですから私は、もし皆さんがここに長い間おられたのなら、私は、神のご計画の全体を、余すところなくあなたがたに知らせました、と言えます。もし、まだ創世記から始めるほど長い間、来ていらっしやなくても、もし来続けるなら、残りの部分が聞けます。「神のご計画の全体を、余すところなくあなたがたに知らせたからです。」

さて、パウロはガラテヤ人に、「私が教えたことは、人間から受けなかったし、また教えられもしませんでした。ただイエス・キリストの啓示によって受けたのです。(ガラテヤ1:12参照)」と知らせました。ですから、パウロは、彼がガラテヤ人に教えたのは、直接主から与えられたものだと言っています。恵みの理解は、イエス・キリストからのものでした。それは、エルサレムにある教会から教えられたものではありませんでした。人によってではなく、イエス・キリストによる直接の啓示だったのです。コリント人への手紙の中で、彼はこう言いました。「さて兄弟たち。私があなたがたのところへ行ったとき、私は、すぐれたことば、すぐれた知恵を用いて、神のあかしを宣べ伝えることはしませんでした。なぜなら私は、あなたがたの間で、イエス・キリスト、すなわち十字架につけられた方のほかは、何も知らないことに決心したからです。あなたがたといっしょにいたときの私は、弱く、恐れおののいていました。そして、私のことばと私の宣教とは、説得力のある知恵のことばによって行なわれたものではなく、御霊と御力の現われでした。それは、あなたがたの持つ信仰が、人間の知恵にささえられず、神の力にささえられるためでした。(1コリント2:1-5)」驚くべき、興味深いパウロの発言です。実際パウロは、才能ある人物でした。パウロの書いたものを読めば、彼が才能ある人物だと認めざるを得ません。彼は、自分がガマリエルのもとで教育を受けたと話しています(使徒22:3参照)。ガマリエルは、当時、一流のラビでした。けれども、パウロの願いは、人々の知性に訴えて説得し、イエス・キリストを信じさせることではありませんでした。それでは、知的な信仰になってしまいます。御霊の御力の現われをもって宣べ伝えることが願いでした。御霊が彼らの心に届くためでした。知性における回心と心における回心には、違いがあります。頭で信じるのと心で信じるのには違いがあります。パウロは、心に届くことに関心がありました。人の心に届くのは、御霊です。そして、心の回心が本当に大切な回心なのです。

パウロは、ガラテヤ人への手紙でこのように書いています。「おお愚かなガラテヤ人。だれがあなたがたを真理から遠ざけ、迷わせたのですか。御霊で始まったあなたがたが、いま肉によって完成されるというのですか。(ガラテヤ3:1, 3参照)」奉仕に対して、私が主にお仕えしていることに対して主が報いてくださる時が近づいています。気がかりなことがあります。その時が近づくとつれて、将来一番の気掛かりなのは、・・・私たちは、御霊が驚くべき働きをなさるのを見るすばらしい体験をしました。それは、現代の教会史で比類なきものだと思います。牧師たちといっしょに集まった時、何百人もの牧師たちといっしょに集まった時、先週のこと、いや、今週終わったところですが、500人の牧師婦人たちがコンファレンスセンター(訳者注:修養会の会場のこと)に来ていました。そして、500人の生徒がそこにいます。それに加えて、全米にある分校には2000人の生徒がいます。そして、たくさんの教会があります。先週の日曜にチューソンで新しい教会を始めました。それは、イーストサイドにあります。もちろん、スコット・リチャーズ(Scott Richards)がチューソンに行って、ノースサイドで始めたのを知っています。神が彼を祝福して下さっています。私たちは数週間後にそこへ行って、彼の新しい教会の献堂式をします。彼がそこに行ってから、一年足らずで第三礼拝までするようになり、神が祝福して下さっています。しかし、先週の日曜日チューソンのイーストサイドに教会を始めました。サウスサイドで牧会をしているロバート・ファロー(Robert Farrow)については、最初の日曜日に800人出席者がありました。驚くべきことです。こ

れは、神の御霊の働きです。他に説明のしようがありません。人の才能ではありません。人の計画ではありません。これは、神の御霊の働きです。御霊で始めたのに、肉で完成させるのでしょうか。聖霊のなされたことを、私たちが改善することができるのでしょうか。そんなことをしようものなら、その途端に、改善どころかだめになってしまいます。私たちが手出しをするとたんに、私たちがごちよごちよ介入するとたんに・・・私は神の働きに手出しをしないようにし続けたいのです。神に働いていただき、私は後ろで座って、ニッコリ笑って、それを楽しみます。ああ、私たちが御霊にとどまり続けるよう、神が助けてくださいますように。

だから、パウロはこう語ったのです。「あなたがたの持つ信仰が、人間の知恵にささえられず、・・・」知的な議論や護教論を語ることはできますが、「・・・神の御霊の力と現われにささえられることを願うのです。(1コリント2:5参照)」「あなたがたの持つ信仰が、人間の知恵にささえられず、神の力にささえられるためでした。しかし私たちは、成人の間で、知恵を語ります。この知恵は、この世の知恵でもなく、この世の過ぎ去って行く支配者たちの知恵でもありません。(1コリント2:5、6)」「過ぎ去って行く知恵を知りたければ、量子物理学を学んでみてください。量子物理学者は、「何も存在しない。」と言います。すべては幻想だと言います。「私たちの語るのは、隠された奥義としての神の知恵であって、それは、神が、私たちの栄光のために、世界の始まる前から、あらかじめ定められたものです。この知恵を、この世の支配者たちは、だれひとりとして悟りませんでした。もし悟っていたら、栄光の主を十字架につけはしなかったでしょう。まさしく、聖書に書いてあるとおりです。『目が見たことのないもの、耳が聞いたことのないもの、そして、人の心に思い浮んだことのないもの。神を愛する者のために、神の備えてくださったものは、みなそうである。』神はこれを、御霊によって私たちに啓示されたのです。御霊はすべてのことを探り、神の深みにまで及ばれるからです。いったい、人の心のことは、その人のうちにある霊のほかには、だれが知っているでしょう。同じように、神のみこころのことは、神の御霊のほかにはだれも知りません。(1コリント2:7-11)」ですからパウロは、御霊なしには、実際には神に属することを知ることができないと言っているのです。「ところで、私たちは、この世の霊を受けたのではなく、神の御霊を受けました。それは、恵みによって神から私たちに賜ったものを、私たちが知るためです。この賜物について話すには、人の知恵に教えられたことばを用いず、聖霊に教えられたことばを用います。その御霊のことばをもって御霊のことを解くのです。しかし、生まれながらの人間は、神の御霊に属することを受け入れません。それらは彼には愚かなことだからです。また、それを悟ることができません。なぜなら、御霊のことは御霊によってわきまえるものだからです。御霊を受けている人は、すべてのことをわきまえますが、自分はだれによっても、わきまえ」あるいは、理解されません。「いったい、『だれが主のみこころを知り、主を導くことができたか。』ところが、私たちには、キリストの心があるのです。(1コリント2:12-16参照)」

「さて、兄弟たちよ。私は、あなたがたに向かって、御霊に属する人に対するようには話すことができないで、肉に属する人、キリストにある幼子に対するように話しました。私はあなたがたには乳を与えて、堅い食物を与えませんでした。あなたがたには、まだ無理だったからです。実は、今でもまだ無理なのです。(1コリント3:1-3:2)」ですから、コリントの教会の悲劇は、パウロが御霊

の深いところを人々に教えようとしたのですが、人々は真理を聞くのが無理だったので、限界があったことです。さて、弟子たちも同じでした。「わたしには、あなたがたに話すことがたくさんありますが、今あなたがたはそれに耐える力がありません。(ヨハネ16:12)」とイエスは言われました。パウロはコリントの教会に言うことがたくさんありました。「あなたがたに話すことがたくさんありますが、あなたがたはそれに耐える力がありません。まだ、あなたたちには乳を与えています。どうも依然として、哺乳瓶で養う必要があるようです。それは、あなたがたが発達できず、成長できていないからです。」もちろん、教会の中で、教える奉仕の目的は、この霊的な成長、霊的な発達をもたらすことです。とかく人は、経験のみで霊的に成長することができると考えて、大きな間違いをします。それは違います。神のみことばのみが人の霊を養うのであって、これが真の霊的な成長をもたらすのです。油注がれた、神についての教えを通して語られる、神のみことばのことで、ですから、この教えの賜物は、教会において、非常に重要な必要な賜物なのです。

もし、教会の中で、教えの賜物を用いる必要がある時があるとするなら、それは今です。余りに肉的なことが横行しています。教会は、コリントの教会と同じように、霊的成長が抑えられている状態にあります。成長して発達し、成熟しているべき時なのに、依然として、キリストにある幼子状態なのです。これは実に悲劇です。どういう訳か、今日では、説教が牧師の主眼点になっているようです。そして、教会は説教され過ぎて、死にそうになっています。説教は、その実際は福音を宣べ伝えることです。ですから、どちらかと言うと、説教は回心していない人のためのものです。パウロは行って、人々にキリストを宣べ伝え、そこに滞在し、彼らを教えました(使徒11:26, 18:11参照)。いったん、イエス・キリストへの信仰を持つようになれば、その人の大きな必要は、聖書を教えられることです。牧師・教師の目的は、「聖徒を整えて、奉仕の働きをさせ、キリストのからだを建て上げるためであり、ついに、私たちがみな、信仰の一致と神の御子に関する知識の一致とに達し、完全におとなになって、キリストの満ち満ちた身たけにまで達するためです。それは、私たちがもはや、子どもではなくて、人の悪巧みや、人を欺く悪賢い策略により、教えの風に吹き回されたり、波にもたせられたりすることがなく、むしろ、…あらゆる点において成長し、かしらなるキリストに達することができるためなのです。(エペソ4:12-15)」こうして霊的に成熟するのですが、このために、神は牧師・教師を任命されました。その目的は、聖徒を整えて、奉仕の働きをさせ、キリストのからだを建て上げることです。

ヘブル人への手紙の記者は、6章でこう言っています。「ですから、私たちはキリストについての初歩の教えをあとにして、成熟を目ざして進もうではありませんか。死んだ行ないからの回心、神に対する信仰、バプテスマについての教え、手を置く儀式、死者の復活、とこしえのさばきなど、基礎的なことを再びやり直したりしないようにしましょう。(1-2節参照)」「こうした初歩の教えをあとにして、成熟を目ざして進もうではありませんか。戻って、基礎的なことをやり直したりしないようにしましょう。」とパウロは言っているのです。基礎は大切です。けれども、基礎の上に建て上げられなければいけません。ただ、基礎だけを取り組むではありません。基礎ができあがったら、建物を造るのです。これが、聖徒が完全になること、成熟することなのです。健全なみことばの教えがなければ、信者は、霊的発達が抑えられた状態になります。パウロは、まさにこのゆえに、コ

リント人のことを悲しんだのです。預言者ホセアをとおして、主は、「わたしの民は知識がないので滅ぼされる。あなたが知識を退けたので、わたしはあなたを退けて、わたしの祭司としない。あなたは神のおしえを忘れたので、わたしもまた、あなたの子らを忘れよう。(4:6)」と叫ばれました。ですから、神は民のことで悲しまれたのです。彼らは知識がないので滅ぼされました。

さて、パウロが教えについてテスを指導しましたが、こう言いました。「すべての人を救う神の恵みが現われ、…教えさとしたからです。(テス2:11-12)」神の恵みは私たちに何を教えさしますか。「私たちに、不敬虔とこの世の欲とを捨て、この時代にあって、慎み深く、正しく、敬虔に生活」することです。私たちは、罪に支配されている世に住んでいます。悪魔に支配されている世です。しかし、私たちは、不敬虔とこの世の欲とを捨てなければいけません。この時代にあって慎み深く、正しく、敬虔に生活しなければなりません。テモテに対して、パウロは言いました。「多くの証人の前で私から聞いたことを、他の人にも教える力のある忠実な人たちにゆだねなさい。(2テモテ2:2)」ですから、教える奉仕は続きます。神の真理を忠実な人たちにゆだねて、その人たちが出て行って、他の人を教えます。そして、また他の人に教えることができるように教えて、教えが続いていくのです。これは大切なことであり、教えの奉仕のすばらしさはここに 있습니다。あなたが神のみことばを教え、人々がそれを受け取り、今度は彼らが他の人に教えることができるようになります。そしてまた、その他の人がまた別の人に教えることができます。そして、幾何級数的に成長するのです。

さて、神のみことばを教える方法についてですが、ネヘミヤ記8章にあります。前後関係を知るために、1節から読みます。「民はみな、いっせいに、水の門の前の広場に集まって来た。そして彼らは、主がイスラエルに命じたモーセの律法の書を持って来るように、学者エズラに願った。そこで、第七の月の一日目に祭司エズラは、男も女も、すべて聞いて理解できる人たちからなる集団の前に律法を持って来て、水の門の前の広場で、夜明けから真昼まで、…朗読した。」朝から正午まで朗読しました。「男や女で理解できる人たちの前で、これを朗読した。民はみな、律法の書に耳を傾けた。」もし私たちが同じことをみなさんにしたら、世界の中で自分ほど迫害されている人はいないと思われるでしょう。「学者エズラは、このために作られた木の台の上に立った。」私たちは、木の台の後ろに立っていますね。「…エズラはすべての民の面前で、その書を開いた。彼はすべての民よりも高い所にいたからである。彼がそれを開くと、民はみな立ち上がった。エズラが大いなる神、主をほめたたえると、民はみな、手を上げながら、『エーメン、エーメン。』と答えてひざまずいた。あるいは、「アーメン、アーメン。」です。これはみな、高教会派か低教会派の違いであり、神学者は何世紀にも渡り、エーメンなのかアーメンなのか議論してきました。そしてまだ分かれていて、「エーメン」という人たちもいるし、「アーメン」という人たちもいます。エーメンですか？(訳者注:日本や他の国の教会では、「アーメン」だけが用いられていますが、アメリカなどでは「エーメン」も使われています。カルバリー・チャペルでは、「エーメン」です。それで、チャックがそういったときにみんなが笑っています。)神学者たちのことはこのくらいにして…。「民はみな、手を上げながら、『アーメン、アーメン。』と答えて…」高教会派ですね。(訳者注:高教会派は、カトリックの伝統を強調し、教会の権威・支配・儀式を重んずる英国国教会中の一派。低教会派は、聖職位や聖奠(てん)をあまり重視せず、福音を強調する英国国教会の一派。高教会派が、「ア

ーメン」を用い、低教会派が「エーメン」を用いたようです。)「…ひざまずき、地にひれ伏して主を礼拝した。…彼らが神の律法の書をはっきりと読んで説明したので、民は読まれたことを理解した。」まさに、ここに秘訣があります。彼らははっきりと読み、それから説明しました。そして、その意味を理解させました。神のみことばの講解による教えです。

さて、良い教えを受けた結果についてですが、イザヤ54章13節にこうあります。「あなたの子どもたちはみな、主の教えを受け、あなたの子どもたちには、豊かな平安がある。あなたは義によって堅く立ち、しいたげから遠ざかれ。恐れることはない。恐れから遠ざかれ。それが近づくことはない。」教えを受けた結果、子どもたちに大きな平安があります。恐れが遠ざかります。なぜなら、みことばを教えられることによって、神のすばらしさ、神の愛、あなたへの神の心遣いを理解するからです。神がどれほど愛してくださり、心に留めておられるのかを理解するとき、将来の不安を持つ必要がなくなります。自分の生活に起こっている出来事によって、恐れることはなくなるのです。そうではなく、大きな平安と確信を得ることができるのです。神が私を愛してくださっている。神が王座についておられる。神が私を見守っておられる。神は私を見とおしておられる。第二テモテ書3章16節で、パウロは、「聖書はすべて、神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練のために有益です。それは、神の人が、すべての良い働きのためにふさわしい十分に整えられた者となるためです。」と伝えています。ですから、神のみことばや、みことばの教えは、あなたをすべての良い働きのために十分に整えてくれます。それは、成熟と霊的成長をもたらし、主との歩みを成熟させます。

ですから、聖霊の教えの賜物は、教会にとって何たる祝福でしょうか。教会にとって、実に大切なものです。日曜学校で教えている人は、非常に大切な、重要な奉仕を神が与えてくださったのです。柔軟な小さい者たちの思いに、神はどのような方か、最初の印象、重要な印象を与える機会があるからです。聖句を暗記するよう励ますことができます。神がどれほど愛してくださっているのかを知らせることができます。私たちが礼拝し、お仕えしている神の基礎となる真理を教え、心に植え付けることができます。パウロは、「教える人であれば教えなさい。(ローマ12:7)」と言いました。つまり、教えるために待ち望み、良き教師、教えることのできる教師となるために聖霊の助けと導きを求めます。神の御霊によって、彼らの思いと心に、永遠の神の過ぎ去ることのない真理を植え付けることができます。私たちの多くが、日曜学校の時を振り返って、神について教えられた学びを思い出すことができます。すばらしい、子どもじみたたとえをいくつか思い出します。でも、そういったとえは、子どもが理解できるようになるためには必要なもので、一生残ります。ここでは、神のみことばを学び、勉強する機会がたくさんあります。火曜の夜に聖書学校があります。聖書学校で教える人も、聖霊の助けと油注ぎを求めてください。聖霊が賜物を与えてくださることを求めてください。私が神学校にいたとき、神学校の中でもっとも頭脳明晰だった教授は、教える賜物がありませんでした。彼の授業は、一番つまらなかったのです。彼には、教える賜物がなかったからです。他に、教える賜物がある教授がいました。そういった教授たちは、もっと学びたいと思わせることができました。わくわくさせてくれました。言いたくないのですが、ある教授の授業は何一つ思い出すことができません。けれども、教える賜物がある教授のほうは、彼らの

教えた真理は私の人生の一部になっており、今日、私の神についての理解になっています。ですから、どれだけ頭がいいかは、役に立たないのです。必要なのは教える賜物です。神が教える賜物を与えておられるなら、用いてください。使ってください。近所の子どもたちを自分の家に招いて、神について教えてください。神が与えられた賜物を用いてください。パウロがテモテに言ったように、「あなたのうちに与えられた賜物を、燃え立たせてください。(2テモテ1:6参照)」

勧めの賜物（#3078）

Gift of Exhortation

賜物が与えられているということは、私たちがみな、神から何らかの賜物をいただいているということです。特別な才能や素質や能力をいただいています。私たちにはおのおの、特別な才能や賜物があるのですが、それによって生きることが面白くなります。神は、人をさまざまな性格に造り上げてくださいました。神がみなさんを創造されたとき、すこぶる特別なものとして、すこぶる独特なものとして創造して下さいました。あなたのような人は、他に存在しないのです。神は、ありのままのあなたに興味があるので、他の人 — イエスは別ですが — 他の人のようになろうとするのは間違っています。神は、あなたをすこぶる独特に、別個に造られ、そのままのあなたを愛しておられるのです。

さて、神が自分をこのように造ったと言って、神を非難することがよくあります。自分を鏡で見て、「神さま、こんなふうにはなくて、あんなふうには造れなかったのですか。」と言います。パウロは、「陶器が陶器師に、『あなたはなぜ、私をこのようなものにしたのですか。』と言えるでしょうか。（ローマ9:20参照）」と言いました。神が自分をこんなふうにお造りになったことに不満になるときがあります。けれども、私たちは、自分の独自性を神からの賜物として受け入れなければいけません。神は、そうゆうあなたがお好きなので、そのようにあなたをお造りになったのです。そういうあなたを受け入れてくださっています。ですから、自分自身を受け入れることは大切です。それは、神がこのようにお造りになったからです。そして、自分は特別であり、神に対して独特な存在であることを知らなければいけません。キリストのからだの中で、他の人には埋めることのできない場所を、神はあなたに備えられています。神は、その場所のために、あなたを独特に形造られました。それゆえ、私たちがキリストのからだの中で、その場所を見つけてその場につくことは大切なのです。それは、神の恵みにしたがって与えられた賜物によるのです。

そこで彼（パウロ）は続けて、いろいろな賜物を、列挙していますが、私たちはもうそれらを網羅しました。「もしそれが預言であれば、その信仰に応じて預言しなさい。奉仕であれば奉仕し、教える人であれば教えなさい。勧めをする人であれば勧め」なさい（ローマ12:6-8）。さて、先週は教える賜物を学びました。それは、神の道や神の真理に人々を教え導くことです。これは実に、教会にとって決して欠かすことのできない大切な奉仕です。けれども、対になっている賜物があり、教える賜物とともに用いられる必要のある賜物があります。それは勧めの賜物です。勧めの賜物は、新約において、また旧約においても、預言の賜物と関係しています。パウロは、第一コリント書14章において、「預言をする者は、徳を高め、勧めをなし、慰めを与えるために、人に向かって話します。（3節）」と言いました。ですから、勧め(exhortation)は預言の賜物の一部になっています。使徒行伝15章32節では、「ユダもシラスも預言者であったので、多くのことばをもって兄弟たちを励まし(exhorted)、また力づけた。」預言者であったので、兄弟たちを勧めたのです。

これは、教会の中でとても大切な賜物です。多くの人が、自分が正しいと思っていることに従って生きていないようです。みことばを聞くだけの者であり、実行する者ではない人たちが多くいます

(ヤコブ1:22参照)。真理を知っており、真理に同意さえしていますが、行なわないのです。ですから、そのような人たちには励ましが必要なのです。後押しが必要なのです。実に多くの場合、「ええ、その通りです。それをすべきだし、します。」と言うのですが、翻弄され・・・本当はすべきなのですが他の事に翻弄され、そのままにしてしまうのです。人間は、生来ぐずぐず先送りする性質のようです。いつも先送りにしてしまうのです。「まあ、来週までにそれをやりたいなあ。」「今日は時間がないから、たぶん明日できるだろう。」数年前、リーダーズ・ダイジェスト(Readers' Digest)の中に、先延ばしについてのすばらしい記事がありました。私たちの娘の中に、特にぐずぐず先送りするたちの子がいますが、妻が彼女にその記事を読んでみたら、と言いました。それで彼女は、「ああ、あの記事なら見たわ。いつか、読んでみるわ。」と言いました。私たちの傾向として、しなければいけないと分かっていることを先延ばしにしてしまうのです。そのままにしてしまうところがあります。それで、「ほら、取りかかりなさい。今、やりなさい。」と言ってくれる人が必要なのです。勧めは、励ましと呼ぶこともできます。なぜなら、勧めは、していなければいけないことを行なうように人を励ますものだからです。

さて、私たちは、祈りについて勧めが必要です。私たちはみな、今、自分が祈っているよりも、もっと祈るべきであるとわかっているからです。そして、祈りは最後の神頼みではなく、最初により頼むものであることを知っています。しかしながら、状況に翻弄され、生活面でのプレッシャーにかまけて、愚かにも、解決を見出すために自分で何とかしようとして、そのことを友人に打ち明けることが実によくあるのです。そして友人は、「そのことについて祈ったかい？」と聞きます。「えっと、祈ろうとしたけど…。」それで、「祈ろうよ。今、祈ろうよ。今、いっしょに一つになって祈ろうじゃないか。」と励まします。これが励ましであり、祈りへの勧めです。また、主に信頼することについてもそうです。私がハンティントン・ビーチ(Huntington Beach)で牧会をしていたとき、本当にすばらしい90歳の婦人がいました。彼女には勧めの賜物がありました。励ましが必要な時には、彼女のところに訪ねに行きました。本当に、励ましてくれ、勧めをしてくれました。かつて彼女は、ラジオ番組を持っていました。フロリダとカリブ海地域一帯で放送されていました。いつも、全体の内容は、「神は御座におられる。」ということでした。「神は、あなたが通っている状況をご存知です。神は、あなたのことを見守っておられます。心配しなくてもいいのです。それは、御父があなたを愛し、心に留めて下さり、今日、あなたに何が起きているのかをご存知だからです。ただ、神が御座におられることを知ってください。」わかってはいても、切迫した状況にいるとき、このことを忘れてしまいます。ですから、勧めをしてくれる人が必要なのです。さて、勧めの賜物がないのに、勧めをしようとする人がいます。その場合、慰められるのではなく、いらいらさせられます。自分がすべきことをそのような人から勧められると、「お前がやればいーだろう！」と言いたくなくなってしまいます。いらいらしてしまいます。でも、本当に勧めの賜物がある人がいて、やりたくさせてくれます。

さて、私たちは、互いに励まし合うように命じられています。パウロがテモテに手紙を書いたとき、「私が行くまで、聖書の朗読と勧めと教えとに専念しなさい。(I テモテ4:13) 」と言いました。これらがしなければならないことです。勧めとみことばの朗読と健全な教えを受けることです。ヘブル書では、「ある人々のように、いっしょに集まることをやめたりしないで、かえって励まし

(exhorting)合い、かの日が近づいているのを見て、ますますそうしようではありませんか。(10:25)」と伝えられています。またヘブル書ですが3章です。「『きょう』と言われている間に、日々互いに励まし(exhort)合って、だれも罪に惑わされてかたくなにならないようにしなさい。(13節)」と命じられています。パウロがテスに手紙を書いたとき、「あなたは、これらのことを十分な権威をもって話し、勧め、また、責めなさい。(2:15)」と言いました。さて、この賜物の目的は、私たちが神のことにおいて、ますます豊かになることです。第一テサロニケ書4章1節には、「終わりに、兄弟たちよ。主イエスにあって、お願いし、また勧告します(exhort)。あなたがたはどのように歩んで神を喜ばすべきかを私たちから学んで、ますます富むようになってください。(訳者注:欽定訳からの翻訳。英語では、"abound more and more"となっています。)」私たちは、どのように歩んで神を喜ばすべきか勧めました。神と歩み、交わりをすれば、その結果、ますます富むようになるのです。また、(勧めの賜物の目的は、)反対する人たちを正すことです。テス書1章9節です。「教えにかなった信頼すべきみことばを、しっかりと守っていなければなりません。それは健全な教えをもって励ましたり(exhort)、反対する人たちを正したりすることができるためです。」

さて、旧約聖書を見ますと、ほとんどの預言者が勧めの賜物を持っていたことがわかります。絶えず、民が神に立ち返るように勧めました。また、偶像崇拜から離れて主を求めるように、悪から悔い改めるように勧めました。サムエルは、「主に従い、わきにそれず、心を尽くして主に仕えなさい。(Iサムエル12:20)」と言って勧めました。第二列王記17章13節には、こうあります。「主はすべての預言者とすべての先見者を通して、イスラエルとユダとに次のように警告して仰せられた。『あなたがたは悪の道から立ち返れ。わたしがあなたがたの先祖たちに命じ、また、わたしのしもべである預言者たちを通して、あなたがたに伝えた律法全体に従って、わたしの命令とおきてとを守れ。』」このように、預言者は勧めの賜物を用いて、主に立ち返り、主を求めるように民を勧めました。新約聖書では、ペテロが勧めの賜物を用いています。その第一の書簡を書いたときに、5章でこう言いました。「そこで、私は、あなたがたのうちの長老たちに、同じく長老のひとり、キリストの苦難の証人、また、やがて現われる栄光にあずかる者として、お勧めします。(1節)」ここに、教会の長老や監督者に対する勧めがあります。「あなたがたのうちにいる、神の羊の群れを、牧しなさい。強制されてするのはではなく、…」あるいは、プレッシャーがかかっているからするのではなく、「…神に従って、自分から進んでそれをなし、卑しい利得を求める心からではなく、心を込めてそれをしなさい。あなたがたは、その割り当てられている人たちを支配するのではなく、むしろ群れの模範となりなさい。(2-3節)」このように、羊の群れを牧し、養い、世話をしなさいとの勧めがあります。それから、「同じように、若い人たちよ。長老たちに従いなさい。みな互いに謙遜を身に着けなさい。神は高ぶる者に敵対し、へりくだる者に恵みを与えられるからです。(5節)」そこで、「ですから、あなたがたは、神の力強い御手の下にへりくだりなさい。(6節)」という勧めがあります。「神が、ちょうど良い時に、あなたがたを高めてくださるためです。あなたがたの思い煩いを、いっさい神にゆだねなさい。…身を慎み、目をさましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたけるししのように、食い尽くすべきものを捜し求めながら、歩き回っています。堅く信仰に立って、この悪魔に立ち向かいなさい。(7-9節)」ですから、ペテロがこれらすべての勧めをしてい

るのを読むことができます。すなわち、監督の務めを果たし、羊の群れを牧すこと、神の割り当てられている人たちを支配するのではなく、むしろ模範となること、互いに従うこと、神の力強い御手の下にへりくだること、私たちの思い煩いを、神にゆだねること、身を慎み、目をさましていること、そして、敵であるサタンに立ち向かうことです。

ヤコブは、「信仰について私に話さないでください。あなたの行ないを見せてください。みことばを実行する人になりなさい。自分を欺いて、ただ聞くだけの者であってははいけません。」と言っています(ヤコブ2:18、1:22参照)。ですから、ヤコブは、行ないによって信仰を見分けるよう絶えず勧めました。あなたの行ないを見せてください。私は、あなたの信仰を見せましょう、と。これはとても重要かつ必要な書簡です。なぜなら、キリスト教の実践的な側面を取り扱っているからです。単に何かを言うだけでなく、使徒信条を反復するだけでなく、礼拝順序に従って立ったり、座ったりすることだけではないのです。聖書が行なうように命じていることを、実践することなのです。その証拠は、私たちが行なうことにあります。それによって現れるのです。パウロは、ローマ人に手紙を書いて、「そういうわけですから、兄弟たち。私は、神のあわれみのゆえに、あなたがたにお願いします。あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です。(12:1)」と言いました。ここでも、再びパウロは、行動に移すように、活動をするように勧めています。ただ信仰や信条にとどまるのではなく、あなたの生活における活動の中にそれが見えるようにしなさい、と。テサロニケ人に対して、パウロは、第一書簡を書き終えるにあたり、勧めを書き連ねました。「兄弟たち。あなたがたに勧告します(exhort)。気ままな者を戒め、小心な者を励まし、弱い者を助け、すべての人に対して寛容でありなさい。だれも悪をもって悪に報いないように気をつけ、お互いの間で、またすべての人に対して、いつも善を行なうよう務めなさい。いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい。…御霊を消してはなりません。預言をないがしろにしてはいけません。すべてのことを見分けて、ほんとうに良いものを堅く守りなさい。悪はどんな悪でも避けなさい。(5:14-22)」それから、「こういう人たちには、主イエス・キリストによって、命じ、また勧めます。静かに仕事をし、自分で得たパンを食べなさい。」これは、第二テサロニケ書の最後の章です(3:12)。私たちの主イエス・キリストによって、勧めます。仕事をし、自分で得たパンを食べなさい。そして次の節です。「しかしあなたがたは、たゆむことなく善を行ないなさい。(3:13)」これは良い勧めですね。善を行なっているが、その結果が見えない…たゆむことなく善を行ないなさい。忠実であれ。がんばれ。テモテに対して、パウロは言いました。「そこで、まず初めに、このことを勧めます。すべての人のために、また王とすべての高い地位にある人たちのために願い、祈り、とりなし、感謝がささげられるようにしてください。(Iテモテ2:1)」ユダは勧める者でした。「愛する人々。私はあなたがたに、私たちがともに受けている救いについて手紙を書こうとして、あらゆる努力をしていましたが、聖徒にひとたび伝えられた信仰のために戦うよう、あなたがたに勧める手紙を書く必要が生まれました。(3節)」

さて、私たちは、(キリストの)からだの中でおのの分と役目を果たして、神から授かった賜物を用いますが、教師は祈りが何であるかを教えます。祈りの大切さについて教えます。適切な

祈りのしかたを取り扱います。しかし、勧める人なら来て、こう言います。「ほら、祈らなきゃいけないって、分かっているのだろう。だったら、祈れよ！」そして後押ししてくれて、祈りとは何かをみな知ることができます。祈りについての会議、祈りについてのセミナーが実に多くあることには驚かされます。祈りについてのすべてのことを教えてくれ、祈りによってできることを教えてくれますが、本当に祈るような会議は、実に稀です。ですから、こうした会議には勧める人が必要です。祈りについてのすばらしい学びを受けた後、「それでは、いいですか。聞きましたか。みなさん祈りましょう。」と言う必要があるのです。実践しなければならぬのですが、それを勧める者がしてくれます。勧める者がやって来て、「聞いたよね。なら、行かないなさい。ただ、やってみなさい。やりましょう。」と言ってくれます。ロメイン(訳者注:Romaine副牧師)には勧めの賜物があります。そのため、この教会は、すばらしくバランスがとれています。私には教える賜物があります。教える奉仕にとつて、これ(勧める人がいること)は、すばらしい調和をもたらします。(教えるの奉仕によって)神のみことばについて、よく養われた、知識のある人になれますが、それを行なわなければ、その知識はみな、それを行なわないかぎり何の価値もありません。それで、ロメインがやって来て、それを行なうように勧めるのです。これは大切なことで、良い事です。ケイ(訳者注:Kay チャックの奥さん)には、すばらしい勧めの賜物があります。金曜日の朝に来る女性の方々は、よくご存知でしょう(訳者注:毎金曜朝に、婦人のための聖書の学びが行なわれています)。彼女は勧める人です。女性のためにこの勧めの賜物を特別な方法で用います。女性の方々が十分に充電されて、ここを出て行くときは、また戦いに臨む備えがあります。迫り来る暗やみの力に対して戦う用意があります。彼女は、人々を鼓舞し、行動に移す方法を知っています。ケイは牧師の妻たちといっしょに(ツインピークスに)上っていきますが、彼女たちが山を下りるときは、気分がわくわくしています(訳者注:会議の会場がツインピークスと呼ばれる山でした。)。戦いに戻りたくてしかたがなくなるようになります。積み残した問題に取り組みたくてしかたがなくなります。牧師夫人修養会のために山に登って来たときには、とてもがっかりしていたのです。けれども、家に帰るときは、完全に充電されて、取り掛かる準備ができています。もう1年、それに取り組むことができるのです。これは、勧めの賜物のおかげです。これはすばらしい賜物です。すてきな賜物です。そして、確かに重要な賜物です。もしキリストのからだに均整が取れるためには、知っていること、聞いたこと、教えられたことを実際に実行しなければなりません。勧めてくれて、実践させてくれるような人たちが必要です。実用性です。今、それをやりましょう。聞きましたね、やりましょう、と。

ですから、勧める者は、行動へと私たちを駆り立ててくれます。私たちが本当はしたいと思っ

ていることを、行なうことができるようにしてくれます。しなければならぬと分かっているけど、それを行なうことをためらって先延ばしにします。そこで、しなければならぬことを実際に行なうようにさせることができる人たちがやって来るのです。そして、私たちは、とても力強く主にお仕えすることができます。すると、教会は、その地域の中で強い影響力を持つようになります。ただ聞くだけの者ではなく、みことばを実行する人になるからです。正しいことを行なうことに携わることができるのです。

分け与える賜物 (#3079)

Gift of Giving

…8章です。パウロがさらに、聖霊の賜物を列挙しています(訳者注:おそらく、ローマ12章8節のことを言っているでしょう)。

私たちは信者として、力の入口が一つあります。それは聖霊です。イエスは、「聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。(使徒1:8)」と言われました。この方が、信者の生活の中で力となってくださいます。けれども、この力には、何個か出口があります。そうした力の出口の一つは、与えることです。さて、再びイエスは、その足跡に従うべき模範を私たちに残されました。イエスがいかにも、全て完全にご自身をおささげになったかを知っています。私たちに基準を、手本を設けてくださいました。イエスは赦しの基準と手本です。イエスが私たちを赦されたように、私たちは赦さなければいけません(エペソ4:32参照)。また、愛の基準と手本です。イエスが私たちを愛してくださったように、私たちは愛さなければいけません(ヨハネ15:12参照)。そして、イエスは分け与えることの基準と手本です。私たちの罪のために、贖いの代価としてご自身をおささげになりました(1テモテ2:6参照)。ですから、御霊の賜物の一つとして、絶対にあるのは、分け与える賜物です。

ですから、パウロは、「分け与える人は惜しまずに(with simplicity)分け与えなさい。(ローマ12:8参照)」と言いました。分け与えるときに、それをとても複雑にしてしまう人たちがいます(訳者注: simplicityは「単純」という意味があります。)。分け与えるさいに、いろいろな紐がくっついてくることがよくあります。何年も前、チューソンにある私たちの教会に、ある家族がロッキングチェア(揺り椅子)をくれましたが、私たちはあまり欲しくありませんでした。がたがきていたのですが、それを教会に与えたのです。私はすぐに、これは処分しなければならぬと思いました。なぜなら、それをに入れておく唯一の場所は、私たちの居間しかなかったからです。それは、何ともしっくりいかなかったからです。けれども、その家族はその椅子を処分してほしくないことがわかりました。それはかつて何とかいう叔母のものだったのを、彼女がその家族に与えたものでした。彼らはそれが欲しくなかったか、必要なかったのですが、処分したくありませんでした。椅子には思い出がつまみついて、感情価値があったからでした。それで教会にあげました。けれども、それは惜しまずに与えたものではありませんでした。なぜなら、「処分してはだめ」がくっついているからです。与える物にいろいろな条件をつけて説明する人には、私はよく、「ご自分で保管されたほうがよろしいのではないですか。」と言うことが多くあります。あまりに多くの条件がついているからです。パウロは、分け与える賜物があるなら、惜しまずに用いるべきであると言っています。分け与えるものに対して、多くの規則をもうけたり、多くの事を伴わないようにして、ただ与えなさい、ということです。もし、私たちが欲しくないから誰かにあげると言っても、それでよしとすべきなのです。たとえ、「いりません。ゴミにして捨てます。」と判断されても、少なくとも、自分で処分する手間が省けたのですから。ただ、何の紐もくっつけないで、惜しまず与えてください。

分け与えるのに、仰々しい人たちがいます。イエスは、「施しをするときには、自分の前でラッパ

を吹いてもらうのが好きな、パリサイ人のようであってはいけません。(マタイ6:2参照)」と言われました。さて、イエスがこれを比喩的な言い方をされているのか、実際に彼らが神殿でささげ物をするときに、ラッパを吹き鳴らず楽団が彼らの前にいたのかは、私にはわかりません。でも、与えるときに見せびらかして、与える物や与えた物にみな注目を集めさせる人を見たことがあります。

分け与える賜物は、確かに美しい、すばらしい賜物です。私たちが、「彼なら、自分の着ているものでもあげるよ。」という言い回しに当てはまる人々がいます。そういう人たちがいるのを知っています。彼らはとにかく、与えてしまうのです。中には、その人の持っている物をほめてしまうと、それを箱に詰めて送って来てしまうので、ほめることができないというような人たちがいます。分け与える賜物があるのです。この教会にいた人ですが、もう主は彼をご自分の所に召されましたが、その人は、ラグナビーチ(Laguna Beach)に住んでいました。その人は、分け与える賜物を持っていました。ある夜のこと、彼がラグナにある家に歩いて帰る途中、ある者がそばに寄ってきて、わき腹に銃を突きつけて、「持っている物を、全部よこせ。」と言いました。ラグナに住んでいる彼はあやまって、「すみません。5ドルしか持ちあわせていないのですが、小切手でもいいですか？(訳者注:アメリカでは、小切手は日本よりもずっと頻繁に使われます。)」と言いました。これは分け与える賜物ですね。分け与える賜物を持っている人は、いつも多くの友だちがいます。箴言19章6節には、「だれでも…」だれでも「贈り物をしてくれる人の友となる。」とあります。私たちは気前の良い人たちが好きですが、神は気前の良い人々を喜んでおられます。神が私たちにいかに気前が良いか、気前が良くしてくださっているかを考えてください。「与える」という単語とその同族形は、聖書の中で1,981回使われています。ですから、神が私たちに与えることについて多くのことをおっしゃりたいことがわかります。けれども、言及されている箇所をずっと見ていくと、圧倒的に多くの箇所は、神が私たちに与えてくださったものについての言及です。おそらく、5対1の割合でそうでしょう。聖書の中で、「与える」ことに言及されている箇所のほとんどは、神が私たちに下さったものへの言及です。

必ずしもたくさん持っている人に、分け与える賜物があるわけではありません。そういう場合もありますが、そうでない場合もあります。ある人がいて、その人はとても裕福になりました。彼の名前は、R. G. ラターノといいました。彼は50年代に、いや、40年代と50年代に、土を動かす重機を造りました。土を動かす、重労働をこなす設備を設計し、発明しました。実に賢い発明家でした。事業を始めたとき、自分たちの稼ぎ、つまり総利益の10%を神におささげする契約を結びました。時が経って、彼はますます祝福されるようになり、新たに20%を神にささげる契約を結びました。収入が増えると、ささげる割合を減らすときがあります。1ドルから10セントをささげるのは、大した額ではありません。とどのつまり10セントぼっちだろう、ということになります。けれども、10万ドルをもうけたら、1万ドルは巨額のように思えます。もし、100万ドルなら、10万ドルになってしまうのですか？ですから、もうければもうけるほど、「まあ、5パーセントでもいいか。」という風になってしまいます。面白いと思いませんか。1ドルから10セントをささげるのに問題を感じることはめったにないのです。増えてくると問題になってきます。けれども、この人は逆のことをしました。事業が拡大したら、20パーセントささげました。さらに事業が拡大すると、割合を30パーセントに増

やしました。そして40パーセント、50パーセント、そして60パーセントに増やしてゆきました。主のところへ召されたときには、90パーセントを主に、世界中の主の働きのためにささげていました。90パーセントです。むろん神は彼をかなり祝福されたので、彼が自分のためにとっておいた10パーセントは、いずれにせよ、みなさんがもうけている額よりも多かったです…。けれども、神にささげて、ささげすぎることはありません。私の妻ケイは、ずいぶんと気前の良い人です。分け与える賜物があります。彼女はいつも、お金を人に分け与えています。私たちにお金がなかったときにも、そうしていました。私は以前よく、彼女に腹を立てたものでした。けれども興味深いことに、余分にある物を与えるよう、神が私の心に語られたとき、彼女は決して、一度たりとも、私が主人に与えようとしている物を欲しがったり、反対したりすることはありませんでした。実際、たいてい彼女は、「それだけで十分なの？あの人たちは、とても必要なのよ。」と言います。彼女には分け与える賜物があります。

さて、私たちが与えることについて、どのように与えなければならないか、聖書はいくつかのことを教えています。第一に、心から進んで与えなければいけません。イスラエルの民が幕屋を造るときに、神はモーセにその設計、それに使う銀製の道具をいろいろお示しになりました。金でおおうこと、契約の箱、ケルビムなどをお示しになりました。金や銀や特別な布がたくさん必要でした。それで神は民に仰せになりました。出エジプト記25章1節です。「主はモーセに告げて仰せられた。『わたしに奉納物をささげるように、イスラエル人に告げよ。すべて、心から進んでささげる人から、わたしへの奉納物を受け取らなければならない。』」神は、進んでささげなかったり、心からささげない人からは何も受け取りたくないのです。人が強いられてご自身にささげ物をするようなことを、神は決して望んでおられません。神にささげるものは何でも、心から進んでささげなければいけません。ただ、心から進んでささげられるものだけ、ささげるべきなのです。さて、このことについてすばらしかったのは、民が心からささげたことです。その結果、民が幕屋を造るための金や銀や宝石を持ってきた結果、一つ本当に特別の特別だと思うことは、真鍮の祭壇、青銅の祭壇のために女たちが、よく磨かれた真鍮でできた自分の鏡をささげたことです(出エジプト38:8参照)。女性たちが、主のために自分の鏡をささげることを想像してみてください。実に犠牲を払ったといえます。ついに、「(彼らは、)モーセに言った。」彼らとは、ささげ物を数えたり、量っていた人々です。「(彼らは、)モーセに告げて言った。『この民は、主がお命じになった仕事のために、必要以上の物を携えて来ます。』それでモーセは命じて、宿営中にふれさせて言った。『男も女も、もはや聖所の奉納物のための仕事をしないように。』こうして、民は持って来ることをやめた。手持ちの材料は、すべての仕事をするのに十分であり、あり余るほどであった。(出エジプト36:5-7 一部口語訳)」これが、ささげる心です。神が人々の心をささげるように動かされました。わくわくします。私たちが主にささげるよう心を開くのは、すばらしいことです。

分け与えることについて、消極的な側面から見ますと、決して強いられたり、いやいやながら与えてはいけないうことです。聖書が言っているように、心で決めたとおりにします。強いられてではなく、心で決めたとおりにします(2コリント9:7参照)。人々にささげるように圧力をかける教会が、実際にあります。教会の予算を増やそうとしている月に、たいてい最も影響力のある人が、教員

の家を訪問して回ります。これに関する3重要人物は、医者とか弁護士とか銀行家かもしれません。つまり、財務委員会のメンバーになってほしいような人たちです。その人たちがあなたの家に来て、すわって、「これが、来年度の教会予算です。これらが、主のために私たちが行ないたい事です。今年、教会予算のためにいくら約束していただけるでしょうか。約束をするときに、ぜひ信仰を用いるようにお勧めします。神に対して、信仰による約束をしてください。」と言います。彼らは、とかく、実際にささげることができる以上ささげるように促します。「信仰による約束をしてください。」と。その年にはいって、それほどに信仰を持つことができない人たちが中に出てきて、分け与える資金がなくなります。そうすると、教会は、督促状を送って、「もう3ヶ月たちます。この3ヶ月、約束のものを受け取っていません。あなたが頼りなのです。」すると、与えなければいけないといふとんでもない強いプレッシャーを感じます。このため、ささげると、ひどく恨んだり、憎んだりする気持ちになります。これは恥ずべきことです。なぜなら、憎んだ気持ちで神にささげるなら、単にプレッシャーを感じてささげるなら、こう思うからです。「てやんでー。やってられねえよ。こんな手紙送るのかよ。ひどいぜ。二度とこんなものを受け取りたくないなら、払わないとなあ。電話なんかかけられこれたら最悪だ。」これは悲しい事ですね。なぜなら、こうした類いの動機で与えるなら、神は祝福されないし、神は欲しいと思われません。与えることの祝福がなくなってしまう。喜んで与えるところに祝福があります。心から進んでささげるときに、祝福があります。そのときに祝福されるのであって、「主よ。あなたを愛します。何か特別なことをしたいのです。」というところから出てきます。主にささげると、ますます興奮してきます。「主よ、あなたが多くのことをしてくださいました。何か特別なささげ物をしたいのです。犠牲を払いたいのです。好きでやっているのです。」こうしたものを神は祝福され、尊ばれます。

確かにイエスも、ささげられた額ではないことを暗に示されました(以下ルカ21:1-4参照)。イエスは弟子たちといっしょに、人々が献金箱に献金しているのを見ておられました。金持ちが、ものものしく儀式的に、見せびらかすようにして、多額の金を投げ入れました。そしてひとりのやもめが、4分の1セント投げ入れました。イエスは弟子たちのほうを振り向いて、「見ましたか。彼女は、どの人よりもたくさんささげました。みなは、あり余る中からささげたのに、この女性は生活費をささげました。これが彼女の持っていた全部だったのです。」主の目には、ささげられた額ではなく、ささげる背後にある心と、ささげるためにどれだけ犠牲をともなったかを大切にされます。主は、犠牲的にささげることを喜ばれるようです。けれども、これはめったにないことだと私は思います。なぜなら、分け与える賜物があるなら、それを犠牲だとは思わないからです。「主をほめたたえます。ささげることができて、うれしいです。」と考えるからです。聖書は、心で決めたとおりにするとき与えなさいと言っています。これは、あなたと神との間のことです。心で決めたとおりにすると、「神は喜んで与える人を愛してくださいます。(2コリント9:7)」と書かれています。ギリシヤ語はもう少し強い意味があり、「浮かれ騒いで」と訳したほうが良いでしょう。神は、浮かれ騒いで分け与える人を愛してくださいます。

それから、私たちは価なし(freely)に分け与えるべきです。イエスは、「あなたがたは、ただで受けたのだから、ただで与えなさい。(マタイ10:8)」と言われました。詩篇の著者は言いました。「わ

たしは喜んで(freely)あなたにいけにえをささげます。主よ、わたしはみ名に感謝します。これはよい事だからです。(54:6 口語訳)最後に、私たちが与えるとき、動機は愛でなければいけません。神にささげるにしても、事欠いている人に分け与えるにしても、動機は愛でなければいけません。なぜなら、パウロが、「たとい私が持っている物の全部を貧しい人たちに分け与え、また私のからだを焼かれるために渡しても、愛がなければ、何の役にも立ちません。(1コリント13:3)」と言ったからです。私が行って、持っている全部を貧しい人々に分け与えても、それが恨めしい気持ちからやっていたり、愛によってしているのでなければ、…他の動機があったら、…たとえば、人に見られたいとか認められたいとかなら、何の役にも立ちません。

さて、まず最初に、神に与えなければいけません。けれども、一体全体、自分が神に与えることができるようなものがあるのかとお尋ねになるかもしれませんが、もっともなことです。確かに神が必要なもので、あなたが与えることのできるものは何もありません。神が、「わたしはたとい飢えても、あなたに施しを求めない。(詩篇50:12参照)」と言われた聖句が好きです。神は、「千の丘の家畜は、わたしのもの。(詩篇50:10参照)」と言われました。つまり、神は、「わたしは無一文ではない。わたしは困窮していない。たといそうであったとしても、あなたのところには来ない。」と言われているのです。神に何を与えるのでしょうか。聖書は、6回、「主に感謝せよ。主はいつくしみ深い。その恵みはとこしえまで。」と伝えています(訳者注: I 歴代16:34など「主に感謝せよ。」の英訳は、「主に感謝をささげよ」あるいは「与えよ」になっています。)。聖書が、これを行なうようにと1回命じるのであれば、神のみことばを信じていますから、ただ1回命じているのでも、それを行なうべきだと思うのです。2回命じているのなら、本当に注意しなければなりません。しかし、神が6回命じておられるなら、私たちは本当に、特別に注意しなければなりません。「主に、感謝をささげよ。」今日、あなたは神に感謝をささげましたか。今週、神に感謝をささげましたか。ああ、私たちの舌から絶えず、神のいつくしみふかしのゆえに、神へ感謝がささげられていますように。

3回、私たちは、御名の栄光を神にささげるように教えられています(I 歴代16:29、詩篇29:2、96:8)。神の名前はヤハウエです。そして、ヤハウエという名は「堅固なやぐら。正しい者はその中に走って行って安全である。(箴言18:10)」と教えられています。聖書は、神がご自分の御名にまして、みことばを高く上げられると教えていますが(詩篇138:2参照)、その御名はとても重んじられていたので、ユダヤ人は、その名を発音しようとしませんでした。「御名の栄光を、主にささげよ。」ですが、御名は「なつてくださる(becoming one)」という意味です。神は、あなたの必要が何であれ、その必要になってくださいます。神は、なんと恵み深い方なのでしょうか。今夜、あなたの必要が何であれ、神は、まさにその必要であるものになってくださるのです。ですから、主の御名、御名の栄光を主にささげよ、なのです。

そして、私たちは貧しい人に分け与えなければいけません。神は、律法において、貧しい人に関する戒めをお与えになりました。申命記15章にあります。7節から始まります。「あなたの神、主があなたに与えようとしておられる地で、あなたのどの町囲みのうちでも、あなたの兄弟のひとり、もし貧しかったなら、その貧しい兄弟に対して、あなたの心を閉じてはならない。また手を閉じてはならない。進んであなたの手を彼に開き、その必要としているものを十分に貸し与えなけ

ればならない。」「必要としているもの」は、彼が欲しているものではなく、事欠いているもののことです。「あなたは心に邪念をいだき、…」主よ、どうしてそんなことを言われるのですか。『『第七年、免除の年が近づいた。』』と言って、貧しい兄弟に物惜しみして、これに何も与えないことのないように気をつけなさい。その人があなたのことで主に訴えるなら、あなたは有罪となる。必ず彼に与えなさい。また与えるとき、心に未練を持ってはならない。」腹を立ててはいけない、ということです。「このことのために、あなたの神、主は、あなたのすべての働きと手のわざを祝福してください。」神は、あなたがこのことを行なうなら、祝福すると約束してくださっています。神は言われました。「貧しい者が国のうちから絶えることはないであろうから、…」つまり、分け与える賜物をいつも用いる機会があるということです。「私はあなたに命じて言う。『国のうちにいるあなたの兄弟の悩んでいる者と貧しい者に、必ずあなたの手を開かなければならない。』」マイクは、自分の教会で貧しい人に食事を与えています(訳者注:サンディエゴ市にあるホライズン・クリスチャン・フェローシップと、その牧師マイク・マッキントッシュのこと。かなり大規模なホームレスのためのミニストリーが展開されています。)。あそこで、何人の人に食事を出しているのかい?(訳者注:会堂にマイクがいるのでしょうか、チャックは声をかけて聞いています。答える声はテープからは聞き取れません。)彼らは人々を招き入れて、食堂みたいところがあって、食事を与えています。すばらしいですね。すばらしいです。

分け与えた結果ですが、イエスは言われました。「与えなさい。そうすれば、自分も与えられます。人々は量をよくして、押しつけ、揺すり入れ、あふれるまでにして、ふところに入れてくれるでしょう。あなたがたは、人を量る量りで、自分も量り返してもらうからです。(ルカ6:38)」パウロは、「少しだけ(sparingly)蒔く者は、少しだけ(sparingly)刈り取り、豊かに蒔く者は、豊かに刈り取ります。(Ⅱコリント9:6)」と言いました。さて、これはもっともなことではありませんか。蒔くことと刈り取ることです。畑にとうもろこしを植えて、種を植える時、すごく節約したければ、一つの種を6インチ(約15センチ)間隔ではなく2フィート(180センチ)間隔で植えることにします。そうしたら、作物はまばらに生えます。ですから、節約して(sparingly)蒔けば、実際乏しく(sparingly)刈り取ることになるのです。けれども豊かに蒔けば、豊かに刈り取ります。さて、これが与える事についての神の法則です。霊的な法則がどのように働くのか、分からない時がよくあります。どのようにして働くのか分からないので、「やらないよ。どうやって働くのか分からないから。」と言うことがよくあります。けれども、どうやって電気が作用するのか理解できますか。たぶんどけないでしょう。でも、どう作用するのか分からなくても、気にしないで使っています。霊的な神の法則について、私たちにはその原則が理解できません。重力の法則があることはわかっていますが、質量に引力があるからですが、なぜ引力があるのかはよく分かりません。引力を測定することはできるし、また、質量が大きければ大きいほど、引力が大きくなることもわかっていますが、なぜか、本当は分からないのです。けれども、それが自然の法則であると認めていますし、よく注意してそれに従っています。12階建てのビルから飛び降りたりしません。なぜなら、その法則を尊重しているからです。厳密にどう働くのかは分かりません。なぜ地面に落ちてしまうのか、なぜ飛ぶことができないのか、なぜ浮くことができないのか分かりません。どう作用しているのかわかりませんが、それを尊重するだけの理性は持っています。そして、神の御霊の法則についてですが、確かに分け与えることに

霊の法則が存在しますが、これはあまり理解できませんが、尊重する方が賢明です。「与えなさい。そうすれば与えられます。量りをよくして、押しつけ、あふれるまでにしてくれるでしょう。あなたがたは、量る量りで、自分も量り返してもらいます。」ですから、ティースプーンで与えるのであれば、ティースプーンで返してもらえます。スコップで与えるのであれば、スコップで返してもらえます。手押し車で与えるのであれば、手押し車で返してもらえます。量る量りで、量り返してもらえます。

パウロは、ローマ書11章で質問をしました。「また、だれが、まず主に与えて…」35節です。「だれが、まず主に与えて報いを受けるのですか。」つまりパウロは、人が神にささげて、神がその人にそれを返されなかった場合を、報いを受けなかった場合を見せてくださいと言っているのです。什一献金をする余裕がないと言うのを聞いたことがあります。しかし、私は言います。什一献金をしない余裕はありません。面白いのは、神がご自分のものであると主張される十分の一をささげることを怠ること…もし、神がそう主張されるなら私はそのまま受け入れます。神が主張されることに私自身は、異議をはさんだりしません。しかし、神は、「人は神のものを盗むことができようか。(マラキ3:8)」と言われました。すると人々は、「どのようにして、私たちは神のものを盗んでしようか。」と答えました(マラキ3:8参照)。預言者マラキは、「それは十分の一と奉納物によってである。」と言いました。それから神は、「わたしがあなたがたのために、あふれるばかりの祝福をあなたがたに注ぐかどうかをためしてみよ。」と言われました(マラキ3:10)。もし、私たちが神のものをささげるなら — それは神が私たちに要求されていることですが — そうすれば、神はあふれるばかりの祝福を私たちに注ぐと約束されています。それは、何倍にもなって私たちのところに戻ってきます。「だれが、まず主に与えて報いを受けるのですか。」あなたには、分け与える賜物がないかもしれません。そして、その賜物のために本当は祈りたくないかもしれません。しかし、私はみなさんがそうなさることをお勧めします。

さて、再び貧しい人に分け与えることについてですが、言及していない聖書箇所がもう一つあります。それは、箴言にあります。「貧しい者をあわれむ(give)者は主に貸すのだ」神は、「その施しは主が償われる。」と言われています(口語訳19:17)。面白いですね。神にお金を貸したいですか。神はすごい金利を払ってくださいます。「貧しい者をあわれむ者は主に貸すのだ。」そして、神は、「わたしがその面倒をみよう。わたしが払う。わたしが返済する。」とおっしゃいます。なぜ、やってみないのですか。なぜ、やってみないのですか。だからといって、「お金のために働きます」というプラカードを持った人を探し回ったりはしません(訳者注:アメリカでは乞食の一步手前みたいな格好をした人たちが、「お金のために働きます。」というプラカードを持って道端に立っていますが、本当は働く気はなく、お金を無心しているだけのようです)。そういうのは詐欺だと思えます。けれども、教会の中には、母子家庭でずいぶん厳しい状況の人がたくさんいます。とても大変な人がいます。主を愛していますが、とても大変な状況にいるのです。そんな女性の中には、何人かは食べ物に事欠いている人もいます。そういう人たちが援助を受けられればなあと思うのです。ただ主に貸すのです。そして、神が何をなさるか見てください。

あわれみを示す賜物 (#3080)

さて、あわれみを示す賜物があるいかにかわらず、私たちはあわれみを示さなければならぬことを冒頭から知らせておくべきでしょう。今晚学ぶところから分かることですが、私たちがあわれみ深くなければならぬことは、実は選択肢ではなく命令なのです。けれども、パウロは、「慈善を行なう人は喜んでそれをしなさい。(ローマ12:8)」と言いました(訳者注:「慈善を行なう」が、英訳で「あわれみを示す」となっています。)

さて、あわれみは正義と対比されています。正義は、自分が値するものを得ることです。私たちは、「あいつ、自業自得だ(受けるに足ることを受けている)」と言うことがよくあります。これは正義(justice)です。ちょうど(just)受けるに足ることを受けているのです。けれども、自分に値するものを受けないことがあわれみです。私は正義を受けるに値しますが、神はあわれみを与えてくださいます。ここには赦しの考えがあります。赦しの中にあわれみがあります。さて、今夜は、あわれみを示す賜物について話しますが、パウロは、「あわれみを示す者は喜んでそれをしなさい。」と告げました。

さて、賜物として考えるにあたり、それを持っている人もいるし、持っていない人もいることに気づかされます。あわれみを示すとき、「本当は、お前を地面にたたきつけたいのだが。」と思わせるような、陰気くさい人たちがいます。「しかたないからなあ。ああ、これから立ち直れるかどうかわからないな…。」と思わせて、あなたをとてもぼつが悪い、後悔する気分させます。こうして、あなたがした悪いことがどれほど重大であるかを悟らせようとする人がいます。あわれみを示すことに、喜びがみられません。あわれみを示す本人にもみられませんし、あわれみを受け取る側も、そのような類いのあわれみですから、自分のしたことを罪深く感じ、陰鬱になるにちがひありません。何年も前のことですが、私の妻の父親が亡くなったとき、告別式の準備のために斎場に行きました。斎場に入ると、斎場の人々が、もちろん黒いスーツを着て黒いネクタイを着けていましたが、私たちのところに来ました。そして、自分の手をもみしぼりながら、「いらっしやいませ。(訳者注:ものすごく重々しそうな、陰気な声で)」と言いました。この哀れな人は、爪を全部噛んでしまって爪がなくなっていました。感情面で大きな痛手を受けているようでした。私たちに対して告別式について彼が話してくれたとき、「あなたのお父さまが、ああ、こんなに若くしてお父さまを亡くされたのですね。(訳者注:今にも泣きそうな声で)」そして泣き始めました。私たちは、この人に会うまでは、かなり平静を保っていたのです！彼はあわれみと理解を示そうとしていたのですが、そこにはまるで喜びがありませんでした。

ヨブがいろいろな試練に会っていたとき、ヨブの友人は彼を慰めようとしてやって来ました(ヨブ2:11参照)。あわれみを示すのではなくて、彼の様々な問題の原因をつきとめようとしてしました。ヨブがなぜこんな苦しみに会って、悲惨な目にあっているのか、それぞれが自分なりの理論を持っていました。彼らはヨブを、偽善者として責めました。偽り者であると訴えました。いろいろな告発をしましたが、それは、彼らが正しいことをヨブが認めなかったからです。彼らの分析によると、ヨブはとんでもない罪人であり、誰も知らない罪を犯しており、神はそのままにはしておかれぬの

で、こんな悲惨な目に会っているというものでした。隠された恐ろしいことをあなたはしており、行なったのである。神はそれをそのままにはしておかれないのだ。このように強く迫り続け、ひどくなってゆき、ヨブとヨブの友人の間に話があり、毎回批判がひどくなり、さらにヨブを罪に定めるようなことを言いました。ついにヨブは、「あなたがたはみな、煩わしい慰め手だ。(ヨブ16:2)」と言いました。あなたは何のあわれみも示さない。何の助けにもならない。来てくれない方がよかったのに、と思いました。うわべはあわれみを示すために来ているのですが、帰るころには、来てもらわない方が良かった思わせるような人がいます。あわれみを示すのがどうも苦手なようです。

あなたがとんでもない失敗をして、もうこの世の終わりだ、もうやる気をだす理由は何一つないと感じているときに、あなたのところにあわれみを示そうとして誰かが来たとします。その人は、将来のことをとても喜び、確信を持っているので、絶望から立ち直らせることができましたとします。これがあわれみの示し方です。陰気ではなく、例えば、「ちょっと分からないけど、いっしょに何とかしてみようか。いつも君の味方だよ。(訳者注:暗い声で)」というようなものではなく、喜んでやるのです。「主が御座におられる。まだお終いじゃないよ。神さまがなんとかしてください。神さまの勝利をこれから見るんだ。主をただ待ち望んで、主に信頼しようではないか。主が何とかしてください。…確かに、間違ったことを君はしたけれど、神に感謝します、神はあわれみ深く、赦しに富んでおられ、親切で、愛してくださっているから、くよくよするなよ。過ぎたことじゃないか。これから主が何をなされるか見てみようよ。」そんな喜びがあるおかげで、気分がすぐれてきて、励まされます。そうだ、また一日頑張れそうだ、と感じます。主が用意してくださっていることがわかる。あわれみを示すなら、まさにこのようにやる必要があるのです。喜びがなければいけません。

さて、神がすべてのあわれみと慰めの源です。これは私たちが受けるに足るもの、当然のものではないのです。受けるに値し、当然のもの、それは正義です。そうではなく、あわれみはまさに神の品性やご性質から出て来るものです。ヤコブは、いかに自分が神のあわれみを受けるに足りないかを悟り、「私はあなたのあわれみをほんの少しでさえ受けるに足りない者です。(訳者注:創世32:10参照 英訳では、"I'm not worthy of the least of all mercies"となっている。)」ヤコブは正しいことを言っていました。彼はだまし屋でした。その名前は、「かかとをつかむ者(創世25:26参照)」であり、これは、人のかかとをつかんでよろけさせて、それにつけこむことを意味していました。ヤコブの話を見ますと、新約聖書には、神が、「わたしはヤコブを愛し、エサウを憎んだ。」と言われたのを読みます(ローマ9:13)。私は、神がエサウを憎んだのを理解することができますが、ヤコブを愛されたのを理解することができません。ヤコブは、あらゆる点において自分の兄をだまし、兄のものを利用しました。けれども、神はヤコブを愛されました。ヤコブが、父をだまして、父がエサウに与えたかった祝福を受けたので、兄が怒り、その怒りを免れようと逃げたとき、エサウは、正義を計画していました。「お父さんが死んだら、弟を殺してやろう。(創世27:41)」正義です。エサウの機嫌が悪くなったとき、母がヤコブに、「子よ。ここから出て行きなさい。あなたの兄が、あなたを殺すことを決意したからです。」と言いました。それでヤコブは、兄エサウの怒りから逃れるために、立ち去りました。ヤコブが、バビロンへ向かう途上で、(イスラエルの)地の境を通り過ぎたときは、杖一本しか持っていませんでした。17年後、彼が帰って来るときには、牛の群れ、羊の群れ、召

使い、妻たち、子どもたちがいます。その地の境である小川を再び通り過ぎるとき、17年前のことを思い出しました。前回彼がここにいたとき、前回この小川を通り過ぎたとき、持っていたのは杖一本だけでした。今や、有り余るほど持っています。ヤコブは、自分が祝福されたことに気づいています。それを受けるに足りないことを悟っています。そのことが分かっていました。「あなたがしるべに賜ったすべてのあわれみとまことを、少しでも受けるに足りないものです。私は自分の杖だけを持って、このヨルダンを渡りましたが、今は、私はたくさん持っており、それらを二つの宿営に分けて旅をしなければならないのです。一つの宿営では旅ができないので、二つに分けなければいけません。」神のあわれみを、彼は認めました。神がしてくださったことを受けるに足りない、値しない。私たちが自分の人生・生活を振り返って、主がなさったことを見ると、自分が受けるに足りないものであることに気づきます。主は実に慈しみ深く、あわれみ深いのです。主が私たちに注いでくださった祝福は、私たちの功によって得たものではありません。ただ、私たちに對する主のあわれみによるのです。

さて、神のあわれみを説明している聖書箇所はたくさんあります。第二コリント書1章3節で、パウロは、「私たちの主イエス・キリストの父なる神、慈愛の父、すべての慰めの神がほめたたえられますように。」と言いました。ですから、神はあわれみの父、つまり、あわれみの創始者と呼ばれています。ダニエル書9章9節には、こうあります。「あわれみと赦しとは、私たちの神、主のもので、これは私たちが神にそむいたからです。」けれども、神はあわれみ深いのです。哀歌3章22節です。「私たちが滅びうせなかったのは、主の恵みによる。主のあわれみは尽きないからだ。」本当にそうですね。私たちがまだここにいるのは、主のあわれみによります。そのため、私たちが滅びうせることはなく、主のあわれみは尽きません。詩篇116篇5節です。「主は情け深く、正しい。まことに、私たちの神はあわれみ深い。」うれしくありませんか。民数記14章18節です。「主は、忍耐強く、慈しみに満ち、罪と背きを赦す方。〈新共同訳〉」申命記4章31節です。「あなたの神、主は、あわれみ深い神であるから、あなたを捨てず、あなたを滅ぼさず、あなたの先祖たちに誓った契約を忘れない。」あわれみ深い神です。ネヘミヤ記9章31節です。「しかし、あなたは大いなるあわれみをかけて、彼らを滅ぼし尽くさず、彼らを捨てられませんでした。あなたは、情け深く、あわれみ深い神であられますから。」私たちはもちろん、神の恵みが神のあわれみと一対になっているのを見ます。先ほど言いましたように、正義は、自分が値するものを受け、あわれみは、自分が値するものを受けないことであり、恵みは、自分が値しないものを受けることです。神の祝福が、ただあなたに降り注がれます。功なくして得たもの、値なしに得たものです。受けるにまったく値しないのですが、神は、ご自分の愛と恵みを私たちに注いでくださいます。

さて、あわれみは神のご性質のごく一部でしかありません。神は、山でモーセにお会いになりました。モーセは、律法、律法の石の板をふたたび受け取るために、山に戻っていました。最初の石の板は壊していたからです。モーセは山に戻りました。こう書かれています。「主は雲の中にあつて降りて来られ、彼とともに立って、ヤハウエの名によって宣言された。ヤハウエは彼の前を通り過ぎるとき、宣言された。『ヤハウエ、ヤハウエ、エロヒム』」つまり、主なる神は、「あわれみ深く、情け深い神、怒るのにおそく、恵みとまことに富む。(以上、出エジプト34:5-6参照)」みなさんが

お仕えしている神は、このようなお方です。神はご自身をこのように表現されました。これは、神がご自分を描写されたものです。神ご自身による描写と、実に多くの人が神だと考えているものを比べてください。そういう見解は、おおむねサタンの嘘によるものです。人は、本当に間違った神の概念を持っています。こうした神の概念は、サタンが絶えず人々に吹き込んでいるものなのです。サタンは、絶えず神を誤って伝えているからです。さて、もう一度、神ご自身による描写を読ませてください。私が読んでいて、それが、あなたが心で描いている神と合致しているでしょうか。私はずっと長いこと、成長段階において、ほとんどいつも神は私に腹を立てていると思っていました。なぜなら、神が自分に望んでおられること、自分にどう生きて欲しいかを知っていたからです。神は私に完全を願っておられたのを知っていましたが、私は完全からほど遠い者でした。私はずいぶん普通の人間をやっていたのです。肉のうちに生きていました。でも神が望まれているのが何かを知っていましたので、いつも、神が自分に腹を立てておられると想像していました。私の身に起こった悪いことについて、疑問を持ったことはありませんでした。なぜなら、それは神のさばきであり、受けて当たり前だと思っていたからです。けれども、神がご自分をどのように表現しておられるか聞いてください。「主は、主なる神は、あわれみ深く、情け深い神、怒るのにおそく、恵みとまことに富む。」私たちが仕えている神は、このような方なのです。この方にお仕えできて、うれしいです！

聖書は、神のあわれみの広大さを表現しています。神が、「恵み豊かである(plenteous in mercy)」と言っています。「主は、あわれみ深く、情け深い。」そして、こう言っています。「怒るのにおそく、恵み豊かである。(詩篇103:8)」詩篇103篇11節です。「天が地上はるかに高いように、御恵み(mercy)は、主を恐れる者の上に大きい。」天文学者が、絶えず宇宙の大きさを修正しているのに、以前気になっていました。高校生のとき、科学の時間で、宇宙は半径40億光年であると教えられました。それから、大学院で研究をして、少し天文学について学びました。そこでは、宇宙が半径120億光年だと教えられました。私が最近読んでいた科学雑誌には、たとえば宇宙が半径150億光年であるという発見が載っていました。むろん、ビッグバン理論が前提にあります。かつて、すべての宇宙の塊が、固く一つの玉に凝縮されていて、それからビッグバンつまり大きな爆発があったと言うものです。40億光年離れた銀河がいくつかあって、それで地球が40億年であると言います。爆発があつて、外側に押し出されたからです。それで120億年、今は150億年だと言います。彼らが宇宙の大きさを絶えず修正して、私たちが思うより大きいことを伝えるのに、嫌だなと思いませんか。いいえ、嫌だと思いません。何かわくわくさせてくれます。なぜなら、天が地上はるかに高いように、あわれみは大きいからです。150億光年で結構です。平気です。ほっとします。詩篇103篇17節では、…さっきのは距離の長さでしたが、こんどは時間の長さです。「しかし、主の恵み(mercy)は、とこしえから、とこしえまで」ですから、どちらの限界からもおさえることができます。後ろの消失点から、先の消失点までです。あわれみはいつもあります。いつもあります。エペソ書です。「あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださったその大きな愛のゆえに…(2:4)」

ですから、私たちは、あわれみ深い神に仕えています。神が私たちにご自身の性質を植えつけ

て、そのご性質に私たちを変えてくださるときに、証拠として現される特徴、すなわち、私が神の子どもである証拠は、私が神のご性質を持つようになる、あわれみの性質を持つようになることです。ですから、聖書の中で、あわれみ深くあるように命令されています。ルカ6章36節です。「あなたがたの天の父があわれみ深いように、あなたがたも、あわれみ深くしなさい。」つまり、神の性質の特徴を身に着けなさい、ということです。神の子どもなのですから、御父があわれみ深いように、あわれみ深くしなければなりません。従って、神は、あわれみを示すことの模範です。私たちは、私たちの父のようではなければなりません。神が、基準を設けてくださっています。さて、神のあわれみについて、神が設定されたその基準について、聖書は何を教えているのでしょうか。「あわれみ豊か」と言っています(エペソ2:4)。「そのあわれみは、とこしえまで」とあります(詩篇136参照)。「そのあわれみは、とこしえから、とこしえまで」とあります。神のあわれみはさまざまです(1ペテロ4:10参照)。「大いなるあわれみ」を持ち(1列王3:6参照)、「あわれみに富んで」おられます。そして、「あわれみを喜ばれ」ます(ミカ7:18参照)。たぶん、おじいさんやおばあさんにならないと、このことは理解できないかもしれません。あわれみを喜ぶのです。孫のために執り成しをすることが、どんなにうれしいことか。お父さんとお母さんとうまく行っていないとき、「ちょっと散歩に連れていっていいかい。」と言います。おしおきから遠ざけて、いっしょに歩いてあげて、ただ、話したり…。ただ、あわれみを喜んでいるのです。すばらしいことです。けれども、あわれみを示すことは、選択ではなく要求されている(required)ことです。ミカ書6章8節です。「主はあなたに告げられた。人よ。何が良いことなのか。主は何をあなたに求めておられるのか(require)。」これは要求なのです。「それは、ただ公義を行ない、誠実(mercy)を愛し…」正直になり、公義を行ないなさい。そして、あわれみを愛しなさい。「へりくだって、あなたの神とともに歩むことではないか。」ゼカリヤ書7章9節です。「万軍の主はこう仰せられる。『正しいさばきを行ない、すべての人があわれみを尽くし、兄弟に同情せよ。』(英訳からの直訳)」公平になりなさい。そして、みなにあわれみを示し、兄弟に同情しなさい。

イエスは、あわれみを示すこととあわれみを受けることを結びつけておられるようです。神が授けられた恵みの多くは、しばしば、同じ恵みを他の人に与えたことに結びつけられています。最近、赦しについてお話しましたが、神が赦しの基準であり、量りであることを教えられました。「お互いに親切にし、…神がキリストにおいてあなたがたを赦してくださったように、互いに赦し合いなさい。(エペソ4:32)」でも、また同時に、自分に罪を犯した人を赦さないなら、私たちの天の父も私たちの罪をお赦しにならないことを知らされています(マタイ6:15参照)。ですから、赦されるということは、自分が赦されることに関連しているのです。あわれみも同じです。あわれみを受けることは、自分があわれみ深いことに、イエスによって結びつけられています。マタイ5章7節ですが、山上の垂訓で、イエスは、「あわれみ深い者は幸いです。その人はあわれみを受けるからです。」と言われました。これは、旧約聖書の第二サムエル記22章26節から出て来たようです。こうあります。「あなたの慈しみに生きる人にあなたは慈しみを示し、無垢な人には無垢に<新共同訳>」ですから、神は、あわれみ深い者にあわれみを示されています。

そして、私たちは実際、— これは深刻な部分ですが、— 自分自身へのさばきの量りを設けて

いるのです。他の人をさばくことについて、あなたが量るとおりに、その同じ量りによって、あなたがさばかれるのです(マタイ7:2参照)。さて、私たちは、自分自身のことになると、とてもあわれみ深くなります。悪いことをしたとと思っていることについて、自分を赦します。自分がしてしまったことをすぐに正当化します。これは、どうも人間の性さがのような気がします。言い訳をしたり、自分の行為や行動をもっともらしく説明するのに巧みなのです。けれども、他の人がまったく同じことをしているのを見て、とても批判的になることが実に多くあります。吊るし上げようとします。私的な制裁をくわえようとします。「あいつらがやったことを見ろよ。」さて、他人をさばくことによって、実際に、かの日に神があなたをさばく基準を設けてしまっているのです。だから、私はとてもあわれみ深くしたいのです。なぜなら、神の前に立ったとき、神にとってもあわれみ深くしてもらいたいからです。ですから、自分が究極的にさばかれる基準を設けています。ヤコブ2章13節です。「あわれみを示したことの無い者に対するさばきは、あわれみのないさばきです。」かなり深刻ですよ。神の御前に出たとき、あわれみを示していなかったら、神はあわれみのないさばきを下します。これに耐えられますか。これに直面したいですか。私はいやです。ですから、あわれみ深くすることは、私の人生の中で本当に大切なことになっています。マタイ7章2節です。「あなたがたがさばくとおりに、あなたがたもさばかれ、あなたがたが量るとおりに、あなたがたも量られるからです。」もう一度繰り返になります。これは繰り返し聞いても、聞きすぎることはないでしょう。「あわれみ深い者は幸せです。その人はあわれみを受けるからです。(マタイ5:7)」

さて、神のあわれみは、どのような人に啓示されて、現れるのでしょうか。申命記5章10節です。「わたしを愛し、わたしの命令を守る者には、恵み(mercy)を千代にまで施すからである。」ですから、神は、ご自分を愛し、その戒めを守る者にあわれみ深くされます。ダニエル書9章4節です。このことを取り上げて、ダニエルは主に祈り、こう言いました。「私は、私の神、主に祈り、告白して言った。『ああ、私の主、大いなる恐るべき神。あなたを愛し、あなたの命令を守る者には、契約を守り、恵みを下さる方。』」これは、申命記にも出エジプト記にもあります。ダニエルは、神のあわれみを請い、その民を捕囚から帰らせてくださるよう祈りましたが、神を愛し、その戒めを守る者たちにあわれみを施す神のご性質を認めているのです。ダニエルは、そのことを祈りに入れたのですが、面白いことに、ネヘミヤは、後で捕囚から帰還したとき、エルサレムの城壁を建てるよう励まし、城壁の再建を指導しに来たとき、申命記と出エジプト記の中で宣言され表された、同じ神のご性質を採り上げて、こう言いました。「ああ、天の神、主。大いなる、恐るべき神。主を愛し、主の命令を守る者に対しては、契約を守り、いつくしみを賜わる方。」ですから、ネヘミヤは、ダニエルが祈りの中で用いたまったく同じ聖句を取り上げたのでした。

心を尽くして、主の御前に歩む者に、神はあわれみを示されます。列王記第一8章23節です。こうあります。「イスラエルの神、主。上は天、下は地にも、あなたのような神はほかにありません。あなたは、心を尽くして御前に歩むあなたのしもべたちに対し、契約と愛(mercy)とを守られる方です。」ですから、主を愛しその命令を守る者に、そして、心を尽くして神の前に歩む者に、神はこのようなあわれみを持っておられるのです。これは、私たちが完璧であるとか、つまづかないということではありません。怒らなかつたり、とかそういうことでは全くありません。これは、自分の心が神

に向けられており、神を愛しているということです。神の命令を守りたい、神を喜ばせたいと思うことです。それで失敗したり、罪を犯したら、神はただあわれみを示してくださいます。なぜなら、自分が神を愛していることを、神はご存知だからです。ですから、このような人々に、神はあわれみを示されます。

神は、恵みの御座の前に来る人たちにあわれみを示されます。ヘブル書4章16節です。「ですから、私たちは、あわれみを受け、また恵みをいただいて、おりにかなった助けを受けるために、大胆に恵みの御座に近づこうではありませんか。」ですから、その恵みの御座の前に来るとき、あわれみを受けるのです。そして、ご存知のように、神はあわれみ深い者にあわれみを示されます。サムエル記第二22章26節です。「あなたの慈しみに生きる人にあなたは慈しみを示」されます。そして、主を呼び求める者に、神はあわれみを示されます。詩篇86篇5節です。「主よ。まことにあなたはいつくしみ深く、赦しに富み、あなたを呼び求めるすべての者に、恵み豊かであられます。」ですから、主を呼び求める者です。神は、呼び求める者にあわれみ豊かです。そして、もちろんダビデは、あわれみが必要なとき、あわれみのために主を呼び求めました。バテ・シェバを奪い取って罪を犯したとき、預言者が彼のところに来て、その罪を告げました。ダビデは祈りました。「神よ。御恵みによって、私に情けをかけ、あなたの豊かなあわれみによって、私のそむきの罪をぬぐい去ってください。(詩篇51:1)」主は、ご自分を呼び求める者にあわれみ深いのです。それで、ダビデは主を呼び求め、あわれみを得ました。神は、ご自分を恐れる者にあわれみ深いです。詩篇103篇11節です。「天が地上はるかに高いように、御恵み(mercy)は、主を恐れる…」あるいは、畏れかしこむ「…者の上に大きい。」そして、神のあわれみは、罪を告白し、それを捨てる者に及びます。箴言28章13節です。「自分のそむきの罪を隠す者は成功しない。それを告白して、それを捨てる者はあわれみを受ける(shall have mercy)。」神の約束ですね。あわれみを受けます。

さて、これら神のあわれみや、神の情け、神の恵み深さのことを言っている聖書の箇所を見てきて、みなさんお気づきになったかもしれませんが、神のこういった性質について語っている聖句は、新約聖書よりも旧約聖書のほうが多いのです。人がよく抱いている誤った考えを取り上げたいので、この点を取り上げています。つまり、聖書は、どうも二人の神を啓示しているのではないか、という考えのことで。旧約聖書の神と新約聖書の神がおられる、というものです。時には、このように言う人を見かけるかもしれません。「旧約聖書の神にはちょっと困難を感じる。新約聖書の神のほうが好きだ。私は、この愛のほうが好きだね。」旧約聖書の神が、怒りの神、正義とさばきの神、雷と火、滅ぼす神のように考えます。その一方、新約聖書の神は、もちろんヨハネ3章16節にあるように、「神は実に、そのひとり子をお与えになるほどに、世を愛された。」のように考えます。けれども、旧約聖書に、神のあわれみの啓示、神の恵みの啓示、忍耐強く、怒るにおそい神の啓示があります。事実、神の忍耐と、あわれみと、忍耐強さが、ユダヤ人の国にあって実によく示されているのです。確かに、人の罪、人の反抗、神への不従順が、人の行なった結果を生み出しました。主を見捨てたので、戦争、痛み、苦しみ、さばきが下りました。さて、新約聖書も、愛、忍耐、あわれみ、神の恵みを、とても美しく啓示しています。けれども、また、新約聖書には、このように

示されています。「というのは、不義をもって真理をはばんでいる人々のあらゆる不敬虔と不正に対して、神のさばきを啓示しています。(ローマ1:18参照)」神の怒りが天から啓示されます。そして、黙示録では、6章から18章までには、地に下る神のさばきがあります。この将来のさばきは、過去に人が経験した中でのものと全く同じ、いや、さらにひどいものです。ですから、旧約聖書の神概念が、新約聖書の神概念と異なるという考えを持たないでください。どちらも、神の恵み、あわれみ、親切、愛、善意、忍耐、赦しを示しています。主を呼び求める者に、主を捜し求める者に、主に心を開いている者に示されます。そして、どちらも、主から離れ去り、神の律法に反抗する究極の結末を示しています。神が警告された自滅に至る事がらを行ない、神に背いて生きた結果が啓示されています。旧約でも新約でも、ひとりの同じ神です。

さて、神と関係を持つとき、2つのうちいずれかの方法で関係を持ちます。神の友、神のしもべとして、神のみこころを行なうことを求めるか、あるいは、神に対する反逆者として、自分自身のやりたいことを行ないます。愛の中で神に服従するような神との関係を求めるときに、すばらしい恵みとすばらしさ、赦しと親切、そして祝福を経験します。けれども、これらのものを経験したのなら、いやがおうでも、それらを他人に示さなければなりません。神が自分にあわれみ深いように、他人にもあわれみ深くしなければなりません。神が自分を赦してくださったように、他の人を赦さなければいけません。神が自分に親切にしてくださったように、親切でなければいけません。神が自分に恵み深いように、恵み深くならなければいけません。神が自分に忍耐強くあられたように、自分も忍耐強くなければいけません。神の性質を示すこれらの特徴とまったく同じものを、私たちが示す特徴としていくことを神は望まれています。愛と親切と赦しです。世が私たちに腹を立て、私たちが叩きたいのはなぜなのか、不思議に思います。これらの特徴を、私たちは熱心に見習おうとしているのです。イエスは言われました。「あなたがたを世が憎んだからといって、驚いてはなりません。世はわたしを憎んだのです。…しもべはその主人にまさるものではありません。(ヨハネ15:18、20参照)」世がわたしを受け入れないのなら、あなたがたも受け入れないのです。ですから、私たちはますます、神に敵対する世の中に生きていることを気づかされます。そして、神とともに歩もうとすると、世と相容れなくなります。

けれども、そこで注意しなければなりません。古い性質が、同じように仕返ししようとする古い性質が入ってくるからです。「あなたは私のことをそんな風に批評するのか。わかった。あなたのことを批評しよう。」「自分がそんなにすばらしいと思っているのか。じゃあ、教えてあげよう。」同じように仕返ししたいのです。でも、これはまさに、私たちがしてはいけないことです。あわれみ深くなければいけません。優しくなければいけません。親切でなければなりません。赦さなければいけません。神が助けてくださいますように。これは大変な命令です。でも、できるのです。聖霊の油注ぎと力によって。まさに、聖霊がなさることなのです。自分でできないことを、聖霊がしてくださいます。肉の性質を変え、御霊の領域に入れてくださいます。御霊にあって歩み、御霊の中で生き、神の御霊があなたのうちに住み、あなたを変えて、神に似た姿にしてくださいます。ですから、神の御霊が、今夜、私たちの心の中で働いてくださいますように。私を形造り、あなたのみこころに沿って造って下さい。私が静まって、あなたを待ち望んでいる間に。

御霊の賜物を受ける（#3081）

ユダヤ人の祭りの聖日がやって来ました。弟子たちは、エルサレムの屋上の間で待っていました。イエスの命令に従って、御父の約束を待っていました。この約束とは、終わりの日に、神がご自分の霊をすべての人に注ぐことです。「息子や娘は預言し、青年は夢を見、…青年は幻を見、老人は夢を見る。その日、わたしのしもべにも、はしためにも、わたしの霊を注ぐ。（使徒2:18）」神の約束は成就しました。聖霊を待っている、およそ120人の教会に、聖霊がお下りになりました。彼らはみな聖霊に満たされました。激しい風が吹いてくるような響きが起こり、炎のような分かれた舌が現われて、ひとりひとりの上にとどまりました。聖霊が降り注がれたことにもなう超自然的な現象によって、多くの人々がやって来ました。何が起きているのかと不思議に思いました。ある人はあざけり、「どこかで新しいぶどう酒でも飲んだのだろう。」と言いました。そこで、ペテロは彼らのただ中で立ち上がり、聞いている人々にこう呼びかけました。「今は朝の9時ですから、あなたがたが思っているようにこの人たちは酔っているわけではありません。これは、預言者ヨエルによって語られた事です。神が、すべての人にご自分の霊を注ぐと約束されていました。」ペテロが、イエスについて、その死と埋葬、復活、昇天と聖霊降臨について説教を終えると、人々は心を刺されて、「兄弟たち。私たちはどうしたらよいでしょうか。栄光の主を十字架につけた罪があるのですが。」と言いました。ペテロは答えました。「悔い改めなさい。そして、それぞれ罪を赦していただくために、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けるのです。なぜなら、この約束は、あなたがたと、その子どもたち、ならびにすべての遠くにいる人々、すなわち、私たちの神である主がお召しになる人々に与えられているからです。」聖霊の賜物の約束は、すべての人々に与えられています。すべての時代の、すべての信者にです。これは、教会史全体において、信者に与えられている約束です。聖霊の賜物の約束です。

さて、これは、聖霊の「賜物」と言われています。賜物なのですから、これは受けるに値するものでもないし、獲得するものではありません。あなたが素晴らしいとか、忠実であるとか、ある高いレベルの聖さに達することによる報酬として、神が、聖霊の賜物を与えるものではありません。これは報酬ではありません。あるレベルの聖さに達したから、与えられるものではありません。なぜなら、聖霊は、あなたを聖くするために与えられるからです。ですから、今夜、ここにいるみなさんが、現在の霊的成長段階において、— この道を歩み始めたばかりであれ、長いこと歩んでいるのであれ、— 現在の霊的成長段階において、聖霊の賜物を受けることができます。これは、あなたのためのもです。あなたのために用意されているのです。たとえ霊的成長がどれほど不完全であろうとも、聖霊は、聖霊の賜物は、神からあなたへの賜物(贈り物)なのです。

聖霊を受けるのに最も大きな妨げになるものの一つに、自分のいたらなさを見ることがあります。聖霊の賜物を求め始めたときに、サタンは、あなたの欠点や失敗を指摘します。サタンはつねに、私たちを咎めます。私が、神の賜物を受けるに価するのに十分ではないと伝えます。ある意味で、サタンは正しいのです。私は価するのに十分ではありません。ですから、サタンはとても強力な論点で、私の失敗や欠点、罪を指摘します。そして、こう言うのです。「ほら、お前はだめなん

だよ。受けるに値しないのだよ。神は、あなたのために、そんなことをするのを望んでおられない。自分を見つめるがよい。」こうして、私たちが自分自身を見つめるように仕向けます。自分自身を正直に見ることほど、打ちのめされることはありません。ソクラテスは、「汝を知れ。人よ。汝を知れ。」と叫びました。けれども、聖書は、私たちはほんとうに自分を知ることはできないと教えています。なぜなら、「人の心は何よりも陰険で、それは直らない。だれが、それを知ることができよう。(エレミヤ17:9)」だからです。神は私たちの心を知っておられます。「わたし、主が心を探る。(エレミヤ17:10参照)」と言われました。ダビデは、神が自分のすべてを知っておられることを認めていました。神は、私が自分自身を知っているよりも、私のことを知っておられる、と。それから、こう祈りました。「神よ。私を探り、私の心を知ってください。私を調べ、私に悪がないか知ってください。(詩篇139:23参照)」主よ、そこに何かがあるか見せてください。自分についての知識は、最も得がたい知識です。自分を知ることは難しいです。私たちはずる賢く、欺く者なので、人々に本当の自分よりも良く見せませす。しばしば、自分はまあ良い人間だと自分自身を欺きます。繰り返し、繰り返し、聖書は、「欺かれてはいけません。」と教えています。けれども、これは最も得がたい知識であるだけでなく、もし得ることができてしまえば、もっとも痛みをとまなう知識になるでしょう。自分です。

ですから、もしサタンの告発を聞き入ったのなら、サタンは間違いを多く見つけることができます。それで、その結果、サタンの言うことを聞いて、自分は受けるに値しないものだから、神にお願いしなくなってしまう。神は祝福してくださらない、という点まで到達します。なぜなら、こんなに不完全なのに、どうやって神が祝福してくださるのか、と思うからです。したがって、多くの人がヤコブの語った、まさに、「あなたがたのものにならないのは、あなたがたが願わないからです。(ヤコブ4:2)」という立場にいます。それほど単純なのです。願ったら、あなたのものになり得るのです。けれども、サタンがあなたの欠点や弱さを指摘するので、あなたが願ってもいないところまでいじめます。それで、「あなたがたのものにならないのは、あなたがたが願わないからです。」

賜物ですから、受けるに価するようになったり、獲得するものではありませんし、いや、ただ受け取ることしかできないのです。イエスは弟子たちに、「聖霊を受けなさい。」と言われました。ヨハネ20章22節です。イエスは、ヨハネ7章において、渴いている者はわたしのもとに来て飲みなさい、と招かれました(以下ヨハネ7:37-39参照)。ヨハネは、キリストが言われたことについて注釈を加えましたが、キリストが、「わたしが与える水を飲む者は、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになる。」と言われたとき、ヨハネは注釈をして、「これは、イエスを信じる者が後になってから受ける御霊のことを言われたのである。」と言いました。御霊は功績を得て獲得するものではなく、受け取るものなのです。ペテロとヨハネが、ピリポの宣教による新しい信者たちのために、サマリヤに行ったとき、「人々が聖霊を受けるように祈った。(使徒8:15)」と書いてあります。ですから、賜物は、請い求めるようなものではありません。ただ受け取るものなのです。聖霊は、神からあなたへの賜物(贈り物)なのです。それは、あなた自身の生活に力が与えられ、罪に打ち勝ち、キリストの似姿に変えられるためです。また、この力があなたの生活を通して働き、イエス・キリストの真の証人となるためです。私たちが、感情的に高揚することで霊的体験をして喜ぶために聖霊が与えられるものではありません。聖霊は、イエスを証しするための力が与えられ

るために、与えられるのです。

ということで、賜物ですから、受け取らなければいけません。ただし、聖霊を求めなければいけません。イエスは言われました。「してみると、あなたがたも、悪い者ではあっても、自分の子どもには良い物を与えることを知っているのです。とすれば、なおのこと、天の父が、求める人たちに、どうして聖霊を下さないことがありますでしょう。(ルカ11:13)」神は、あなたが望まないものを、無理強いして与えることはなさいません。願いがなければいけないのです。神は、あなたの自由意思を侵すようなことはなさいません。自由意思を与えになったのは神であり、それを侵すのなら、自由意思はなくなってしまうのです。ですから、主にこの聖霊の賜物を求めなければいけません。聖書全体をとおして、私たちは求めるように命じられています。イエスは山上の垂訓において、「あなたがたの父なる神は、あなたがたが願う前に、あなたがたに必要なものを知っておられるからです。(マタイ6:8)」と言われました。そしてこの山上の垂訓の後のほうで、「求めなさい。そうすれば与えられます。捜しなさい。そうすれば見つかります。たたきなさい。そうすれば開かれます。(マタイ7:7)」と言われました。しかし、私たちが率先して、求め、捜さなければいけません。マタイ21章22節において、イエスは言われました。「あなたがたが信じて祈り求めるものなら、何でも与えられます。」ヨハネ14章13節で、「またわたしは、あなたがたがわたしの名によって求めることは何でも、それをしましょう。父が子によって栄光をお受けになるためです。あなたがたが、わたしの名によって何かをわたしに求めるなら、わたしはそれをしましょう。」と言われました。ヨハネ15章16節です。「あなたがたがわたしを選んだわけではありません。わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命したのです。それは、あなたがたが行って実を結び、そのあなたがたの実が残るためであり、また、あなたがたがわたしの名によって父に求めるものは何でも、父があなたがたにお与えになるためです。」パウロがエペソ人へ、「どうか、私たちのうちに働く力によって、私たちの願うところ、思うところのすべてを越えて豊かに施すことのできる方に、(3:20)」と言いました。

ですから、神は私たちのために多くのものを用意してくださっています。私たちは求めなければいけません。ヤコブは、「少しも疑わずに、信じて願いなさい。(ヤコブ1:6)」と言いました。私は、自分が神に願うことのうち、信じて願うことが難しくなる 때가多くあることを告白します。難しいのは、願っていることが神のみこころであるかどうか、はっきりしないからです。もし神のみこころでなければ、欲しくありません。神さまと、文書にはなっていない同意書みたいなものがありますが、私が祈りの中で願うもので、神のご目的にかなわないものや、私の最善にはならないものは、主よ、行なわないでください、というものです。これは、すべての祈りに言えることです。そうなのです。いちいち言わなくても、そうなのです。私は何よりも、神のみこころを願っていることは、神をご存知です。ですから、私がささげる祈りは、とかく提案にしかすぎないのです。主よ、もし提案を聞いていただけるならば、私はこうなって欲しいのですが、というふうに。あなたをご存知の最善を行なってください、と。神のみこころを何ら気にすることなく願って祈る者はみな、愚かであると私は思います。神が私に願っておられないものは、これっぽっちも欲しくありません。生涯、真剣に熱心に祈ってきたけれども、受け取らなかったものが多くあります。後になって、時が経つと、そこに神の御手があるのを知りました。そして、私は、神が、その知恵と愛によって、私が願ったものを与えてく

ださらなかったことに感謝しています。なぜなら、私よりもずっと多くのことを知っておられる思慮深い父は、私の祈りに答えていたら起こっていたであろう悲劇を防いでくださったのです。

ヨハネはその第一の手紙の中で、「何事でも神のみこころにかなう願いをするなら、神はその願いを聞いてくださるといこと、これこそ神に対する私たちの確信です。(5:14)」と言いました。ですから、神のみこころであることが分かっていることを願っているときは、大きな確信があります。祈りに絶大なる確信を持ちます。これが神のみこころだ、と分かっています。したがって、確信が与えられるのです。なぜなら、何事でも神のみこころにかなう願いをするなら、神はその願いを聞いてくださることを知っているからです。神が私たちの願いを聞いてくださるなら、私たちが神にお願いしたとおりになるのです。自明の理ですね。もし、神のみこころにかなった願いをするなら、私たちが神にお願いした通りになるのです。ですから、要は、聖霊に満たされることが神のみこころにかなうかどうかです。私はみなさんがうなずいているのを見ますが、ただ眠気が差しているのではないことを願います。同意している、ということですね。なぜなら、聖書はエペソ書で、「酒に酔ってははいけません。そこには放蕩があるからです。御霊に満たされなさい。(6:18)」と伝えている、いや実際は命令しているからです。ですから、これは神の命令であり、私が聖霊に満たされることは神のみこころであると確信し、確認することができるのです。したがって、聖霊の賜物を神に願うとき、神のみこころにかなう願いをしていることを確信することができます。何事でも神のみこころにかなう願いをするなら、神はその願いを聞いてくださるだけでなく、「私たちの願う事を神が聞いてくださると知れば、神に願ったその事は、すでにかなえられたと知るので。(Iヨハネ5:15)」とすれば、なおのこと、天の父が、求める人たちに、どうして聖霊を下さらないことがあります。(ルカ11:13)」ですから、私たちは、聖霊に満たされることを信じて、確信をもって神に願います。

さて、「信仰は望んでいる事がらを保証し、目に見えないものの証拠です。(訳者注:ヘブル11:1 英訳に合わせて、「確信させる」の箇所を「証拠」と訳しました。)」聖霊が与えられるのを願うときに、多くの人にとって妨げになっているのは、神が祈りに答えてくださるものとして、超自然的な証拠を期待したり、欲しがったりしていることであると私は思います。ただ信仰によって、神の約束を信じることには大変なように思えます。神に、しるしを与えてくださるよう願うのです。主よ、聖霊の賜物を与えてくださったのなら、何かしるしをお与えください。私たちには、とかくトマスのような側面がいっぱいあるようです。トマスは、「私とその手に釘の跡を見、また私の手をそのわきに差し入れてみなければ、決して信じません。(ヨハネ20:25参照)」と言いました。納得しない、見なければ決して信じない。それでイエスが弟子たちに現われ、トマスはついにそこにいました。イエスは言われました。「ほら、トマス。良かったら、さわってごらん。このわきをさわってごらんなさい。信じないものにはならないでいなさい。」トマスは、「私の主。私の神。」と言いました。そして、イエスは言われました。「あなたはわたしを見たから信じたのですか。見ずに信じる者は幸いです。(ヨハネ20:29)」多くの場合、神が聖霊で満たしてくださることに何らかのしるしを求めているとき、実際に、私たちが待ち焦がれている、願い求めている超自然のしるしの類いを受けるなら、神は、「あなたは聖なるぞくぞくしたものがあつたから、信じたのですか。聖なるゾクゾクがなくて信じる者は幸いです。」と言われることが多くあると思います。

神のみことばをただ受け取る人々は、しるしを要求しない人々は、…さて、フィニー博士のような証しを読みますね。液体のような愛が波のように押し寄せて、ついに彼が、「神よ。私はこれ以上、受け取ることはできません。どうか、お止めください。」と叫んだことを読みます。これは、きっと、絶対にすばらしいことですね。彼にとっては、すばらしい経験でした。そこで私たちは、似たような体験を探し求めてしまうのです。他の人たちが自分たちの経験を証言するのを聞いて、それと相関しているような経験を持ちたいと願うのです。神の約束なのだから、しるしを求めないで、ただ信仰によって神の賜物を受け取る、のではなくて、とかくしるしを求めてしまうのです。これは、異言で語るしるしにも当てはまることです。さて、御霊のうちを歩むと、御霊との関係を培うと、この方が自分の人生・生活にさらに関与されるようになると、あらゆる種類のすばらしい、超自然的な経験をするには十分あり得ることですし、可能なことです。神の御霊があなたのうちに働いてくださり、その御霊の働きに反応するようになります。時には、泣いて反応することがあります。時には、とてつもない喜びで反応し、圧倒されるような愛によって反応します。御霊のうちに歩み、御霊に導かれると、いろいろ異なる反応を持ち得るのです。神の御手があなたの上にあること、神が導かれていることに気づくのは、いつもすばらしい体験です。神が、その完全なご計画を実行されて、それを見て、あなたは、「ああ、主が自分を導いておられる。」と言います。その時は、悟ることができないかもしれません。いろいろな出来事に関連性が始まると、突如として、神の御手が自分を導いておられることを悟るのです。

何年前か、この教会のある女性の教会員から、訪問してくれるように頼まれました。彼女は自動車にひかれて重症でした。背骨を骨折していました。それで、私は彼女のために祈るため、聖ヨセフ病院に行きました(訳注:教会の隣町にある大きな病院)。その病棟は6床で、他にもカルバリー・チャペルの教会員の女性が二人いました。ですから、私はその3人みなに奉仕することができました。他の二人がおられるとは私は知らなかったのですが、私が入って来るとみなとても喜びました。彼女たちのために私が訪問しに来たと思ったのです。それで私は、みんなのために祈りました。そして、その部屋を出て、エレベーターの方に歩いていくとき、私はとても喜んだのです。「主よ、あなたは効率の良い方です。とても気に入りました。」聖ヨセフ病院にどれだけの部屋があるか知りませんが、ずいぶんたくさんあるでしょう。「でも、主よ、あなたはカルバリーからの3人の女性を同じ部屋に入れてくださるなんて、とても効率の良い方ですね。一回の訪問で、3人のところに行くことができたのです。なんと効率が良いのでしょうか。最高ですね。」私は、ただ主が大好きになり、「ああ主よ。こんな効率の良さが大好きです。」と言いました。それで、私はエレベーターに入り、地上階のボタンを押しました。エレベーターが開いて、外を見ると、どこにいるか分からなくなっていました。そこは看護婦の詰所でした。ロビーではありませんでした。それで私はエレベーターに戻りました。— だれかがこの階でボタンを押してエレベーターが止まったのだと思ったのですが、— けれども、「G」つまり地上階になっているのです。それで私は訳が分からなくなりましたが、看護婦の人が私が混乱しているのを見て、「ロビーを探しているのですか。」と聞いたので、「そうです。どうなっちゃったのですか。」と言いました。彼女は、「あなたは、業務用エレベーターに乗ったのですよ。」と言いました。それで見上げると、「業務用エレベーター — 職員のみ」

とありました。「ああ、すみません。上にいたとき、注意を払っていませんでした。」「大丈夫ですよ。」「どうやったらロビーに行けますか?」と聞きました。「簡単です。最初の角を右に曲がって、また右に行けば、もうそこがロビーです。」「ありがとうございます。」「それで歩いているとき、「なんて、馬鹿な間違いをしたなあ。」と思いました。

けれども、向きを変えて廊下を少し行くと、女の子がいて泣いていました。目を上げると、「チャック!」と叫んで、走りよって来ました。それで、泣きじゃくり始めました。ようやく落ち着かせることができ、私は言いました。「どうしたんだい?何かできることはあるかい?教えてごらん。祈ろう。でも、何ができるかなあ。何を祈ればいいかなあ。」彼女は言いました。「チャック。全世界で最も親愛なる友人が、私をイエス・キリストに導いた人が、今まさにこの瞬間に脳外科手術を受けています。この人はすばらしいクリスチャンです。アフリカの宣教師だったのですが、この手術のために故郷に送り返されたのです。お医者さんは、ふたたび歩ける望みはほとんどないと言いました。脳に腫瘍があるのですが、医者は、すでに歩く能力にも影響していると考えていて、…」それでこう言いました。「こんなすばらしい神の人が不具になるなんて、考えることができません。もう打ちのめされています。」そこで、いっしょに祈りました。ある聖句を彼女に聞かせて、イエスに目を向けさせました。それで彼女は言いました。「もう絶望的になっていて、ここで、『神さま、もうだめです。だれか、私といっしょに祈ってくれる人を送ってください。』と祈っていたのです。」そして、「見上げてみると、あなたが廊下を歩いていました。」私は、はっと分かりました。これは馬鹿な間違いではありませんでした。「神の御手がある。」という恍惚感が突然あったのです。神は御霊で私を導いておられました。神が導いておられる、神の御手が自分の上にあるという、とてもわくわくする気持ちです。この恍惚感、この興奮させるもの、神が自分をういてくださったという悟りです。上の階では、神の効率の良さでとても喜んで、エレベーターに書かれてあることに注意を払わなかったのです。それで、この廊下まで降りることができました。もし中央のエレベーターに乗っていたら、ロビーについて出て行ってしまっていたのです。けれども、神に助けを求めて、絶望して泣き叫んでいるこの女の子の必要を満たすために、神は私をこの廊下に連れて来なければなりませんでした。

ですから、御霊のうちに歩むと、御霊に属することにとどまり続けると、そうです、確かにあなたの真髄にまで至る興奮を経験します。祝福に満ちた経験をします。神の御力を見ますし、御霊のさまざまな現われを見ます。神がなされていることに少しでも参加することができることは、常にスリルがあります。けれども、これが聖霊を受けた証拠にはなりません。私たちが求めてしまうのは、この恍惚状態にさせるような体験なのです。私たちは神のことをもっと体験したいと願っているし、神がもっと私たちに関わってくださることを望んでいます。主よ、私を聖霊で満たしてください。求めれば、信仰によって受けるのです。そして、当然、この賜物ことで神に感謝し始めなければいけません。このようなすばらしい賜物を与えくださったのに、神に感謝しないで、「げー!」と言うのは、実に恩知らずであります。神に感謝し始めると、この信仰の立場を取り始めると、多くの場合、アブラハムのように、「不信仰によって神の約束を疑うようなことをせず、反対に、信仰がますます強くなって、神に栄光を帰しました(ローマ4:20)。そして、神に栄光を帰し、このすばらしい聖霊の賜物のことで神に感謝すると、神のみこころにかなう願いをするなら、あなたが願った

ことはかなえられるのですから、聖霊を与えてくださるよう願うのは神のみこころにかなっているのですから、当然、御霊の力と御霊の満たしのこと、主に感謝しはじめなければいけないのです。この、信仰による感謝の立場を取ることが、しばしば、超自然的なすばらしい恍惚状態を、非常に現実的なかたちで生活の中で、神の力を体験することができるのです。これはあなたのもので、賜物です。神はあなたに下さったのです。願ってみてください。ただ受け取ってください。それから、感謝し始めてください。賛美してください。